

日本漢文史

籍叢刊

第三輯

維史

五



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

圖書在版編目(CIP)數據

日本漢文史籍叢刊. 第3輯, 雜史 / 周斌, 孫錦泉,
粟品孝主編 — 上海: 上海交通大學出版社, 2014

ISBN 978-7-313-11956-8

I. ①日… II. ①周… ②孫… ③粟… III. 日本—
歷史—史籍—叢刊②日本—歷史—雜史 IV. ①K313-55

中國版本圖書館 CIP 數據核字(2014)第 199077 號

日本漢文史籍叢刊 第三輯 雜史

主 編 周 斌 孫錦泉 粟品孝

副主編 陳小法 尤 佳

上海交通大學出版社出版發行 北京人天書店有限公司經銷

(上海市番禺路 951 號 郵政編碼 200030)

電話:64071208 出版人:韓建民

北京中獻拓方科技發展有限公司印刷

開本:889mm×1194mm 1/16

印張:946 字數:18920 千字

2014 年 9 月第 1 版 2014 年 9 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-313-11956-8/K

定價:23800.00 圓(全二十八冊)

版權所有 侵權必究

統 籌 陳建華 施 維 劉邦權

責任編輯 陳建華 劉邦權

裝幀設計 陳燕靜

第三輯目錄

第一冊目錄（總第62冊）

雜史

佛教

元亨釋書（目錄、表、卷一—卷三十）

本朝高僧傳（總目、序、凡例、援引書目、卷一—卷二）

第二冊目錄（總第63冊）

本朝高僧傳（續（卷三—卷四十七）

第三冊目錄（總第64冊）

本朝高僧傳（續（卷四十八—卷七十五）

東國高僧傳（序、卷一—卷十）

續日本高僧傳（序、總目、援引書目、凡例、卷一—卷九）

第四冊目錄（總第65冊）

續日本高僧傳（續（卷十一—卷十一）

吉水實錄（序、卷第一—卷第十四）

正法山六祖傳

日本往生全傳（序、極樂記、續本朝往生傳、拾遺往生傳、後拾遺往生傳、本國新修往生傳）

扶桑往生傳（序、卷上—卷下）

淨土真宗付法傳

.....

四五五

三國高僧略傳

(序、例言、卷之上—卷之中)

.....

四七五

第五冊目錄(總第66冊)

三國高僧略傳

續(卷之下)

..... 一

近世禪林僧寶傳

(序、凡例、目錄、卷之上—卷之下)

..... 二七

高僧名士傳

.....

一二七

和漢高僧傳

.....

一五三

門跡傳

.....

二四一

天台圓宗列祖略傳

.....

三〇三

密宗血脉鈔

.....

三二九

日本國大師一覽

.....

四五一

唐鑑真過海大師東征傳

.....

四五九

東福開山聖一國師年譜

.....

四八七

蒼龍窟年譜

.....

五〇九

東海一休和尚一代記

(上)

.....

五二九

第六冊目錄(總第67冊)

東海一休和尚一代記

續(下)

..... 一

智証大師年譜

..... 一三

正受老人崇行錄

..... 三五

東海鐵塔諸祖年譜略頌

..... 六一

峨山禪師行實並法語

..... 九一

方廣開山無文元選禪師行狀 九九

越溪道蹟 一一三

損翁老人見聞寶永記 一二一

近世高僧年表 一六三

淨土傳燈總系譜 (序、卷上、中、下) 一九九

東大寺要錄 (序、卷一—卷六) 二六九

興福寺年代記 (序、卷一—卷六) 三八五

長谷寺緣起 四三九

扶桑伽藍紀要 四六一

慧超往五天竺國傳箋釋 四七七

第七冊目錄 (總第68冊)

入唐求法巡禮行記 (卷第一—卷第四) 一

參天台五臺山記 (卷第一—卷第八) 一四九

神道

神道五部書 (卷第一—卷第五) 三〇五

皇國神社志 三七三

古義神代考 (卷第一—卷第三) 三九三

天滿宮世家 四三七

祖志 (序、緒論、目次、卷一—卷三) 四五五

第八冊目錄 (總第69冊)

祖志 續 (卷四—卷六) 一

雜紀

古事記 (卷一—卷三) 八三

春記 (卷一—卷三) 一六三

玉葉 (序、例言、目錄、卷一—卷十二) 二一七

第九冊目錄 (總第70冊) 一

玉葉 續 (卷十三—卷二十六) 一

第十冊目錄 (總第71冊) 一

玉葉 續 (卷二十七—卷四十) 一

第十一冊目錄 (總第72冊) 一

玉葉 續 (卷四十一—卷五十五) 一

第十二冊目錄 (總第73冊) 一

玉葉 續 (卷五十六—卷六十六) 一

明月記 (諸言、目次、第一) 三九一

第十三冊目錄 (總第74冊) 一

明月記 續 (第一、第二) 一

第十四冊目錄 (總第75冊) 一

明月記 續 (第二、第三) 一

第十五冊目錄 (總第76冊) 一

明月記 續 (第三、補遺) 一

古語拾遺 三四三

將門記 三六一

大塔物語 三八三

保建大記 (卷上—卷下) 四〇九

本朝稽古篇 (上中下、續上中下) 四三七

十三朝紀聞 (慶弘紀聞) (序、卷一—卷三) 四七五

第十六冊目錄 (總第77冊)

十三朝紀聞 續 (卷四—卷七、跋) 一

今日鈔 (卷一—卷七) 七五

柱史鈔 (卷上—卷下) 一七七

近古史談 (卷一—卷四) 二二一

近世史談 (卷一—卷四) 二九三

帝國史談 (卷上—卷下) 三六五

續近事紀略 (卷一—卷三、征臺略記) 四一五

尊攘紀事 (卷之一—卷之六) 四七三

第十七冊目錄 (總第78冊)

尊攘紀事 續 (卷七—卷八、跋) 一

尊攘紀事補遺 (卷一—卷四) 二五

行在或問 (卷上—卷下) 七九

皇朝靖獻遺言 (卷一—卷八) 九五

慶安小史 一七一

先朝私記 一八五

遠野史談 (卷上—卷下) 二一一

西京傳新記	(初編—四編)	二二七
-------	---------	-----

日本詩史	(卷一—卷五)	三三三
------	---------	-----

回天詩史	(卷上—卷下)	三九一
------	---------	-----

和漢茶誌	(卷一—卷三)	四三一
------	---------	-----

本朝畫史	(卷上中下)	五一
------	--------	----

第十八冊目錄 (總第79冊)

續本朝畫史	(卷上—卷下)	一
-------	---------	---

近世畫史	(卷一—卷五)	二七
------	---------	----

雲煙略傳	(卷上—卷下)	一一五
------	---------	-----

日本國事跡考		一五七
--------	--	-----

史館茗話		一九七
------	--	-----

寤眠錄		二二三
-----	--	-----

幽囚錄		二三九
-----	--	-----

在津紀事	(卷一—卷二)	二六五
------	---------	-----

正名緒言	(上下)	二八九
------	------	-----

本朝蒙求	(上中下)	三三三
------	-------	-----

扶桑蒙求	(上中下)	四〇九
------	-------	-----

神代千字文		四九五
-------	--	-----

本朝千字文		五〇九
-------	--	-----

內國千字文		五二一
-------	--	-----

日本千字文		五三三
-------	--	-----

第十九冊目錄（總第80冊）

大統歌（上下）

盡忠錄

涉史偶筆

（卷一—卷六）、涉史續筆（卷一—卷七）

香亭雅談

櫻史新編

酒史新編

國朝佳節錄

外史劄記

歷代君臣名功錄

傳疑小史

仙臺支傾錄

先哲醫話

奇談新編

第二十冊目錄（總第81冊）

中朝事實

潛中紀事

正保野史

稽古要略

丙丁炯戒錄

養真亭藏泉譜

..... 一

..... 一九

..... 四一

..... 一八九

..... 二三五

..... 二五五

..... 二九七

..... 三一

..... 三三三

..... 三九三

..... 四〇九

..... 四三七

..... 五二三

..... 一

..... 一〇七

..... 二六五

..... 二七三

..... 二八五

..... 三二一

新撰寬永泉譜 (前編—後編) 三九九

明治新撰泉譜 (一集—三集) 四二一

明治新撰泉譜別集 (初編—貳編) 四八三

大東世語 (序、卷一—卷二) 五一七

第二十一冊目錄 (總第82冊)

大東世語 續 (卷三—卷五) 一

近世叢語 (卷一—卷六) 三五

新撰叢語 (卷一—卷三) 一〇七

修身叢語 (上下) 一五一

日本智囊 (卷一—卷十) 一二三

皇朝金鑑 (上書、序、凡例、總目、卷一—卷十七) 三三九

第二十二冊目錄 (總第83冊)

皇朝金鑑 續 (卷十八—卷五十五、跋) 一

戰略新編 (序、目錄、卷一—卷五) 四一七

第二十三冊目錄 (總第84冊)

戰略新編 續 (卷六—卷十一) 一

策府 (題、序、凡例、目次、卷一—卷二十四) 七九

第二十四冊目錄 (總第85冊)

策府 續 (卷二十五—卷三十、跋) 一

外史

日本外史前記 (卷一—卷五) 九七

日本外史	(序、例言、引用書目、目次、卷一—十八)	二二九
------	----------------------	-----

第二十五冊目錄 (總第86冊)

日本外史	續 (卷十九—卷二十二)	一
續日本外史	(卷一—卷十)	七三
近世日本外史	(卷一—卷八)	二五三
續近世日本外史	(卷一—卷二)	三九一
日本外史補	(自序、凡例、目次、引用書目、卷一—卷七)	四四一

第二十六冊目錄 (總第87冊)

日本外史補	續 (卷八—卷十四)	一
江戸將軍外史	(卷一—卷五)	六一

史表

皇朝金石年表	二五五
日本金石年表	二八七
史籍年表	三一九
日本史籍年表	(前編) 三五九

第二十七冊目錄 (總第88冊)

日本史籍年表	續 (前編續 後編)	一
--------	------------	---

第二十八冊目錄 (總第89冊)

日本史籍年表	續（後編續）	一
銅鑄和漢年契		四五
增訂新撰年表		七七

近世儒林年表	一三五
日本外史年表	二三五
重撰和漢皇統編年合運圖 (上下)	二六三
年代紀略	三四一
新編分類本朝年代記 (卷一 卷七)	三六一
國史年表	五二九
逸號年表	五三九

第五冊目錄(總第66冊)

三國高僧略傳	續(卷之下)	一
近世禪林僧寶傳	(序、凡例、目錄、卷之上——卷之下)	二七
高僧名士傳	一二七
和漢高僧傳	一五三
門跡傳	二四一
天台圓宗列祖略傳	三〇三
密宗血脉鈔	三二九
日本國大師一覽	四五一
唐鑑真過海大師東征傳	四五九
東福開山聖一國師年譜	四八七
蒼龍窟年譜	五〇九
東海一休和尚一代記	(上)	五二九

三國高僧略傳卷之下目次

高祖日蓮大菩薩

豆州玉澤妙法寺開山日昭尊者

北總平賀本土寺開山日朗菩薩

駿州富士大石寺開山日興尊者

南總藻原藻原寺開山日向尊者

北總新間弘法寺開山日頂尊者 日常

駿州貞松蓮永寺開山日持尊者

帝都妙顯寺開山日像菩薩

北越三條本成寺開山日印上人

甲州身延山三祖日進上人

三國高僧略傳 卷之下目次

北越村田妙法寺二祖日成上人

甲州休息立正寺開山日法上人

武州池上本門寺三祖日輪上人

洛陽妙顯寺二祖大覺大僧正

豆州玉澤妙法寺二祖日祐上人

洛陽本國寺四祖日靜上人

北總中山法華經寺四祖日祐上人

洛陽妙滿寺開山日什上人

洛陽妙蓮寺開山日存上人 日純

洛陽本能寺開山日隆上人

京兆本法寺開山日親上人

甲州身延山十一代日朝上人 日出

甲州身延山十七代日新上人

北總飯高談林講經祖日生上人

北總飯高談林開祖日尊上人

北總中村談林開山日圓上人

京兆本滿寺日重上人

駿州貞松蓮永寺中興日乾上人

甲州大野本遠寺開山日還上人

山州鳴瀧三寶寺日英上人

山州山科檀林祖日勇上人

山州深艸宜翁上座

三國高僧略傳 卷之下目次

京兆本法寺日審上人

山州深艸瑞光寺祖元政和尚

甲州身延山三十代日通上人

甲州身延山三十一代日脫上人

山州深艸瑞光寺二祖惠明和尚

京都滿願寺開山日亨上人

甲州身延山三十六代日潮上人

奥州若松淨光寺日透上人

肥後熊本本妙寺日導上人

甲州波木井本妙寺日臨律師

加州金澤立像寺日輝和尚

計四拾三人 附傳三人

三國高僧略傳

卷之下目次

三國高僧略傳卷之下

北越三條實盛寺沙門是純編輯

○勅賜大菩薩法諱日蓮、姓藤原、大繼冠錄足公之裔也。曾祖政直、食邑遠州實名、因而氏焉。父重忠、嘗有事謫于房州、娶清原氏、夫人性溫柔、有婦德、欽齋戒、常拜朝曦。一夕夢、日光赫奕、乘蓮花、飛入懷、覺而有娠。貞應元年、二月十六日、誕於長狹郡小湊、容貌不凡。孩提岐嶷、父母鍾愛、名善日。嘗蓋取之瑞夢也。十二登郡之清澄寺、從法印道善稟密乘、聰穎絕倫、耳目所觸、長記弗忘。更名藥王。嘗十六歲、十月八日、薙髮、名蓮長。字是生。後革今名。統紀云、十八歲剃染。明年遊學鎌倉、偶叡山尊海、有事而來、大士接之、一見如故、因俱赴上都、登于叡岳。時年廿一、乃住東塔圓頓房、兼監橫川淨光院、一廬蕭然、閱覽三藏。

三國高僧略傳

卷之下

深達台宗之玄秘、廣涉諸宗之法義、時々在廣衆中講演台教、一旦奮然謂衆曰、從慈覺以來、法水混淆、丕戾山祖之真軌、可大息也。我雖不肖、冀一洗之、聞衆不憚、會臨濟圓爾、曹洞道元、自宋歸、倡宗都下。大士往問其道、兼及宋地風俗。廿五往泉涌寺、謁宋道隆、既學于三井寺。廿七歷遊南都高野、各扣其秘。三十寓京師、一書肆、就儒士問外典、又謁藤爲家稟和歌之秘。又遊學東寺、探祕帙、卅一還于叡山、竊謂諸宗之祖、孰小廢實、徒弟相踵、迷而不返、陷溺四衆、唯有天台傳教、吾無間然。雖然、祇是迹化迹門、以投像法機緣、若其末法弘潤、世尊別命本化、其法乃是本門事觀、當鑑揚權迹而播種實本、吾雖無似、應往開一化、以驗本化之利、叙矣。建長五年春、歸鄉省親、師親更構一室、寺傍。四月廿二日、入于三昧。廿八日、早起三昧、趨登

山嶺仰赫々旭日、高唱經王首題、蓋十遍許、我宗之興、權輿于此、是日大會、縹緲于猊座、揮毫尾曰、今正膺後五閭靜之運、鑑其時機、唯本未有善耳、此固非小權、諸經之可救濟、惟有法華玄題、可攝此時機也、此即塔中付囑之深經、一呼百諾之金言也、四眾其勉旃、又品藻諸宗、建四箇格言、視聽之徒、且駭且怒、邑宰東條景信、欲斬之、法印泣而過之、駭逐大士、五月、復適鎌倉、過舊梓、授本門大戒、雙親懇告別離、父母悲喜、拭淚目送、遂卜居於名越松葉谷、恢張別頭之教、十一月、台家之髦成辨、遠慕盛化而來、更衣親炙、六年冬、吉祥齋來爲弟子、七年、著註法華經正嘉二年、春二月十四日、父妙日居士卒、大士聞訃悲慟、絕漿三日、漸而往房州、修喪一百日、且慰母竭志、滯錫中撰一代大意鈔、屬先考冥福、正元元年、至駿州岩本、更閱大

三國高僧略傳

卷之下

二

藏注書云正嘉元年、年譜云二年、今據統紀是歲著守護國家論、文應元年、著立正安國論、七月十六日、呈之前執權北條時賴、宿谷光則爲之介矣、時賴斥之、八月廿七日夜、闢提之徒數百、鼓噪圍大士之室、進士善春等拒之受傷、大士匿山窟者數日、後適下總、富木常忍、造草堂而敬待之、越一百日、轉法輪焉、弘長元年、五月十二日、執權長時、竄大士于豆州伊東、三年、春二月廿二日、前執權時賴、召子時宗、以及長時、晉議赦之、文永元年、四十三歲、秋八月、至房州、展先考墓、省母氏、懇慰倚門之情、母氏齡七十余、罹病而殂、大士潸然、設壇松下、持咒訟天、洒木於面、母氏倏忽蘇、更延壽四祀、十一月十一日、大士過小松原、東條景信、率黨一百余人、圍之、傷頭、弟子鏡忍犯鋒死、工藤吉隆率衆來救、而亦鬪死、四年、八月十五日、聖母清原氏逝、大士哀毀殊甚、

躬自葬歛、築墳立石、今之妙蓮寺是也、五年、正月、元使來、大士裁書十一通寄之各處、示勸文不虛八年、五十歲、秋九月十二日、官議之曰、日蓮托事佛法、惑亂國家、事當大辟矣、即日官使平賴綱、捕大士于松葉谷、大士自若、謂賴綱曰、我之於天下也、猶柱梁之架屋宇也、摧柱則家之頽也必矣、警吏作色罵詈、拘之馬上、徇于四衢、既至龍口、上于刑場、時宗有故、遽赦之、十三日平旦、官命護送大士于依智、午牌至本間、重連家、十四日黎明、十郎某來曰、一昨夜平氏之第、有奇怪、筮之曰、此害聖者故、國將亂之兆也、啓蒙因茲官議紛紜、十五日、遂謫大士于佐州、賴綱贈書佐州長吏重連曰、今者雖有教、竄日蓮于其國、當不閱數年而見赦也、若有不諱、寧歸足下、冀謹監之、十月十日、發依智赴于配所、廿一日、至越後寺泊、廿八日、順風駕舸、著

三國高僧略傳

卷之下

三

佐州松崎、十一月朔、至塚原居焉、九年春、著開目鈔二篇、四月七日、移居一谷、八日夜半、授本門戒于最蓮、十五日、著受職法門鈔、五月廿四日、著取要鈔、舉標本門三祕、十年春、五十二歲、二月十五日、著佛法血脉、四月廿五日、觀心本尊鈔成、六月十一日、撰顯佛未來記、七月八日、始圖十界大漫荼羅、是歲著當體義、十一年、春二月八日夜、時宗感夢兆、遂赦大士、十四日、官授赦牒于日朗、三月廿六日、大士歸鎌倉、諸徒嚮迎、四月八日、赴執權之第、謁家幹、賴綱、賴勞、慰曰、自後永停四箇格言、則建愛染堂于城西、以莊田千町、充衣鉢資、大士對曰、官若欲祈國家福田、宜禁誹法、吾豈以爵祿博佛勅乎、振衣而立、自謂三諫而不聽、則逃古之禮也、嘉應時至矣、遂遜于甲斐、卜居身延山、大士雖奔、思入無爲、長追慕考妣、有時陟山上、以瞻望

桑梓是歲著立正觀鈔建治元年六月十日著撰時鈔二策二年春三月十六日法印道善遷化大士深痛之七月廿一日報恩鈔成授書日向日實至于清澄讀之法印墳前蓋換祭文也今歲池上宗仲來訪見大士常膳粗糲深感之自後減膳茹粗終身不改三年四月十日著四信五品鈔今歲講註法華經特發文外之妙旨日與筆記爲口訣二卷弘安元年九月廿日著本尊問答鈔以贈于淨顯四年著三大祕法鈔本門戒休鈔五年壬午大士六十一歲秋偶感微疾門人看護九月告之曰吾有所思赴于武州池上八日發象駕十八日著宗仲家廿三日著大漫茶羅授之宗仲廿五日藏安國論告諸徒曰三七日中我當入滅若地大震是其時也顧日期曰我之滅後必送屍身延日期請開維以送遺骨大士許之十月八日選上足六

三國高僧略傳

卷之下

四

人謂諸徒曰汝等今後視此六子猶視吾矣十日以註法華經及因牙二枚付囑日昭曰我之說經功德全賴于此汝宜襲藏十一日命經一層曰汝蚤視髮智行兼備以唱導帝都十三日黎明果地大震諸徒咸集已辟大士澡浴淨衣北首西面而臥日昭鳴鐘誦方便品諸子和之至四佛知見之句或云靈品安詳而寂法臘四十有六葬儀遵禮開維山中十六日收取遺骨盛之寶瓶設淨壇奠焉初七日奠了乃送之延山六年春正月別營寶殿以安之因製清規一策六子輪次衛之二月普告同門結集遺文所輯一百四十余篇謂之錄內後到者二百五十余篇謂之錄外後十三年法孫日像觀光于帝都元應上皇賜宗號綸旨又及曾孫大覺之與文和上皇特賜大菩薩號上距高祖滅度實七十年矣據年譜統紀宗綱對同

○釋日昭字成辨姓平氏北總葛飾郡平賀人父畠山祐昭一族豪富閭里推重祐昭有三子長女子嫁印東氏次師季男某也師以嘉祿二年丙申生幼而穎敏好讀書且敬三寶每居幽室讀佛經父母知之遂聽出家建長元年到郡之山寺剃染名曰成辨師懷遊學以告父母々々曰大道如成千里咫尺道如不就不欲重見師乃携一奴隨躡躡躡上比叡山親炙尊海々器許之加意教育承教家章疏學三大部五年春師十八登壇受戒或時以慈覺義誦教大師竊試尊海海曰聽哉問也夫學者議論爲本疑者解之津疑去解生信發行進始得真智汝妙年勉旃他日又請問和色柔語語慈覺義扣理同事勝之說海日子非蓮長之徒耶師曰蓮長誰也海曰吾舊友也今更名日蓮徘徊東關別唱傳教宗師聞之欽慕遂下山先歸寧父

三國高僧略傳

卷之下

五

母尋問高祖印東有國素識高祖具告其實時高祖在鎌倉師往而拜謁目擊道存賜名日昭呼大成辨會下年少悉囑于師今歲印東氏携兒投高祖隨師受學正嘉二年春高祖遭父之喪將赴桑梓門人止之高祖徬召師曰天運循環既至末法正本化出現之秋矣本化若出三類響應持品之偈彰々乎天台傳教未讀之吾將色讀之惡口罵詈固不足憂刀杖遠流豈可怖哉吾今累汝充補處汝嗣余國勿生怪俗師臨拜命高祖告衆曰今日付法日昭設我死汝等勿動心今不幸遭父之喪夫孝者百行之本佛說爲戒我不得忽之汝等見日昭猶見我衆咸奉命高祖遂至房州爾來師監松葉谷草堂講習不怠確乎護真矣文永八年秋高祖遭厄官命毀草堂師晦名潛形處于濱土歲時之至衆亦倚賴焉十一年高祖啓嘉運師相見

語法勞。祝法門萬歲。弘安五年高祖在池上唱般涅槃。師往而看。是時始影出門。十月十日高祖親召師付以後事。驗之以註法華經三部要文。本理大綱集。曰。日蓮終身受用不出是卷。末法規矩集而大成。雖吾住世。又無加之。勉旃。六年師造身延清規。月直掛搭。十月會長榮山。輯高祖遺文。師躬手書。事丁復潛居于濱心喪十三年。正安二年尊海聞高祖成功之速。寄書稱贊。欽慕懇切。師孤杖冷風。千里企步。會海病在洛。師乃往而面海。時九十一歲。而神氣精確。法話入微。海聞本地久遠之說。心通意解。喜色充眉。遂受本門戒。傍有智祐。敏悟清虛。聞師法語。信根透髓。遂投于師。更名日祐。師製本門圓頓戒相承血脉。譜授之。德治元年有越信兩國太守風聞信昭者。深歸依焉。因建一字於那瀨。不日落成。扁呼法王山妙法寺。文保元年

師召日成曰。老僧齡八旬。加二偶。因檀請。卜是福地。既十二年。今付之子。勉旃。演者吾積功累德之地。再構草堂。欲期終焉。成以告信昭。信昭不敢睽。即日築演之佛殿。曰弘延山妙法華寺。乃今日祐爲之主。師傍構小室。讀經唱題。安居七年。元亨三年偶示微疾。親召信昭曰。老病日薄。永別檀越。多年懇誠如丘山。今亦託于仁。請諱焉。北越蒼生。未浴本化之澤。那瀨妙法寺。易地營修。宜與隆北陸之佛法。山僧至願。何以加之。信昭謹而聞命。三月廿六日泊然坐脫。春秋八十八。同門縞白。悲哀無量。葬山上矣。統紀九

○釋日朗。稱大國阿闍梨。姓平氏。北總狼島郡能天人。父印東有國。以寬元三年四月八日生。天機聰悟。沈重雄偉。父母愛之。名吉祥。曆建長六年有國遊鎌倉。謁高祖。結道契。携兒投之。甫十歲。進退揖讓。

屹如巨人。高祖嗜昔夢。霍霍劈歷。頓墮室內。須臾碧空清明。醒而異之。兒到就座。即雷墮之處。告曰。斯兒不凡。他日振大法雷。洒大法雨。除却衆生迷雲。第一義天朗然乎。因名日朗。試授敎家之書。師孜孜不懈。夜以繼日。讀書之暇。須臾不離高祖之膝下。早起侍于香燭。後臥枕于床下。一動一止。毫不容私。文應元年十六歲。薙髮。呼筑後房。字大國。弘長元年高祖謫于伊東。師泣而欲隨。官不許焉。高祖憫之。諭曰。見月之入西山。則念我之在伊東。見日之昇東方。則憶子之留斯地也。惜別遲々。官吏督促。順風揚帆。船疾如箭。師眼眩氣絕。同侶相援慰之。官禁他之。三年高祖得赦而還。歸寧老母。師伴而往。文永八年高祖罹龍口之厄。師從在側。創于拳刀。師延頸進曰。予也先我。衆卒曳去。確乎不動。見死如生。一奴忿激。誤折一臂。由是師生涯有

手不仁也。高祖遷于佐州。師禁錮客牢。十一年二月官始赦師。十四日出牒赦高祖。師襟之而往。帶月戴星。涉險涉水。三月八日。舊于佐州拜謁高祖。虔捧赦牒。高祖親勞。既而歸于鎌倉。時大學三郎捨其第地。建長興山。高祖開堂祝釐。丕啓鴻運。退藏于身。延令師主妙本寺。秋九月。師身延山。聞高祖動靜而歸。從是春秋不廢定省焉。是歲冬池上宗仲。羨大學舉。捨宅爲寺。高祖美之。賜勝長榮山本門寺。命師與長榮同監之。由是兩山一主。傳燈千歲不滅光也。建治三年。曾谷敎信。懷造鼻輪地藏堂。爲開權道場。請師爲開祖。師差法子日傳。今之平賀本土寺是也。弘安五年十月高祖召師曰。長興山大學竭誠構築待吾。最初轉法輪之山也。長榮山宗仲捨宅供之。今入涅槃之地也。併付于焉。勉旃。伊東感應佛一軀。池上開堂安國論一卷。伊

佐兩島被牒書讓狀付之、永以爲兩山之鎮、師主于兩山十有余年、說法利生、讀誦唱題、一日無虛、衆子戮力、佛殿諸堂、百舉盡美、正應四年九月、今日輪嗣于兩山、元應二年、偶感微恙、遺命曰、松葉谷者、吾得度之地、死者必火而空焉、正月廿一日、示滅於南窪、春秋七十八、諸子隨遺命、茶毘松葉谷塔于猿島山、塚上松茂榮、人呼墮淚松云、統紀九

○釋日興、字白蓮、稱伯耆阿關梨、姓橘氏、濃州刺史善根之裔、大井庄司某之男也、母由比氏、偶夢身映日光、腹生白蓮、覺而有孕、寬元四年五月八日、產於甲州巨摩郡歌澤、幼風神秀異、聞佛加敬、父母知之、投于岩本實相寺、寺主嚴譽智證一派之英也、相曰、兒有奇骨、決不凡子、后必爲吾門棟梁、授以教家書、讀乃爲誦、時八歲、譽知其

三國高僧略傳

卷之下

八

器宇、彌加鍾愛、建長五年、薙髮得度、康元元年、登三井寺、雪琢磨正元元年、春、遺母之喪、歸于故國、譽試之丕異、昔時、會高祖來閱藏焉、譽初惡高祖、不欲面、后驗之、威德崇行、大殊素聞、見而加敬、學頭智海、夙善所備、信苗頻萌、退會輪下、晉議曰、今般日、邇來而閱藏、吾多年聞名、今見其人、德學雄偉、天下絕倫、吾幸得明師、因欲請止觀之講、衆等如何、告了、請之高祖、不拒、乃啓講席、一代說經諸祖、論釋一口吞却、一言部判、洞視萬古、猶如今日、海聞之大駭、次扣宗義、高祖明辨權實之教法、本迹之起盡、海又年來於理、同事勝之義、不能無疑、而今聞高祖之說、恰如晨鐘除曉夢、慶喜無量、時師亦預聞焉、海語師曰、日蓮一代明師、萬里搜索、亦不可得、我將執弟子禮、而至更衣區、官職有憚、人口子、妙年盍往而奉侍乎、我亦伺時、遂子之

囑耳、既而高祖就歸、師窮逃走、途而相遇、高祖携著錄倉、文應元年春、更調剃度式、名曰興字白蓮、師性得筆法、高祖著安國論、草案多命于師、文永八年、冬、高祖竄于佐州、師隨昭公、隱于濱、而與三弟、更定省佐州、駿州富士郡、上野邑主某、始爲岩本之檀越、後深歸高祖、稱戴髮弟子、一時招師、々往結道友、高祖法話垂誠、師錄以與之、後人傳之云、日興記、弘安五年、高祖入滅、六祖輪次守塔六年春、修喪了、諸子退散、師亦廬于上野、居焉、八年、日向直于延山、檀越波木井實長、謂向師曰、龜塔更守、雖依願命、而爲法爲山、甚爲不便矣、何者、諸山以主人在、各位齊志、山門追日而盛、身延不爾、主從偕爲旅泊之想、淨界逐年而衰、高祖棲神之靈場、一家之祖山、他日若就荒涼、噬臍何及、于熟謀之、向師告、昭期二子、二子亦無奈之何、師獨不肯

三國高僧略傳

卷之下

九

之曰、輪次無人、則議之亦可矣、我儕六人、齊承遺命、而未滿一紀、聖鑑無監、乖戾何速、法運通塞、弗俗子之所能識也、實長不憚、師振衣而去、上野與波木井實長、有通家好、師不爲快之、直往房州平群郡保田、搆一草庵、杜門絕緣、唱題誦經、今之中谷妙本寺是也、永仁五年秋、實長卒、上野公慕師之道、儀不能忘之、新築宏基、呈疏請之、師固辭再三、邑主懇請、師幡然應之、寺傍有一大石、色碧且麗、因名大石寺、後遷居北山、亦爲寺、扁稱本門寺、正應元年、偶感微恙、自知死期、鄭囑後事、一心唱題、如眠而化、壽八十八、實二月七日也、是爲富士派之祖、統紀九

○釋日向、稱佐渡阿關梨、姓藤原氏、父小林實信、嘗爲正治帝衛兵、曹曾祖以上皆襲衣冠、列于朝焉、元久元年、實信與伊勢平氏、遂放

書言故
事古唐
顏真卿
家值名
顯處

南總師以建長五年二月十六日產于塹生郡藻原容貌端正生而能言甫四歲讀魯論孟子音吐瀏亮人異之性慕僧儀嬉戲每結巾爲袈裟合爪唱三寶名實信厭之早修理髮加烏帽名藤三郎實長時五歲也弘長二年遭病而幾危父母大驚醫巫竭力不見其効兒告父母曰祈佛有癒父母聽之祈清澄山虛空藏誓曰此兒如活捨爲佛子立而得驗時叡山某至錄倉次枉駕來訪見兒伶利又聞靈驗告父母曰吾無後嗣備器未果今幸相遇實天錫也此兒不宜俗家速投于吾父母雖愛而重違前誓泣而分袖登于叡山薙髮染衣呼民部卿文永元年高祖省母歸鄉會母感疾實信來訪高祖懇誘導之實長深沾慈雲遂結道契二年遽差銀鹿告兒促歸既至實信翻然携兒往于錄倉高祖見之乃識器宇賜名日向時年十三高祖

三國高僧略傳

卷之下

十

退藏身延師奉侍晨昏須臾不離高祖法話少亘宗義記之珍藏云日向記建治二年法印道善寂高祖差師弔墳墓師代修佛事燒香九拜讀報恩鈔又與日實一石一字書寫十卷仲之供養駿州富士郡有龍泉寺植越熱原國重至于身延受戒爲徒后冀迎高祖一新法規高祖命師赴之居數年又藻原兼綱創一字以擬高祖滅後酬恩請師爲開祖今之常在山藻原寺是也弘安八年師直于身延實長謀五子師爲第二祖在山廿六年偶感微恙歸于舊梓廬法華公今日進補身延山正和三年九月三日安庠而化壽六十二師所創建之寺武州新曾妙顯寺相州佐久島妙勝寺也統紀
○釋日頂稱伊豫阿闍梨姓橋氏父名定時戰死于駿州兄弟三人長師次日證季女子呼乙御前亡國之孤不知所據隨母在于錄倉

母有女德頗通文字性崇三寶時北總若官邑主富木胤繼喪妻久矣聞之納司內事隣邑有真間山天台談林四方雲集乃胤繼香花之地師及韶好學聰敏清虛寡欲不求世榮寺主了性見誘胤繼々々憚母之志不敢肯之性重諒于母々々聞不拒遂出家稱伊豫房文應元年胤繼建法華堂請高祖性聞不喜謂富木氏世我山之檀越也若志宗乘宜棄于吾何賴日蓮乎或時胤繼請性々幸之談法義終陷負地乃解纆逃亡於是輪下弟子悉皆散去師亦歸若官文永四年冬高祖發房州復赴錄倉行過若官胤繼投師於高祖更衣授戒賜名日頂時年十六胤繼曰真間山以供于我師誰爲之監乎高祖曰幸有日頂宜指攝焉五年春高祖歸錄倉師隨侍之十一年相若官館爲寺高祖爲開山祖師亦擇日移于真間師雖妙年行乃

三國高僧略傳

卷之下

十一

如老成人爲戒行第一屢省身延歸開諱筵日無空過正安元年春富木入道日常卒師不堪悲哀水漿不入口數日殆至毀性乾元元年春付法於日揚遊化諸國往到駿州重須思父之舊趾停弔考塚前後居之十六年文保元年三月八日示微恙泊然而化壽六十六真間記云嘉曆三年八月十二日七十七歲時與師在于大石寺審問不苟故空骸於山麓造常林寺師爲開祖今錄重須本門寺云統紀
○釋日持稱蓮花阿闍梨駿州庵原郡松野人母夢見蓮華而有娠生有奇相讀書穎敏邑主聞之召而試之四書五經背誦不差邑主稱之及長授書讀之十三經十七史諸子百家剖判其義如有神助兼通和歌又能屬文章偶讀佛籍大發明世間榮利不足介懷請告邑主々々不拒之遂登叡山薙染得度天台教觀盡底稟承至於理同

事勝之決不能無疑滯下山歸本國祈佛祖加被一日遊岩本謁智海語所疑海曰爾疑甚大矣非大鑒王不能治焉如今錄倉有日蓮者絕代之明哲予往咨詢之師大喜疾行執弟子禮高祖設授戒式賜名曰持呼蓮華閣梨時師十一歲文質彬彬殊得書法侍于佐渡奉于身延高祖尺牘多出師手或時錄行門大意以備自饒高祖見之優賞印可即持法華問答鈔是也弘安六年松野邑主撰一梵刹莊嚴報地請師爲開祖今之貞松山蓮永寺是也師雅言後五百歲本化出現一閻浮提齊受其賜經文皎如我師爲上行後身倡別頭大白法持品偈文恰如符契閻浮廣布亦奚之差本朝弘道有諸哥之在焉我航異邦闡揚妙法以導群生假使海上遭颶風身葬魚腹是我至願矣永仁二年高祖十三回忌九月十三日松野修大法會

三國高僧略傳

卷之下

十二

十月十三日詣身延山虔拜祖塔明年正月朔四十六歲三元祝釐法要事了付法日教孤身絕侶飄然飛錫路過于奧州距于弘前凡可卅里有一小嶺晉經題於石以供逆緣航抵松前居之數月後人建寺標之今之法華寺是也四年乘船遂至萩謁莫知其終因以首途之日爲之寂日耳異邦之布教師爲萬矢矣竊聞北京眞定府行唐縣有法華社有法華村又有蓮華寺又朝鮮開城府有妙蓮寺其餘長瑞府有蓮華院慶山府有法華寺靈光郡有蓮華寺長興府有法華庵濟州有法華寺又我文祿中豐太閤征朝鮮時明兵來援一將樹書七字之旗而至矣後享保八年秋相州三浦某海船值颶而至于清々人將殺之船退漂流數十日糧盡無奈之何舟子十六人其長稱勘右衛門皆是本化宗者因掛本尊於檣唱題祈念清人以

舟迎之言語不通勘右以書問宗化清人導之詣多寺院係師之創立者凡有十八字其最初者稱日蓮山法華經寺有師之塔焉曰五月十八日又近年魯西亞人來于函館見本宗葬祭之式謂寺主曰滿州亦有此宗云惜矣未聞其人姓名及彼地名今且併錄之以備後日參考已上參取紀紀考異及傳聞

○釋日像號龍華院姓平氏北總葛飾郡平賀人父忠晴母千葉氏以文永六年八月十日產焉神彩奇骨父母鍾愛名萬壽寶建治元年二月投之明師々々大奇之曰我師出世播法於四海而有緣東壤未及帝都吾每無思乎而今幸得法嗣他日大振我宗者必此之子也乃自携上身延山高祖曰是我弟子應弘我法摩頂慰勵乃示玄旨於一紙以爲傳法之信更字經一曆時甫七歲常侍高祖天性

三國高僧略傳

卷之下

十三

至孝盡心奉養有餘力則受學聰明絕倫弘安五年高祖鶴林金棺之前落飾改名日像稱肥後男永仁元年廿五歲自誓謂明年我師十三回正辰也我當往帝都大振宗風酬我師素願又謂我鳴洛中三類競起若不勇銳寧堪弘宣宜自試志操矣乃入比企僧意書法華全部文字極細殆乎非人爲也尋始于十月廿六日起一百日出于由井濱深立海水誦久遠偈每夜百遍風濤破面裂膚本志確乎不撓二年仲春行滿之日試向海水大書首題一遍其字浮波有龍蛇之勢師視之方知願力之不虛援筆寫之其模畫有隨波漂搖之形人稱波動之題目焉三月欲觀光京師請告明師尋詣身延拜祖塔七晝夜途歷北陸遂至帝都登于北嶺遊于南都王畿之間所有靈區足跡殆遍一宵大石清水其夜祝夢神告曰我今有高賓偈早

迎之覺而怪之晨起尋社頭有一僧宴坐祝問仁者何人師曰東關日像曰蘊何勝行曰我有微妙法衆生若有聞者智愚均作佛說時亦既至故我欲以此法廣宣流布因來此耳祝曰我夢承神勅師之妙法蓋神之所欽也師入王城而宣揚之必有巨益乎五年四月廿八日立城東門乃向朝曦高聲唱題夕不止自此每日東唱西唱勸誘賤賤折伏縹白又都下七道各至石廟大書首題以供逆緣由之諸宗繼徒屢訴朝焉德治二年五月廿日詔亞相宜房逐之師即答宜旨其理甚盡矣識者以爲爾因此得赦延慶三年春復放於是師投書於廬將乘桴浮于西海路歷向日社前二鶴飛來頻啣師裳師異之躊躇時有一老翁忽然而來謂曰吾欲有言請暫留此師知其異人也鞠躬諾焉其地曰雞冠井畫出路頭誘導四衆夜宿神殿供

三國高僧略傳

卷之下

十四

給法味遠近信服者逐日而多城南深草極樂寺良桂偶過雞冠井聽師議禪律等出衆辨之問難往反經三晝夜桂遂心服而爲弟子徒衆服者一百余人又有真言實賢者奔宗歸焉一新其寺號眞經寺應長元年三月師遭赦入于洛坐石上毒鼓再振頑雲嫉月曉談隔明元亨元年冬十月三續翻洛中同年十一月八日元應上皇詔日野亞相特賜環焉加之賜地於洛下今之妙顯寺是也上皇又捨尾州松葉莊備中穗太莊以充寺供囊中關外天下宗風於是乎大定矣師之功偉矣初師常嘆以弘宗與朗師離索謂忠臣爲君忘親古德爲法離師吾不見大師者十有八年于茲往而不還者親也再不可見者師也因奉晨昏於萬里者正和元應之間及于八度矣二年正月朗師賜書文辭懇到師不堪感泣不俟駕而往會朗師化師

止比企修喪而歸從此小祥大祥等必會比企燒香於塚上四海唱導師宗號綸旨等朗師滅後之賜也每言之而泣人稱其孝曆應四年秋製遺誡六條囑後事於大覺而退藏矣康永元年十一月十三日右脇而化春秋七十四法臘六十一茶毘于深草立廟於極樂寺稱鶴林院後改寶塔寺統紀十
○釋日印號摩訶一院姓朝倉氏北越蒲原郡三條人父名安高曾祖咸有武功而名于世母某氏常憂無子以祈于神以文永元年產焉天資聰敏不狎儕等嬉戲常作佛事父母知非塵中之物投郡之天台宗石瀨山青龍寺時八歲也寺主智觀加意教育及長一家教書密部祕聖傾底完附焉師或時謂大丈夫當雄飛于雲路曷爲雌伏斯窮巷遂辭法印欲同諸宗之奧義先經歷錄倉次觀光帝都南

三國高僧略傳

卷之下

十五

都北嶺遍參咨詢既復寄錄倉遊于比企會朗師講止觀師聞之大發深省就侍者求謁具陳來由朗師容之謂曰子也聞摩訶止觀第一卷之講而發悟因名摩訶一日印時永仁二年四月八日也元應二年朗師遷化喪事既了廬于名越號本勝寺元享元年春付本勝寺於日靜歸其舊梓道化所覃宗風丕行適庭上生青蓮華見者嗟異因造寺稱青蓮寺後改本成寺又創立金津妙蓮寺角田妙光寺嘉曆三年冬偶感微疾追日而重自知不起遠召日靜具囑後事十二月二十日泊然而化壽六十五築塔於妙蓮寺靜克守其蹤後還錄倉而兼主之十余年得日陣器之遂囑本成寺陣盛倡本勝迹劣募迹門未得道推師爲勝劣派之祖統紀十三
○釋日進稱三位公姓源氏安倍貞任之裔也貞任有遺胎母奔潁

居甲州產于巨摩郡今諏訪其子孫更姓氏以農爲業師之父某少
有識解殊好佛乘偶至鎌倉謁見高祖夙福所感慈訓徹髓而陋巷
老奴不及投刺歸重來曰吾有三子願供薪水吾亦薙髮長掃庭草
可乎高祖許之授父名日元長子名日進文永八年高祖遺龍口陀
師年十三僧老兄走赴于龍口遂同降客牢十一年高祖啓佳運而
遁于身延日元奉事高祖結茅其側不幾而逝師營其蹤爲竹之房
居焉正安中駿州富士郡柳野某築一梵宇名竹養山正法寺而請
師々遷焉正和二年瑞世身延時五十五歲繼白懷德山殊繁盛建
武元年十二月八日示疾而化壽七十六初鎌倉桑谷有龍象房者
說法哺啜修怪講幻欺誑衆人邪徑小辨一時狐鳴師往而詰之智
劍辨鋒相逼閃々龍象房辟易逃走師時十九歲云統紀十一

三國高僧略傳

卷之下

十六

○釋日成稱出羽阿闍梨風間信昭之族昭師初不倚寺亦不育子
正安二年訪海法印於洛陽始得日祐德治元年及築那瀬又度師
文保元年令師主于那瀬元亨三年信昭移妙法寺於北越三島郡
村田大振宗風四衆子來檀越大喜增封加地宏基巨構十倍于濱
北地風化於是乎丕興師之力矣居十五年不減昭師遺烈也延元
二年春偶感微恙追日而重四月十六日泊然而化統紀十八
○釋日法稱和泉阿闍梨父芝田左近師智行兼備威儀嚴密常侍
高祖溫席扇床具竭孝矣初高祖遊山梨郡轟鄉有昭藏寺傍有一
欽石坐之講安國論呼石師重往化之道話累日法針透髓方知舊
非偕至身延師事高祖賜名日乘檀越議不暇終共乘請師更稱安
國山立正寺其地後呼日蓮休息村慈澤逐日而治曆應四年春無

疾而化壽九十歲師性得彫刻之巧而以妨道行誓不取刀延山潤
畔偶見異光師就視之檜樹百尺直幹凌雲以爲靈材日吾師百歲
之後必遺肖像而其柔和有威卑謙具相弗庸工之所及吾將絕刀
再起爲萬世福田乃告高祖高祖可之師誦陀羅尼加之咒之伐而
爲材造等身肖像三軀慈眼威容傳神儼然高祖自爲點眼命安置
于身延于比企于池上云統紀十一

○釋日輪稱大經阿闍梨文永九年產於北總平賀父名忠晴深歸
朗師稱戴髮弟子有兩男兄長萬壽次龜王弘安五年萬壽落飾名
日像龜王欽羨焉父母允之出家改名日輪呼治部卿天資穎脫志
尚超邁讀書天資及其成長侍于朗師尤竭其力猶朗師侍于高祖
矣朗師逮退藏充師於補處時年廿一師雖妙年智行備足門徒歸

三國高僧略傳

卷之下

十七

敬朗師付隨身佛安國論赦狀及驢狀曰此是人天福田末法巨鎮
雖高祖在世而無異之子夫慎之又圖大曼荼羅證之存照文保二
年朗師構小窠於南窪以告退休師朝觀墓省一日不廢矣貞和元
年名越本勝寺日靜轉地於帝都靜也爲大將軍尊氏卿伯父是以
卿執奏朝廷爲勅願道場稱一方祖山而無寺寶之可稱卿聞隨身
佛等之事懇懇備禮求之師初不肯之卿馳伴再三師竊思惟先師
有言寰中開宗難也乎而法子日像開勅願道場法孫日靜復開焉
高祖先師笑爾舍笑如今關東有身延長興長榮而足矣關中關西
猶屬艸昧是故欲令移徙三之福田以結之良緣亦或可合冥慮矣
終如其請卿大喜焉厥後師感得大宋陳和卿所作立像佛模隨身
佛不減前來欽奉之式也延文四年四月四日令法子日山主于兩

山示微疾而終焉春秋八十有八統紀

○釋妙實號大覺幼名月光曆攝政近衛藤公經忠之子也初入嵯峨大覺寺稟金剛乘一日入洛之火邂逅龍華之法筵忻然生難遭之想與聽七日其徒智覺正覺祐存等日々相從皆如夢初痛隨喜信伏忽奔寄乘師十七歲親炙龍華究白教幽旨徹宗致骨髓爲性和順供給無倦龍華常嗟以弘宗與明師離索乃使師奉晨昏於萬里自正和之初至于元應每歲春秋省謁明師凡十二回矣文和元年夏天下大旱統紀普勅諸宗修請雨法而無驗亦詔師師乃與緇侶三百余員至于桂川之上同音讀誦法華一軸未充雲起雷鳴大澍雷雨數日不止率土皆洽帝大悅時童謠曰地藏出世菩薩也祈默登歎師聞之謂門人曰是則可言地藏出世菩薩也不知吾

三國高僧略傳

卷之下

十八

奉勅或出於佛意耶重勅曰有所請求奏之師因而請高祖及明像二師之菩薩號帝迺贈高祖大菩薩二師菩薩尋權師爲大僧正特書大覺二大字賜之從是稱大覺大僧正延文三年七月詔曰宜爲四海唱導致一乘之弘通統紀初文和四年秋將軍尊氏劉三莊附之義詮又寄僧伽黎并水精念珠等師嘗告衆曰吾徒之中或其身放逸而心無慚愧動輒託事觀道欲遂己非是等之類法滅之因緣也汝等各自慎之貞治三年四月三日安庠而逝春秋六十八法臘不詳統紀

○釋日祐字智祐稱大貳阿闍梨不詳何許人叡山尊海門人也正安二年昭師訪海於洛陽是時師依海之命更衣事昭師文保元年昭師退藏那瀨尋遷于濱々爲寺號妙法寺使師主之正慶建武之

際鎌倉大亂演亦燒亡矣師倉皇避災於池上僅懸頸于高祖手書及肉牙昭師手書而出因得全之時豆州檀越某創妙本寺於雲金少頃合演於雲金居之廿余年旗鼓時動風波未謐以故演之重寶不及遷之而師適感疾貞治元年正月十四日化是故高祖註經及肉牙等迄今藏于池上文祿中日苞得勝地於賀殿再建妙法華寺元和中日亮承官命開今之玉澤更經王山廿一世日養俗姓陸山氏紀常兩侯登堂養珠夫人之姪因是夫人垂命建築堂宇輪奐巍然云統紀

○釋日靜號妙龍院駿州賀島人姓藤原父上杉修理亮賴重母足利氏幼名豐龍曆天資穎脫讀書不倦宿緣所迫深厭世相投州之池田師事日位文保二年位師寂矣師年廿一遊于鎌倉隨侍日印

三國高僧略傳

卷之下

十九

終結師資契明師亦見之慈憫尤深師外姪足利尊氏家固闊閥而屢顯軍功師亦懷雄飛之志尊氏外護最篤師改本勝寺號本國寺爲國家祈福運適印師病矣師馳省之相見大喜具囑後事而逝師克其難復還鎌倉曆應元年尊氏爲大將軍貞和元年師謀尊氏相地於帝都六條移本國寺焉四年仲夏遊伊東感得隨身佛等營大法會高祖爲開祖明師爲二祖印師爲三祖自處第四聖天子聞之降詔賜賀又授三位僧都教化沛然如水就下居廿六年弘經說法概無虛日尊氏父子屢柱駕聞法應安二年適感微疾六月廿七日泊然而化春秋七十二築塔於東山稱呼大光統紀

○釋日祐姓平氏北總佐倉人父千葉胤貞幼天機秀發骨相不凡投之中山師事日高正和元年瑞世子中山千葉氏大振外護力常

住富貴、是時爲盛。師天性質朴，世間浮花，不介于懷。或勸爲僧官，忽損顏色矣。師委身弘宗，志念堅固，勇猛精進。一時化州之香取郡，皆密宗，無由投宿，乃露坐樹下。百日說法，圓靜寺主，詰問應酬，遂累數日，漸而領解。夏衣述謝，執弟子禮。寺之檀越，皆來歸伏。近村飯高內山，飯塚、沙賀、保田，悉皆來服授寺。更宗又遊化于房州，于武州于錄倉，尋復思惟，東關宗化，既過半矣。關中既定，關西猶屬草昧，千葉封地，幸在肥前，吾往而開宗矣。遂浮西海，千葉家割地助之，創一梵刹，稱松尾山光勝寺，說法教化，大有利益。人稱高祖再生。聖天子聞爲勅願寺，晚還中山，自行化他。一日不廢，讀經一萬二千七百九十八部。應安二年五月十九日，示微恙而化。壽八十，窆骸於中山。沒後墳前爲市，香烟常無絕云。統紀十八

三國高僧略傳

卷之十

二十

○釋日什，字玄妙，興州會津人。初音妻有子，一時猛省，頓捨妻子，上于叡山，師事慈邊，具受教觀，克通顯密。既職于羽黑山，著名氏請講，師繙三大部，雲集殆千。雷名繇與羽，或時思惟法華，有本迹二門，付屬亦有本化迹化時，亦有像末之異。今也時運適來末法，是本化出現之秋，而未見其人何也？時有左京者，北總真間人，偶遊奧地，途聽師名，枉步通關。左京齋別頭開目鈔，觀心本尊鈔，師竊讀之。多年意霧，一時散然。既伴左京，遂出羽黑。左京曰：我宗今爲兩派，師爲一致耶？將爲勝劣耶？師曰：本迹者權實也，權實豈非勝劣乎？左京貶之，相別。師直赴富士，更衣竭懷，後將還本國，途過中山，訊左京，々々見拒之。師懇請，左京乃延方丈，山主日尊，一見而不協，以爲學未熟，師停住。請益時，真間日宗、德望、蓋世師介左京，屢往伺之。宗、德勝劣惑不

容，遂及議論，夙善所據，豁然悟了，乃造誓文陳謝，尊聞而大喜焉。師歸本國時，維戰國，南北紛爭，師謂圓靜堅固，白法隱沒，佛識不虛。大丈夫爲法爲國，不可默止。永德元年，觀光帝都，自製治國策，併高祖安國論，以獻北帝。々御感尤深，賜休息地洛中，任二位僧都，營造振力，今之妙塔山妙滿寺是也。後歸於本國，造遠州見附玄妙寺，同州吉美妙立寺，武州品川本光寺，相州錄倉本興寺，業已歸鄉，創妙法寺。至德三年二月廿八日化矣。壽七十九，沒後門人不知，師懷于今唱勝劣，推師爲妙滿寺派之祖。統紀十八

○釋日存，姓源氏，越中人。桃井尙儀弟也。兩弟同志，竊出塵網，投龍華日霽，兄呼日存，弟呼日純。至孝竭誠，霽亦鍾愛殊他矣。然吾宗學業未詳，本迹勝劣，難通一貫之理，故像師每云：一往勝劣，再往一致。

三國高僧略傳

卷之十

廿一

霽欲令二子從者至微，不越其等，以遂晚成大器之功。故先授漸次之教，未及祕聖別付之日而逝矣。以是二師唯知有勝劣，不窺一致之奧，動詰法兄月明、々哀之，屢礙不可，偏信執法，凝爲痼疾。嘗有柳屋妙蓮，別構淨室，請像師焉。其室未廢，師幸得之，擬寺別廬，益唱勝劣。有年于茲，一旦豁然通會，兄弟相謂曰：先師勝劣之說，是中止一城之方便也耳。兩弟携手，走謝法兄，明大喜曰：今法王大寶，自然而至。於是兩師改志，行業積年，造營振力，殿堂成就，勝稱揚柳山妙蓮寺。崇像師爲開山大覺明源日霽，襲法位。二師又順次相嗣，存者應永廿八年三月廿六日化矣。純者後改名日道，應永卅一年四月二日逝。法弟日眞盛唱勝劣，本門八品之外，不誦其餘，別築本隆寺，崇師爲八品派之祖。統紀十八

○釋日隆字深圓號精進院越中人父桃井尚儀二叔出家遂仕日霽不幸蚤罹霽之喪二叔唱勝劣師亦隨之後二叔悔悟而師獨不移執弊愈固終構別廬今之本能寺是也又築攝之尼崎稱本與寺而弘通接度時有本果日朝甲州立正寺駿州光長寺兩主也上都調師針芥相投終日如愚和者亦夥一時呼西隆東朝日明聞而大愕召糾彈之不屈遂及議論累日不眠工夫千般一旦醒悟疾走謝罪日朝逃歸本國朝晦岡宮固執益甚結黨取柄以是岡宮至今不相異端師寬正五年二月廿五日感疾而化壽八十一統紀十八

○釋日親號久遠成院南總壇谷人小字寅菊甫十四歲就中山日還輪染天機神發諸宗法門無不通曉十九充于西海總導職一時億念吾祖承別頭之命忍巨難貫三類我爲玄孫曷素食乎身輕法

重死身弘法如來遺勅忍力不成則諸業徒然終歸中山戶陀林中蚊蚋不拂豺狼不避每夜期百日誦自我偈百遍又一日拔一爪十日竭十爪浸指熱湯痛苦千般不至傷神適夢祐公歎之賜花押且授曼荼羅筆法應永卅四年師上帝都橋傍立傘而強毒之關提之徒毀唇紛紜惟有宇野西村兩氏築一乘寺於提折而敬待焉師自製立正治國論以諫時君蓋擬高祖安國論也大樹義教大瞋曰吾聞法華行者化人衛護今將試之即囚師降獄炎天積薪而炙之寒夜縛木而咎之或設浴熱之或盛水通口師以爲法樂義教愈順以鐵拔舌燒鎗冠頭師確乎不拔世呼鎗冠上人嘉吉元年三月義教實曰我惱法華持者何無現醫乎師曰不過三年義教笑曰現報何緩師曰爾者吾縮百日可耶六月廿四日義教果爲臣赤松滿祐所

弑識者不寒而栗矣獄中有松田妙本見師崇行結檀越契今之本阿彌家是也後主上賜地狩野入道叙昌聞之大喜捨貲助之今之叙昌山本法寺是也長亨二年九月十七日泊然而化壽八十二初鳥邊山自造壽塔寔全骨於此今之本壽寺也師著述尤多舍兄日英識師權化建寺塔生地今之妙宣寺是也統紀十九

○釋日朝字鏡澄號行學院豆州宇佐美人以應永廿九年壬寅誕焉時有三島日出者智行兼備一時望高生平所求生前一拜高祖應化偶夢高祖告曰子欲見我往宇佐美醒感喜纂履至其家戶外有一小童風姿不凡奇骨溢眸出見以諭父母々々惜惜焉兒在傍泣求出家不得已割愛時年八歲出鍾愛加意永享元年四月八日落飾染衣名曰日朝師性好學內外典籍讀則背誦生知天發一動

一語爲人之則出試就遊學上叙山至南都稟天白花嚴三論法相俱舍唯識之學又伺密部扣禪門兼詳律部而所之守長幼之節學成功遂而歸祖山日延聞之召見師隨侍之隨受慈訓宗教宗致不勞領焉延大駭爲神童永享八年出招師主三島本覺寺時十五歲師接衆唱宗風化三僧子出長祿三年出逝師因命兼領鎌倉本覺寺寬正元年延師還藏相師補猊床山榮風靜四衆快暢法輪食輪是時爲盛而鷹取山麗西谷水上淨界狹隘不足容衆師唾手委意易地改基丕企鼎建時至緣熟不求財聚不告人來拽木搬石錫峰塞路神助鬼役四方戮力幾千萬人欄楮架空檐甍聳雲紺殿寶塔方丈三門譚々邱嶼似寫吉祥天宮聖財充溢足稱本國土妙鐘鳴敲吼山呼谷酬子院孫舍民居村落各抱地勢庶幾乎千數加之山

中清規山外乘矩別頭禮數法會樂律置之衆器調之衆職壯觀巍々集而大成如今祖山之爲祖山也可謂師之力矣在位四十年結菴於山下閑處攝心今之覺林房是也明應九年六月廿五日無疾而化壽七十九初師哀身延地僻路險老人婦女不能詣拜手分高祖舍利建塔於鎌倉本覺寺稱東身延使遠近結本化良緣自製延山十德令知身延爲末法萬年福田也師生平健剛無病夜不就寢冬不著襪誦經唱題昏常翻然且從事翰墨暇則梵案著述尤多今刊行于世僅十之一耳師六根中少病眼根常曰諸根中眼根之障殊妨道行吾死護他之眼根果有驗矣故迄今廟前爲市云統記十四

○釋日新字純惠號慈雲院甲州今御訪人幼事日傳々沒後就日鏡剃染遊學無方具嘗辛酸既住洛陽妙華寺瑞世漢原妙光寺天

主國高僧略傳

卷之十

廿四

正中稟日整鳴雄飛祖山在位十五年山水不減韻文祿元年八月十一日偶感微恙唱題坐脫壽五十八初神君詣于身延師爲時之主慇懃竭禮道話累日而問山之常住將領莊田一千石師曰身延高祖棲神靈地白毫相光淨界盈溢自然餘裕無有飢寒他日閣下得大嘉運築一都城請都下賜一區地往構神廬快振宗風神君熟聞語感其清康從容別去後神君啓東都親召師賜護法之印又割飯高中村小西三談林俸地又賜留錫地於幕下今之瑞輪寺是也特有台命號慈雲山師得人最多矣統記十四

○釋日生字惠教號教藏院姓島井氏播磨人十一師事洛之立本寺日經天資聰敏偶遊備之岡山寓蓮昌寺檀越某見師器宇長約外護師歸洛占地於松崎結茅絕世熟讀三大部數年焉或時謁光

山日禪々曰子有雄飛相勉旃欲領我祖意先詳天台於是乎走上叡山幸有文甫要行交情日密矣要行學成歸本國開寶舍講天台教護本化道謂之飯塚談林師聞不堪感喜往而扶佐之要行大喜不幾而疾自知不起告師曰公之於吾不惟一世緣叡岳萍蓬遂成莫逆之交吾有至願不果就死遺憾無已公夫謀之師請要行逝爾後飯塚異端結黨師憶要行之言不忍弃之率衆易地移內山村々更復沮去過飯高前夕飯高城主平山刑部村老林某夢妙見神告曰我有佳賓汝等留之蓋飯高妙見垂迹之地明日果見師於社前林氏問曰師蘊何德耶師具語來由平山氏亦出迎懇留之師乃留錫於妙福寺復開講筵不計衆集遂爲談林先是吾宗學徒南都北嶺負笈扣習及歸更探宗旨講如今宗內大部小部階級式調三大

主國高僧略傳

卷之十

廿五

部是師之功矣故師稱講經鼻祖也後歸洛開松崎談林備之岡山屢聘師不止終應其請後復還洛瑞世立本寺文祿四年七月廿四日示疾而化壽四十三統記十九

○釋日尊字文甫號蓮成院京兆人蚤脫生累師事光山日禪々廣橋國光卿子殊有智行兼備之譽師性聰敏神姿高徹孳々勉學儕輩中如孤鶴在雞群或時禪告曰欲知我本化宗致必先須學天台教觀々々學得方見我關官寺多事無暇企講汝先上叡岳驗他氣象師隨承命往學五時八教三觀十乘通徹悟入集解要文則是時所筆記也時有北總飯塚日統千里飯塚窺台教奧又有播州惠教日生侍講染指三人相見而笑意識莫逆互相敬重道契親密猶乳與水統學成歸鄉鼓講生往而扶之師亦追至生大喜曰我偶訪統

通記集
卷十七
云八學

鼓篋通
其書也
書言故
事三云
就學校
曰鼓篋

滯留及此，我亦有洛地開費之願，將往果之。公其謀之，師諸生公開談林於松崎，教育雲眾，師補生公席平山、刑部見師、偉德、崇敬、尤深，割地而供，別構講堂，大振力焉。師開堂祝釐了，繙三大部，又鑒其器授本化奧旨，學徒雲集，講習日盛。祖山日新聞之，欣然以告神君，々賜護法之印，稱妙雲山法輪寺，又割俸地，師爲開祖，山色追日而麗，雲氣逐年而彩，天下負笈之士，呼爲本化寶城之龍門。師懿德茂行，不告而顯，時兩山空主席，請師補之，辭再三，請不已，遂移法駕，先是兩山與六條有隙，猶山門於寺門，及拜師儀型山中，老少作意，忽消沮，閱頓止，盛德之所致也。慶長八年三月十六日，感疾而寂。統紀十五

○釋日圓字惠雲，姓椎名氏，北總飯高人，投妙福寺，痛染時生，公在飯塚振壺，接衆師往事之，天資敏悟，聞一通十，生公歸洛，屬之尊公。

主國高僧略傳

卷之下

廿六

困學至誠，悟入得力，辨花機鋒，會上無敵，竟充首座，慶長三年冬，尊公視蒙池上，法雲日道爲新命主，未幾移于身延，後主不決，一者言洛有一如重公，一者言我惠雲上座，兩黨紛々，互相軋轢，師謂爲法甚不可，矧乎重公宗門先哲，道譽殊高，弗應吾敵，屢以驗衆，不可，師謂蒞節願躬，君子所耻，吾不爲之，間行逃去，盤中村淨妙寺，黨與聞之，慕闕而至，面拆不去，師亦無奈之何，開講淨妙寺，飯高亦重公不領代，差日遠，是以兩檀分立也。神君賜封號正東山日本講寺，遠公識師道儀，深敬之，講信修睦，八年遠公進于延山，令衆請師，々固辭，遠公強之，不得已，終爲飯高講主，十年六月四日，偶感微恙，泊然而化，壽三十九。統紀十九

○釋日重，號一如院，世洛城人，父有事緣遊若狹，因生師焉，甫六歲

乃携歸，投光山南光坊，性敏好學，機辨如響，一日伴其師赴齋，々主拳觴，師受酒而灑之，牆齋主笑曰：「瑞音欲飲乎？」師應聲曰：「言不肯飲乎？」他日亦赴齋，又有酒，師潛奔牀下，檀家視之，曰：「兒不欲受，々而奔之何也？」師曰：「施於法界耳。」適入庚申會，圓基象某丁々然，師默坐于側，或謂師曰：「子亦圓基乎？」何獨寥々也？師曰：「吾不復知象某也，其幼機警，皆此類也。」泉南日珙及常光日諱，山光日諱，俗之稱三光者也，共約斷金，講習天台六十卷，而旁礪教觀，頗得通曉，於是乎學徒雲集，師乃鼓笈而至，泉南年最少在席末，而其智辭嶄然出群，一座欽之，三師特稱爲法器，已而遊南京，學唯識，傳因明，既返而瑞世乎本滿寺，接續白之暇，日諱台教其玄義文句止觀，乃六年而竣焉，日乾及練意輩爲之聽徒，此時實地私記，未出于世，意密贈而秘焉，每

主國高僧略傳

卷之下

廿七

詰於師，以私記義，師直會之，十常六七，餘則明日而答，率以爲常，師之會釋，當古義者，十中八九矣，而意性不移，遂成逆路之者，師講席日盛，輪下亦有人，於是光山闔衆晉議，特設求法院，請師，學徒爭趨，填門擁室，歷七寒暑，畢三大部，日遠舜惠等學業於此，就矣，師功成不居，乃還舊寺，結小庵而隱焉，慶長七年春，有身延之請，師固辭不起，因乞高弟日乾聽之，而乾遠相繼，皆再住身延，而以其功勞，歸之於師，配於延山列祖也，師雖閑居，而戶外屢常滿矣，又談宗祖書等，宏才巧辨，慧靈終日，聽者忘退矣，師性質素不事浮花，紙衣布裙，至老不改，曾在病床，門人皆諫曰：「師衰老臥病，麻衣楮衾，非所宜，且人或以不孝罪吾輩乎？」唯願易之，終不隨，元和九年閏八月六日，逝，唱和歌二章，代遺偈，壽七十五。神山集六

○釋日乾字孝順號寂照院姓塚本氏父某越前人武勇之士也淪落乎若州小濱於此產師幼事郡之長源寺日欽偶喪父乃偕母入京從廣布重公時年十二穎悟強記涉六年究三大部遂事遊歷寓三井學俱舍如南都習瑜伽唯識律部等師巧論議善講說六爲光山大論議講師且赴百日法談事竣而擢學道衆時年廿六光山有學道已來未至三十而預此職者師爲始焉重師移光山講院乃令師繼廣布之席師內脩行法外勸演說兼事營構慶長七年冬延山請師重師許以莽月明年返廣布十四年再住延山行法之外專勸論議身延舊有立正會每歲三月廿八日即我宗發軔之日也而會議未備師始制豎義之式居六年乃隱西谷寬永五年池上日樹作法亂師爲之與日遠同止武城三歲矣遂與對論而日樹之徒遺寶

三國高僧傳

卷之二

廿八

遂七年夏幕下有命賜師洛之妙覺寺住七年而赴乎攝州初慶長七年冬十月述宗門綱格上文祿帝中和門院請師屢聽法譚因賜紫方袍元和三年春師之能勢卜居郡主深欽師德爲捨基址師諱茅而居扁曰覺樹庵六年紀陽侯母氏養珠院移致州松野精舍大營于有度郡皆谷松野日持上人之舊地也厥地狹隘不足改作由是有斯舉焉且附以山林招師爲中興祖謂之蓮永寺繼令日遠補處九年師辭松山還能勢十二年冬十月十四日示微疾廿七日寂于本滿寺壽七十六坐夏未詳師儀貌截然如巖山峭立視者不覺而伏演說坐久身首不傾音聲不變爾去卑俗語無重複君子以爲唱導之標式師山
○釋日遠字堯順自號一道又曰心性院姓竹井氏京兆人父名丁

玄師有二兄曰了程曰了俱皆有優才精發歌道師幼而父喪甫六歲其母與重師出家初到之日會重師剪爪乃令師收爪師拾畢猶覓左右重師曰兒何求耶曰爪唯九耳重師笑曰足矣其一吾前剪之而奇之加意教育焉習法華未幾八軸皆誦徹尋學台教敏悟之聲早滿都城年十六自講法華聽者服其神悟重師講止觀門人密議曰止觀淵奧尙泥文義豈能達微旨哉不若就堯順聽文句也遂勸師講焉師自此入則聽止觀出則講文句止觀訖日文句過半矣師之南京聽俱舍及律部稟瑜伽唯識之學已而返京師入東山大藏其所鈔錄三十卷分六部所謂佛菩薩二乘人天雜部也會有總州法輪之請時年廿八建仁雄長老作詩餞行有天下總應無等倫之句於是乎重師先命董廣布席不幾臨法輪時慶長四年也乃講

三國高僧傳

卷之下

廿九

台教大小諸部凡六年所謂玄義文句集解文心解顯性錄等也學者嚮慕如水趨津年三十三方住于身延會常樂日經與淨土宗有事東照官召師於駿河因請曰願遂宗論東照官大嘆乃議當死刑師不變自著薙服且墓待刑東照官感其志操許而歸山師即辭身延而入大野自構一室即今之本遠寺也於是學者彌衆又講三大部其後養珠院言幕下附封戶爲一方本山告紀陽侯曰吾死則藏乎大野因墓于此山巒密石爲廟且改營築佛殿僧舍莊嚴盡美矣元和元年秋東照官命師再住于延山一年又返乎大野觀念禮誦之暇猶力講說寬永七年夏池上日樹被竄幕下乃以池上賜於師固辭不聽居一年而退藏于鎌倉經谷初師在身延繁務之中講說大揚議論亦熾加之造佛像營伽藍尤修立正會其會始乎申時卒

乎辰巳，人不堪其久，而師儼然不動於席。明智道在總之法輪，講文句三、四年未終，師寄書勉之曰：昔者先師在廣布講三大部，六歲而訖，及講乎光山，七易裘葛，先師怠之，常勵吾徒，因是余之在于法輪時，偶因日道之事，數出江府，空消居諸，文句之講雖亘三歲，實乃二歲而已。今汝數年而一部文句猶未果，何爲其度日哉？寬永十九年春正月，師在經谷，示微疾，乃追高祖舊事，二月之杪，赴池上，三月五日安座而化。春秋七十一，法臘六十六，葬歛之時，絕無臭烟，而骨之白如珂月，門人分其少許，各祕蓄焉。乃收骨灰，塔于大野，師性慈仁，逢寒者脫衣與之，見貧人分食與之，然金錢之類，未嘗觸手，其清素之風，誠頽波之砥柱也。三時梵行，所謂五悔及禮誦書寫等，凡日課三十余事，冒寒暑而不廢，自讀法華一萬余部，時々咏和歌遺懷，善

歌者皆稱之，然師不酷嗜之，其所著三大部隨問，法華大意一卷，隨音句二卷，譯和集三卷等，並行于世。紀陽侯深歸師，富師滅後，爲母氏擬養殊寺，乃師擬開祖焉。同上
○釋日英，字英琳，號本覺院，京兆人，父百代氏，以天正十二年甲申誕焉，幼而聰敏，立志不群，父見其神宇超然乎物表，投妙覺寺日典爲驅鳥，時七歲，與早逝，尋依法兄日與，齊輩四十八人，均受法華兼習名目等，師處衆中，如珠玉在瓦石間，一聞便背誦，師尙歎課誦之不進，踴巡于子院研習之，十一歲，父相携登叡山，偶有西谷名目講父在戶外，告師曰：汝亦如斯解說耶？曰：說之，父告誦師以此言，誦主與座使說，詞辨婉暢，過于前時，誦主喟然歎曰：真貌兒也，留三日，乃還，此年入松崎學台教，夙智所憾，智解日進，聲名月起，十七歲，聖然

念世相起滅不常，設棺措側，修學之暇，入中宴坐，一年携母詣于身，延乘母於馱馬，躬不離其側，覽者感其孝，松崎虛席請師，日講文句兼談諸疏，聽徒濟々，於斯爲盛，後又應立本寺請，師本不好浮誇，曉天將一奴，褫衣艸履，飄然而至，其清散之風，亦可概見，而天資謙光，慈和不以聲色忤人，兒童傳稱呼佛，師南詢之念猶未已，擔簦往南京，聞唯識於空慶，初聞講未決斷，更入室內，質所疑，誦主答釋語，誦師乃別述自詳，誦主舉節歎曰：此處唯識一部之奧，而振古爲難解，處今公之妙義，所未前聞也，於是乎頻請講台教，師不得已，出則聞唯識，入則講四教儀，相徒聳聽，嘗訪禪那忠法話，三次忠言頃閱大論大綱，括十條件々，如此，師反覆辨詰，乃曰：予所總只二字爾，曰離苦，忠感歎服膺，暮年潛居鳴龍三寶寺中，蕭然一室，衣鉢之外，無復

餘蓄儉素清約，怖信施如獄王，時々飛錫于嵯峨邊分衛矣，午後不揚爨，焰常修法華三昧，語淚俱下，沾尼壇者，率其常也，法隆了性、靈源一絲禪林龍道，憧々往來，締忘年交，其爲時賢所推如此，師初失一明，暨老後雙眸俱翳，從是誦誦經典及章疏，而一字不差，講法華三十余遍，近衛信尋公及飛鳥井雅規公亦特勸講說，師自本疏，至末師義，辨折明哲，公大嘉賞，信加歸崇，師頗有靈鑑，翳眼見遠處物，聽火災、嗅賊盜、味調和前後，知人之來往，通達權實，自非六根清淨，其能然乎？一旦感微恙，偃臥者數日矣，臨終焉，洗浴更衣，乞紙筆侍者書末後偈，投筆脫化矣，實正保四年正月廿五日也，春秋六十四，法臘五十八，乃窆骸於山頭，所著隨力演說鈔二卷，刊行于世。統紀卅三
○釋日勇，字天惠，號法性院，姓平氏，而洞院參議時直公子，小字梅

松實以童形上延山師事日要十五種藥要師器許寓竹之坊後應洛之妙傳寺請四條隆術公室者松平總州娘神祖曾孫也欽師道德場外護力師偶得勝地於山科新築叢林垂幃待衆後水尾帝東福門院一時召師聞法忝裁御衣道僧伽梨嚬之師祝釐維務於是叢林彌興勝曰了光山護國講寺慶安三年十二月廿三日感疾而化統紀十九

○釋日可字宜翁自號竹庵姓岡田氏讀州九龜人父名吉勝母井上氏幼時父無故出師母乃從人而流落偶寢病于橋州師躬往看護知其不可起乃携歸讀之高松々々母之舊梓終死于此既葬之悲慟而歸時年十八事後母亦孝父又逐後母師益不樂性素好學而父不喜之每密讀書而畏父知之焉父果逐之乃不得已來乎

三國高僧略傳

卷之下

卅二

京師自此始有出塵之志矣承應元年廿九自刻髮投西山義萃偶萃遊乎關左又投興正寺拙堂聽圓覺經之說受般若心經微旨明年冬介御史中丞某來政公寓居更衣讀法華數日學業日新其俗時嘗好陽明學習氣未除動輒讀文錄傳習錄諸書而以事理合一之旨扣政公々々笑曰儒吾道之一端耳未足與議也予熟於我學久而自得焉明曆元年隨政公入霞谷雖去洛遠不倦分衛行住坐臥怡然樂道初在洛社時其故二不勝思慕與母自讀州來臨院門外使人言曰讀州人尋宜翁來願一相見師未知是誰自出視之則故二也師無怪色乃恭言曰辱遠來雖宜慰勞此處不許女人入門請自此辭也便入故二且耻且怨而返師雖絕世緣未嘗忘父常悲其違命時々跪讀孝經獨盡其心矣會父因事止于京師師乃就門

統紀三
云故二
者舊妻
也二
偶也出
四分律
五十五

候之舍主故舊也憑之傳意父不聽師日日躊躇不能去朝往而暮歸如此十許日父遂歸讀州師潛送之至于大坂號泣而別然師每念父年漸邁侍養無人因以書促鄉里親族勸後母之共女在京者歸於家焉偶父俄病而死及訃至也水漿不入口者三日人咸諫之微進訃粥於是親族自鄉來欲誘而歸師曰吾已出家今何爲而歸耶且夫父在日罪予不容而至身後歸是欺父也今幸我妹共母在家卿等爲求佳婿繼父家我願也遂不往焉師聞妹克家乃明年春返鄉拜父墳墓寬文元年夏四月嬰微疾在高槻五月中之京就醫藥六月朔自京僑寓于隣峰玉鮮院五日朝畢會諸友告訣而整法衣展坐具向佛三拜已而同音誦壽量品三拜復坐將終謂諸友曰我家以來梵行不缺十年樂道而常自謂天地之間無可以代此

三國高僧略傳

卷之下

卅三

者風烟山水是我家鄉豈離此土別求寂光頃之偏鉢遍惱叫呼之聲驚隣久之醒矣問之曰不知吾快安寢耳竟夜閑談奄然而化實六日々出之時也葬歛之間鉢貌如生面有微笑姿世壽三十八法臘十夏人皆惜其不壽矣卅七
○釋日審字文嘉號靈鷲院京兆江村氏子父名久茂有數子長紹閑儒士也次中山日養次師以慶長四年六月二日誕焉幼而岐嶷戲謔不爲虐性好施與嬉遊亦能之甫八歲執業於惠光寺日玄々知法器厚撫循之十七而遊學登松崎依光山師甚愛母出而不知所往偶聞在南都法華寺乃迹而行遇之悅甚遂携歸而私養焉師愈貧跣足無屨爲人課經少得囑物因爲反哺之資師雅有遠遊之志于時總州有禪那忠如而依焉又親炙日賢益勵行業嘗於南京

偶見與正菩薩讀釋迦像師即以誓願安樂行文併案焉於是乎大起弘願常以慈濟爲懷日玄嘗告師曰吾欲俾汝爲後代導師木鐸日域爲汝禱久矣汝於所在每遇除夜必讀經王一遍誦說法人中最爲第一之文數百回而禱爾此事既至壯年早捨所業專勉弘法莫惜身命汝其記之垂淚丁囑師亦素抱悲願遂返父母之邦而應世于若州長源寺時年卅一於是乎宣揚大教一百日四方奔波咸赴化惟恐後師尤長譬喻能教無智道俗信解無相之理矣僧問嘗於相對開會頗得譬說如種種云何諒得師曰如以酒作酒信悅服有俗士白師曰弟子在塵中五欲爲樂佛無此樂成佛非願師曰汝嘗患瘡耶曰患師曰以湯洗之得快耶曰然師曰如今無瘡洗之爲樂否曰否師曰佛無煩惱瘡故不樂五欲熱湯俗士唯々耻罷師

三國高僧略傳

卷之下

卅四

之巧說皆此之類也師遂委身流通六十余州行化之迹殆乎徧矣到處郡國之守靡不加敬金錢山委師隨得隨散或與廢寺或賑貧人囊無餘積人彌仰之大抵師之說法也折中有攝々中有折聽者不悲而能辨權實之旨諸宗繇素風偃碧童毀齒亦踊躍唱法年比四十三歲凡說法七千余座不舍晝夜遠公寄書嘆曰自本化之宗興蓋一人而已師族兄日養先爲光山講主令師繼席居五年雙講玄文二大部正保四年住立本寺養父寺側躬奉晨昏父死而事後母竭力人稱其孝嘗曰吾若爲事佛而不得奉親則寧捨佛奉親耳其篤孝也如此一時近衛左府藤公延師講法華依父之命也太上皇後水尾帝及太后臨幸府第重勸十如三千之義并即身成佛之旨公數舉問難師應對如流公信服矣後又太上皇及太后幸二條藤丞

相邸召師々乃說諸佛兩足尊之六句明法界本源生佛始終教法起盡太上皇謂中書王智忠曰朕今日於佛法中無復可疑事王尊師之法執弟子禮詣立本寺每陪法席又屈華第聽受法華一部之說崇信日厚點桂別業建一草堂願爲園林太上皇藤原宸奎書園林堂三大字於是請師闡法三日開門容賤遐邇咸會人以爲未曾有之盛事萬治二年正月廿一日師年六十一退院竭其所有盡頒徒衆不留一物自是獨屏祖堂側燒炭自養救飢而已然戶外屢滿餉遺存至師曰是我安樂行耳衆人勿過慮悉謝不受師雖臘高精神康強讀誦說法之餘尚閱大藏會值荒歲師乃以檀餘惠饑人門前如市嘗有遺狐魅者乞師持念師曰吾不能也懇求不措師曰嘗試之明日升座說法妖疾如洗師道貌端嚴威而不猛辨才無礙如湧

三國高僧略傳

卷之二

卅五

如瀉人呼富樓那後身生平不厚衣服不得飲食冬不爐不著襪多少喫遺目不再見而救人之急解人之難可謂如來使也寬文六年春三月示疾遠近咸來欲最後結緣者日以萬計師手把經卷摩頂唱稱不論緇白男女徒衆難其勞煩番議禁入室師不悅曰吾生有涯值遇之因非今何日晝夜說法要決疑問將終前數日扶輿登大殿書大曼荼羅長一丈余尺至十五日夜內外悉更衣右脇而臥乃隨衆持誦唱題頌稱一心欲見佛不自惜身命之句頃之曰我已到于靈山淨刹切拜尊像良久恬然化去遺命夜密開毗于深草收拾骨灰藏于靈光院先是諸師專以教相爲弘化要至師出懷開己心之妙而不墮天台觀門直取萬法歸一事觀實末世唱導本化宗師也師嘗謂曰我三十以後不以書學歷緣對境皆廣知見忘法用法

離格合格以能說心、直投所聽以故其說易入群機、若以經論智解擬之、隔離聽說、雖徹人心、是說法者所宜知也。神山集六

○釋日政字元政、自號妙子、或號不可思議、又號泰堂、姓菅原氏、石井、母夢一高僧來曰、賴哉、覺後有娠、元和九年二月廿三日、母有以出遊既歸、其夜誕洛之桃花坊、母無困憊、二歲秋七月既望、父携師見東山送火曰、兒知彼字乎、歸家書大之字、父大奇之、凡兒生一期、以百玩具羅列於前、觀其所取、以卜兒之後來、師聰敏過群、六歲春初讀書、一習便誦、一日從父詣建仁大統院、見九巖長老、々々謂曰、子讀書、今習何書、師曰大學、長老試口授二行、習便背誦、長老撫掌歎曰、誰知今有寧馨兒、八歲赴于彦根城下、習於武事、又善進對、以故十三事城主羽林中郎將井伊直孝公雅好典籍、有官暇讀書尤

三國高僧傳

卷之下

卅六

精力過絕人、十九抱病於江府、師養一年、性樂山水、所至終日吟詠、援筆題詩、屬文與母詣泉州和氣、拜日蓮大士像、自發三願、一我必出家、二父母壽長、我竭孝心、三閱天台三大部矣、于時泉涌寺周律師、會講法華、師做居門前、日陪講席、散日至當生初利之文、引法藏救母因緣、涕泣不已、四座爲之潸然、師窮甚、律師德儀、因告之言、吾欲出家得否、律師曰、子甚少、出家未晚也、後經八祀、年廿六、自祝髮出家、從龍華日豐師資道契、師幼齡常誦法華、果閱三大部、每有疑義、不嫌僧俗長幼、問之研究、交修三學、而不滯不離、宗門中有墮作業、善教相者、常歎此與生平耳目之所觸、長記不忘、是故涉獵內外二典、兼通日本書記、後得勝地於深草、營構梵宇、名曰瑞光寺、居焉、常不卸衣、長時持律、誦經勤修無怠、都鄙繙索、識與不識、望風信慕、

實介公子、搢紳士庶、召之不應、有來趨化者、則不論道俗親疎、善言

諷誘爲之啓迪、有人與絹衣者、換棉子、施徒衆、竟使父母舍寺側、竭

哺養焉、母年至七十九、相誘詣于身延山、先此父行年八十七卒、際

小祥忌之辰、爲文祭之、母亦卒、同其齡、師初所發之三願、咸稱其意、

蓋夙因之所感乎、母卒修諸白業、追薦冥福、二七日而俄臥病、覺終

不起、召諸徒、遺誠親書曼陀羅、付屬之惠明、以爲法嗣、師逝之前一

日、父母墓石、大書首題往年繪幻容、自書讀詞、寬文八年二月十八

日、書倭歌一首、安座而逝、世壽四十六、諸徒從遺命、葬稱心庵之側、

只栽竹兩三年、不建塔云。神山行狀

○釋日通字玄海、號寂遠院、俗姓松田氏、師事妙傳寺日勇、學于鷹

峰、次至于山科、爲玄文兩講主、瑞世于妙傳寺、又應鷹峰之請、往講

三國高僧傳

卷之下

卅七

文句、東關飯高、偶欠主席、飯高者法海龍門也、擇其器而不決多日、及舉師名、議場寂寥、遂裁請疏、師來爲化主、止觀解、指要鈔解、是時著述也、六々金鱗、彌增光彩、爲兩山之主、又移于祖山、在位八年、延寶七年二月十一日、於武之瑞輪寺示疾而寂、春秋六十六。統紀十四
○釋日脫字空雅、號一圓院、加州人、姓逸見氏、師事日理、薙染遊學于飯高、孤貧困學、務而不倦、寒天衣薄、暗夜燭空、一時糧絕、腐查充飢、艱苦萬態、確乎不拔、既二十年、學富才發、振義虎名、充于山科講主、瑞世于立本寺、復受東關之請、雄飛于雲峰、延寶八年來主于祖山、元祿中、小湊日映、碑文谷日附、谷中日遠、倡異流、怨祖山、師亂之公庭、辭理明白、映等狐伏、四年壬申、恭稟賜紫之勅、入京拜天願、祖山賜紫之權輿也、十一年秋、臥疾于瑞輪寺、九月廿二日泊然而化、

壽七十三說紀

○釋日燈字惠明號波羅密姓愚藤氏初憑于慈任律師出家名曰智岸又有省我者熟視師聰敏雄氣告曰霞谷元政一時翹楚也乎往而隨之必有大益任亦聽許師曰久聞政公名恨無由親近之我日吾爲子介之寬文五年廿四歲初上艸山拜政公更衣親炙政公垂時器許夙智所攝一聞權實起盡本迹與旨皆洞通之六年丙午隨于政公受本門具足戒七年政公罹北堂喪招師之母妙月主養壽庵八年政公病重親召師附沒後事圖大曼陀羅證之政公逝矣衆皆退散惟慈觀侍師如侍政公情無懈倦遂毀齋堂毀松壽軒毀向陽聽雨知足等庵僅營小庵於稱心庵拾薪汲水修次第乞晦迹守真而已十年伴母詣身延山拜祖塔蓋先師遺囑也十一年十月

三國高僧略傳

卷之下

卅八

三七日修法華三昧從是春夏或一七日或三七日每歲不欠禪誦之暇修艸山集考或時夢政公告曰咨汝惠明閑處攝心其快哉唯我與汝安住則不滅本地常寂之樂夢醒德香所薰桃李成蹊防之不可一會再展又立惠無諍來爲羽翼延寶六年復造食堂八年先師十三回忌同侶合志攝普賢道場修大時懺爲文祭之又書法華開結十卷每字三禮供一花一香三百余日而成天和三年製艸山清規貞享二年爲母妙月著宗門緊要三年慈觀充補處四年爲慈觀等授本門大戒元祿三年齡半百造一切經藏自荷土搬石蓋酬先師德也今茲起長日修懺願九年丁本覺英公五十年英公六根清淨之人厚慕其爲人撰傳祭之寶永二年慈觀卒矣師言天喪予大慟哭四年屬徒於慈航退藏于稱心庵七年元且告衆曰山僧今

年齡壽古稀朝不慮夕臨命終時佛祖垂鑒一大事也末法要路唯

唱題誦耳五千部願既滿矣從是定規之外一日一部讀誦開結共十卷期一千部終命道場言了入室悉絕諸緣脇不沾席梵音唄韻六時綿々正德二年九月廿五日一千部成就矣更加三十日新製願文仲之供養門弟子設賀筵師壯年多病老後豐樂耳敏眼明齒牙最堅繙索鑽仰爲天龍護三年癸巳年七十二霞岡之上立五輪塔年來著述悉空之享保二年秋八月示微疾預知大期視死如歸逾月彌重九月十一日自書遺偈曰本有生死無去無來泰然坐了妙法蓮臺十二日誦經唱題使傍人讀發願文合掌而化春秋七十六統紀

○釋日亨字顯海號遠沾院洛陽之人也賴本法寺寶塔禪後師事

三國高僧略傳

卷之下

卅九

寂遠通師就學飯高應山科請移妙傳寺瑞世立本寺又東關龍門亦應請揮筆創洛之滿願寺大敷教化寶永元年稟祖山日省之囑在山十年是時賜紫衣又有勅願寺詔正德三年囑門人日裕而退休矣享保六年十二月廿六日示滅於武之谷中領玄寺春秋七十六統紀

○釋日潮字潮音號六牙院或號瑞松堂松岩小字松生而八歲投艸山惠明燈公薙髮十三受具侍師唯謹省親惟孝傍遊講肆稟教觀學十九因師命遠遊關左入于飯高游派義海者多年終得真龍名卅五登首座位明年應洛北松崎之請爲衆講法華文句既而德風四播芳譽遐飛翌年與陽太守肯山公禮請住持仙臺孝勝寺公好學禮遇日渥禪林繼徒儒門縫掖文壇之交傾蓋推服享保二年

偶感得錄倉執權北條時宗、嘗所寄吾宗祖墨印宗牒、爲記志喜、太守獅山公、爲破證之、五年、應飯高請、講經一年、元文元年、依台命住身延、在山九年、山色就榮、寬保三年、遠趨鳳岡、拜天願、賜御願、師恐悞拜之、爲詩記喜、遂經天覽、重蒙優賞、身延祖塔、柱朽殿傾、師奮力一新、延享元年、十一月、解職退藏、閑處攝心、而時々賦詩咏和歌、遣興、明年秋、重至京師、拜師親塚、修終身孝、又令人寫壽像、藏之艸山、蓋不忘其本也、寬延元年、元且、大書壽之字、與門人及緇衆、公疾捐紳求者許多、又書本國土妙之四太字、掛之梁上、仲秋之校、偶感微恙、九月疾病、而唱題自若、泊然而化、實二十日、晡時也、瘞祖塔傍焉、師姓青木氏、父名澄、字元澄、京兆人、百濟國餘璋王太子琳聖之後也、母水野氏、生三男一女、師長子也、以延寶二年誕焉、至是住世七

三國高僧略傳

卷之下

四十

十五年、法臘六十八、師爲人溫良恭儉、博聞強識、所著宗牒、感得記大菩薩號記、別頭統紀、皆行于世、

○釋日透、字惠照、後改堯辨、號觀如院、平安城人、父名休節、寬文元年、甫九歲、投寂光寺、日孝、薙髮、二旬、余受習法華一部、十二學經史、兼及詩文、十年、秋、入小栗栖、談林、研嚴教義、凡九年、講暇之際、用力觀心、孜孜無倦、延寶二年、冬、聽了遠日透講、指要抄、深心醉四明學、沈潛反覆、有年于茲、一時猛省、曰、吾偶生爪上人界、列本化之裔、得少鮮文字、若藉佛祖冥助、班籍關左、侍諸龍象、而達妙旨、不亦快乎、密白佛祖、然以父母老、不忍告之、六年夏、父母長逝、師侍病床、起臥身扶醫藥、自給、父語旁人曰、吾齡七十八、今將死、審知子之爲世中眞寶焉、母亦垂終、語侍女曰、吾生平於惠照、唯要沒後追福、而以今

視之、豈特未來乎、其孝可欽矣、七年、遂赴關左、詣于小西、研究文句、四年、天和元年、秋、有故歸京、而夙志所在、未曾暫廢矣、明年、潛出、復至小西、苦學三年、遂進中座、貞享二年、詣于飯高、漸進、遂昇上座、討論止觀全部、講授四教集解、及指要抄各一遍、始自聽講、終至講授、並有記述、春秋凡十四年、貞享中、舅氏日孝、偶到東都、扣其寓居、師驚喜悲感、盡誠款接、孝流淚諫曰、子壯年奮發、遂遠遊志、而至衰老、恐有改派之悔、不如早回步、歸舊寺矣、師謹謝曰、僕出本寺門、入他門、派事非易、曩出平安、既絕緣、西土亦無助乎東方、於彼則有改派求榮之嘲、於此則有刻船守舊之嫌、彼此兩不相容、是以南北二總隨所住處、身心艱苦、殆不可言、矧捨罔極師恩、豈忍爲之乎、雖然、身輕法重、夙志所要、專在明宗、致窺祖意、亦無他事、涕泣分袂、元祿

三國高僧略傳

卷之下

四十一

十二年、冬、爲玄義講主、翌年、功成而退、無幾、住豆之薙山、兼領西谷化主、晚應會津德翁侯之召、主若松淨光寺、々務之暇、修指要鈔講、艸五卷、及集祖書須臾二卷、正德四年、春、退藏、結廬閑居、唱題誦經、謝絕世緣、澄神事觀、享保二年、春、著壽量顯本義、本尊義各一卷、三月、述事觀義二卷、蓋末期之一圓光也、師至老死際、身意泰然、廿五日、作絕句二首、廿六日、端坐合掌、唱題而化、春秋六十五、法臘五十六、

○釋日導、姓井上、號一妙院、肥後國熊本人也、父某、篤信法華、七劑之暇、每讀釋典、樂焉、師生呱々、父誓曰、兒至童胤、必爲沙門、乃以一妙名焉、甫十歲、投本妙寺之東光院、剃染名榮雅、纔習八軸、不遑寧處、學他書、竊自憂之、比十八歲、逃入洛北鷹峰、而斷葷、盡粥、短褐、不

曾故 事三云 范希文 修學最 貧在長 白山僧 舍養果 二升作 粥一器 經宿遂 綴以刀 畫為四 塊早晚 取二塊 斷而啖 之

蔽腰會東都谷中妙福寺日禪來愛其貧而好學既回錫之日相携而還更名智溪禪移高田本松寺師復從焉自祈成學於高祖像前遂得入籍中村像者即本松靈鎮而世稱滿願者也師雖班講席日聽台教然潛心討祖錄將扇揚祖風其及學成去講肆住妙興寺又移東都牛郊惠光寺々務之餘探究祖書且講演導士女遠近歸者多焉師常謂門人曰社中學士縱究台教六十卷利判溪四明之佳兒孫不探塔中別付之願者於我奚益矣又設諸大藏如文殊等不識以法華之文結題目五字者亦不足為末法弘通之師矣天明三年退藏專業撰述而不廢化導四年秋正東懇請往講文句復歸草庵手不廢筆五年春祖書綱要脫稿矣凡廿三卷別頭之教旨於是方見矣無幾應熊本々妙寺之請居數年而化實寬政元年七月十

三國高僧略傳

卷之下

四十二

二日也春秋六十六

○釋日隨字本妙東都青山人也幼而喪父事母孝順蚤有出塵之志從下谷宗延寺日實而得度師深慕政公之風遂尋其遺蹤至深草居焉後移甲州波木井結一小庵絕世緣誦經唱題無懈廢道俗仰慕焉偶有水戶談林之請赴于彼地無幾而化實文政五年九月十七日也春秋三十六法臘未詳奈毗送骨於波木井塔焉師平生珍敬於毘尼欲挽回狂瀾於既倒者世舉知之今不復贅焉師禪誦之暇所著佛海微瀾教觀譬林妙經述讀等發於本化之微旨者多焉輝師之學風或淵源于茲矣乎嗚呼若師也可謂三學具備矣
○釋日輝幼名駒三別髮稱覺善改堯山又稱優陀那姓野口氏世仕加賀藩住金澤中世遷越中考和平君諱某別起家復移住金澤

姚圓山氏生三子長子某信日蓮宗天還言奉之姚感傷欲度一子為僧皆不肯會姚有身潛行詣甲斐身延山祈產男且誓以為僧孕十三月而生即和尚也和尚幼不嗜葷肉九歲從同鄉慈雲寺日行未一月通誦法華經八卷日行寂妙立寺日雄誦為弟子便兼修佛儒二學時宗學衰替偶志學亦唯天台學之修而不知進求宗義和尚深慨歎於此奮志而上歷訪良師會聞京北深草有本妙日臨者學行並修往從之大有所得然心猶以為未也去赴關東周遊武總諸州咨詢各宗學匠莫當意者乃決然歸鄉築室于立像寺後園沈思潛究遂脫前世諸師軌範發揮蓮祖深旨著書辨之悉更儀則學徒漸加同宗緇徒嫉之謗議紛起斥以為異派迫窮最甚藩值而知之特命賜金若干以賞其學行謗焰頓熄先是日雄屢讓職固辭不

三國高僧略傳

卷之下

四十三

從天保四年立像寺日靜老病讓職懇篤立像寺巨利班妙立寺右義不能辭乃起襲職自是聲名遠播學徒益加東西各地無國不至在費常數十人他宗僧徒亦時來學焉辭之太夫人歲給米三十苞以助學資時常陸水戶檀林久廢其徒憂之弘化四年來聘和尚再與之水戶侯賽賜賞其功嘉永三年武藏池上檀林又請聘焉和尚往振起其學於是海內宗徒始知向學仰望如泰斗而歸數年罹病不起實安政六年二月二十三日也享壽六十歲奈毗葬于金澤十一屋村墓域後改移立像寺域內法嗣親存日成承後和尚為人溫和有威人皆敬而愛之學兼皇漢傍及詩歌說理明晰縷縷如蘭吐絲聽者忘倦著書百餘卷皆先賢所未言和尚寂後十年王政中興釐革僧制當時受業弟子皆特選登重職而宗風一變悉從和尚

遺則、稱爲日蓮宗中興祖、可謂盛矣、日輝和
實行狀

三國高僧略傳

卷之十

四十四

明治十三年三月三十日御届
同年八月出版

編輯並
出版人

新潟縣平民

小林是純

芝區二本根町十八番地
承秋寺寄留

三國高僧略傳卷之下終

製本發兌所

東京日本橋通壹丁目拾五番地

須原屋茂兵衛

同通三丁目

賣弘
長門屋龜七

同下谷廣德寺前

全
和泉屋庄次郎

同芝赤羽根

全
山口屋佐七

大陵安土町四丁目

全
吉田善藏

西京東洞院三條上九町

村上勘兵衛

釋獨園 撰

近世禪林僧寶傳

明治二十二年（一八八九）刻本

據明治二十二年（一八八九）
刻本影印

有所權版

退耕菴獨園禪師撰

近世禪林僧寶傳

全

京都

豐光寺藏版

近世禪林僧寶傳 序

近世禪林僧寶傳序
自吾初祖菩提達磨以不立
文字直指人心之宗旨別
開渡門於是續焰聯芳
燈燈相傳化化互照禪唱
捷峻影響弗帝流委

近世禪林僧寶傳

序

〇一

混混沌沌盈溢二象失然而
英傑俊士專奉宗旨不
敢事文字是以雖其機
緣言行往往足啓世後
學而多不傳于世此誠為
可惜焉至宋景德中

有少門諸君者始編成傳
燈錄三十卷及普燈續燈
等書若干卷續出遞刊
播布遐邇於是吾宗祖
祖機緣始昭晰于後集
其在本朝則自

近世釋教實傳

〇五

推古天皇之世達磨遊化
本邦出時機亦漸興
後吾二十四流宗祖明
元輩出自建久安貞間至
應仁及慶長中王公侯伯欽
風仰托名寺巨刹每品並

近世釋教實傳

三

時中外高僧輪次視蒙盛
堅法幢五宗者建久以
來五百餘載世不乏其人
然而未有能輯錄其間諸
賢言行者至延寶中相品
師靈者深慨之乃始輯
撰延寶傳燈錄三十卷以收
幾千一千餘人誠可謂偉業
矣自是一厥後百五十年
餘宗無出京不振日甚有
鵠林白隱老出觸正受端
之悲毒遂振起既墜之

宗風其輪下得人亦不少
祖師真風於是再昭昭
于世矣顧其前後所出者
德碩師亦誠不為寡而
其異言奇行至今未有記述
以傳後者可謂闕典集予

近世禪林僧寶傳

序

○四

弱冠以來竊不自揆志其
纂輯者久鄉者適有事
在薩州者殆年餘屢多暇
於是始從事於斯然當時
唯尋繹予所暗記平生見
聞隨得叙錄之是以其

詳備則多不能如意及其後
歸山更就各師本寺歷問
其行事網羅補苴者殆
十年于此所錄幾乎一百餘
人乃忘因陋編次成數卷
號曰近世禪林僧寶傳

近世禪林僧寶傳

序

○五

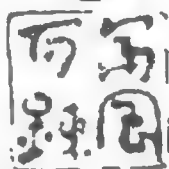
焉世之業叢林之士倘由斯
編以觀古人言行且能矜
式其枯澹生涯則庶乎燈
燈相續宗風永不墜焉
此予編次之微志也如其訛
漏則謹俟後哲補正云爾

明治廿二年六月

相國承天禪寺退耕庵獨園撰



鐵齋懷史書



近世禪林僧寶傳

序

〇六



近世禪林僧寶傳序

自吾初祖菩提達磨以不
立文字直指人心之宗旨
別開法門於是禪焰聯芳
燈々相傳化々互照壽唱

近世禪林僧寶傳

序

〇一

捷峻影響弗啻流委濕々
遂盈溢四海矣然而英傑
俊士專奉宗旨不敢事文
字是以雖其機緣言行涉
々是皆發後學而多不傳

于世誠此亦為可惜焉至
宋景德中有沙門道原者
始編成傳燈錄三十卷又
普燈讀燈等若干卷續出
遞刊播布遐邇於是吾宗

祖之機緣始昭晰于後矣
其在本朝則自
推古帝之世達磨遊化本
邦之時機亦漸熟其后吾
二十四流宗祖明庵道元

輩出自建久安貞間至應
仁及慶長中王公侯伯欽
風仰挹名寺巨刹每州並
峙中外高僧輪次視篆盛
豎法幢立宗旨者建久以

來五百餘載世不乏其
人然而未有能緝錄其間
諸賢言行者至延寶中相
州師靈者深慨之乃始輯
撰延寶傳燈錄四十卷所

收幾乎一千餘人誠可謂
偉業矣自是厥後百五十
年餘宗乘之不振日甚幸
有吾鵠林白隱老出觸心
受端之惡毒遂振起已墜

近世禪林僧實傳

序

○四

之宗風其輪下得人亦不
少祖師真風於是再昭々
于世矣顧其前後所出宿
德碩師亦誠不為寡而其
異言奇行至今未有記述

以傳後者可謂闕典矣予
弱冠以來竊不自揆志其
纂輯者久嚮者適因事在
薩州者始一年幽居多暇
於是始從事於斯然當時

近世禪林僧實傳

序

○五

唯尋繹予所暗記平生見
聞隨得敘錄之是以至其
詳備則多不能如意及其
後歸山更就各師本寺歷
問其行事細羅補遺者始

十年于此所錄並序一百
 餘人乃忘固陋編次成數
 卷歸曰近世禪林僧寶傳
 焉世之叢林之士倘由斯
 編以觀古人言行且能矜

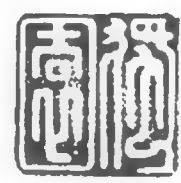
近世禪林僧寶傳 序

〇六

式其枯落生涯則庶乎燈
 相續宗風永不墜焉此
 予編次之微志也如其訛
 漏則謹俟後哲之補正云
 爾

明治廿二年六月

相國承天禪寺建耕庵獨園撰



近江 虛堂伊藤紀書



近世禪林僧寶傳 序

〇七

凡例五則

一從前輯撰禪林諸傳者多以傳燈為書名且冠以撰時之年號如宋代之景德傳燈錄本朝之延寶傳燈錄是也本書雖蒐錄無難以來諸宗師傳以嗣延寶之錄然只照其人生卒年代略次第之不必規々拘衣鉢之統脈故不敢襲用二錄之名止題曰近世禪林僧寶傳其不冠年号者避稱

近世禪林僧寶傳

凡例

○一

謂之不順也

一無難以來傳燈宗師彬々輩出但其人或殊操履其躅隨隔顯晦此撰雖勢期闕發然恐尚有佚於幽潛拾遺補闕之助吾深屬望來者

一諸傳事蹟或據荆棘叢談所載或取諸余記憶或質之于各師本寺斟酌剪裁纔具顛末然其間所缺漏者不一而足即若各

傳中唯存機緣語句而佚享壽臘數等凡不可無者此皆係歷多方搜檢而竟不可端倪者雖極知其失體然姑存以備傳數讀者諒旃

一諸宗師中或有敕賜謚號徽稱或有否者參差不均本書署題一切揭以某和尚不唯避分別之繁蓋以人々所通知者稱之極易檢尋也若其敕賜號稱則固既登

近世禪林僧寶傳

凡例

○二

載傳文中非敢略之也

一緇林外修禪者古來寔繁有徒苟分傳燈脈者雖非名流亦可傳其人故今微前輩居士傳等例錄其最可傳者若干人以所予僧寶之後云

一初余蒐輯諸傳隨得隨錄如第三則所言是以其體裁行文等種種不同素欲手加刪訂俾歸畫一顧法務大劇弗暇操觚於

是囑所識京儒灌園石津氏自諸宗師原語成文外凡係撰者記述者字梳句櫛潤色之略一貫全書通體焉而其整次校讐以下至授梓製本凡百之役則宗海全信及指月居士皆拮据周旋之乃成就吾著撰者實爲氏與三子之力其勞不可湮沒因附記于此

撰者識

近世禪林僧寶傳目錄

卷之上

武藏至道庵無難和尚傳	信濃正受庵慧端和尚傳
駿河松蔭寺白隱和尚傳	陸奥高乾寺月船和尚傳
日向大光寺古月和尚傳	駿河松蔭寺遂翁和尚傳
伊豆龍澤寺東嶺和尚傳	參河華嶽寺良哉和尚傳
武藏妙心院義山和尚傳	出雲 葦津和尚傳
山城鹿王院靈源和尚傳	甲斐 快庵和尚傳
備中寶福寺大休和尚傳	出雲天倫寺圓桂和尚傳
遠江勝光寺環溪和尚傳	遠江廣嚴寺悟庵和尚傳

近世禪林僧寶傳 目錄

卷之一

豐前自性寺提洲和尚傳	周防常榮寺天祝和尚傳
日向龍谷寺滄海和尚傳	山城海福寺斯經和尚傳
豐後月桂寺大同和尚傳	信濃龍翔寺層藏和尚傳
播磨大梵寺頌極和尚傳	筑後 長安和尚傳
信濃圓覺寺劫運和尚傳	丹波龍雲寺愚庵和尚傳
武藏長德寺龍派和尚傳	甲斐東光寺天涯和尚傳
美濃天澤庵隱山和尚傳	

卷之中

伊豫龍潭寺行應和尚傳	尾張總見寺卓洲和尚傳
相模圓覺寺誠拙和尚傳	備前曹源寺太元和尚傳

美濃大勝寺耕隱和尚傳	備中寶福寺妙峯和尚傳
美濃慈恩寺棠林和尚傳	美濃大仙寺雪關和尚傳
尾張輝東庵願鑑和尚傳	筑前聖福寺仙崖和尚傳
相模建長寺通玄和尚傳	豐前靜泰院蘭山和尚傳
讃岐玄要寺綾河和尚傳	相模建長寺湛堂和尚傳
相模建長寺真淨和尚傳	相模建長寺頌翁和尚傳
相模圓覺寺清蔭和尚傳	相模圓覺寺淡海和尚傳
武藏長德寺海門和尚傳	阿波興源寺玉洞和尚傳
山城鹿王院泊船和尚傳	阿波慈光寺卷菴和尚傳
伊豆樹林寺象苑和尚傳	山城南禪寺大觀和尚傳

近世禪林僧寶傳 目錄

卷之二

阿波慈光寺陽關和尚傳	遠江方廣寺龍水和尚傳
相模圓覺寺東海和尚傳	備前國清寺月明和尚傳
相模廣園寺巨海和尚傳	美濃正眼寺雪潭和尚傳
備前曹源寺儀山和尚傳	山城心華院大拙和尚傳
下野東光寺通應和尚傳	駿河蓮光寺妙喜和尚傳
長門常榮寺性堂和尚傳	山城建仁寺高峯和尚傳
長門常榮寺諦洲和尚傳	駿河臨濟寺海山和尚傳

卷之下

肥後見性寺蘇山和尚傳	山城相國寺梅莊和尚傳
伊豫大隆寺晦巖和尚傳	備後大平寺曠翁和尚傳

阿波見性寺大震和尚傳	備後龍福寺春應和尚傳
美濃龍福寺萬寧和尚傳	丹後東山寺天猷和尚傳
山城東福寺海州和尚傳	相模建長寺拙堂和尚傳
美濃東禪寺蓬洲和尚傳	美濃天喜寺伊山和尚傳
參河天恩寺石應和尚傳	飛騨兩全寺盤谷和尚傳
山城正圓寺雪航和尚傳	伊豆龍澤寺星定和尚傳
備前曹源寺寶船和尚傳	但馬光福寺起溪和尚傳
山城庇玉院義堂和尚傳	筑後梅林寺羅山和尚傳
駿河長福寺白翁和尚傳	山城妙心寺薩門和尚傳
筑後大生寺惟菴和尚傳	讃岐玄要寺馬應和尚傳

近世禪林僧實傳 目錄

〇三

豐後陽見寺典宗和尚傳	讃岐法泉寺綾洲和尚傳
筑前聖福寺愚溪和尚傳	大和達磨寺長沙和尚傳
備前曹源寺大仁和尚傳	美濃正眼寺泰龍和尚傳
伊豫 超首座傳	脫首座傳
山城興聖寺關挾和尚傳	山城玉龍菴天真和尚傳
信濃龍門寺迦陵和尚傳	
比丘尼	
駿河 惠昌尼傳	播磨不微菴宜詳尼傳
山城西來寺見泥尼傳	河內水月菴智教尼傳
河內水月菴純圓尼傳	

優婆塞

駿河山梨了徹居士傳	駿河阪自洞居士傳
駿河古郡兼通居士傳	攝津春日願居士傳
紀伊伊達自得居士傳	土佐奧宮懺齋居士傳
武藏山岡鐵舟居士傳	
優婆夷	
駿河阿察婆傳	駿河原驛婆子傳
駿河杉山政女傳	駿河茶店婆傳
山城河內歌女傳	

近世禪林僧實傳 目錄

〇四

近世禪林僧寶傳卷之上

退耕庵主獨園撰

至道菴無難和尚傳

師諱無難。字至道。嗣愚堂國師。潯州關原驛三輪_{或曰}和氏子。幼達草書。鄉人呼爲假名書童子。資性篤敬。內含穎利之才。歲及志學。隨父遊于洛陽浪華之間。觀世變遷。早悟無常。苦空及無我理。竊慕教外別傳之旨。家無繼嗣。不果出家。本志遂受父祖之業。司驛事。于時大仙愚堂國師往來京師。次師請于家。生近世禪林僧寶傳 卷之上 ○一

難遭思。親問禪要。國師見師純素朴直。示以本來無一物。句。師於是大生疑團。潛參密究。殆忘寢食。國師往來必過師家。數加勸勵。師一日緇錢買索。失手多回。功不成。用國師熟見竊語。三三子曰。參禪若到這箇田地。見性何處之有。後果透徹心源。國師便付劫外號。其辭曰。三輪道時居士者。濃陽關原人也。曾是見諸禪師。扣問大事。久而無入處。退而自參。自竊久矣。一夕忽如夢醒。疑情頓破。今也就余請別見字之。曰劫外。仍賦小偈一篇。祝遠大云。爾造化何曾論。功用無根樹上著。花新非紅非白。呈祥瑞。未必人間有。

此春從是國師以惡斡手痛施。向上鉗鎚。師思脫塵累。誓盡餘蘊。順逆用處常求其便。國師一日應侯伯之請。趣武陵次。因過師家。偶逢師不在。家人謂國師曰。家主比來嗜酒過度。上下日疎動欲離散。願和尚大慈大悲。痛加方便。國師應諾。便設酒樽於席上。待之夜深。有扣門者。家人曰。斯卽是。願見其作處。國師窺之。當師跨門。醉狂惡發。終罵男女。誣責上下。席之衆見聞。皆厭國師。便出口。家主好在。耶老僧待久矣。師見。驚曰。和尚何得恁麼。便延國師。請于上席。禮拜。國師曰。老僧這回因事遠往。茲設樽酒。欲盡永訣。近世禪林僧寶傳 卷之上 二

之情。可哉。師笑曰。深荷洪恩。國師便命家人設宴。賜師于滿杯酒。師欽頂受之。國師且色曰。吾聞汝嗜酒過度。動失人之情。老僧今夜許汝沉醉。汝若有丈夫之志氣。乞盡末後之醪。向後無再爲。師誓首曰。是弟子之所願。老和尚莫忘。此語。國師大笑。終夜清話不覺至曉。及國師促駕。師卒出相送。數里。國師見師忘家遠。隨告之曰。汝可歸去。恐驚家族。師曰。我有繼嗣。豈足慮。家師不備行裝。不貯衣資。驛驛護駕。戀戀隨行。國師數諭不顧家鄉。遂到江府正燈新寺。卽日截髮洗淨。鬚髮自跣。國師之前曰。我久求使幸脫塵累。

出家時至。賴此哀度。國師笑令得度名。以無難。從是奉侍。國師左右。最參慕。請一日透得。至道無難之語。徹見。趙州云。實一大老。用處。依是國師。又授至道庵主之號。并平生所持拂子。以顯別有生涯。須曰。案祖自曾著信心。詞花言葉盛。叢林那邊何用。弄文章。寂寂寥寥。互古今。又曰。三祖著銘呼信心。唯嫌揀擇。占猶今。渠儂行底。與他異。山是自高。海自深。于時慶安二年。師茂四十有七矣。後來遍扣諸方門庭。搜索禪味。或遁山林。勤德養道。共辛鍊苦。修最時輩之所不及也。昔東陽和尚久侍雪江禪師。商畧夾山百則公。

近世禪林僧寶傳

卷之上

三

案其所記。寫之正本。相傳至愚堂國師。國師久藏。愛中。亂味不止。晚見師有過量之機。密付囑之。師禮辭去。住武陵麻布東北庵。在柳田古姓町。後改東北寺。自稱至道庵主。羽州米澤太守上杉氏濃州加納太守安藤氏同新加納主。坪內基甲等。皆執弟子之禮。師庵中不拘繩墨。不貯衣具。門庭峭峻。宗風孤危。衲子望崖而畏。師性不通方。莫與時合。不假文章。不拘繩墨。一生廉謹。不求榮名。言行簡直。自有上古之風。愚堂在世時。曾愛師。見識超卓。呼以無難和尚。從是時人尊為通稱。執政大久保加賀守忠朝家有靈崇法祈神藥。雖

盡其術。世遭火天。忠朝聞師德望。拜請乞救。師即於白紙上大點黑餅。與之靈崇。即息矣。依之大相國源綱吉公侍局貞松院禮師為尼。并大夫人淨光院侍女及女官相傳受。師教化者不勝數。江州朽木京極修理大夫依貞松院長元尼公之勸諭。請宰邑普門寺。晨昏問道。尼公長元。字心操。本出京極氏之門。依之。論先哲兼給。鄉黨親屬敬思。住不幾。又歸東北。上杉氏息女投師為尼。受松嶺院之名。後創興禪寺。請師化導。攝待尼眾。寬文末年。參學諸士相地於澁谷鄉。再創建禪河山東北寺。請為開山始祖。祖師好朴古。不欲主之便。舉正受端首座。端

近世禪林僧寶傳

卷之上

四

又遁信陽時。有愚堂國師末後弟子慧水首座者。潛隱久在府內三田師招之。代為第一世。後嗣全體道號洞天三住。妙師則居別院。以至道庵主自稱。延寶二年春。移至道庵於小石川。居三年。令工巧彫刻肖像。并以平生所持拄杖竹篋法衣鐵鉢及國師所傳拂子。留在庵門。令弟子丹瑞守護。同四年丙辰八月十九日。無病。蛻然坐脫。世壽七十四。法臘若干歲。弟子等奉師全身葬東北寺。親受印記。傳師正眼者。但正受道端。端禪師一人而已。次有四庵主各受密記。隨分主化。所謂祥山丹瑞庵主。一。光應一外庵主。住谷中。出融。

圓徹庵主居極樂水庵明通清鑑庵主全道庵是也其外僧尼士女之親受師誨勵入道者不可勝數

正受菴慧端和尚傳

師信州飯山侯松平遠州諱某庶子也年十九投往戶麻布東北菴無難禪師薙髮隨從歲久且夕參尋不懈竟究菴奧後往東奧參虎哉一源等諸老數年復歸生戶再謁難公難公意欲令師繼其法席良嘯之師辭曰弟子不德不堪住都下之院專欲隱山林以養道體難公不許師固辭歸于信遂就梅澤幽遠處誅茅結正受菴示衆曰夫正念工夫之端的未悟

近世禪林傳

卷之上

五

入者切須見真正導師決定願心既得決定去十二時中四威儀之間須以正念工夫不打失爲第一不見大慧禪師曰那時是打失處那時是不打失處於一切處如是點檢焉此是從上諸聖正念工夫親切樣子乃萬古不易之正修也佛法中雖醜陋卑賤之小女而正念工夫無間斷者爲精進堅固有力大人設令有七八身材而逞身子滿慈智辯無正念工夫者名爲臭爛膨壞死人汝等切莫容易去寔難保難持者正念工夫大事也澆李弊風人人惟名利心熾雖間有現道相者而正念工夫決定之人則實難得

矣況求正念工夫相續不斷之人乎老僧十三歲時始信有此事十六歲打破娘生面目十九歲出家隨從無難禪師觸他毒手者幾乎十餘年矣却後適居此山今既向七十中間四十年拋下萬事杜絕世緣專一護持將來茲五六年來纔覺得正念工夫真箇相續若其追從檀那諸媚施主希望名利貪求財穀而欲到佛祖境界者寔可笑而已佛成道拈香曰六載凝神窮苦身凡愚不識解心眞明星見了有何事亘古流今累幾人其盡巧勞心設化城六年端坐不輕輕後來莫認總閑事今古明星輝五更其其達磨

近世禪林傳

卷之上

六

忌曰千古儼然相未泯威風凜凜祖師神誰言隻履歸西去霜染楓林面目新其隻履西歸幾許年諸方風色暗寥然玄冥霜後楓林曉處處爭朱一樣天其享保辛丑十月六日平旦跌坐書遺偈曰求後一句至急難道言無言言不道不道擲筆呵呵大笑而化世壽八十法臘六十二弟子宗格奉全身葬於正受庵側後至寶曆己卯二月鶴林老漢昇師法位於妙心第一座彌道鏡慧端禪師

松蔭寺白隱和尚傳

師諱慧鶴字白隱一字鶴林駿州駿東郡原野人俗

姓杉山氏鈴木三郎重家之通稱也。師幼類異勇收觸事不沮。甫十五。拜單微傳公落髮受戒。單微資性大度。有越格量。剝除師髮了。打師奔一下。曰。梵儀可正守道了。便授法名德源寺東芳。以偈祝曰。善哉真出家。悲喜佛與魔。若欲成斯道。莫忘三願摩。師誓曰。若不。獲肉身而火不能燒。水不能漂。底之力。設死不休。無幾。待息道于沼津大聖。二十歲。抵濃州增木瑞雲。從事馬翁。時方曝書。登堂覲之。則內外典籍積堆架上。師進禮拜祝曰。儒佛老莊諸家之道。我當以何爲師。謔法人龍。願示我正路。瞑目默禱。任手把着。得

近世禪林僧實傳

卷之上

○七

一小冊名禪關策進。頂受披之。卽摘着引錘自刺之。章其首書曰。昔慈明在汾陽時。與大愚。鄒。等六七人結伴參究。河東苦寒。衆人憚之。明獨通宵坐不睡。自責曰。古人刻苦。光明必盛大。我又何人。生無益于時。死不知于人。於理有何益。卽引錘自刺其股。師聞至此。發宿習智。生決定心。以策進爲日進之銘。明年春。辭瑞雲依南禪于洞戶保福度夏。秋辭保福。滿萬休于靈松。復去依大巧于伊自良。東光坐臘二十三歲。抵備後福山。正壽終。正宗讚會。而結伴東還。行參狗子佛性語。路過備前岡山賊。同友爭語。城池壯麗。

風土勝概。師獨謂我道未成。何暇事此遊觀。瞑目不視。沙人播州。宿一山寺。見溪流有感。詠曰。山下有流水。滾滾無止時。禪心若如是。見性豈其遲。辭而上途。一友有病。師爲之代。負其擔包。一友又囑曰。我太困矣。公肥壯多力。盍扶我。師不忤。乃令三包子搭起。略無雜色私念。曰。願依此微管。力速遂。見性素願。以杖卓著。步步參詳。無字。行至兵庫。買舟。一舟人皆對月談笑。而師則卽包子息息甘眠。及一覺。開目。則船方在津口。遂問舟師曰。猶未解纜耶。或泊中途耶。舟師罵曰。咄。箇賊眠漢。昨夜同發。兵庫者。凡十艘。忽遭颶

近世禪林僧實傳

卷之上

○八

風往往皆覆沒。我船幸獨得全。其漂落中。一船驚情。前神念佛。我亦斷誓誓海神。危險不可言焉。而子獨偃臥不動。鼻息鼻鼻。我經海上多年。未曾見如子。膽大臭禿奴也。師聞之。始知前厄。驚起視之。衆皆以巾抹額。面色如土。相枕藉而臥。呻吟未已。嘔吐狼藉。師卽合掌曰。剎諸聖。擁護獨免此患難。後以此事誦徒第曰。陰德陽報。果不誣也。汝等幸勿惰於苦行。年二十四。抵越後高田。英巖。聽性微和尚。講人天眼目。寺後有先侯墳廟。師每講餘。必坐于茲。日夜研究。動履寢食。自是臨聽。講聲不入耳。登堂受食物。不進取。

見人如陽焰浮。願身如在雲中。譬如水晶世界。森羅萬象皆成。明徹都無一點瑕翳。尚奮起精神。不著所現境界。單單提持。如荷重擔。而登峻嶺。十二時中。四威儀間。本參話頭之外。更不雜異念。經十餘日。一夜恍然達曉。乍聞遠寺鐘聲。微音繞入耳。則徹底剝落。根塵恰如擊浩鐘於耳側。豁然大悟。即大叫曰。巖頭和尚。萬福。現在在。現在在。徑走見性徹。呈所見徹。機語不後。師與一掌。便出。由是大負擔。所見並吞諸方。自思。三百年來。未有如余痛快了徹者。時有一僧名曰宗格。面目嚴冷。願視非凡。人皆錯爲。膽大輩師。既近世禪傳寶傳 卷之上 ○九

異之。又聞其言多妙詮。因與之討論。宗旨。格曰。公誠超卓也。只惜有到有未到。公若見吾老漢。必有可觀事。師叩其人何如。格曰。我本信陽人。州之飯山。僻邑有一庵主。名曰正受。端首座。恩堂之孫。而至道庵主手度子也。專提持宗向上。一著我綱。他毒手多年矣。師聞之。欲徑遠見之。格曰。我亦思公器識堪受。德鍾鍾然。庵主門風。只要真正。種草尤惡多。衆鬧熱。必莫伴人。師乃待散筵。單身與格俱抵飯山。先是師自持得道甚易。格洞察其真高。因誠曰。且須看傳燈錄中諸祖行實。師試閱初祖傳。讀至曰。七歲出家。得道尚

侍般若多羅二十年。而盡其蘊奧。乃惕然猛省。慢心稍滅。發增進智。至是師隨格至正受庵。始見主翁。呈所解一篇。翁左手握偈曰。這箇是汝。學得底展。右手曰。那箇是見得底。師曰。若有見得底。可呈。須臾。便作叩叩聲。翁投曰。趙州無字。作麼生。合。師曰。趙州無向何處著手脚。翁以指扣師鼻頭曰。嚙。多少著手脚了。師於是通身汗流。慢幢倒了。一日出分衛。立家門。家婆曰。過別處去。師恍然立。婆怒拈大竹帚曰。此漢道去。尚在此。踟躕耶。便打。師釋然領悟。古人言。從前挾手脚不得底。尙葉團圓。疎山壽塔。因緣。南泉遷

近世禪傳寶傳 卷之上

○十

化話其餘難透深旨。一時皆現前。欣然還來。將入門。闔翁迎見。輒贊曰。汝已徹矣。師侍翁左右。刻苦精勵者八閱月。餘竟至蘊奧。年二十九。是春值單微。先師忌齋。消炷拜曰。日域眞丹。及月支。東風吹轉。百花枝眼前多少好春色。盡是先師醜面皮。是歲抵勢陽。建國。預長海和尚。虛堂錄會。又聞若之鐵堂久。參石院別有長處。往侍鐵堂于圓照。夏終。辭之。往河之法雲。謁慧極。享保元年。師年三十三。諸檀謀於同門尊宿。及清見和尚。便以正月十日單微。先師忌齋。整入院之儀。此時松蔭顏廢不可言。上漏下濕。室如懸磬。

至堂中晨執事。有一老僕拾薪採菓。供晨昏一
僧來侍。每日乞食。助給師一日。見其僧面色憔悴。感
歎曰。嗟呼。吾子爲我勞。至此。願堂中無一物可酬。
奈之何。乃爲之特講授。大慧書。明年轉位於花園第
一座。羣客二十人。結伴乞掛錫。師固辭不許。衆皆掛
列庭下。切請數日。師不獲已。許之。便講大慧書。惠山
退耕鐘山和尚。之良哉來參。五十六歲。提唱虛堂
錄。閱衆四百餘。龍潭通爲首座。安養潭爲副貳。三之
歲爲一位。豐後之譯來參。桃隆共在會。師問卷示衆。
曰。欲會息耕維毒海。參味山壽塔。因緣可謂十利斷。

近世禪林僧寶傳

卷之上

○十

贊索脚著一錢打兩錢。乃曰。我雖是禪門宗師之糟
粕。若自破叢林放蕩不羈後生。加毀責痛棒。快事者
照顧著。這是道。假冠于天下。江湖飽參銅頭鐵額。併
集于東西三四里間。山林樹下。爲庵居修禪場。六十
一歲。起甲之自得維摩會。請衆三百餘。思譯司事。
開卷。非佛誕生偈。曰。庵羅園裡。日流傳毒飯。倒懸破
性天。三昧現前。真解脫。一花照發大千圓。六十七歲。
願請于備之岡山少林。講川老金剛經。次到甘肅寶
講。講四部錄。歸路過不安城館。世繼氏池大。其來參
及度。大橋氏女。尋復登華園。講碧巖錄。于安海寶鏡。

光照兩公主。泊皇女清淨光院。濟儀臨會。集室一位。
冷泉黃門陪侍之。六十九歲。赴甲府。能成。請提唱人
天眼目。衆三百餘。會中特分開。五家宗要。令學者
參詳。會畢。赴東光。講演毒語心經。此會修。正受老人
三十三回。思應便自攝老人。頂相以香。語堂贊曰。敬
倒天源。滴流飯山深處。使人愁。嫉妬如火。難掛出。
留處兒孫結。定離七十一歲。赴龍津維摩會。請大極
越松平防州侯。日臨聽法。敬信殊篤。明年春。在松蔭
講楞嚴經。有開筵示衆。夏四月。州之高林。設大應國
師四百五十年忌齋。請師拈香。併誦唱。國師語錄。合

近世禪林僧寶傳

卷之上

○十一

衆二百餘。拈香曰。舉大應國師虛堂忌拈香曰。建長
興。這老和尚相隨多年。面面相覷。眼眼相照。所以一
年一度。燒一炷香。點一盞茶。不作揚岐女人。耳雜荷
從來出鎮州。伏惟祖師正好供養。血滴滴地。唯恨露
柱掉頭。不說天下之車。莫不由轍。而言車之功。轍不
與焉。七十六歲。應請於龍津新道場。講息耕錄。會普
說。兼成開山之儀。衆一百餘。箱根山金剛王院。除山
大和尚發帑賑濟。一會八十歲。舉大應錄。顯揚東海
日多遠人。懸記。清衆七百餘。大衆龍津。菩提樹大蟲
及草津。圓慈慧牧等。俱執內外之事。清規森嚴。道行

之盛。不多談。古焉師年八十四優遊。河西大衆出井常圓。或三日或五日隨其心所欲以行法施。其在常則勞倦劇甚。一僧勸師曰。宜暫緩法施。以自保。師弗肯曰。知道俗之飢何。十一月還松蔭。衰病愈篤。十二月初六冬雷震。于松蔭。一衆悚然。七日醫古郡民來診。師脈曰。脈微無大異。師呵曰。吾死將不出三日。而猶不知其兆。豈可謂之良醫。古郡但僂首。山梨翁過訪。與之對局手談。一兩著而休。十日在臥褥。召徒弟遂翁委囑。後事十一日晚泰然眠臥。俄而大呼一聲。右脇而化。十五日津送。以疾風暴雨不能赴。火臺翌

近世禪林僧傳

卷之上

十三

日乃火浴。獲舍利無算。遐邇雲集。因分塔于三處。遺弟能嗣法者。爲夫龍松東嶺慈遂翁。虛果巖元。白衣執弟子禮者。不知其幾何。法幢之盛。前古所希。觀五百年間出之言。洵不虛也。後櫻町天皇特加褒章。賜諡曰神機獨妙禪師。時明和六年巳丑六月八日。也有語錄十卷。名曰荊叢毒藥。自餘機安國語。問提記。聞息耕錄。開筵普說。寒林貽寶。寶鑑貽照。及假名法語等若干卷。多行于世。

高乾寺月船和尚傳

師諱禪慧。字月船。奧州田村郡小野村人也。幼投高

乾院。北禪濟老。落髮受具。既長。游歷四方。嗣法。東溪門公。後住高乾院者十年。許去。寓武州永田。東輝庵。自是深自緘晦。混迹村民。凡里中子弟之可敬者。文與道學。各因其志。尚而導之。使其不知不識。歸依佛法。於是江湖雲衲。欽慕其德。陸續四集庵中。不可復居。則於其隣近三四里間。借民屋牛舍等。日夜參究焉。物先誠拙等。即其巨擘也。師在東輝者凡三十四年。天明改元六月十二日。安然而化。世壽八十。

大光寺古月和尚傳

近世禪林僧傳

卷之上

十四

邑瀨川氏夫妻。歸敬文殊菩薩。祈生男。其婦一夜夢有童子。與笑玉而嚙之。已而有身。寬文七年九月。果生男。即師也。七歲詣同邑瑞光院。習學。梵唄。父母一日造詣松巖寺。棟一道觀。一道禮容肅雍。大師依之。乃令師事。一道師幼而嬉戲。異群兒。十歲自求出家。因託一道剃髮。染衣。後一日讀楞嚴經至。汝修三昧。本出塵勞。嬌心不除。塵不可出。縱有多智禪定現前。如不斷淫。必落魔道。大感激。乃跪拜佛前。祈誓曰。唯願我盡形壽。不改初志。堅持佛戒。不敢違犯。願慈悲哀愍攝受。年二十三。聞阿之慈光寺。洪梁巖爐。備最

熾徑往受陶鑄。一日巖命作禪燈偈。偈曰。光明照破
盡乾坤。這裡何人著。議論四七二三。直吹滅。今來古
往暗昏昏。巖一見稱尊。師不自是。竊嘆曰。高峯妙禪
師。自立死限。究明已事。我思古人爲大法。故頭目髓
腦皆而不惜。我何人敢愛。斯身制了。往後多福寺
見悅賢巖。日夜參究。不迫寧處。二十七歲省本師及
父母。復往多福寺。寢食共忘。脇不著席者數年。三十
三歲。黃藥山佞千獸。開三壇戒會。以授四衆。此時師
乃登壇得戒。圓具三十四歲。應紀之禪林寺柏大洞。
請講楞嚴經。一會徒衆諮決疑義。師爲之剖析摩遺。

近世禪林僧寶傳

卷之上

十五

三十七歲。復應紀之禪林寺柏大洞。請誦碧巖集。
解制後。寓同州海藏寺。偶見他書云。寫大般若經六
百卷。功既終。深諦信。般若甚深旨。自發書寫。願三十
八歲。法兄英山。馳使責師。以不提挈。先師遺綱而徒。
跡。師不得已。歸大光寺。主補局。再建山門。重新板航。
庵。竭力經營者。幾平四五年。百廢具舉。四十一歲。承
島津惟久公命。視篆于大光寺。尋新結一庵。師知又
軒。以爲終焉之所。四十三歲。值檀越宗恕居士一百
年諱。設大齋會。誦唱金剛經。以修冥福。四十四歲。始
就書寫。大般若經。業得助筆三十人。越二年。畢功。師

近世禪林僧寶傳

卷之上

十六

又有求大藏經志而未果。會有妙句尼爲亡夫助此
願。諸檀亦喜捨淨財若干。已而全藏六十函及傳大
士二童之像。具備附載。華舶至日。向尼請造經藏。師
不肯。及懇請不已。乃從之。有傳大士開光偈。口忘却。
率佗官裡。樂變林樹下。坐高臺。匪唯古佛襲身。影無
數。天龍擁護。來五十二歲。稍爲退居之計。惟久公聞
之以。廩米五十石。山林若干。寄附其知。又軒明年。師
講梵網戒經。善諭士庶聽衆。日加往往。有悔過改業
罷漁獵者。五十四歲。竟退居。知又軒而不許。女人人
門。明年。應備之鳳源寺。請結制。令秦愚極講梵網戒
經。師主參禪而已。清衆三百餘員。又應甲之慧林寺。
請冬制。講圓覺經。清衆四百餘員。會終。赴于江府。謁
惟久公。公迎宿於別館。厚加待遇。師歸。延岡侯遣使
請師。師峻拒不從。也是歲。有惟久公命。重修。知又
軒。十一月落成。時有一百餘衆同慶之。師有偈曰。時
人知又否。松徑遠。禪關步。屋三間。空神光。萬境閑。朝
曦晴。浴浪烟。靄暮。繚山何管。非和是。偶諸自解。顏公
改軒爲寺。新建僧堂。其餘殿堂廊廡。稍備山。天。寺
寺。稱自得。以師爲開祖。叢規整嚴。全依大檀越之外
護也。後三年八月。寺遭回祿。諸堂灰燼。所存者唯僧

堂未幾諸宇成復興更勝於舊觀亦依外護力也已而師自用衣鉢餘資構小室於天壽山廟曰骨清堂隱退于此時年六十七矣令弟子禪興董自得席有退隱偈曰三十年來立化城無過賓所接群情累思寂室好言語死在巖根骨亦清七十三歲創建自得寺山門先是惟久公逝師自得寺殿至是嗣子忠就奉先公遺命爲喜捨淨財并良材是時筑後久留米有馬賴種侯亦禮師有興建一寺以師爲開山之意使朝日寺主教請師師笑曰命在旦暮何恃敢奉命乎寺主曰師如不諾余不敢反屢請不已師乃強從

近世禪林僧傳

卷之上

○十七

之七十八歲是歲正月始往久留米從者十餘人及入久留米界遇遇男女老幼競走拜瞻者塞途邑吏及官吏謁之師深厭之臨城市則道俗迎于郊導到梅林寺而館焉大夫及有司來謁見賴種侯亦或入寺聽法或迎師于城中履待親給菜具師在梅林寺說法三旬餘侯命有司備四供養清衆二百餘員士庶翕然嚮化者不可勝計二月廿五日到十三部相地定寺基山曰慈雲寺曰福聚有偈曰祇林繁衍慈雲濕福聚無量鎮國家插草先看萬年兆松間瀟發白桃花祈禱終而給嘉膳忽有甘露降師膳者三滴

結成小顆其色如銀錫有司取獻于侯侯以爲師高德之所感焉侯命匠工寫殿堂圖命畫工寫師容貌師將歸侯厚贈之從者等皆與焉大夫及有司來別謝海既發梅林有司送之於寺於郊者步騎相接咸盡敬禮而別師既歸侯使小臣於日州厚賂不絕師亦屢馳使僧於久留米侯引見使僧親詢安否畢賜饌于梅林亭加以時儀侯又使裱畫師畫像二幅置一於自得寺一於福聚寺命師自讀八十二歲應薩州大龍寺請使眞翠巖代講臨濟錄師唯主參禪清衆二百五十員八十三歲應志布子大慈寺請二十

近世禪林僧傳

卷之上

○十八

日間法施預修開山佛智大通禪師四百年講已而歸骨清堂時福聚寺經營略成是歲十月師到梅林寺侯厚待如前日侯又定福聚寺寺祿爲二百五十石手自取印書授師其餘莊嚴器物悉寄附焉十二月三日師奉侯命入寺開堂演法咸依古例侯族有馬右膳代侯門迎官吏臨監厨吏營辦齋食諸山來賀侯以使贈毘布十把方金三顆爾後凡百循叢規八十四歲應長州長府侯請乃與麟泊天梅林住持結伴詣太宰府天滿宮自小倉渡海入長府藩上及有司郊迎到日賴寺住持圓梁雲屈尊爲侍者贊佐化

儀法施一七日而歸。再經太宰府。城得聖廟一小石。以反爲福聚寺鎮守。師用衣鉢餘資。構小室於山內。扁曰濟松軒。有偈作偈曰。溪山松老幾千株。茅屋扁題稱孤呼。四顧眼青蒲席外。休論境致說之乎。有馬家曾獲迦羅國所造釋迦迦葉阿難三古像。以爲福聚寺本尊。安坐供養。師有偈曰。西天此土現金容。紙化二尊振正宗。不用兔毫點雙眼。薰風吹起萬年松。造建僧堂。扁曰選佛場。麟滔天再建。化龍閣既落。請師三日說法。八月往日州。修先侯自得寺殿十三回。諱師竊以謂。當葬其骨於此地。忠就侯亦有投轄之

近世禪林僧寶傳

卷之上

○十九

意。時賴種侯在江府。遙察薩侯留師之情。命國老令迎師。師領念其禮厚信深。不得已告別而歸。妙心寺馳使僧勸請於師。視家妙心賴種侯亦勸之。師謝曰。德薄躬衰。豈願費千金莊嚴。臭骨乎。吾寺以黑衣爲上。是余之所希也。竟不從。翌年二月。歸福聚寺。黥眼草庵。作天偈曰。金剛寶杵獲。受障樹庫康寧轉二輪。匪啻三洲要護法。國家永鎮。幾千春。四月上浣。示微恙。一日率執事及侍者登東丘。以杖畫地曰。嶺巖已過。餘暉無幾。埋我於此。銘塔曰。寂照若或分骨于自得。亦可也。大夫聞之。命醫診之。告師病狀於日州及

江府師一日謂侍者曰。我病不復起。服藥無益。大夫聞之。勸藥。師不敢拒。侯既發。江府在途中聞師病狀。馳使慰問。命二醫侍焉。四月二十四日。苦辭世。偈曰。好不唧唧。八十五年。纏身一擲。棒殺青天。書一紙分與福聚。與自得。二十五日。使興梁溪詣太宰府。謝現世護法神恩。午時聚眾。遺誠音吐。不異於常。子時泊然而寂。茶毘。獲舍利十餘顆。光彩灼然。葬儀之間。紫雲東出。蓋之。及儀畢。乃西滅。侯贈白銀二十錠。次日使來贈香華資銀十錠。其禮遇之厚如此。

松蔭寺達翁和尚傳

近世禪林僧寶傳

卷之上

○二十

師野州人也。舊名慧牧。後改元盧。性嗜酒。卓犖不羈。年三十餘。始見鵲林。林見其志氣不凡。痛下鉗鎚。師參禪室。必於深夜。人無見其蹤跡者。在鵲林門下凡二十年。昂昂藏藏。陸沈衆中。庵居葦原西青嶋。去鵲林居三十餘里。非講日。未曾入鵲林之門。講了。亦即去。一日林召師侍者尋之。不得。或云。牧既去。侍者追及之。告曰。和尚召。速來。師曰。和尚召。我不召。拂袖而去。平素不拘細行。忽略小事。不甚坐禪。不甚看經。居無定處。到處伸脚而臥。一醉以爲快。好茶與酒。優遊自得。其簡傲率。此類也。是以人莫得而測其深淺焉。

林赴衆名天祥請師從之。歸時於七里渡遇石尤風之覆船。一船人皆沈溺。師心以爲身沈于海底數百仞。忽若有人以手捧上焉。已浮于波間。舸舫見而拯之以得不死。遂發病到遠州高塚地藏院。遇夏至秋漸愈。鵠林年八十輪下。龍象與議設大應錄會。師爲副司。時林有疾。強起登座。一會七百衆。比及散筵東嶺。勸林以師爲嗣。住松蔭。林頷之。嶺以告師。師許諾。嶺以偈賀之曰。南嶽三生藏老僧。黃梅七百衆。虛能傳衣事畢。續芳燭。且喜松蔭留慧燈。師於此挂結華圖。自號醉翁。院主問其故。曰。我嗜酒。故號焉。院主曰。

近世禪林僧寶傳

卷之上

〇二十一

不亦甚乎。易醉爲遂。如何。師曰。亦可。因更號遂翁。轉版後涉遊浪華。及臘月歸松蔭。有偈云。明和九年六月旦。微笑塔前攀舊規。臘月歸來住破院。空却紫風一任吹。師不欲與林同居。適于廬原寮居。三年及林疾革。歸侍于側。林遷化。師尋住焉。然不事事。故侯自如。有來參叩者。卽曰。余何識。去。參東嶺竟不出。言以示人。杜口者七年。然衲子隨者常七八十人。有乞示誨者。則曰。參東嶺去。於是大休靈源屢驅苦令師起焉。師自若也。時大休自井山靈源自天龍東嶺自龍澤各來會。將勸師開法以修林之七年忌。師不獲。

已而起。提唱參詳諸要。合衆二百餘。是時師年方五十八。爾來門庭成市。衲子百餘人。庵居東西。從茲應接不怠。赴請他方徒衆。或三百或五百。到處成羣。不憚爲鵠林之嗣矣。丁林之十七年忌。設松源錄會。凡八百餘衆。快言東嶺峨山并來助化。師拈香。瞻曰。七年前胡亂去。到頭未免破沙盆。師謂衆云。快岩和尚辱見。臨此會。他是我老漢時最爲舊參。今夜五舉衆請小參。於此宿諱了。岩登座。謂大衆云。諸大德欲山僧說什麼事麼。堂頭遂翁和尚。日日行法施。使衆厭厭。山僧孤貧。無可以供養。大衆雖然已登此座。豈

近世禪林僧寶傳

卷之上

〇二十二

容緘默而止乎。幸有一件事可以告報。因告以岩與大休初挂搭時事。師應遠州大通請。提唱人天眼目。凡七百餘衆。開筵偈曰。五宗各要到其源。等派逐流吾不論。暗却人天雙眼目。須酬佛祖大深恩。應清見請。講碧巖錄四百餘衆。偶讚岐竺源來謁。曰。有開講偈。則吾和韻。曰。無源因代作。曰。雪上加霜。勸已子錦。上鋪花。呆罵天。強被鵠林知住處。含花鳥在碧巖前。呈正之。師曰。佳。其師又應洛津永明。請提唱五祖錄。偈曰。曾向破頭山下栽。青青千本勢崔嵬。清風十里起。潯去須出松關看一回。散筵後小疾。是夏峨山於

天澤提唱若巖錄師將方戒引衆中之師曰宗盟也遂往歸路中暑六月歸院臥病遂不起凡說法十六年寬政己酉十二月侍者乞遣傷師叱之再乞乃索筆書曰敗壞佛祖七十三歲末後一句什麼什麼喝閉目側臥而寂焉師嘗示衆云古人曰寧失於緩莫失於急我則不然寧失於急莫失於緩又曰汝等莫委委隨隨地有者箇漢如何如何定將去一夕二夕便做了又曰諸方整整齊齊威儀可則我家日猿鼻脚無毛吸汁看經彌左衛門堪作什麼用師令迦大雅指雪竇頌新製山水圖大雅信手揮灑遂林幽石帶雲環水淡然蕭然森森乎蒼莽乎風致極多且錄書其上云國畫當年愛洞庭波心七十二峰青而今高臥思前事添得盧公倚石屏又畫國畫題其上曰聞說不因坊間基天下強皆言無敵手他日空閭士示豆州仙人云爾師因琉球僧某來參示以隻手居三年期滿將還鄉見師涕泣曰某遠凌蘇波來此上以求大法所恨宿習未泯無由發明空歸故鄉呈舊面皮良可歎矣師慰喻曰汝且勿歎第速去打坐七日僧去如教經七日復來曰某尚無所得請師方便師曰汝復去坐七日必有透過分僧去如教經七

日亦復來曰某尚猶無所得請師方便師曰古人得道於三七日之內汝第去夏打坐七日僧既坐念七日無些子得力來請師啼泣歎息師曰我有者方便汝更去坐五日僧復去如教經五日亦復來師曰如何僧曰如舊師曰汝怎麼地不能徹去當急切究將去三日後來徹了即死去其僧到此始捨身命下工夫三日果透過隻手來見師師喜而印之僧辭去後遇嗣法書師嘗曰小杜從我老漢盡奪卻屋裡法財了者東嶺一人而己深徹法源者大休一人而已又曰凡衲子之雖振臂橫行天下者及人我老漢室內直尋一雙脚亂使倆頭蓋何也荆棘參天荻藜滿地進不得退不得是故一向被擄旗奪賊將去免冒而降是無他不得已也他家叢林固有者前棘是以衲子振臂而過其不能絆倒一箇半箇亦宜矣

龍澤寺東嶺和尚傳

師近江人初參古月有箇省處後見鶴林作者數年間盡參得室內事積年鍊苦修遂致重疾百藥無効自謂我雖既究宗趣如一日流死何益乎法門哉因著宗門無盡燈論一編以呈鶴林曰此中若有可採請以貽後若其杜撰連投火中林一見便云是可

以作後世照眼藥。其師遂對鶴林之京掩關。自河邊唯病是養。死亦得矣。生亦得矣。任運自在。以消時日。一日自無心中微見鶴林平生受用底。從是病亦隨輕。安不勝歡喜。馳書報鶴林。林披閱之大喜。即裁答曰。必速歸來。師因速束裝歸。從鶴林林出法衣付之。曰。此金襴衣。我曾服之。四講碧岩錄矣。今以傳汝。其後世莫斷絕也。師頂戴受之。從是師資商榷建立。宗旨五位十重禁等微細旨要。師實至矣盡矣。以故當時鶴林衆中有微細束嶺。大器遂翁之稱焉。鶴林晚年氣力漸衰。師力鞭勵。學者凡晚年從事者。其得近世鶴林傳寶傳 卷之上 ○二十五

力多兩恭。然畏山頑極。諸子往往與師之穿鑿。是以警脫鶴林。遇京師等持請。時年八十四。老病殊甚。令師代焉。師赴等持請。提唱人天眼目。令衆四百餘大振鶴林之宗風。會未畢。而林之訃至。待解制。連歸於蔭。與遂翁俱行葬事焉。師嘗過夏江戶。至道庵講虛堂錄。到乾峰法身三種病。便曰。此一段。因緣實爲格外。今日且置焉。聞峨山和尚解制後來。自永田那時。當講爾。山至師乃講之大異於他日。云師於江戶東北庵講碧岩錄。到第三則舉揚曰。日而佛月而佛。時有柴田元養母氏。年六十餘。在坐下聽之。胸宇爲之

豁爾。講後見師。呈所解。師大喜之。母氏臨終。誡其女孫曰。汝雖幼。宜勉歸依佛乘。何也。我嘗聽東嶺和尚舉日而佛月而佛。一旦開悟。直到于今。胸中無復一點塵滓。即今死去。安然如歸。其復何患哉。汝若不歸依佛乘。非我女孫。記取。言訖。泊然而化。

華嚴寺良哉和尚傳

師尾州人。初參日州古月和尚契悟。後之駿州鶴林。林一見即曰。文殊來也。居數年。深究玄奧。林許可之。師有逸才。好作詩偈。林往往與之唱酬。後往參州華嚴寺。偈曰。維長維短。松千樹。或曲或斜。竹一叢。不近世鶴林傳寶傳 卷之上 ○二十六

許人來。成境會。鳴鐘僧立。夕陽中。又往日州。再謁古月。於骨清堂。月喜之。師呈偈曰。鐵錫不曾誤。再來參陽人事。字良哉。骨清堂上捲簾坐。雨後青山雲霧閒。月和之。師應江州大圓院請。提唱大慧書。問題偈曰。活地錦囊。獅子兒。虛空背上與人騎。太湖三萬頃。秋水一碧渺漫月滿時。是時師始開法。因衆四百餘人。振鶴林之道。蓋鶴林之下。宗師亦多矣。所以師爲其先鳴。爾後應三十餘所之請。終于圓山。宗德寺。鶴林嘗曰。我印良哉。太早。是以彼今不濟。事若待三年。然後許之。則天下無奈彼何。侍僧曰。師何知其早而許。

之林曰吾當時只覺其人之難得而已不覺其人早也。嗚呼。許可也者。宗師家之所當慎。以鵠林之明。尚且貽悔如此。況在他人乎。豈可不慎諸。

麟祥院峨山和尚傳

師興州人。拜三春光顯月仙和尚剃髮。年十六始出游方。直赴豐前謁萬壽虛靈和尚。入室參禪。九旬間得少省處。後見日之翠巖。丹之大道等。參究經歲。凡歷叩三十餘人。善知識他皆不能奈師何。乃歸省月仙於永田。仙亦許可之云。汝莫復他往。只住此間。爾時師自謂人事已了矣。且其間屢過鵠林之門。不欲

近世禪林僧寶傳 卷之上

一七

參見一日自計。我見天下諸老和尚。曾無一箇指摘我者。所未見者。唯鵠林一人。不知他用處若何。因欲見鵠林。以告仙。仙曰。汝勿往而可矣。何必見鵠林。師從之。又住一年。會聞鵠林應江戶桃林請。講魯喆錄。乃思。惟我不見這老實。非大丈夫將決志而往。仙復止之。師不可。直往桃林。呈見解。林詰問曰。汝何處惡知識。取來放。許多惡臭氣耶。輒打出之。師不少屈。遂被打出者三。師自念。我實有悟處。而彼故意推我。比及散筵。一夕在衣單下思惟。彼實爲天下大善知識。豈要浪打人麼。彼必有長處。於是入室悔謝曰。昨者

近世禪林僧寶傳 卷之上

一八

慈掉錯。觸忤和尚。伏乞宥恕。願垂開示。林曰。汝後生家。擔一肚皮禪過一生了。縱使口波波地。到生死岸頭。總不著力。若欲痛快平生去。須聞我隻手聲。師拜謝出。從是始服事鵠林。時師年三十餘。歸告月仙。將往松蔭挂搭。仙亦復止之。師不可而去。參鵠林。凡四年。是時林年已八十餘。應接或怠。師因屢叩東嶺林。遷化後。復歸永田而住菴。後住天澤十年。設虛堂錄會。闡衆五百餘。東嶺遂翁往助化焉。時月仙示寂。永田爲之寂寥。師因退休永田。從學之徒漸聚。愚溪行應。卓州輩相踵至。後再於天澤設碧巖會。五百餘衆。東嶺遂翁亦隨喜焉。又赴濃州清泰。請提唱碧巖錄。凡五百衆。應松蔭請。提唱槐安國語。示衆曰。我昔住錫當山時。輪下龍象成群成隊。禪師沒後。各旺化一方。歲月其逝。各自遷化去。何圖我不肖。今日登高廣座。舉揚宗乘。實可畏懼矣。當今鵠林宗風。幾乎墜地。汝等諸人。努力挽回。真風祖庭。秋勉可歎可悲。有偈曰。月上槐宮三五夜。修行供養若爲宗。夢中拈得梅檀木。分作二分供二翁。二翁謂白隱遂翁二師也。講了偈曰。韶石關臨濟喝。宗風滅卻滿林霜。白狼河北音書斷。丹鳳城南秋夜長。師好浴熱海動。經二三旬。

及晚年衆徒百餘員常隨庵居臘八後復浴熱海時體違和也翌年正月十四日化于熱海春秋七十有一師嘗示衆曰余嘗行脚時遍歷天涯海角殆二十年矣其間參見三十餘員皆知識然他以我機鋒之銳不奈我何末後撞著鵲林老漢遂到三度被他口出平生得力毫髮許用不得爾來服從者三四年矣當是時天下能打著我者實鵲林老漢一人而已矣我不貴他道德尊大不貴他聲名洋溢于四海不貴他見處超過古今不貴他於古人節角諸因緣一一明了——見微不遺毫芒不貴他橫說豎說獅子吼

近世鵲林僧傳

卷之上

○二十九

無畏不貴他三百五百乃至七八百徒衆圍繞如一佛出世但貴天下老和尚不能奈我何他獨能下惡手脚令我二度喫棒我進退維谷我遂了畢大事誠知此事極不容易又曰我從鵲林老漢僅四年矣以他老憊人室時或不協故就東嶺和尚扣之又曰五位兼中至以上我就東嶺和尚質之是時微東嶺竟不能盡餘蘊又曰堪對暮雲歸未合遠山無限碧層層此語莫作容易看縱令透過難透難解參得三玄五位了不能到者境界他口必有分明見得透時節記取又曰我住天澤十年置胡床於丁香閣每夜坐

其上自三更至四更一睡便起鐘司戛木屐上樓撞鐘那時已洗面了著威儀詣佛前殷誦每每如此凡風興抖擻精神誦經罷然後要批撕本參話頭切忌空過光陰而今雖老勉焉不怠何也南禪師云雖老不寧居逸體師昔時在鵲林參疎山壽塔語最苦刻苦久之——口忽然微見不覺手捧香爐起舞後安居依松因念我在鵲林參見柏樹子賊機詰那時自思快徹今而念之未穩在於此單單體究一夕寒颼俄起林木嘈雜山鳴谷響忽然撞著柏樹子賊機趁出菴外疾走四五十步始微見關山肝膽心腸了爾始

近世鵲林僧傳

卷之上

○三十

隨侍鵲林後親炙東嶺是以其峻機妙用大有作家手段接得愚溪行應隱山卓洲關堂五人云

草津和尚傳

師雲州人久參鵲林承嗣家風然其嶮峻十倍鵲林居常接人置白及於坐右人擬議輒揮乃逐之學者往往望崖而退靈源來謁曰丹後慧挑特來請相見侍者報之師曰是鵲林下挑首座也侍者延諸閣上挑著威儀升而相見師纔見其面即曰挑首座相見且止我有一問有大力鬼王捉汝臂投入焦熱地獄汝如何救得挑擬議師即起跳下挑了閣下挑茫然

不知所爲。若威儀之方丈。後架坐經七日。有省。趨登閣。呈見解師曰。知者。般事便休。其機鋒峭峻。大槩如此。

鹿王院靈源和尚傳

師在鵲林年久。日夜孜孜。參究去。鵲林二十餘里。而庵居焉。往來默默。叉手當胸。目不虛視。逢同火者。則低頭去耳。不復交一言。一日同火相聚云。然見似有者。見處不識他淺深。若何耳。一僧曰。且待我勘。佗明日路邊間。桃兄疎山壽塔。因緣作麼生。師只低頭去。是以人莫知其涯際。師患臍癰百餘日。呻吟懊惱。間

近世禪林僧寶傳

卷之上

三十一

透過疎山壽塔。師朴實無文字。唯艱辛刻苦。以故其得力大。超過于人云。後住丹後之全性。出世于天龍。斂手作一方宗匠矣。師嘗將赴京。海門來見之。於途中。門進揖曰。鯁生。提洲法嗣。海門師俄伸手示之曰。我手何似。佛手。門擬議。師一踞踣倒。

快岳和尚傳

師初參古月禪師。發明大事。時井山大休亦同參也。二人相與謂云。我等二人大事成辦。猶在于此。亦無益。縱令一周天下。孰能勝我二人者乎。不若晦迹。熊野。啗胎長養。以過一生。畢爾乃決計。偕與辭古月去。

近世禪林僧寶傳

卷之上

三十二

將抵浪華。投宿淀養源寺。明日見且過壁上題。清淨行者不入涅槃頌云。聞蟻爭搜。蜻蜓翼新。燕並休。柳枝。豔婦。攜籃多菜色。村童偷笋過疎籬。二人讀了。惘然莫喻。以爲大似波斯說謬語。因怪問之。是何人作。一僧云。東來雲衲相傳云。是駱州白隱和尚頌也。於此二人相與議曰。白隱果何人。我等既大事成辦。而不能解者。老漢說話。顧者老漢必有道理。若不見此老。佗日必有悔矣。不如且見白隱去。後人熊野未晚也。於是轉脚東行。直造鵲林。相見。請入室。林許之。師使休先人。休進。纔接。接。卽出來。師曰。汝未入室耶。休曰。止。止。若老漢非我輩所跋及也。汝只去。師入來。呈見解。林有所抑揚。因與往復言論。師理詞遂繁。祇林折倒了。懷慄趨出。謂休曰。我不及也。於是二人偕與抑折拄杖。乞挂搭焉。且相誓曰。我等二人。苟非大事了畢。不去此。師曾謂人曰。航與我利鈍懸殊。航纔交鋒。已知負墮。如我則至弓折矢盡始。被他擒獲。其夜雲山和尚到。雲山亦古月下尊宿。鵲林延之茶話。林曰。此間有新到二人。自日州來。因召二人曰。客是雲山和尚也。汝等始到此間。未知門限高低。我與和尚道話。汝等須侍坐。傍聽。必有一益焉。因共雲山提

授綱要商確古今。徹曉而止。二人聞所未聞。感極而泣。既退。相謂云。不意佛法有如是事也。師南泉斬貓圖贊曰。提起貓兒。撥兩堂。炎天六月。勢飛霜。一刀斬却。三三九。日到西峯。影漸長。嘗以視東嶺。嶺極稱之。師時年八十云。

寶福寺大休和尚傳

師者。山賊國愛宕郡北巖倉村產也。比五歲。諸宗師欲得之。屢乞其父母。皆不聽。師自言。我來歲投禪門出家。六歲以郡之木野村正福庵竺傳應公之求。爲其驅烏。應公安名慧叅。里人欽師前言之。符嘆曰。黃

近世禪林傳寶傳

卷之上

三十三

口兒不食言。載白老應有愧焉。十歲不待誘導。自好誦經禮佛。十六歲。聞應公與人言。父母未生前等。心常懷疑。每得閑暇。只管打坐。衆人乞應公以欲拜象海湛公於東福。應公喜而許之。乃僞往使謁。爾來師常自往。問工夫之要。其途中只管守鼻頭末。曾見長安繁華。誤撞着車馬。爲馭奴所叱者。數次。十八歲會東福和尚。嘆僧堂久閉。關令湛象海勉復古。茲冬重開單容。廣衆乃往挂搭。卽充海師侍藥。一日師欲捨茶。衆往通天橋上。茫然不記前後者數刻。時紅楓纓錦。亦未歷其眼。其工夫純一。率如此。人稱曰夢中

近世禪林傳寶傳

卷之上

三十四

侍者。二十三歲與雄首座同往日州。見古月和尙。呈所見。月曰。子見處果然在門外。若到生死岸頭。無毫分用處。請着精彩。自有打成一片時節。乃舉趙州十二時歌參之。明年夏。在于雲堂侍者寮。將攜茶瓶赴庫院。忽心頭似鐵。覺足如步虛空。時復佇立。清風颭人懷。方其行。撞着露柱。忽然有省。使人室告月師曰。胸中礙壅物。今日方通脫了。月只微笑而已。二十七歲。是秋將與微禪客之南紀熊野。得閑處快談。治口時。聞駭之白隱和尚。頌清淨行者不入涅槃。破戒比丘不墮地獄。曰。聞蟻爭引。蜻蜓翼。新燕竝休。楊柳枝。山婦攜籃多菜色。村童偷簪折疎籬。少怪之。及其微相言。欲欺他去。遂之。駭與隱相見。師知其波瀾浩大。心先驚動。乞挂搭。不許。初且庵居。其隣里後稍稍近之。數乞入室。一朝爲他所逼。授扣頭懺悔。乃取行卷記從前所參得一句一語者。火之。明年隱知師爲鐵漢補侍者職。一日。隱訪雲山老。語次。山謂隱云。碧巖百則中。頌就最殊絕。隱云。以南泉一株花。頌爲殊絕。山然之。師陪侍聞之。苦思深省。情焉不能知。自以爲我參禪日久。而尚未能辨這般親疎優劣。何以爲人哉。既臨歸途。欲通所解而難之。乃尾隨隱後。進提其

杖者二三次。隱知時機。隱魚故意拂之而行。師熟帶至切。器人家。中。路傍。眼思者。頃刻忽然。有者。開眼見。隱既失所在。師走歸丁寺。呈所見。隱證之。師於是乃知。凡百言句。皆有親疎之分。三十歲歸省。應公於是井山。依應公。屢言欲令師住。報恩師亦欲出。以扶應公。衰老遂從之。夕夜坐至更深。開村。大。然。大。國。從前。智見。頻脫歡喜之餘。其翌往見。其。未及。發。一。語。山。便。曰。來。汝。吾。初。以。于。為。北。溟。物。其。自。化。者。有。年。丁。茲。時。哉。吾。不。隱。乎。爾。正。法。眼。藏。今。已。與。汝。了。矣。師。唯。默。默。消。三。耳。已。師。以。孝。聞。道。依。其。行。

近世禪林僧寶傳

卷之上

○三五

可。則。因。自。海。前。非。者。頗。多。師。之。事。應。公。也。夙。興。夜。寐。春。秋。調。和。皆。自。辦。之。而。無。有。少。倦。色。四。十。一。歲。是。春。井。山。還。堂。師。開。揚。藏。會。接。衆。三。百。餘。員。師。為。皆。衣。講。畢。堂。託。後。事。於。法。弟。顯。熬。山。送。衆。分。散。於。門。外。乃。不。回。踵。還。席。直。往。連。島。居。于。德。聚。庵。於是。顯。公。敬。師。坐。主。位。列。法。眷。及。末。派。於。席。下。乃。達。天。澤。和。尚。命。又。令。師。東。上。轉。位。於。東。偏。第一。座。字。曰。大。休。既。而。舉。例。通。聲。於。一。條。准。三。后。前。關。白。殿。下。謁。台。顏。受。厚。遇。夏。歸。于。井。山。行。住。山。式。師。有。法。語。其。山。門。云。大。道。無。門。千。差。有。路。只。是。易。見。難。入。諸。人。如。何。入。得。其。佛。度。云。堯。

巖。堂。堂。萬。德。尊。占。往。今。來。迴。避。無。處。即。今。為。其。不。見。頂。相。上。地。堂。會。乎。不。會。乎。會。取。宜。應。鎮。彈。壇。不。會。尚。須。護。禪。壇。祖。師。堂。云。三。四。五。結。果。自。然。成。嘆。庵。內。人。因。甚。不。知。庵。外。事。在。座。云。超。超。過。如。來。地。叱。座。下。獅子兒。當。面。莫。蹉。過。次。祝。香。鉢。翻。法。云。者。箇。爛。柴。片。秘。在。袖。裡。多。年。今。日。被。採。條。不。免。過。此。上。香。氣。恭。奉。為。前。住。當。山。天。澤。西。庵。老。師。用。端。乳。思。粉。骨。碎。身。何。足。奉。無。邊。德。澤。剎。塵。塵。首。楞。嚴。定。世。希。有。瞻。之。仰。之。億。萬。春。索。語。大。衆。怎。麼。會。取。十。萬。八。千。總。不。怎。麼。守。株。待。兔。大。衆。如。何。轉。身。去。試。出。

近世禪林僧寶傳

卷之上

○三十六

來。尚。界。有。有。麼。問。答。畢。卓。非。記。得。三。聖。示。衆。云。我。逢。人。則。出。出。則。不。為。人。興。化。聞。云。我。逢。人。則。不。出。出。則。為。人。五。祖。演。拈。云。二。占。德。一。人。文。章。浩。渺。一。人。武。藝。全。施。諸。袖。子。試。辨。別。看。若。辨。不。得。看。取。後。件。參。虎。頭。燕。領。烏。背。魚。腮。盡。向。者。裡。納。款。且。道。者。裡。是。什。麼。所。在。不。許。胡。喝。亂。棒。便。下。座。從。此。雲。衲。四。集。應。請。諸。方。者。不。可。勝。數。六。十。歲。是。歲。三。月。師。有。疾。遂。付。傳。戒。相。承。信。衣。及。其。的。的。祖。系。於。雪。大。雲。蓋。以。知。死。稍。近。也。五。月。師。疾。彌。病。國。醫。皆。投。匙。而。嘆。師。獨。安。然。待。緣。盡。六。月。三。日。將。午。舊。參。諸。士。辨。天。眼。慈。浙。潮。機。凌。雲。壽。

無敵猛虎說太雲昌古巖安絕崖門行應蕙海溪注
東明及山中諸尊老並在床側時有傍僧乞木後句
師振威作悅懼色微笑開眼示之乃湛然而坐化世
壽六十法臘五十五嗣法者十有一人

天倫寺圓桂和尚傳

師初事鶴林深得宗旨其應機接物循循善誘是以
松江士大夫皆仰之比之於菴津之平生怒罵呵咄
動罵辱士大夫迴殊矣妙喜曰余嘗同二師風采於
雲州某僧某曰雲人之貴圓桂和尚也到今不衰焉
而呼菴津但以一宇圓桂之上足頓上座亦參鶴林
近世神林僧寶傳 卷之上 ○三十七

勝光寺環溪和尚傳

師參鶴林丁大事後住勝光講碧岳錄一會百餘人
示眾曰黃葉啗酒糟漢語須若自己口唱出始見黃
老漢云黃葉啗酒糟漢語須若自己口唱出始見黃
葉肝膽心腸吾以爲不齊見黃葉肝膽心腸亦與鶴
林老漢相見諸子勉勵師在鶴林口曾作侍者一
從容問曰師行脚時覺有奇怪乎否林曰昔者我庵

居溪陽一日登山經行有一磐石人可坐十餘人余
試座其上田父遙見之大呼云其石有神觸則必祟
焉余聞之即下盤桓于林間晚歸坐于草庵比及二
更忽聽足音蹶然自山後躍出庵前其勢欲壓草庵
又大叫曰鶴公鶴公聲震林木余諦視之有二人
帶而上出屋上不可坐見只睹其下半身而脚之人
如口師問怪遂如何林曰是日我太疲不覺撞眠覺
後開眼香煙已斷怪物亦沒矣

廣嚴寺悟庵和尚傳

師者古月王尊宿也晚依鶴林以二師年齒略齊尤

近世神林僧寶傳 卷之上

○三十八

祖親狎凡林之法師師必輔焉林意龍潭請師亦在
于輪下夜話焚木屑黃蘗逐聚蚊達曉不倦焉林曾講
五祖錄一日講間忽云我今日勞倦甚請悟庵和尚
代以終講便下座師乃代登座林在側聽之至其失
音處則云悟庵汝過矣師思之良久乃改講林曰是
是後師於廣嚴設五祖錄會林亦隨喜云

自性寺提洲和尚傳

師伯州人天資穎敏學綜內外外典唯於易水通因
欲之江戶就儒者質之路歷鶴林之門以爲他亦天
下大宗師因入見之林曰汝者回何處去師曰江戶

曰何爲曰基識外典未曉易理將就諸講習之林曰
易之爲理也苟無見性之方則不能解也汝益且留
此間以圖見性汝若見性我爲汝講易而曰唯命於
此往搭夜夜參究果了見性大事遂服侍之十餘年
編成前叢毒藥後住豐前自性寺大開結繩後
學彌令太嚴凡接衆唯以兜率三關未幾戒化遷溪
行應海門芝山松山輩皆受師鉅鉅矣然出其門者
唯以三關爲標則其他細大法門悉皆棄擲不顧云
四人分離透過者箇一生參學事畢矣縱使天下老
和尚是非我我總不顧焉向死守四人分離去妙

近世禪林僧寶傳

卷之十一

三十九

喜曰余其怪之豈以提洲有者般醜態乎他是服事
鵲林有年且爲毒藥編者想詳悉鵲林室內事必矣
豈憐一枚死棺材枯立林下者乎然示學徒以三關
者蓋他接初機一方便門耳古人謂之參涅槃堂裡
禪奈何他早逝其徒早離師是以不能窺探他屋裡
秘訣耳昔者兜率悅公受真淨之印潛遁湖湘偶就
清素扣木後大事素云文之示汝者皆正知見但汝
離師太早故不能盡其妙我今汝得自由後數日許
之悅是時始徹了末後大事是以知參禪極非一朝
一夕之事也後來出世兜率立三關接方來張無盡

頭之良可貴矣然則三關豈果足見兜率者乎余故
云提洲以三關接人饒示初機之一方便門耳不見
虛堂和尚云乎古德教人參禪先要參取涅槃堂裡
禪其間傳佛心宗續佛慧命且置之一邊何故云涅槃
乃死生口要之地眼光欲落未落火風欲動未動
如刀割肉似箭攢心那時要得用萬一余以三關
之意蓋亦與此同然出其門者但以涅槃堂爲至極
而傳佛心宗續佛慧命則求之而不可得矣此豈提洲
之本意乎哉豈提洲之本意乎哉學古察諸

近世禪林僧寶傳

卷之上

四十

常安寺天親和尚傳

師初參古月受他印記後聞鵲林之法道盛遂往而
服從者有年明得其要旨後住周之常榮盛出鵲林
之道他子蟻聚時長候聞師之道譽甚渴仰之便師
移于長之大聖師不獲已就命因兼帶常榮大聖往
來住持自臨七十里涅槃會示衆曰長之南陽之北
七里雲山行路難看充一國黃金佛長夜月明大涅槃
出東嶺屬聖一國師五百年忌結制我唱聖一
錄併臨濟錄一千七百衆遠近拈香曰各竭一燈輝
九天無端滅却時驢邊又看東海扶桑國慧日高懸

五百年復歸常榮師持律太嚴終于常榮

龍谷寺滄海和尚傳

師參鶴林有省亡何之口州住山因結制雲納百餘人提唱臨濟錄散筵之後赴駿州再謁鶴林林曰汝曾在此問麼師曰曩者蒙和尚慈蔭直到今日林曰汝住山得掃除之人麼師曰某不肖客冬過于百餘眾之請提唱臨濟錄言未了林起拈竹拄杖曰大呵曰汝黃口小兒開幾許大口且臨濟錄容易提唱汝更問曰我打殺汝去其怒氣太盛師只叩頭謝罪耳又留三年後退休于播之龍谷山輒湊師近世禪林傳卷之上

海福寺斯經和尚傳

師久參烈林後住海福不好出世闢八幡間福寺居之得片閑遂磨古像乃建達磨堂結一字其側靜坐冥思焉俗子從者十餘人竟成叢社因名江湖遂為自著清規曰是山莫定住持宜請關山派下名德之師為住持但力行叢規莫近塵俗云云

月桂寺大同和尚傳

師人然俊利夙志此道參鶴林有年日猛着精彩忽然透脫超入室林見其面曰汝已得矣嘗參究五位兼中至兼中到不奈何數日困苦一日俄然徹證便急見林林曰汝已至矣後住月桂未幾而逝矣提淵遷化後愚溪失門蹊乃見師問曰而今天下何人可為我師麼師曰關東有箇峨山與我同參云往彼去莫往別處愚溪之從峨山實出師指揮云

龍翔寺層巖和尚傳

師依止鶴林日久後將住信州龍翔因辭林林曰寫達磨肖照以饒焉且贊曰疇風爾茂安天滿口者起屋路加信濃乃雪國邊又畫自頂相與之贊云當下有流水滾滾無盡時工夫若如此見性豈非此頌往年林行脚時宿播州山寺俯見澗流有感而作者云

大梵寺頑極和尚傳

師初在于鶴林行業純粹參究累年每與東嶺峨山相切磋是以其所得極縝密後住播之大梵單丁者二十年晚年俗子相聚遂成叢席未幾而化矣師嘗謂眾曰白隱行業無足取者然到其修行地之穩密求諸古人亦未易得也爾曹宜以魯男子學柳下惠

之法學之又曰如白隱古人亦矣我計閱傳燈錄雖西天二十八祖豈一一咸如白隱哉其間自有出人而已又曰欲識鶴林門風須先於息耕錄問龜普記無絲毫滯礙正明得他屋裡大事又曰鶴林實爲傑出宗匠他以五百年間出之君子自任實非欺負矣

長堂和尚傳

師參古月發明無字爾時鶴林法道鼎盛稍子爭先赴之師亦欲去與之試一場法戰因辭月月曰汝且勿往師不可月月曰汝必怎麼我當作紹介乃以書與近世禪林僧寶傳

卷之上

四十三

師師帶之去謁鶴林時值林人浴師直進見之呈見解林曰汝與麼可謂不虛到此間且休去師那時自謂他肯我林出浴室師著威儀入相見併呈月令書林開紙讀之至曰者小生非無見處只是小量漢請師方便接他便罵曰汝小根劣機若作大事了畢其作什麼用師被奪其所見直下發狂爾後竟小復矣鶴林居恒嘆曰我平生接人極多中間只識策後長堂及某二人矣後師歸筑後住院構小僧獨自行叢規每臘八醵維僧猶兒人僧堂而坐猶兒走出捉之警策曰汝何不從我山中規矩乎打殺猶兒

不知其數然操履靜密以詩終于所居云

圓覺寺劫運和尚傳

師嘗參洞下大梅老漢頗有得處鶴林行脚時曾相識寬保中師特訪林林因把數段因緣相徵詰他無少凝滯林因有偈曰奪命神符法窟牙乾坤失色破天關半生清苦親參決長作信陽九虎關

龍雲寺愚庵和尚傳

師初名祖竹後更我龍宇愚庵丹波國天田郡一尾村產也八歲就龍雲陶外和尚剃髮七歲參見同州法常寺大道和尚知有此事此時日州古月和尙近世禪林僧寶傳

卷之上

四十四

法道方盛師切慕之一夜夢到大光寺十九歲始到日州見其境致如昨所夢始見古月提攜乾屎橛話到三年未得悟入胸中如錐刺有所省悟月領其證更懇示以悟後長養且末後一著子因投拂子後參翠雲與拙堂東嶺梁溪結伴刻苦月嘗謂諸子曰如竹首座誠爲後學模範因使首衆一夜夢白龍因改名焉侍古月殆二十年而辭歸住龍雲院小僅容十餘人法器不備而規繩嚴然常曰三人以上可補法林付與寺事于法弟別結草庵居焉修虛空求聞持法一百座初日所供櫃子自然爆裂又以庵中

樞密二枝誓曰：吾願不虛，惟必不枯。修法了，抽栽，閑地遂生長繁茂。後參見白隱和尚，白隱謂侍者曰：余之得愚庵，猶獲棟梁材也。既歸寺，則拙堂東嶺遂翁、草津靈源諸老屢來訪，勸發接眾。師堅拒，不可。後不得已，開法筵，講五祖錄，接得雲衲二百餘人。五十八歲再往參白隱，隱自畫杖加贊辭，以付與師。師辭而不受。翌年隱為書寄贈。今在龍雲，師一住三十年，不事修造，不貯財器，不徇應接，不露喜怒。年每六十寸，小著襪，不開爐，專甘枯淡，護常住。七十一歲，補住梅林金剛兩利，設大戒會，戒徒五百餘人。眾高師，皆照乞。

近世禪林傳

卷之上

四一五

贊乃書曰：這村僧元勃率柴門戶，門不開，潤色物無泊滴。接應人縱輓，頑去留較絕，憎愛舉措任他。舉訕混紅塵，秋月淨枯白拂，暮雲間。七十一場戲曲終焉，猶未還。七十九歲，梅林檀徒創立一枝軒，邀師師移之。八十歲元旦，有偈曰：八十年間一日程，移居換處，幾村城春風不入老僧戶。白雪滿頭拂，又生其歲十一月示微恙。三日怡然化去。津送于梅林，築塔，龍雲及梅林金剛云。

長德寺龍派和尚傳

師諱禪珠，字龍派，自稱寒松。

寒松翁載在子武藏全圖，相模州田

村人也。姓金子氏，少而敏慧，蚤志心宗，依明之鹿阜三伯翁剃染受具。從此侍翁，下聯句之座者八周，寒暑及長，以翁指南入妙智室，晨參暮請，精勵苦深，究直指之旨。後在利陽亦壇，螢雪繼晷者有年。天正庚寅，北條氏滅後，嗣翁法中興大智之古禪刹。未幾應德川內府之命，兼董野州學庠之席者三十餘年。將軍秀忠公賜朱印，以若干石永為大智寺祿。又許獨禮席，受公帖，領建長寺入寺開堂。西來初祖忌枯香曰：三百餘年古道場，住山愧我不承當。現成面目西來意，嫩桂吹香風。隆慶晚年以老歸養，于芝阜本。

近世禪林傳

卷之上

四一六

寺師博聞，記允，覃意易理。何數年，其自贊省偈曰：燥迦羅眼絕塵沙，撥障吟虛又白些。幻化空身何所似，春風吹露越昌花。寬永十三丙子四月二十日，集眾入室，把筆書曰：八十八年呵雨罵風，乾坤獨步，草鞋踏破珍重，投筆安詳而化。嗣法者不詳。著寒松稿十卷。

東光寺天涯和尚傳

師參見鶴林，後住甲州府中東光寺。維摩經開講，偈曰：超越龍華三會，春庵羅園裡毒花新。淨名把戲生酥味，眼敗沉空滯寂人。悼白隱和尚曰：五百年間問。

出師回光慧日照坤維。意生石壁元無碍。碧落昭昭不靡碑。

天澤菴隱山和尚傳

師諱惟琰。字隱山。越前大野郡伊野原人。杉本氏家。世爲白山神祠祝人。先世實出自泰澄大師。云師年九歲。濃州興德寺禪規進香。白山群兒方捕魚於小溪。師獨在傍凝睇。規異之。夜宿其家。勸父母使出家。父母曰。此兒素非風塵中之物也。遂以屬規。規攜歸山。令從老山和尚。是歲十一月五日落髮受戒。從老山八年。常守師訓。無有忤逆。深爲老山所愛。年十六嘗

近世禪林僧寶傳

卷之上

四十七

自念曰。生死事大。無常迅速。安得悠悠虛度歲月乎。是時越前瑞昌寺萬國和尚。盛唱正眼國師宗旨。師乃往從焉。歷三年。無所得。年十九。聞武州水田月船和尚方住三春高乾院。門風最粹。往請受教。寺中掌事者曰。今制來集。爾子甚衆。是以其後至者皆辭之。勿得挂搭。且子年未滿二十。參禪未爲晚。不如且從他。師學文字。師不聽。固請七日。涕泣至流血。掌事者見其至誠。無他。以告。月船乃延見曰。吾門苦雲衲來集甚衆。是以謝新至者。勿得挂搭。惟汝固請不已。願欲何爲。師曰。以生死事大。無常迅速。故耳。月船曰。我

這裡無生大。無死人復何迅速。之有師曰。唯無生死。是小子從來懷疑處。乙師幸賜哀憫。月船曰。汝後生雛僧。果有意修禪去。參堂可也。於是晨參暮請。無有懈怠。二十一歲。初人制接心。微覺有所得。入室將呈所見。月船見其狀貌異常。便言。不問有言。不問無言。試道將來。師擬開口。月船曰。果然墮在情識裡。言畢。遽打一竹篋。師恍然歸堂。日夜涕泣而已。衆皆以爲狂。一夕定中。忽然見得無生大。無死大。急入呈所見。月船曰。是則是矣。願暫時岐路耳。勿得以爲足。轉進不已。他日自。有生涯矣。自是古人機緣。言句。或頌。或

近世禪林僧寶傳

卷之上

四十八

拈。或評以進。月船轉熟視。置之左右。一無所可否。師以爲佛語祖語莫不通明。二十六歲。是春與儕輩相作。徧參都下及關西諸大老。入室問決。宗旨。老師皆愛撫。莫復施毒螫。師遂以爲益。扶桑國裡。無復明眼宗師。欲還參月船。取道濃州。過見老山。先是老山在興德。命鐵崖伊公繼席。別草梅泉遺趾。自居者十四年。又使風嶺健公主梅泉。更構小庵。其傍閑居自養。已而伊公沒。健公亦因事出院。老山因使師住梅泉。是歲秋。轉位妙心第一座。梅泉舊無檀越。又無莊田。師守枯淡十許年。偶有禪客來見曰。方今永田第二

世我山和尚盛唱鳴林宗旨。實天下第一慧眼也。師聞之。卽日腰包上途。已人都會。峨山在天澤山結制。講畢。巖巢緇徒侍講者六百餘人。師初入見。峨山展手曰。因甚道。手師未及答。峨山又展脚曰。因甚道。脚師擬開口。峨山拍手大笑。師唯茫然而退。明日又入室。峨山曰。今之修禪者。皆容易過去。古人難透諸訛。因緣曾不下。著實工夫。或頌或拈。着語下語。皆任口亂道。去所以住。山後多失道心。直饒無事過去。初不能爲一箇半箇之師。真可憫也。汝果要修禪。從前參得底。悟得底。盡放却去。單單究明。更看得乾峰和尚。近世禪林傳卷之上 ○四十九

峨山大怒罵曰。這瞎禿奴。怎麼見解。堪作什麼用。拈竹篴打數下。氣息將絕。師以爲我道得。諦當云何。思賢至此。意深憤懣。疑團不釋。五月復還梅泉。是秋峨山應聘入潯州清泰寺。又徙梅龍寺。開講筵二十餘日。師前後從在左右。頂之乍知。竹篴下痛打之。候曰。大小巖頭德山和尚。總敗闕了。矣。峨山悅。謂師曰。須知佛法。譬如大海。益入益深。豈得容易看過。師別後。書曰。隱山座元。研究功積。不合。撞着。以師資明底。大事學海波瀾。一夜乾余。不堪歡喜。書以爲證。後又出入相從者七八夏。寬政五年。峨山應聘入。近世禪林傳卷之上 ○五十

步評師此偈云師蓋謂去父母邦之道願絕壁斷崖
真不易攀師住東浦八年殿堂門廡以及鐘鼓咸經
一新鬱成叢林雲衲從居者常不減五十餘人已而
師厭其煩又命經岳座元繼席師應聘結制於江州
總見寺既畢悉散遣緇徒從者唯五人至播磨鹿谷
山中愛其幽寂解包韜晦爲終焉之計衲子來集者
猶二十餘人居鹿谷三年道俗皆歸德與俱經始殿
堂將以爲演法地先是金寶山瑞龍禪寺經年荒廢
諸老相與議馳使請師曰瑞龍開祖入寂已來宗風
不振門庭亦寂寥吾曹不忍坐視其就廢毀師寧無

近世禪林僧寶傳

卷之上

○五十一

意乎於是師又不獲已許其請文化三年丙寅春將
還人瑞龍屬有病仍留數日京都人森見氏聞之遣
使邀請者三五月師入京養病於森見氏九月歸濃
州卓錫於金寶山中瑞微庵瑞微後更名天澤師始
至庵室如懸磬上漏下濕主伴無復容膝處師日與
衲子剔荒除歲勞劬百計始得開新復構僧堂及浴
室其門廡倉庫亦咸備於是祖風大振衲子從居者
常七十餘人五年戊辰夏應西京嵯峨要行院請講
盧堂錄大覺法親王數來聽講是歲九月詔賜紫令
住正法山明年秋又入京修關山國師四百五拾年

忌齋十月詣闕謝恩詔令復居瑞微八年六月應興
請中興鶴慶院命鳳川座元爲之主四年十一月嵯
微恙二十九日書遺偈聚徒屬後事蛻然示化世壽
六十四法臘五十六火浴于鶴棲西北之丘至八月
特詔賜諡正燈圓照禪師嗣師正宗盛化一方者爲
太元棠林雪關顧鑑等諸人凡師所至雲衲常滿堂
法規森嚴其貽後世者最大云

近世禪林僧寶傳卷之上終

近世禪林僧寶傳

卷之上

○五十二

近世禪林僧寶傳卷之中

退耕菴主獨園撰

龍潭寺行應和尚傳

師諱玄節字行應稱棲神叟煨芋子豫州西宇和郡矢野庄大島人并上氏寶曆六年丙子三月廿一日生甫十歲投穴井福高鶴首座學修出世門者二年餘以河之石龍潭田翁和尚卽爲鶴首座受業師因往禮翁遂祝髮十八歲挂錫于豐後錦江參團海和尚時同火兩三輩耳師意誓曰我在于此開扣鐘艾

近世禪林僧寶傳卷之中

○一

艸之役不敢勞他人乃孜孜執役未曾一日而懈海深感其精勤云十九歲抵豐前中津自性參提洲和尚無幾洲遷化海門恪繼洲揚化師又侍之常參隻手話刻苦精進至或忘寢食門令師主副寺察辦不受請暫借近庵接心門許之庵後有一長松師高懸繩爲吊座日夜坐其上欲睡則以手搖樹覺昏神一夜聞自性朝課鐘聲豁然徹見隻手肯不堪歡喜將走呈所見而門未開闔外躊躇之際不覺打一偈有竹樹林間一草庵金剛出來同大座之句安永八年冬東福有開山五百年遠忌師往掛包參天

近世禪林僧寶傳卷之中

○二

猊和尚制終復還中津上副寺者六年一日有事抵知客寮時一僧閱唐詩見師來倉皇掩卷面有愧色其見人畏敬人抵如此廿八歲將東見峩山和尚先抵甲府謁快巖和尚門庭孤危峭峻無人隨得者一日入室巖問柏樹子話有賊機汝作麼生會師下語不契退入薪廠坐到翌巳時打徹時巖從村齋歸來師直入呈所見巖微笑領居一年辭去見峩山和尚手段辛辣不易順受從前所得底總用不着師於是大發憤辛修苦鍊者十二年卒盡其蘊奧山書寶鏡三昧重難六爻以爲印記寬政六年黃潭轉位於本崎第一座九年秋卅之敦豐之誠等來參冬講禪門寶訓衆二百人享和元年師年四十五時宇和島等覺虛席太守欲迎師令往固辭不起三乞四請不能辭明年二月視篆等覺三年春講禪關策進雲衲四百六十人從是應請於諸方者不遑枚舉常隨繼侶或六十或七十寶極叢林一時之盛焉佛誕生偈曰熱處難忘歸來日無端逢此不肖兒雲門一棒非嚴令天地指頭嘴四維達磨忌曰達磨西來乾屎橛指人見性破沙盆山僧活計只這是折脚鑪中野菜根一今古商量難奈何廓然無聖轉請訛吾儂不識少

林事煨芋飽餐睡多。誰謂西歸絕消息。庭前柏樹鬱森森。江村不改分衛路。帶雨往來鐵作心。佛成道日。拈出爐邊。發舊病。草鞋芋栗裏。製汝平生物。窄得人笑。殊勝須還老釋迦。佛涅槃曰。破蒲團上。思無邪。這裡那論佛與魔。指示雙趺。還是錯。耳邊啼鳥眼中花。印暗花明。古佛心滿。般好景。入啞心。涅槃一會。果然錯。贏得波旬歡喜心。二觸日風光。涅槃相。春寒惻惻。入圓袍。信施一粒。重多少。聞道青陵。未價高。仁天保二年冬十一月十一日辰時。頭脫。和少焉愈劇。十九日哀病益篤。應對如平日。至廿日寅刻。

近世禪林僧寶傳

卷之中

○三

高卧安眠泊然而化。世壽七十六。坐夏六十五。葬全身於龍潭東隅。教誨心鑑慈照禪師。

總見寺卓洲和尚傳

師諱胡僊。卓洲其字。尼州海西郡津嶠鄉人。鈴木氏。師天資聰敏。夙志出家。年十五。從其父至名古屋。并總見寺。祥鳳和尚刺染受戒。祥鳳愛其俊逸。恒令侍左右。是時法叔良哉寓居陽岳。每與師相見。稍加提誨。然師猶邈然無所入。十九歲始遊四方。良哉送行曰。僊也。氣爲竅。踐眞思不群。貴吾需有語。送汝又何言。脚下唯存道。行餘宜學文。師拜謝而去。遂掛搭於

潞州谷口汾陽寺。事快岳和尚。快岳提唱臨濟錄已畢。師與信州願王甲州嶋門爲伴。與俱登高野山。又入京師。見靈源和尚於等持院。明年良哉在丹波添谷清泰寺。設大慧書會。又結制於但馬木崎極樂寺。師過見良哉。還至名古屋。因問白林寺月鑑和尚曰。方今誰可師事者。月鑑曰。從關東峨山和尚來。決可也。師乃東游。路過駿府。會菩提樹院設大會。因就見蓬翁和尚。遂踰關見峨山。隨侍之。於永田寶林寺。峨山示以趙州無字師。日夜參究。久之無所得。以爲吾居侍者寮。常苦多事。若得閑居獨處。專一究明。寧無

近世禪林僧寶傳

卷之中

○四

得透過乎。乃入請峨山。峨山曰。汝果得透過。吾聽汝得庵居。不然止在我左右可也。師曰。師幸賜少暇。小子必得透過。峨山曰。果然。與汝以九旬之暇。師乃退居一室。孜孜矻矻。至忘寢食。頃之乍得見無字蘊底。入告峨山。以爲可。於是復人爲侍者。峨山曰。柏樹子。話有賊之機。於汝作麼生。師無以對。已而數呈所見。未有契也。歷三年。始得會賊機。自是一切話頭及難透難解。十重禁洞。山五位臨濟四料簡等則。皆得透過無疑。至首山綱宗偈。別得發格外玄機。師比聞啓行。應年稍少。猶相與切磋。無違忤。峨山已老。體氣漸

衰有參問者。輒言曰。去與。僊公法語可也。師爲侍者。前後十四年。潛行密修。人莫得而測。雖香林之於雲門。雪堂之於佛眼。亦未有過是也。寬政八年二月。入居總見。不復以寺務嬰意。獨以修道爲己任。於是緇素翕然趨化。聲馳四方。尼侯太夫人聖聰院。屢遣使問心要。師加激勵。頃之太夫人遂得聞隻手旨。其投機和歌曰。驛會娜縷耶。禹挹奴奇努。安農不靡穉兒。亭伽訖典濃。胡惠遠。伊麻綺機仁希梨。以視師師以爲可。爾後太夫人修禪益勤。凡古人公案。往往以和歌述意。乃至華嚴四法界等。皆有歌詠。無幾捐館於

近世釋林傳

卷之中

〇五

是平生玩好。禪板蒲團。如意拂子。机案華瓶。香爐及經卷數部。皆入總見。相傳以爲法門之榮。衆名松平侯在東都。屢扣峨山室。峨山曰。君侯就國。參總見。卓州長老可也。已而侯就國。從近侍三五人。棹小舟至下堀川。就總見參請。如是者數矣。文化十年癸酉。師年五十四。以參州三玄寺爲拍庭和尚。道場衆興謀。請師設碧巖錄會。於是始開法筵。盛唱峨山宗旨。是歲十月奉詔出世花園。賜紫。十二年乙亥春。又應久久里東禪寺請。提唱臨濟錄。七月尾。侯賜書褒賞。并賜白金三錠。書曰。卓洲和尚。通宗門之學。矩法整

嚴寺務無怠實。一宗眼目。法門盛事。莫過焉。十四年丁丑夏。設碧巖錄會。行應和尚自豫州率輪下雲。而至。此會凡侍講者三百餘人。文政三年庚辰秋。夏造總見僧堂。十一月晦。安單。明年辛巳夏。應濃州濟寺請。講闍提記。聞其開卷偈曰。巨耐天台窮乞者。闍貪三隱結。離寬如何。六耳同謀去。倒語顛言。姪從昆。其翌年壬午春。應贈光寺請。提唱臨濟錄。同延示衆偈曰。鉗鎚納子三玄要。陶鑄仙陀四賓士。聖乾坤渾沒青眸。白眼禪流多莽鹵。是歲三月。嗣法弟子全明轉位花園。至夏。師又應遠州東光寺請。提唱虛

近世釋林傳

卷之中

〇六

堂錄開題偈曰。皎潔鄞江一輪月。輝騰富岳萬等岑。息耕殊有重關鎖。惑亂兒孫直到今。癸未春。應濃州眞光寺虛堂頌古會請。秋。應上有知清泰寺大慈普會請。雪關願鑑。崇林三尊宿。隨喜會衆三百餘。開筵示衆曰。喚土吹沙。呆罵天。衲僧到此。絕多技。忽舉梅陽雜毒禪。大蟲無尾。又無齒。丙戌春。應濃州寶珠菴大慈武庫會請。夏。應信州飯田長久寺碧巖錄會。請示衆曰。乳竇萬尋。誰進步。纔舉嶮處轉難難。分明說着。三三九。眼裡瞋人毛。骨寒修長久。閑山雪岫和尚。三百年忌。拈香曰。昨夜夢中雪作堆。山河大地絕纖

埃今朔寒殺。堂裏商略分明三百回。秋應人。維寺
聖嚴錄會玉川寺聖嚴錄會請丁亥閏六月八日足
候再賜褒章。口總見寺卓洲和尚博學高德四方雲
衲歸依渴仰不啻法門盛事。於國有光。因賜綾紗武
端。秋應駿州蓮光寺臨濟錄會相州山田了義寺諸
已正師年七十徒弟祝其眉壽庚寅春應澧州小林
寺大慧武庫會請等赴帝溪山永保寺請修開山佛
德禪師五百年忌拈香偈曰。無齒大蟲誰敢敵。衝天
意氣滅宗猷。春回虎耳開。棲地萬世流芳。五百周夏
應三州天恩寺槐安國語會請秋應作手甘露寺槐

近世禪林僧寶傳

卷之中

七

安國語會請示衆曰。四七二三諸祖師。龜毛拂上翻
筋斗。潦倒寶山老古錘。憐兒不覺揚家醜。天保二年
辛卯夏六月二日當閉基大相國織田信長公二百
五十年遠忌。因結聖制師不辭老軀力。誦唱虛堂錄
以爲法供養。四海衲子雲集堂單無容假結草舍。曰
霞谷曰雙株曰瑞芝。闔衆凡五百餘。五月八日尾候
爲之賜米百石金百兩。供養大衆師當日拈香曰。凜
凜威風震天下。挾王行。勦撫黎民。只今誰復洪恩底。
二百五十遠忌。恭惟總見寺殿贈一品大相國泰
岳大居士。勇悍驚衆智計絕人。或時變。烏髯一張。乃

摧敵賊。亂或時按龍泉三尺劍。伏鬼降。神丈夫自有
衝天氣。將軍塞外絕烟塵。只看者。裏自受用他受用
大鵬展翼。左轉處右轉處。獅子翻身。大自在。絕比倫
如上短言。長語者。應泰岳大居士。折旋于顯。應。仰
于幽底之草索子也。卽今真法供養端的。如何指揮。
泰岳香曰。泰山六月炎天。雪寒殺扶桑。國神人冬應
請于大高長壽寺。提唱虛堂錄。始自臘朔終于解制。
行應和尚計到。師悼之已甚。年有嗣子寶海和尚貌
其真。馳使乞師贊辭。師贊曰。出龍潭。流浴武溪水。起
廢龍華。盡善盡美。施化紫金。咬牙嚼齒。行藏卷舒。與

近世禪林僧寶傳

卷之中

八

時流止。道高古今名重。遐邇行蹟難測。我門城壘。咄
咄咄。他是阿誰。金鑑忽照。老大禪師更有僧。難
貌取一鈎。新月照清池。遠州普門橫。湫和尚請師贊
曰。雪梅幽石月照清池。凜然風采。何處求姿。強名貌
去。渾沌出眉。壬辰夏四月廿四日。師退。總見居東林。
養老閑適。尼侯賜緇。緇緇端。以旌高德。秋冬之交不
豫。然接衆不息。及臘月。疾病。一衆痛心疾首。及閏春
稍快。曳杖涉園。然氣力稍衰。終不起。淡然坐化。時天
保四年癸巳八月廿八日也。春秋七十四。法臘六十。
葬全身於陽山列祖之次塔曰。聖壽嗣師法者。精洲

一人繼住總見其法弟胡雄住遠之貞永彌雪洲
都住濃之西明彌惠應慧讓住東都松源彌昌山凡
繼素之洽師化者不可勝數矣妙喜贊曰古曰善攻
者攻於九天之上善守者守於九地之下宗師家亦
然運籌帷幄之中決勝千里之外是以揚眉瞬目殊
坐良久迷於林囑交馳電轉星飛若夫不動于戈坐
鎮家堂眼卓朔耳卓朔領下白髭垂垂蓋勝者只有
存卓洲老人耳天保四年十月廿二日賜謚號曰
自性大興國師之遠孫卓洲和尚徽降精神天生人
傑故室於退耕密脩寶鏡三昧續燈於明應高提鑑

近世禪林傳

卷之中

九

各之千鈞可謂禪林望標堪稱苦海慈舟鼓沒弦琴
激揚龍泉宗河吹無孔笛振起柏庭門風岸間寶劍
截斷先師命脈肘後靈符換却後昆眼睛淑德宏潤
繼烈芳馨總開川岸證曰大道圓鑑禪師

圓覺寺誠拙和尚傳

師諱周榜誠拙共號螺州宇和岳高串村人風齡神
思高遠超出凡兒受業其鄉佛海寺靈印禪師年十
三時一日宇和岳候人寺召師命徒背久之不令休
師憤其苦使痛打一拳芥黃走去不知所之靈印以
爲憂使人索之不得候素明達仁恕甚中師偉器命

靈印厚撫之師遂往從月般刻苦精進盡究總奧又
參我山數歲常與行應隱山同居互相切磋嘗與行
應商量此事語及古則行應以爲鑿空多疎漏以問
我山我山曰非汝所及也師氣宇宏豁不屑小節守
圓覺僧堂單獨十年遂視篆于圓覺圓覺本寺久委
廢顏師乃與百廢大開爐鞴鉗錘衲子清陰淡海東
海巨海泊船拙菴咸出其鍾下年老入京卓錫於天
龍相國二利亦振起二利僧堂享和六年當足利相
國鹿苑公四百年遠忌師在相國結冬制提唱夢窓
錄雲衲米集者百餘人文政三年相國僧堂成師開

近世禪林傳

卷之中

一

軍提唱碧巖錄衆徒亦百餘人是歲四月罹疾漸篤
六月廿七日書遺偈曰時來人未來興來人將行聞
廣大王令嚴明日打爲君相行至二十八日泊然而
化葬于心華院後岡托僧堂於武梁芝公初答松宗
潮西京一奇士也其在江門嘗謁雲州不昧候候曰
寡人今日約誠拙和尚來修茶禮卿亦陪筵可也宗
潮曰臣將遊吉原妓樓不能陪筵也遂去師後在玉
龍疾篤宗潮攜羊糕一包來問疾師舉首瞋目謂宗
潮曰汝往在雲州候所言不能與我遊余以汝爲高
雅勝人者今何面且復來問余疾宗潮遂巡曰和尚

真可畏也。長州山口常榮寺性堂和尚以爲臨濟錄有法身卽不解說法之語。改不字作亦字。於義爲穩。遂作警說曰。既曰法身。卽不說法。此常然語。不免別真如斥收。師見之。爲著正法眼論。駁其勸性堂問之。使妙峯來辯。師擲煙管曰。虛空作麼生解。說法聽法。妙峯不能對。悵憚而去。正法眼藏在心華院。學者可覆視也。心華亦以師中興焉。

曹源寺太元和尙傳

師諱致元。字太元。號無學。又號五斗室。備中賀陽郡穴栗村人。平田氏。父名步近。世爲邑名族。師年十三。

近世禪林僧寶傳

卷之中

○十一

入備前曹源寺。得度受戒。志氣英邁。每日夙興課誦。夜將睡。輒引針刺股。自警。二十一歲。見豐後春澤和尚。從修文字學。已而聞濃州隱山和尚道學。兼備且通。春秋左氏傳。往乞參禪。且講左氏。隱山曰。汝能得聞吾隻手音。吾乃爲汝講。左氏耳。師於是發憤究明。澹然純一。有時入浴桶打坐。又攀屋後山巖石上。踞跌。不覺微曉。隱山在梅泉師庵。居距梅泉十里許。然日往參請。冬月雨雪深。或至丈餘。師猶奔走道途。往往東畿仆地。村人救之。就爐火取暖。久之得復。如。此者屢矣。當時緇林相傳爲奇特。他日名聲藉其能。

擴張偉業者。良有以也。已而隱山移居深瀬村。堅相寺。師亦從徙焉。居常參叩。日詣問奧。三十歲。陞爲法山第一座。復入濃州參隱山。備受毒辣。一夕棒下大悟。三十四歲。入住曹源。曹源爲備後香花院。候譯顯國亦英偉主也。愛師性豪邁。禮待甚篤。嘗袖短銃。急召師。師至。輒就其耳邊放銃。師微笑。略不嬰意。已而師亦驟就候。耳邊大喝。候則驚悸失容。頃之。師法席日盛。衲侶麇集。乃爲修僧堂。號曰大沾。隱山應聘。結制於因州大隣寺。師亦從輔化。隱山東歸。留居曹源。耆數日。作長篇一首。與師爲證曰。有大迫人到此間。

近世禪林僧寶傳

卷之中

○十二

魔王眼日夜叉頰。高談雄辯。堂中震凜。凜孤風。誰得攀時。拾田螺。登絕嶺。又求火種。入深澗。脫空歌罷。無人和。自和自歌。恣痴頑。水月道場。清淨剎。空華万行。凡塵寰。眉目相結。經旬日。忽報明朝。歸故山。君不見。暗臘半夏。辭黃檗。三頓棒頭。不等閑。臨別。慙懣相肩。嚼生平。受用此牢關。師又參濠州行應者。再行應。亦極稱師陰涼。師將辭去。行應曰。吾無一物贈于。以是爲贈。舉火箸。火熾炭。吹而與之。師不能受。遽起。入一室。究明者七日。復入。辭行應。又舉炭如利。師已領其意。行應乃休。當時相傳以爲美談。蓋修禪者。師資。

宜如此。要不可不子細也。四十七歲是夏。濃州諸邑大水。瑞微僧堂乏食。衆僧皆來歸師。輪下請提唱。若嚴錄師爲闢法筵。蓋來會者十餘指。自是衲侶益進。大活之堂不能容衆。更設栗棘叢。安衆衆常不下百餘人。五十九歲。又設大法會。僉侶全集。至三千餘指。六十一歲。特詔使視篆法山。勅使臨筵。師請國謝恩。師雖住巨刹。不喜奢侈。常守枯淡。每食與衆偕同。味老而無變。六十六歲。令參學上首儀山來公。嗣席已而。師抱沈疴。猶力病提誨。及疾益篤。乃始使儀山代接衆。六十九歲。是秋八月九日夜。召儀山及諸徒屬。近世禪林僧寶傳 卷之中 ○十三

大勝寺耕隱和尚傳

師諱智訓。字耕隱。濃州池田郡小島村人。姓杉島氏。發歲出家。受戒於圓成寺。定翁座元。師雖性魯鈍。篤志拔群。初出遊四方。參請諸老。惘然未相契也。既久。入講肆。亦莫所得。情輩皆譏笑之。師遂南遊。阿州。

從慈光寺廣照禪師。請爲其飯頭。禪師乃當世所謂春蔬和尚也。師已得爲飯頭。日夕勤於供衆。不厭春炊之勞。一日淘米次。乍得省沙米俱淘之語。自是靈機轉授。知見洞明。初不依文字。盡領解宗衆。居數歲。將辭去。廣照有贈別語曰。訓禪人賦性朴直。而勇猛傑烈。喫枯淡齋。辛苦精鍊。苦修加不厭煩勞。佛補常住有年于此。今春且遊豐城。臨別請誨。嗚呼。法門荒蕪。祖庭衰弊。莫甚於今日。大丈夫請自加策勵。勿令願輪退却。須爲我佛祖盡忠勇。是至囑也。師遂往。見行應愚溪龍門杭州諸老。咸極贊稱。已而爲福田大。近世禪林僧寶傳 卷之中 ○十四

勝寺某溪勸公。法嗣住于大勝。大勝素乏資產。又無檀越。師日手鋤。闢荒蕪。耕種無倦。大勝與瑞微隱山及圓鑑二師。彈棧相距頗遠。然每遇其講日。晨往夕還。略無懈怠。遂得參盡宗旨。玄奧。於是師之德華日煒。曄江湖。而猶自緘晦。未曾開門接來者。文化甲子秋。參請者益衆。於是初提唱槐安國語。江湖衲侶來集者二千餘指。廣照與圓鑑弘通正源慧燈。願鑑等諸老咸來輔化。蓋一時盛會也。爾後雲衲過從常不減四五十人。初師起禪堂。不須構築。止略樹其所。須杜楹耳。以爲雖假造。遠勝於樹下石上矣。一日雲雨。

盡出行乞師獨在浴室焚火適禪客至乞宿許諾
客見師衣波羅帶以爲晚年出家者因乞火吹煙明
且請見長老則昨焚火浴室者也客大驚遽巡引退
殆乎不能自容又嘗有客留宿明且師見其改容而
遣人獵雞大怒提竹篋追至河上僧既乘舟師大要
曰此乞食僧吾擊汝折腰去耳師嘗率衆行乞見一
僧得糯米一斗責曰何物魔子敢誑人家男女子其
端嚴率是類也以故厨下枯淡飯頭常得當日衆僧
行乞所獲米麥次以成粥而已師常警人口世餘有
言樹下一宿謹勿得再宿百丈亦有一日不作一日

近世禪林僧寶傳

卷之中

十五

不食之語修禪者可不思此乎師爲人質直絕無矯
飾人或議其少文然枯澹之風真可欽也當時江湖
相傳以爲師朴實爲性且等師訪道之勤有類六祖
雪峰荷擔宗門至老不食百丈楊岐亦不過此也於
是洪源發問遂達九重詔賜紫令住妙心寺後又特
賜嘉號曰金剛正眼禪師嘉永三年七月朔得疾三
日午後一喝而化

寶福寺妙峰和尚傳

師諱玄寶字妙峰勢州之產也受紫龍雲和尚三住
東福次住南禪詔賜紫住道中寶福寺者二十有六

修補諸伽藍之廢闕凡叢林之宜有者悉備康福
爲本山再中興矣文政己丑十月值慧日國師五百
五十年大遠忌先是本山耆舊豫相謀欲請師董席
爲衆評唱五祖錄而是春師赴浪花大仙之請尋歸
疾殆三旬四月初九日安然示寂終不之果也世壽
六十六初師行脚時嘗掛錫于周防山口常榮寺叩
牀堂老師室多年遂得印記又在高野山者三年兼
學密教究其慈奧旁涉諸宗嘗歸其鄉勢州講經彌
陀經於真宗某寺又嘗在備前岡山講法華經於松
琴寺凡赴講者數十會徒衆常不下六七十

近世禪林僧寶傳

卷之中

十六

貝末後得印證者爲勢州密嚴寺虛應西堂本山關
嶺西堂信州顯王和尚豐後佛母和尚等焉

慈恩寺棠林和尚傳

師諱宗壽號棠林姓熊崎氏龍州益田郡人年七歲
就其鄉中呂村禪昌寺芳谷長老祝髮受戒既長參
讚州九峯和尚頗有悟人已而聞隱山和尚盛化於
濃州瑞龍往見之初就坐隱山便言撥草瞻風只圖
見性即今上人性在何處師進又上當胸而立隱山
未以爲可也後經三年始得印可仍服事隱山者有
年文化七年嗣法寂庵住于濃州慈恩寺衲子雲集

在慈恩十四年應聘移幢於加茂郡加治田鄉龍福寺數歲又移居瑞龍於是設爐輔於僧堂鍛鍊其勸學徒苦其峻險望風引退者相繼獨其經行潭遂安猷邦陵山萬寧寺諸老咸出于師鏡下當時江湖聲名與備州太元爲一雙什露門天保三年春奉詔出世妙心賜紫八年夏制誦唱若嚴錄於瑞龍神主米集者四百餘人已終講至十一月十日忽焉示寂火化建塔於天澤菴又分骨葬於梅谷慈恩龍福明年詔賜諡大徹正源禪師後人集其示衆法語及偈讚等名曰宗門玄鏡錄其後傳龍福示衆曰鳥藤近世禪林傳

卷之中

○十七

一卓在鍾山十有餘宿尚盤桓抱道玄侶十數輩相將日與喫辛難辛難深處好風景一段煙霞異凡境山圍水繞興偏幽月明星微夜方靜因憶南泉拂袖趨物外從容豈易圖又憶存公曾有嘆光陰倏忽莫顧頃頃年竊吹鼓柳穿自吹自拍又自適一生擔板少知音去就孤園復奚益近五老境名有僧中出選我慙慙要談玄虎嘯龍吟室中話源深流遠臨濟禪臨濟正脈此流傳金紅爐上曾百鍊妙密錯鈍着着親長與水雲此同凝咄光陰如箭一掌聲宋太宗問僧有甚麼經僧云仁王經帝云既是某人經因

甚麼在卿手裡僧無以對雪竇代答云皇天無親惟德是輔師曰明覺道得不昧宗眼雖然似是不悟他實際如何若是山僧還避席跏身和南道貧道不覺皤皤如也上堂舉黃檗示衆曰汝等諸人盡是啣酒糟漢恁麼行脚何處有今日還知大唐國裡無得師麼時有僧迎對曰只如諸方匡徒領衆又作麼生紫云不道無禪只是無師募拈拄杖曰若何人關收關書真點胸云露豹澤毛未嘗下食庭禽養勇終得驚人殊不知威陽猶遠畢竟作麼生得不穩去卓一下云文武之政布在方策其人存則其政舉其人亡則

近世禪林傳

卷之中

○十八

其政息臘八示衆募拈拄杖云魚止潛安能測海鳥棲蘆豈擇深林擲下拄杖云釣頭怒激煙雲暗奈鷗鰓迷舍巨浸咄許唱虛堂錄拈拄杖云金鋒敵勝釘鋒搖擲離低平高隔靴搔痒雷鳴埋沒宗乘田舍郎圓照禪師十七回忌拈香云雨餘蘭桂闌濃妝嫩色猶香十七霜相遇莫嫌呈醜面無錢難作好兒郎快川國餅二百五十年忌拈香云夜靜樓臺隨扣擊雲晴潭月觸波瀾國師心印誰描貌熒熒焰中翻錦繡錯不錯珍重法王三昧火都盧烈聚燎大端參上堂舉乾峯三種病因緣云洛城一別變衰移水遠山長

春鳥悲約臂黃金寬一寸逢人猶道不相思。咄嗟
休嗟咨。嗟。評唱臨濟錄上堂拈拄杖云。三頓棒。分
啐啄。打爺拳。逐大星飛。喝。句中創意從君說。語到
纖隔纖。圓。賦花鳥。列示諸禪。拈拄杖云。鳥。呼。諸
醉霞。春花。春鳥。且休。嗟。閑。啞。花鳥。慰斯別。巢鳥。親
似惜。花久立大衆。伏惟珍重。

大仙寺雪關和尚傳

師諱紹珠。字雪關。少入隱山室。與太元棠林占鑑為
伴。精苦自勵。當時號為隱山輪下四哲。已而嗣法隱
山入居天澤庵。冬。至。示眾曰。日月易。流光陰桂黃節。

近世禪林僧寶傳

卷之中

○十九

屈亞歲。雪。初。觀林下。衲子成得。甚麼邊事。吾關山
門下。有甚麼事。所謂我宗無語句。又無一法與人同
行。木上座突出。對云。不然。近世禪林門下。有幾關有
難透。有向上。有向下。和尚莫謾人。時紹珠亦在坐。進
曰。上座未。在。且復坐。吾請下。語。良久。乃曰。我宗無語
句。亦無一法與人。恁麼道。將謂寶山門下。說老。憐。憐。
我只。要。諸。方。脫。剝。臘。月。朔。示。眾。曰。明。招。獨。眼。龍。云。這
裡。風。頭。稍。硬。且。歸。暖。處。商量。今。歲。冬。暖。如。春。說。甚。麼。
風。頭。邪。寒。商。見。甚。參。夜。參。奉。主。彌。勒。下。生。始。得。順。現。
左右曰。飯。袋。了。贈。驢。漢。歸。堂。成。道。會。拈。香。曰。針。頭。割。

錢。錢。錢。月。無。住。人。亦。肉。團。一。見。明。星。眼。睛。活。脫。風。

不耐。弊。衣。寒。刺。刺。老。羅。曼。在。甚。麼。處。的。僧。分。上。須。自
看。微。旦。上。堂。曰。目前。無。法。意。在。目前。雲。擁。萬。樹。低。園
無。差。不。是。目前。法。非。耳。目。所。到。雪。蓋。千。峰。徑。為。影。籠。
茲。關。禪。關。巨。延。嘉。侶。扶。豎。宗。風。高。建。法。幢。僧。今。年
五。十。三。百。城。煙。水。正。好。重。新。歷。參。恁。麼。不。恁。麼。回。古
佛。家。風。不。恁。麼。恁。麼。一。新。祖。師。巴。鼻。正。與。麼。時。少。林
一。曲。作。麼。生。拍。手。曰。囉。囉。哩。囉。囉。哩。是。回。轉。萬。年。歡
又。拈。拄。杖。曰。寒。裡。拈。春。東。帝。令。山。頭。老。漢。舊。時。顏。新
年。佛。法。家。風。有。雲。餅。拈。茶。要。透。關。卓。一。下。且。道。透。關。

近世禪林僧寶傳

卷之中

○二十

底。一。句。諸。人。恁。麼。生。良。久。侍。者。拈。却。拄。杖。子。卓。一。下。
天。保。六。乙。未。春。二。月。三。日。示。寂。世。壽。七。十。歲。末。后。有
偈。曰。百。前。古。路。一。條。廣。博。末。后。商。量。有。棺。無。槨。

輝東菴顧鑑和尚傳

師諱古范。字顧鑑。漳州厚見郡人。姓尾闕氏。七歲有
出家志。父母聽之。令從自宜首座。於名禮村中林院。
祝髮。遂。禮。東。嶺。慈。公。得。度。受。戒。師。天。資。穎。異。氣。象。明
悍。遇。事。敢。往。不。肯。退。避。祝。髮。後。未。數。月。既。能。誦。記。經
咒。又。能。誦。句。變。紙。語。錄。等。九。歲。奉。宣。公。命。歸。省。父。母。
自。名。禮。村。至。岐。阜。山。路。數。里。師。已。發。村。入。山。行。里。許。

誤墮溪中。衣咸濡濕。乃擇衣晒之。路傍。舉而踞石。不覺困睡。有一獒犬。喚覺之曰。子非。殊僧耶。何以褻露如此。且欲何往。師曰。吾爲名禮村中林寺子弟。將欲赴岐阜。誤墮溪流。是以如此耳。獒犬曰。且夕。子不得達岐阜。不如返。中林僕請護送而行。師笑曰。男兒至此。何却步之爲。師起。披緇拂袖而去。三更。至家。父母視之。驚曰。汝師膽大。宜乎。汝亦膽大如此。十六歲始出遊。執業講肆。二十歲至豆州龍澤。見三光和尚。和尚使師人東都參峨山於麟祥院。峨山示以隻手話。師屹屹。參究如負重擔。攀峻坂。時方隆冬。師止。

近世禪林傳

卷之中

〇三十一

着單衣。登山。吟之。令士人市川授一溫袍。師受之。然仍不肯着。同窓諸人爭言。東都文物繁盛。師弗顧曰。已事未了。何暇遊觀。一日。經行庭際。忽然大悟。因入室。呈所見。峨山詰以數件機緣。師猶不免凝滯。峨山曰。汝雖悟人痛快。然更手根源。猶須子細。自此鍊修。頗着精彩。無幾。峨山移居永田寶林寺。師亦從焉。與諸子結伴庵居。精苦自勵。嘗問峨山曰。老師百歲後。不知當得從何人。盡餘蘊。峨山曰。我滅後。參隱山可也。師乃往見隱山。稍鍊苦修。久之。盡得蘊奧。隱山爲書綱宗偈。以爲之證。卅四歲。隱山及諸老與。開道謀。

欲使師住輝東。師曰。中林爲三光先師開創。且宜公遺跡也。吾固欲就中林。扶起兩師法幢。以報遺屬。是以往者。濟松請我住持。吾固辭不就。今亦不能奉命也。隱山曰。中林實爲微師開場。且屬宣公遺跡。然資產缺乏。系嗣亦絕。且夫輝東亦爲微師中興之場。微師嘗欲以此爲終焉。資產雖乏。未至缺絕。獨苦無嗣者耳。今子一住輝東。而後分法脈於中林。豈非兩全之計乎。遂強使住於輝東。因轉位爲法山第一座。師曰。願鑑爲樞關道嗣。師在輝東。食淡苦攻者十六年。中間屢有省發處。已而豁然徹根源。初得見鶴林門。

近世禪林傳

卷之中

〇三十二

下別有向上玄機。而平生受用。殊得大自在。自是應機接物。受益者甚多。四十九歲。是春。遂近老宿相與謀。請師大開法席。提唱宗門。無盡燈論。開卷偈曰。一吹吹滅。燈無盡。李白桃紅。取次披。未了先師舊公案。聚頭各自又皺眉。是時通應以下諸雲衲數十人。皆來會。蓋侍講者二百餘人。與俱。唱雲門。專提鶴林神機。神戶小島兩士。爲給道糧。於是宗風大興。聲馳遠邇。五十歲。與道俗謀起僧堂。偈曰。新定機刻。聖僧像以安焉。五十一歲。丁隱山七周忌。雪閑開碧巖會。於瑞龍。師爲之幃。秋又應甲州寶林。請講鶴林普說。

近世禪林僧寶傳 卷之中

是爲應聘之始。講畢歸過信州飯山。拜正受老人塔修齋。且附供養料而去。木曾關令山邨氏迎師請重誠因留居長福者旬餘。六十一歲諸老齋法出遊。米請觀篆。本端師固辭曰。鶴林三光我山諸大老皆深自警晦。不肯出世。余亦欲倣之。不能奉命也。六十七歲是冬。尼侯賜褒章及白金三錠。師謝曰。獨以身貧久住此閑房。宛如長庚殘月光。如法於我。我分老來何計。賜褒章六十八歲是歲東海諸老五役不登。民多阻饑。師爲作粥以施丐者。是夏尼侯使師住妙興寺。居三年。世家貴族禮師益篤。贈衣服飲食若卧具醫藥者甚多。六十九歲更造輝東堂宇。遠近慕沐。師之法澤者相與披石搬土。以助工役。不日而成。明年諸子與謀開法筵於輝東。以落之。來會者四百餘人。通應爲輔。接衆道俗給糧極一時之盛。七十三歲應請接居遠州大通寺。翌春尼侯又命請若巖錄於泰雲。公子貴族接武趨踰輪下。大山大夫亦來侍講。且時遣使問慰。夏又移豆州龍澤秋開臨濟錄會。修三光老師五十回忌之祭。命通應分座。已而患痢。猶力病接衆。不異於平時。數日通應齋筆硯請作遺偈。師喟曰。痴漢吾遺偈滿盡乾坤。何須弄紙筆。應曰。雖

近世禪林僧寶傳 卷之中

○二十四

然且放下。一着更書滿底一句以遺後昆。師乃莞爾書曰。七十四年觸西觸東。末後一句低聲低聲。既又召通應。屬以後事。且垂誡諸徒。終泊然而化。實天保十四年八月廿日。晡時也。明日易水月田猶微溫。迢通應俗雲東序遺骸。面色晬然如生。廿二日開維於鹿苑。明且收骨。皎潔如雪。其丹田成圓形。色彩粲然。遂分骨於三處。師機鋒峻嚴。少所許可。平生授人以隻手。根源江湖。衲子雖稍見頭角者。猶難於下。格榮祿康豐州皆爲嗣法。上首而能傳師道者。莫過於通應師已寂。嘉祥遠。越遂達。九重嘉水中特詔賜諡。震眼弘明禪師。

聖福寺仙岸和尚傳

師者濱州人。初謁日州古月。幸參苦修有年。終究宗旨。慈與住于筑前聖福。有偶成偈曰。靈山清衆稱八萬。孔門弟子亦三千。山僧獨坐藤蘿石。自有淨雲過眼前。師旁誦誦。至其用意者。則雖專門能盡者皆莫能及。然不欲以盡得名。故常寫游戲以自掩。然亦諸人不能及云。

建長寺通玄和尚傳

師諱元聰。號通玄。豐後竹田人也。七歲華髮于郡之

松山寺及長遠游備嘗行路之難人武州掛錫於芝
阜大智參海門東朝飯夕鍊我我不倦多歷其苦
究其玄底實曆年中接海門武住于本寺尋受公帖
領建長寺匡西來禪侶者有年道聲大振安永辛丑
三月二日書遺偈泊然而化

靜泰院蘭山和尚傳

師諱正隆字蘭山號積翠出河山形人髫髻見
鳥彼安院會威儀整肅乃不計處俗求出家父不
可百計噉以葷肉師皆却之父母異之遂居勝因寺
台禪巖公雄深精修絕倫屢至出師慨然不顧也此

近世禪林寶傳

卷之中

二十五

年十七入隱與月船慧公器之稱爲非池中物師
日喟然嘆曰欲得道之微妙豈徒佔畢之所能得耶
自此遊方經見丹之太道可公太道示以雲峰夢寐
粒語師服膺六年及佛成日脫然有省呈一偈在工
大空費六年禪之句太道默然指空宇而示不字師
憚如大道因勸諭之南遊日向古月之門是時其
翠巖順公其孫拙堂敬公一時並化如問足然師周
旋三大老間終盡蘊奧有馬侯創建福壽寺請古月
爲開祖古月將命師爲副此時竊有爭衣鉢之徒師
見後而作固辭之因遺偈嗣法於大雷昂公而住曹

前開善寺故古月七年忌日上堂曰換手推胸祖一
言却因遺囑負宗恩秀峰設有所消息杜宇聲聲月
色昏在侍夜寮六年脚不至席賓夕燈香躬服勤之
實曆已卯春隸籍於花園第一座求幾雲帟輻湊焉
明和乙酉冬雲衲三百餘員肅至師詳唱息掛鋒勉
勵之俾風大振小笠原侯忠總嘆曰古人云三教肅
樂在緇衣中斯言不誣命有司贈金穀若干恭表章
師之盛德云明和庚寅春二月涅槃思齋退上堂
鉢象隱于靜泰院身具杖拂之外唯有數十書篋所
已靜泰在造之柳浦戶上山麓小笠原侯直也之香

近世禪林寶傳

卷之中

二十六

華院也先是師夢躋一山嶺有龍升降于天際有精
舍極輪奐及躬至于此宛如所夢故號山曰天龍焉
大雲雪公仁山忠公等先在開善久露化育恩旨不
忍去相尋道跡其後春澤拙公薰借桂公輩亦接武
而至披掛望春新執轡咸爲道不愛軀苦則作勞
夜則提唱圓悟心要左提右挈無所不至候亦諸
子相繼而歸祿於道續龜山上皇之緒混春桑之役
多方拈出機揚之辯乎叢林不期而成於戲盛矣哉
執政太夫人丸田登憂食不給密諭一士使師請官役
師叱之候高尚其事歲給廩穀師偶遊長崎四望悲

請授戒達嚨奇貨不可勝計師謂左右曰罔利於都會者滔滔皆是我是與此輩伍悉以達嚨市粟施悲田乞兒之徒及其出境也土庶五十或一百送之路哀請三歸或有數十里之外追慕乞法號者天明至辰春大飢饉師賑錢及粥於窮民寬政辛亥小笠原侯忠苗在江戶迎師其邸修先考卒哭忌殊加優禮及師告歸太夫人手自裁縫伽梨贈之寬政壬子海門恪公與其耆舊議請師誦唱大鑑錄厭其闕然不許四衆來掛搭也而雲衲輻湊者終至三百三十餘人厨下糧竭每人一日食米二合而已然衆惟道是

近世禪林僧寶傳

卷之中

○二十七

修莫有難色師八十歲應京都龍安之請小笠原侯微行問安叙別欲強留之而察其狀終不可留乃止既臨行士庶男女少長雜然填咽山門中師作偈辭衆及到龍安洞濟耆宿一山恒公隱山瑛公東門公之輩爭先輻湊衆凡七百餘人師乃誦唱畢巖集誨而益勸老而益壯其歲四月廿九日忽示微恙顧視左右微笑而化道俗奔波如喪考妣及火浴爭隘舍利灰燼皆竭矣分骨於龍安於閑善于靜泰三所立塔師未卽世之日其頤或出舍利牙齒脫而化舍利皆瑩徹如珠侍者竊取安之靜泰道俗視以爲奇師

唱之嗣法者大極智玲揚宗智旭洪巖慧範師歿後其行實達宸聰教賜謚圓機妙應禪師師容貌短矮度量寬弘器識精嚴不喜戲謔衣則不帛食則瘠飢而已威儀整肅能踐初步雖挾邪慢者及見師則氣索色沮及其機鋒橫出氣岸壁立不望崖而退者鮮矣他山之請多因辭不往嘗謂二三子曰我代佛揚化豈不欲遊化哉而敢矯好爲人師辨販佛法者乎其介潔如此

玄要寺綾河和尚傳

師諱義完字綾河別稱再過阿州德島人也姓芳村

近世禪林僧寶傳

卷之中

○二十八

氏始謁鄉之慈光寺春叢和尚請薙髮司吏不許師乃寄去國禮讚州實酸和尚受業遊方歷歷之堅相從正燈圓照禪師隱山和尚者十一年孜孜參究未嘗出其闕外後受和尚印記文化十年癸酉轉位於妙心第一座十一年二月住院文政元年秋改造白松岡冬制邀請豫之龍潭行應和尚誦唱槐安國語四年辛巳造寶藏嗣後寺中府庫殿堂廡舍等逐年築造天保六年乙未當開山月岑大和尚二百回忌有故遷延至明年丙申三月開大齋會集衆三百餘員提唱五祖錄師自此會名聲播甚雲衲隨從者恒

不減三四十人盛行隱山宗風師豪放不羈不拘細行有學者請參謁者則雖飲酒席接之於是江湖英衲乞參請者多云然而雖師既老莫有嗣法者嘉永二年已酉十月有疾忽爾而化在任三十七年保齡六十有五

建長寺湛堂和尚傳

師諱元丈號湛堂不詳族姓肥前佐留志郡人也天資皓潔道貌豐偉幼而禮郡之圓通寺礎山出家剃度及長南詢不憚跋涉之勞遍歷參諸方名師年二十聞通玄師熾化于巨福往而依焉久之受其印證

近世禪林實傳

卷之中

〇二九

代主大智無何受公帖董建長寺佛生日偈曰懶向泥中洗土塊漫將杓柄靠皮篋芥堂索索黑甜餘看盡遠山粧翠黛七朝國師四百五十遠忌日雲行雨施老天龍將一指頭張祖宗隨處爲它居上位靈蹤不必在龜峰正宗廣智禪師平年忌香偈曰祖師心印鐵牛機掙不去分拽不歸只劈檀香穿鼻孔瑞雲合雨洒巖扉文化丙寅歲五月二十日寂壽六十七有芝園集壹卷

建長寺眞淨和尚傳

師諱元苗字眞淨紀州田邊人姓細野氏甫十一歲

從郡之興禪寺快應祝髮受具既而謁見諸善知識後依蘭山湛堂兩古佛一味參究至忘寢食遂佩湛堂印可董大智席時本寺頗荒壞上漏下濕始不可居師處之晏如也專提撕衲子大揮法柄未幾應巨福闍山之請率徒移壘華文政甲申受公帖領建長寺丁亥秋西來初祖五百五十年遠諱結制接八百餘員衆拈香偈曰地轉天旋曾不遷西來五百五十年扶桑一自傳心印圓鑑影中杲日懸臘八示衆偈曰滿頭三五年青灰破衲幾年來垢埃臂發天寒成道曉爲誰星彩又重開長壽開山大梅禪師五十年

近世禪林實傳

卷之中

〇三十一

忌時刻近新拈香云非心非佛沒商量卽心卽佛話尚長五十年前溢餘德褒章薰徹御爐香上天橋山云六里天橋大海中虛空有路入龍宮而今菩薩說何法清湧青松樹樹風文政己丑慧日開山五百五十年遠忌衆議萃于師禮請甚力師不得已應之領三千餘員龍象修之朝鐘暮鼓法儀濟濟由此道譽高于筆下壬辰歲寺社奉行賜坂中務少輔宜官命於巨福受公帖領南禪寺背北條氏盛時五嶽相峙于鎌府高德偉才後先輩出以故有宣命事及足利氏時沿例不改爾後無此事者幾乎三百年至師乃

復有此龍命。繇林稱爲賜紫之中興矣。師以天保辛丑七月二十五日正午。辭衆坐化於半山亭。報壽七十歲。乃闢維其後園。出舍利五色燦然。念珠不壞者三十七顆。分靈骨建塔于四處。曰長德曰寶泉曰曇華。曰長壽。師資性冲和。談論溫藉。然風範威肅。令人欽伏。嘗語人曰。吾初東遊。日適屬寶泉開祖四百年忌方。諷經已畢。臨齋之時也。余乃卸包洗足。徑赴齋坐。是在關東把箸之始也。想余收箸亦必在此日。及示寂果如其言。哲人之言誠不虛也。有曇華集二卷。未上梓。

近世禪林僧寶傳 卷之中

○三十一

建長寺願翁和尚傳

師諱元志。字願翁。姓內海氏。陸前松島人也。初受業於郡之海無量寺。牧舟及長行業。純一後拂袖到鎌倉。從眞淨於西來。未幾受淨指示。徑赴防之常榮寺。人諦洲室洲一見器許之。師志氣倍奮。究明已事。遂佩洲正印。回嗣法。拙堂劫董大智山。萬延元年。受公帖。領建長寺。三年秋。移蒲曇華。匡西來衆。慶應二年。受公帖。領南禪寺。明年入寺開堂。明治四年春。中興寶樹院。以居焉。翌年。官置教部省。廢僧官。新立教導職。於是各本山有新補舉。同年五月。補權少教。正六

月進大教。正未數年。示寂於歸耕室中。世壽六十一。乃分靈骨建塔于二所。曰長德曰寶樹。自繇建外優婆塞優婆夷。執弟子禮者凡五十人。山岡鐵舟居士其上足也。師平生頌文散佚。今僅得數首。其清涼智鏡法尼。師贊逆修云。大圓鏡裏裏虛空。營綠十方影。現中微破。將來重點。檢都虛凡聖。一如同頌云。豈論生死去來。相况復三從五障。射鏤頭埋却。無餘物。松島海巖樹樹風明月院。簡堂和尚贊云。半相老漢。勝公身。手握黑蛇。轉法輪。受用一生無盡藏。清風明月自家珍。

近世禪林僧寶傳 卷之中

○三十二

圓覺寺清蔭和尚傳

師周防國人也。遊方依圓覺。誠拙和尚數歲。終受印記。嗣法誠拙。董圓覺僧堂衆師資性溫良。諄諄導文政八年三月。應相國寺請。率雲衲五十員來。雨安居。提唱碧巖集。

圓覺寺淡海和尚傳

師依誠拙和尚數歲。終究宗旨。蘊奧嗣法清蔭。華圓覺僧堂師機鋒峭峻。棒喝交馳。然應學者根機。誘之循循然。澤州大隆寺晦巖少參。師久歲。且作詩呈師。師曰。汝尚杜撰如是乎。晦巖方擬議。師曰。果然汝未

徹在。一日晦。巖爲衆請入室。師卽瞑目。湯辭叱云。可。厥可。厥其峻。後率如此。

長德寺海門和尚傳

師諱元東。海門其號。姓平田氏。武州塚原人。始從其鄉長德大岑和尚受業。既而大岑寂。南嶺。師西遊。參口州古月和尚。者數歲。及南嶺寂。乃歸。住長德。寶曆九年六月八日寂。自誦錄二卷。師嘗住建長。初至。指山曰云。此箇解脫門。何論及不及。召大衆云。看看大地等證人。假殿云。古佛經送今佛。皆性兩兩相逢。不妙。勸衆。七地堂云。法法本無法。護箇箇。近世禪林傳 卷之中

什麼大驚。還小怪。切莫動干戈。祖師堂云。擬坐一隊。誰著什麼來由。點檢將來。則六平不同。法據室。這箇不通。几聖。邊云。那箇坐。斷千差。卽今山僧別放開線路。畫一畫云。一徑直。二徑遮。詰帖云。將軍寒外。令納僧肘後符。捧帖云。全幅半封。竟不涉多途。法座云。芥納須彌。易須彌納。芥難。卽今是什麼三昧。進步云。高著眼看。陞座。拈香云。大日本國相模州鎌倉府五山第一巨福山建長興國禪寺新住持元東開堂。令展欽焚寶香。端爲祝延。今上皇帝聖躬萬歲。萬歲萬萬歲。陛下。欽惟。仁恩雲行雨施。祖報增。

重敷德化于二儀之先。文明日照天。臨禮樂已調復。淳風于三代之古。金輪永御。周道如砥。獻算長保。海屋添籌。次。這箇熱向寶爐。奉爲征夷大將軍。資侍祿算。恭惟柱礎于武門。繼德川流。齊家治國。金湯于法社。受靈山記。奉佛歸僧。堂內乾坤。揆度化育。扶桑六十州。天上日月威望。下視泰華八千丈。又。此爛枯柴木。不在深山巖崖。又不是十字街衢。二十年前得之。無吟。地徒爾區區。卽今皮膚脫落。盡伎倆一點。無直拈將來。供養。前住南嶺老漢。用法乳聊擬。反哺鳥。且云。禪林一枝。萬物主張。茂叔蓮。近世禪林傳 卷之中

淵明菊何堪。比數香嚴竹。靈雲桃豈敢。諦當仰之高。鑽之堅。老倒。乾大仙。又。餘谷鑿跡。描不成。畫不就。匪笑。藥。沙彌。芥來說。榮枯相。綿密密處。佛佛深根。固蒂。空索索地。祖祖。摘芳。芳直成正覺花也。擲却。四十九年。塩塵燈籠。結花。假名。拄杖子也。打翻。千七百則。葛藤。瓦礫。生光。或失此種子。而東倒西。如麻。如粟。或喫草料。而左旋右轉。爲。言未訖。同伴木上座突出云。止止。蔓語荒唐焉。出生死。稠林。豈足。法海津梁。卽今長老爲國開堂。祝延皇祚。底一句如何。宣揚去。下。云。一點梅花。藥三千世界。

香復舉開山大覺禪師上堂語曰。昨日記得一段新佛法。今朝欲與諸人提唱。天曉起來。被風聲雜亂。上這一段新佛法。都忘失了。也只得又舉。信本當新開。開山師翁。倘若無人。不提寸鐵。能張吾軍。雖然。與麼。今日看來。恰如眼裡無筋。新建長不然。若有人問我一段新佛法。唯向彼道。佛云一領布衫重七斤。

興源寺玉澗和尚傳

師諱元定。字玉澗。西京人。幼有俊才。已出家。年十六。問詩。副公翼。公翼以爲可教。明年又見大興梅莊禪師。從游者二月。乃辭還故山。然自是常寄詩文乞潤。

近世禪林僧寶傳 卷之中

三十五

前在復累月。詞才益進。遂以文藝名。江湖年二十。始發憤。深悔既往之趣。未技。從是專修禪觀。初參中備大雲。大雲寂更從濃州隱山。與大元棠林等爲伴。鍊修十餘年。以隱山之命。常以文學引接。初侶已而住阿州興源寺。又以文學誨。初侶。然見其至。年二十三。四者必勸。今入叢林。一歲夏制。聚侶四五百人。講楞嚴經。大元棠林古鑑皆來輔化。亦一時盛事也。師雖長文學。然堅持宗旨。常曰。吾山用禪堂半規。然不可專流文字。於是今禪侶夜必坐禪。師亦與俱參禪。嘗作文殊贊曰。不見而見。不來而來。對談一室。何隔五

臺。又有點眼偈曰。摩訶大般若。呼之妙德尊。烏兒作雙眼。日夜照乾坤。一點輪開處。八萬出法門。吾人之真性。諸佛之本源。妖魅渾屏跡。魔外盡喪魂。將何爲憑據。天晴絕塵容。又開山普門禪師。二百年忌。偈曰。隻手扶成。開國業。一方樹立。普門禪。而今社稷泰。重法運。併昌二百年。又題堂前柳樹曰。露濕娟娟。下緯新。僧房簷外自宜春。有時風擺頻搖曳。似拂修禪石上塵。

鹿王院泊船和尚傳

師始受業於嵯峨鹿王院。既長。遊方。入圓覺僧堂。參

近世禪林僧寶傳 卷之中

三六

誠拙數歲。既而受其印記。歸。貨鹿王院。兼領天龍僧堂。文化十二年。天龍火災。師企圖再建。拮据盡力。未及終其志而示寂。

慈光寺春叢和尚傳

師諱紹珠。字春叢。豐後佐賀關人。甫十一。投地藏寺。大百丈。祝髮。受具。十八歲。遊方。挂錫於曰杵多福寺。偶見禪關策進。讀之數章。嘆曰。古人爲法忘身。刻苦如此。余亦千佛中之一。豈可以詩文過一生乎。去。往豐前開禪寺。謁蘭山隆公。次參天親大休。源諸老。後見蓬翁盧公。究決悟後大事。三十五歲。視象於慈

光寺轉位於本山第一座。嗣法於越山傳。於是大開
爐。鋪針鉤衲。門風孤峻。點滴不施。而資質寬容。謙
讓。容人。是以上座多歸焉。文化甲戌十一月。特敕賜
紫。時城州八幡圓福寺僧堂不得其主。師往而住。二
者數年。百廢具舉。文政癸未。師齡七十三。再住妙心
其餘應。諸方請行法施者。不可勝數也。八十五歲。猶
不倦。利濟金蓮寺。龜洲奏曰。妙心開山國師。遠孫阿
州德島慈光寺春叢和尚。夙挾靈骨。參請諸方。惡辣
之禪。既續國師正脉。恭奉 綸命。勤勞三寶。住持之
職。再董花園法華。齡方八十有五。履踐較古。無耶。鍾

近世禪林僧傳

卷之中

三十七

拂於今。不依法乳。育幾才。德澤潤四衆。冀冀從上所
具。甘狀奏達。天聽特賜。以禪師徽號。海內副望。蹈
舞不唯。參玄之侶。法門揚輝。憑據永在。敕黃之文。
抑佛法久住。於是可觀哉。敢布鄙悃。瞻仰易止。誠恐
誠惶。敬白。賜 敕書曰。敕。鳴鶴棲林。群鳥何能。和其
音。泝龍蟠淵。衆人誰敢。探其領。自性大真。國師之遠
孫。春叢和尚。初入。蘭山。室後升。松蔭堂。其性寬容。其
風峻峭。常轉法輪。挽回佛祖。太古之風。大塊慈燈。照
破勞生。長夜之暗。况又齡近九旬。德聞十方。實是。極
氏冠冕。禪門模範。嘗授紫衣。以答高林。鳴鶴。今下黃

麻聊報。深淵。潛龍。特賜大鑑。廣照禪師號。時天保六
年十月二十五日也。師自像贊曰。當時東請。又南詢。
訪道爭師。幾苦辛。磨大蟲心。休不得。欲回四海五湖。
春。天保五年甲午仲春。應於黃龍陽關長老。需於萬
松龍淵室。書八十餘。而無疾而化。

樹林寺象飽和尚傳

師諱文雅。號象飽。別稱橫谷。森田氏子也。其生也。既
有三齒。鄉人謂之鬼童。容貌魁梧。器度明敏。幼而出
家。受業於樹林寺石室禪師。遊方專從。事于文學。或
規之以學文字。徒資口辯。非所以究至理也。師乃發

近世禪林僧傳

卷之中

三十八

憤直往參。見于慈照禪師。慈照示以趙州無字。師未
有所解。憤激七切。寢食俱廢。夜安坐。不覺困睡。被
他打却。忽然省悟。時年二十三。慈照嚴峻不輕許可。
人師不少。屈諸益。喚奉辛參。苦修者幾十餘年。文化
乙亥春。東歸。承大哀。法嗣住樹林席。尋轉位於妙心
第一座。壬午歲。慈照赴請於三州小松原。師拱席下。
罄其餘蘊。已丑歲夏。師應江湖衆望。修五祖錄會。雲
衲。驚風四集。天保癸丑。退樹林。寓豆之國清寺。是時
奉勅爲玉鳳院塔主職。居三年。移常州常光寺。又三
年。移攝之祥福僧堂。四方龍象。爭先輻湊。宗風之盛。

冠江湖矣。後三年有雲州慈圓寺請以疾堅辭。而其
耆德及檀徒敦迫不已。遂赴之。及夏了病革。七月十
八日集諸徒遺誠。二十三日書遺偈曰。象龜六十。真
境界。八雲立處。頻尿天也。太奇復。可惜許。不衆天下
相似。擲筆而化。世壽六十二。法臘五十五。法子友
堂益相承住于樹林。師平生不拘世故。專舉揚宗乘。
深嘆宗門之衰頹。痛彈呵。相似宗匠。杜撰禪和室中。
未曾假姘色於人。故雖臨門者衆。透關者希矣。天保
十一年九月廿九日。賜教書曰。教自性天。真國如遠。
孫象龜長老。宗師典型。衲子摸楷。祇樹林下。常懷東

近世禪林僧寶傳 卷之中

三十九

山暗號今。蘊谷巷中焉。隨南陽舊蹤跡。湖井露法雨。
魚非敗種之類。咸俾蘇活。握金剛寶劍。獨頭鐵額之
漢。那不截斷。宗說俱通。隨時應節。神光獨朗。鑑人照
地。豈日沒西雲。道風聞北闕。仍垂寵章。謚曰神鑑獨
照禪師。

南禪寺大觀和尚傳

師諱文珠。大觀其號。濃州乙坂人。姓佐藤氏。幼而穎
異。及長。居于包荒。與物無忤。九歲從越前福井東光
寺泰崇。唐公判。染十六歲。初謁東嶺慈公。于遠州海
藏寺。慈公命令掌書記。尋掛搭于豆。常澤往來。遠

豆間者。輒載誓曰。在不能明。此事不舉。頭墜。見其
峯矣。於是捨身苦攻。十九歲在尾州妙興寺。坐中乍
開。鵝龍入室。聲豁然大悟。以質東嶺。嶺許可。自是益
參詳徹底。竟至忘所得印定時。師年尚二十八矣。既
而屏居京師友室。三十二歲爲愛宕前大納言通直
稱子。嗣法定溪惠公。住于冊波法常寺。四十二歲。
詔賜紫。於是始開堂。四十五歲。更開法筵於江州大
圓。兩子雲集。五十五歲。讓席於法子憲章道。復入京。
請爲南禪僧堂幹事。因更僧堂名。舊稱林百廢俱舉。
鼓動真風。激發方衆。遂得哉泰門純簡堂珍盤谷。皆

近世禪林僧寶傳 卷之中

四十

僧中鳳麟也。天保庚子。師年七十五。值南禪開祖遠
諱。結夏制提唱佛鑑錄。偈曰。據居棚外。播威稜。剛用
翳瞞走。衲僧鼓動。徑山文武火。針鋒削鐵。結冤憎。是
歲秋。移居玉藏院。院卽師往歲所披荊榛。以起廢之
一也。衆以董席無人。固請不已。遂卓錫焉。辛丑秋。復
入舊菴林。臘月廿日。遽然罹疾。逾歲。益輕安。自號七
十七翁。不二身已而復得。病在床褥。而濟度心未歇。
然竟不起。實是歲三月廿八日也。世壽七十七。僧臘
六十八。既葬。起塔于法常。玉藏二刹。

慈光寺陽關和尚傳

師諱東英字陽關姓關氏常州水戶人幼而穎異
既有出塵想甫十一歸州之長勝寺龍雲棲公落髮
受具習學內外典既疑有已事十六歲擲衣遊方聞
阿州春叢和尚道風盛大往咨決宿疑春叢一見知
其法器猛加錘鍊朝參暮請連夜不接曉直悟雙手
玄旨人呈所解春叢舉難解因緣以銅師意於是延
團益不釋捨身刻苦脇不著席者二十餘年一日忽
悟古人請龍公案走入室春叢迎之喜溢顏面囑
曰西來密旨汝今得之矣善自護持焉中間叢極諸
老門庭又往深林荒塚間自試定力三十八歲蒙推

近世禪林傳

卷之中

四十一

獎博位於本山第一座春叢謝寺事使師並其席四
十一歲春叢設誓勸會雲衲集者三百餘人乃令師
聽參請一衆歸心於是始開爐轉接得方來聲價日
騰師資實寬厚而克慎細行德化日洽天保九年戊
戌春奉 綸命親篆于妙心寺庚子冬提唱虎堂錄
雲衲集者四百餘人一會極森嚴攝之真身而師
僧堂闕主法師閻鄉縑素欽慕師德請迎之師堅辭
不納及其請益切乃不獲已應之其明年謝寺事付
法於台州愚公率衆移幃於祥福於是百廢咸興嘉
承元年戊申秋師方七十四歲再住于妙心寺師老

而壯應諸國巨刹請施法雨於四衆庚戌秋辭衆歸
阿州閑居養老扁室曰耕月然追慕跡至者尚多安
政四年丁巳卜終焉地還于慈光既而示微恙泊然
而化實是年八月七日也世壽八十三法臘七十三
嗣法者台州愚嶺雲能二人而已師肖像自贊曰頭
破韶陽那一關當機直是老僧顏何煩情得丹青手
描此醜容掛壁間

方廣寺龍水和尚傳

師諱宗貢遠州長上郡人澤木氏幼就其鄉安樂寺
聆仙和尚得度受戒十六歲出遊豐前事 中津寂光

近世禪林傳

卷之中

四十二

普照禪師者十一年始得會宗旨三十二歲還鄉住
于與山藏龍院院實方廣寺塔頭也既又往參濃州
耕隱和尚又依於備後靈機神應禪師盡究宗門藏
與天保十五年任藏龍始提唱臨濟錄其開卷偈曰
曠野人種春意遍賸驢背上着金鞭三玄戈甲前無
敵翠柳紅花交影鮮已終講兼送衆僧曰梨耕後古
恁麼了早已龜毛幾許長風拂岸花春半過山雲淡
水共茫茫嘉承三年起僧堂於與山開單提唱虛堂
錄初人堂偈曰山有枯薪溪有水曉天鉢入煙霞
毳衣下得幽棲地坐見暮林枝上鴉開卷曰從頭欲

得息耕禪。霖雨晦風百畝田。時至中秋禾已熟。家家收稅。炊煙已了卷。兼送眾僧曰。秋風八月二十五。話盡。息耕百則禪。此境途中人若問。請君指點。白雲邊。六年命東明哲公。嗣席於藏龍別院。僧堂傍構一室。自閑居焉。安政四年。夏。制提唱。碧巖錄四方。領眾宗師。皆至。江湖雲衲來集者。無慮五百餘人。專參禪。辦道。宗風大振。既又遇。後醍醐帝五百年御忌。與開山大慈普應禪師四百五十年遠諱。合祭設。寶實。爲與山四百餘年來大法會。師拈香曰。帝王恩。與法王。師每藥。醍醐一味。酬縱使。八風吹不動。雲橫谷口。

近世禪林僧寶傳

卷之中

四十三

石橋流已終。祭雲衲且散。師謝以偈曰。路繞山重。方廣寺對人先懶。話家私。夜來巖下溪聲咽。自笑閑雲幽石痴。講碧巖錄。開卷曰。龜鑑宗乘。明覺頌。權衡列祖。克勸評一場。紅淚鵲花雨。萬古愁人血。滴情元治元年七月。孝明帝特詔賜紫。明治六年八月二十一日。師急召眾告別。泊然坐化。師接眾三十餘年。眾中得其印可者。爲遠州齊應。西京石剛等諸老。

圓覺寺東海和尚傳

師諱昌駿。字東海。備後人。幼受業於藝州佛通寺。既長。遊方參謁。圓覺誠拙和尚。卒參苦修。終受其印記。

住于圓覺塔頭。佛日巷。接得。稍侶。幾三十餘年。嘉承三年。天龍寺將修夢窓正覺國師五百年遠忌。師應其請。率眾來會。雨安居。預相國寺普明錄會。雪安居。往天龍。提唱。夢窓錄。江湖雲衲來參者。殆一千餘人。爲近世盛事。師資性溫厚。持律略確。接眾恒不減三十。貝然其於人甚謹嚴。不輕許。可以。下眾多。而受其印記者。至鮮矣。受業弟子。皆依他前儀。山禪師。既受其印記。繼師法席。而不。其壽而寂。師年七十餘。無疾而泊然化。葬于正傳菴側。

圓清寺月珊和尚傳

近世禪林僧寶傳

卷之中

四十四

師諱古鏡。字月珊。俗姓村松。母三好氏。寬政元年。生于讚州九龜。幼而穎悟。特脫有聲。之稱。父使之投備前宗藏寺松峯直公。薙染受具戒。既疑有已事。十八歲。拂衣遊方。鼓磬諸老門。而疑悶不自安。聞相州了義寺。開道道風隆盛。遂往。咨決焉。一日。侍息耕錄。講延有省。人呈所解。開道舉狗子無佛性。因緣毫。不交他話。以鋼師意。於是猛著精彩。朝參暮請。日不交睫者。殆八年。一日。省沸湯。了然悟。古人請說公案。翌年。開道委順。師去。謁尾之圓鑑禪師。禪師一見識其大器。勵加鉗鏈。師嘗自誓。不明佛祖。向上一著。則死。

不下此山。增自振脫絲肉紛擾地。深林荒塚。凡推異所伏匿。莫不自往。歷試焉。一夕在堂中坐睡。豁然心眼頻開。從前礙臂之物。水解雪消。佛祖命脉一時燦破。卽走入室。圓鑑見之。悅。溢顏面。囑曰。西來密旨。汝今得之矣。善自護持。會接松峯。戒化之計。辭歸。宗藏寺。文政八年秋。轉位於妙心第一座。時本國之望。剎國清虛席。國司池田侯。奉其法脉。欽師道風。敦請移席。因辭不可。丁亥夏。遂視篆國清百廢。俱舉。道價日騰。納侶雨集。嘉永四年辛亥。奉敕住法山。是歲。應雲州慈圓寺請。雨安居。講碧岳集。又講臨濟錄于禪近世禪林僧寶傳 卷之中 四十五

林寺。佛祖三經于大林寺。安政二年四月九日。忽然辭世。世壽六十有七。法臘六十。師爲人豪邁。不拘細行。然其度人諄諄善導。故受其化者。信從悅服。出于師。鍾下者爲肥後柏堂俊豐。前魯山豫州鐵山講州馬應輒備前萬基否等。師嘗講虛堂錄。開卷偈曰。咬破疎山壽塔。因逼天意。氣不溫純。就中最先嘶。子擲下兩文。凡匠人大燈國師五百年拈香曰。韶石不再。日本禪乾坤打破得流傳。廬陵米價賤。故貴挑起大燈五百年。平生語錄若干卷。秘在于國清寺云。

廣國寺巨海和尚傳

師諱宗航。巨海其號。初受業藝州佛通寺。既又參誠拙禪師數歲。後住相州山田廣國寺。又應南禪僧堂請。淬礪雲衲。晝屏居丈室。至夜必端坐。禪堂持律極嚴。至老不衰。由是道俗歸嚮者甚衆。頃之應高臺寺。請其人山。偈曰。任緣卓錫。古高臺。一日長安舊戶開。不說中書堂裡事。熱歌聽罷。午眠催。其講臨濟錄。開筵偈曰。秋天月冷。鎮州城不動。干戈致太平。將謂將軍聲價大。白拈賊作甚。分明請已畢。兼送行曰。東土鎮州古渡頭。扶桑國裡錯。俾流依然佛法無多子。一陣清風送客舟。年已老。辭歸隱于廣國。遠近縑素咸歸依。及示寂。會葬者以萬數。葬儀所用紙幡紙華。皆爭齋歸。十襲以爲至寶云。

近世禪林僧寶傳 卷之中 四十六

正眼寺雪潭和尚傳

師諱紹璞。號雪潭。紀州牟婁郡大田村吉田某子。爲人聰敏。氣宇高邁。甫五六歲。學文字。過目成誦。時人稱神童。比十歲始慕佛乘。禮同郡大泰寺桐岳和尚。得度。受具後。常如讀祖錄。一日慨然曰。爲僧而不通理果。何益。乃乞其師以遊方。不聽。於是自誓曰。余若不成此道。則不再入斯門矣。書其語貼門扇。不告而去。從此。每師訪道。歷遊四方。嘗在會于播州明石龍。

谷寺會中眾衲相月旦曰如今明眼宗師之違法幢而盛大者濃之慈恩寺棠林禪師一人而已師聞之待會而往慈恩掛搭日叩其室而門庭孤峻難測師不少沮日夜孜孜打坐已而棠林移幢於州之如茂郡槐田龍福寺師與其徒從之一日師忽發憤登山門上層揮淚自誓曰嗚乎吾何業障生無益於時死不爲人所知爲僧亦何益今宵若不徹悟則一生下山門兀坐達五更猶無所得便蹶起徙倚樓欄將墮死於門下脚已臨千仞忽聞鷄鳴豁然大悟歡喜不自禁趨入室棠林一見曰汝徹矣棠林再移幢于

近世禪林僧寶傳

卷之中

○四十七

瑞龍僧堂師又從焉爾來辛參苦修者十有餘年昂昂藏藏陸沈衆中終盡其蘊奧受印記後住于紀州大秦寺時天保中也其十二年春諸山勸獎初開法筵提唱臨濟錄江湖衲侶之集者三百餘人是秋應江湖之請移幢於美濃加納天澤菴從是從來常不減七八十人弘化四年春妙心寺將興開祖關山國師遺迹特請師住濃州伊深村正眼寺師從之因新建築僧堂法規嚴峻宗風大振嘉永元年道聲上聞朝廷特賜紫衣卽詣闕謝恩親拜天顏安政六年值開祖五百年忌提唱大應錄雲衲集者六百餘名

近世禪林僧寶傳

卷之中

○四十八

其拈香曰佛日扶桑放大光四天照破未曾藏無量刹界絕遮蔽餘烈猶存五百霜開卷曰天澤波瀾歸海東龍淵淬得奈機鋒日多懸鐵誣人否流遠如今減正宗師居常遇徒弟熱喝嗔拳雷聲怒罵門庭之峻峻十倍棠林學者往往望崖而退故江湖喚號雷鳴雪潭師應尾州瑞泉請提唱臨濟錄時犬山城主亦臨聽焉垂簾而坐師登講空大喝曰咄何人欲坐簾中聽講耶予將舉揚正法更無些子批糠何乃爲師批糠狀如此耶疾撤簾去卽不撤去吾決不說法矣聲氣如雷霆舉坐失色其機鋒峭峻雖貴顯莫所敢憚者率此類也故師鍾下具大機大用唱圓照門下宗風者不少於是天下縑素益景慕師之道德焉慶應三年九月奉詔人朝拜天顏特賜徽號真如明覺禪師等得官許就濃州方縣郡福光鄉眞福故趾興荒廢再建堂宇明治元年秋命泰龍董正眼席自退隱眞福六年秋有微恙九月十八日安然而化世壽七十三法臘六十三門下徒衆相聚葬全身於正眼寺西北隅塔號明覺爲正眼僧堂祖師建法幢領徒衆者凡三十三年應諸方迎請者凡三十餘會所到徒衆每以百數大振眞風師嘗著僧堂龜鑑曰

古人云。參禪須具三要。一大信根。二大疑情。三大憤志。若欠其一。如折鼎足。吾這裡別無條章。只須諦認。是人人有。可見得底自性。有可徹底宗旨。其憤志。相續有可疑著。詰頭矣。若夫珍重。半省半悟。去不堪。真種草。切須子細至囑。

曹源寺儀山和尚傳

師諱善來。號儀山。若州大飯郡大嶋人。姓後氏。年十一。禮州之高濱長福寺南嶺謙公。剃髮受具。十七歲遊方。參叩諸師之門。二十二歲到備前曹源寺。參妙覺果滿禪師。大元和尚。大元一見。知其法器。痛加錘

近世禪林實傳

卷之中

四十九

錘。師日侍坐。精鍊刻苦者十有餘年。朝豁然大悟。遂獲爪牙。不知手舞足蹈者數次。大元以上足表南溪先卒。舉師嗣席。天保丙申。陞法山第一座。翌年丁酉。大元示寂。師居喪盡禮。專提宗綱。振起祖道。參學衲子恒不減七八十人。寺舊堂岡山藩主池田侯之世祀師治事嚴肅。而接衆無倦。每示衆曰。胸天月清。心地波平。朝奏天長。地久之曲。夕唱國泰民安之歌。此外我無言句。無法可與人矣。師不欲久居官利。受福榮。弘化甲辰。稟官謝寺務。屏居牧雲菴。使參學上首鑑寶船嗣席。既得閑居。惟以錘鍊學者爲務。其

近世禪林實傳

卷之中

五十

在錘下成法器者數名。各在一方。領衆歲丁未。當開山禪師百五十年忌。乃爲報恩。兩安居結制。提唱座堂錄。江湖龍象輻湊者凡八百餘人。安政己未。春受法山之請。再住持本寺。開堂之日。敕使奉給命臨筵。畢。卽詣闕謝恩。文久辛酉。實船先寂。因使弟子行大丘嗣席。輔翼道化。於是宗風再振。慶應丙寅。天皇特賜徽號。佛國興盛。禪師明治元年戊辰六月。應西京大德寺之請。遷泉之南宗寺。修僧堂。開單會。三句七月。又應西京法山之請。住花園。歲庚午大丘蚤沒。師舉寶船弟子超賜公嗣席。壬申。再應大德之請。修僧堂。開單會而住。塔頭總見院。凡三年。後辭歸隱牧雲菴。戊寅三月。疾作。及其革。弟子等環擁。有視且求遺偈。師諾之。二十八日午前十時。師端坐。索筆書曰。去來生死。千村萬家。要見端的。水月空華。咄。書畢。擲筆而卧。眠少焉。泊然而寂。寶明治十一年三月二十八日也。享壽七十七。僧臘六十六。師龐眉雪毛。玉骨插額。眼光射人。狀如應真。平生行履。洒洒落落。專示向上之作用。無滯礙。無蹤跡。凡應諸刹之請者。前後二十四坐。衲子輻湊者。或三百或五百。遠近悅服。侯伯亦往往聽法。要焉。其仁法二教。偈曰。自利

利他。我箇三昧入孝出忠。日用不昧。神明歸佛。偈曰。水歸東海。日沒西阿。野僧亦是。晝途夜家。神佛本迹。偈曰。本地一性。垂迹六和。元是一性。分爲六和三世。因果。偈曰。漁父棲山。然子遊海。知溺畏飢。後來無悔。佛法國益。偈曰。不殺生足。不偷財多。善哉戒教。富國安家。鎮護國家。偈曰。諸惡莫作。衆善奉行。上下相和。善惡不競。生死感業。偈曰。看小夜姬。感業分明。生死爲石。望夫如生。須彌有無。偈曰。人人具足。三昧出沒。自在不墜。凡情三法。一雙。偈曰。指天指地。十當胸。皆不覆。戒律在箇中。華嚴益不益。偈曰。長後輕重。出哀感。誠論益不益。叱箇畜生。祭禮輕重。偈曰。鳥能反哺。雀亦獻花。鳥雀微物。其奈人何。

心華院大拙和尚傳

師諱承演。若州大嶼人。友本氏。幼從其鄉東源菴寶堂隆公。披度受戒。夙負偉志。不拘小節。年十八。欲出遊四方。隆公不聽。已而忽失師所在。遍索無獲。隆公曰。前日余不許雲遊。之請彼或怨恨。入海而死也。先是師匿在菴中。承座上。聽隆公之言。乃出自承座上。謂隆公曰。小子欲遠遊。若不見聽。獨有投水而死耳。蓋藉隆公所過慮。以爲辭也。隆公不得已。與其父母

近世禪林僧寶傳

卷之中

○五十一

近世禪林僧寶傳

卷之中

○五十二

相謀。遂使如其志。師乃去。掛錫於作州本源寺。學文。字歷兩三夏。又入備中。從妙峰於寶福寺。學經論。又兩夏。遂參太元於曹源寺。機鋒所觸。種種皆見。破遂傾心。服事太元。久之。慧業益進。師爲人簡默。威容儼然。爲僧輩所畏憚。與贛翁大震。儀山及豫州超首座。造詣相伯仲。已而以太元之命。入尼州。參卓洲。歷兩三夏。相國拙菴長老招師住心華院。院回祿於天明中。至是拙菴爲假設一菴。以待師。其室苟且。其具闕乏。師至。曾不以枯淡嬰意。後稍營治之。未數年。屹爲梵院。幡蓋諸器皆備焉。天保十年。結制本寺。命師秉拂升座。說法嘉永二年冬。諸老遂興議。推師陞圓覺位。三年夏。本寺修開山夢窓國師五百五十年遠講會。師提唱普明錄。雲衲來會者五百餘人。於是選佛場爲禪堂。施苑院爲食堂。常住爲道場。圓覺東海。南禪巨海。曹源儀山。見性大震等。咸來輔化。蓋一時盛舉也。至六月。師疾作。不復講者兩三日。已而復常。衲侶參請如故。初。天保十四年夏。制師始發。輿於萬年僧堂。曹源會裡。雲衲皆集焉。超首座及但州超溪。天龍義堂爲上首。至秋。衆散。越溪義堂乞掛搭輔化。後歷四五夏。僧堂益盛。而師嘗發風痹。至此疾少入。

膏肓先是越溪一去既而復來轉化一日師語衆曰行應和尚在播州一刹接化是時予請往見之不聽將復請侍者曰予勿復言長老已老且狂矣予曰何也侍者曰近日長老將赴講筵暴雨適至長老脚軟將墮予扶持之長老反怒且詬罵舉杖痛打并非是非狂而何予曰不復請見和尚今聞予言墮于見和尚遠矣師待人極嚴少所許可圓覺洪川年二十七始出家受業於師師居常訶罵不少假貸嘗使洪川參儀山數月而歸師曰胡爲委委隨隨地便歸須明日去義堂住於峨山廬上院來乞見不聽固乞乃延近世禪林傳卷之五十三

見竟坐不交一言或謂師曰義堂有罪乎曰無有然則何故不言曰以其無故而強乞見也又曰吾欲玉成此人而已矣其隨機化誘率此類也晚患風痺至安政二年十月二十一日泊然坐化世壽五十九

東光寺通應和尚傳

師諱祖徹字通應尾州清洲人年十二投勢州桑名大藏寺褒山和尚祝髮受具十六歲初行脚參同州乾山願鑑和尚在鎮下十有餘年終受印記三十五歲應請住于野州東光寺晉山偈曰大悲淨苑南嶽斧東光今日鉢烏藤住山一句人如同直下出頭揭

正燈四十六歲開堂演法接雲衲五十歲入木嵩正拂昇西堂位又應遠州大通院請率衆移法幢於智勝院夏旱近郡村民請師祈雨師曰出山求雨也妖使龍神施雨乃率衆赴于海濱令維那舉唱普門品唱聲未斷海面雲起沛雨大至至翌日而止遠近隨喜僉服其高德上州桐生町幾爾商某來請師曰吾鄉有怪每戶斬所縱網其害不小由是多休業者願師來禳怪師曰諾然汝等亦須每戶以紫服一時間家中老少端坐一室焚香坐禪思惟何物妖怪爲此害翌日其徒佐羽吉右衛門者來告曰昨夜妖怪消滅深謝師誨於是遠近相傳乞祈禱者舊至多有奇驗其驅蟲法今尚傳于其寺師又常印施延命十句經其數至幾十萬部云嘉永七年寅二月廿八日師浴單更衣到醫家敷趺坐諸次向醫乞診醫診左手將診右手則喝一聲視之已坐化矣醫驚而告其徒弟世壽五十有四爲其法嗣者龍潭寺星定和尚一人耳

蓮光寺妙喜和尚傳

師諱宗績字妙喜駿州駿東郡大岡庄人姓星野氏其父娶於藤氏生師幼就其外祖音寺慈深及長過

參諸方耆宿資性穎敏學該內外最邃文辭倦游還鄉住于沼津蓮光寺居十餘年罹疾不痊者二年病中思從前學得底總無着力於是憤然發大願疾少間遂謝寺務往參阿州廣照禪師研磨數年又從尼州卓洲和尚終受印記復還蓮光雲衲四集與俱請提唱祖錄等應遠州大通寺請領衆而往五波涼嶽又遊信州龍門久之特詣賜紫師已老腰肢不仁仍凝然端坐海勵無倦嘉禾戊申六月累罹疾委頓滋甚七月朔乃遣誠諸徒自作偈曰七十五年魔外難窺轉身端的電轉星飛書畢泊然坐化師平生慕大

近世禪林僧寶傳

卷之中

○五十五

常榮寺性堂和尚傳

慧風致故自號妙喜老明月堂世壽亦與大慧相若蓋非偶然也待人嚴厲是以弟子升堂者甚少嗣法獨有伽陵一人而已

師諱慧果字性堂別號藏六又稱曇空防州小郡人少受業東福寺鐘山和尚參見大休月船等又與諸儒交刻苦究內外學後見天倪參侍多年終爲天倪法嗣接待方來二十五年昨夜門截伏賊中有怪命諸宗并神道鎮之無驗後命師即乃率徒十人接心

近世禪林僧寶傳

卷之中

○五十六

昇師於宗門最上位師堅辭不受曰得領真加帖足矣且甘枯淡自淨則則必修殷堂又以本寺故修東福諸堂納選佛場板聲不斷之資接待雲衲五六十八他門來學者亦多淨土宗統稱始佳代見警報寺參師于東福寺後更衣來侍師住心源院盛化東福值佛誕忌兩安居接待雲衲八百餘常校定碧巖集其餘著書數部而今其板散失師既安閑養老好修補院功成則使人住之已則去而他住又政一年四月三日示寂蓮華寺世壽七十有九遺偈曰橫拈倒用无寒乾坤末後一著電捲雷奔正當與麼時下

戒清風付與誰示衆曰諸禪德勿錯行脚之大事大佛祖求法火坑不避或爲四句則身受下釘求半偈高巖捨命下至土身而爲羅刹之床天衣以爲野干之座拾薪設食供給走使等皆是爲法之明證也慧果行履膚淺而無一有可取然究言所志則如佛祖齊肩所以食糲不待調然續氣爲足矣衣破無遺亦期卒步持身爲安矣且道是箇箇什麼邊之事唯只專貴初心先覺知進修之要而竟至百尺竿頭更進步而自出有分故也仍聊草草地立此三闍以示同志其一曰出急從何來入息何處去莫錯道自川

田了什麼道端的是此什麼其二曰若能如此觀得風霜則知泥佛不渡水且道泥佛爲甚不渡水其三曰既知泥佛不渡水則甚梅頻發聲香總開口宗師箇箇已證法門爲什麼證龜作鼈諸禪德既同住此中希廻江湖狂瀾之既倒勿徼今時之弊須細思惟千佛萬祖如何住持十指不沾水百事不干懷正好人作之時何暇談衣食窺人之長短耶若少不護口門致撓亂者决非同志人真是外道之徒也如然者勿食吾法中食勿踏吾此法行地急急退出一去萬里取自快此日共住明明預報之記取記取

近世禪林傳

卷之中

○五十七

建仁寺高峯禪師傳

師諱東峻號高峯攝州池田人也幼而投建仁寺兩足院東陵和尚得度未幾東陵遷化因就靈洞院在溪慈穆禪師修學又就三井顯道和上學教觀後參性堂和尚究已事德望重一時既而受一家相承血脉於在溪和尚住建仁時年四十二後又陞南禪寺先是補五山碩學科任通韓文書之職從事鉅製者久嘗修證千光國師所著興禪護國論著繫二卷行于世師賦性溫良宗機偉濶常爲衆講教觀入其門者嗣堂東緝則堂通銓全室慈保等皆高足也各

住建仁任碩學補通韓文書職師以安永八年化年六十有六

常榮寺諦洲和尚傳

師諱至信字諦洲豐後濱脇人年十歲出家受業崇福寺家山爲性堂歸法嗣接衆三十餘年嘗納恆不減百餘人無歲不應諸方迎請一社寺官嘗謂師曰師住持是寺而常不在是不寺寺也何在其爲住持師曰吾出家本志專在濟度衆生游外其常豈得坐守一寺乎官曰佛子雖固當然既住官寺須爲先侯修迫福也師曰以吾所爲則修迫福亦大乎於是

近世禪林傳

卷之中

○五十八

官亦不堅拒後兼住大照寺兩回擅越供養不減天倪兼住時云聖一國師五百五十年忌雪安居方來雲衲二千五百餘人師以真淨和尚命居前版職聽衆參請後住東福五回值佛鑑祖師六百年忌提唱臨濟錄接方來衲子四百五十人拈香曰正續伽黎西蜀錦全機曾向日東傳悠然一線凌霄路物換星移六百年又住南禪接衆蔭勸林提唱五祖錄歲旦偈曰五岳上頭轉法輪龍淵室內接雲衲龜齡七十又添五至祝曇華希有春嘉永二年七月卧疾於丹波圓悟寺其月二十三日示寂于東福退耕菴世壽

七十六茶毘獲舍利無數徒衆奉舍利歸寺途中自
三田尻港至山口城下五里間民家皆焚香涕泣拜
迎焉遺偈曰東山正續海藏的傳平生受用全在左
邊別別嚴淨毘尼百五十戒徒五萬有三千諸大老
江湖諸位珍重師傳舟戒法三十六人戒徒五萬三
千人師持戒堅固午後不復食持身節儉接人謙讓
一襪二十年雖垢壞不敢捨自浣自補焉法衣外不
著絹冬日不襲衣不可耐則以古紙製之在衆中好
作典座淨頭其意專在護惜常住常語人曰予行脚
日不著新鞋路拾破鞋一隻則特別拾得一隻成雙

近世禪林僧寶傳

卷之四

○五十九

着之如此蓋二十年矣七十歲後兼住大照日一月
兩三回歸故山山川七里著草鞋徒行官雖給興工
只從後年請方應請不敢受盛禮不煩送迎其應化
利生至死不倦云

臨濟寺海山和尚傳

師諱宗恪海山其號參州渥美郡牟呂庄人蘇氏子
幼有出塵之志就其鄉真福寺落髮受具足戒及長
出遊四方遍參諸老師性溫粹與人無競以故尤爲
諸老所愛侍濃州圓照禪師數歲以已事未明勤勉
一夕豁然打破漆桶遂受仙芳牧公印記住于駿州

臨濟寺數歲已而退休又依尾州圓鑑禪師究明宗
旨繼與圓鑑有疾師代接衆衆遂推爲盟主因寄居
總見數夏江湖雲衲又請移化於城州八幡岡福僧
堂於是衲侶輻湊京攝間縑素崇信與俱施財闢山
間徑路修補廊廡宗風之盛倍前日天保乙未詔使
師住持法山師卽詣闕拜恩咫尺天威頃之門在請
行法施者數矣丁酉歲循序移住法山時齡近古稀
應接猶無倦建叢社功勛增佛祖光輝當時號爲海
內甘露門弘化丙午夏得微恙忽然示寂世壽七十
八建塔於圓福山後嘉永元年三月賜諡佛國妙嚴

近世禪林僧寶傳

卷之中

○六十一

禪師諱曰法教弘深而浩浩佛門廣大以巍巍雖云
無量無邊當識入微入細爰妙心開山國師逆肖宗
恪和尚深徹一乘根源遍諸五家派脉宗說通融慧
備有實有權提唱玄要於臨濟叢社非空非色顯揚
心印於遠磨道場其道高矣其德大矣海山之稱固
足表實今有厭感特降褒章

近世禪林僧寶傳卷之中終

近世禪林僧寶傳卷之下

退耕菴主獨園撰

見性寺蘇山和尚傳

師諱玄喬蘇山其字肥後熊本人高橋氏六歲喪父遂發出塵之志從見性寺啓邦和尚薩漆師賦性穎敏梵儀甚偉十八歲東遊豐後事月桂寺春澤和尚又入阿州從學於興源寺玉潤和尚頃之間相與有疾馳歸侍養既而又憶黃蘗九族生天之語懇告與母氏別遂入尾州事卓洲和尚服勤三年頗有契悟

近世禪林僧寶傳

卷之下

入呈所解卓洲難詰數番師酬答畧無凝滯卓洲又問萬頃荒田誰爲主師方答而未卒卓洲忽喝令起去師已歸堂東疑西疑殆廢寢食適分衛于村落憩于柳塘見農夫耕田熟視久之忽然有省不堪歡喜走歸呈所見卓洲首肯自此更從受毒辣者十八年終歸總持卓洲化後入備前國清寺從月珊和尚商量先師家裡事一夏西歸嗣戒道和尚住持見性見性爲肥大夫長岡君香華院大夫欽慕師道德製造堂宇以容雲衲嘉永四年夏雲衲相與結聖制提唱碧巖錄四方來侍講者五百餘人是歲秋詔令師住

于法山師在見性二十八年至是令孫岳承後先是石應和尚在域州八幡圓福寺示寂僧堂虛席江湖雲衲乃請師移幢於圓福安政六年值法山開祖國師五百年遠忌法山衆僧迎師就山提唱臨濟錄七日雲衲屬集至千餘人文久二年值圓福中興海門及海山石應三老年忌師提唱五祖錄者三句來聚者五百餘人是歲尾濃二州諸禪德以尾侯命改德源寺作江湖道場請師爲開創之祖師已移法旆緇素風靡無幾屹爲大道場慶應元年玄德升聞特詔賜號神機妙用禪師二年春尾侯亦賜褒賞是歲秋

近世禪林僧寶傳

卷之下

再住法山值征夷大將軍薨攀刺獻經入拜寢園聖上崩亦攀例拜陵明治元年冬提唱槐安國語督勵衲侶至第七日夜間仍集衆徒鉗鎖甚勒至鷄鳴歸入方丈明日羅微恙居五日中夜病革急召衆徒示末後訓誨侍者乞遺偈叱曰求偈爲什麼侍者曰但書一字足矣懇請不已師乃起坐從容示衆唱四句願文良久云夜如何侍者答云鷄再鳴矣少頃又問答云大且曉師乃曰真好時節矣低聲唱願文端坐而化實十二月十四日也比歛容貌如生吳子聞福祖堂肖像下世壽七十法臘六十二師性溫和然

至接來機報呵風罵雨無所假貸其鍾下出惟堪
焦禪羅山盤嶺恩溪伽山諸老初慶應三年師在妙
心歲日上堂垂語云新歲何處來舊年何處去直下
辨得底有麼有麼乃云四時推遷無作而作萬物變
化不然而然直得真諦與俗諦圓融佛法與世法無
礙龜毛拂上吐氣風雲兔角杖頭著爛熳花萬國衣
冠咸朝鳳闕三門蕊篇趨陪寶殿正當恁麼時法山
亦入應連三昧祝贊國家清泰上卓曰且聖壽萬年
春不老昇平一曲風將雜以何為驗般人以柏周人
以栗復舉息耕老師上堂語云年年是好年日日是

近世禪林僧寶傳 卷之下

好日為甚有新有舊大小息耕是則是如何官路販
私鹽試問諸君從法山昨徂武陵青眼三曝芙蓉之
雪今歸神京白髮初領正法之春却有新舊又無麼
若知落處與息耕老人把手同行不然花須連夜發
莫待曉風吹擊拂齡近古稀闕一春纔聞暖信意鮮
新青皇來也添筋力安住法山轉法輪孟春尚寒伏
惟珍重結制上堂垂語豎拂子曰登東山小魯只這
箇登泰山小天下只這箇是什麼識得底有麼參拈
拂子曰竺土大覺世尊建立圓覺之伽藍無風起
波結束九旬之制守株待兔西天此土依樣畫葫

四七二三不孝兒使爺錢如何天下衲僧穿過鼻孔
無出氣處法山不入他欄裡朝到西天暮東土佛殿
裡燒香山門頭合掌諸人若不然幸是風水泉頭水
足草足各各勿致贅瘦毛長擊拂叱叱這畜生卓柱
復舉五祖演和尚語云今日結夏無可供養大眾作
一家宴管待諸人遂舉手云囉囉招囉囉遙囉囉送
莫怪空踈伏惟珍重五祖老人與麼家宴可謂百味
具足雖然如是一時慶快法山今日結夏亦無可供
養大眾况關淨時卓柱舉本鹽炭價相十倍常住缺典
委其冷澹此故別飯炊香管待諸人卓柱朝打三千

近世禪林僧寶傳 卷之下

暮打八百卓柱伏惟珍重解制上堂垂語云即此用
乎離此用乎有功者賞有麼參乃云孟夏聖制洩却
漫天網因魚止箔鈍鳥栖蘆初秋夏未解開布袋頭
斷耳草鞋生羽猴回途石馬出紗籠只如雲門道還
吾九十日飯錢來又作麼生擊拂秋風吹渭水落葉
滿長安復舉息耕老師解夏小參曰靈山結夏本不
曾結興聖解夏本不曾解解結無拘去來無作相山
僧客秋茲視篆今日已解印却有解結去來之相麼
道得言薦賞勞矣不然要賦一偈以告辭去卓柱秋
風喚起一年夢退鼓三聲欲出門同參拄杖報吾道

又入蓬萊究德源

相國寺梅莊和尚傳

師諱頤常梅莊其字號蕉中又號北禪幼聰敏及長博涉墳籍喜與文人學士遊衆莫不欣慕其韵度焉然中年猶未甚著屏居洛北山端村數歲已而入住于相國寺塔頭慈雲菴自是稍被崇重稱爲妙高碩學焉寬延元年就本喬秉拂安永八年八月遂視象于本嶠天明元年奉幕府命祇役對州堂日覽應酬書啓寬政中兩祇役江都當時師以經學異稱言啓諸儒或議其不可於是幕府會諸儒于城中命師說書諸儒莫能難由是聲名益顯幕府待師甚厚大老白河侯樂翁嘗問師曰聞師未脩禪信乎師答曰然實如明教侯多其真率無隱殊加禮待師平生多著書北禪遺稿小雲棲手簡小雲栖詠物唐詩選解願詩語解文語解等皆行于世

大隆寺晦巖和尚傳

師諱道廓晦巖其字又號萬休爲人豪爽識見卓越常誡徒第曰汝等看破有爲師畢生亦使得看破有爲四字師音吐清亮視日不敗雙眉有一莖脩毛蹠心平滿有文如大字聞者往往請印之于紙師每諾

近世禪林傳

卷之下

五

近世禪林傳

卷之下

六

之。慢展兩脚微笑曰亦復爲黑佛乎其所印皆判然如彫刺者然平生於金錢事未嘗上口觸手雖其司計者生遇齋時不得言及阿堵物師始事筑前仙崖和尚學教乘已歸鄉西江寺杭州和尚謂師曰汝入鎌倉參誠拙和尚可也師曰誠拙有什麼長處杭州曰嘗見他作達磨贊曰九年面壁宿世業因餘得一聲失却半身吾是以識其非凡也且曰汝至鎌倉非辦得大事勿復歸師於是往依誠拙蓋誠拙晚年受清陰淡海鉗鉗者數歲終獲淡海印記因以名當世師語人曰予之得參誠拙實由三四句贊辭古人以一言半句定價良有以也吾門所以重辭句亦以是爾師常慨宗門衰替欲矯正宿弊別立家風使學徒專脩文字禪當時宗門說教衆者多出于師門師機鋒峭峻林喝交下亦善隨學者根機諄諄誘誨是以會下得人最衆非他師所及也師見學徒其虛實者則誡之曰汝自愛勿隨流俗其無氣力不知廉恥者則激罵之曰太郎作坊宇和島伊達侯宗紀待師甚厚每過寺談論移晷而去侯已告老作潛淵館自製圖以視侍臣侍臣指圖中一室白曰此定供何用侯曰欲令晦巖就此休憩耳館成後每師至侯必踐前

言侍臣遂名其所曰晦巖室師罹疾候數使侍臣來問疾病又令求木后墨蹟師延使者就前作書數紙使者復命侯見之嘆曰筆力勁健殊不似抱重病者加以氣韻高雅吾輩不能及也侯素以能書名而猶推獎如此師以明治五年八月廿三日寂年七十五先寂七日召衆徒曰古人多於七日前自知死期老僧亦豫知其期在近因懇切訓誨衆請遺偈師乃書曰七十五年不當半文錢針眼魚吞盡四海蟪蛄蟲陽翻大千師好楞嚴經及老將著楞嚴吐哉鈔已起草成三卷不及卒編而寂病中猶令侍者捧筆硯手

近世禪林僧寶傳

卷之下

○七

自取楞嚴注之一句已畢投筆就床蓋絕筆也師有登岩屋山詩數首其一曰劈開絕壁上青天鐵索飛梯星斗連曾向巖根題姓字重來早已一千年或人以示清人鄭樹伯樹伯驚詫爲傑作師嘗語人曰余初從淡海歲日呈偈曰三世如來無所說新年佛法太繁詞一歌一拍回家樂舜日堯風祝盛時淡海一見此曰汝尙杜撰如是數余方擬議淡海曰果然未徹在又嘗爲衆僧請入室淡海曰嗚呼可厭也夫淡海接衆往往類此師又云予在正續淡海方講出覺經予就他院借水經鈔已而淡海使童行取之數日

不復還予謂童行曰和尚前日取予所用鈔至今尙不見還何也童行以告淡海乃召予作色曰汝實惜斯經鈔乎速將去我何要之取書揮予之頭上予遂逡而退然而予始得見師用處不覺汗下蓋師平生用此機而翰谷輩莫之會可謂真樂現前無知而信之者矣論者以爲時人稱晦巖爲博覽強記則洵不誣也但晦巖得誠拙淡海清蔭二師極其總奧遂受淡海印記而時人乃以晦巖爲教乘法師則殊非晦巖本分也然時人不能知亦宜矣蓋晦巖所憂在於當時禪和子多乾慧者而少深明法理者是以專唱

近世禪林僧寶傳

卷之下

○八

文字禪化導龜納其意急於救時弊不迫顧他是晦巖之所以爲大也夫晦巖由杭州一言倚信誠拙終身不變杭州固明於知人而晦巖亦可謂篤于信道者矣程奈晦巖知月船下有人而不知鵲林下有禪是不見爲阿其所好若使晦巖得參鵲林下禪其造詣恐不止於此惜乎其終不能出此晦巖嘗語學者曰古人云報緣虛幻要不可強也嗚呼晦巖之緣在月船下而不在鵲林下其亦所謂虛幻不可強者歟

太平寺贖翁和尚傳

師諱宗俊贖翁其字初事隱山又從太元參究數歲

業已成住于備後太平寺又應請入藝州佛通僧
後又轉接娶於東福僧堂數歲既老反于太平年七
十三而化

見性寺大震和尚傳

師諱慧且字大震阿州名西郡人年十歲禮興源寺
大室朝公祝髮受具時大室兄蓬洲住見性及疾篤
遺囑大室以師爲嗣子大室曰他尚幼未足以爲嗣
遂洲曰彼天資溫雅審別淨穢異口必成大器矣師
侍大室八年修學大進文化六年己巳年方十八受
德島辰命住于見性寺已而遊方始謁豐之隱山掛

近世禪林傳卷之下

九

錫數年及隱山示寂又參尼之卓洲者數年後復參
究一夕有省又去參見備前太元掛錫數年有故歸
省太元有送歸偈曰向上宗風將墜地千鈞繫在
阿誰曾聞繼到室三際腦後須思欠一担多歲難開
行脚眼當陽何許老胡知且禪此日歸鄉上切忌人
前誇口皮二十九歲參豫州行應留錫八年三十六
歲因大室罹疾歸省大室曾有言曰定與且共大業
皆過於余也師聞之彌憤發曰予不可以此知也
參行應復掛錫四年四十歲始歸寺稍坐是時無學
老師太元老師歿後傳光禪師自號無學又號五斗子附師以春夜日就偈

曰大道迢然期大機僧家低恐多輕忽參禪纔得
心空一口併吞三世佛危坐形容似冰清覺懷人我
幻化談談談談談談談談談談談談談談談談談
跟金銀難却住舌本堪聞乞丈夫意氣自衝天弘誓
海中須度物君不見二十年來曾苦辛爲君幾下苦
龍窟他時別有生涯在會不會俱與塵拂天保四年
乙巳興源寺夏制有維摩會玉淵老師講維摩經闕
衆三百五十餘人師輔佐之九十日間未付一日而
憚忘其負諸馬師受藩侯命募緣於阿波兩州獲若
千金而建寺又軍裡玄關等且以餘財再興龍音咸

近世禪林傳卷之下

十

師之德力也後設再中興碑以紀其事焉師至五十
七歲始開堂設五祖錄會衆徒二百餘員嘉永二年
己酉朝廷特賜禪師徽號於玉淵玉淵適患中風師
因代之參內拜受勅書三年庚戌京都相國寺
使大拙和尚開普明錄會師與大拙同參致來輔化
四年辛亥九月京都東山高堂寺將建築僧堂請師
七年甲寅應高堂寺請清靜農規規者規矩也
十人安政三年丙辰二月辭高堂寺而歸又應丹波
東源寺請冬制提唱禪關策進并授信男信女菩薩
又其他前後應諸山請者數六年己未師方六十八

緣受教任妙心寺住職萬延元年庚申二月設成會於見性寺三月授與戒法於雲水菴及年七十四潮寺務令嗣子承應住持師掌寺務者凡五十七年精勤如一日諸宗編流莫不敬服焉承應嘗寫師詩像請贊乃自贊曰勿啓予手勿啓予足額有圓珠照后昆股無七十二黑子咄咄也師晚年患中風臥臥數年明治三年庚午八月十七日遂寂春秋七十有九法臘七十年嗣法者承應念英道勉厚州舍東菴果四人也

龍福寺春應和尚傳

近世禪林僧寶傳

卷之下

〇十二

師諱禪悅字春應備後人參見尾州卓洲和尚終盡其龜吳歷住于州之龍福安國後發軔於信州福崎大通大保十年奉勅住持妙心賜紫衣又移幢於濃州虎溪山接雲衲數年其十二年春大設法筵提唱臨濟錄是爲末後會又移幢於大龍僧堂接雲衲四年而去自是應諸方請者數年又移幢於遠州長野郡內野村正壽院結冬制會中發疾十月六日忽然示寂遺偈曰朝三暮四七十三年無足銀馬陽翻梵天同村橫田茂共衛深迫慕於師改村中門爲陀堂爲僧堂改稱萬福追請於師爲開山勅諡靈機

神應禪師松源寺東翁天喜寺伊山清源寺遂巖天猷寺敬雲成出于師鍾下建塔於萬福僧堂側

龍福寺萬寧和尚傳

近世禪林僧寶傳

卷之下

〇十三

師諱玄策號萬寧尾州善師野村人也幼而穎異夙慕佛乘父託之龍福寺大行和尚鍾染受具及長南邁謁行應禪師於豫之龍潭寺參狗子無佛性詰一朝忽有省焉隨從行應八年既而歸龍福受大行印記轉位於法山第一座於是迎棠林和尚於龍福寺晨參暮請遂盡其蘊奧董席者廿有五年付法於真嗣大休退居玉桃菴人保甲辰依華園衆請領保社三年尋寓尾之祥雲寺嘉永戊申應同門之請設雲門語要會於龍福學者雲集此年又應瑞龍寺之請管僧堂明年亡西救賜妙心住持職綸帖在瑞龍凡十二年其應四方之請凡三十餘會道化之盛冠一時四衆爭先歸仰萬延元年庚申三月示微恙終不起侍者乞遺偈叱而不許奄然俄化於天澤菴卒卽瑞龍之僧堂也世壽七十一法臘六十一緇素聞之莫不哀慕焉乃茶毘建塔於龍福是歲五月救諡神機妙感禪師嗣法唯有大休後耳餘猶未顯云

東山寺天猷和尚傳

師諱玄鳴。天賦其號。住持丹後東山寺。天性清白。志氣豪邁。與備前太元和尚同參。於圓照禪師數歲。太元深重之。南禪大觀遷化。嗣法闕人。乃請師嗣席。因在南禪僧堂接衆。及老歸丹後。願養于養母村。福聚菴。年七十七而化。

東福寺海州和尚傳

師諱楚棟。字海州。別稱拈華室。濃州大野郡伊尾村人。九歲就同州石津郡多羅村觀音寺大鵬和尚。得度受具。十六歲謁尾之卓洲禪師。卓洲授以孤峯不白。乃日夜參究。經數月。稍有省悟。十七歲歸省桑梓。

近世禪林傳

卷之下

〇十三

檀越高木氏。待遇恒篤。時隣鄉鑑治村有怪祟。闔鄉大患之。乞師濟救。師乃就其地坐禪。怪事頓滅。十九歲再參卓洲。爾後七年間。日夜究明。未嘗臥寐而寢。終究盡宗旨。與衆矣。一歲冬制會。東福寺有大結制。天下羣林雲衲悉赴集于茲。時師與海山芝山妙喜蘇山蓬洲結伴相約。曰。禪門厭多衆鬧熱。這般冬制。真是好時機。宜共俱粉骨碎身。擇師入其爐鞴。一口與衆俱航。矢田河遇暴雨激流。舟頗動搖。衆或有念觀音者。既而達岸。師向衆曰。禪者豈假觀音力乎。念之者根然。二十七歲卓洲遷化。爾后師與蘇山蓬洲

等俱參妙喜。又往城州圓福僧堂。補佐海山。開拓其境內荒蕪。理爲莊園。時尾之長壽寺瑞應和尚所誓諸佛諸天。請師嗣住。師乃住于長壽寺。日接雲衲。交士大夫。於是士民參叩禪門者愈多。寺中百廢俱舉。方丈厨庫書院等。往往改觀焉。四十七歲奉勅入朝。尋視篆于江州永源寺。江湖雲衲爭先輻湊。叢規井井成條。理瑞石宗風復盛焉。慶應元年。師年五十八。當是時。外事頻至。天下騷然。師雖在方外。不勝憤慨。屢論尊攘。多與憂國之士往來。六十歲謁見尾州公。說以當今急務。勸以起田官如雲。再就職。公頗從。

近世禪林傳

卷之下

〇十四

其說屢賞。師以財物明治紀元。應公請爲溺死者修大齋會。公爲嘸金五十圓。師即悉散與貧民。公聞之。亦行賑救焉。是歲十二月。朝議將廢熱田神祠領地。內僧寺三十六坊。師爲說尾藩知事及近衛神祇伯止之。得不廢。濃之岐阜稻荷神社前僧寺。亦因師說。免其廢焉。二年。應東福寺請。領雲衲衆。寺中溪上舊多楓樹。俗呼曰通天橋。紅葉秋冬之交。遠近爭來。留賞。是以茗肆櫛比。人影雜沓。喧闐可厭。師及住持。乃以爲禪學障礙。悉伐楓樹。以絕其跡。京中相傳以憚其嚴焉。六年。師六十六歲。視篆于東福寺。七年七月。

補大講義九月補權少教正九年五月補少教正十二月補中教正師天資豪邁果斷知機如神其日用行作甚謹嚴不許尼弟謁見日率徒弟其食粗糲嘗艱辛其在長壽寺也寺舊負債二千金住水源也亦舊負債一萬金師咸設法悉償之且方其在水源寺堂宇荒廢不堪上漏下濕師與眾俱往刈葭來修補之又齋者長壽寺寺祿之沒入也其梵鐘及什寶器等皆被斥賣師聞之自捨金五十圓悉購還之因買耕田數町爲其永續資凡平生所爲諸善多此類也十一年四月二十一日以疾忽爾遷化世壽七十有

近世禪林僧寶傳

卷之下

○十五

一 嗣法者數人

建長寺拙堂和尚傳

師諱元訪字拙堂姓松岡氏丹後田邊郡人幼拜州之德藏院文泉剃髮稟具及長遊方歷參法泰寺函海東福寺一山等要入建長寺與淨煥輔參究積年終得其印可代董法席天保己亥公帖領建長寺弘化乙巳入寺開堂嘉永辛亥公帖領南禪寺佛生日拈香偈曰藍園七步小孩兒到處遣人覩面欺一杓香湯猶潑著杜鵑啼在綠陰枝西來開祖忌示衆觀音正體露堂堂間鑑影中不覆藏借手東平重撲

破半輪明月滿蒲洲先是應福山請匡西來徒衆十二年中間再興長壽寺付法於一叢致住焉真淨滅後受菩薩大成於慧日諱洲嘉永壬子三月十九日示疾沈綿至冬十二月十六日夜半乃書偈曰罵風呵雨六十餘霜喝欲再來商量遂倚椅蛻化

東禪寺蓬洲和尚傳

師諱禪苗號蓬洲姓木田氏豐後海邊郡佐賀國人幼而穎敏八歲已有出塵之志父携師託鄉之德藏寺潛耕達公難染受具既疑有己事勤學不息歲十八拂衣遊方到蒲中井山寶福寺見妙峰和尚參究

近世禪林僧寶傳

卷之下

○十六

精修會聞尼洲總見寺卓洲和尚道風頗盛直往咨問疑問卓洲見知其法器願加鉗鉗朝參暮請連夜不接曉一夕忽有省入呈所解卓洲舉難透因緣以銅師意於是疑團增熾益精鍊刻苦脇不貼席者十餘年一日古人誦訛公案一一了然目前乃走入室卓洲迎見其喜色乃囑曰西來密旨汝今得之善白護持焉無幾卓洲示寂於是其上足海山和尚旺道化於城南八幡達磨堂師屢輔佐其化春應和尚亦旺道化於濃東虎溪山師又輔化且屢往深沐荒塚等幽怪之地試已定力如何自知良盡矣又濃

州八十一鱗千村平右衛門者東禪寺檀越而卓洲之參徒也。曾敬慕師道風，敦請之前席龍淵珠公付與印記。于師師固辭不聽，終董東禪之席。天保八年丁酉四月轉位於妙心第座，尋接得方來開慈輔。十三年壬寅秋應衆請講碧巖錄會者二百餘人，從是道價日騰。僧侶星集焉。師天質朴實，常慎細行，德功愈深。嘉永元年戊申年方知命奉綸命出世于妙心，賜紫衣。是後應諸州數十利之請，上法席者若干會。教導遍遠，近細素餐，悅服。明治二年己巳應請移其於虎溪山鉗鉗學。者三年十月應南禪寺僧

近世禪林實傳

卷之下

〇七

堂請提唱碧巖錄。五年九月浴溫泉，十月忽然發疾於船中。泊船於讚州九龜客舍，脫然而化，保齡七十一。鉗下成法器者數人。嗣師法者愚海達無禪舜，其餘所度弟子不遑枚舉云。

天喜寺伊山和尚傳

師諱祖安，字伊山，姓山田氏。天明八年戊申生于西濃高柳邑，幼而穎敏。九歲投州之市瀬邑天喜寺梅叟和尚剃染，受具。受內外經典，勤學不倦。既疑有己事，文化四年丁卯春年方二十，遊方參訪老疑。問然加會，聞州之瑞龍寺天澤菴隱山和尚道風頗盛，直

往參之。隱山只舉獅子無佛性因緣，毫小容他話，以銅師意師益精修二十六歲。隱山使師隨侍尾州大仙寺雪關和尚。既而隱山示寂，雪關以其遺命移天澤菴，解決學徒。師亦隨侍。一夕有省人呈所解雪關屬加鉗鉗，由是師變猛省。朝參暮請，刻苦十有餘年。一日豁然大悟。古人謂訛公案分明，目前入室玄論無復窒碍。雪關以臨濟栽松因緣印可師矣。文政七年甲申春，師歸省梅叟，得其記荊董天喜席翌年乙酉轉位於水山前版第一座。雪關曾字師曰伊山，取諸伊吹山，以比其在江濃間超卓。衆山云：師天資

近世禪林實傳

卷之下

〇八

篤實，常慎細行，德行愈深。每諸老宿開法會，必往輔佐之。研究宗旨，蘊奧領主尾張公褒賞師，任職之勤勞，兩賜金帛。嘉永二年己酉，師年方六十二，乃謝寺務，付囑弟子竺隱峻公。自屏居隱室，稱牧牛菴。鉗鉗晦跡。五年壬子春，遠州內野村萬福寺久教主細素請師補之，固辭不聽。乃弗獲已，移于萬福領衆。徒從是道風日盛。明年秋奉綸命出世法山，賜紫衣。尋應諸州數十利之請，建法幢二十七會。教導遍遠，近四衆僉悅服。文久二年壬戌春，橫田不昧居士喜

捨淨財改造萬福寺諸堂不日落成改觀因稱師爲中興祖元治元年甲子春改宅號曰喜齡軒又於天喜寺開木後會講臨濟錄衆三百餘人清規嚴整其晉山偈曰下山恰是上春今日歸來物物親屏庫山門起歌舞燈籠露柱笑開闢是歲雨安居應遠州坪牛邑東光寺請講岩錄衆八十餘時師感微疾示諸徒曰老僧近死使侍者執筆口授遺偈曰七十七年罵教罵禪未後敗闕屎廁梵天既而示寂於東光隱室時五月十六日也世壽七十七法臘六十九闍維分骨於天喜萬福東光三所各建塔焉嗣師法

近世禪林僧實傳

卷之下

○十九

者爲筆隱峻公其餘所度弟子不遑枚舉云

天恩寺石應和尚傳

師諱宗眼號石應尼州中鵠郡溝口村人因以溝口爲氏其先出自源氏師年十一見總見寺開鑑禪師始知有已事遂從海國寺白源鶴公薙染天恩機敏十七歲出遊四方遍敲磬諸老諸老皆器之已而聞豫州龍潭寺慈照禪師道風甚盛乃往從學焉行業純一與儕輩別屢有省悟然不以少得爲足孜孜研尋日夕不懈會參州片寄天恩寺萬拙宜公疾病發書召師師乃往宜公付以大法數日而化師既不

得遷讓遂住天恩文政丙戌春轉位於本山第一座於是托院主以院中事復往參圓鑑圓鑑以古人語訛因緣向上此子試之師契悟異無芥蒂圓鑑云汝雖然如是嗣後猶欠一鎚在師於是虔勵精勤勉寢食俱廢一夕定中忽然大悟從前所疑皆渙然氷釋如出關中見白日不勝歡喜走質回鑑語本平回鑑印可曰這漢今日方了畢矣從圓鑑三年復歸天恩猶常從自休神應運光明覺圓福妙嚴討論以贊佐化道未嘗須臾而廢輟也弘化丙午冬江湖雲衲請移幢於八幡圓福居十四年衲子益輻湊焉師外溫

近世禪林僧實傳

卷之下

○二十

內剛門墻孤峻少所許可故道風高於一世所在相繼請扶登宗教嘉永紀元戊申奉詔住于妙心三年遂移幢於妙心安政四年丁巳秋罹微恙八月十三日乃集衆遺誡溘然而化世壽六十三法臘五十三弟子嗣法者爲周田祖苗賴英祖宜二人

兩全寺盤谷和尚傳

師初參豫州行應數歲頗極蘊奧及行應遷化復依南禪大觀值大明國師五百五十年遠忘結夏湖江湖衲侶來聚者八百餘人時大觀已老師常輔化已而歸飛州居兩全寺尋罹微恙終化大觀哭而慟之

仍以吊之曰乾坤之內宇宙間昨夜一珍何處還日月暗昏人不見銅頭鐵額淚潸潸珍蓋師諱也

正圓菴雪航和尚傳

師諱孜純豐前小倉人幼入其鄉黃蘗派廣壽山落髮受戒已而轉派臨濟遍參諸方耆宿初從妙峰於備中寶福寺又依卓洲於尾州總見寺授妙喜於遠州鳥坂侍象範於下總遂從象範移居兵庫於是易衣執師資之禮及象範寂則依月珊於備前國清寺終盡纔與受印記已而入京住于天龍塔頭鹿王院境內正圓菴居三年厭寺務煩劇屏居于廣澤畔江

近世福林僧傳

卷之下

〇三十一

湖衲子慕風幅湊師又去叩妙喜室會妙喜遷化伽陵岡席居永田使師留居鳥坂後又應聘移居庵原圓應寺又移濃州虎溪厨下枯寂幾乎常人所未能耐而師居之晏如也居五年時駿州細素更造西湖山隆福寺請師住持之其地與富嶽相望帶三條崎白雪青松掩映窓外足柄田子諸勝皆屬園中佳致師素好山水既移寺因號其居曰餐松軒怡然有終焉之志遠州道俗又結一菴請師居固辭不聽師又往往焉號曰咄哉軒於是常往來駿遠間誘化道俗居數年罹衰疾就山原長福寺自養一日剃髮沐浴

著淨衣跣趺聚衆示末後因緣又書遺偈曰咄咄擲手行六十六怒眼睛書畢擲筆坐化實明治四年七月八日也嗣法者數人

龍澤寺星定和尚傳

師諱元志字星定尾州中嶋郡人歲十九投洲亡輝東菴願鑑和尚得度受具初其幼也常讀阿彌陀經數年一朝撞著經中一團疑處問之某寺主不能答師於是始決志出家及願鑑遷化參野之通惠刺苦鍊磨以夜繼日經歷許多寒暑終受印記三十六歲董豆州龍澤席三十九歲通應示化其徒第數十人

近世福林僧傳

卷之下

〇三十二

來龍澤結夏安居四十五歲豫修獨妙禪師一百年忌評唱息耕緣開筵普說二十五座接化雲衲三百餘員開卷偈曰饒舌息耕諸佛師象王背上取次騎嘯歌曲曲無人得獨許真龍真子知五十三歲到尾之瑞泉授心地戒法從此在駿豆兩州間應四衆請施設戒會凡八所垂誠會又許多五十九歲本嶠勸獎改衣著黃是歲補大講義六十二歲陞本山住持職著紫明年補權少教正六十六歲是春示微恙終不起其臨終也書偈示徒曰六十六年如聚沫多少漏逗末後句實明治十四年六月十二日也留龕三

日容貌如生。葬全身於龍澤之上山。嗣法者數人。其在俗中。則山岡織巾。居上深嚮慕。德風親。嘗鉗錫。暇則自東京來叩參者。一晝夜。夜半必到。喫麥飯。飲冷茶。而反有坊者。入江長八。亦慕師德化。寄留殆三寒暑。嘗造師之壽像。安置於龍澤。

曹源寺寶船和尚傳

師諱義鑑。字寶船。越後人。入州之煥興寺。得度受戒。從游播之儒某。學外典者數年。二十七歲。始參備之曹源寺。侯山和尚四十一歲。遂爲儀山嗣法。輔化數年。嘗有佛涅槃偈云。河邊翠柳淡含烟。岡裡紅桃艷。近世禪林傳。卷之下

〇二十三

光福寺越溪和尚傳

師諱守謙。字越溪。若州高濱人。甫十歲。投州之遠敷郡小濱常高寺大圓和尚。落髮受戒。十八歲始游方。掛錫于阿州興源寺。後掛搭于備前曹源寺。參棲梧和尚者十餘年。天保十年己亥。應請。董但之。光福寺。既而委寺務。于一僧。再參棲梧。精究積年。嘉永元年庚申。應丹後與謝郡文殊村智恩寺請。大開鑑。輔鉗錫。四來衲子。未幾赴京師。龜山勝會。會後留錫于萬

近世禪林傳

卷之下

〇二十四

年山參無爲和尚。時無爲方臥病。因使師代攝衆。後遂受本寺前版職。居職十餘年。安政六年。法山將遷。張僧堂因請師來。督衆師應之。乃委付前版職。於獨園。移住天授院。遂創立禪堂。新行叢規。後兩進本山。住持位。明治十一年春。豫修二世圓鑑國師五百年忌。兼舉開單式。其十六年。草創江湖道場於但之朝來那森村。扁曰楊岐寺。以佛國興盛。禪師爲開山始祖。盛行叢規。明年春。師罹篤疾。久之不痊。然以法山僧堂無主。其秋力疾歸天。授旣而疾革。攝衆猶如平日。十月十二日。獨園問病。師遺囑後事訖。一笑而別。

鹿王院義堂和尚傳

師諱昌碩。字義堂。爲人豪邁。軀幹長大有并吞江湖

亡氣初卅錫於備前曹源依棲柏老師又參無爲老
師於相國適其本師臥疾於鹿王院師侍護其勤甚
則入相國參無爲夜則還鹿王事其師如此者數歲
未嘗一日而懈怠元治紀元甲子七月長滿老臣率
兵屯于天龍遂入關訴冤薩會諸藩守關不許入於
是戰起于禁門長兵敗走師素抱奇節長人多與之
相識薩人疑其有私召師至邸壯士七八人扼師手
足勒訊之師略無動色應答如流因得以解後壯士
語人曰爾時吾輩盡氣以盡其尚和尙絕無怯色真
偉人也後一夜深更師過四條堤時會津出兵伏于
近世神林僧實傳 卷之下

堤下師不知亡也兵士或誰何亡俄起擬銃師大喝
一聲曰何物奴隸唐突乃爾大將爲誰吾當面說之
兵士聞之倉皇出謝其失認且忠告曰亂後多警道
路不測和尙勿復冒夜往來焉師已屏居於廣澤要
行院后又徙于鹿王蓮天龍僧堂事先是長兵心敗
走也會薩追兵逼天龍遂縱火掃其跡堂宇爲之盡
燬久之不能復更造師悵鬱不樂無幾罹疾而化壽
五十一

梅林寺羅山和尚傳

師諱元磨號羅山遠州人幼就其鄉廣嚴寺披度出

家在明華中嶄然超卓夙知有此事晨夜參禪僅覺
沈昏輒炷線香把之屹立以自警已而西遊事備前
果滿禪師無幾果滿寂更從興盛禪師參究數歲殆
忘寢食以受業師屢促歸遂遠遁入肥後事妙用禪
師時妙用住見性尙未久爐鞴方新鉗錘尤嚴師已
見妙用妙用深器之竭力鍛鍊師亦精鍊刻苦遂極
其蘊奧師始抵見性同參者四五人而已因以方
雲衲陸續來聚而衆皆推師爲見性門下先受業
師知師在見性又遣書促歸師不得已將歸會筑前
梅林悅堂寂衆請師承後師以嗣法重寄不可得辭
近世神林僧實傳 卷之下

遂留住于梅林實天保甲辰也是歲秋昇本山第一
座尋詔賜玉鳳塔主之號師在梅林專以宗乘爲務
隨機化誘不拘細故於是江湖雲衲翕然輻湊衆常
不減八十人猶時訪問妙用佐其化度安政六年己
未二月又奉詔視篆法山天使臨遊四衆屬望是
日師詣關進見謝恩事咸隨例而德華益輝然仍躬
與衆僧同勞逸勤勉莫怠久之以疾謝事慶應二年
乙丑遂讓梅林於無學屏居臨川亭然其提誨之勤
則加於住寺時三年丁卯春罹疾二月八日召諸徒
諄諄遺囑諸徒或有感泣者師謂無學曰老僧今日

修行百体如裂是好時節矣。又書偈曰：通身是疾，通身藥屑。撒梵天白汗流末後，何須荷柳標。下峯萬壑絕，縱由書畢復曰：病也得生，也得死，也得唯此境界。正是好時節矣。汝等豈可不日夜務於此哉。自是緘默不復言。是月十六日終泊然而化。世壽五十三。法臘四十一。師容貌魁偉，為人端嚴，雖燕坐獨處，儼若臨衆。目光炯炯，若不可親近者。及聞其言，則溫若春風。是以學徒心醉，不忍辭去。後中將有馬疾待師，甚篤。平生問道不可勝數，及疾病，命侍醫救藥，甚力。師已寂，詔賜諡，大綱正宗禪師。

近世禪林僧寶傳

卷之下

〇二七

長福寺白翁和尚傳

師諱床雪，字白翁。初受業，讚州綾河，頗有所得。已而入駿州居長福寺。與其侪謀請雪航住。于一庵與南禪梅嶺臨濟貞山及遠州寶禪同參焉。師有文才，應建仁之聘，專掌文學事。兼修禪觀，居四五年去住妙。心塔頭靈雲院。又居泉州南宗久之。辭去後居靈雲。有偈曰：果決生涯出鄆國，浩波順逆任風遷。逆水坐斷花園下地裂，天崩亦適然。又曰：四頭滄海動波瀾，遊戲羣兒奈患難。誰掉慈航施濟技，悵然獨坐倚欄干。後示寂，世壽六十二。

妙心寺薩門和尚傳

師諱宗溫，字薩門。城州人。幼有出塵之志，投妙心寺塔頭如桃院般啟甫公。薙染京具及長慕菩薩行願。十九歲南詢見妙感禪師于阿州。後東歸，正源禪師於濃州。勵精服事者數年，遂有所契悟。天保乙未冬，承田翁命，董天球席內申春轉位於妙心第一座。自是掌記室及執事，擔任法山事務者殆二十年。宏政紀元甲寅春，奉妙心住持職之綸綍。三年丙辰，應衆請入寺開堂祝誕。啟義翌春參內謝恩拜。大願師天資溫順，安靜寡默，然其於宗義則精修謹嚴。

近世禪林僧寶傳

卷之下

〇二八

不苟徇人眼，則謁江湖諸大老，廣博聞見。且雖晚進，後輩苟有所長，則必虛心商量，不恥下問。終食之頃，莫敢忘扶宗焉。萬延紀元庚申秋，應瑞龍僧堂請，統督衆納慶應二年丙寅春，應江湖請，提唱碧巖餘學。者望風來集。又應諸刹請，遍行法施，緇素歸宗者，不知其幾。何明治三年庚午，再住妙心寺。既而慈微志終不起，留一偈示寂。實四年辛未正月十一日也。世壽六十七。嗣法者爲薩薩水格則門二人。

大生寺惟菴和尚傳

師諱祖權，字惟菴。豐後州南海郡浦江村梶田兵左

衛門次子也。家世業漁獵。師不好殺生。甫十三。禮同村東光寺豐田和尚。落髮受具。十六歲始志遊方。先參見濃之大勝寺石田老師。又謁武州永田寶林寺妙喜老師。留錫三夏。自乞作園頭。又作薪頭。妙喜勸師使跣趺。又去往拙之遊販。借一卷以住朝。則行鉢。夕則涉獵。澧籍拈据。勸者歲餘。復歸石田。庭下刻苦切。剴以究明。宗旨天保十一年。於筑後梅林寺。悅堂和尚晉山。日忽然發諸堂再建之志。既得悅堂之許。乃植樹木於山野。開拓田畝。常自把鋤。從事誓曰。日不作。一日不食。於是以前再建。經畫自任。且教育

近世禪林僧傳

卷之下

〇二十九

徒第六七人。既而再遊之。宿志未休。又出參肥後縣山老師者數年。安政五年。依各老宿。勸勵開設禪安國語會。是夏。又以其吹噓不獲已。視篆于妙心寺。既而又應城州圓福請。遂移幢於圓福。僧堂接雲衲者十六年。及齒方七十一。衰病並到。嗣子典嶺等相謀。迎師歸於大生寺。歸後疾彌篤。四月八日。入浴。要示尋集徒衆。示遺語。連日唱偈曰。這裡從來何記年。不妨應用轉那邊。人生七十稀。今占一氣尚餘。空劫前。舉揚了。沈博。賜屈終寂。實明治十三年四月十日也。師爲人謙退。自慙不德。每接衆。必自稱枯淡。且所主

手把鋤耕耘。以獨力開墾荒地數町云。師遷化後五年。一夜暴風。破壞本堂。於是諸方檀徒同心協力。圖其再建。未幾新築落成。師宿願至是始果矣。

玄要寺馬應和尚傳

師諱祖。諱豐。前小倉人。以文化九年壬申四月八日生。初受業。同國內裏村靜泰院洪嚴和尚。修遊方。見下總樹林寺象貌和尚。從之七年。及象貌遷化。乃參備前國清寺月珊和尚。歷八年。終盡玄奧。嘉永二年己酉。得綾河和尚印記。住玄要寺。轉位妙心第一座。其年十一月朔入寺。晉山。偈曰。可笑多年行脚事。水

近世禪林僧傳

卷之下

〇三十

村山郭費吟呻。如今占坐泰雲裏。依舊喫茶喫飯人。在任片年。主明治二年己巳四月十五日。辭職還山。偈曰。輕如毫末重如山。二十年來住此山。歸路勿忙覓無處。閑雲一片水還山。自此棲息于栽松菴。五年壬申十月。受教導職試補之命。明年五月。給詔出世。妙心九年丙子九月十一日。補權大講義。爲靜岐宗內中敎院院長。十三年庚辰十一月十七日。遷入講義。其月廿四日。遷化。齡六十有九。

陽見寺鼎宗和尚傳

師諱鼎宗。初住豐后陽見寺。既而謝去之。謁海州於

江州永源後海門移住東福寺師亦從徒佐化師持律堅固接衆以威嚴衆咸畏之後以疾化于東福寺

法泉寺綾洲和尚傳

師諱至道字綾洲讚州高松藩上和出某長男也爲人沉重果毅以身生武門夙學劍道然性景信佛家恒好讀佛典遂感生死一大事因緣疑念不措弱冠遂決意自剃髮披緇由從濃州正眼寺雪潭禪師辛參苦修者凡十餘年其間參諸方善知識亦多竟究宗旨女奧受雪潭印可元治元年七月住于高松法泉寺居十有一年及雪潭遷化乃奉其遺命移幢於

近世禪林僧寶傳 卷之下

三十一

渡之瑞龍寺僧也。其年歲有明治七年奉妙心寺之命巡牧尾參叡達四州明年三月本山勸獎著紫衣師接衆於僧堂者凡八年既而有微疾十一年十二月廿一日終示寂年四十有九臨終謂侍者曰若有入問遺偈則只須以此語答之因口誦四句誓願了而瞑矣初師之將出家也就法泉寺監堂和尚切請祝髮爲徒晤堂未可蓋以師正爲和田氏嗣子也師不得已乃計脫出一夜到某港告舟子曰聞有明旦出港船法泉寺一僧將急往大阪幸搭載而達之舟子曰諾其夜師自落步待天明東裝爲行脚僧走

見舟子舟子不曉其爲前夜來人卽迎入船中遂到大阪云其機敏如此。

聖福寺愚溪和尚傳

師諱自哲號愚溪姓大谷氏出雲楢縫郡人以文化二年己卯某月日生六歲離父母就同州觀音寺大林和尚薙髮得度天保七年丙申始有遊方志先謁阿州興源寺玉潤和尚少有所見於是欲究枯華微旨一輩航海參肥後見性寺燕山和尚精鍊苦修者十四年果究室中蘊奧於是振錫赴尾張從大仙寺韶因和尚研磨已事且參究諸方宗匠再還見性寺

近世禪林僧寶傳 卷之下

三十二

而結脚焉安政二年乙卯應請繼筑前聖福寺之法脈蓋千光祖師一百二十七世也云明治六年該寺職於徒衆棲遲于護聖院枯淡自安十八年七月嬰病翌月初八日終端坐而逝矣世壽六十六法臘四十八遺偈曰東奔西走六十六年末后一句鼻孔遼天喝又爲信徒某臨終揮毫書二紙時師四支既厥冷侍者憚其勞師笑曰生來自由其豪壯如此師平生甘淡泊毫無虛飾上下古今以勸誡時僧大振起宗風其住持聖福寺也修繕伽藍撫循信徒孳孳不怠舊藩黑田侯深加敬信喜捨淨財者兩三次王政

維新後釐革社寺祿制。於是州中巨寺大概委靡。聖福一山依然存舊觀。世以爲是。至師之力也。州之溪村塚某嘗歸依吾宗。結構一草堂以爲安禪趺坐之處。名曰法喜菴。師之在世時時往來爲脫洒活機。關後遂以師爲其開基云。

達磨寺長沙和尚傳

師諱德敬。字長沙。雲州出雲郡人。七歲發出塵之志。父携之投同郡吉成寺。道倫和尚視愛。授具甫。十六常思教外別傳。古義滯疑。填胸十八歲。挾複子抵周防常榮寺。從誦州和尚行業純一。嘗辛喫苦。日夜

近世禪林傳

卷之下

三十三

究明已事。既經七寒暑。未有省悟。自謂予於和尚無緣。乃辭去。適濃亡天澤菴。參見雪潭和尚。曉夕孜孜不懈。一十五歲始有省悟。然猶不敢自足。常以古人所謂力不足者中道而廢。及靡不有初。鮮克有終。二語存眷。服膺至或忘寢食。既而雪潭移法幢於伊深村正眼寺。師亦從之。於是巨刹屢請來住。師皆堅辭不應。三十三歲不得已應金地院僧錄司堅請。往住于和州達磨寺。明年業已受寺事。乃再扣雪潭巖房。入爐鑪朝飯夕鉢。二十九歲終盡得其髓。受印可。從是歸家穩坐。聖胎長養。有年于此。安政丁未諸方

英衲相率來乞掛搭。師以厨庫淡泊不敢容。於是諸衲弛擔於東廂西檐之間。托鉢村閭。採薪林野。以草創叢林清規。宗風漸振。未幾江湖包笠趨風者三十餘員。師之接衆。迅機電掣。天魔亦喪膽。然及其閑談。則又溫溫乎如人春和之室。後病風痺不能寸步。自運明治六年癸酉秋疾彌篤。一日忽爾而化。世壽四十餘。

曹源寺大丘和尚傳

師諱善行。號大丘。備前兒嶋人。十歲出家。投同州曹源寺儀山和尚。得度受戒。二十一歲始遊方。參濃亡

近世禪林傳

卷之下

三十四

正眼寺雪潭禪師辛參苦修。終盡其蘊奧。雪潭付與禪板於師。以爲印記。曹源寶船和尚遷化。師代之住于曹源。輔佐儀山接衆。師歲且有今春巖師棲梧軒。儀山拜特賜禪師號之。綸旨也。師作偈曰。聖躬萬歲。祝筵開天下。泰不瑞色催。五十餘程洛陽路。春風總在驛頭梅。不在驛頭梅。一樹碧梧花發日。彩雲深處鳳凰來。佛生會云。將此深心報佛恩。善哉東海口多孫。隨機不用雲門棒。三拜起來稱世尊。後先儀山而化。

正眼寺泰龍和尚傳

師諱文震字泰龍尾州岡田鄉人中嶋某子也為人
沉毅強忍喜怒不見於色番歲投同鄉慈雲寺松隱
和尚剃髮受具不好習世典專志宗乘十七歲知有
宗門向上事奮然自誓曰祖師何人我何人苟不究
明向上一著爲僧亦何益於是乞松隱始遊方備嘗
辛艱適聞雪潭禪師之爲明眼惡辣欣然曰真吾師
也直掛錫於大澤僧堂以歸其錫下行業純一守錄
苦修者數年尙未得悟入一日因雪潭舉紙燭吹滅
話恍然如得舊物投入根源雪潭知其氣質非凡痛
加鉗錘師亦不屈汲汲不倦弘化四年春雪潭移法

近世禪林僧寶傳

卷之下

三十五

施於伊深正眼寺師亦從之時新建僧堂師時爲飯
頭雖當直事忙猶暇地搬土不少息或戲曰此地非
予所住予何勤勞如此師曰大叢林接化道德兼備
人之處故營營如此耳嘗爲闢吾私乎其入懷服師
平生作務多忙兀兀陸江衆中不敢交言語密參純
功莫測其崖岸在雪潭錫下者十有九年盡究室內
秘訣一日無心中豁然大悟微見雪潭平生受用底
不堪歡喜直入室呈所見雪潭大口賞歎焉後依雪
潭命住于紀之大秦寺紹晦數年足跡不出山外晨
則鷄鳴而起夜則擁衾衣端坐略不旁帶單提獨脫

聖胎長養大有古人風焉明治戊辰春以本嶠并雪
潭嚴命移住止眼寺僧堂接化四來雲衲無不迴大
門庭屹立當是時朝政維新方與萬國交際於是洋
教稍侵人民間排佛之說沸騰朝野僧侶惶遽不知
所爲師不少顧獨與同志數十人俱嘗枯淡攝心端
坐且曰邪不敵正妖不勝德吾儕當須開特達之懷
奮猛烈之志以振起既墜之真風矣師平日謹慎淡
泊體肥汗多然方盛夏時僅用一杓湯拭體且其於
滴水滴湯猶慎用如此一日經行次見遺葉於地三
片翌日誦次舉雪峰茶葉因緣呵責曰不愼福德淺

近世禪林僧寶傳

卷之下

三十六

在這裡何益之有疾去不許留錫其慎細行車德義
樂此類也師嘗示衆曰余聞禪關策進不過予平時
所行之事惟所爲小異耳人苟欲成非常事須務非
常行世間有爲法之小尚且要如此然況出世無爲
之大法乎汝等宜起越格志做他上流勿混庸流以
自誤焉師住正眼十有餘年衲子隨從者恒七八十
人朝參暮請師接之不倦此請十他方者或一百日
或二百日所到大振圓照門風實不愧爲雪潭之嗣
子云明治十三年冬羅微恙自知不起召大義屬後
事十二月廿六日端坐謝左右侍者安然而化世壽

五十有四留籠三日。色相不變。遂奉柩葬于明覺塔傍。遠近道俗聞之。哀慕來吊者。不知其幾。萬人師規。鑒曰。單傳直指之道。實非小根劣機。所測故難。知有生。灰然能。恐生灰者。離學道之上士。參須實參。悟須實悟。先固大信根。起大疑團。精進上加。精進勇猛。要添勇猛。朝參暮參。行究坐究。孜孜兀兀。念茲在茲。一旦知解。泯能所忘。忽爾著得。頂門眼非。唯按却生灰根源。正能坐斷佛祖頂頸。發大機。顯大用。徒無住本。普立一切法。只要辨取大心不退。四弘誓願。綿綿密密。相續佛祖慧命。仔細參究。至囑至囑。

近世禪林傳 卷之下

○三十七

超首座傳

首座豫州人。受業州之大洲曹溪院。既而遊方。參行應和尚。後又依誠拙和尚。爲其侍者。久之。誠拙授記。前曰。汝骨相不可住大寺。接衆也。首座受之。終身不應。大寺巨刹聘請。雖諸寺累招之。堅辭不往焉。既辭誠拙。又依隱山和尚。凡出入叢林者。幾四十年。備前太元和尚住曹源。首座來輔化。年五十餘。居上隱山淨心菴。菴距曹源一里許。然每太元講日。雖風雨必往參聽焉。首座居恒持已精嚴。食淡衣粗。而待人寬恕。人一接之。溫然如坐春和中。是以衲子掛搭于曹

源。其頭角者多。受首座之化導。云首座性好山水。長辰美景。必袖博飯。到新田之海濱。終日留連風景。而歸。一日獨園適歸。掌善寺因往訪。首座不在。乃去訪。儀山於棲梧軒。將喫晚餐。首座忽來。謂獨園曰。予今朝游海濱。游中聞子歸省。直往掌善訪子。聞子不在。乃知來訪子。故倉皇而到此也。獨園亦告以齟齬之狀。因相共一笑。詰問忽復失首座所在。坐中皆怪之。少頃首座攝裳提豆乳而還。儀山啗豆乳。故首座出買之。村中適村店皆闕之。因遠探者一里許。纔獲之。而還。其洒落真率。概如此。年七十餘。一夕無病而化。

近世禪林傳 卷之下

○三十八

于淨心菴

脫首座傳

脫上座曾在清見陽春和尚輪下。春設碧巖會。時鵲林初住松蔭。一日預會。明日春謂衆曰。昨以松蔭在坐下。老僧殆勞評唱。脫聞之意。悞嚮往焉。會畢。竟歸于鵲林之鍾下。鵲林門下實參衲子。實自脫始焉。後脫居于比奈無量寺。早灰。

興聖寺關振和尚傳

師諱慈訓。字關振。不知何所人。早歲依鵲林。參究者二十年。終受鵲林印記。住于興聖寺。接雲衲。又二十

餘年天明年間寺罹火災悉歸烏有師再興之當師
之在世列微僧堂寂寂鎖門無復接衆者師獨振祖
風後進屬望焉年八十餘無疾而化

玉龍菴天真和尚傳

師諱集賢字天真不知何許人少依東嶺和尚參
苦修究明己事終極宗旨蘊奧和尚書重離六爻變
盡爲五之頌付之以爲印記住相國寺塔頭玉龍菴
以本菴勸請求拂昇西堂位又陞本寺位著黃衣天
明之災本寺回祿後未至建築僧堂而四方耆侶爭
來挂搭塔頭數所蒙鉗鎚者多市中居士信女亦多
近世禪林僧寶傳 卷之下 ○三十九

來集受化云師有肖像自贊曰是真非假非假非真
不解作客勞煩主人嘆白馬三雲過孟津文化八年
月廿八日以疾遷化葬于玉龍菴北隅世壽七十
三嗣法者古桂顯長老一人而已

龍門寺迦陵和尚傳

師尾州春日井郡小牧村人就濃州深谷村涼樹院
禮瑞和尚得度受具十九遊方入諸方講肆修學數
年而入尾州總見寺卓洲和尚室精練刻苦造詣益
深矣文政三年受信州伊那郡龍門寺請提鉗斧住
二十六年時妙喜和尚住駿州沼津蓮光寺而師不

遠數十里往來參詳竟究宗旨蘊奧矣後妙喜在長
田寶林寺接衆數年弘化四年春師嗣妙喜法移幢
於寶林接衆凡十二年嘉永三年春奉勅住小嵯
妙心寺有偈曰武野霞千里長安春二月金闕掛在
肩一片春枝骨安政六年春三月安然而化世齡六
十七

以上四名當以順序而適遺漏故出之于此耳

慧昌尼傳

尼名慧昌江尻驛某氏室後爲尼參鵠林有省一時
製山梨了微俱在鵠林室尼授了微曰尼老矣不能
自起請不下手而令尼起微無語尼咄曰公恁麼不
自在它日莫道我嘗參鵠林微爲之赧然林傍觀大
笑微他日有省尼肯之

不微庵宜詳尼傳

尼諱宜詳號真宗中嶋氏陸奥濱人十歲禮綱干村
龍門寺默禪和尚受具及長遊方始謁井山大雲和
尚三年而辭去又依豐後永安寺愚溪者五六年始
終道行純一絕無倦色又去依濃州隱山和尚於深
瀬堅相寺及隱山移瑞龍又隨行益激發參究脇不
著席者十三年到無垢世界一朝辭歸住持不微庵

常接尼衆二百餘指二十年之久如一日隱山禪師嘗贈以偈曰一從參我禪恰十有三年夕究諸語則朝思難透緣鐵磨非敢後無著又何前猶有重關在再來喫老拳文政十年八月十九日寂享年六十四

西來寺見泥尼傳

尼名見泥號智水京師烏丸八木氏女也久事誠拙和尚究明己事有悟入乃卓草菴於洛西川勝寺村號西來寺其接尼衆規矩清嚴然亦視其根機施法或提撕公案或習讀祖錄日常晨出村市行分衛午時歸菴歸依相國寺大拙和尚每其講進必來聽其

近世禪林傳

卷之下

四十一

尼衆往來皆著水履高褰其裳叉手而步觀者感其高致尼后寓居于天龍寺梅陽軒天保十三年壬寅五月廿一日寂世壽六十八

水月菴智教尼傳

尼名智教參謁南禪寺大觀和尚既究決大事後卓水月菴於河州八幡村一日與淨門尼純圓會擅越家純圓素善和歌讀漢籍純圓挾其長語及之欲以屈尼尼曰善和歌讀漢籍非吾僧業今日誦經諷咒亡靈得成佛否純圓不能答於是改宗換衣爲弟子後終讓草菴於純圓

水月菴純圓尼傳

尼諱祖純號純圓京都人十歲禮淨門基剃染夙夜孜孜大凡係淨門之書者涉獵靡遺因見經中有往生安心等文竊自抱疑十五歲之春受業師頓示寂尼慟哭無措深感人生無常因求安心之志愈強矣一日慨然以爲余雖婦人既投緇爲僧徒而未能安心爲何物豈非可愧乎師今則亡吾在此何爲須向別處去夫必無達志之期也於是孤發飄然背去舊菴乃卜居於聖護院側梵叢持戒歷歲月一日與八幡之智教禪尼邂逅受其指示從是變發憤終日

近世禪林傳

卷之下

四十二

忘食終夜廢睡單單打工夫者有日一朝早起臨井汲水忽然打微卽謁大觀禪師于南禪呈所見師提出數段因緣以拶著從是晨參暮請未曾一口懈又參加海山石應二大老師于八幡之圓福大拙老師于洛之相國者幾乎二十年所卒透得末後半關得以達宿志矣後更衣董八幡水月菴接尼衆數年以菴諱于妙心寺隆尼之位準妙心第一座後以疾示寂時明治元年八月十五日也

山梨了微居士傳

居士通稱平四郎號了微駿河盧原豪族也家貲累

巨萬性又豪爽跌宕惟酒色是耽妻妾便嬖侍者盡媚日事歌舞歡笑一歲春暮携家衆游於黃龍溪宴飲行歌縱其所如時晴烟罩樹野花如燃衆皆散步各采蕺拾翠了徹左右無一人因獨徘徊淵邊偶見瀑流下澗湍湍其涵沫之浮浮焉流也或歷尋常間而後滅或止尺止寸輒滅心中忽觀無常慨念人之壽夭何與此異於是慘然不樂急乘肩輿歸家偶聽童子讀澤水法語云若人欲成佛道先須見性爲猛男衆生成佛在一念爲懈怠衆生涅槃在三祇乃自思念若果如澤水所言則我雖驢駝豈可不加一鞭

近世禪林僧寶傳

卷之下

○四十三

乎其夜閉室硬坐與思魔相戰通身發汗乃至五更大灰一番忽爾蘇生窓隙生白圓雀啾啾乃開戶而出自覺境界迥異於平生因欲謁鵠林證之乘肩輿登薩埵阪自悟窓隙眺田子浦美景如畫胸中益爽然往見鵠林林舉數段因緣詰之所答無有窒礙林曰汝大徹矣他日林嘗謂人曰若了徹者石鞏以來一人而已矣

阪白洞居士傳

居士沼津人號白洞年十八參鵠林旬日而透過隻手林對衆證據曰阪氏之子年僅十八而能以十日

間聞了隻手聲不亦尤物乎汝等努力是亦鵠林懸重賞待勇夫也及林沒往見東嶺嶺示竹篋并函洞答之嶺以竹篋打山後三年忽爾有省急上龍溪入室通所悟嶺大喜洞微責曰我今日之見與前日全不異如何前日不是而今日是耶嶺曰以前日較今日於汝心中奈何洞即立三拜及晚年見峨山山示陳操登樓話洞七日而徹見之山嘆曰者箇話頭舊參上士亦難奈何汝纔七日而見得也太奇也太奇

占那兼通居士傳

近世禪林僧寶傳

卷之下

○四十四

子要參禪誦師與一則公案林曰那勞取與正與麼時全體現成脫曰初心尙要方便林便把筆書曰如何是見聞覺知之性通拜受去歷一年有省呈謁曰萬仞崖頭撒手時鋤頭出火燒宇宙身成灰燼再蘇生阡陌依然禾穗秀林便與向上鉗錘先是石井玄德杉澤宗信二人亦參林於是通與脫上座及二人共結盟參決人稱曰比奈一公三伯

春日願居士傳

居士者備前人幼名寬平家世業醫仕池田侯願從髻鬣風姿不凡及長博涉獵經史百家最勵精家業

其治術注注有奇功。然自不以爲足。欲更鑿奧妙以利廣衆。於是負笈于浪華。入某國手門。研磨有年。又審佛理學。餘則謁諸宗碩德。請益當疑。禪門事。頓悟。欲一就明師。質之。而未得其人也。一日與友人語及之。聞兵庫之祥福象苑和尚者。傑出之禪也。直往謁象苑。苑出妙機以接之。從此晨參暮請。全忘寢食。一夜定中。豁然省發自己面目。從前疑團。渾然冰釋。不甚在躍。直入呈所見。苑微笑領之。無幾。到八輪圓福精舍。從海山和尚者有年。一日山諡之曰。汝欲親諮詢禪要。則宜先擇師。高洋少林有匡道禪師者。

近世禪林傳 卷之下

四九

是真汝可師者也。於是直往見匡道。具稟從前所證之顛末。以乞將來傳誡。道亦以爲可放。數卜惡毒手以接之。當此時十二時中。四威儀間。孜孜兀兀。唯道是究。雖炎寒溽暑。其志確乎不移。精修于此者三十年。其中間參扣陽關和尚于兵庫之祥福石應。而向于八幡之圓福。亦大有所得焉。願臨終有遺偈二篇。其一云。七顯八倒。觸處三昧。貪瞋痴慢。凡百不會。毒石毒罇。拾收在袋。東阡南陌。貴賤賤賣其。日者看以呂波仁保邊止。知利奴留遠和加與太禮。曾門補奈民無。咄。

伊達自得居士傳

居士名自得。伊達氏紀州藩士也。年十二承家。讀書以敏捷稱。祖母伊達氏常誡曰。男子當爲天下上。如唯我。藩則非吾所以望汝也。居士感奮勵精。匪懈學人。進受藩主。知遇累官。至勘定奉行。政多所匡輔。既而以直言忤當事者。被職禁錮于國老安藤氏邑田邊城藩律。凡兩囚中。除佛典外。不許讀書。籍紙實居士乃借一切經。誦讀四五年。畧通其意。既而藩主覺其寃。乃解禁給祿焉。後居士遊京師。謁本光老師于相國寺。參究日久。造詣益深。居士少時嗜

近世禪林傳 卷之下

四六

詩。既而數日。讀擬他邦之言。豈能得發性情之真哉。乃從本師。中學倭歌。遂名於世。一條實美公嘗于書後歌宿老。西大字以贈焉。居士常曰。凡我邦事物。其助於上古而存於今日者。唯倭歌爲然。吾願益傳之。無窮。若夫存妙理於言外。則莫善於禪焉。因寓禪寺於倭歌。自號倭歌禪。常誦本光所書贈隨緣自在語。蓋居士出處暗與此語符合云。明治十年居士以病歿。時五月十八日也。長子宗興。取遺骨歸葬于大坂天王寺畔夕陽岡。遺著有。大勢三轉考。餘身歸石于世。

奧宮慥齋居士傳

居士名由字子道姓奧宮氏號慥慥齋上佐國上佐郡布師田村人文化八年辛未七月四日生甫八歲從津城老人受儒典十六七歲時學劍法於土方半左衛門兼達射術又遊于田內某園門學國書後歌屢試一夜百首每先人而成衆駭其警敏文政十三年庚寅年方二十從父正樹之江戶明年就終於佐藤一齋門聽其講論深信姚江長知之說從此傾意聖學以擴張斯學爲己任天保四年癸巳歸從江戶與岡本玄浦市川彬齋等互主張王學集徒始講古

近世禪林僧寶傳 卷之下

四十七

本大學於是都築習齋南部靜齋嶋本默齋淡中新作等皆入其門日夕講學生徒益進海南王學之盛居士實爲之唱首矣明治四年辛未朝廷廢神祇官置敎部省居士微補九等出仕尋進八等出仕拜大錄兼權大講義居士自中年好禪理初參叩大休和尚上上佐真如後與春日載陽締交彌究其奧妙遂與載陽俱見匡道和尚于兵庫祥福追後到東京又參洪川和尚于鎌倉圓豐造詣益深明治十年五月三十日以病沒享年六十有五所著有聖學問要慥齋省錄神鬼問答等若干種並行于世

山岡鐵舟居士傳

居士名高步字曠野通稱鐵太郎號鐵舟本姓小野氏世爲幕臣父朝右衛門仕爲飛騨代官母塚原氏天保七年六月生于江戶既長出繼幕臣山岡某後仕至大監察居士年十三時一日慨然以爲上之事君常視之如歸確乎不動其心者然後始爲可能盡忠矣而要不動心則不可不先鍊心也因問生父以鍊心術父曰吾家先祖高寬村學劍法於小野治郎右衛門小太刀半七二人又究禪道蘊奧以仕東照公屢著戰功其旗每用題吹毛不付動五大字者今

近世禪林僧寶傳 卷之下

四十八

汝欲鍊心莫如修禪學居士於是始參芝村長德寺願翁歷十年願翁未肯許可然居士不少自挫志操愈堅又參豆州龍澤寺星定寺在州之二嶋驛西里許居士每暇日必拂曉發江戶騎過函嶺衣四夏始至龍澤寺至則先參星定後乃喫飯或不得溫湯則飲水以下食雖祁寒未嘗有難色也嘗語願國曰吾往來龍澤或以夜半過函嶺頗覺生涯殊平常也又歷參滴水洪川獨園數人後終受滴水印可焉而居士劍法之妙亦得之於禪理上矣蓋居士自甫九歲學劍法初從父須美閑適齋受真影流後就井上

清虎受北辰一刀流最後乃入淺利義明門欲以究一刀流奧義苦鍊者有年及其修禪之際一日參滴水語次及劍事滴水即舉兩刀交鋒不須避好手却同火裏蓮宛然自有衝天氣之句授之居士書諸紳居常拈提者三年一旦豁然有所省悟焉馳往見淺利請與角技技法神妙非復前日之比淺利乃施木刀改容告之曰子已至矣可以傳吾秘遂傳以一刀齋所謂無想劍之極致時明治十三年三月三十日也居士既傳受之從此益擴充精究以發明古人未發之蘊奧竟開無刀流一派以授其徒焉論者以爲

近世禪林傳

卷之下

四十九

居士之於劍法其所淵源如是遠矣而世之劍客徒求之於技輒學步邯鄲者衆亦弗思之甚也先是居士修禪學劍其志將大有爲以盡忠所事未及果其志而幕府失政國事丕變迨王政維新之初官軍大舉東征關東將臨江戶城居士與勝海舟等獨當其衝同心協謀以死自其士德川慶喜之恭順當時使王師不血刃而收江城江城百萬生靈皆免塗炭安堵不異平日者居士與海舟等之力也云事蓋在國史茲不復詳焉居士爲人慈仁剛毅寬猛相濟威惠並行雖無賴之徒一被其化導輒翻然悔過遇

善居士雖風悅禪然度量寬弘無黨同伐異之見其於各宗緇侶一誠待之要以佛法爲宗旨明治初年朝野盛唱排佛論居士夷然不爭曰舉天下皆信他教我一入信佛教可也初居士幼學書法於飛州高山岩佐一亭後益精詣遂繼海公入木道五十二世正傳云是以世人貴重其書爭來索之酬以金帛居士不却而受之悉資以興廢寺至明治廿年七月始絕揮毫不復應他需發願寫一切藏經每夜必就燈寫經至四更而止嘗創鐵舟寺于駿州全生是于東京其業微仕天朝也擢任侍從遷宮內少輔累叙從

近世禪林傳

卷之下

五十

三位叙勳二等恩答日渥嘗賜內帑金五千圓居士卽分施之所創二寺又有人贈三千金者亦分施二寺專以興佛爲事明治十五年五月辭職家居十一年二月罹篤疾事達敕聽特詔侍醫日就第診視且厚賜物優問之至七月中旬疾革自知死期已迫乃會親戚門弟談話且使落語師圓朝打誦談笑如平日圓朝亦常就居士問禪者也先是居士旣以寫經爲日課雖疾篤未嘗一日而廢輟是日尙倚几就課將拈筆管臂彎而不伸一僧侍側卽扶之使還机上及下筆則字字遒健毫不殊常作觀者驚異之時

是月十八日也。翌日力疾早起將赴浴室門人某擬扶持居士揮去之獨步入室澡浴周於常既罷命內子取衣奉常服弗肯內子覺焉泣奉所備白衣居士自服之復坐病床喫咽一次乃起身更坐結跏如儀且取金剛經一卷懷之右手執坐旁一團扇左手持念珠於是從容顧視左右遂承訣親戚門弟子諸君好在吾今日先逝言訖微笑而瞑坐容不變儼然如平日云享年五十有三越三日葬于谷中平生卷事聞今上震悼特敕賜祭案料金二千圓

皇后亦賜五百圓時人榮之居士之卒也遠近吊祭

近世禪林僧寶傳

卷之下

○五十一

之者不可勝數其在京都則門人北垣國道小倉庄之助等諸有志相謀于是歲八月初一日吊祭其靈于萬年山獨園於居士道契最深其拈舌曰前之無敵後無物五十二年不會禪莫道出生還入死蕙風香動碧池蓮恭惟平生院殿鐵舟高步大居士希代英傑蓋世爲君振勇則橫行於百萬軍中如往無人之地爲道忘軀則跋涉於三百餘里如遊比隣之家雖日坐擊劍道場而途中家舍竹椅蒲團爲座雖常在簪纓社會而江山風月虛懷水襟爲在此乃人大化生爲法而來是故病苦之際快然以書寫一代藏經此

是世間了事凡夫亦謂菩薩應世殺身自若以謀衆生安寧老僧托公以了殘生不料先我一著而遺迹世相難期空華易落一笑翻身幾率相見山僧未後句子更欲提撕打云菩提樹秀鐵舟寺優曇華開全生菴喝是日來會供養者縑素凡千五百有餘人法會之盛近年罕其比云

阿察婆傳

婆名阿察鵠林族叔之女也甫十六私自思我容貌雖不太美幸四體不缺想嫁期在近願得配佳男子於是竊禱赤野觀世音且林誦高王觀音經裁縫滿

近世禪林僧寶傳

卷之下

○五十二

濯間亦未嘗絕於口數日之後忽然省發其父嘗觀其在房傲然踞法華經卷駭以爲狂入徐喻曰汝何意敢褻妙經必應蒙法罰察曰妙經與我何異父益惟以告鵠林林曰我有者手段因書和歌一首以與之曰汝宜粘之於汝家壁彼必視之其詞曰聞乃夜爾不啼鳥乃聲幾希波未生前乃父楚戀志幾父歸如其故察果見之曰是白隱和尚之手書也白隱只恁麼地那父復以告林林曰汝携察來我勸之父因與察俱詣林林詰問察應酬如流林因示一函則因緣察思惟林曰汝去下工夫後經三五日透過數

段因緣林竟示以向上事察不肯與林抗衡林以竹筴打出若此者數回過半年得微見向上些子古人請託因緣盡參究了父爲之求婿察辭父以告林林召察諭曰汝已見得佛法了於世法何嫌且婚姻男女之大義也宜隨父命察頓首於是成婚及晚年喪其女孫哭之殊甚隣叟來曉曰嫗何哭之甚也隣里聞之咸謂嫗曾見白隱和尚見性悟道而今哭孫已甚何也嫗少省諸察脫隣叟罵曰禿奴何知嫗之涕淚悲泣於孫愈十香華燈燭者多矣禿奴何知隣叟無言而去其辛粹率如此耳住菴諸子侮其老婆往往

近世禪林僧寶傳

卷之下

五三

往納敗闕後化于家遂翁秉炬略曰七十六年驚夢去一踰踰破盡閭浮翁嘗謂衆曰鵲林在世優婆夷之見地明白者極多矣就中如阿察婆其尤者也雖久參衲子不能及也

原驛婆子傳

原驛有一婆子不知其名嘗參鵲林講席林說法曰唯心淨土己身彌陀彌陀一現山河大地草木叢林一時放大光明若人欲識得但向自己方寸上單單尋覓己是唯心淨土淨土作甚莊嚴己是己身彌陀彌陀有甚相好婆聽之思惟此非太難事也歸家口

夜推究寤寐提撕日洗鍋子次忽爾打徹放下鍋子急來見林曰婆婆掃著己身彌陀山河大地草木叢林放大光明也太奇也太奇歡喜踴躍林曰汝恁麼道祇若屎坑裡還放光明麼否婆近前與林一掌曰者老漢未徹在林呵呵大笑

杉山政女傳

比奈杉山氏室名政夫歿後寡居育兒偶被無量脫公點發參禪尤切工夫純熟真疑凝結日中生忘執爨兒從外還無飯可喫隣人憐而食之一日兒還政問曰子誰氏子耶兒愕然曰阿娘無乃喪心乎政曰

近世禪林僧寶傳

卷之下

五四

諾如是數日忽然有省來見鵲林林詰以數段因緣一無滯礙林許之雲山嘗在林室偃臥其後會政來謁山欲起去林曰母起山乃臥如故政入林拶曰夢中西來意作麼生政呈見解林優休政出去山問曰適來是阿誰林以實告山嘆曰彼雖婦女實有衲子作用

茶店婆傳

茶店婆不知其名參鵲林有大得力處鵲林平生每見衲子擬議思惟命根不斷者優嘆悼口汝恁麼何日有了期汝且參茶店婆去凡有僧到婆即口參禪

那曰諾婆入屏風裡。喚曰入者。裡來。僧入。婆即一授。僧纔擬議。婆即以鐵火筋打出。凡訪婆者。往往皆如此。蓋婆以得力過人。大具作家手脚。

奈良屋歌女傳

歌女京都商奈良屋某女也。年十五。受祖純尼示誨。知究明己事。夙夜專思。不省他事。雖對粧鏡。默然忘黛粉。父母未知其實。疑或有他故。恐其鬱結生疾。諭之使觀劇。或探勝歌女。咸不欲之久。之。豁然省悟。參南禪大觀和尚。明得數段因緣。有夫婿薄命失產。歌女拮据彌縫之。然終不如意。年七十餘。安然而逝。有

近世禪林僧寶傳

卷之下

○五十五

二男二女。亦深信宗乘云。

近世禪林僧寶傳卷之下 終

近世禪林僧寶傳跋



余侍先師久矣曾見編輯近世禪林僧寶傳之稿疑之一日因問師曰師平日示衆云我宗無言句亦無一法與人而猶屑於文字何也師曰有是言也然而唯惜古人之有

近世禪林僧寶傳

跋

一

一言一行之爲後學可傳而往之湮滅不傳也余曰敢問古人一言一行之可傳者果何等言行乎師乃話舊事曰吾壯年聞諸大拙先師曰先僧久慕行應禪師道風遙聞禪師在揚州某寺一日

往乞相見侍者曰和尚无恙且狂

不可見余強乞之侍者曰昨風雨

暴至和尚方赴講延手自持傘

携杖步之殆躓者數某欲救之

和尚大怒以杖痛之某曰汝何技

予乎是非狂而何子不如無見而

近世禪林僧寶傳

跋

二

去也余聞之如飲醍醐謝侍者曰

聞公一言勝於見和尚遠矣吾聞

先師此話不覺吐舌始識古人之潛

行密用也且謂吾宗師家爲人

度生動有驅耕夫牛奪飢人食

底手御而世人以爲所不夢見

也此風今人棄如土豈可不慨乎
是吾之所以愛古人之言行以為
金玉而有此編也余曰雖然如是
畢竟是閑言長句無此子宗伯師
忽作色招起全編大喝一聲云
箇箇身不覺滴通身白汗乃

近世禪林僧寶傳

跋

三

記之為跋

明治廿二年六月

小師東嶽承暖謹誌



各宗御本山及諸學林御用書林

慈海版一名官樣本版元

京都市木屋町二條

貝葉書院

御經并三佛教書籍問屋

大正十一年四月八日
八段振替所東京支店五〇番
電話九百九十九番

營業

科目

佛所御肖像画	和漢洋書籍類	各學林教科書	御經過去帖類	各宗新古佛書
--------	--------	--------	--------	--------

各地出版取次	新古書籍仕立	御出版物周旋	御依託書販賣	占本高價買入
--------	--------	--------	--------	--------

稻村英隆 編

高僧名士傳

明治二十三年（一八九〇）京都大西寂純鉛排本

據明治二十三年（二八九〇）
京都大西寂純鉛排本影印

稻村英隆編纂

高僧名士傳 全

(非賣品)

序

古之高僧名士也者，塵表高逸，道貫德邵，自
有鑿跡，踰山擬思，風雲騰葛，爲衣，松果爲食，
亦市朝山林棲止，無常而後竟，不知所終焉。
苟非_レ換_レ凡_レ滑入_レ聖胎_レ，何_レ得_レ而至此_レ哉！夫思其
人，猶愛_レ其樹_レ，況_レ稱_レ其德_レ而贊_レ其事_レ哉！是以_レ僧
史建_レ高僧之徽號_レ，月令有_レ名士之嘉稱_レ，項者
英隆閣梨_レ所_レ撰_レ高僧名士傳一卷_レ，來_レ日_レ庶

二

冠_ニ以_ニ一言_ニ施_ニ行_ニ之_ニ余觀_ニ之_ニ忻歎不勝_ニ故不顧_ニ
猥拙_ニ遂_ニ序_ニ與_ニ之_ニ

明治庚寅初夏書於東寺之南窓

此 菴 榮 嚴

高僧名士傳自序

夫色性無象觸必歸空三世如假入微終散所以王子投身道逾九劫尸毗剗股德震三千是則輕身重法也方今人心改變增長三毒彌招四惡名利既侵我人愈盛法滅已形取笑天下豈可不悲乎故高僧名士之錄奇言偉行佛道修行之爲助緣云爾

三

高僧名士傳

南山沙門 英隆集

宋臨川招提寺釋慧紹八歲出家精勤冥勵苦行標飾密有三燒身
意常積薪乃於東山石室高數丈中央開一竈足容已身乃於焚
身之日設大衆齋告別知識其日道俗來不可稱數至初夜行道
紹自行香已竟執燭燃薪入中而坐誦藥王本事品火至額聞唱
一心言已施絕矣
宋廬山招提寺釋僧瑜姓周吳興餘杭人也弱冠出家家業棄絕粹
屢發言誓契燒身以宋孝建二年六月三日集薪爲爐請僧設齋
告衆辭別至初夜便入新籠中合掌而坐誦藥王品火焰交至猶
合掌不散道俗皆奔赴廬山並稽首作禮願結因緣時年四十
有四也平南長史張辨觀其事爲贊曰悠悠玄機茫々至道出

入生死誰爲妙寶自昔藥王殊化絕徧徃觀斯人英々
沙門懸定心固疑神紫氣裴述雙樹其德可樂其操可貴文之作
矣或疑燒身

朱釋慧益廣陵人也少出家隨師止壽春精勤苦行誓欲燒身孝
武帝深加敬異致問鄭重遣大宰江夏王義恭謁益益誓志無改
至大明七年四月八日將就焚燒乃於鍾山之南置鐵辦油自至
雲龍門令人啓聞曰今日就捨身詣門奉辭深以佛法仰囑帝聞
改容即躬出雲龍門益已見帝重以佛法憑囑於是辭去帝復命
大宰至鑪所請喻曰道行多何方何必殞命幸願三思更就異途益
雅志確然答曰微軀賡命何足止留一天心聖慈同已者願度世人
出家降勅即許益乃手執燭以燃薪火至額合掌而化矣
周益州沙門釋僧崖姓牟氏幼年坐以終日問其故答曰後

必燒身以武成元年六月於益州城西路首以布裘左右五指燒之人問其故答曰燒身手欲令信重佛法也至七月十四日盧曰吾欲捨身可辨供具二千時道俗十餘萬擁擠而哭盧曰但守誓提心勿哭便登高座爲衆說法時々舉目視於積薪欣然獨笑白衆僧曰佛法難值宜共護持乃登新藏以臂披炬燭之赫然燦合於盛火中禮拜時身面已焦折重復一禮時身踰炭上遵法師收取葬于塔下焉

周終南山釋靜滿姓鄭氏柴陽人也幼而神器夷簡卓然物表常撫心曰余生不幸會五濁交亂進退惟谷高蹈可乎遂心口相吊擯影岳尋拈經驗用忘籍兼後告門徒曰吾無益於世卽事捨身獨據別殿告弟子下山明朝當早至弟子心驚通夜不眠明晨走赴至猶觀合掌捧心身面西向跏趺而化宣化元年七月十六

三

四

日春秋四十有五也矣遺偈序曰諸有緣者在家出家若男若女皆悉好住於佛法中莫生退轉若退轉者卽失善利吾以三因緣捨此身命一見身多過二不能護法三欲速見佛輒同古聖

隋廬山甘露峯釋大志姓顧氏會稽山陰人也師事天台山智者大師伏膺年月久顛覆其容智其神志後在佛堂高聲慟哭三日三夕寺僧慰喻遂往東都上表曰願陛下興隆三寶當燃一臂於諸岳以報國恩帝乃許之勅設大齋七衆通集志不食三日乃至大綱上格其臂令焦墨志詞色不變言笑如故爲衆說法臂燒已盡下棚七日入定而卒時春秋四十有也矣

唐終南山豹林谷釋會通雍州萬年縣宿川人也少欣儉素遊泊林泉苦節戒行誦法華經至藥王品便欣厭捨私業新藝必行之以貞觀末年靜坐林中積薪爲窟誦法華至藥王品便自下火

煙火俱盛卓爾跏趺誦經如故身火俱滅道俗收其骨爲建塔焉
隋京師延興寺釋曇延姓王蒲州業泉人也世家蒙族官歷齊周
後出家探悟玄旨洞曉無差欲著涅槃大疏恐滯凡情每祈臆瘡
瘰願得嘉徵乃於夜夢有人被白服乘於白馬而導授經旨寤後
惟曰此必馬鳴菩薩乃疏成以隋開皇八年八月十三日終於延
興寺春秋七十有三也

元魏時有中天竺沙門勒那魏云實意徧通三藏妙入總持以魏
永平之初來遊東夏宣武帝每請講花嚴經披閱精義無不隨一
日正處高坐忽有一人持笏執名者形如大官云奉天帝命來請
法師講花嚴經道俗聞見斯異無不嗟嘆焉

齊鄒東大覺寺沙門僧範姓李平鄉人也善解群書時稱府庶二晚
年出家嘗有膠州刺史杜弼於懸頭義寺請範講花嚴經忽有一

雁飛下入堂正對高坐伏地聽法講了徐出翔逝以天保六年三
月二日卒於大覺寺年八十矣

隋西京眞寂寺釋法彥姓張志隆大法而聰明振鄉莫敢抗言開
皇十六年下勅以彥爲大論主以大業三年卒于所住春秋六十

矣

唐西京勝光寺釋道宗姓孫氏萊州卽墨人也三藏通明大論尤
精每講大論天雨衆華遶旋講堂飛流戶內不委地久還去道俗

驚異希觀斯瑞武德六年卒於所住春秋六十有一也

唐蒲州仁壽寺釋道慈姓張氏河東虞鄉人也神器高邁善通機
會監選治方以涅槃攝論爲栖神之宅至貞觀二年冬日講涅槃
預知將終登座發題告諸四衆悲歎而言自惟去聖遙遠微言隱
絕痛愚所傳不足師範但以信心歸向自當懺悟今席講說止於

云何偈後當終時日既促願各用心遂無疾而終春秋七十有五

也矣

唐并州玄中寺釋道綽姓衛并州汶水人也清約雅素慧悟天開
求法禪師專崇習業以貞觀二年四月八日綽知命將盡通告事
相聞而赴者滿千山寺咸見禪師在七寶船上告綽云汝淨土當
成但餘報未盡自非行感倫通疏能會斯嘉應矣
趙沙門道開姓孟燾煌人也少出家欲窮三極巖谷故斷穀食初進
麵三年後服練松脂三十年氣力微弱膚色潤澤行步如飛端坐
靜坐晝夜不眠昇平三年七月卒

唐蒲州普救寺釋道積姓相里河東安邑人也其先鄭大夫子產
之苗裔也骨梗潔已清貞高蹈河東英俊莫與同風僕射裴玄寂
欽其令聞頻贈香衣刺史杜楚客知人之重造展求法其感動柔

也矣

唐終南山悟真寺釋法誠姓樊氏雍州萬年縣人也幼少出家卿
族所推敬奉比聖嘗有人欲害夜往其房見門內猛火騰焰鼻帳
遂即追悔至誠奉佩誠常誦法花法花三昧至心奉行以貞觀十
四年夏末日忽感餘疾自知即世願生兜率端坐合掌口出光明
照室內不覺其神已逝時年七十有八也矣

焉

晉河陰白馬寺釋曇邃少出家誦法花經一日一偏精達經旨嘗
有人云欲請法師九旬說法邃不許固請乃赴之道俗共傳咸云
神異講了神施以白馬一疋白羊五頭絹九十四匹邃終不知所在
隨終南山釋普安姓郭氏雍州北涇陽人也獨宿林野不處人世

專崇禪思不避虎狼常讀花嚴一手不釋卷亡身為物常宿山野虎豹雖來臭而不食值周羅敷避地終南山自身行乞資給是足至隋文帝創曆佛教大興嚴募遺僧依舊安一人習樂山房守素林壑開皇八年頻勅入京爲皇儲師長公主營靜法住寺以大業五年十一月五日終于靜法禪院春秋八十矣

隋東都寶揚寺釋法姣姓彭安定舅孤人也少出家在太白山九龍精舍禪定爲業餓食弊衣到開皇中來至江都令通晉王門下以其言笑輕舉不爲通日到門首誠爲通之王聞召入相見如舊便住慧日王所避履必隨從及遊幸泰山時遇渴乏四顧惟嚴無由致水安以刀刺石引水用給晉王時大噉之至十一年春無疾而終春秋九十有八也矣

隋瑯州大歸善寺釋慧侶姓陽晉陵曲阿人也靈通幽顯二世莫識

之_レ後往_二嶺南_一專釋禪法大_二有_二深悟_一末住_二棲霞_一安志虛靜不拘_二時世_一以大業元年終于大歸善寺春秋八十有二也矣

隋終南山悟心寺釋淨業漢東人也精研律部博綜異聞確乎內湛令轡外馳仁壽二年被舉送舍利干安州之景藏寺忽感異香滿寺道俗共嗟歎後大業十二年二月十八日卒於本寺春秋五十有三也矣

唐西京弘福寺釋玄覽趙州房子人也常樂禪誦禮飾爲業每語道則曰誓欲捨身至貞觀十八年四月去臨渭水稱念禮拜訖投身波中衆人接出覽告衆曰吾誓捨身久矣意欲仰學大士難捨能捨諸經正行幸勿固遮而妨其事衆悟意盛故乃從之又即入水合掌稱佛其屍方三日後出村人接取爲起塔銘焉遺文云敬白十方三世諸佛弟子玄覽自出家以來一十二夏雖沾僧數大

業未成今欲修檀波羅密行一如薩埵捨身尸毘割股魚王肉山經文具載請從前聖敢附後塵衣物衆具任從佛教

朱高昌釋法朗少出家就一行精苦翹光德人莫側其所階朗師釋法進亦高行也進嘗閉戶獨坐忽朝見在前問從何處來答云從戶鎗中入至魏殿滅佛法朗西方適龜茲及朗至乃王待以聖禮後終於龜茲國矣

朱岷山遁雲寺釋邵碩姓邵名碩始康人也形貌似狂而深敬佛法以朱初出家入道自稱碩公出入行住不擇晝夜嘗碩於衆中伺伺作師子形爾日郡縣亦同見碩作師子形乃悟分身以朱元嘉元年九月一日卒岷山遁雲寺有人昨見碩公在市中其述龍異莫可測也後竟不知所終焉

朱江陵琵琶寺釋慧安年十八出家風貌庸率衆願輕之時爲沙

十一

十二

彌衆僧列坐輒使行水安執空瓶從上至下水常不竭時風以異焉及受具戒稍顯靈迹布薩上堂從壁隙出入衆甚駭懼後不知所終焉

齊荊州陟吧寺釋僧慧姓劉舉止趨爾無甚威儀往至病人家慧喜必差時人以爲此爲職慧嘗至江邊告津吏求度吏以舟小未及度之須臾已見慧在波兩岸諸人咸歎神異後永元中卒於江陵長沙寺矣

梁京師釋寶誌姓朱金城人也少出家修習禪定居止無定飲食無時數日不食亦無饑容齊武帝謂誌衆收住建康既且人見共入市廛還檢獄中誌猶在焉至天監十三年謂人曰我將去無疾而終矣

隋天台山釋慧達姓王氏襄陽人也幼年出家緒修成務至仁壽

春秋七十有一也矣
唐梓州通泉寺釋慧震姓屈氏，每年正月轉藏經，常弘三論，嘗忽有一異僧，語震曰：「來年正月十五日，正中應入涅槃。」法師傾財物，無留於後，於身無益言，已而隱。先造藏經，請僧常轉，開大施門。又請衆僧讀經行道三七日，道俗悉集，香氣不散，從旦至午，變日嘉相，已現手執香爐，遶應舍那三匝，還於佛前，胡跪正念而化。大衆滿堂，不覺已逝。春秋六十有六也矣。
唐京師弘福寺釋慧雲，姓王，太原人也。弱冠樂道，投匡山大林寺。雲以貞觀年初，因事入京，值首律師伏膺律業，宰貴親其德行，請奏令住弘福。至貞觀二十年，還歸九江本寺卒矣。
唐蒲州普濟寺釋道英，姓陳氏也。時年十八出家，至開皇十九年，遂入太行山，拈拂寺修學，止觀，忽然發解，常依攝論起信，用資心

年中於揚州白塔寺建七層木浮圖，焉大業六年七月晦日，倚臥異香入室，則旋繞如雲，閣中尊像汗流，地衆見此瑞，當終官人檢驗，具以聞奏。達神志如常，奄爾長逝。年八十七矣。
唐揚州長樂寺釋住力，姓褚氏，河南襄陽人也。器宇凝峻，虛懷接，情至大業十年，自竭身資，以栴檀香木，模造瑞像，并三菩薩，不久而成焉。後隋室喪亂，道俗流亡，誓以身命守護殿閣。武德六年，江表賊師輔祐，潛圖反叛，凡百寺觀，撤送江南，力衣食付物，入尊像內，便以香湯沐浴，踰跌面西，引火自燒，卒於堂前。時年八十也。命終火滅，合掌凝然。
唐汾州光嚴寺釋志超，姓田氏，同州馮翊人也。精勵不群，雅度標遠，至武德七年，止於抱腹山，數感異僧來住，鎮靜隨時，自響石泉，上涌靈瑞，多感寔，由超福。貞觀十五年三月十一日，忽然卒於寺。

十三

十四

瞻至一日說起信論到心冥如門禿然不語衆怪觀之氣絕身冷衆知滅想任不怪之經千累宿方從定起身色怡然如證初禪貞觀七年春秋七十有七將終衆問後事答曰佛有明教但依行之則衆累盡矣當終之日感群鳥集房數盈千計悲鳴相切哀慟人心道俗屯赴如喪重親焉

唐雍州梁山禪火德醴泉人也形質長偉秀眉骨面立清風白好遊化俗營福業年有幽暴毒氣疫癘先勸四民令奉三寶稱名念佛皆證災福以貞觀十二年卒於山舍百姓感戀爲起百塔焉唐京師律藏寺釋通達雍州涇陽人也三十出家棲止無定乃入太白山不齋糲粒餓則食屣渴飲水息則依樹坐則禪思經踰五

年棲遯廬息瞭然大悟左僕射房玄齡聞而異焉迎至第中敬重如父而達體道不拘形骸出言不簡放曠心懷玄齡以風表處之

十五

十六

見此如是後不知所終焉

宋京師南潤寺釋道罔姓馬扶風人也素諳法花存念觀音並有瑞應或見胡僧入座或見佛菩薩至元嘉二十年臨川康王義慶携往廣陵終於彼矣

隋西京淨住寺釋法持祀氏扶風人也性愛定林情兼拯溺嘗於道場然燈遂感燈明續焰經千一七夜不添油炷而光耀倍常私異之至仁壽三年遂覺不怠閉室靜坐而無痛所白衣童子手捧光明立侍於左右本三千淨住春秋八十有也矣

齊棲霞寺釋法慶嘗於山舍講無量壽經中夜忽有金光明大衆驚異焉寺中僧及淨人少不如法虎即出現吼呼巡房總振山谷或山神現形故僧衆驚懼不解後終于本寺矣

唐始州釋惠主姓賈持律第一兼營福業後遁南山唯食松葉餌

獸山神與送餉茯苓甘松等六時行道一時不閑禽獸隨行禮佛
誦經似如聽仰後無疾而逝春秋八十有九也
晉中山帛法橋是中山人也少樂轉讀而稍乏聲於是絕糧懷
七日七夕稽首觀音以祈現報至第七日覺喉內豁然即索水洗
漱云吾有應矣於是聲徹三里遠近驚陸人畜悉來觀聽年三九
十聲猶不變後卒於河北矣
晉支曇月支人也寓居建業少出家精苦諡食息吳虎丘山晉孝
武初勅止建初寺帝從受五戒徹以該師禮懣特異妙勝善於轉讀
響清美四飛卻轉反折還弄所製六言梵唄傳于今後終於所住
年八十一也矣
齊安樂寺釋僧辨吳建康人也少好讀經哀婉折衷獨步齊初嘗
在新亭創紹宅二辨初夜讀經忽有群鶴下集階前道俗咸異焉後

十七
十八

以齊永明十一年卒矣
梁富陽齊堅寺釋道琳本山陰人也少出家有戒行善溫礬法花
後居富陽縣泉林寺寺常有鬼怪自琳居之則消天監十八年卒
春秋七十有二也矣
齊京師靈相寺釋惠豫黃僊人也少而務學偏訪衆師善談論又
習神業嘗見有三人來扣戶並衣冠辭潔執持花蓋環問覓誰
答云法師應死故來奉迎豫曰小事未了可申一年不答曰可爾
至明年滿一周而卒齊永明七年也春秋五十有七也矣
晉羅浮山釋道開姓孟徵僊人也少懷棲隱二誦經四十餘萬言絕
鍛餌栢實松脂如此七年後不畏寒暑晝夜不臥追陵太守遣馬
迎開辭能步行三百里山樹諸神咸現異形試之初無懼色藥仙
者多來諮問都下答遁爲脫云我矜一切苦出家爲利世利世須

學明^{ナカハ}學明能斷^{ハバ}惡山遠糲粒難^ナ作斯斷食計非^ハ是求^ハ仙^ハ個^ハ幸勿^ハ

相傳既^ル後入^ル羅浮山卒^ス于山舍春秋百餘歲也

宋京師祇洹寺釋僧巷京兆人也少^シ在^ニ關^ニ受^テ學^ヲ什公^ノ曰^ク誦^ス萬餘言經^ヲ常禮^ス數百佛陳郡^ノ謝靈運聞^キ風^ヲ而造^リ焉及^ニ見^ニ世^ニ神氣^ヲ稱^シ深^ニ歎^シ伏^ス或^ハ人^ノ問^フ曰^ク謝公^ノ何^ヲ如^シ甚^ニ曰^ク靈運才有^ニ餘^ニ而職^ニ不足^ニ不能^ハ其終^ニ後宋元嘉中^ニ卒^ス

齊梁州薛河寺釋僧遠不知^ハ何^ノ人^ノ爲^シ性^ニ疎誕不^レ修^ニ細行^ニ好^ニ逐^ニ流宕^ニ敬禮^ス爲^シ任^ニ登^ニ夢^ニ見^ニ大^ニ人^ノ切^ニ齒^ニ責^シ之^ヲ曰^ク汝^ハ是^レ出^ニ家^ノ人^ノ面^ニ目^ニ如^シ此^ノ放縱造^シ惡^ヲ何^ヲ不^レ取^ニ鏡^ヲ自^ラ照^シ遠忽^ニ驚^ニ覺^シ流^シ汗^ヲ遂^ニ改^ニ常習^ヲ反^シ形^ヲ易^シ性^ヲ弊^ヲ衣^ヲ破^シ履^ヲ一^ヲ食^ヲ長^ニ擔^ニ遵^ニ奉^ニ律儀^ヲ昏曉行^シ悔^シ悲^シ痕^ヲ交^シ注^シ又^ハ夢^ニ前^ニ人^ノ謂^ク云^ク知^リ遇^フ能^ハ改^ハ是^レ謂^ハ智^ハ人^ノ然^ル汝^ハ前^ニ罪^ヲ勿^レ復^シ暫^ク怠^ス忽^ニ驚^ニ覺^シ等^ヲ流^シ汗^ヲ徧^シ身^ヲ後卒^ス於本土^ニ矣

十九

二十

隋相州大慈寺釋洪獻^ハ少^シ履^ニ道^ヲ門^ノ早^ニ明^ニ律^ヲ部^ヲ常處^ニ房^ニ中^ニ禮誦^ス爲^シ業^ヲ不^レ輟^ス晨夕^ニ開皇十四年忽^ニ感^ニ一^ニ神^ノ自^ラ稱^シ般若檀越^ニ來^リ從^テ受^テ戒^ヲ數^ニ致^ス談話^ス道俗^ヲ驚^ニ歎^ス後卒^ス於本所^ニ矣

晉長安釋僧叙^ハ魏郡長樂^ノ人也博^ク通^ニ經^ヲ論^ヲ機^ヲ辨^ヲ難^ヲ及^ニ姚興^ノ姚嵩^ノ特^ニ加^シ禮^ヲ遇^ス與^ニ會^ス勅^シ見^シ之^ヲ欲^シ觀^シ其^ノ才^ヲ器^ヲ叙^ハ風韻^ヲ流^シ含^シ吐^シ彬^ニ蔚^ニ與^ニ大^ニ賞^ヲ悅^シ後^ニ謂^ク嵩^ノ曰^ク此^ハ乃^ハ四^ノ海^ノ標^ヲ領^ヲ也何^ヲ獨^ニ鄴^ノ衛^ノ之^ノ松栢^ノ耶於^ニ是^ニ美^シ譽^ヲ遐^ニ布^ス遠^ニ近^ニ歸^シ德^ヲ叙^ハ弘^ニ贊^ニ經^ヲ法^ヲ常^ニ廻^シ此^ノ業^ヲ願^シ生^ニ安^ニ養^ニ臨^ニ終^ニ之^ノ日^ニ入^リ房^ヲ洗^ス浴^ス燒^シ香^ヲ禮^ス拜^ス面^ヲ向^ニ西^ニ方^ニ合^シ掌^ヲ而卒^ス春秋六十矣

晉沙門支孝龍^ハ淮陽^ノ人也少^シ風姿^ヲ以^テ見^ニ重^ニ神彩^ヲ卓^ニ犖^ニ高論^ヲ適^ニ時^ニ無^シ人能^ハ抗^ハ陳留^ノ阮瞻^ノ穎川^ノ庾凱^ノ並^ニ結^ニ智^ヲ音^ヲ之^ノ交^ヲ世^ニ人^ノ呼^フ爲^シ八^ノ達^ノ又^ハ孫綽^ハ爲^シ之^ノ贊^シ曰^ク小^ノ方^ノ易^ニ擡^ニ大^ニ器^ヲ難^ハ像^ハ恒^々孝龍^ハ剋^ニ遐^ニ高^ニ廣^ニ物^ヲ競^ス宗^ヲ歸^ス人^ノ思^シ敬^ス仰^ス雲泉彌^ニ漫^ニ蘭^ノ風^ヲ際^ヲ響^ス

矣

齋錢唐鹽苑山釋曇起姓張清河人，身長八尺，容止可觀，每二入禪，累日不起，后忽聞風雨聲，俄見一人執笏而進，形甚端正，下席禮敬，自稱弟子，是山神也。以永明十年卒，春秋七十有四也。唐襄州光福寺釋慧琬，姓蕭氏，善通三論涅槃，至貞觀二十三年，禪涅槃經四月八日夜，山神告曰：法師疾作，房宇不久當生西方。至七月十四日，講盆經，竟歛手而終，法座春秋七十有九也。隋慧日寺釋慧超，嶺南人也，住羅浮山，性多沈愛，慈救蒼生，捷頓幽阻，虎豹無擾，因爲說法，化行五嶺，磔流三楚，開皇末年召入，懸曰：後歸揚州，無疾而卒，夜見焰光從足而出，入于頂上，還從頂出，而從足入，竟夕不斷，道俗殊歎，未曾有焉。新羅國大僧統釋慈藏，姓金氏，厭世高榮，情欣方外，獨靜行，禪不

二十二

二十一

晉康僧淵，西域人也，號雙胡人，語實中國也，容止詳正，志業弘深，淵機辨，驚人，嘗環耶王茂弘以見，淵鼻高，眼深，每戲弄之，淵曰：鼻者面山，限者面淵，山不高則不鑿，淵不深則不指，時人以爲名答。漢維陽沙門安清，安息國王正后之太子也，約以孝行見稱，志業聰敏，地意好學，高第，理盡性，自職宿緣，業多有神迹，世莫能量，後不知所終焉。晉長安釋法祖，本性萬氏河內人也，才思傷敏，記持絕倫，誦經日入九千言，研味方等妙入，幽微後遇，離化矣。漢沙門竺曇蓋，秦郡人也，具確苦行，常行般若，若尤善神呪，多有應驗。司馬元顯甚敬奉之，衛將軍劉綬聞其精苦，招來，姑勃深相愛遇，義興五年大旱，蓋焚香禮拜，至誠陳懷，乃讀海龍王經，造卷發音，雲氣便起，轉讀將半，沛澤四合，洪雨淚注，畦湖必滿，其年以登

避虎兇持戒不群慈救爲先深隱山居來往絕糧便糲糲異鳥各街諸果就手送與上鳥於臧手同共食之至唐貞觀十二年來至唐國既至京師慈利群生從受戒者日千計盲者見道病者得愈后卒永徽年中矣

周京師大追遠寺釋僧實姓程氏咸陽人也幼懷雅亮清卓不群魏孝文大和末年從京至洛巡幸那三藏授以禪法於是陶化京華久而愈盛以保定三年七月十八日卒於大追遠寺春秋八十有八也
陳攝山棲霞寺釋惠布姓鄆廣陵人也少懷遠操性度虛梗志行罕儔爲君王所重年至七十與衆別云長生不喜夕死無愛以生無所生滅無所滅故也未終大地運動七日便卒移屍就山山地又勳太史奏云得道人滅矣

二十三

唐普光寺釋明解者性聰敏有文藻工書畫至於觀琴當時獨絕每欣俗網不樂道門至龍朔元年應詔赴洛陽后歸俗未幾而卒託夢於相知淨土寺僧智整曰明無福業不遵內教今受大罪非常飢乏能惠一食否智整許諾乃爲設食又夢明來謝賦詩曰握手不能別撫胸還自傷痛矣時陰短悲哉泉路長松林驚野吹荒塚落寒霜言離何以贈留心內典章

隋感山化城寺釋法无姓學九江人也常誦法花大品充歎曰生不值佛已是罪緣正教不行義須早死遂於此山香鑪峯自投而下齧粉身骨用生淨土即投不損一毛還至寺經于六年方卒矣晉刻隱嶽山釋曇光少習禪定晉永和初投刻石城山光於山南見一石室仍止其中安禪合掌以爲養痾神處經三日乃見山神或作虎形或作蛇身競來怖光一皆不恐又夢見山神自言移住

二十四

韓石山住推室以相奉道俗樂禪來學者起第茨漸成寺舍光每入定帳七日不起住山五十三載春秋一百一十歲以衣蒙頭安座而卒矣

唐越州淨林寺釋法敏姓孫丹陽人也法華三論常講不絕后夜有赤衣二人禮敏曰法師須往他方教化從東方來迎法師弟子數十人同見此相至八月十七日二恰至將逝忽放光大光夜明如日忽然遷化春秋六十有七也

唐京師會昌寺釋空藏姓王氏母初孕之日自然不食酒肉葷辛密加異之既誕后鑑監曰陳情用高遠也讀諸經論曰福萬言賢劫千佛曰禮一徧春夏方等常坐不臥寸陰不欲以貞觀十六年五月十三日終於會昌春秋七十有四也

晉廬山釋慧永姓潯河內人也貞素自然消心克己言常含笑語

不傷物耽好經典善於講說別立一茅堂楮上每禪思欲輒往居焉常有一虎循伏至晉義熙十年遷疾而顏色怡悅已云佛來言終而卒春秋八十有三也

晉新陽釋慈欽遠公之弟子也善持戒行講說衆經兼習禪定虎災遭虎死者夕有七八欽嘗投此村民以畏虎早閉閤門欽樹下通夜坐禪虎至見欽如喜如驚伏欽前欽爲說法授戒虎有頃而去村人至樹下見欽大驚謂是神人虎災由此而息留欽立寺欽后不知所終焉

梁山陰雲門寺釋智順姓徐瑯琊臨沂人也秉禁無疵陶練衆經齊陵文宣王時深禮異后順疾甚不食多日一日忽索齋食弟子竟疊和以順絕穀日久密以半合米雜煮以進順咽而還吐索水洗漱其精苦執節皆此類也臨終之日房內頗有異香以天監六

年卒山寺春秋六十有一也

齊揚都高坐寺釋慧進常誦法花用心勞苦后病便執經疲願造百部以爲懺悔先障始聚得稽錢一千六百文賊來索以物進示經錢賦慙而退后遂成百部病亦愈誦經既度情願又滿廻此誦業願生安發聞空中告曰汝願已足必得往生無病而卒春秋八十也矣

晉洛陽大市寺釋安慧少無恒性卓超異人而工正書善能談吐永嘉年中天下疲病則晝夜祈誠願降藥以愈萬民一日出寺門見兩石形如甕則取看之果有神水在內病者飲服莫不皆愈后齊會稽釋弘明止雲門寺誦法花隨懺爲業每且水瓶自滿諸天童子爲給使又感虎來入室伏牀前久之乃去又山精來惱明乃

二十七

二十六

捉取以腰繩繫之鬼訥送板后卒於本寺矣

晉廬山釋曇邕姓楊關中人也身長八尺投廬山師事遠內外經書多所綜涉志尚傳法不憚疲苦嘗山神來求受五戒乃爲說法授戒神導以外國七寶禮拜辭則不見後往荊州卒於竹林寺矣齊瑯琊縣山釋法度黃龍人也少出家備綜衆經專以苦節嘗有山神來願受五戒度曰人神道殊無容相屈且檀越血食祭祀此最五戒所禁也神曰受戒去殺乃授戒禮拜辭去后以齋永元二年卒山寺春秋六十有四也矣

隋西京大暉定寺釋靈幹姓李氏金城狄道人也立性翹仰恭攝戒飾三業翫持均禁遮性仁壽二年奉勅送舍利於洛陽放神光通夕明亮又感異香從風而至道俗同見聞以大業八年正月二十九日卒於本寺春秋七十有八也矣

晉沙門竺法師者住會稽與北中王恒之甚厚共論死生罪福報應之事未嘗有無因便共要若有先死當相報語既別後王恒之在郡忽見法師王便驚云和尚何處來答曰貧道以某月日死罪福不虛應若影響檀越當勸修道先與君約故來相語言終不復見

隋竹林寺釋道仙本康居國人也以遊賈爲業往來吳蜀集積珠寶直十萬貫也後達梓州牛頭山值僧詒法便投竹林寺頓出家初落髮曰誓曰吾不得道誓不出山結志不辭入定一坐五日爲期時遭酷旱百姓惶憂苗稼失色皆來禱祈雨仙卽往龍穴以杖扣門喚曰衆生何爲嗜眠如語既寤當卽乞雲四合大雨普霑民賴斯澤貴賤咸蒙飲若天神仁壽年中卒矣

東京師枳園寺釋智嚴西涼州人也弱冠出家便以精勤著名著述歷西國諮受禪法博通經論嚴清素寡欲隨受施稟性冲退不自陳叙故雖多美行世無得而盡傳後至嗣賓無疾而化時年七十有八也矣

東京師祇桓寺有求那跋摩此云功德鎧西域人也以宋元嘉八年正月達于建業文帝引見勞問殷懃嘗言曰弟子常欲持齋不殺時務以拘不獲從志法師既不遠萬里來化此國何以教之跋摩曰夫道在心不在事法由己非由人且帝王與匹夫所修各異匹夫身勝名劣言令不威若不就己苦躬將何爲用帝王以四海爲家萬民爲子出一嘉言則士庶咸悅布一善政則人神以和刑不亡命役無力勞則使風雨適時寒暖應節百穀滋繁桑麻豐茂如此持齋々亦大矣持不殺戒亦衆矣寧在闕半日食全禽命然後方爲弘濟耶帝乃撫几歎曰夫俗人迷於遠理沙門滯於近

隋竹林寺釋道仙本康居國人也以遊賈爲業往來吳蜀集積珠寶直十萬貫也後達梓州牛頭山值僧詒法便投竹林寺頓出家初落髮曰誓曰吾不得道誓不出山結志不辭入定一坐五日爲期時遭酷旱百姓惶憂苗稼失色皆來禱祈雨仙卽往龍穴以杖扣門喚曰衆生何爲嗜眠如語既寤當卽乞雲四合大雨普霑民賴斯澤貴賤咸蒙飲若天神仁壽年中卒矣

東京師枳園寺釋智嚴西涼州人也弱冠出家便以精勤著名著述

教迷遠理者謂至道虛說淵近教二者則拘三變篇章至如法師所言
良謂開悟明達可與言論人天際矣乃勅住祇洹寺供給隆厚王
公英彥莫不崇奉焉

宋長安龍光寺竺道生魏鉅鹿人也少出家聰銳神異初入廬
山幽棲七年鑽仰群經斟酌標論后從什公受學乃說阿闍提人
皆得成佛于時涅槃大本未傳大衆以爲邪說擯而遣之其后大本
至于南京果稱闍提悉有佛性與前所說合若符契生既獲斯經
講說以宋元嘉十一年十一月庚子昇于法座法席將畢端坐正
容而卒顏色不異似若入定道俗嗟駭遠近悲涕
晉越城寺釋法相姓梁常山居精苦誦經十餘万言鳥獸集其左
右皆馴若家禽忽見一人玄衣武冠令相問函重過千鈞於是取
其財以救貧民至晉元興末卒春秋八十矣

三十一

三十二

晉沙門仕行潁川人也姓朱氏氣志方遠職宇沈正修心貞靜榮
辱不能動焉八十乃亡依關維之火城經日屍形猶全國人驚異
皆曰真得道師也焉

晉沙門耆域天竺人也見洛陽宮曰初利天宮譬擬似此當以道
力成就而以生死力爲之不亦勤苦後西歸天竺其所行日萬里矣
晉沙門佛調往來常山積年樂尚純朴不表辭飾時人咸重之調
或獨入深山一年半齋乾飯數升恒有飯有人皆隨調山行天暮
大雪調入虎窟宿虎還橫臥窟前隨者駭懼后調自剋亡期遠近
悉至乃與歌曰天地長久尙有崩壞豈況人物而欲永存能過除
三垢專心眞淨神會必同衆咸涕流調端坐合掌奄然而終矣
晉提陀勒不知何國人遊洛陽周歷數年雖敬其風操莫能測焉
有人日能百里者欲隨而驗之乃與俱馳而不及勒顧笑曰汝執

吾髮髮來不及移晷便已至寺遺俗皆悟神人後不知終焉

宋程德度武昌人也父道惠廣州刺史廣爲衛軍臨川王行參軍元嘉十七年隨王鑑廣陵遇禪師釋道恭因就學禪甚有解分到十九年春其家武昌空齋忽有殊香芬馥達于衢路園境往觀三日乃厭矣

齊永興柘林寺釋弘明姓顧會稽山陰人也少出家貞苦有戒節止山陰雲門寺誦法花經禪定精勤體懺六時不輟每旦則水瓶自滿實感諸天童子來爲給使明嘗坐禪虎來入明室伏于牀前端然不覺久乃去以齊永明四年卒于柘林寺春秋八十有四也矣

齊南海荆山釋法獻廣州人也后入藏微山創寺寺成後有兩童子携手來歌曰藏微有道德言終忽然不見道俗驚嗟咸歎神異

后不知所終焉

晉董言於潛人也奉法三世至言尤精進恒齋戒誦首楞嚴經村中有病輒請吉誦經重病忽愈於村人一時奉法晉謝敷字慶緒會稽山陰人也鏡軍將軍帽子也稍勤不倦手寫首楞嚴經客大災火人屋雖焚毀而於燬燼之中時得全經紙紫如故一縣歎異相率敬信矣

唐令狐元軌隆州巴西之人也信敬佛法欲寫法花金剛般若涅槃等乃爲在寺如法潔齋淨寫了忽爲外火之家屋灰蕩軌于時任恐翔縣令家人相命撥灰覓金銅軸既撥灰其內諸經宛然如故秘村近遠莫不怪異焉

唐吳郡陸懷素家貞觀廿年失火屋宇總焚有一函金剛般若經獨存爾時人聞者莫不驚歎懷素即高陽許仁則前妻兄則之妻

三十四

三十三

目觀於后具自言之

唐司馬柳儉隋大業十年任岐州岐陽宮監至義寧元年爲李密任被牽引在大理寺禁儉常誦金剛般若經忽有勅喚將向創堂奉勅放免

唐前大理司直河內司馬喬鄉天性純謹有志行到永徽中爲揚州戶曹丁母憂居喪毀瘠刺心上血寫金剛般若經一卷未幾於廬上生芝草二莖經九日長尺有八寸緣選朱蓋日漚汁一升人々食之味甘如蜜去而復生如此數四天下士人多共知之甚歎異深信之

朱葛濟之句客入稚川後也妻同郡紀氏體貌閑雅甚有婦德濟氏世々事仙學然紀氏心樂佛法常存誠不替元嘉十三年方在機織忽見西方有如來異形及寶蓋幢旛蔽映天漢心獨喜日經

三十五

三十六

說無量壽佛卽此也便頭面作禮濟之見敬其如此起就之紀氏授濟手指示佛所濟見半身及諸幢蓋於是雪日鮮彩五色燭耀親族亦親自是村閭多歸法者

晉戴逵字安道謫國人也宅性居理遯世心釋教機思通膽巧擬造化乃影響法相咫尺應身作無量壽佛研思致妙精銳定製三年方成道俗拜者皆發菩提心焉

晉戴頤字仲若安道第二子也素韻淵澹雅好丘園亦繼志才巧遠每製像常共參廬客造觀世音像致力思而相好不聞后夢有佛告曰江夷於觀世音無緣可改爲彌勒大士頤卽停手改爲彌勒大士像於是觸手成妙光顏圓滿俄爾而成有識讚仰咸悟緣之匪差焉

明治二十三年七月

校合了

小僧覺惠

高僧名士傳跋

遠季の縮素をして智育體育の上に徳
育をれもんすへきことわりを澄悟せ
しむるの方法くさ——あるへけれど
も、まづ先徳古賢の善行嘉言を録せし
僧史をよみてみつからかへりみるの
捷徑を得せしむるよりよきはなかる
へし、こゝに稻村葉隆老僧正高僧名士
傳を編纂して世に公にせらるやつか

三十七

れ隨喜のあまりに一ことがきそへは
べりけるれなん

れこなひのかゝみどならむ史と

心にかけて紐ときぬ人

いにしへの聖のあとをふみしめて

巧法のみちれいりね世の人

閑々堂慈恭誌

三十六

明治廿三年八月十五日御届

同

同 十六日出版

埼玉縣平民

編輯人 稻村英隆

紀州伊都郡高野山寄留

香川縣平民

發行兼印刷人 大西寂純

京都市下京區東寺町
四十一番地寄留

織田得能 編

和漢高僧傳

明治二十八年（一八九五）東京無能齋刻本

據明治二十八年（二八九五）
東京無能齋刻本影印

織田得能編

和漢高僧傳

無能齋藏版

和漢高僧傳序

古今和漢之高僧碩德、可以千百數也。故梁、唐、宋、明及本朝高僧傳之類、卷帙浩瀚、殆如無遺漏也。然子細閱之、則此等之書、時脫傑出者、讀者憾焉。此傳、摘其要、補其闕、始於彌天釋道安、終於慧澄律師、得九十有六人矣。此固存十一於千百者也。雖然、從事於爲法者、苟得此九十六師中一人之心髓、則其德何如哉。況以諸師之心爲心、則欲大法不振、可得乎哉。契嵩有言、爲法不爲身。此五字能感人主、延及宰臣文人矣。讀此傳者、不可不察也。織田學師編集之意、蓋亦在茲乎。學師來索序、因書斯語以贈、併誌讀者。明治二十七年甲午八月二十七日、識於東京麴園爪雪處。

碩果南條文雄

凡例

一和漢高僧豈止於此。但課本之體。以紙數有限。今纔取九十六人耳。然古今碩德。有大關係於宗派與義學者。概網羅無遺。

一編次一從出世弘教之年代。其所以難叙和漢者。古德互來往。彼此教勢。恰爲一國之觀也。

一紀年月。諸書不同者。不可強和會。今且從一焉。

一一師而諸書有其傳者。取其最簡而盡者。如措高僧傳。取釋氏稽古略是也。文體之不盡一。亦不得已也。

一史氏所論贊。足啓發道心者。間取而載之。示微意所存也。

和漢高僧傳

卷上

無能齋藏版

一有抄引數書而成一師傳者。要事實無遺漏也。

一原文涉冗漫。或字句不啗者。間刪補之。雖頗用意於其間。所不期無害原意。故一一注其出所學者。有所疑請就而看焉。

編者識

和漢高僧傳卷上目次

道安	慧遠
羅什	法顯
達磨	曇鸞
眞諦	慧文
慧思 <small>南岳</small>	慧遠 <small>淨影</small>
智顗 <small>天台</small>	吉藏 <small>嘉祥</small>
杜順	道綽
玄奘	道宣 <small>南山</small>
弘忍	善導

和漢高僧傳

卷上

無能齋藏版

窺基 <small>慈恩</small>	普光
道昭	慧能 <small>曹溪</small>
法藏 <small>賢首</small>	義淨
善無畏	一行
金剛智	行基
鑑真	不空
湛然 <small>荆溪</small>	善珠 <small>秋菴</small>
澄觀 <small>清涼</small>	

計三十三人

和漢高僧傳卷上

織田得能編

○道安傳

釋道安。姓衛氏。常山扶柳人也。家世英儒。早失覆蔭。爲外兄孔氏所養。年七歲讀書。再覽能誦。鄉鄰嗟異。至年十二出家。神智聰敏。而形貌甚陋。不爲師之所重。驅役田舍。至于三年。執勤就勞。曾無怨色。篤性精進。齋戒無闕。數歲之後。方啓師求經。師與辯意經一卷。可五千言。安資經入田。因息就覽。暮歸。以經還師。更求餘者。師曰。昨經未讀。今復求耶。答曰。即已聞誦。師雖異之。

和漢高僧傳

卷上

無能齋藏版

而未信也。復與成具光明經一卷。減一萬言。資之如初。暮復還。師執經覆之。不差一字。師大驚嗟。而異之。後爲授具戒。恣其遊學。至鄴。入中寺。遇佛圖澄。澄見而嗟歎。與語終日。衆見形貌不稱。咸共輕怪。澄曰。此人遠識。非爾儔也。因事澄。爲師。澄講安每覆述。衆未之愜。咸言須待後次。當難殺崑崙子。即安後更覆講。疑難蜂起。安挫銳解紛。行有餘力。時人語曰。漆道人斃四隣。于時學者多守聞見。安乃歎曰。宗匠雖逝。玄旨可尋。應窮究幽遠。探微奧。令無生之理。宣揚季末。使流遁之徒。歸向有本。於是遊方問道。備訪經律。後避難潛于渡澤。與同學竺法汰俱。憩飛龍山。沙門僧先道護已在彼山。相見欣然。乃共披文屬思。妙出

神情安後於太行恒山創立寺塔時武邑太守盧欽聞安清秀使沙門敏見苦要之安辭不獲免乃受請開講名實既符道俗

欣慕至年四十五復還冀部住受都寺徒衆數百常宣法化（高案）

第五傳習鑿齒襄陽高士先以書通好乃詣安自稱曰四海習鑿

齒安曰彌天釋道安相得歡甚即以書抵謝東山稱安蓋非常

勝士恨公不一見耳孝武帝聞安名詔曰法師以道德照臨天

人使大法流行爲蒼生依賴宜日食王公祿所司以時資給安

固辭不受未幾符堅攻陷襄陽得安而喜謂左右曰吾以十萬

師取襄陽得一人半耳左右問爲誰曰安公一人習鑿齒半人

也安入關沙門萬數皆隨師姓而名安曰師莫如佛也應沙門

和漢高僧傳

卷上

無能齋藏版

左臂有肉方寸許隆起如印時號印手菩薩著僧尼軌範及法門清式二十四條世遵行之（傳記）

○慧遠傳

釋慧遠本姓賈氏廬門耆煩人也弱而好書珪璋秀發年十三

隨舅令狐氏遊學許洛故少爲諸生博綜六經尤善莊老性度

弘博風鑒朗拔雖宿儒英達莫不服其深致年二十一欲渡江

東就范宣子共契適值石虎已死中原寇亂南路阻塞志不獲

從時沙門釋道安立寺於太行恒山弘贊像法聲甚著聞遠遂

往歸之一面盡敬以爲真吾師也後聞安講般若經豁然而悟

乃歎曰儒道九流皆糠粃耳便與弟慧持投簪落彩委命受業

和漢高僧傳

卷上

無能齋藏版

既入乎道厲然不群常欲總攝綱維以大法爲己任精思諷持

以夜續晝資旅無資繼續常闕而昆弟恪恭終始不懈有沙門

曇翼每給以燈燭之費安公聞而喜曰道士誠知人矣遠藉慧

解於前因發勝心於曠劫故能神明英越機鑒遐深安公常歎

曰使道流東國其在遠乎年二十四便就講說嘗有客聽講難

實相義往復移時彌增疑味遠乃引莊子義爲連類於是惑者

曉然是後安公殊聽慧遠不廢俗書（案高僧傳第六）及關中擾亂安散

其徒皆諄諄規誨而遣之遠別獨不與一言遠惟問安曰若汝

吾何言哉遂自荆川將之羅浮抵潯陽見匡山愛之廬於山陰

太守桓伊爲荆精舍時晉室微而天下奇才多隱居不仕若彭

師憂於是俯伏躬受其譴太元十四年二月八日跏趺而逝安

城劉遺民。豫章雷次宗。廬門周續之。新蔡畢穎之。南陽宗炳。張士民。李碩等。從遠遊。并沙門千餘人。結白蓮社於無量壽像前。建齋立誓。期生淨土。及聞羅什法師入關。遠望風。欽敬遺書。通好。初中國未有涅槃常住之說。且云壽命長劫。遠曰。佛是至極。至極則無變。無變之理。豈有窮哉。乃著法性論。羅什見論。歎曰。遠未及見經。暗與理會。豈不妙哉。秦王姚興致書餉遠。龜茲細纒雜變像。以伸欵敬。安城侯姚嵩獻珠像并釋論。曰。大智論新譯。龍猛所作。法師當冠以敘文。以昭示萬世。此邦道人同所欽聞。遠以大論文廣謙讓。不諾。乃抄其要。爲二十卷。而別敘之。桓玄輔政。勸安帝沙汰僧尼。詔曰。沙門有能伸述經牒。演說義理。

和漢高僧傳

卷上

無能齋藏版

律行修整。可宜寄大化者。聽依所習。不者。悉令罷道。唯匡山道德所居。不在搜簡。遠以書抵玄。陽縱而陰奪之。遂停其詔。遠嘗稽考禪宗別傳之旨。源流所自。及祖師達磨之來。遂皆符合。云陶淵明隱居柴桑。從遠問道。深相敬仰。謝靈運投名入社。遠拒之。不內。及宗炳著明佛論。顏延之析達性論。周顒駁夷夏論。鄒道子著神不滅論。皆稟遠是正焉。至隆安中。桓玄重申庚水之義。欲沙門盡教王者。朝廷承風旨多與玄合。因以問遠。曰。此一代大事。不可使朝廷失體。遠著沙門不敬王者論五篇。劇陳所以不拜之意。玄始意堅。及得遠論。即緩其事。未幾篡位。乃下書曰。佛法弘大。所不能測。推奉主之情。欲興其教。今事既在。已宜

體謙冲。應諸道人勿復致禮也。安帝避玄。還次潯陽。詔遠見于行在。輔國何無忌勅。遠一出。遠固辭以疾。帝再詔問勞。初九江太守歲時送米資奉。卜居三十年影不出山。迹不入俗。送客以虎溪爲限。遠臨終。其徒進蜜漿者。遠懼違律。令左右檢律。未終卷。遂合掌西面而逝。年八十有三。有匡山集三十卷。行于世。

鳩摩羅什傳

鳩摩羅什。此翻童壽。天竺人也。家世國相。祖父達多。倜儻不群。名重於國。父鳩摩羅睺。聰明有懿節。將嗣相位。乃辭避出家。東度葱嶺。龜茲國王聞其奔榮。甚敬慕之。自出郊迎。請爲國師。王

和漢高僧傳

卷上

無能齋藏版

有妹年二十。才悟明敏。過目必解。一聞則誦。且妹有赤黑法生。智子諸國聘之。並不肯行。及見羅睺。心欲當之。乃逼以妻焉。既而嫌師。在胎時。其母惠解倍常。至雀梨大寺。彌日設供。請齋聽法。忽自通。天竺語難問之辭。必窮淵致。衆咸歎異。有羅漢曰。此必娘智子爲說。身子在胎之證。及師生之後。還忘前言。甫七歲出家。日誦千偈。義自通達。時龜茲國人以母王女。利養甚多。乃携避之。師時九歲。隨母渡辛頭河。至罽賓國。遇盤頭達多。崇以師禮。從受阿含。達多每稱其神俊。遂聲徹於王。王即請入集。外道論師。共相攻難。彼輕其年幼。言頗不遜。師乘隙而挫之。外道無言。王益敬異。時母將師至北山。有一羅漢見而異之。謂母

曰常善守護。若至三十五。不破戒者。當大興佛法。度無數人。與
德多無異。若戒不全。止才儻耳。又至沙勒國。王設大會。請師說
法。師說法之暇。乃尋訪外書。莫不畢盡。妙達吉凶。然自得於心。
未嘗介意。時有須耶利蘇摩才技絕倫。專以大乘爲化。師宗而
奉之。親好彌至。受誦中百及十二門等。頌之隨母還國。母謂師
曰。方等深教。應大闡真丹。傳之東土。唯爾之力。但於自身。無利
師曰。大士之道。利彼忘軀。若必使大化流傳。能洗悟。曠俗。雖復
身當爐鎚。苦而無恨。師既道流西域。名被東土。時苻堅僭號關
中。建元十三年正月。太史奏云。有星見外國分野。當有大德智
人入輔中國。十八年。堅遣呂光等西伐。龜茲破之。獲師而還。及

和漢高僧傳

卷上

六

無能齋藏版

至涼州。苻堅敗。因自立。稱年太安。姚秦弘始三年三月。有樹
連理。生於廟庭。逍遙園。惹變爲菰。以爲美瑞。謂智人應入。五月
興西伐。呂隆。上表歸降。十二月。師至於長安。與待以國師之
禮。仍請入西明閣。及逍遙園。譯出衆經。師既率諸誦。無不究盡。
轉能漢言。音譯流便。師覽舊經。義多紕繆。皆由先譯失旨。不與
梵本相應。於是與使僧習。遵法欽道。恒僧肇等八百餘人。諮
受師旨。譯出小品金剛般若十住法華維摩思益首楞嚴持世
佛藏菩薩藏遺教觀小無量壽新寶劫禪經禪法要禪要解彌
勒成佛彌勒下生十誦律戒本菩薩戒本釋成實十住中百十
二門諸論。凡三百餘卷。並暢顯神源。發揮幽致。更令出大品。師

持梵本。與執舊經。以相警校。其新文異舊者。義皆圓通。衆心恆
伏。莫不欣讚。四方義士。聞之。皆至龍光道生。惠解入微。而忍言
外入關。請決。廬山惠遠。學貫群經。棟梁遺化。而去聖久矣。疑義
多端。乃書諸焉。初惠叙常隨傳寫。師每爲叙論。西方辭體。商略
同異。云。天竺國俗。甚重文製。其宮商體韻。以入絃爲善。今改梵
爲秦。失其藻蔚。雖得大意。殊隔文脉。有似嚼飯與人。非徒失味。
乃令嘔噦也。師雅好大乘。志存敷廣。常歎曰。吾若著筆。作大乘
阿毘曇。非迦旃延子之比也。今在秦地。深識者寡。折詔於此。將
何所論。乃悽然而止。惟爲姚興著實相論二卷。并註維摩。出言
成章。無所刪改。辭喻婉約。莫非玄奧。上足弟子生肇融叙等盛

和漢高僧傳

卷上

七

無能齋藏版

宣揚其義。師爲人。神情鑒徹。傲岸出群。應機領會。鮮有其匹。且
篤性仁厚。汎愛爲心。虛己善誘。終日無倦。居秦九年。而疾因集
衆告別。曰。因法相遇。殊未盡心。方今即世。惻愴可言。自以闇昧。
謬充傳譯。凡所出經論。唯十誦律。未及刪煩。今於衆前。發誠實
誓。若所傳無謬者。當使焚身之後。舌不焦爛。以弘始十一年八
月二十日。卒于長安。是歲晉義熙五年也。乃於逍遙園。依外國
法。以火焚屍。薪滅形碎。唯舌不灰。云。二秦王一日。謂什曰。法
師才明超悟。海內無雙。可使法種不嗣。哉。遂以宮嬪十人。逼令
受之。什亦自謂。每講有。二小兒登吾肩。欲障也。自是不住僧房。
別立廡舍。諸僧有。效之者。什聚針。盈鉢。謂曰。若相效能食此者。

乃可畜室耳。舉已進針，如常餅，諸僧愧止。什嘗升座，每日譬如臭泥中生蓮華，但取其華，勿取臭泥也。（通傳）

○法顯

釋法顯，姓龔，平陽武陽人。有三兄，並鬻畝而亡。父恐禍及，顯三歲便度爲沙彌，居家數年，病篤欲死，因以送還寺，信宿便差，不肯復歸。其母欲見之，不能得，後爲立小屋於門外，以擬去來。十歲遭父憂，叔父以其母寡獨，不立，逼使還俗。顯曰：「本不以有父而出家也。」正欲遠塵離俗，故入道耳。叔父善其言，乃止。顯之母喪，至性過人，葬事畢，仍即還寺，嘗與同學數十人於田中刈稻，時飢，賊欲奪其穀，諸沙彌悉奔走，唯顯獨留，語賊曰：「若欲須穀，

和漢高僧傳

卷上

無能齋藏版

隨意所取，但君等昔不布施，故至飢貧。今復奪人，恐來世彌甚。貧道豫爲君憂耳。言訖，即還，賊棄穀而去。衆僧數百人莫不歎服，及受大戒，志行明敏，儀軌整肅，常慨經律，外闕誓志，尋求以晉隆安三年，與同學慧景、道整、慧應、慧苑等發自長安，西渡流沙，上無飛鳥，下無走獸，四顧茫茫，莫測所之。唯視日以東西，望人骨以標行路耳。屢有熱風惡鬼，遇之必死。顯任緣委命，直過險難，有頃至葱嶺，嶺冬夏積雪，有惡龍吐毒風，雨沙礫，山路艱危，壁立千仞。昔有人鑿石通路，傍施梯道，凡度七百餘所，又踰懸絕，過河數十餘處，皆漢之張騫甘父所不至也。次度小雪山，遇寒風暴起，慧景噤戰不能前，語顯曰：「吾其死矣。」卿可前去，勿

得俱殞。言絕而卒。顯撫之泣曰：「本圖不果，命也奈何。」復自力孤行，凡所經歷三十餘國，去王舍城三十餘里，有一寺，通冥過之。顯欲詣，書閣崛山，寺僧諫曰：「路甚艱阻，且多黑獅子，亟經敗人，何由可至？」顯曰：「遠涉數萬，誓到靈鷲，身命不期，出息非保，豈可使積年之誠，既至而廢耶？」雖有險難，吾不懼也。衆莫能止，乃遣兩僧送之。顯既至山，日將曛夕，欲遂停宿，兩僧危懼，捨之而還。顯獨留山中，燒香禮拜，翹感舊跡，如覩聖儀。至夜有三黑獅子來，蹲顯前，舐尾搖尾，顯誦經不輟。一心念佛，獅子乃低頭下尾，伏顯足前。顯以手摩之，呪曰：「若欲相待，我誦竟。」獅子良久乃去。後至中天竺，於摩竭提邑波連弗阿育王塔南天王寺得摩

和漢高僧傳

卷上

無能齋藏版

訶僧祇律，又得薩婆多律抄雜阿毘曇心總經方等泥洹經等。顯留三年，學梵語梵書，方躬自書寫，於是持經像，寄附商客，到獅子國。顯同旅十餘，或留或亡，顯影唯己。常懷悲慨，忽於玉影前見商人以晉地一白團絹扇供養，不覺悽然下淚。停二年復得彌沙塞律長雜含及雜藏本，並漢土所無。既而附商人，大舶循海而還，造京師，就外國禪師佛駄跋陀於道場寺，譯出摩訶僧祇律方等泥洹經雜阿毘曇心垂百餘萬言。後至荊州，卒於辛寺。春秋八十有六。（高僧傳）顯具叙始末，自云：「顯尋所經，不覺心動汗流，所以乘危履險，不惜此形者，蓋是志有所存，專其愚直，故投命於必死之地，以達萬一之冀。自大教東流，未有忘身，

求法如顯之比，然後知誠之所感，無窮否，而不通志之所將，無功業，而不成。(法顯傳)

○菩提達磨傳

菩提達磨，南天竺國香至王第三子，姓刹帝利。時國王名異見，祖之侄也。初信外道，祖化之，歸正。既而念震且緣熟，行化時至，辭於侄王。王爲具大舟，實以珍寶，汎重溟，三週寒暑，達于南海。當梁普通元年九月二十一日也。廣州刺史蕭昂迎禮，表聞武帝。覽奏，遣使迎請。次年十月一日，至建康。帝問曰：朕即位以來，造寺寫經，度僧不可勝紀，有何功德？祖曰：並無功德。帝曰：何故？祖曰：此但人天小果，有漏之因，雖有非實。帝曰：如何是真功德？

和漢高僧傳

卷上

無能齋藏版

祖曰：淨智妙圓，體自空寂。帝曰：如何是聖諦第一義？祖曰：廓然無聖。帝曰：對朕者誰？祖曰：不識。帝不領悟。祖知機不契，是月十九日潛之江北。十一月二十三日，屆洛陽。當魏孝明帝正光二年也。寓止嵩山少林寺，面壁而坐。魏明帝三詔之，祖終不起。就賜祖袈裟，祖亦不受。使三返，帝強授之。時有僧神光者，博覽群書，善談立理。聞祖住止，乃往參承。是年十二月九日夜，天大雪，光堅立庭中，遲明。積雪過膝，祖憫之，問曰：久立雪中，當求何事？光泣曰：願和尚慈悲，開甘露門，廣度群品。祖曰：諸佛無上妙道，曠劫難逢。豈小德小智，輕心慢心，所及乎？光聞，誨勵喜不自勝，即以利刀自斷左臂，置於祖前。祖曰：諸佛最初求道，重法忘

身，汝今斷臂，吾前求亦可矣。因以易名曰慧可。可乃曰：諸佛法印可得聞乎？祖曰：諸佛法印，匪從人得。可曰：我心未寧，乞師安心。祖曰：將心來，與汝安。可良久曰：覓心了不可得。祖曰：我與汝安心竟。是後祖欲返西竺，命門人曰：時將至矣。汝等盍各言所得。時諸參侍各陳所見。最後慧可出，禮三拜，依位而立。祖乃顧慧可而告之曰：昔如來以正法眼付迦葉大士，展轉囑累而至於我。我今付汝。汝當護持，并授汝袈裟，以爲法信。各有所表，宜可知矣。可曰：請師指陳。祖曰：內傳法印，以契證心。外付袈裟，以定宗旨。慮後代之疑競，指吾西天之人言汝此方之子憑，何得法以何證之？汝今受此衣法，却後難生。但出此衣并吾法偈，用

和漢高僧傳

卷上

無能齋藏版

以表明其化無礙。至吾滅後二百年衣止不傳，法週沙界。明道者多，行道者少；說理者多，通理者少。聽吾偈曰：吾本來茲土，傳法救迷情。一花開五葉，結果自然成。楞伽經四卷者，蓋如來極談法要，亦可以與世開示悟入。今并付汝。吾本離南印來，此東土爲法求人，際會未諧。如愚如訥，今得汝傳授，吾意已終。乃與徒衆往禹門千聖寺止。三日奄然長逝。魏幼主劔與孝莊帝廢立之際，當梁大通之二年十月五日也。其年十二月二十八日葬洛陽嵩州之熊耳山起塔於定林寺。後三歲魏使宋雲者奉使西域，回遇祖於葱嶺，手携隻履，翩翩獨逝。雲問之，答曰：西天去。雲歸具說之，門人起塔，空棺隻履存焉。詔取遺履供養於少

林寺。梁武帝聞祖化跡，親爲製碑。至唐代宗皇帝，誥號圓覺大師塔曰空觀。(正宗)

○曇鸞傳

釋曇鸞，或爲樹末詳其氏，雁門人也。家近五臺山，神迹靈怪，逸于民聽。時未志學，便往尋焉。備觀遺蹤，心神歡悅，便即出家。內外經籍，具陶文理，而於四論佛性，彌所窮研。讀大集經，恨其詞義深密，難以開悟，因而注解。文言過半，便感氣疾，權停筆功。周行醫療，行至汾川秦陵，故墟入城，東門上望，青霄忽見天門洞開。六欲階位，上下重復，歷然齊觀。由斯疾瘳，欲繼前作。顧而言曰：命惟危脆，不定其常。本草諸經，具明正治，長年神仙，往往間

和漢高僧傳

卷上

十二

無能齋藏版

出心願所指，脩習斯法，果尅既已。方崇佛教，不亦善乎。承江南陶隱居者，方術所歸，廣博弘瞻。海內宗重，遂往從之。既達梁朝，時大通年中也。乃通名云：北國虜僧曇鸞，故來奉謁。時所司疑爲細作，推勘無有異詞。以事奏聞，帝曰：斯非覬覦者，可引入重雲殿。仍從千迷道，帝先於殿隅却坐，繩牀衣以袈裟，覆以納帽。鸞至殿前，願望無承對者。見有旛張高座上，安几拂，正在殿中。傍無餘座，徑往昇之。暨佛性義三命，帝曰：大檀越，佛性義深，略已標叙，有疑賜問。帝却納帽，便以數關往復。因曰：今日向晚，明須相見。鸞從座下，仍前直出，詰曲重沓，二十餘門。一無錯誤，帝極歎呀曰：此千迷道，從來舊侍，往還疑阻，如何一度遂乃無迷。

和漢高僧傳

卷上

十三

無能齋藏版

明且引入太極殿，帝降階，禮接問所由來。鸞曰：欲學佛法，恨年命促減，故來遠造陶隱居，求諸仙術。帝曰：此傲世遁隱者，比屢徵不就，任往造之。鸞尋致書通問，陶便以仙經十卷，用酬遠意。因即辭還，魏境欲往，名山依方修治，行至洛下，逢中國三藏菩提留支，鸞曰：佛法中頗有長生不死法勝，此土仙經者乎。留支唾地曰：是何言歟，非相比也。此方何處有長生法，縱得長年，少時不死，終更輪迴，三有耳。即以觀經授之曰：此大仙方，依之修行，當得解脫，生死。鸞尋頂受所寶仙方，並火燒之，自行化他。流靡弘廣，魏主重之，號爲神鸞焉。下敕令住并州大嚴寺。晚復移住汾州北山石壁，玄中寺。時往介山之陰，聚徒蒸業。今號鸞公。

○真諦傳

魏玄簡大士云。(續高僧傳卷六)

拘那羅陀陳言，親依或云波羅末陀譯云：真諦並梵文之名字也。本西天竺優禪尼國人。景行澄明，器宇清肅，風神爽拔，悠然

自遠群藏廣部罔不措懷。藝術異能徧素暗練。雖遵融佛理。而以通道知名。遠涉艱關。無憚夷險。歷遊諸國。隨機利見。梁武帝德加四域。盛唱三寶。大同中。敕直後張汜等。送扶南。獻使返國。仍請名德。三藏并大乘諸論。雜華經等。遠聞行化。儀軌聖賢。搜選名匠。惠益民品也。彼國乃屈真諦。并資經論。恭膺帝旨。既素在彼心。渙然聞命。以大同十二年八月十五日。達于南海。沿路所經。乃停兩載。以太清二年閏八月。始屆京邑。武皇面申頂禮。於寶雲殿。竭誠供養。帝欲傳翻經教。不美秦時。更出新文。有逾齊日。屬道銷梁季。寇羯憑陵。法爲時聞。不果宣述。乃步入東土。又往富春。招延英秀。沙門寶瓊等二十餘人。翻十七地論。適

和漢高僧傳

卷上

十四

無能齋藏版

得五卷。而國難未靜。側附通傳。至天保三年。爲候景請還。在臺供養。于斯時也。兵饑相接。法幾頽焉。會元帝啓祚。承聖清夷。乃止于金陵。正觀寺。與顯禪師等二十餘人。翻金光明經。三年二月。還返豫章。又往新吳。始興。後隨肅太保度嶺。至于南康。並隨方翻譯。逮陳武永定二年七月。還返豫章。又止臨川。晉安諸郡。真諦雖傳。經論道缺。情離。本意不申。更觀機壞。遂欲汎舶。往楞加修國。道俗虔請。結誓留之。遂停南越。便與前梁舊齒重。覈所翻。其有文旨乖競者。皆鎔冶成範。始末輪通。至文帝天嘉四年。楊都建元寺。沙門僧宗。法准。僧忍。律師等。並建業標領。欽聞新教。謠欣其來意。乃爲翻攝大乘等論。首尾兩載。覆疏宗旨。而觀

寓投委。無心寧寄。又汎小舶。至梁安郡。更裝大舶。欲返西國。學徒追逐。相續留連。太守王方奢。送衆元情。重申邀請。謠又且循人事。權止海隅。伺旅束裝。未思安堵。至三年九月。發自梁安。汎舶西引。業風賦命。飄還廣州。十二年中。上南海岸。刺史歐陽穆公。頒延住。制旨寺。請翻新文。謠願此業緣。西還無指。乃對沙門慧鐙等。翻廣義法門經及唯識論等。後穆公薨沒。世子紇重。爲檀越。開傳經論。至光太二年六月。謠厭世。浮雜情弊。形骸未若。佩理資神。早生勝壤。遂入南海。北山將捐身命。時慧愷正講。俱舍。聞告。馳往。道俗奔赴。相繼山川。刺史又遣使人。伺衛防遏。躬自稽顙。致留三日。方紆本情。因迎還。止于王園寺。時宗愷諸僧

和漢高僧傳

卷上

十五

無能齋藏版

欲延還。建業會楊瑩。碩望。忍奪時榮。乃奏曰。嶺表所譯。衆部多明。無塵唯識。言乖治術。有蔽國風。不隸諸華。可流荒服。帝然之。故南海新文。有藏陳世。以太建元年。遘疾。至正月十一日午時。遷化。時年七十有一。明日於潮亭焚身。起塔。十三日。僧宗法准等。各資經論。還返匡山。自諦來。東夏雖廣。出衆經。偏宗攝論。故討尋教旨者。通覽所譯。則彼此相發。綺續輔顯。故隨處翻傳。親注疏解。其俱舍等。別疏。並是僧宗所陳。躬對本師。重爲釋旨。增減或異。大義無虧。宗公別著行狀。廣行於世。今總歷二代。共通數之。始梁武之末。至陳宣即位。凡二十三載。所出經論。記傳。六十四部。合二百七十八卷。微附華飾。盛顯隋唐。餘有未譯。梵本

書並多羅樹葉。凡有二百四十筴。若依陳紙翻之。則列二萬餘卷。今見譯訖。止是數筴之文。並在廣州制旨王園兩寺。是知法實弘博。定在中天。識量玃瑣。誠歸東夏。初。諦傳度。攝論。宗愷歸心。窮括教源。銓題義旨。遊心既久。懷微相承。諦又而對。闡揚情理。無伏一日氣屬。嚴冬衣服單疎。忍寒通霄。門人側席。愷等終夜靜立。奉侍諮詢。言久情誼。有時眠寐。愷密以衣被覆之。諦潛覺知。便曳之于地。其節儉知足如此。(續高僧傳卷一)

○慧文傳

釋慧文。俗姓高氏。性穎脫敏聰。夙稟圓乘。天真獨悟。時無爲師者。乃於大藏前發願。若探卷得經。禮佛爲師。得論菩薩爲師。焚

和漢高僧傳

卷上

十六

無能齋藏版

香散花。背手入藏中。抽得中觀論。論是龍樹所造。讀至四諦品。偈云。因緣所生法。我說即是空。亦名爲假名。亦是中道義。恍然大悟。因以龍樹爲高祖師。私註師在高齊之世。聚徒千百。專業大乘。獨步河淮。時無競化。所入法門。非世可知。學者仰之以爲履地戴天。莫知高厚。師以心觀口授。南岳々々盛弘南方。而師之門人在北者。皆無聞焉。(續高僧傳卷一)

○慧思傳

南岳尊者慧思。姓李氏。元魏南豫州武津人也。兒童時夢梵僧勸令入道。或見朋類讀法華經。樂法情深。得借本於空家。獨觀無人教授。日夜悲泣。復以家非人居。乃移托古城。鑿穴棲身。晝

則乞食。夜不事寢。對經流淚。頂禮不休。久雨濕蒸。舉身浮腫。忍心向經。忽爾消滅。又夢普賢乘白象王。摩頂而去。昔未識文。今自然解。所摩頂上。隱起肉髻。年十五出家。受具。謝絕人事。專誦法華。日唯一食。不受別請。所居菴宇。爲野人所焚。即嬰痼疾。來求悔過。其疾即愈。乃再作草舍。誦經如初。年二十。因讀妙勝定經。見讚美禪定。乃徧親禪德。學摩訶衍。常居林野。經行修禪。後謁文師。咨受口訣。授以觀心之法。晝則驅馳。僧事夜則坐禪。達旦夏竟。受歲將欲上堂。乃感歎曰。昔佛在世。九旬究滿。證道者多。吾今虛受法歲。內愧深矣。將放身倚壁。豁然大悟。法華三昧。自是之後。所聞之經。不疑自解。齊天保元年。常在河南習學。大

和漢高僧傳

卷上

十七

無能齋藏版

乘親觀諸大禪師。遊行諸郡。是歲刺史欲送歸鄉。師意欲南向。即舍衆渡淮。時勅國內諸禪師入臺供養。師以方便辭避。不就。四年至郢州。爲刺史劉懷寶講摩訶衍義。五年至光州。開岳寺止住。徒衆數百。共刺史請摩訶衍般若經。六年於光州大蘇山講摩訶衍。七年於城西觀邑寺講摩訶衍。師名行遠聞。學徒日盛。衆雜精粗。是非數起。乃顧徒屬曰。大聖在世。不免流言。況吾無德。豈逃此債。債是宿作。時來須受。此私事也。齊祚將傾。佛法暫晦。當往何方。以避此難。忽聞空聲曰。若欲修定。當往武當。南岳。師裴回光州。時往郡。郡爲衆講說。凡十四年。光州當陳齊爲邊境。烽火數興。衆不遑處。乃以陳光大二年入居南岳。謂其

徒曰吾寄此山正當十載過此以後必事遠遊大建元年九仙觀道士歐陽正則觀山有勝氣謀於衆曰此氣主褐衣法王彼盛則吾法衰矣乃鑿斷岳心釘石爲巫蠱事埋兵器於山上因詭奏曰北僧受齊募而爲之宣帝遣使考驗初度石橋有兩虎號吼使者驚退次日復進師曰檀越前行貧道當繼至越七日度使者尚未至始飛錫而往金陵四門皆見師入使者既至遂同進謁帝坐便殿見師乘空而下梵相異常驚悟其神一無所問以道士誣告罔上令案治之罪當棄市師請曰害人之命非貧道意乞放還山給侍僧衆亦足小懲帝可之令隨師還山將行錢以殊禮稱爲大禪師思大之名蓋得於此師將順世大集

和漢高僧傳

卷上

十八

無能齋藏版

門學連日說法苦切訶責聞者寒心乃曰若有十人不惜身命常修法華念佛三昧方等懺悔常坐苦行者隨有所須吾自供給如無此人吾當遠去竟無答者即屏衆歛念將入寂弟子靈辨不覺號哭師訶之曰惡魔出去衆聖相迎方論受生處何魃吾邪即端坐唱佛來迎合掌而逝顏色如生異香滿室時大建九年六月二十二日壽六十三夏四十九師身相挺特耳有重輪頂有肉髻牛行象步不倚不斜平昔禦寒唯一艾納綰纒之屬一切不受所著述多口授門入筆成章句出四十二字門無評行門大乘止觀各二卷釋論玄隨自意安樂行次第禪要三智觀門各一卷(卷六)

○慧遠傳

釋慧遠姓李氏燉煌人也後居上黨之高都焉天縱疎朗儀止冲和局度通簡崇履高邁幼喪其父與叔同居偏蒙提誘示以仁孝年止三歲心樂出家每見沙門愛重崇敬七歲在學功逾常百神志峻爽見稱明智十三辭叔往澤州東山古賢谷寺時有華陰沙門僧思禪師見而度之思練行高世衆所宗仰誦遠云汝有出家之相善自愛之初令誦經隨事訓誨六時之勤未勞呼策年十六師乃令隨閼梨湛律師往鄴大小經論普皆博涉隨聽深隱特蒙賞異而偏重大乘以爲道本年滿進具依上統爲和上順都爲閼梨光師十大弟子並爲證戒時以爲聲榮

和漢高僧傳

卷上

十九

無能齋藏版

之極及承光二年春周氏尅齊便行廢教敕前修大德並赴殿集武帝自昇高座序廢立義遠抗聲曰陛下今恃王力自在破滅三寶是邪見人阿鼻地獄不揀貴賤陛下何不怖帝勃然作色大怒直視於遠曰但令百姓得樂朕亦不辭地獄諸苦遠曰陛下以邪法化人現種苦業當共陛下同趣阿鼻何處有樂可得當斯時也齊國初殄周兵雷震見遠抗詔莫不流汗咸謂粉其身骨煮以鼎鑊而遠神氣鬼然辭色無撓上統衍法師等執遠手泣而謝曰天子之威如龍火也難以犯觸汝能窮之大經所云護法菩薩應當如是彼不佞革非汝咎也遠云正理須申豈惟顧此形命即辭諸德曰時運如此聖不能違遂潛於汲郡

西山勤道無倦三年之間誦法華維摩等各一千遍。大象二年。天元微開。佛化東西兩京各立陟岵大寺。置菩薩僧。頒告前德。詔令安置。大隋受禪。天步廓清。開皇之始。法門初開。遠近歸奔。望氣成津。開皇五年。爲澤州刺史千金公。請赴本鄉。此則像法再弘。桑梓重集。親疎含慶。何以加之。七年春。往定州。途由上黨。留連夏講。遂闕東傳。尋下聖書。殷勤重請。辭又不免。便達西京。於時敕召大德六人。遠其一矣。仍與常隨學士二百餘人。創達帝室。上大悅。敕住興善寺。勞問豐華。供事隆倍。乃選天門之南大街之右。東西衝要。遊聽不疲。因置寺焉。名爲淨影。常居講說。弘叙玄奧。辨暢奔流。吐納自深。宣談曲盡。於是四方投學。七百

和漢高僧傳

卷上

二十

無能齋藏版

餘人。皆海內英華。法輪前轍。望京趣寺。爲法道場。遠形長八尺。腰有九圍。十三幅。裙可爲常服。登座震吼。雷動蟄驚。充愜群望。斯爲盛矣。開皇十二年春。下敕令知翻譯。刊定辭義。其年卒於淨影寺。覓旛哀感。爲之罷朝。即開皇十二年六月廿四日矣。俗年七十。僧臘五十。地持疏五卷。十地疏七卷。華嚴疏七卷。涅槃疏十卷。維摩勝鬘等並勒爲卷部。四字成句。綱目備舉。又撰大乘義章十四卷。合二百四十九科。分爲五聚。謂教法。義法。染淨。離也。佛法。綱要。盡於此焉。學者定宗。不可不知也。四十年間。曾無痾疹。傳持教導。所在弘宣。寺衆百餘。傾徒者三十。並大唐之稱首也。而遠勇於法義。慈於救生。戒乘不緩。偏行拯溺。所得利

養並供學徒衣盂之外。片無留惜。(續高僧傳卷八)

○智顗傳

智顗字德安。性陳氏。世爲潁川人。晉朝避亂。止於荊州之華容。父起祖。梁元帝時。爲散騎常侍。封益陽侯。母徐氏夢香煙五采。紫迥入懷。又嘗夢吞白鼠。因覺體重。卜者曰。白鼠者龍所化也。誕靈之夕。神光發屋。鄰人望之。以爲火。至則知其生子。衆咸驚異。師眉分八采。目耀重瞳。有古帝者之相。父母每藏護之。不令人見。在襁褓中。臥即合掌。坐必而西。七歲喜往伽藍。蒙僧口授普門品。一徧成誦。年十七。值元帝江陵失守。親屬流徙。師於長沙。佛像前誓爲沙門。年十八。辭兄求去。時王琳守湘。往從之。琳

和漢傳僧傳

卷上

二十一

無能齋藏版

以陳候故舊。即資給法具。依本郡果願寺。舅氏法緒出家。二十進受具戒。初從慧曠學律。兼通方等。復詣大賢山。誦法華無量義。普賢觀。歷涉二旬。誦通三部。進修方等。陳文帝天嘉元年。時思禪師止光州大蘇山。即往頂拜。思師曰。昔日靈山同聽法華。宿緣所追。今復來矣。即示普賢道場。爲說四安樂行。昏曉苦到。如教研心。切柏代香。相盡繼之以栗。卷簾進月月沒。燎之以松。經二七日。誦經至是真精進。是名眞法。供養如來。身心豁然。寂而入定。照了法華。若高暉之臨幽谷。達諸法相。如長風之遊太虛。將證白師。南岳歎曰。非汝弗證。非我莫識。所入定者。法華三昧。前方便也。所發持者。初旋陀羅尼也。縱令文字。師千群萬衆。

尋汝之辯不可竭矣。當於說法人中最爲第一。以陳光大元年同法喜等二十七人。初至金陵。大建元年。儀同沈君理請居瓦官。開法華經題。帝敕停朝。一日令群臣往聽。仍於一夏開釋大義。師止瓦官。前後八載。謝遣門人曰。吾初年共坐者四十人。得法。次年百餘人。得法者不滿十人。其後徒衆轉多。得法轉少。吾聞天台幽勝。昔人見稱。將息緣茲。嶺以展平生之志。夏四月宣帝敕留訓物。徐陵泣勸勿往。師勉留度。夏秋九月遂入天台。八年師安居。佛隴歲偶失稔。衆皆隨意去住。師與慧綽種苜蓿拾橡安貧無憾。九年二月帝下詔。割始豐縣調以充衆費。蠲兩戶民。用給薪水。於是衆復來集。十年五月左僕射徐陵以禪師創寺。

和漢高僧傳

卷上

二十二

無能齋藏版

啓於朝。賜號修禪。祇明五年於光宅講法華經。時章安預聽。次隋開皇十年秦孝王出鎮楊州。十一年晉王代爲總管。遣使奉迎。師曰。我與晉王深有緣契。即束衣順流。不日而至。王製文請授菩薩戒。師三辭不免。以是年十一月二十三日於總管大聽事。設千僧齋。授菩薩戒。法師謂王曰。大王紆遵聖禁。可名總持。王贊師曰。大師傳佛法燈。宜稱智者。十二年十二月師至荊州。旋鄉答地。將建福庭。乃於當陽玉泉山創立精舍。道俗受戒聽講者至五千餘人。十三年二月晉王入朝。行次陝州。遣書往荊州奉迎。夏四月於玉泉說法華立義。七月王以創寺奏上。賜名玉泉。十四年夏四月於玉泉說摩訶止觀。一夏敷揚。二時慈隱。

十七年四月立御衆制法十條。八月會稽嘉祥寺沙門吉藏百餘人奉疏請講法華。不赴。十一月二十一日智朗請曰。不審師入何位。沒此何生。誰可宗仰。師曰。汝等頗種善根。聞它功德。如盲問乳。告實何益。吾今當爲破除汝疑。吾不領衆。必淨六根。爲它損己。祇五品耳。吾諸師友侍從。觀音皆來迎我。波羅提木叉。是汝之師。吾常說四種三昧。是汝明導。又誠維那曰。人命將終。聞鐘磬聲。增其正念。惟長惟久。氣盡爲期。世間哭泣喪服皆不應。爲言訖。唱三寶名。如入三昧。實此月二十四日未時也。春秋六十。僧夏四十。師於三十年唯著一衲。冬夏未嘗釋體。有所受施。一果一縷。悉以入衆。凡所弘通。不著章疏。安無礙辯契理符。

和漢高僧傳

卷上

二十三

無能齋藏版

文有大機感。乃親著述。爲晉王著淨名義疏二十八卷。爲毛喜著六妙門。爲兄陳鍼著小止觀。爲學徒著覺章三昧法華三昧行儀各一卷。法界次第第三卷。(續藏六)

○吉藏傳

釋吉藏。俗姓安本。安息人也。祖世避仇。移居南海。因遂家。于交廣之間。後遷金陵。而生藏焉。年在孩童。父引之。見於眞諦。仍乞名之。諦問其所懷。可爲吉藏。因遂名也。父後出家。名爲道諒。精勤自拔。苦節少倫。乞食聽法。以爲常業。每日持盃。將還。跣足入塔。遍獻佛像。然後分施。方始進之。乃至涕唾便利。皆先以手承取。施應食衆生。然後遠棄。其篤謹之行。初無中失。諒恒將藏聽。

與皇寺道明法師講。隨聞領解。悟若天真。年至七歲。投明出家。採涉玄猷。日新幽致。凡所詣稟。妙達指歸。論難所標。獨高倫次。至年十九。處衆覆述。精辯鋒遊。酬接時彥。綽有餘美。進譽楊邑。有光學業。具戒之後。聲聞轉高。隋定百越。遂東遊秦望。止泊嘉祥。開皇末歲。煬帝晉蕃。置四道場。國司供給。釋李兩部。各盡搜揚。以藏入慧。日禮事豐華。優賞倫異。王又於京師置日嚴寺。別教延藏。往彼居之。欲使道振中原。行高帝壤。既初登京。瑩道俗雲奔。見其狀。則傲岸出群。聽其言。則鐘鼓雷動。晚以大業初歲。寫二千部法華。造二十五尊像。捨房安置。自處卑室。昏曉相仍。竭誠禮懺。又別置普賢菩薩像。帳設如前。躬對坐禪。觀實相理。

和漢高僧傳

卷上

二十四

無能齋藏版

鎮累年紀及大唐義舉。初屆京師。齊王元吉久揖風猷。親承師範。又屈住延興。異供交獻。藏任物而赴不滯。行藏年氣漸衰。屢增疾苦。敕賜良藥。中使相尋。一日至于清旦。索湯沐浴。著新淨衣。侍者燒香。令稱佛號。藏加坐儼思。如有喜色。齋時將及奄然。而化。春秋七十有五。即武德六年五月也。初藏年位。息慈英名。馳譽冠成之後。榮扇愈遠。貌象西梵。言定東華。對晤帝王。神理增其恒習。決滯疑議。聽衆忘其久疲。在昔陳隋。廢興江陰。凌亂道俗。波迭各棄。城邑乃棄其所屬。往諸寺中。但是文疏。並皆收取。聚置于三間堂內。及平定後。方挑簡之。故目學之長。勿過於藏。注引宏廣。咸由此焉。講三論一百餘遍。法華三百餘遍。大品智

論華嚴維摩等。各數十遍。並著玄疏。盛流於世。及將終日。製死不怖。論落筆而卒。(續高僧傳)初藏止嘉祥寺。講演法華。自著義疏。智者再歸天台。師與禪衆百餘人奉疏。請講法華。不赴。暨章安弘法稱心。因求法華玄義發卷一覽。即便感悟。乃焚香誓疏。深悔前作來投。章安否受。觀法。(續高僧傳)

杜順傳

法師法順。姓杜氏。亦稱杜順。如晦族長也。長安萬年人。以陳永定二年。生少爲隋文帝所重。給月俸供之。(通鑑)年十八出家。因聖僧道珍受學定法。凡世間聲啞遇之者。必能聞能語。至於驅園圃蟲。誠惡性。馬德及異類。所不可測。唐太宗詔問。朕苦勞熱。師

和漢高僧傳

卷上

二十五

無能齋藏版

之神力。何以蠲除。師曰。聖德御宇。微恙奚憂。但頌大教。聖躬自安。上從之。疾遂瘳。因錫號曰帝心。師每遊歷郡國。勸念阿彌陀佛。著五悔文。讚咏淨土。路逢神樹鬼廟。即焚毀之。正觀十四年十一月十五日。坐亡於南郊義善寺。雙鳥入房。異香留室。塔肉身於樊川北原。有弟子謁五臺。抵山麓。見老人語曰。文殊今往終南山。杜順和上是也。弟子趨歸。師已長往。至今關中以是日作文殊忌齋。師著法界觀門一卷。妄盡還源觀一卷。專弘華嚴。以授雲華智儼。儼授賢首法藏。其教遂行。(續高僧傳)

道綽傳

釋道綽。姓衛。并州汶水人。弱齡處俗。閭里以恭讓知名。十四出

家宗師經諸大涅槃部偏所弘傳講二十四遍晚事讚禪師修涉空理亟沾徽績瓊清約雅素慧悟開天道振朔方升名晉土綽稟服神味彌積歲時（續高僧傳卷二十）尋覓石壁谷玄思寺寺即後魏曇鸞法師舊止也鸞於其寺久蘊淨業至其亡日疊有祥異那人奇之拊撫其事刻之於石綽讀其文彌深信每歎鸞法師智德高遠尙捨講說修淨土業已得往生況我小子所解何足爲多而恃此爲德即捨講說修淨土行一向專念阿彌陀佛日別七萬徧爲限禮拜供養相續無間爲開悟有緣每講觀經二百餘徧示誨道俗七歲已上念阿彌陀佛教用小豆爲數上者念得九十八十石中者念得五十石下者三十石教諸有緣不

和漢高僧傳

卷上

二十六

無能齋藏版

向西方大小便利涕唾不背西坐聲聲相注弘淨土業每見佛住空中天華下散大如錢其色鮮白遍滿虛空大衆以手承花人人皆得七日不萎又撰安樂集兩卷見行於世唐貞觀三年四月八日道俗集其寺示如來之降生也且見鸞於空中乘七寶船由其上而指綽曰汝於淨土堂宇已成但惟報命未盡爾復見化佛與化菩薩飄飄在空中衆乃驚歎大生信服雖夫無種闡提之人亦率服之以故唐初并汾諸郡重漬淨業由綽盛焉貞觀十九年四月二十四日遇疾道俗省觀者不可勝記至二十七日欲終時又有聖衆從西方來兩道白光入房徹照終訖乃滅（新修往生傳）

○玄奘傳

釋玄奘本名禪姓陳氏漢太丘仲弓後也兄素出家即長捷法師也容貌堂堂儀局瓊秀講釋經義聯班群伍住東都淨土寺以獎少罹窮酷攜以將之曰授精理旁兼巧論年十一誦維摩法華東都恒度便預其次自爾卓然梗正不偶朋流口誦目緣畧無闕缺諸沙彌劇談掉戲曰經不云乎夫出家者爲無爲法豈復恒爲兒戲可謂徒喪百年時東都慧日盛弘法席涅槃攝論輪軸相係每恒聽受昏明思擇僧徒異其欣奉美其風素愛敬之至師友參榮大衆重其學功弘開役務沙門道基化開井絡法俗欽仰乃與兄從之行達長安住莊嚴寺又非本望西

和漢高僧傳

卷上

二十七

無能齋藏版

論劒開既達蜀都即而聽受阿毗曇論一聞不忘至於婆娑廣論難心玄義莫不鑒窮武德五年二十有一私自惟曰學貴經遠義重疎通鑽仰一方未成探賾有沙門道深體悟成實學稱包富控權敷化振綱趙邦非憤發內心將捐巴蜀遂乃假緣告別開行江碇經途所及荊楊等州訪逮道隣便北達深所縱洽無遺始終十月資承畧盡沙門慧休道聲高邁行解相富獨據鄴中昌言傳授又往從焉偏爲獨講難心攝論指摘纖隱曲示網恢相繼八月領酬無厭休又驚異沙門道岳宗師俱舍闡弘有部乃又從焉岳審其殷至樂說不窮任其索隱覃思研探晬周究竟沙門玄會匠剖涅槃刪補舊疏更張琴瑟承斯令問親

位。席端諸質遲疑。煥然祛滯。僕射宋公蕭瑀敬其脫穎。奏住莊嚴。然非本志。情栖物表。乃又惟曰。余周流吳蜀。爰逮趙魏。未及周秦。預有講筵。率皆登踐。已布之言令。雖蘊智襟。未吐之詞宗。解籤無地。若不輕生。殉命誓往。華胥何能具覩成言。用通神解。一觀明法。了義真文。返東華。傳揚聖化。則先賢高勝。豈決疑於彌勒。後進鋒穎。寧輟想於瑜伽耶。時年二十九也。遂勵然獨舉。貞觀七年。至中印度。遇大乘居士。受瑜伽師地。入王舍城。止那蘭陀寺。從戒賢論師受瑜伽唯識宗旨。留十年。歸自王舍城。貞觀十九年正月丙子。至京師。長安。留守房玄齡表聞。二月己亥。

和漢高僧傳

卷上

二十八

無能齋藏版

見於儀鸞殿。帝曰。師能委命求法。惠利蒼生。朕甚嘉焉。樊因奏。西域所獲梵本經論六百五十七部。乞就洛陽嵩山少林寺爲國宣譯。帝曰。朕頃爲穆太后。創弘福寺。可就彼翻譯。勅平章房玄齡。專知監護。資備所須。一從天府。貞觀二十二年六月。帝製樊新譯經大唐三藏聖教序。時皇太子治觀聖序。遂撰述聖記。八月。帝賜樊百金。磨納并寶剃刀。樊奉表謝。顯慶四年十月。制以玉華宮爲寺。追崇先帝詔。樊居之。次年。樊於玉華譯般若經。麟德元年二月。樊命弟子大乘光抄錄所譯經論凡七十五部。一千三百三十五卷。又召門人造像。設齋。與衆辭決。令左右念彌勒如來。初五日中夜。右脇安臥而逝。壽六十五。帝輟朝三日。

勅。飲以金棺銀槨。四月塔於遼東原。弟子神泰。棲元會隱。慈立明。清義。褒大乘光。皆法門龍象。樊以西域戒賢論師處所得瑜伽唯識宗旨。授親基。(唐氏語)

余(註)以聞味。與之對晤。屢展炎涼。聽言觀行。名實相守。精厲晨昏。計時分業。虔虔不懈。專思法務。言無名利。行絕虛浮。曲識機緣。善通物性。不假不諂。行藏適時。既周行。東夏挹酌。諸師披露。肝膽盡其精義。遂能不遠數萬。請求勝法。誓捨形命。必會爲期。發趾張掖。途次龍沙。中途艱險。身心僅絕。路出鐵門石門。躬乘沙嶺雪嶺。歷天險而志逾慷慨。遭凶賊而神彌厲勇。又以起信一論文出。馬鳴彼土。諸僧思承其本。樊乃譯唐爲梵。通布五天。

和漢高僧傳

卷上

二十九

無能齋藏版

斯則法化之緣。東西互舉。故得施無厭寺三千。學僧皆號智囊。隨其遊歷。塞外海東。百三十國。道俗邪正。承其名者。莫不仰德。歸依。前後僧傳。往天竺者。首自法顯。法勇。終于道遂。道生。相繼中途。一十七返。取其通言華梵。妙達文筌。揚導國風。開悟邪正。莫高於樊矣。恨其經部不翻。猶涉過半。無常奄及。惜哉。(續高僧傳卷四)

○道宣傳

釋道宣。姓錢氏。丹徒人也。母娠而夢月貫其懷。復夢梵僧語曰。汝所娠者。即梁朝僧祐律師。宜從出家。崇樹釋教。凡十二月在胎。四月八日降誕。九歲能賦。十五厭俗。誦習諸經。依智顗律師受業。泊十六落髮。便諱曰嚴道場。隋大業年中。從智首律師受。

具武德中依首習律緣聽一偏方議修禪顏師呵曰夫適遐自
邇因微知章修捨有時功願須滿未宜去律也令復二十偏武
德七年晦迹於終南做掌之谷及西明寺初就詔宣充上座三
藏獎師至止詔與翻譯撰法門文記廣弘明集續高僧傳三寶
錄羯磨戒疏行事抄義抄等二百二十餘卷三衣皆紵一食唯
菽行則杖策坐不倚牀乾封二年春冥感天人來談律相言鈔
文輕重儀中外悞皆譯之過非師之咎請師改正故今所行著
述多是重修本又有天人云曾撰祇洹圖經紙帛一百計宣若
告口占一一抄記上下二卷又口傳偈頌號付囑儀貞觀中曾
隱沁部雲室山人睹天童給侍左右又於西明寺夜行道足跌

和漢高僧傳

卷上

三十一

無能齋藏版

前階有物扶持履空無害熟顧視之乃少年也宣遽問何人中
夜在此少年曰某非常人即毗沙門天王之子那吒也護法之
故擁護和尚時之久矣宣曰貧道修行無事煩太子太子威神
自在西域有可作佛事者願爲致之太子曰某有佛牙寶掌敢
不奉獻俄授於宣宣保錄供養焉爾後十旬安坐而化則乾封
二年十月三日也春秋七十二僧臘五十二門人望于壇谷石
室高宗下詔令崇飾圖寫宣之真相宣從登戒壇及當泥曰其
間受法傳教弟子可千百人宣之持律聲振竺乾宣之編修美
流天下是故無畏三藏到東夏朝謁帝問自遠而來得無勞乎
欲於何方休息三藏奏曰在天竺時常聞西明寺宣律師秉持

第一願依止焉勅允之宣持禁堅牢捫蝨以縣紙裹投於地至
代宗大歷二年勅此寺三綱如聞彼寺有大德道宣律師傳授
釋迦佛牙及肉舍利宜即詣右銀臺門進來朕要觀禮至懿宗
感通十年十月勅諡曰澄照塔曰淨光先所居久在終南故號
南山律宗焉(宋僧傳卷十四)

弘忍傳

五祖弘忍新川黃梅縣人也成童隨母乞食里中途一智者嘆
曰此兒缺七種相不逮如來後遇四祖得度受其傳法嗣化於
破頭山咸亨二年有一居士盧慧能者自新州來參祖問曰何
來盧曰嶺南祖曰欲求何事曰唯求作佛祖曰嶺南人無佛性

和漢高僧傳

卷上

三十一

無能齋藏版

若爲得佛曰人有南北佛性豈然祖呵曰著槽廠去盧禮而退
便入碓坊服勞杵臼間經於八月祖知付授時至令衆各隨意
見以迷一偈時會下七百餘僧上座神秀者學通內外衆所尊
仰咸推稱曰若非尊秀曷敢當之神秀聞書一偈於廊壁曰
身是菩提樹心如明鏡臺時時勤拂拭莫使惹塵埃祖見之讚
嘆曰依此修行亦得勝果盧聞之乃曰美則美矣了則未了至
夜盧躬秉燭請童子書一偈於秀偈之側曰菩提本無樹明鏡
亦非臺本來無一物何處惹塵埃祖見偈已潛往碓坊問曰米
白也未盧曰白也未經篩祖以杖三擊於碓盧即以三鼓入室
祖告之曰諸佛出世以大事因緣故隨機大小而引導之遂有

十地三乘頓漸等旨爲之教門。然以無上微妙秘密圓明真實正法眼藏付于上首大迦葉尊者。展轉傳授二十八世。至菩提達磨師乃以東來東之益傳。適至於我。我今以是大法并其所受。僧伽梨衣寶鉢皆付於汝。善保護之。無使法絕。聽吾偈曰。有情來下種。因地果還生。無情既無種。無性亦無生。盧受法已。作禮問曰。法則聞命。衣鉢復傳授乎。祖曰。昔達磨來自異域。恐世未信。其師承故衣鉢爲驗。今天下已知信矣。可止於汝矣。且當遠隱。俟時行化。盧禮足已。即夕去之。衆疑祖三日不上堂。扣之。祖曰。吾道行矣。問曰。衣鉢誰得耶。祖曰。能者得之。衆議盧名能。必彼得而往矣。祖付衣法已。復經四載。當上元二年。告衆曰。吾

和漢高僧傳

卷上

三十二

無能齋藏版

今事畢時可行矣。入室安坐而逝。壽七十四。建塔於黃梅之東山。代宗諡號曰大滿禪師。塔曰法雨。(正住)

○善導傳

釋善導。不悉何許人。周遊宣寓。求訪道津。唐貞觀中。見西河綽禪師行。方等懺及淨土九品道場。請觀經。導大喜曰。此真入佛道之津要。修餘行業。迂僻難成。惟此觀門。速超生死。吾得之矣。於是篤勤精苦。若救頭然。續至京師。激發四部弟子。無間貴賤。彼屠沽輩。亦羣悟焉。導入堂。則合掌踰跪。一心念佛。非力竭不休。乃至寒冷。亦須流汗。以此相狀。表於至誠。出即爲人說淨土法。化諸道俗。令發道心。修淨土行。無有暫時不爲利益。三十餘

年。無別寢處。不暫睡眠。除洗浴外。曾不脫衣。般舟行道。禮佛方等。以爲己任。護持戒品。纖毫。不犯。曾不舉目。視女人。一切名利。無心起念。綺詞戲笑。亦未之有。所行之處。爭申供養。飲食衣服。四事豐饒。皆不自入。并將迴施。好食送大廚。供養徒衆。唯食蟲惡。纔得支身。乳酪醍醐。皆不飲啖。諸有勸施。將寫阿彌陀經。十萬餘卷。所畫淨土變相。三百餘堵。所在之處。見壞伽藍及故塔等。皆悉營造。三衣瓶鉢。不使人持。洗始終無改。每自獨行。不共衆去。恐與人行。談論世事。妨修行業。其有暫申禮謁。爲說少法。或得同預道場。親承教訓。京華諸州。僧尼士女。得念佛三昧。往生淨土者。不可知數。或問導曰。念佛之善。生淨土耶。對曰。如

和漢高僧傳

卷上

三十三

無能齋藏版

汝所念。遂汝所願。對已。導乃自念阿彌陀佛。如是一聲。則有一道光。明從其口出。十聲至百聲。光亦如之。導謂人曰。此身可厭。諸苦逼迫。情僞變易。無暫休息。乃登所居寺前柳樹。西向。願曰。願佛威神。驟以接我。觀音勢至。亦來助我。令我此心不失。正念不起。慙怖不於彌陀法中。以生退墮。願畢。投身自絕。(時高宗永徽二年也)時京師士大夫。傾誠歸信。咸收其骨。以葬。高宗皇帝知其念佛口出光明。又知捨報之時。精至如此。賜寺額爲光明焉。(新修住)

○窺基傳

釋窺基。字洪道。姓尉遲氏。京兆長安人也。考諱宗。唐左金吾將軍松州都督江由縣開國公基母裴氏。夢掌月輪吞之。寤而有

孕及乎盈月誕與群兒弗類神晤精爽笑師始因陌上見其眉秀目朗舉措疎略曰將家之種不謬也哉脫或因緣相扣度爲弟子則吾法有寄矣復念在印度時計迴程次就尼健子邊占得卦甚吉師但東歸哲資生矣遂造北門將軍徵諷之出家父曰伊類羣悍那勝教詔笑曰此之器度非將軍不生非某不識父雖然諸基亦強拒激勉再三拜以從命奮然抗聲曰聽我三事方誓出家不斷情欲輩血過中食也笑先以欲勾牽後令入佛智伴而肯焉基行累載前之所欲故開輔語曰三車和尚即貞觀二十二年也至年十七遂預緇林及乎入法奉勅爲笑師弟子入大慈恩寺躬事笑師學五竺語解紛開結統綜條然聞

和漢高僧傳

卷上

三十四

無能齋藏版

見者無不歎伏凡百健度跋渠一覽無差年二十五應詔譯經講通大小乘教三十餘本創意留心勤勤著述造疏計可百本笑所譯唯識論初與肪尚光四人同受潤色執筆檢文纂義數朝之後基求退焉笑問之對曰夕夢金容晨趨白馬雖得法門之精粕然失玄源之醇粹某不願立功於參糅若意成一本受責則有所歸笑遂許之以理遣三賢獨委於基此乃量材授任也時隨受撰錄所聞講周疏畢無何西明寺測法師亦俊朗之器於唯識論講場得計於聞者略之以金潛隱厥形聽尋聯綴亦疎通論旨猶數座方畢測於西明寺鳴椎集僧稱講此論基聞之愜居其後不勝愜快笑勉之曰測公雖造疏未達因明遂

爲講陳那之論基大善三支縱橫立破達義命章前無與比笑曰五性宗法唯汝流通他人則否後躬遊五臺山登太行至西河古佛寺中宿寺中有光久而不滅尋視之數軸發光者探之得彌勒上生經遂援毫次筆鋒有舍利二七粒而隕基隨處化徙獲益者衆東行博陵有請講法華經遂造大疏焉及歸本寺恒與翻譯舊人往還以永淳元年壬午示疾至十一月十三日長往于慈恩寺翻經院春秋五十一法臘無聞葬于樊村北渠附三藏笑師塋隴焉弟子相繼取基爲折中視之如笑在焉凡天下佛寺圖形號曰百本疏王真高宗大帝製讚然基魁梧堂堂有桓赴之氣而慈濟之心誨人不倦自天然也（宋高僧傳卷四）

和漢高僧傳

卷上

三十五

無能齋藏版

○普光傳

釋普光未知何許人也明敏爲性爰擇其本請事三藏笑師勤恪之心同列靡及至於智解可譬循環聞少證多笑師默許未參傳譯頭角特高左右三藏之美光有功焉初笑嫌古韻俱含義多缺然躬得梵本再譯真文乃密授光多是記憶西印薩婆多師口義光因著疏解判又嘗隨笑往玉華宮譯大般若經厥功出乎稗贊也時號大乘光觀夫笑自貞觀十九年創譯訖麟德元年終于玉華宮凡二十載總出大小乘經律論七十五部一千三百三十五卷十分七八是光筆受（宋高僧傳卷四）

○道昭傳

釋道昭世姓船氏內州丹北郡人也居元興寺有戒行譽白雉四年癸丑五月奉勅從遣唐使小山長丹泛海緇侶同志者道嚴等一十有三人到長安謁三藏玄奘即高宗永徽四歲也藏謂諸徒曰此子多度人矣汝等莫以外域輕之加意誘誨又告曰我往西天食絕路又無人家殆入死地偶一沙門以梨子與我我啖之氣力復生漸達竺土其沙門者汝前身也故吾憐汝耳一日藏語曰經論文博勞多功少我有禪宗其旨微妙汝承此法可傳東徼昭欣恆修習早得悟解又指見相州隆化寺慧滿禪師滿委曲開示謂曰先師僧那曰昔達磨以楞伽經付二祖曰吾觀震旦所有經唯此四卷可以印心業成辭藏藏以佛舍

和漢高僧傳

卷上

三十六

慧能齋藏版

利經論及章疏付之既還止元興寺切諭導此土始開八五三二之旨又遊諸州事行化國人崇之後於元興寺東南隅別營禪苑從昭學禪者多矣文武四年三月澡浴淨衣趺坐繩床光明盈室昭乃逝年七十二闍毗後欲取其骨暴風忽來骨灰共失本朝火葬始於昭昭唱導外勸利濟路傍穿井諸渡儲船山州宇治之大橋昭之創造也昭傳來經籍若干藏禪院元明帝移都平城昭之徒奏於新基建禪院所謂平城右京禪院也經書又藏於此

○慧能傳

六祖慧能俗姓盧氏其先本籍范陽父行瑄高祖武德年中謫

官新州生能遂爲新興人也甫三歲而父喪母守節育之及長家益貧祖乃採薪鬻而供母一日過市鄆間客讀經應無所住而生其心問客曰此法得於何人客曰此名金剛經得於黃梅忍大師祖遽告其母即趨五祖抵韶州尼無盡藏者讀涅槃經尼問經字祖曰字則不識義則請問尼曰字尚不識曷能會義祖曰諸佛妙理非關文字尼驚異之謂人曰能是有道之人宜供養之近處寶林寺舊基四衆雲集俄成寶坊祖念大法直造黃梅之東山即高宗咸亨二年也既得法已儀鳳元年正月八日回屈南海法性寺二僧論風動幡動祖曰不是風動不是幡動仁者心動即宗法師聞之竦異遂邀祖扣其所自乃知其爲

和漢高僧傳

卷上

三十七

慧能齋藏版

盧居士也正月十五日會諸名德爲祖剃落二月八日就智光律師受具戒既得戒遂開東山法門明年二月八日歸寶林寺韶州刺史韋據請於大梵寺轉妙法輪并受無相心地戒門人紀錄目爲壇經後返曹溪雨大法雨中宗神龍元年四月帝遣內侍薛簡詔師不起簡以所資法要回奏帝嘆美詔賜袈裟鉢緇十二月勅改韶州古寶林爲中興寺睿宗先天元年一日忽謂衆曰吾忝於忍大師處受其法要并及衣鉢今爲汝等信根純熟但說法要無有疑者衣鉢不須傳也聽吾偈曰心地含諸種普雨悉皆生頓悟花情已菩提果自成至是度人說法已四十年八月三日沐浴跏趺而化壽七十六肅宗上元元年帝慕

祖之道。遣使詔取其傳。西竺衣鉢。就內瞻禮。代宗嗣位。承泰元年五月五日。帝夢祖請衣鉢。還。帝即遣使馳送。曹溪。憲宗元和十年。帝賜諡曰大鑑禪師。塔曰靈照。(釋氏稽古略卷三)

○法藏傳

釋法藏。字賢首。姓康。康居人也。風度奇正。利智絕倫。少遊長安。彌露鋒穎。尋應名僧義學之選。屬笑師譯經。始預其間。後因筆受證義潤文。見識不同。而出譯場。至天后朝。傳譯首登其數。實又難陀。齋華嚴梵筌。至同義淨復禮。譯出新經。又於義淨譯場。與勝莊大儀證義。昔者燦煌。杜順傳華嚴法界觀。與弟子智儼講授。此晉譯之本。智儼付藏。藏爲則天講新華嚴經。至天帝網

和漢高僧傳

卷上

三十八

無能齋藏版

義十重玄門海印三昧門六相和合義門普眼境界門。此諸義章皆是華嚴總別義綱。帝於此茫然未決。藏乃指鎮殿金師子爲喻。因撰義門徑捷易解。號金師子章。列十門總別之相。帝遂開悟其旨。又爲學不了者設巧便。取鑑十面八方。安排上下各一相去一丈餘。面面相對。中安一佛像。然一炬以照之。互影交光。學者因曉。利海涉入無盡之義。藏之善巧化誘。皆此類也。帝於聖曆二年己亥十月八日。詔藏於佛授記寺講大經。至華藏世界品。講堂及寺中地皆震動。華嚴一宗付授。澄觀推藏爲第三祖也。著般若心經疏。爲時所貴。天下流行。復號康藏國師。是歟。(宋高僧傳卷五)初藏年十六。詣四明阿育王舍利塔。鍊一指。誓學華

嚴。則天朝爲沙彌。策名官禁。通天元年。詔於太原寺開華嚴宗旨。感白光昱然。自口而出。須臾成蓋。萬衆歡呼。都講奏其事。則天有旨。命京城十大德爲授滿分戒。賜號賢首。睿宗受內禪。請藏授菩薩大戒。藏糞衣糲食。講華嚴三十餘徧。楞伽密嚴梵網經起信論等十部。皆爲義疏。先天元年十一月。終於大薦福寺。貽鴻臚卿。葬神和原。藏既亡。弟子慧苑。悉叛其說。滅後百年而得。澄觀。(續)

○義淨傳

釋義淨。字文明。姓張氏。范陽人也。髫髻之時。辭親落髮。徧詢名匠。廣探群籍。內外閑習。古今博通。年十有五。便萌其志。欲遊西

和漢高僧傳

卷上

三十九

無能齋藏版

域。仰法顯之雅操。慕玄奘之高風。精勤無棄。手不釋卷。弱冠登具。愈堅貞志。咸亨二年。年三十有七。方遂發足。初至番禺。得同志數十人。及將登舶。餘皆退罷。淨奮勵孤行。備歷艱險。所至之境。皆洞言音。凡遇酋長。俱加禮重。然峰鷄足。咸遂周遊。鹿苑祇林。並皆瞻矚。諸所聖迹。畢得追尋。經二十五年。歷三十餘國。以天后證聖元年乙未仲夏。還至河洛。得梵本經律論近四百部。合五十萬頌。金剛座真容一鋪。舍利三百粒。天后親迎于上東門外。諸寺緇伍具幡蓋。歌樂前導。勅於佛授記寺安置焉。初與于闐三藏實叉難陀。翻華嚴經。久視之後。乃自專譯。庚子歲至長安。於福先寺及雍京西明寺。譯金光明最勝王能斷金剛般

若彌勒成佛一字呪主莊嚴王陀羅尼長爪梵志等經根本一切有部毗奈耶陀那目得迦百一羯磨攝等律掌中取因假設六門教授等論及龍樹勸誡頌凡二十部北印度沙門阿彌真那證梵文義沙門波崙復禮慧表智積等筆受證文沙門法寶法藏德感勝莊神英仁亮大儀慈訓等證義成均大學助教許觀監護繕寫進呈天后製聖教序令標經首暨和帝神龍元年乙巳於東洛內道場譯孔雀王經帝深崇釋典特抽睿思製大唐龍興三藏聖教序又御洛陽西門宣示群官新翻之經二年淨隨駕歸雍京置翻經院於大薦福寺居之三年詔入內九旬坐夏帝以昔居房部幽厄無歸所念藥師遂蒙降祉荷茲往

和漢高僧傳

卷上

四十

無能齋藏版

淨重同鴻猷因命法徒更重傳譯於大佛光殿二卷成文曰藥師琉璃光佛本願功德經帝御法筵手自筆受睿宗永隆元年庚戌於大薦福寺出浴像功德經毗奈耶雜事二乘戒經等二十部景雲二年辛亥復於大薦福寺譯稱讚如來功德神呪等經太常卿薛崇嗣監護自天后久視迄睿宗景雲都翻出五十部二百三十卷又別撰大唐西域求法高僧傳南海寄歸傳內法傳等淨雖偏翻三藏而偏攻律部譯綴之暇曲授學徒流囊滌穢特異常倫學侶傳行徧于京洛先天二年卒春秋七十九法臘五十九葬事官供然其傳度經律與樊師抗衡比其著述淨多文矣（宋高僧傳卷一）

○善無畏傳

釋善無畏本中印度人也梵名戌婆揭羅僧訶華言淨師子義翻爲善無畏一云輸波迦羅此名無畏亦義翻也十歲統戎十三嗣位得軍民之情昆弟嫉能稱兵搆亂闕斯甚因致位於兄固求入道母哀許之南至海濱遇殊勝招提得法華三昧畏風儀爽俊聰敏超群解究五乘道該三學總持禪觀妙達其源藝術技能悉聞精練初詣那爛陀寺此云施無厭也像法之泉源衆聖之會府寺有達摩拘多者掌定門之祕鑰佩如來之密印顏如四十許其實八百歲也立契三藏昔曾見之畏投身接足奉爲本師後乃授畏總持瑜伽三密教也其諸印契一時頓

和漢高僧傳

卷上

四十一

無能齋藏版

受即日灌頂爲人天師稱曰三藏拘多曰善男子汝與震且有緣今可行矣畏乃頂辭而去開元四年丙辰齋梵筴始屆長安勅於興福寺南院安置緝宣住西明寺間勞重疊錫賜異常至五年丁巳奉詔於菩提院翻譯畏奏請名僧同參華梵先譯盧空藏求聞持法一卷帝深加賞歎有勅畏所將到梵本並令進上昔有沙門無行西遊天竺學畢言歸方及北印不幸而卒其所獲筴葉悉在京都華嚴寺中畏與一行禪師於彼選得數本十二年隨駕入洛復奉詔於福先寺譯大毗盧遮那經其經具足梵文有十萬頌畏所出者撮其要耳曰大毗盧遮那成佛神變加持經七卷沙門寶月譯語一行筆受刪綴辭理文實相半

妙諧深趣。上符佛意。下契根緣。利益要門。斯文爲最。又出蘇婆呼童子經三卷。蘇悉地揭羅經三卷。二經具足。呪叱奈耶也。即祕密禁戒焉。若未曾入。曼荼羅者。不合。輒讀誦。猶未受人。盜聽戒律也。畏性愛。恬簡靜。慮怡神。時開禪觀。獎勸初學。法侶請謁。唯尊奉長老寶思。惟三藏而已。此外皆行門人之禮焉。一行禪師者。帝王宗重。時賢所歸。定慧之餘。陰陽之妙。有所未決。亦咨稟而後行。二十年求還西域。優詔不許。二十三年乙亥十月七日。右脅累足奄然而化。享齡九十九。僧臘八十。贈鴻臚卿。遣鴻臚丞李現具威儀。賓律師護喪事。二十八年十月三日葬於龍門西山廣化寺之庭焉。定慧所熏。全身不壞。會葬之日。涕泗

和漢高僧傳

卷上

四十二

無能齋藏版

傾都（宋高僧傳卷二）

一行傳

釋一行。俗姓張。鉅鹿人也。本名遂。少歲不群。聰黠明利。有老成之風。讀書不再覽。已暗誦矣。遇普寂禪師。大行禪要。歸心者衆。乃悟世幻。禮寂爲師。出家剃染。所誦經法。無不精諳。寂師嘗設大會。遠近沙門。如期必至。計逾千衆。時有徵士盧鴻。隱居於別峰。道高學富。朝廷累降蒲輪。終辭不起。大會主事先請鴻爲導文序。讀邑社是日。鴻自袖出其文。置之机案。鑑梵既作。鴻謂寂公曰。某爲數千百言。況其字僻。文古。請求朗雋者。宜之當須面指摘而授之。寂公呼行。行伸紙覽而微笑。復置机案。鴻怪其輕

脫。及僧聚於堂中。行乃攘袂而進。抗音典裁。一無遺誤。鴻愕視久之。謂寂曰。非君所能教導也。當縱其遊學。自是三學名師罕不諮度。然有陰陽讖緯之書。一皆詳究。尋訪算術。不遠數千里。知名者往詢焉。未至天台山國清寺。遇一老僧。盡受其訣焉。自此聲振遐邇。公卿籍甚。玄宗聞之。詔入。謂行曰。師有何能。對曰。畧能記覽。他無所長。帝遂命中官取官籍以示之。行周覽方畢。覆其本。記念精熟。如素所習。唱數幅。後帝不覺降榻。稽首曰。師實聖人也。嗟歎良久。尋乃詔對無恒。占其災福。若指于掌。言多補益。時又於金剛三藏學陀羅尼祕印。登前佛壇。受法王寶。復同無畏三藏譯毘盧遮那佛經。睿宗玄宗并請入內集賢院尋

和漢高僧傳

卷上

四十三

無能齋藏版

詔住興唐寺。所翻之經。遂著疏七卷。又攝調伏藏六十卷。釋氏系錄一卷。開元大衍曆五十二卷。其曆編入唐書曆律志。以爲不刊之典。開元十五年九月。於華嚴寺病篤。詔京城名德致大道場爲行祈禱。危疾微愈。其寵愛如是。十月八日。身無諸患。口無一言。忽然浴香水。換衣。趺坐正念。怡然示滅。帝覽奏悲愴。曰。禪師捨朕。深用哀慕。葬事官供。詔葬于銅人原。諡曰大慈禪師。御撰塔銘。天下釋子榮之。（宋高僧傳卷五）

金剛智傳

金剛智。籍洛陽廣福寺。梵名跋日羅菩提。此云金剛智。天竺南印度摩賴耶國人也。父婆羅門。善五明。爲建文王師。智生數歲。

日誦萬言。年十五開悟佛理。遂出家。隨師中印度那蘭陀寺學。阿毘達磨等。泊登壇法律。聽十八部律。又詣西印度學小乘諸論。及瑜珈三密。後歷遊南海諸國。聞支那佛法盛。泛舶而來。開元七年。達於廣府。次年至京。勅迎舍大慈恩寺。廣弘祕密。建曼荼羅法。尋徙薦福寺。大智大慧二禪師。不空三藏皆師事之。智所譯經一行多預焉。一行嘗稟其壇法儀制。開元二十年八月十五日於洛陽廣福寺命門人曰。白月圓時。吾當去矣。遂禮毘盧遮那佛。旋遶七帀。退歸本院焚香發願。頂戴梵筴。并新譯教法付囑訖。寂然而化。壽七十一。臘五十一。十一月七日葬龍門南伊川之右。弟子不空奏奉勅諡灌頂國師。勅中書侍郎杜鴻

和漢高僧傳

卷上

四十四

無能齋藏版

漸撰紀德碑（釋氏精舍）

○行基傳

釋行基。姓高。志氏。泉州大烏郡人。天智帝七年生。胎衣纏身。以爲不祥。棄置樹上。經宿出胞。間閭能言。即收乳育。童稚野遊。班荆設坐。讀說佛乘。牧豎羣童從者數百。聞者感泣。十五出家。居藥師寺。學法相。又從義淵僧正於龍門。二十四就高官寺德光法師稟具足戒。隨道昭和尚受瑜伽唯識訣。常處山林。獨修禪定。慶雲元年開本生宅而爲精舍。執養養母。性最孝順。結房生駒。母沒三年。禪誦服闋。遊化諸國。或勸觀法。或誘淨業。黑白相隨。以千百計。所過之地。耕夫釋耒。織婦下機。奔波參禮。路逢嶮

隘。架橋修路。指點某地可耕墾。某水可灌溉。穿渠溝築堤塘。或二十所。或三十所。洪營速成。至今民賴利。王畿之內。建立寺院。四十九所。諸州亦在焉。養老五年。元正帝召基。宮中賜度者二人。是歲寺史乙麻呂捨宅與基。建菅原寺。夏五月於大安寺度一百人。天平五年。聖武帝崇基。偉德。敕許輦車。賜度者三十五人。基詠和歌謝恩。天平十六年。朝廷遣行信僧都給封戶九百。以賜香廚。翌歲正月。敕爲大僧正。此任基爲始。二十年冬十一月。帝幸于菅原寺。賜度者一百二十人。二十一年正月十四日。請基於平城中島宮。太上皇皇太后皇后同時落飾。受菩薩戒。賜大菩薩之號。二月二日於菅原寺東南院召上足光信。以諸

和漢高僧傳

卷上

四十五

無能齋藏版

寺院。囑曰。爲世間眼。當能住持。又叮嚀諸弟子。其日中夜。右脇而寂。世齡八十有二。僧臘六十有七。葬於生駒山。東嶽。緇白慟哭。聲響山谷。（本朝高僧傳卷六十四）

○鑑真傳

釋鑑真。世姓淳于氏。唐國揚州江陽縣人。齊辯士兒之後也。年十四。從父入寺。見佛像。有出塵志。父知其不可羈絆。付大雲寺智滿。爲沙彌。神龍元年。隨道岸律師受菩薩戒。景龍二年。於實際寺登壇受具足戒。遊二京。究三藏。又廻江淮。教授戒律。吾天平五年。榮叔普照等隨遣唐大使丹墀廣成入唐留學。天寶元年。眞於揚州大明寺開律講。叔照等預肆席。一日作禮曰。佛法

東流日域而乏教授人。昔吾聖德太子記曰：我後二百年異域人興真教。今當其期。願事東遊。真曰：我聞南嶽思公生和國。弘佛法。太子事我知之。又聞日本長屋王崇敬三寶。製千袈裟。緣各繡一偈。山川異域。風月一天。遠寄淨侶。誓結勝緣。就舶便施。此土一千沙門。我思是等事。彼方必有淨信人。而滄浪涉焉。跋涉惟難。彼土若緣稔。我豈辭勞劬。二年十有二月。真與二弟祥彥道興及叔照等。并徒屬八十餘人同泛溟。猛風忽起。船舶簸蕩。中夜舟人見四神著金甲立艤。以故無沒溺之愁。然衆人恐嶮厄求淹留。真不得已。其後又發或漂日南。或赴龍宮。真本志確乎不拔。遂以天寶十二年冬乘副使伴古舶放洋。天平

和漢高僧傳

卷上

四十六

無能齋藏版

勝實六年甲午正月十有二日。著大宰府。四月入京。勅正議大夫安宿王迎羅城門。乃館東大寺。天竺婆羅門僧菩提唐道瑤共來慰問。王公士庶奔波作禮。真表獻將來佛舍利三千粒阿育王塔樣銅支提止觀玄義文句菩提子三斗。晉王右軍真行書一卷。聖武上皇遣正議大夫真吉備傳宣曰：朕造東大寺已十年。此土未有戒壇。願師營之。真敬承詔。乃於大殿西構戒壇院。天下至今資羯磨焉。上皇大悅。受菩薩戒。皇帝皇太后太子公卿以下同受者四百三十餘人。又勅賜皇子開府儀同田部舊宅。真成實坊。號招提寺。本朝戒法此時方熾。天平實字二年賜號大和尚。七年五月六日結跏趺坐。向西而化。壽七十七。預

言寂日。至此無外。葬歛之時。香氣滿山谷。真在唐。裁納袈裟一千布伽梨二千。施五臺諸沙門。又寫三大藏。初本朝大藏經論多烏焉之誤。及真之至。勅加整勘。真流日南國時。暑毒入眼。患之失明。而大藏文句多所暗誦。數下雖真。又諸藥物。此方不知真偽。勸真辨之。真以鼻別之一。無錯誤。（元亨釋）

○不空傳

不空三藏。籍京兆。大興善寺梵名阿目佉跋折羅華。言不空金剛。北天竺婆羅門族。幼孤。隨叔父觀光東國。年十五師事金剛智蒙授教法。泊登具戒儀範。善解一切有部。後盡授與五部。灌頂法及祕密儀軌。開元二十年金剛智入寂。空奉遺旨。開元二

和漢高僧傳

卷上

四十七

無能齋藏版

十五年十二月。攜弟子三七人。附崑崙船返印度。歷遊諸國。廣求密藏及諸經論五百餘部。天寶五載還京。奉勅權止鴻臚。六載詔入內立壇。爲帝灌頂。賜號智藏國師。移居淨影寺。夏祈雨有應。帝自持寶箱。賜紫袈裟。天寶十二載。西番大石康居三國兵圍涼州。帝請空祈陰兵救之。空結壇誦仁王密語。帝親秉爐有。神介胄而至。帝視之。問曰：此何神也。空曰：北方毘沙門天王長子也。空誦密語遣之。四月二十日。西涼奏報。二月十一日。城東北三十許里。雲霧間。神兵長偉。城北門樓有光明天王。怒視番帥。鼓角凌雲。而至。西番畏懼。卷甲遁去。帝覽奏。因勅諸道城樓置天王像。此其始也。肅宗乾元中。詔空入內建道場護魔法。

爲帝受轉輪王位。七寶灌頂。上元末。空表請入山。李輔國宣勅。令於終南山智炬寺修功德。代宗立。恩渥彌厚。永泰元年。詔譯密嚴仁王二經。帝爲製序。十一月一日。制授特進試鴻臚卿。大曆三年。詔空大興善寺建壇。爲近侍大臣及諸鎮將帥悉授灌頂。帝親署。加號大廣智三藏。四年。空奏天下食堂中置文殊菩薩爲上座。制許之。此蓋嫌憐陳如是。小乘教中始度。故也。六年。空進所譯經凡一百二十卷七十七部。九年。示疾。上表辭。帝勅使勞問。賜醫藥。加開府儀同三司。封蕭國公。食邑三千戶。固讓不止。且曰。日月圓滿。吾當逝矣。奈何。臨終。更竊名位。六月十五日。香水澡浴。東首倚臥。北而瞻望闕庭。以大印身定中。而寂享。

和漢高僧傳

卷上

四十八

無能齋藏版

年七十。僧臘五十。帝輟朝三日。賜絹布雜物錢四十萬。造塔錢二百餘萬。勅功德使李元琮知議喪事。七月六日。茶毘。詔朝品劉仙鶴就寺置祭。贈司空。諡大辯正廣智三藏。釋氏稽古卷三

○湛然傳

釋湛然。姓戚氏。世居晉陵荊溪。時人尊其道。因以爲號。家本習儒。故幼學夙成。在兒童中。超然有邁俗志。年十七。訪道浙右。遇金華方巖。授以止觀之法。開元十八年。始從學。左溪溪與之語。知爲道器。嘗謂師曰。汝曾何夢。答曰。曠昔之夜。夢披僧服。掖二輪遊大河中。溪曰。嘻。豈當以止觀二法度群生於生死之淵乎。遂以處士服受教觀之道。天寶七載。始解縫掖。著僧伽梨。尋詣。

會稽。一律師博究律部。久之。演止觀於吳門。左溪既沒。師挈密藏獨運東南。謂門弟子曰。道之難行也。我知之矣。古之至人。靜以觀其本。動以應其物。二俱不住。乃蹈乎大方。今之人。或蕩於空。或膠於有。自病病它。道用不振。將欲取正。舍予誰歸。於是大啓妙法。旁羅萬行。盡攝諸相。入於無間。即文字以達觀導。語默以還源。乃祖述所傳。著爲記文。凡數十萬言。使一家圓頓之教。悉歸於正。每以智者破斥。南北之後。百餘年間。學佛之士。莫不自謂雙弘定慧圓照。一乘初無單輪隻翼之弊。而自唐以來。傳衣鉢者。起於庚嶺。談法界。闡名相者。盛於長安。是三者皆以道行卓犖。名播九重。爲帝王師範。故得侈大其學。自名一家。然而。

和漢高僧傳

卷上

四十九

無能齋藏版

宗經弘論。判釋無歸。講華嚴者。唯尊我佛。讀唯識者。不許它經。至於教外別傳。但任胸臆而已。師追援其說。辯而論之。曰。金錫曰。義例。皆孟子尊孔道。開楊墨之辭。識者謂荊溪不生。則圓義將永沈矣。天寶大歷間。朝廷三詔並辭疾不起。師始居蘭陵。嘗與江淮名僧四十人同禮五臺。有不空三藏門人含光白師曰。頃從不空遊歷。天竺見梵僧云。聞大唐有天台教迹。可以誡偏圓簡邪。正明止觀。可能譯之。至此。土耶師聞之。歎曰。可謂中國失法。求之四維。晚歸台嶺。大布而衣。一牀而居。以身誨人。耆年不倦。大兵大饑之際。學徒愈蕃。瞻望堂室。以爲依怙。建中三年二月五日。示疾。於佛隴。語門人曰。道無方性。無體生歟。死歟。其。

旨一貫。吾歸骨此山。報盡今夕。要與汝等談道而決。夫一念無相。謂之空。無法。不備。謂之假。不一不異。謂之中。在凡爲三。因在聖爲三。德自利利人在此而已。汝其志之。言訖。隱几而化。壽七十二。夏四十三。門人奉全身塔於智者望域之西南隅。所著法華釋籤。文句記。止觀輔行。止觀搜玄記。各六卷。止觀文句一卷。爲司封李華說。止觀大意一卷。釋籤別行十不二門。金剛鐔。止觀義例。三觀義。涅槃後分疏。觀心誦經記。授菩薩戒文。始終心要。各一卷。畧淨名疏十卷。記三卷。淨名廣疏記六卷。治定涅槃疏十五卷。文句科。止觀科。各六卷。華嚴骨目二卷。法華三昧補助儀。觀心補助儀。各一卷。方等懺補助儀二卷。門人梁肅撰師

和漢高僧傳

卷上

五十

無能齋藏版

碑銘受業。身通者三十九人。摺紳先生。高位崇名。屈體承教者。又數十人。吳越王請。證圓通尊者。(佛祖統紀第七)

○善珠傳

釋善珠。姓安部氏。京兆人。或曰。太皇后藤宮子之輩子也。少魯鈍。而以此爲耻。學唯讀宗習。因明論。昏望不通。勵志無撓。時毒暑。頭腫如熟瓜。髮盡落。珠之勤業。率類之。以故博該三藏。釋二春山根本中堂落慶供養之日。傳教大師請珠爲尊師。延曆十六年。治皇太子病。天皇大悅。擢爲僧正。是歲四月某日。化壽七十有五。珠常念彌勒。時人食曰。上生兜率。撰述甚多。學者於今秘珍焉。(本朝高僧傳卷四)

○澄觀傳

釋澄觀。姓夏侯氏。越州山陰人也。年甫十一。依寶林寺需禪師出家。誦法華經。十四遍。恩得度。便隸此寺。觀俊朗高逸。弗可以細務拘。遂徧尋名山。旁求祕藏。梯航既具。童叟必臻。乾元中。依潤州棲霞寺醴律師。學相部律。詣金陵玄璧法師。傳關河三論。三論之盛。于江表。觀之力也。大曆中。就瓦棺寺。傳起信涅槃。又於淮南。法藏受海東起信疏義。却復天竺。誦法師門。溫習華嚴大經。七年。往剡溪。從成都慧量法師。覆尋三論。十年。就蘇州從湛然法師。習天台止觀法華維摩等經疏。解從上智。性自天然。又謁牛頭山忠師。徑山欽師。洛陽無名師。咨決南宗禪法。復見慧雲

和漢高僧傳

卷上

五十一

無能齋藏版

禪師。了北宗玄理。觀自謂己曰。五地聖人。身證真如。機心佛境。於後得智。中起世俗念。學世間技藝。況吾學地能忘是心。遂翻習經傳子史。小學蒼雅。天竺悉曇。諸部異執。四國五明。祕呪儀軌。至于篇頌。筆誥書蹤。一皆博綜。大曆十一年。誓遊五臺。一一巡禮。祥瑞愈繁。仍往峨嵋。求見普賢。登險陟高。備觀聖像。却還五臺。居大華嚴寺。專行方等懺法。時寺主賢林。請講大經。并演諸論。因慨華嚴舊疏。文繁義約。懷然長想。况文殊主智。普賢主理。二聖合爲。毗盧遮那。萬行兼通。即是華嚴之義也。吾既遊普賢之境。界泊妙吉之鄉。原不疏毗盧。有事二聖矣。觀將撰疏。俄於寤寐之間。見一金人。當陽挺立。以手迎抱之。無何。咀嚼都盡。

覺即汗流。自喜吞納光明。徧照之徵也。起興元元年正月。貞元三年十二月畢功。成二十軸。乃飯千僧。以落成也。四年春正月。寺主賢林請講新疏。七年河東節度使李公自良復請於崇福寺講。德宗降中使李輔光宣詔入都。與嗣賓三藏般若譯烏茶國王所進華嚴後分四十卷。觀苦辭請。明年入勅。允及其行。至蒲津。中令梁公留安居。遂於中條山棲嚴寺住。五月內中使霍仙鳴傳宣。催入觀至。帝頗敦重。延入譯場刊正。又詔令造疏。遂於終南草堂寺編成十卷。進呈勅令於兩街各講一遍。尋譯守護國界主經。觀綴文潤色。順宗在春宮。嘗垂教令。述了義一卷。心要一卷。并食肉得罪。因緣泊至長安。頗加禮接。朝臣歸向。則

和漢高僧傳 卷上

五十二

無能齋藏版

齊相國杭章大常渠卒等皆結交最深。咸慕高風。或從戒訓。以元和年卒。春秋七十餘。（統紀云。開成三年三月六日。寂。壽一百二歲。臘八十三。）弟子傳法者一百許人。餘堪講者千數。觀骨於新創雲花寺般若閣下。畫華藏世界圖相。又著隨疏演義四十卷。允齊相請述華嚴經綱要一卷。法界玄鑑一卷。三聖圓融觀一卷。華嚴法華楞伽中觀論等別行小鈔疏共三十卷。設無遮大會。十二門人清污記。觀平時行狀云。觀恒發十願。一長止。方丈。但三衣鉢。不畜長。二當代名利棄之。如遺。三目不視女人。四身影不落俗家。五未捨執受。長誦法華經六長。讀大乘經典普施含靈。七長講華嚴大經。八一。生晝夜不臥。九不邀名惑衆。伐善。十不退大慈悲。普救法界。觀

述盡形期恒依願而修行也。（宋高僧傳卷五）初德宗誕節召講經內殿。以妙法清涼帝心遂賜號清涼法師紫納方袍禮爲教授和上。元和五年憲宗問華嚴法界宗旨豁然有得勅有司鑄金印加號大統清涼國師師身長九尺四寸垂手過膝夜目發光晝仍不瞬日記萬言盡形一食宿不離衣歷九朝爲七帝門師師去賢首百餘年遙慕其旨所著疏記四百餘卷講華嚴至五十徧弘法弟子三十八人宰相裴休奉勅撰碑。（統紀卷九）

和漢高僧傳 卷上

五十三

無能齋藏版

和漢高僧傳卷上終

和漢高僧傳卷中目次

最澄傳教

空海弘法

宗密圭峰

眞如

圓仁慈覺

義玄臨濟宗祖

明詮

良价曹洞宗祖

圓珍智證

本寂曹山

仲算

光勝空也

良源慈慧

眞興子島

源信

知禮四明

子璿長水

契嵩明教

和漢高僧傳

卷中

無能齋藏版

淨源晉水

元照靈芝

永觀

克勤雲巖

良忍融通宗開祖

覺饒興教

證眞

實範

源空淨土宗開祖

貞慶解脫

榮西建仁寺開祖

高辨明惠

辨長鎮西派開祖

證空西山派開祖

計三十二人

和漢高僧傳卷中

織田得能編

○最澄傳

釋最澄。世姓三津氏。近州滋賀郡人也。其先東漢獻帝之孫。國亡。竄民間。吾應神之曆。造慕王化。而至。上憐其王孫。賜滋賀地。爲采邑。父百枝富。內外學。里閭敬之。嘗愁無嗣。祈衆神。既而詣。叙獄左麓神祠。其地景趣幽邃。百枝結草廬。饗香華。求子。期七日。至第四曉。得靈夢。其妻乃娠。草廬今之神宮院也。神護景雲元年。生澄焉。時親族陳盛饌。慶新產。澄稍長。語其時果有種色。

和漢高僧傳

卷中

無能齋藏版

無一差。隣里嗟異。七歲受學。聰明絕倫。十二投行表法師出家。習唯識。旁博探經論。得華嚴經起信論等疏。夙智所攝。以不見台教爲恨。適於南京。寫得玄義文句止觀四教義維摩經疏等。是鑑眞之所傳也。蓄思所遇。優柔厭厭。乃能講演。然介懷於無師承也。是以跋踰海之志。延曆二十有一年。賜入唐求法詔。返以。其月。不許淹留。蓋愛材也。二十有三年秋七月。從遣唐使菅清公。浮溟渤。着明州界。乃德宗貞元二十年也。九月赴台州。至天台山國清寺。道邃法師一見。器許。遂者荊溪上足智者七世之的孫也。遂授所傳一心三觀之旨。曰。弘道在人。人能持道。吾道化行。今其時哉。并付菩薩三聚大戒。澄就寫天台教門疏記。

又見佛隴寺行滿座主。滿又然公高弟。語澄曰。昔智者大師告門人曰。我滅後二百餘歲。我法傳東國。祖識不虛。子其人也。乃以荆溪以上諸籍秘蹟。傾倒而付曰。汝持此法文。爲海東傳燈之始祖。二十有一年。如越州龍興寺。遇順曉阿闍梨。受三部灌頂密教。及得陀羅尼經書印契圖樣灌頂器物。又於唐興縣逢沙門脩然。得達磨一派牛頭山法。蓋本師表公傳。瑤師北秀禪而付于澄。以故尋求禪要。及謁然公。悅。擇投契。夏五月。乘大使藤賀能船。着長州。即延曆二十有四年乙酉也。秋入洛城。便表上西土所得天台密宗諸教文。帝大悅。勅曰。最澄闍梨所傳天台典籍。流布天下。宜爲七寺書寫。七通。即給禁中上紙。付國子

和漢高僧傳

卷中

無能齋藏版

祭酒和弘世監寫。又詔道證守遵修圓動操慈蘊慈寬等。碩師於野寺天台院。令受學。新寫天台教文。又勅和弘世宣詔曰。真言秘教未傳於此方。最澄闍梨幸得此法。立爲國師。九月一日。勅於清瀧峰高雄道場。起都會大壇。撰諸寺智行兼備者。受灌頂三摩耶道證修圓動操正能延秀廣圓等同預者八人。野公岑守奉勅。檢校法事。是本朝密灌之始也。弘仁六年秋八月。因和氏請於大安寺塔中院。開揚妙法。於是乎諸寺碩德會集。法筵摧三乘之矛盾。準一乘之權衡。諸師伏膺。初延曆四年秋七月。登上叡山。縛草舍。讀法華金光明等諸大乘經。乃發五種大願。時年十九。七年於山頂創一字名曰一乘止觀院。(今謂之中隱)

時自刻等身藥師佛像。安之。又思山中無大藏。令諸弟子繕寫。亦告平城七大寺。乞加助。大安寺聞寂及東州化主道忠等。見義勇爲。速闕其功。十有七年。立十講法會。二十有五年。奏加新天台法華宗。時大乘四家華嚴法相三論律也。及此並爲五宗。澄又慨念此方學佛者六。除法相三論外。華嚴毘尼成實俱舍。纔有名而已。是依無受業者也。一宗若廢。衆善多替。非所以資政化興教法也。便奏。每年單渥外。加度者十二人。五宗各二。俱舍成實各一。制可。沙門勝虞永忠等奉表賀謝。弘仁十年三月。奏乞建圓宗大乘戒壇。其條四科。帝降表。南京諸寺詳定。建否。沙門護命抗表斥之。東大寺景深著述方示正論。摘二十八失。

和漢高僧傳

卷中

無能齋藏版

平城諸刹毀屠紛羅。十有一年春二月。澄述顯戒論三卷。表進。博引大乘戒證。又作顯戒緣起。反詰二十八失。其詞激切著明。上又降其書於南寺。南寺諸師無敢間議者。澄有願造六塔婆。置六千部經王。東州三處。中國二處。西邦一處。今叡山東西兩塔者中國之二處也。其東方行化之時。見信州嶮絕。長坂數十里。殆于百折。一日行程。纔宿半山。逆旅無館。行客多虞。澄募緣置廣濟廣極二院。羈人多受其賜。初延曆十有六年。以智行。上供奉。列勅近州租充山厨供。弘仁十有三年春二月。賜宸書傳燈大法師位記。夏六月四日。於中道院右脇而寂。年五十有六。臨亡曰。吾生平口無詭言。手不答罰。門弟子等各則之。亦遣

誠六篇。皆勸警徒也。十有一日。右僕射藤冬嗣。捧圓戒允許之。詔來山中。蓋慰初七也。冬十有一月。上製哭澄上人詩六韻。降于山。一時公卿才子。和宸韻。澄博物兼知。陰陽工巧醫方等。又得人者多矣。義真圓澄光定圓仁等神足者。二十餘輩。又名卿鉅公十數人。右僕射藤冬嗣。太中大夫伴國道國子祭酒和弘世。朝請大夫和真綱其選也。生平撰述。註法華經十二卷。註金光明經五卷。註仁王經。註無量義經各三卷。天台靈應集。守護國界章。總持章各十卷。法華輔照付法緣起。長講願文各三卷。照權實鏡。決權實論。依憑集。內證佛法相承血脈譜。六千部法華銘各一卷。十有餘年。春二月。賜寺額配紀元曰。延曆。遵先皇

和漢高僧傳

卷中

四

無能齋藏版

之崇建也。貞觀八年秋七月。勅證傳教大師。（元亨二年）

○空海傳

釋空海。世姓佐伯氏。讚州多度郡人。父田公。母阿刀氏。夢梵僧入懷而有身。在胎十二月。寶龜五年生。母思其夢。小字曰貴物。年十二。外舅朝散大夫阿刀大足。教世典學。文翰十八上。大學雖讀。儒書志在佛經。偶逢沙門勸操。受虛空藏求聞持法。未離染。而事修練。甫冠歲。就操落髮。受沙彌十戒。研究三論。時操在泉州檳尾山寺。初名教海。後自改如空。延曆十有四年。登東大寺壇。受具足戒。又改空海。乃於佛前誓曰。三乘十二部經。我心有疑。未能決擇。三世十方一切諸佛。願垂加祐。示我正法。夢中

一人告曰。有大經卷名。大毗盧遮那神變加持。是真秘要也。宿後問此經。無知者。往來諸所。懇誠尋求。適於和州高市郡久米道場東塔下。得此經。披卷看閱。疑滯居多。自茲志遠遊。二十有三年夏五月。從遣唐使金紫光祿大夫藤原能汎。渤海秋八月着。衡州界。乃德宗貞元二十年也。冬十有二月。到長安城。勅館宣陽坊官舍。二十有一年。又勅居西明寺。永忠法師故院。海周遊城中。諸刹擇求明師。謁青龍寺東塔院內供奉慧果阿闍梨。乃不空大廣智三藏之高弟也。果見而喜曰。我先知汝來相待者久矣。願諸徒曰。是沙門者。第三地菩薩也。夏六月入大悲胎藏大曼荼羅。投花。花着中臺。果嗟嘆以爲大器。即沐五部灌頂。

和漢高僧傳

卷中

五

無能齋藏版

之誓水。秋七月入金剛界大曼荼羅。八月授傳法阿闍梨位。灌頂。是日海設五百僧齋。果與金剛頂等諸密經并圖畫。曼荼羅及諸道具。曰。昔大毗盧舍那世尊。以秘密真言印付金剛薩埵。薩埵傳龍猛菩薩。展轉至大廣智。智爲三朝灌頂國師。亦付我汝有秘密大根器。故我兩部大法秘密印信皆悉授汝。宜以此金剛乘教及三藏所付供養什物。歸本土傳布國界。然則四海安泰。萬民豐樂。是亦報佛恩酬師德也。元和元年秋八月歸。乃大同改元丙戌也。勅令流通。傳來密乘。弘仁帝勅於宮中會諸宗碩師各唱所習。海立即身成佛之義。諸家爭折之。海辯論精審。上語海曰。義雖玄極。朕思見證。海即入五藏三摩地。觀忽於

頂上涌五佛寶冠放五色光明威容赫如也上雕御榻作禮群臣皆起拜十有三年大同太上皇入壇灌頂帝者密灌於此始焉初海得操師求聞持法乃躋阿州大瀧之嶽修供時天晴朗忽寶劍落座前又往土州室戶崎誦修如上至五更明星飛入口已而得聞持悉地爾來身心勇健堪任頭陀被葛而經冬絕膳而過夏精進苦行朝懺暮悔天長元年大旱春三月勅海於神泉苑修請雨經法震雷大注膏雨池水盈溢至火壇之畔霖沛三日天下皆洽勅加優賞初弘仁七年遊紀州相勝攸上高野山創金剛峯寺十有四年正月勅以東寺賜海建灌頂院海准青龍寺法式每歲二序行灌頂事乃置慧果所付健陀國製

和漢高僧傳

卷中

六

無能齋藏版

娑及念珠爲寺鎮天長二年勅改高尾神願寺名神護國祚真言寺賜海承和元年海奏乞准唐國內道場置真言院於宮中勅以勘解由司廳爲受茶羅道場每年正月後七日息災增益修法至今不絕二年正月奏置試度三人毗盧遮那經業金剛頂經業聲明業各一人初弘仁十有一年上賜宸奎傳燈大法師位記天長之始爲僧都承和二年海在金剛峯寺三月二十一日結跏趺坐作毗盧印泊然入定先七日共諸弟子念彌勒寶號至此日瞑目氣絕蓋持定身待龍華也年六十二海在豆州桂谷山寺以指向空寫大般若經至魔事品字畫忽現空中自此工筆翰五筆一時書奉勅書大內南門諸額又書應天門

額已挂之仰見應字上點缺之海乃擲筆補之毫無差邪王臣伏其妙撰述尤多秘府論三教指歸性靈集等家々誦習傳來佛舍利八十粒梵策三經疏二百一十六部四百六十一卷諸受茶羅寶器道具不遑具記延喜二十有一年冬十月賜諡弘法大師（元亨釋尊卷一）

○宗密傳

釋宗密姓何氏果州西充人也家本豪盛少通儒書欲干世以活生靈負俊才而隨計吏元和二年偶謁遂州圓禪師圓未與語密欣然而慕之乃從其削染受教此年進具于拯律師尋謁荆南張張曰汝傳教人也當宣導於帝都復見洛陽照禪師照

和漢高僧傳

卷中

七

無能齋藏版

曰菩薩人也誰能識之末見上都華嚴觀觀曰毗盧華藏能隨我遊者其唯汝乎初在蜀因齋次受經得圓覺十二章深達義趣誓傳是經在漢上因病僧付華嚴句義未嘗練習即爾講之由是乃著圓覺華嚴及涅槃金剛起信唯識孟蘭盆法界觀行願經等疏鈔及法義類例禮懺修證圖傳纂畧又集諸宗禪言爲禪藏總而序之并酬答書偈議論等又四分律疏五卷鈔懸談二卷凡二百許卷圖六面皆本一心而貫諸法顯真體而融事理超群有於對待冥物我而獨運矣密累入內殿問其法要大和二年慶成節徵賜紫方袍爲大德尋請歸山會昌元年正月六日坐滅於興福塔院儼若平日容貌益悅七日遷于西其

自證之力可知矣。其月二十二日。道俗等奉全身于圭峯。二月十三日。某叱得舍利數十粒。明白而潤大。後門人泣而求諸煨中。必得而歸。悉斂藏于石室。其無緣之慈可知矣。俗齡六十二。僧臘三十四。遺誡令昇屍施鳥獸焚其骨而散之。勿塔勿得。悲慕以亂。禪觀每清明上山必講道。七日而後去。其餘住持儀則。當合律科違者非吾弟子。初密道既芬馨。名惟烜赫。內衆慕類。既如彼。朝貴答響又如此。當長慶元和已來。中官立功執政者。孔熾。內外猜疑。人主危殆。時宰臣李訓。酷重于密。及開成中。僞甘露發。中官率禁兵五百人出閣。所遇者一皆屠戮。時王涯買餽舒元興。方在中書會食。聞難作。奔入終南投密。唯李訓欲求

和漢高僧傳

卷中

八

無能齋藏版

剪髮匿之。從者止之。訓改圖趨鳳翔。時仇士良知之。遣人捕密入左軍。而數其不告之罪。將害之。密怡然曰。貧道識訓年深。亦知其反叛。然本師教法。遇苦即救。不愛身命。死固甘心。中尉魚恒志嘉之。奏釋其罪。朝士聞之。扼腕出涕焉。或曰。密師爲禪耶。律耶。經論耶。則對曰。夫密者四戰之國也。人無得而名焉。都可謂大智圓明。自證利他。大菩薩也。是故裴休論議云。議者以師不守禪行。而廣講經論。遊名邑大都。以興建爲務。乃爲多聞之所役乎。豈聲利之所未忘乎。嘻。議者焉知大道之所趣哉。夫一心者萬法之總也。分而爲戒定慧。開而爲六度。散而爲萬行。萬行未嘗非一心。一心未嘗違萬行。禪者六度之一耳。何能總諸

法哉。且如來以法限付迦葉。不以法行。故自心而證者。爲法隨順而起者。爲行。未必常同也。然則一心者萬法之所生。而不屬於萬法得之者。則於法自在矣。見之者。則於教無礙矣。本非法不可以法說。本非教不可以教傳。豈可以軌迹而尋哉。自迦葉至富那奢。凡十祖皆羅漢所度。亦羅漢。馬鳴龍樹提婆天親。始開摩訶衍。著論釋經。摧滅外道。爲菩薩唱首。而尊者闇夜獨以戒力爲威神。尊者摩羅獨以苦行爲道跡。其他諸祖或廣行法教。或專心禪寂。或蟬蛻而去。或火化而滅。或攀樹以示終。或受害而償債。是乃法必同而行不必同也。且循轍跡者非善行。守規墨者非善巧。不迅疾無以爲大牛。不超過無以爲大士。故師

和漢高僧傳

卷中

九

無能齋藏版

之道也。以知見爲妙門。寂靜爲正味。慈忍爲甲盾。懸斷爲劍矛。破內魔之高壘。陷外賊之堅陣。鎮撫邪雜。解釋縲籠。遇窮子則叱而使歸。其家見貧女則呵而使照。其室窮子不歸。貧女不富。吾師恥之三乘不興。四分不振。吾師恥之。忠孝不並。化荷擔不勝任。吾師恥之。避名滯相。匿我增慢。吾師恥之。故遑遑於濟拔。汲汲於開誘。不以一行自高。不以一德自聳。人有依歸者不俟。請則往矣。有求益者不俟。憤則啓矣。雖童幼不簡於應接。雖驚很不息於叩勵。其以闡教度生。助國家之化也如此。故親師之法者。貧則施。暴則斂。剛則隨。戾則順。昏則開。惰則奮。自榮者謙。自堅者化。徇私者公。溺情者義。凡士俗有捨其家與妻子同入。

其法分寺而居者有變活業絕血食持戒法起家爲近住者有出而修政理以救疾苦爲道者有退而奉父母以豐供養爲行者其餘懂懂而來欣欣而去揚袂而至質腹而歸所在甚衆不可以紀真如來付囑之菩薩衆生不請之良友其四依之人乎其十地之人乎吾不識其境界庭宇之廣狹深淺矣議者又焉知大道之所趣哉其爲識達大人之所知心爲若此也密知心者多矣無如昇平相國之深者蓋同氣相求耳宣宗再聞真乘萬善咸秩追諡曰定慧禪師塔號青蓮持服執弟子禮四衆數千百人矣（宋高僧傳卷六）

○真如傳

和漢高僧傳

卷中

無能齋藏版

釋真如大同帝第三子也大同四年皇太弟（弘仁）受禪即祚尊大同道爲太上皇立高岳皇子爲皇太子即如也尙侍藤藥子及兄仲成勸上皇爲變事發覺上皇薙髮藥子仲成伏誅乃廢太子太子元有出塵之志爲沙門居東大寺性聰敏志氣宏邁學涉內外習三論於道詮稟密教於空海既而得阿闍梨位勤於教授嘗言密乘奧秘此方未盡當入大唐質所疑彼地若此土遠踰葱嶺焉貞觀三年上表奏四年泛海入唐遍詢名德不充如意遂杖錫西邁翩翩孤影流離絕域元慶五年在唐留學沙門中瑯寄書來曰如皇子過流沙傳聞到羅越國逆旅遷化贊曰丈夫貴氣志不言功業也有氣志者功業自備蓋功業者

天也氣志者德也苟有德者豈言功業之成否於其間哉夫海師居東場仁公坐北壇當是時密學之盛也西唐不如矣如公眇視東北直跨滄波睥睨支那橫截流沙其志峰不可觸也猶湛盧豪曹雖笑淨而不多讓矣自推古至今七百歲學者事西遊也以千百數而跋印度者只如一人而已吾以如爲求法之魁者是也（元亨釋教史卷十六）

○圓仁傳

釋圓仁姓王生氏野之下州都賀郡人也昔崇神天皇第一皇子豐城入彥節察東壤其次子留爲鄉人仁其胤也延曆十三年生焉仁幼喪父九歲隨其兄學經史性聰明貌溫雅雖在少

和漢高僧傳

卷中

無能齋藏版

年志慕佛理漸荒世典輒耽竺墳母見兒操履遂付同郡大慈寺僧廣智焉兒夢沙門長六尺許儀容俊偉心懷尊重瞻仰作禮沙門含笑語話傍人告曰汝知之乎叡山大師也寤告于智智將仁登叡獄與傳教教悅納焉仁視教之風儀與夢中無異而不說人矣時年十五大同三歲也教見其器宇彌加鍾愛教以止觀大定妙慧亦誡曰吾常弘傳二諦不生不滅之旨而世人解真諦不生滅之理未解世諦不生滅之義汝以此法流傳世弘通圓教利益有情又指授止觀文義之骨髓領知一藏經論之關鍵教嘗撰聰明年少十人習學止觀九子望塞而中息只仁一人得卒業若有請止觀者令仁講授教居傍聽證率爲

常焉。弘仁四年。歲二十。逢宮試。得第。明年三月。金光明會受度。持沙彌戒。七年。於東大寺。受具足戒。教在下野時。擇十人。授灌頂。仁預數焉。爾後往來諸處。稍張講席。承和五年。六月二十二日。從大使尙書右丞藤常嗣上。第一船。七月二日。着唐國楊州海陵縣。則文宗開成三年也。十月。藤尙書赴長安。仁猶留府。有一僧從上都來。號宗叔。通悉曇。仁從之習梵學。又有全雅。能解密教。就受灌頂。得兩部。曼陀羅諸尊壇軌佛舍利等。四年。大使促歸。不得辭。逆風俄吹。還海州界。仁以爲我逾溟渤。求教法。未充。初志逼促。歸國。今風濤作虞。海神其有意乎。便陳所由。請抽身下船。止海州東海縣濱沙上。後得州牒。往青州府。見節度及

和漢高僧傳

卷中

十三

無能齋藏版

副使判官。館龍興寺。判官入寺。慰問。明朝使使延私宅。讓自牀坐。仁供珍味。判官姓蕭名慶中。明佛心宗。得禪門祖付之印。仁從而參尋。蕭公許可證明。又得衛牒。禮五臺。於普通院。逢志遠法師。年八十。台教之類也。就受摩訶止觀。兼寫台宗諸書。夏在大華嚴寺。八月。末到長安。謁左街功德使儀同三司仇士良。勅居資聖寺。屢往大興善寺翻經院。見元政阿闍梨。學金剛界大法。受五瓶灌頂。次年詣青龍寺義真阿闍梨。入胎藏灌頂。堪學毗盧遮那經中真言印契。并受微細儀軌及蘇悉地大法。圖胎藏大曼陀羅。又受玄法寺法全阿闍梨胎藏儀軌。南天竺寶月三藏。悉曇章。右街醴泉寺宗頴。止觀類者智者八代之高弟也。

大安國寺。侃阿闍梨。淨影寺。惟謹。共器許。授付。凡住長安六年。多得念誦經書道具等五百九十九卷二十一種。會昌五年。武宗毀佛法。六年崩殂。明年宣宗即位。而大廢之後。緇伍難屯。仁愁遣。此時沙澄公語曰。我敢護汝。莫抱驚怖。不幾而軍牒至曰。日本沙門宜歸本邦。仁出帝京。九月着太宰府。今歲唐大中元年。本朝承和十四年丁卯也。仁表進所得經書道具等。降勅勞問。唐客四十餘輩。官賜衣糧。且賞將仁來也。明年春隨詔入京。本山固衆乞求灌頂。仁乃以聞。尙書省爲國修灌頂法。給一千僧供。尙書左大丞伴善男監護法事。仁壽元年。以五臺山念佛三昧法。授諸徒。修常行三昧。齊衡三年三月二十一日。帝於

和漢高僧傳

卷中

十三

無能齋藏版

冷泉院南殿。受兩部灌頂。貞觀元年。上受菩薩戒。二年。淳和大后受菩薩戒。法號良祚。三年。太皇太后藤順子受三摩耶灌頂。初。天長十年。年四十。身疲眼昏。思命不久。於叡山北。禪結草菴。屏居。三年。修練待。盡然。夜夢天人與藥。其形似瓜。割食半片。其味如蜜。有一人告曰。是切利天妙藥也。覺而口中有餘味。然後羸形更健。昏眸益明。於是。以石墨草筆書法華經。且修四種三昧。以所書經藏於小塔。置一菴名。如法堂。其菴今之首楞嚴院也。天下則之。書法華號如法經。國俗至今傳此。儀爲精行。初嘉祥元年七月。爲內供奉。仁壽四年四月。任延曆寺座主。貞觀六年正月十三日。避諸弟子。獨召常濟。入內床。口誦真言。手結印。

契授與曰。是名密印灌頂。濟不任。感喜。仁房近中堂。至十四日夜。日清淨。靈場側。我不可取死。乃移慈叔房。念阿彌陀。令諸門人同唱。至子時。手結印。口誦咒。北首右脇而逝。年七十一。臘四十九。遺誡十數條。皆護法。懲徒之微旨也。其著作金剛頂蘇悉地二經。疏共七卷。顯揚大戒論八卷。天長太上天皇。欲營菩薩戒壇。論者助發聖意也。三書依勅流行。八年七月。賜諡慈覺大師。(元亨釋教卷三)

○義玄傳

臨濟義玄禪師。曹州南華人。姓邢氏。參黃蘗。運禪師。問如何。是佛法的大意。聲未絕。運便打。如是三度致問。三度被打。遂辭。

和漢高僧傳

卷中

十四

無能齋藏版

下山。運指往高安。大愚處去。師至。大愚問。黃蘗近日有何言句。師曰。某甲三度問佛法的大意。三度被打。不知有過無過。愚云。黃蘗恁麼老婆心。更問有過無過。師於是大悟。云。元來黃蘗佛法無多子。愚擗住曰。屎尿鬼子。適來問有過無過。而今却道黃蘗佛法無多子。汝見箇甚麼。師於大愚肋下築三拳。愚托開云。汝師黃蘗非于我事。師由是再回黃蘗。師資契會。大機大用。卓冠一時。後還鄉。徇趙人之請。住子城南臨濟禪苑。學徒奔湊。師示衆曰。赤肉團上。有一無位真人。常從女等諸人。面門出入。未證據者。看時有僧問。如何。是無位真人。師下禪床。擗住曰。道。其僧擬議。師托開曰。無位真人。是什麼。乾屎橛。咸通七年丙

戌四月十日。將示滅。說傳法偈曰。洪流不止。問如何。真照無邊。說似他。離相離名。人不喜。吹毛用了。急須磨。端坐而逝。塔全身於府西北隅。勅諡慧照禪師。塔曰澄靈。玄嗣黃蘗。運運嗣百丈海。緇林尊仰曰。臨濟宗。(佛祖通載卷二十四)

○明詮傳

釋明詮。十許歲。離家入元興寺。學相宗。性不敏。志抱屈。乃欲出他之適。雨降。憩殿陛。見簷溜落階。其石皆窪。忽猛省曰。至柔穿至堅。漸積之爲也。我雖昏愚。豈可息乎。便還房。勵所業。晝夜不懈。寢食齊舍。自此得高譽於南方。(元亨釋教卷二)詮父早世。母橘氏加意愛育。十五歲。母氏亦卒。詮不任。夢我之哀。歸心佛乘。將報親

和漢高僧傳

卷中

十五

無能齋藏版

恩從。元興寺施嚴法師。羅繫納戒。習法華最勝。通大義。嚴歎曰。子器概弘遠。非吾所及。屬同寺中繼繼者。法門之棟梁也。詮聲法相。名播京華。肅祥二年。爲維摩會。講主住元興寺。敷演空宗。三年正月。陞大極殿講師。二月。帝設高座於清涼殿。請四宗碩德。講金光明經。三論者實敏。華嚴者正義。天台者圓修。法相者詮。皆一時通人也。登法戰場。義論交鋒。才辯超逸。言路崢嶸。猶如殺函劍開。無可攻之勢。諸彥解圍。東宮學士。滋野貞主。參議小野篁。相共嘆曰。先聞其名。恐名之過實。今見其實。恐實之過名。帝顧太子曰。朕未知若人。一代聖教在茲。授以僧統。貞觀十年五月十六日。入滅。壽八十。(本朝高僧傳卷六)

○良价傳

洞山禪師名良价。生越州會稽俞氏。幼歲出家。從師念般若心經。至無眼耳鼻舌身意處。忽以手捫面。問其師曰。某甲有眼耳鼻舌等。何故經言無其師駭異曰。吾非汝師。即指往五洩山靈默禪師。披剃。年二十一詣嵩山具戒。遊方首謁南泉次參潯山潯山指之曰。此去豐陵攸縣石室相連。有雲巖道人。若能撥草瞻風。必爲子之所重。由是徑造雲巖。便問無情說法。甚麼人得聞。巖曰。無情得聞。師曰。和尚問否。巖曰。我若問汝。即不聞。吾說法也。師曰。某甲爲甚麼不聞。巖豎起拂子曰。還聞麼。師曰。不聞。巖曰。我說汝尚不聞。豈況無情說法乎。師曰。無情說法。該何

和漢高僧傳

卷中

十六

無能齋藏版

典教。巖曰。豈不見彌陀經云。水鳥樹林。悉皆念佛念法。師於此有省。乃述偈曰。也大奇也大奇。無情說法不思議。若將耳聽終難會。眼處聞時方得知。辭去宣宗。大中末年。於新豐山接誨學侶。盛化豫章高安之洞山。權開五位。善接三根。大闡一音。廣弘萬品。橫抽寶劍。剪諸見之稠林。妙叶弘通。截萬端之穿鑿。又得曹山深明的旨。妙唱嘉猷。道合羣臣。由是洞上玄風。播於天下。故諸方宗匠咸共推尊之。曰曹洞宗。(釋氏稽古略卷三)師問僧。世間何物最苦。僧曰。地獄最苦。師曰。不然。在此衣線下。不明大事。最苦。師復問僧。離殺漏子。向甚麼處與吾相見。僧無對。遂示頌曰。學者恒沙無一悟。過在尋他舌頭路。欲得忘形泯蹤跡。努力慙慙

空裏步。師以咸通七年己丑三月朔日。命剃髮。深身披衣。聲鐘辭衆。儼然坐化。時大衆號慟。移晷不止。師忽開目。謂衆曰。夫出家之人。心不依物。是真修行。勞生息死。於悲何有。乃召主事僧令辦。愚痴齋一普。蒸責其戀情也。衆猶戀慕不止。延至七日。食具方備。師亦隨齋畢。曰。僧家勿事大率。隨行之際。喧動如斯。至八日。浴訖。端坐長往。壽六十有三。臘四十二。勅諡悟本禪師。塔曰慧覺。(曹錄二)

○圓珍傳

釋圓珍。姓和氏。讚州那珂郡人。父宅成。母佐氏。弘法之姪也。其家巨富。鄉閭推重。弘仁六年誕焉。形巖屹。性警敏。兩眼重瞳。頂

和漢高僧傳

卷中

十七

無能齋藏版

骨隆起。如覆盆。雖幼稚。有老成之量。見者異之。甫八歲。啓父曰。內典之中。應有因果經。願使我誦習。父聞此言。驚異。即尋得付之。珍朝夕讀誦。未嘗輟。十歲讀毛詩。論語。漢書。文選。十四辭家入洛。十五師事延曆寺座主義真。真嘉其才。天長十年。試毗盧舍那經。中甲第。受菩薩戒。爲大僧。時年十九。依例棲山。一紀。蒸修精練。名達輦下。承和天子親降綸綍。加慰問。官給資糧。龍遇隆盛。十四年。預大極殿吉祥齋會。詞辯入徵。官俸聳聽。又與南京明詮。決擇大義。詮者相宗之義虎也。珍問難激揚。懸河馳電。詮答對詘。理詞共屈。自是名播朝野。仁壽三年。秋。僞唐商欽良暉發船。珍共之。泛海。八月十五日。着唐嶺之南。福州境。即宣

宗大中七年也。刺史韋公軍將林師準加安慰。寓居開元寺。適中天竺那蘭陀寺三藏般若恒羅在焉。就學梵字悉曇章。兼授金剛界大悲胎藏大日佛印。七俱知。受素室利印法。梵筴經等。即於此寺兼聽存式講。嘉祥慈恩法華疏。華嚴涅槃疏。及律俱舍義。至温州開元寺。得宋本楞伽疏及四分新疏。如台州上天台山到禪林寺。乃陳朝修禪寺智者傳法之所。所謂銀地道場也。珍於國清寺聞物外講。止觀就而寫。教文三百卷。外者遂師之法孫也。至越州開元寺。智者九世孫良謂講授台教。珍又寓止。九年六月入長安。謁青龍寺傳教和尚長生殿。持念大德法全。受瑜伽密旨。七月共圓載入胎藏灌頂壇。十月入金剛界大

和漢高僧傳

卷中

十八

無能齋藏版

受茶羅及寫蘇悉地大法。又見興善寺三藏智慧輪。承兩部大受茶羅密旨。兼授新譯持念經法輪。者不空之三世也。十二年夏。乘商人李延孝舶。至肥州松浦縣。即天安二年戊寅也。太師藤良房大悅。使使勞迎。冬入帝都。表上所得台宗密藏及諸宗經書千餘卷。貞觀六年秋七月有旨。於仁壽殿結大悲胎藏灌頂壇。上親入壇。藤僕射良相及搢紳之預者三十餘人。八年賜真言止觀弘傳之公驗。勅於宮中講大毗盧遮那經。上預聽。元慶元年即位。初例講百座。仁王般若經。珍爲御前講師。仁和元年例講珍爲仁壽殿講主。唐地莫逆之中。觀璋二子尤深。商舡來往。音問相繼。貞觀中。觀有詩寄珍。曰。敝山新月涼。台嶠古風

清。時詩伯嘗諫議。至此一聯。舉節稱賞。仁和二年秋。上不豫。勅下山入宮。持念看侍。一宿便愈。上悅。賜年度二人。珍回資。山王明神。珍敕山房有山王明神座。或曰。山王受戒時座。此故人呼珍房。曰。山王院。貞觀八年奏建持念壇于冷泉院。祝聖也。十年六月。尚書省劄以近州三井園城寺爲傳法灌頂道場。賜珍安置唐地。傳來佛像經籍四至山野。禁俗輩侵掠。初傳教於敝山。構三字北置。多聞天王像。號毗舍門護世堂。南庀經律論名。一切經藏中安藥師佛像。曰一乘止觀院。以其居中。稱中堂。久稍朽壞。珍合三字爲一堂。今之中堂也。尚存昔號。或曰不乖本乎。對曰。始之三字者三諦也。今之一堂者一諦也。三諦即一。豈戾

和漢高僧傳

卷中

十九

無能齋藏版

祖意乎。十年六月爲延曆寺座主。寬平二年任僧都。四月二十九日。謂門人曰。如來以法爲身。比丘以慧爲命。法慧苟傳。有何死乎。汝等宜知之。其日齋供如常。黃昏結定印。端坐念佛。五更乞水嗽口。取伽黎藏之。右脇而逝。頂戴之衣。卽爲枕。年七十八臘五十九。珍自驅烏至。蛻蟬涉獵經典。游泳禪觀。當其修習之時。雖微曉無假寐。齡降八十。耳目聰明。食啖之物。不擇精麤。貞觀之末。法師濟詮將入唐來告別。且問西唐之風俗。乞學唐言。珍默不答。詮善憤而起。珍謂門人曰。詮雖有才辯。未曉空觀異域。請益似。邀名聞。若抱一毫之浮心。爭超萬里之峻浪乎。所以是我。不答也。其後唐舶來往。不聽詮事。料知漂泊海中。珍之先

識機鑑類之受阿闍梨位者一百餘人手剃髮爲大比丘者五百餘人延長五年冬十二月賜諡智證大師（元亨三年）

○本寂傳

釋本寂泉州莆田黃氏少業儒年十九往福州靈石出家二十五登戒尋謁洞山山問闍梨名甚麼師曰本寂山曰向上更道師曰不道山曰爲什麼不道師曰不名本寂山深器之自此入室盤桓數載乃辭去山遂密授洞上宗旨復問曰子向甚麼處去師曰不變異處去山曰不變異處豈有去耶師曰去亦不變異遂往曹谿禮祖塔回吉水衆鸞師名乃請開法師志慕六祖遂名山爲曹尋值賊亂乃之宜黃有信士王若一捨何王親請

和漢高僧傳

卷中

二十

無能齋藏版

師住持師更何王爲荷玉由是法席大興學者雲萃洞山之宗至師爲盛師於天復辛酉夏夜間知事曰今日是幾何日月對云六月十五師曰曹山平生行脚到處祇管九十日爲一夏明日辰時吾行脚去及時焚香宴坐而化閱世六十二臘三十七葬全身於山之西阿諡元證禪師塔曰福圓（曹洞二寂嗣洞山良价禪師价嗣雲巖晟嗣藥山儼儼嗣石頭遷遷嗣青原思恩嗣六祖大鑒禪師）（釋氏稽古略卷三）

○仲算傳

釋仲算不知何許人空晴僧都一日過興福寺北門適逢小兒頭髮孔赤目光射人睛見其器宇不凡問所從來兒曰我但遊

戲耳何有所從來耶睛益異之携歸寺試教經論聰悟絕倫漸長博綜內外典籍尤精論義南京學徒推之爲翹楚性素不喜僧官每有選讓他三奉維摩講詔皆辭不受常蜚居松室而學賓猶敲柴扉申疑取決應和三年村上帝御筆法華經秋八月召南北碩匠於清涼殿賜齋慶讚五日十座講論深義於是相台交鋒法戰爭軋至第二日良源爲講師法藏平州爲問者二人詞屈時民部卿藤文範陪於官席默祈謂春日明神藤氏之廟也而今南衆旌靡是神之患也曷得英才揭題日戈神夫相之侵夜南行逢算於神祠側扑躍告事算聞而咬牙伴藤公入宮廣散筵之日叡山壽肇聖教爲講師南京仁賀圓藝爲問者

和漢高僧傳

卷中

二十一

無能齋藏版

算乃代二人舉良源前所出衆生皆成佛之文一一難詰其機辯之峻如湫傾嶽倒講師難立言衆僧百條注目清耳講筵事竣帝召算便殿賜恩優賞尋以法相爲六宗長官安和二年算與喜多院林懷登熊野山算於那智瀑下誦般若心經瀑水逆上忽現千手大悲像懷合爪拜瞻誦已升巖上自此不見或曰入慈恩寺山而後不出但遺草鞋云所著作有法華音釋三卷法華略頌陀羅尼集各一卷

贊曰余讀算公之傳一生之舉止契丈夫之機其在草菴則將與麋鹿共終焉一登金闕則亦與龍爭珠矣凡學佛者誰不歛慕乎其那智巖上同師之塵者蓋共觀音隱垂之應化與耶

(本朝高僧
卷九)

○光勝傳

釋光勝不言姓氏。爲沙彌時。自稱空也。人不諱言。空也。少好佚遊。天下殆遍。所過道塗多爲利濟。荷鋤鏟。拾石鋪濕。架破橋。修廢寺。無水之地。多穿井。井必甘冷。以其常唱彌陀號。俗名彌陀井。往々而在焉。荒原曠野。每逢遺骸。拊聚一處。念彌陀名。灌油而燒。過弱冠。於尾州國分寺薙髮。爲沙彌。天慶元年。入王城。於市鄺唱彌陀。勸化人。人呼爲市上人。天曆二年四月。上天台山。從座主延昌得度。五年京畿疫。死屍相枕也。憐自刻十一面大悲像。祈之。像成。疫止。其長一丈。於洛東勒四衆。創一藍號。

和漢高僧傳

卷中

二十二

無能齋藏版

六波羅密寺。奉安像焉。老鍛工禮也。白曰。暮道遠。如生死何也。教曰。只專念彌陀。工辭還。中路逢賊。工潛念彌陀。賊見。工曰。空也。上人也。捨去。應和三年八月。延名德六百人。於六波羅密寺。慶讚金書。大般若經始也。寫經。欲以水精爲軸。其玉凡一千二百顆。不可容易。而得也。詣長谷寺。歸途次勝部寺。一比丘問也。此行何乎也。說軸事。比丘曰。是寺昔有沙門發願。而未書經。先貯軸珠。不幸而命終。誓曰。我來世必竟功。莫令玉散失。乃造石函埋在地中。今聞君言。恐再誕乎。便將也。穿地果得軸珠。與羽二州夷狄之地。佛化少至也。負像經往彼說法。二州順化者多也。臨亡時。著淨衣。執香爐。端坐。語門人曰。無量聖衆來迎。滿

空。語已。氣絕。而手中香爐不傾。時天祿三年九月也。年七十。臘二十五。(元亨釋)
卷十四

○良源傳

釋良源。姓木津氏。近州淺井郡人也。母物氏。夢坐海中。向天上。日光來入懷中。覺而孕。延喜十二年九月三日生焉。長隨母詣梵釋寺。覺閤梨見曰。此兒豈可居鄉井乎。十二上。叡山師事理仙。延長六年。禮尊意。登壇受戒。周旋喜慶。相應覺慧雲晴之間。稟顯密秘奧。早得博學名。承平五年。赴維摩會。義昭者。南都之義龍也。衆議令源與昭對論。昭曰。我德服共出於源者遠矣。彼之少年。豈我偶乎。時仁數有宿望曰。源雖少。俊才英特。何齒齡

和漢高僧傳

卷中

二十三

無能齋藏版

之云乎。推爲偶講。平城六群之徒。藏而按杖遮路曰。昭公。此方偉器。汝何堪配。若詞理不明。加杖於頭。必也。其日源辭氣雄壯。義旨深宏。六群之黨。投杖叉手。悔耻前言。應和三年秋八月。於清涼殿。啓法華講。五日。召二十名德。分朝夕二座。南北互爲講問。至第二日夕座。南京法藏爲導師。叡山覺慶爲問者。藏立。定性二乘。不成佛之義。辭辯甚銳。慶望礙不辯。源者第三之朝導也。聞慶屈。咬齒而出。代慶演。衆生皆成佛之旨。問難往返。已入昏夜。藏曰。決擇坐久。稍至更深。明日朝座。必決理窟。翌日源居導座。藏爲問者。君臣清耳而待。源詞義邁。前日。藏錯口不言。源曰。昨有決窟之言。今何默爾。藏曰。子之才辯。似富樓那。我之誦

味豈可當乎。合會嘆伏。天慶九年。藤僕射師輔於楞嚴院。營法華三昧堂。集衆擊火燧而誓曰。若因三昧力。光榮家族。所擊之火。不過三便擊之。應手火星迸出。不至于再。僕射便手以此火點長明燈。于今不絕。乃以此字屬源之法葉矣。爾來藤葉益昌。康保三年八月。補天台座主。領山務者二十年。山上堂宇敗焚之者多。源管中皆復舊觀。天元四年。爲大僧正。兼法務。聽輦車。永觀三年正月三日。唱彌陀而滅。年七十四。時紫雲垂庭。桶漸上。散去。源道貌雄毅。自把鏡寫照曰。置我像之所。必避邪魅。從茲摸印。天下爭傳。方今人屋間架戶扉之間。黏貼殆徧。賜證慈慧。(元亨四年)

和漢高僧傳

卷中

二十四

無能齋藏版

○眞興傳

釋眞興。不詳其產許。弱年從松室仲算僧都學。慈恩疏兼。冥因明住子島寺。任持法相。世曰成唯識觀。嘗於定中昇兜率天。觀謁慈氏。丞相教通藤公。稱方外交。興於道場。現親史官。令丞相瞻禮。興一日自外歸。寺值鬼魅數百塞於行路。將侵惱興。問僕曰。汝等有所見耶。皆曰無見。興乃入唯識觀。群魅皆仆地。僕從始得見之。長保五年。坐維摩會。講主其答釋爲衆所規範。相國道長藤公尤加優禮。寬弘元年。詔赴最勝會。講師賞其優辯。任權少僧都。興性眞率。不修緣飾。講畢自著草履不歸。南京徑往子島。是歲十月二十三日。終於所住。壽七十有一。後人欽其德。

不敢呼名稱。子嶋先德云。所撰之書有私記十卷。般若經音訓四卷。觀普賢經略釋。般若心經略釋。各一卷。其私記依本宗著之。今行于世。(本朝高僧傳卷九)

○源信傳

釋源信。世姓卜氏。和州葛木郡人。父名正親。母清氏。詣郡高尾寺。至心禱子。夢梵僧授白玉一顆。即有妊。天慶五年生。信幼時嘗夢高尾山藏堂壁上有鏡數枚。或大或小。或明或暗。一僧取小暗鏡與之。信曰。此有何用。當惠大明鏡。僧曰。子只持之。至橫川磨之。寤而大怪。且不知橫川何在。後上叡山。事慈慧僧正。始知夢言。勵精修習。綜大小乘。天性聰明。通達境觀。四種法師。五

和漢高僧傳

卷中

二十五

無能齋藏版

種三昧。無不熏練。居慧心院。弘一家學。請益者塞門。天祿年中。嫌爲榮名。屏居橫川。從事著述。有一乘要訣。往生要集。阿彌陀經疏。大乘對俱舍鈔。因明相違註釋。二諦義私記。三身義私記等。凡七十餘部。一百五十卷。共行於世。台嶺教法此時爲盛。時稱慧信院僧都。長保五年。信設台宗教義二十七疑。寄問宋國南湖。知禮法師。禮見問目。嘆曰。不意東域有如斯深解之人。乃贈答釋。從此風便往來。音問相繼。其後宋國通書。請信述作疏鈔。其一乘要訣者。顯衆生成佛之義。斥定性無性之執也。一日告諸門人曰。今生相見。只在今日。若教法中有所疑者。可速問之。毋成後悔。門人且泣且問。信一夕示誨。便結定印。端坐遷化。

實寬仁元年六月十日也。春秋七十有六時。天樂鳴空。異香滿院。四山草木。皆自西廂傳聞。趙宋皇帝聞信。道譽建塔廟。置影像。燒香禮讚云。(本朝高僧傳卷十)釋寬印事。信學業早成。時宋人朱仁聰在越之敦賀津。信欲見聰。拉印而往。仁聰出接之。壁間有畫像。聰指曰。是婆那婆演底守夜神也。爲資渡海厄所販也。師知此神乎。信憶華嚴經中善財讚嘆偈。以筆題像上曰。見女清淨身。相好超世間。呼印曰。子書次句。印把筆寫曰。如文殊師利。亦如寶山王。仁聰見之。感嗟曰。大藏者皆二師之腸胃也。(元亨釋教卷五)

○知禮傳

法智尊者知禮字約言。四明金氏父經以枝嗣未生。與妻李氏。

和漢高僧傳

卷中

二十六

無能齋藏版

禱於佛夢。神僧攜童子遺之曰。此佛子羅喉羅也。因而有娠。暨生。遂以爲名。神宇清粹。不與衆倫。七歲喪母。號哭不絕。白父求出家。遂往依太平興國寺洪選師。十五具戒。專探律部。太平興國四年。從寶雲學教觀。始三日。首座謂之曰。法界次第。汝當奉持。師曰。何謂法界。座曰。大聰相法門圓融無礙者是也。師曰。既圓融無礙。何有次第。座無對。居一月。自講心經。聽者服其速悟。五年。其父夢師跪於寶雲之前。雲以瓶水注於口。自是圓頓之旨一受即了。六年。常代寶雲講。雍熙元年。慈雲來自天台。始學於寶雲之門。師待以益友。義同手足。端拱元年。寶雲歸寂。師復夢寶雲之首。擢於左臂而行。即自解曰。將作初表。受習流通。

次表。操持種智之首。化行於世也。淳化二年。始受請主。乾符。綿歷四載。諸子說隨。至道元年。以所居西偏小院學徒。戾止。盈十莫容。遂徙居城東南隅保恩院。二年。院主顯通舍爲長講天台教法。十方住持之地。三年。以院宇頽弊。與同學異聞。始謀經理。既而丹丘覺圓來任役事。咸平三年。郡大旱。與慈雲同修光明懺。祈雨約三日無應。當然一手供佛。懺未竟。雨已大決。六年。日本國遣寂照持源信法師問目二十七條。請答釋。景德元年。撰十不二門指要鈔。大中祥符二年。重建保恩院。成。自興役至今。凡十載。通守石待問爲之記。三年。乞郡。奏於朝。十月賜額。延慶七年。撰融心解。明一心三觀。顯四淨土之旨。天禧元年。謂其徒。

和漢高僧傳

卷中

二十七

無能齋藏版

曰。半偈亡軀。一句投火。聖人之心。爲法如是。吾將捐身以警懈怠。乃與異聞結十同志。修法華懺。三載期滿。將焚身。以供妙經。祕書監楊億。還仰道風。白丞相寇準。奏賜紫服。復奉書爲賀。及聞結懺遺身。乃致書勸請住世。謂方當台教復興之時。正賴傳持爲世良導。往復數四。尙執前言。楊公乃貽書。郡守李夷庚及天竺慈雲。俾同勸止。太守親率僚屬勸請住世。說法利生。且密戒鄰社常保護之。會慈雲東下。力爲勸諫。而尉馬李遵勗亦亟書交勸。師以公私意勤。竟沮前志。乃復結十僧修大悲懺法。三載以酬素願。四年。尉馬李遵勗奏師高行遺身。上嘉歎不已。特賜法智大師之號。宣旨住世演教。五年。上聞師爲道勤至。遣內

侍俞源清至寺命修法華懺三日爲國祈福源清欲知懺法旨趣爲述修懺要旨是歲撰觀音別行立記觀經疏妙宗鈔皆成天聖元年撰光明立續遺記成五年製光明文句記以迫歸寂不及終帙其後門人廣智續讀佛一品以成之六年正月元日建光明懺七日有順寂之期至五日結跏趺坐召大衆說法畢驟稱阿彌陀佛數百聲奄然而逝壽六十九夏五十四師自咸平二年後專務講懺常坐不臥足無外涉修謁盡遺講法華立義七徧文句八徧止觀八徧涅槃疏一徧淨名疏二徧光明立義十徧別行立七徧觀經疏七徧金剛鉅止觀義例大意十不二門始終心要等不復計數修法華懺三七期五徧光明懺七

和漢高僧傳

卷中

二十八

無能齋藏版

日期二十徧彌陀懺七日期五十徧請觀音懺七期八徧大悲三七期十徧結十僧修法華長期三年十僧修大悲懺三年然三指供佛造彌陀觀音勢至普賢大悲天台祖師像二十軀印寫教乘滿一萬卷所著續遺記三卷光明文句記六卷妙宗鈔三卷別行立記四卷指要鈔二卷扶宗記二卷十義書三卷觀心二百問一卷解謗書三卷金光明三昧儀大悲懺儀修懺要旨各一卷自餘如融心解起信融會章別理隨緣等師於起信論大有悟入故平時著述多所援據後人扇其堂日起信示不忘也（佛圖經卷八）

○子璿傳

長水法師名子璿秀州人初依本州洪敏法師學楞嚴經至勸靜二相了然不生有省聞滁州瑯琊山覺禪師道望越往參見及門值其陞座遂問曰清淨本然云何忽生山河大地覺厲聲曰清淨本然云何忽生山河大地璿當下豁然大悟擬稟嗣之覺禪師謂之曰汝宗不振久矣宜勵志扶持以報佛恩璿如教後住長水衆幾一千以賢首宗旨疏楞嚴經十卷御史中丞王隨序之行于世瑯琊山廣照禪師名慧覺嗣汾陽昭禪師（釋古氏四略卷）

○契嵩傳

明教契嵩禪師字仲靈藤州鍾津李氏子也七歲出家既受具

和漢高僧傳

卷中

二十九

無能齋藏版

嘗戴觀音像誦其名號一日十萬聲經傳雜書靡不博究得法洞山聰公明道間從豫章西山歐陽氏訪借其家藏之書讀於奉聖院遂以佛五戒十善通儒之五常著爲原教篇是時歐陽文忠公慕韓昌黎排佛吁江李泰伯亦其流嵩乃攜所業三謁泰伯以儒佛融合且抗其說李愛其文之高理之勝因致書譽嵩於歐陽既而居杭之靈隱撰正宗記定祖圖實往京師經開封府投狀府尹王公素仲儀以劄子進之曰臣今有杭州靈隱寺僧契嵩經臣陳狀稱禪門傳法祖宗未甚分明教門淺學各執傳記古今多有爭競故討論大義備得禪門祖宗本末因撫繁撮要撰成傳法正宗記一十二卷并畫祖圖一面以正傳記

謬誤兼著。輔教篇印本一部三卷。上。陛下書一封。並不干求。恩澤。乞。臣。進。繳。臣。於。釋。教。處。曾。留。心。觀。其。筆。削。註。述。故。非。臆。論。頗。亦。精。綏。陛。下。萬。機。之。暇。深。得。法。樂。願。賜。聖。覽。如。有。可。采。乞。降。中。書。看。詳。特。與。編。入。大。藏。目。錄。取。進。止。仁。廟。覽。其。書。可。其。奏。勅。送。中。書。丞。相。韓。魏。公。參。政。歐。陽。文。忠。公。相。與。觀。嘆。探。經。考。證。既。無。訛。謬。於。是。朝。廷。旌。以。明。教。大。師。賜。書。入。藏。中。書。劄。子。有。曰。權。知。開。封。府。王。素。奏。杭。州。靈。隱。寺。僧。契。嵩。撰。成。傳。法。正。宗。記。并。輔。教。篇。三。卷。宜。令。傳。法。院。於。藏。經。收。附。傳。法。院。准。此。由。是。名。振。海。內。已。而。東。還。屬。蔡。公。襄。爲。守。延。置。佛。日。山。居。數。年。退。老。於。靈。隱。永。安。精。舍。熙。寧。五。年。示。寂。闍。維。六。根。不。壞。者。三。日。眼。曰。舌。曰。童。真。

和漢高僧傳

卷中

三十

無能齋藏版

與頂骨數珠爲五舍利。紅白晶瑩狀如大菰。葬于永安之左。(通鑑卷二十八)李親字泰伯。盱江人。時稱大儒。嘗著潛書。力於排佛。明教嵩公。攜所著輔教編。謁之。辯明親方留意讀佛書。乃喟然曰。吾輩議論。尚未及一卷。般若心經。乃唐太宗詔三藏玄奘所譯。纔五十四句二百六十七字耳。泰伯所言。非其自肯。安能爾哉。(佛通鑑卷二十七)師初至錢唐。靈隱閉戶著書。既成。入京師。見內翰王素。進輔教編。定祖圖。正宗記。上讀其書。至爲法不爲身。嘉歎其誠。勅以其書入大藏。賜明教大師及送中書。宰相韓琦以視參政歐陽修。覽文歎曰。不意僧中有此。即黎明同琦往淨因見之。語終日。自宰相以下莫不爭延致名振海內及東下吳門。

大覺璉禪師作白雲議以送之。(佛通鑑卷四十五)

○淨源傳

釋淨源姓楊氏。受華嚴於五臺承遷。還嘗注金師子章師復學合論于橫海。明覃道南。聽楞嚴圓覺起信於長水。四方宿學推爲義龍。因省親于泉。請主清涼復遊吳住報恩觀音。杭守沈文通置賢首院於祥符以延之。復主青鎮密印寶閣華亭普照善住高麗僧統義天航海問道申弟子禮初華嚴一宗疏鈔久矣散墜因義天持至咨決。還而復得左丞蒲宗孟撫杭愍其苦志奏以慧因易禪爲教命公主之。義天還國以金書華嚴三譯本一百八十卷以遺師爲主上祝壽師乃建大閣以奉安之時稱。

和漢高僧傳

卷中

三十一

無能齋藏版

師爲中興教主。以此寺奉金書經故俗稱高麗寺。元祐三年十一月示寂塔舍利于寺西北壽七十八。先世泉之晉水人。故學者以晉水稱之。(通鑑卷二十九)

○元照傳

元照字湛然。姓唐餘杭人。初依東藏慧鑒律師專學毘尼。後從神悟謙師講天台教觀。謙助以究明法華爲本務復從廣慈才法師受菩薩戒戒光發見乃博究南山一宗杖錫持鉢乞食於市。晚主靈芝三十年傳戒度僧及六十會篤意淨業。每日生宏律範死歸安養。平生所得唯二法門嘗集淨業禮懺儀自爲序曰。元照自下壇來便知學律但稟性庸薄爲行不肖後遇天台。

神悟法師苦口提誨始知改跡深求祖教博究佛乘於是發大誓願常生娑婆五濁惡世作大導師提誘群生令入佛道復見高僧傳慧市法師云方土雖淨非吾所願若使十二劫蓮華中受樂何如三塗極苦處救衆生也由是堅持所見歷涉歲年於淨土門略無歸向見修淨業復生輕謗後遭重病色力痿痺神識迷茫莫知趣向既而病差頓覺前非悲泣感傷深自克責志雖洪大乃未堪任仍覽天台十疑論初心菩薩未得無生忍要須常不離佛又引智度論云具縛凡夫有大悲心願生惡世救苦衆生無有是處譬如嬰兒不得離父母又如弱羽祇可傳枝自是盡棄平生所學專尋淨土教門二十餘年未嘗暫舍研詳

和漢高僧傳

卷中

三十二

無能齋藏版

理教披括古今頓釋群疑愈加深信復見善導和尚專雜二修若專修者百即百生若雜修者萬千一二心誠散亂觀行難成一志專持四字名號幾生逃逝今始知歸仍以所修展轉化導盡未來際洪贊無窮方便多門以信得入如大勢至以念佛心獲悟圓通入三摩地復自思念已前所造無量罪業不信淨土勝法毀人業因既成苦果必就內懷慚恥曉夕兢惶於是躬對聖前吐露肝膽五體投地苦到懺悔仍發大願普攝衆生同修念佛盡生淨土欲常修習須立軌儀故集諸文布成此法從始至末第列十門並準聖言咸遵古式事從簡要法在精專後賢披覽知我志焉又撰十六觀經小彌陀義疏其外著述累數百

卷政和六年秋命弟子諷觀經及普賢行願品跌坐而化西湖漁人皆聞空中天樂聲（往）葬於寺之西北諡大智塔曰戒香常謂其徒曰化當世無如講說垂將來莫若著書（三十九）

○永觀傳

釋永觀文章博士源國經之子慕勤息法年僅小學入山崎國成寺授不動咒一聞即記夢中誦咒寺主謂徒曰此兒宿世佛種也十一從禪林寺深觀僧都剪髮受業觀華山帝之子深覺之資精於真言觀給事左右遂稟密灌辭往東大登壇具戒隨有慶顯真師資傳三論窮玄尋遊社中聽華嚴法相年立入光明山庵斥餘營偏修淨業山棲谷飲凡十年矣道友強起

和漢高僧傳

卷中

三十三

無能齋藏版

住禪林古寺演唱空宗兼勸安養洛下奔赴大立化門於寺巽隅構東南院長坐淨修以送歲月應德二年奉勅爲維摩會講師寬治八年作七寶塔安舍利二粒寅昏禮讚曰若我生安養則舍利當增果感分倍造刻丈六彌陀像以分倍舍利納佛之眉間安藥王院承德三年應南衆舉住東大寺雖司鈐鐐不用常住物自蓄資糧以供齋鉢衆僧挹風寺院嚴肅住持二年又歸洛東性極慈仁常往囹圄恤囚人苦說法授戒又好學不倦然病多牀弱嘗曰病者人之善知識也我以病質故知四大不堅益勤修習壯年以前唱彌陀號日一萬遍壯年以後至六萬遍漸及晚年舌乾咽涸只爲觀想三時誦經一日不缺誦佛頂

咒三十八億九萬一百二十遍。夢中常見月輪中現七層塔。又禪坐時。觀極樂相。丈六彌陀。髣髴現前。焉天承二年秋示小恙。謂徒曰。世尊八十涅槃。我今與佛同壽。取滅足矣。臨終。修往生講。中夜念佛。頭北面西。而寂。異香芬郁。紫雲垂房。實十一月二日也。親在。隱約常辭。綱位任止。律師著往生十因一卷。彌陀要記等。(本朝高僧傳卷十一)

○克勤傳

圖悟諱克勤字無著。彭州崇寧路氏子。依妙寂院。自省落髮受具。游成都。從圓明敏行大師學。經論。窺其奧。以爲不足。特謁昭覺勝公。問心法。久之。出關。見真如。詰公頗有省。時慶藏主衆推

和漢高僧傳

卷中

三十四

無能齋藏版

飽參尤善。洞下宗旨。師從乙盡其要。嘗謁東林。照覺。頃之。謂慶曰。東林平實而已。往見太平。演道者。師侍豪辯。與之爭鋒。演曰。是可以教生死乎。他日涅槃堂。孤光獨照。時自驗看。以不合辭。去抵蘇州。定慧疾病幾死。因念。嗜昔所參。俱無驗。獨老演不吾欺。會病間。即日束包而返。演喜其再來。容爲侍者。值漕使陳君入山。問法師。侍側。忽大悟。即以告。演演詰之。師曰。今日良喪目。前機也。演喜曰。吾宗有汝。自茲高枕矣。師因以是事。語佛鑑。勸未之信。師曰。昔日高麗打鐵。火星爆。吾指頭初謂建立。語今乃果然。勸愕然。無對。時佛眼禪師尙少。師每事必旁發之。二公後皆大徹。由是演門二勳一遠。聲價籍甚。叢林謂之三傑。崇寧

初。以母老歸蜀。出世。昭覺。久之。謝去。於荊州。見丞相張無盡。談華嚴要。無盡不覺前席。師曰。此真境與宗門。旨趣何如。無盡曰。當不別。師曰。有甚交涉。無盡意不平。師徐曰。古云。不見一色。始是半提。更知有全提時節。若透徹。方見德山臨濟。用處。無盡翻然有所悟。政和末。有旨移金陵。蔣山法道大振。宣和中。詔住東都天寧。太上有康邸。屢請宣揚。建炎改元。宰相李伯紀表住金山。駕幸維揚。有詔徵見。顧問。西竺道要。對曰。陛下以孝心理天下。西竺法以一心統萬殊。真俗雖異。一心初無間然。太上大悅。賜號圖悟禪師。乞雲居山。歸老。朝廷厚禮其行。至雲居之明年。復歸于蜀。太師王伯紹迎居。昭覺紹興五年八月五日示疾。將

和漢高僧傳

卷中

三十五

無能齋藏版

終。侍者持筆求頌。書曰。已徹無功。不必留頌。聊示應緣。珍重珍重。擲筆而化。春秋七十有三。坐五十五夏。諡真覺禪師。塔曰寂照。(佛通鑑卷三十)

○良忍傳

釋良忍。尾州富田人。嘗登睿嶽。學顯教。於良賀。稟密灌。於永意。自承德初。隱大原山。日誦法華一部。唱念佛六萬遍。天仁元年。欲建精藍。夷基趾。畫結界。鬼魅偶語曰。師之法力。雖驅逐我。法末之時。復當歸止。翌歲寺成。號來迎院。待賢門院。宮人每來。聞道於忍。一日未通。謁到門。思惟我是婦人。屢入院。倘無知者。妄生疑謗。得不累及我師耶。忍出謂曰。婦人所惟。非無其慮。但固

志於道耳。忍修八字文殊法。庭上巨石變作獅子。回旋哮吼。一日異人來。謁曰。師奚不唱融通念佛乎。忍曰。何謂也。曰。回我所唱。融會衆人衆人之唱。互通于我。所謂融通也。何者衆生無邊。故其功德踰於獨稱者萬億耳。願師以此勸誘四海。我亦倡天神地祇而衛師法焉。忍曰。公何人耶。曰。我鞍馬毘沙門天也。言訖。即隱。從此專唱融通念佛。忍自作疏。博勸四衆。天承二年二月一日取滅。年六十六。忍建一字度經律論名。如來藏所持彌陀經。時時放光。其徒崇爲鎮寺之寶焉。(本朝高僧傳卷五十一)

○覺鑊傳

釋覺鑊。姓平氏。肥之前州人。將門之屬胤也。累代武略。其父負

和漢高僧傳

卷中

三十六

無能齋藏版

勇名。鄉黨敬畏。鑊兒稚以爲我父。天下之豪貴也。一日官吏促租到家。喧呼放戾。父居屏處不出。家有比丘。兒問曰。今何人乎。辱我尊丈。又盍似平時勇壯哉。比丘曰。官吏課租。豈可忤乎。兒曰。誰爲之。比丘曰。刺史也。凡界州無不聽刺史之令者。汝父亦刺史有耳。兒曰。我始謂天下之貴人。靡如我父。猶有刺史乎。比丘曰。刺史不自貴。承于宰臣。宰臣自不貴。承于天子。天子者四海之至尊也。汝之稚孩。何父之謂哉。兒良久曰。有至尊之過。天子者乎。比丘曰。有神道有天界。人主者皆承制也。兒曰。有踰神天乎。比丘曰。有。兒曰。誰乎。比丘曰。佛也。兒曰。有。適佛者乎。比丘曰。無。過斯故曰。無上世尊。兒曰。可得聞乎。比丘曰。佛有三身法

報化也。其訓有二。顯密也。三身之中。法身爲最也。二訓之內。密乘爲奧也。若夫三身二訓者。非小兒之所宜聽矣。兒曰。世人有登佛位者乎。比丘曰。方今剎染之者。皆彼徒也。其間勤修精敏之者。必得其位。兒曰。其人何在。我就而尋求焉。比丘曰。紀州高野山者。弘法大師定隱之地也。彼有定尊阿闍梨。粹于密學。子其往焉。自是志遊學會。親知携入京。投仁和寺。昔弘法誠其徒。金剛乘者。兼學相宗。依之。其師先令鑊往興福寺。從慧曉習。唯識。保安二年。回仁和稟密灌。其夜場室有光香。又隨覺獻僧正受。三井秘密灌頂。其餘密學文法。無不研究。鑊幼聞在耳。便上高野。親定尊益極秘奧。鑊於高野建傳法院。天仁上皇捨莊田。

和漢高僧傳

卷中

三十七

無能齋藏版

充學供。鑊一日往藤相國忠通第。相國下庭迎拜。鑊問故。相國曰。弟子昨夜夢大唐國慧果阿闍梨到此宅。今師至。恐後身乎。鑊曰。我自少年誓弘密乘。凡聖雖異。意趣惟同。如相國夢闍梨納愚衷乎。鑊始在高野也。永尋法師語曰。此山大師定後廢圯。相仍祈親維範明算之輩。補苴罅漏。不能復元。今子器宇宏偉。必任此責。盍負愚乎。以故鑊勤興建傳法密嚴二字。跨越先矩。雄博壯麗。康治二年十二月十二日卒。年四十九。(元亨釋教卷五)

○證眞傳

釋證眞。神銳強達。從隆慧永辨二師。慧心檀那之法流。盡其源委。入寶處院。離世閉戶。繙閱大藏。十有六遍。不知源平之擾亂。

也。住東塔華王院。大張講席。後構寶地坊。獨任著述。撰私記三十卷。扶豎台教。山家學者至今珍玩焉。雅言衆曰。遠師大聖世尊。近師天台荆溪。其餘者不足用之。嘗膺大會。講師立義云。三惑者異時斷。元品無明者等覺智斷也。我看一代之經論。未嘗見同時斷。妙覺智斷之文。衆伏其宏覽矣。文治五年。奉勅爲論義探題。尋任法印。嘗謁源空。稟圓頓戒問。專念旨。元久元年。真勸座主慈鎮。選四谷之碩才二百七十人。於根本中堂。九旬安居。論講決擇。法華仁主等經。高倉上皇賜院宣令。真判正衆議。此講會者。長保年中。覺運僧都奉詔。權輿中廢不行。真復興之也。

和漢高僧傳

卷中

三十八

無能齋藏版

贊曰。真公騷亂不黨。落思著書。人無知之。故逸於釋書大筆耳。頃世興聖寺圓耳始獲其書。於叡山僧舍。自爾繡梓盛世。甄之質文。覈焉析義。精焉其扶翼台教也。雄視宋四明之諸師。而博洽不讓實山家之魁才也。(本朝高僧傳卷十三)

○實範傳

釋實範。字本願。諫議大夫藤顯實第四子。投興福寺。習學法相。登醍醐山。稟密法。於嚴覺大僧都。先一日覺夢。青龍出自庭池。矯首噴水。翌日謂徒曰。受法人來。掃飾道場。果範告謁。覺迎。忻然倒懷。付授。又如橫川。就明賢法師習串。台教慧解。縱達。居忍辱山。一日探花。到中川地。愛其勝形。申官建伽藍。號曰成身院。

常嘆律衰。刻意披尋。自念言。戒貴授受。我雖學偏。奈無師承。祈春日社期。七晝夜。夢自招提寺高掛銅篋。通於清水。於東大戒壇。以爲好相。晨往招提。然招提鑒真滅後三百餘年。殿宇荒落。僧侶不棲。結界之地。半爲田疇。範歎息盤桓。有一圓顚驅牛耕田。範問真師影堂何處。在。即指其處。復問。無有比丘乎。曰。我雖不全儀相。而曩曾聽四分戒本。範從乞焉。乃脫犂縱。牛洩頰。吮水。延入影堂。而親授之。範歸。即始講律說戒。四來乘。則戒法復興。後移居光明山。某年月終。嘗著大經要義七卷。建保三年。依興福寺欣西之需。作戒壇式一卷。後笠置貞慶見其著述。拊掌稱之。(本朝高僧傳卷五十七)

和漢高僧傳

卷中

三十九

無能齋藏版

○源空傳

釋源空。姓漆。開氏。作州稻岡人也。父名時國。母秦氏。父母無子。常禱佛神。一夕母夢。吞刺刀。寤而語諸夫。夫曰。汝其有身。於難染之人乎。從此母誓。不如輩腥。長承二年。四月七日生。頭圩而稜。眼黃。而光宗族異焉。至四五歲。舉止動向。西九歲。其父爲源長明所害。一家騷逃。空潛於屏處。持小弓矢。一發中眉間。其寇者堀河帝之衛兵曹也。畏其額創。隱而不仕。嘗人呼空爲小矢兒。父遺言。令出家入郡之菩提寺。隨事叔父觀覺法師。習業日進。覺見其聰敏。送與叡山源光大德。授以四教儀試。致問難。酬答如響。光歎曰。此駿驥也。豈朽索所能羈哉。付功德院。皇圓阿

閻梨。圓者當世之博達也。空時十五歲。遂就圓公。落髮稟戒。給仕三載。究串台教。又從寂嶽黑谷。寂空是。又智德隱逸。山衆推重。空欽事。稟密乘及菩薩大戒。年僅二十四。凡大藏經卷。他宗疏章。莫不披閱之。至其奧義。有自得處。欲質所蘊。遍問南都。謁興福寺藏俊僧正。述唯識。逢東大寺景雅僧都。演華嚴。就東南院寬雅大德。說三論。三師證明。又見中川實範律師。授秘密灌頂及密疏。乞受具足戒。尋質律規。空自詫曰。讀書三遍。其義自通。不經勞苦。既覲寂空。空公時閱慧心僧都往生要集。於是慕淨教。思過半矣。及見善導觀經疏。大喜。遂捨所修。專修稱號。承安四年。移洛都吉水。盛說專念法及圓頓菩薩大戒。都下靡然。

和漢高僧傳

卷中

四十

無能齋藏版

高倉帝特加禮敬。詔入宮中。受菩薩戒。相國兼實藤公。請第問淨土法。空述撰擇本願念佛集。進之。蓮社之徒。傳爲秘要。空勸化四衆。遷次賀茂河原屋勝尾寺大谷寺。到處人民。差肩奔波。顯真靜嚴明。遍證真公胤。緇林之翹楚也。從空聞專念法。空修法華三昧。普賢乘白象。現於道場。讀華嚴大經。護神化。青蛇蟠於案下。藤太皇后於上西門院。請空七日說戒。門屏有蛇。屈蟠不動。每有說戒。作側耳勢。至散日死。其頭破。有物髣髴似人昇天去矣。後白河上皇召山門三井。碩德於離宮。修法華懺法。空爲導師。於法住寺。就受一乘圓戒。又詔山門三井名德。講往生要集。空列講次。勅寫空之真。置于蓮華王院寶藏。空夢高僧乘

紫雲來。黑徧衫金裙子。甚威嚴。告空曰。我善導也。感汝稱名念佛。特來證明。翌朝令畫工乘臺圖之。於今其徒展轉摸寫焉。大炊御門左丞相經宗藤公。花山院左丞相兼雅藤公。受圓頓戒。聽專念法。藤相國就于月輪墅。請講淨教。空出相國隨後拜之。謂左右曰。空師頂上湧金色圓光。若等見之乎。空於三昧牀。屢見淨土勝相。或入水想觀。現琉璃妙境。入地想觀。宮殿寶樹等現。或彌陀觀音勢至並現於室中。或暗夜看書。兩眼放光。建永二年。門生之中有犯王制者。責歸於空。春二月竄贛州。謫居五稔。誘導日多。空曰。不因播遷。豈利於海濱耶。是亦弘化之幸也。建曆元年。承恩還都。二年正月在大谷寺染疾。問弟子曰。有所

和漢高僧傳

卷中

四十一

無能齋藏版

見乎。皆曰。無之。空曰。我十餘年。存視極樂相。及佛菩薩真身。今又來現也。二十五日朝。高唱佛號。諸徒助和。久皆聲渴。空獨不頃。至停午時。披慈覺大師僧伽梨。頭北面西。誦光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨之偈。如睡而寂。享年八十。坐臘六十有六。示寂之前。紫雲降垂。元祿十年春。征夷大將軍兼左丞相綱吉源公。奏朝勅。證圓光大師。

贊曰。空公黑衣節儉。不昇僧官。謹律息心。全無人我相乘。決定心入稱名門。以他力本願。而擊發動掖。創立一家之業矣。說々法裔慎哉。勿違于先祖之志焉。(本朝高僧傳卷十三)

○貞慶傳

釋貞慶，左少辨藤貞憲之子也。母夢一高僧自稱，貞慶入其懷，從茲有孕。久壽二年夏五月生，在孩孺，翼真乘年甫小學，師興福寺權僧正覺憲。及十一，剃髮受戒，字曰貞慶。母聞之，曰：實比丘之再來也。資氣深重，防止守嚴，習訓皇皇，爲時所欽。壽永初年，陞維摩會主座。文治二年，再充公撰，在興福寺二十餘年。居資展空，一日應詔赴最勝會，官講衆皆先到，從服整美，慶獨殿而至，歷階直登，衣衫破弊，乘僕借人官僚緇伍，低頭匿笑。慶曰：杜多之行，先佛之遺訓也。方今釋氏不據法儀，競尚浮誇，不可同伍焉。講畢不還，隱乎城州笠置寺。時年二十九，名聲彌著。後鳥羽上皇樂楊柞遊好，射麋鹿，暮年悔過，落慶梵字，以薦鹿福。

和漢高僧傳

卷中

四十二

無能齋藏版

開慶德望，詔爲導師。慶攜一笈一笠，飄然而來，以笈笠植階側，意氣自若。據座說法，舉鹿苑事，辭辯流暢，因譬壯麗，君臣感嘆，貴其朴素。慶詣春日祠，群鹿屈踞，承元二年移海住山寺。一住六年，學賓逐跡，承業者多。慶雖以法相立宗，而律規爲務，平居肅然，罔違彛憲，作警誡十一條，號儀觀鈔，其辭義深長，固足策進後學也。嘗訓衆曰：色相如水上月，似有非有，富貴如夢中樂，一覺永空，色即是空，故不捨生死而至菩提，空即是色，故不住涅槃而度衆生。學者須了知，建曆二年在于海住山，初冬示疾，明年二月三日坐化。春秋五十九，夏臘四十九，朝廷崇其德，諡解脫上人。慶兄弟四人，爲僧，隸籍延曆園城，貞雅貞覺實玄貞。

圓研究家法，各稱已講，又神足數輩。明光院覺遍、東北院圓玄、新院良算、角院璋圓等，當世之俊人也。（本朝高僧傳卷十三）

榮西傳

釋榮西，號明菴，備之中州吉備津人。其先賀陽氏，薩州刺史貞政曾孫也。母田氏懷孕八月而誕焉。母無困惱，永治元年四月二十日明星出時也。八歲從父讀，俱舍頌，聰敏邁群兒。十一，師事郡之安養寺靜心心者，嘗於三井寺與西父同業，以故就焉。十四落髮，登叡山戒壇，十七心亡，遺言曰：汝尚幼，故不授密法，我沒汝其役法兄千命乎。十八命授虛空藏求聞持法，自此精進，屢見靈感。十九赴上都，從叡山右辯學台教，應保二年天下

和漢高僧傳

卷中

四十三

無能齋藏版

疫，西思恃怙罹災，歸本國省親。仁安三年夏四月，乘商舶泛瀛海，著宋國明州界。乃孝宗乾道四年也。五月發，四明赴丹丘，適與本國重源遇，相伴登台嶺。秋九月，共源理歸檣，以所得天台新章疏三十餘部六十卷呈座主明雲。雲見疏，加嘆。西又以宋地台宗酬酢之言及彼地名德書文與雲。雲曰：汝於支那掄揚台教，亦我國之光華也。西又跋大志欲重入支那，遂於印度拜牟尼八塔爲滅罪之要，於是乎門下侍郎平賴盛與西厚聞西之西遊，常退行裝以故未遑發。文治之元平氏凋殫，侍郎尋亦卒，遂以三年夏重入宋域，徑趨行在，謁知府按撫侍郎表奏過竺之事。于時朝議報曰：北蕃強大，西域皆隸，關塞不通，何行之

有。西素志不果。鬱鬱若亡。舶主促歸。放洋三日。逆風俄起。反溫州瑞安縣。西謂我未究奔馳。風濤豈激我乎。乃下舶。與十數輩。又向赤城。時虛菴斂禪師住。萬年寺黃龍八世之嫡孫也。直至虛菴。菴問曰。傳聞日本密教甚盛。端倪宗趣一句如何。對曰。初發心時。即成正覺。不動生死。而至涅槃。菴慰誘曰。如子言。與我宗一般。西自此盡心鑽仰。親炙者數歲。淳熙之末。菴移天童。西亦行。補助多矣。紹熙二年秋。辭菴。乘揚三綱船。着平戶。嶋草浦。本朝建久二年辛亥也。戶部侍郎清貫創小院。延之。秋八月八日始行。禪規幾十數輩。不幾。海衆滿堂。遂入王都。倡禪道。建久三年。於香椎神宮側。構建久報恩寺。始行菩薩大戒。布薩。六年

和漢高僧傳

卷中

四十四

無能齋藏版

創聖福寺。于筑之博多。此春分。天台山菩提樹。栽東大寺。初。西在台嶺。取道遂法師所栽菩提樹枝。付商船。種筑紫香椎神祠。建久元年也。西以謂吾邦未有此樹。先移一枝于本土。以驗我傳法中興之効。若樹枯槁。吾道不作。蓋菩提樹如來成道之靈木也。世尊滅後一百年。師子國王受佛記。共佛舍利。得南枝。盛金甕。移殖南宋之始。求那跋陀羅始栽。廣府其後。遂師分台峰。是以西爲法信。寄來。逮東大寺復勅。以此木移焉。元久之始。西又取台枝栽。建仁東北隅。兩處茂盛。垂蔭數畝。至今繁焉。天下分栽。建仁二年。金吾大將軍源賴家。施地于王城之東。營大禪苑。三年六月。尙書省筭置台密禪三宗。西即而構。真言止觀二

院。于寺。建永元年秋九月。勅主東大寺幹事寺羅治承。冠火修營。未竟。以西德望。朝廷有此授。不踰四載。大殿層塔。凡當有之所悉備足。初。平侍郎奏。賜紫衣。建保元年。擢僧正。三年。西在相州龜谷。營壽福寺。一日辭源。僕射實朝。僕射曰。師已老。寺未成。何事行乎。對曰。我欲入王城。取滅耳。僕射曰。至人出沒。豈擇地乎。對曰。都人初聞宗門。疑信胥半。我當唱末後句。顯煥王都耳。即命駕歸京。夏示微疾。六月晦。布薩。次告衆曰。孟秋單五。吾之終也。都下喧傳。至宸展。到期上遣中使問候。西對宮使曰。已近而姿儀壯健。諸弟子傍聽。潛怕。晡時坐椅安祥而逝。實七月五日也。年七十五。臘六十三。西知見廣大。三閱大藏。以法道之寄

和漢高僧傳

卷中

四十五

無能齋藏版

爲已任。故顯密之教多所補弼。至於宗門。雖斑々見于前。皆乏貽厥。今之學者。推西爲始祖。嘗曰。我沒五十年。禪宗大興。於世文應弘長。已降爾于慧日。隆于巨福。皆如西之言。二師又領建仁。可謂奇中矣。生平著述。興禪護國論三卷。一代經論。總釋日本佛法中興願文。不二門論。三部經開題等各一卷。密部甚多。不盡記。(元亨二年)

○高辨傳

釋高辨。號明慧父。平重國。紀州在田郡人。母藤氏。無嗣。禱佛夢人與金橘。入懷有妊。承安三年正月八日生。容貌端正。八歲。父母相繼喪。上高尾山。師事伯叔上覺。讀華嚴五教章俱舍頌。裁

歷旬次，皆能暗誦。偶與群穉戲，自省曰：「二親既沒，未知昇淪。若在三途，我有何樂？」生天無礙，見我遊放，從此戒懼益勤，研習十歲。遊學間，密乘於醍醐，實尊習華嚴於南都，景雅十三，自惟云：「諸佛修因，不惜身命，救鵲飼虎，宜修苦行。」或上山椒，終日禪坐，屍陀林，通夜止宿，群骸滿地，臭氣難禁，狼狗集，嗅辨而去。歸命文殊持五字咒，禱曰：「以大聖加被，得如實智，救濟有情。」十六就，上覺剃髮受品具於東大寺，戒壇謁尊勝院，聖詮詮者景雅，神足精于雜華，辨听昏請益深，究圓理十九，從小野與然阿闍梨，稟兩部密灌，止梅尾山。又登紀州白峯山，菴居修觀，文覺法師常語人曰：「鶖子日連是證果人，三學之功，我難得擬，然至

和漢高僧傳

卷中

四十六

無能齋藏版

心法了達，潔白爭若明慧乎？建久之季，招住梅尾山，四衆歸德。於是講探玄記梵網經等，榮西禪師新弘禪法，辨往來參請得其心訣。西徒圓空問禪觀法，西曰：「明慧長老坐久功積成就，此事往彼參取，辨常以我國慧學者多，定修者寡，是爲大患，便入北山巖窟修習禪定，五門禪要達磨多羅禪經，以爲心術，製講式五章，以祭達磨大師。又依華嚴宗義撰坐禪次第入解脫義各二卷，晉曰：「首楞嚴經者，聖經之眼目也。禪觀之暇，爲衆開講，元久二年春，與同志欲從真丹達於天竺，妻根已備，屢疾不果，是冬臘夜，習禪達曉，凍噤忽，天童來摩頂安慰，與藥，其後常隨給侍。建永元年冬十一月，後鳥羽上皇勅賜梅尾山，永爲華嚴

興隆之地，號高山寺。此處者古蘭若之地，廢頽年久，從辨移住院宇興復，盛唱賢首之宗。承久初年，詔爲南都尊勝院，貫首接衆。二夏辭回本山，建保六年，賀茂神山結菴，禪坐大觀能久，挹風歸法，施以藏經，建禮門院平皇后請辨受戒，乃在簾中令辨坐下。辨曰：「持戒比丘不拜神明，不敬王臣，下坐說法，則師資墮罪。」經有明文，須請他人將起出宮。平后褰簾趨出，悔謝延辨高座，稟戒益敬，承久之亂，敗士匿山，東兵義景搜捕及辨，主將平泰時素聞辨德，望下庭延拜。辨曰：「僻處山間，所學忘失，況於世間荷負何事？吾山禁殺飛禽走獸，亦常避害，是以逃兵或鼠結界，本師謨訓遇苦即教，不受身命，豈忍驅逐之有妨政令？」斷老

和漢高僧傳

卷中

四十七

無能齋藏版

僧頭志氣自若，泰時垂淚曰：「武人不知，漫入淨刹，請上人來，無所謝罪。」然幸拜謁，因問生死事大，其後入山問法，詢以政道，辨難儒釋，懇懇說示。平氏供以丹波莊田，辨辭拒曰：「沙門只當貧窮若處，富貴必有放逸邪僻，我厨給足矣。」辭而不受。平氏常曰：「我治家國，偏依辨師之教化也。」城介義景後從辨出家，曰：「覺知常隨給事，私淑其道，辨與笠置貞慶松尾勝月友善，月於松尾慶讀寶塔辨爲導師，寬喜二年後堀河帝詔辨說法，講訖出宮，時中納言藤定家揖送曰：「聽微妙說，結緣感悅，其爲時彥所賞如斯。」三年冬得微恙，四年正月十五日夜，對彌勒像端坐入觀，口放白光，移時出定，告門人曰：「吾行期近矣。」因言臨終法儀，十

九日朝廣說修學始卒。即唱慈尊寶號。右脇而逝。微笑見而異香襲人。春秋六十。夏臘四十六。葬桐尾禪堂院。後辨三學兼備。大小權實。顯密二教。因明內明。孔老二教。及數論勝論。外道書策。莫不錯綜焉。爲民部卿藤長房詮釋金獅子章。撰光顯鈔二卷。其餘述作。華嚴唯心義釋。華嚴修禪觀照入解脫門義。各二卷。孟蘭盆經總釋。善知識科文。功德義鈔。菩薩戒儀。各一卷。摧邪輪三卷。菩提樹寶塔式四卷。凡有七十餘卷。其摧邪輪。博引經論疏釋。破源空之選擇集。承其法者五人。喜海道澄。隆詮。高信。了辨也。海公集辨師行狀。(本朝高僧傳卷十四)

○辨長傳

和漢高僧傳

卷中

四十八

無能齋藏版

釋辨長。號聖光。筑之前州香月莊人。應保二年生。七歲入州之菩提寺。師妙法肆經業。十四剃度。歷侍于白殿寺。唯心明星寺。常寂。學習。圓教。義解轉增。受寂指揮。隨觀叔于叡山。叡試問曰。第一義爲教體耶。三諦俱爲耶。長曰。開權顯實之日。三諦俱是。廢權立實之時。中道獨在焉。又親炙實地房證真。探八教之幽致。往于攝之三寶院。謁能忍。問禪要。聽宗鏡錄。忍以俊快推之。建久三年。還鄉之油山寺。在于學頭職。會弟之殂。棄修淨業。明星寺衆。請以往持居之。八年久廢繼。復同八年入洛。見于源空。空慰勸說曰。不修難行。但念彌陀。服誨三月。辭回鎮西。安居稱號曰。六萬遍。九年秋往化豫州。緇素雲集。元久初。歸明星。侶淨

教州之高良山下。有一精宇。安丈六彌陀佛。邑民招長。修千日念佛會。良山徒衆嫉其誘化。曰。此山台密二教之地。而今辨長喧呼稱名。將驅其黨。約期明日。其夜衆夢。光明赫然。自西方來。照于道場。傍有人言。聖光稱修化佛向臨。故瑞如此。一衆驚謝。助其弘道。有要阿作阿。夫妻家富。歸法就山本鄉。創善導寺。延長主之。殿堂聯宇。四部林會。六時禮讚。不失蓮漏。暇講聖經。警策學徒。空師將寂。親盛問曰。當決疑於誰人。空曰。聖光聖覺在焉。安貞二年。應肥後往生院之招。四十八日修別時念佛。感善導之來。嘉祿二年。撰微選擇集。授門弟子。嘗謂徒曰。在昔叡山。得諸法實相之說。後來吉水傳念佛往生之義。料簡二教。理義

和漢高僧傳

卷中

四十九

無能齋藏版

融焉。單聖道之人。不知佛意。唯念佛者。難契教旨。夫欲開大聖之秘藏。須用三學之管鑰。我斯言龜鏡。學者宜厝心。若闕一法。恐墮偏局矣。長平居或見樂土之變相。或值法會暴雨不霽。則檐端精前。白日忽照焉。一日疾告曰。樂國聖衆。充于半天。阿彌陀佛。今來迎攝矣。因集門人。廣說如常。沐浴披衣。向西端坐。持彌陀經。與衆念佛。唱光明遍照之句。偈首未終。如眠絕氣。四支柔溫。顏容怡然。世齡七十有七。法臘六十有四。嘉祿四年。潤二月二十九日也。葬全身於寺後。封築墳墓。門人檀越。夢其往生之相者多。云。(本朝高僧傳卷十三)

○證空傳

釋證空號善慧京兆人村上天皇之裔賀州刺史源親季子也治承元年誕稍長聰敏丞相通親源公乞爲猶子暨年十四將加冠纓啓出家志源公不許宿植所根其志難奪附吉水房刺繁得度源空器重加意誘誨二十二受菩薩大戒傳專念旨通通空公二十餘年善導五部九卷釋義他教大綱潛思講貫正治元年丞相兼實藤公召空府第講選擇集以精觀經相國乞鈔空述私記十卷空又聽台教於願蓮稟密教於政春隨叔山座主慈圓琢磨日久後就公圓承灌頂法戒持潔清勤修猛利三部淨經及梵網經讀誦一過稱號六萬日爲作業嘗曰利度衆生專在觀經觀經所本專在念佛章提夫人緣起未現佛隨

和漢高僧傳

卷中

五十

無能齋藏版

順聖道施設諸教是爲顯行門章提緣起已現說此經時彌陀本願念佛法要顯示開發是爲示觀門然則諸經是方便說觀經是眞實門於是取他經七種題以攝觀經化前序中是擬智者釋法華經題以爾前爲權以法華爲實而立施開廢三譬也又觀經曰諸佛如來有異方便令汝得見而善導釋云十三觀已來盡名已方便空曰是當十六觀異方便矣時人不信以爲臆說也建保五年遊仁和寺時見衆僧京囉藏函縹囊細帙殿上紛羅其中一囊題般舟三昧行道往生讚開帙閱之善導讚也其序曰釋迦如來實是慈悲父母種々方便發起我等無上信心又曰種々方便教門非一但爲我等倒見凡夫若能依教

修行者即門々見佛得生淨土果合平日立義之意矣歸以說衆議者信伏野宮左僕射公綱藤公爲時名卿稱嘆曰公實我邦彌天道安也初住小坂勸授都人建保之季受慈鎮之囑遷居西山三鈇寺盛說淨教顯密要義圓頓戒法隨機說授遠近靡風寬喜二年寶塔落成中央掛佛眼曼陀羅前安天台善導兩像後度聖經供養千僧薦於慈鎮和尚千日忌辰矣諸堂繼建爲淨教地晚開白川歡喜寺後嵯峨帝屢召禁裏受戒問法以歡喜寺陞于官寺賜江之小野莊以資厨給空又攝之武庫河建淨橋寺構四面堂安置彌陀觀音勢至像造十三級寶塔收佛舍利度沿海民大相國道家藤公法性寺內構遣迎院便

和漢高僧傳

卷中

五十一

無能齋藏版

于空之化導嘉祜四年秋空率徒於攝之天王寺聖靈院修專念法四衆塞門寶治元年在遣迎院初冬染病二十三日拔僧伽梨夜分衆衆說觀經要可嘖指授二十五日謂門人曰吾尋常作化他門今日直示自利相乃具威儀結定印坐二十六日晨朝與衆同音誦彌陀經至六方段衆慮病倦隔越北方一段故移下章空勵聲曰北方世界雖瀕死間矩護不弛誦訖爲衆說六念法午時齋了對彌陀像燒香稽顙向西端坐持百八珠唱念佛號九十餘遍指過殘珠至母珠所合掌而寂世齡七十有一法臘五十有八緇白聞訃嗚咽反袂門弟相議葬全身於良峰三鈇寺築塔號華臺焉空二殿之餘檀輿特廣其於畿內

開寺四所。建寶塔二。皆極輪奐。置常行念佛所。納燈油田。和州禪林寺。攝州大王寺。信州善光寺。聖靈院是也。又五部大乘經。天台疏鈔。皆印鏤。置諸寺。其述作有觀經秘訣集二十卷。曼陀羅註記十卷。選擇密要訣四十八願鈔等。受法弟子證入證慧隆信。爲上首。有十餘人。（本朝高僧傳卷十四）

和漢高僧傳

卷中

五十二

無能齋藏版

和漢高僧傳卷中終

和漢高僧傳卷上正誤

五一 行左 遠ハ 述ハ下之ニ
八二 行右 符ハ 符
七四 行右 候ハ 候ハ下之ニ
五四 行左 折達性論ハ 折達性論ハ
同 行左 顯夷夏論ハ 顯夷夏論ハ
七四 行 延ハ 延
二五 行右 一出ハ 一出ハ
同 行左 阿勞ハ 阿勞ハ
三三 行左 惠ハ 惠ハ下之ニ
四六 行右 須耶利ハ 須耶利

七六 行左 小品金剛般若ハ 小品金剛般若ハ
八四 行 釋成實ハ 釋成實ハ
一七 行左 解ハ 解ハ
一九 行左 雜阿毘曇經ハ 雜阿毘曇經ハ
四一 行左 阿毘曇經ハ 阿毘曇經ハ
八二 行右 寶ハ 寶ハ
十三 行右 龍樹後ノ下
七三 行右 又撰安樂集兩卷ノ七字ヲ脱ス
四十五 行右 十二年ハ 十二月
五十六 行右 寶ハ 寶

和漢高僧傳

卷中

無能齋藏版

八十八 行左 入ハ 入
八十二 行左 綱ハ 綱
四十七 行左 綱ハ 綱
九四 行 胖周兜覽ハ 胖周兜覽ハ
八十八 行 瑜珈ハ 瑜珈ハ下之ニ
九十八 行 齋ハ 齋
二十九 行左 齋ハ 齋
四十一 行右 威ハ 威
六十三 行右 埤ハ 埤
十四 行左 快ハ 快

四十二 行左 永隆ハ 景雲
六四 行 南海寄歸傳內法傳ハ 南海寄歸傳內法傳ハ
五十一 行 虛空藏求聞持法ハ 虛空藏求聞持法ハ
七十六 行 寂照ハ 寂照
四十七 行 檀ハ 檀
八四 行 樓ハ 樓
九十五 行左 卒ハ 卒
五十一 行右 壺ハ 壺
四十二 行右 烏茶ハ 烏茶

和漢高僧傳卷下目次

道元	永平寺開基	親鸞	興宗開祖
辨圓	東福寺開基	日蓮	日蓮宗開祖
祖元	圓覺寺開基	睿尊	興正
普門	南禪寺開基	凝然	
紹瑾	總持寺開基	妙超	大德寺開基
師鍊	虎關	疎石	天龍寺開基
慧立	妙心寺開基	宗純	一休
眞盛	眞盛派開祖	明忍	
秣宏	雲棲	天海	南光坊

和漢高僧傳

卷下

無能齋藏版

宗彭	澤庵	知旭	藕益
元政		隆琦	隱元
道光	鐵眼	慈山	妙立
契冲		忍澈	
光謙	靈空	慧鶴	白隱
普寂		飲光	慈雲
癡空	慧澄		

計三十一人

和漢高僧傳卷下

織田得能編

○道元傳

釋道元。平安城人。源亞相通忠之子。四歲讀李嶠百詠。七歲習毛詩左傳。粗通大義。人以爲奇童。八歲喪母。哀毀過禮。因志于沙門。讀俱舍論。人間其條目。辯答如流。丞相基房藤公見其英敏。乞以爲子。志願所熏。深嫌世爵。年至舞勺。潛上睿山。投外舅良顯大德顯詢志故。元曰。母臨亡。欲我出家。遵遺命而來。丞相愛惜。誓而不聽。翌歲拜座主公圓僧正。落弁染衣。即登壇受。善

和漢高僧傳

卷下

無能齋藏版

薩戒。稽止五載。台宗教述善究。圓義聞三井公胤僧正審于觀心。往問法身自性之旨。胤曰。雖我傳家法。事涉義路。若欲質其理。問於佛心宗。元公其言直抵建仁。參明菴西公菴見其法器殷勤提獎。遂更衣參侍。菴遷化後。依明全禪師。歷六寒暑。因閱大藏經。貞應二年。隨全公入宋。達明州界。當寧宗嘉定十六年。直登天童山。時無際派公據主位。謁見器重。辭。隨徑山禮。浙翁瑛公。問答機語不契。去遊諸刹。謁一時名匠。明年甲申。將理歸帆。有一禪者勸參見天童長翁淨和尚。元乃策錫再登太白。翁相看欣然曰。疇昔夜夢悟本大師至。你是再來人也。他日當大弘吾宗。即許參堂。一日翁巡堂。瞰僧坐睡。呵曰。夫坐禪者爲脫

落身心也。祇管打睡。堪作什麼。元在傍聞之。豁然大悟。明晨詣室。熏香禮拜。翁便印證焉。隨侍四載。悉得其秘訣。辭長翁。翁付僧伽梨并自頂相。屬之曰。你旋本邦。隱深山。遠陋勿近。國王大臣。元拜禮而出。以寶慶丁亥年。駕商舶。洋中波濤平。着太宰府。本朝安貞元年也。乃入京城。寓止建仁。士庶聞風。拜謁。天福癸己春。弘誓院正覺尼相地。於城南深草縣。營構精藍。名興聖寶林寺。請元爲第一世。嘉祿二年。開堂演法。懷中辦香。爲長翁和尚。拈出參玄之徒。歸趣如市。其叢規典型。一則太白。寬元甲辰雲州太守波多野義重。慕其道價。創精藍於越前志比號吉祥山永平寺。敦請元爲開山始祖。其清規復如興聖。四來包笠。常

和漢高僧傳

卷下

無能齋藏版

盈萬指。寶治元年。副元帥平時賴聘請。元於鎌倉受菩薩戒。執弟子禮。陪臣士庶受戒者不知幾千人。平時欲別建精藍。以駐錫。元不就。歸北越。平時欲割莊田以納於永平。元又不受。後嵯峨上皇聞元道化。賜紫方袍并禪師號。元再三固辭。皇詔不許。不獲已而受。上偈謝恩。卒不搭肩。建長五年。示微疾。京城親族遣使迎之。中秋初五。命駕入京。館于西洞院。上皇勅國醫診脈。僧俗拜瞻。朝昏填門。元酬對如平時。二十八日夜。澡沐易衣。書偈辭衆。端坐而化。世齡五十有四。法臘四十有一。華夷聞訃。無不嘆吁。門人等移龕於興聖寺。茶毘得舍利羅無數。上足井公奉靈骨歸於越前。收于永平寺。北隅。元平日不披彩衣。只用緇

服。遺誠俾不設牌位。其道義之興。概乎可觀焉。嗣法高弟孤雲懷井。平生著述有正法眼藏若干卷。永平清規。學道用心集等。又廣錄十卷。寒巖尹持入宋瑞巖。無外遠。靈隱退耕寧徑山。虛堂愚諸老爲之序跋焉。（本朝高僧傳卷十九）明治十三年。今上天皇賜諡承陽大師。

○親鸞傳

釋親鸞一名善信。姓藤原。爲日野族。雖足十八世之孫也。父有範。任皇太后宮大進。母某氏。或傳源氏對馬守義親女。承安三年四月朔日生。幼孤。伯父範綱子養之。仲父宗業授儒學。年甫九歲入青蓮院慈圓室。得度。法名範宴。稱少納言。登壇受戒。既

和漢高僧傳

卷下

無能齋藏版

而達天台玄旨。兼通諸宗之義。嘗自謂如是之理。不適時機。當求適時之法。以與衆共解脫也。遂往吉水。謁源空。親受淨教。一聞卽領。更名綽空。實建仁元年春三月也。時年二十九。從是常侍。函丈勤學。弗懈。源空亦器之。慈育最篤。先是。關白九條兼實深歸源空。執弟子禮。一日聽法之餘。問念佛往生。緣素有差否。源空對曰。經言十方衆生。釋言一切善惡。凡夫得生。何差之有。兼實曰。果然則請得門下一高德。俾混迹於世塵。以備士女往生之範。源空乃命綽空應之。固辭不聽。於是兼實妻以季女。元久二年三月。源空屬選擇本願念佛集於綽空。後改名善信。信行兩座之試。安心一異之辨。莫不得師之髓者矣。承元元年二

月。叡山南都僧徒。誣奏源空師弟於朝廷。乃謫源空於土佐。以善信爲其高弟。賜以罪名。配越後國府。善信喜曰。自非坐師有此行則何得化邊鄙群氓。此亦吾師之恩庇也。乃謂己身非僧。非俗。故以禿字爲姓。居五年遭赦。時善信作謝表。自署禿某。君臣嘉之。遂自稱愚禿。又更名曰親鸞。自是親鸞之名高乎天下。或傳建曆二年春歸京。謝恩。是歲創建興正寺於山科。而以志在教化。不敢住京。飛錫東北諸國。幾三十年。隨緣掛錫。或一二年。或五七年。其寓常陸稻田最久。元仁元年在稻田著顯淨土真實教行證文類六卷。開眞宗弟子大進嘉祿元年創寺於下野高田。後堀河天皇勅賜號專修寺。貞永元年親鸞年六十將

和漢高僧傳

卷下

四

無能齋藏版

歸故鄉而至相摸。駐錫有年。嘗應北條泰時請。校新寫大藏經。鸞行施法化。遍歷海道諸國。嘉祿元年四月創寺於近江木部。四條天皇賜寺額曰天神護法錦織之寺。既而歸京。寓居諸處。遠近新舊門徒慕德翕集。乃親說法要。且解疑端。弘長二年十一月二十八日歿。年九十歲。某日門人奉靈龕茶毗於東山西麓延仁寺。藏遺骨於大谷。親鸞智解高遠。名聞朝廷。望重一時。而性恭遜。葆光潛德。容貌如愚。袈裟與衣唯縞是服。混迹俗塵。專爲教導。雖善唱導。不欲赴他請。又不好興土木。嘗語門弟子曰。眞宗道場少高。其棟宇以與比屋異。其撰是可也。然遺訓曰。盛門侶如雲。列刹之富甲諸宗。焉所著漢文四部。和文五部。法

語數十篇。並傳于世。弟子性信眞佛。顯智源海等。各助其化。有四男三女。而季彌女。削髮曰覺信。專有創建祖廟之志。文永九年冬。遂移大谷墳臺於吉水之北。設堂宇以安肖像。龜山天皇賜久遠實成阿彌陀本願寺號。以爲勅願所。明治九年十一月二十八日。今上天皇詔諡見眞大師。(大谷略詳)

○辨圓傳

釋辨圓字圓爾。俗姓平氏。駿州葦科人。建仁二年十月望日誕。三歲聞人言語。能辨是非。方五歲。母攜付久野山堯辨師。稍長學台教。早通大義。十五。厠止觀講席。十八剪髮於圓城寺。登東大寺戒壇。入洛聽外學。又歸三井綜錯教乘。慕禪法。乘往上州。

和漢高僧傳

卷下

五

無能齋藏版

從釋圓朝公于長樂。問教外之旨。稽叩久矣。突得禪門大戒。兼浴瑜伽三部灌頂。抵相州壽福寺。謁行勇禪師。爾在壽福。閱大藏四更涼燠。歸長樂。嘉祿元年浮海達明州界。即理宗皇帝端平二年也。寓景福院。聽月宗主談律。入天童山。見癡絕冲公。漸抵都下。謁天竺寺柏庭月公。質性具旨。月公優稱授。自撰楞嚴楞伽圓覺金剛疏鈔并台宗相承之圖。又參笑翁堪於淨慈。謁石田薰公於靈隱。皆退耕寧司。知賓指爾見徑山無準範和尚。範公一而器許。尋侍巾瓶。親熏參詳。遂了大事。仲夏發四明。孟秋着博多。本朝仁治二年也。大宰府湛慧就橫嶽山。瓶營精藍。即日迎請。爾乃名崇福。開堂說法。壬寅秋。宋人謝國明建承天寺。

於博多。延爾而主。寬元癸卯。敕陞承天崇福二寺爲官寺。四方學賓駢田來萃。藤相國道家。嘗聞其名。發使聘請。領于光明峰。終日問道。恨相見之晚。就受禪門大戒。尋稟密灌。因任僧正。爾辭不受。復和。日本國總講師。爾又辭。重親書聖一和尚四字授之。擬唐代宗賜徑山法欽于國一也。先是藤公洛之東南構大伽藍名東福寺。將爲八宗衆國禱。國家安寧。暨聞爾道。延請爲開山始祖。令其三子執弟子禮。文武百官拜禮相繼。四年丙午。藤公以東福洪營晚成。建普門寺。延爾假居。藤丞相兼經。屈爾請宗鏡錄。性相碩師。如圓憲真空守真理圓等列座。預聞。輩下以爲勝會。建長甲寅。往相州館。龜谷平元帥時賴請府內稟。禮

和漢高僧傳

卷下

六

無能齋藏版

戒帥問法要。頗有省。卽受袈裟。誓曰。願爲法之外護。翌載回京。乙卯六月。東福落慶。構營冠于都下。實經藤公請。爾入寺。正嘉丁巳。後嵯峨上皇召爾於龜山宮。受大乘戒。留宮七日。敷宣禪要。上皇大悅。手賜御扇。普諫議爲長。爲時儒宗常壓。釋氏一日偶會莊嚴藏院。藤丞相曰。兩雄相遇。願決儒釋論。爾曰。承聞。昔公從事儒術。是不諫議曰。然。爾曰。我法中佛佛授手。祖祖相傳。不因師授。則爲虛設。某甲自世尊五十五世達磨以降。二十七葉。強弩窮矢。雖不穿魯縞。猶以系授。稱釋氏以釋例。儒亦當如此。不知公於孔子得幾世乎。諫議箝口而退。弘安三年春。示疾。夏移常樂菴。十月十六日夜。書遺偈而化。座全身於常樂菴。爾

器量宏遠。性好諧調。雖沙彌童行。輒語爾汝。暨乘槎拂觚稜難近。室中學理。致機關向上三科。以接學者。究八宗奧義。而智辯無礙。性相講者來問。禪要先詰其所蘊。彼早箝口。爾曰。子未委教乘。豈堪問別傳乎。故自教歸禪者多有語錄盛行于世。正和初。敕賜國師徽號。本朝國師自爾始也。(本朝高僧傳卷二十)

○日蓮傳

釋日蓮。姓藤原。大織冠鎌足公之裔也。曾祖政直。食邑遠州貫名。因而氏焉。父重忠。嘗有事謫于房州。娶清原氏貞應元年二月十六日。誕於長狹郡小湊。十二登郡之清澄寺。從法印道善稟密乘。聰穎絕倫。耳目所觸。長記弗忘。十六歲薙髮。名蓮長。字

和漢高僧傳

卷下

七

無能齋藏版

是生。後革今名。廿一歲登于叡岳。住東塔。回頓房。兼監橫川淨光院。一廬蕭然。閱覽三藏。深達台宗之玄祕。廣涉諸宗之法義。一旦奮然謂衆曰。從慈覺以來。法水混淆。丕戾山祖之真軌。可太息也。我雖不肖。冀一洗之。因衆不懌。會臨濟。回爾曹洞。道元自宋歸。唱宗都下。蓮往問其道。廿五往泉涌寺。謁宋道隆。既學于三井寺。廿七歷遊南都高野。各扣其祕。三十寓京師。一書肆就儒士問外典。又謁藤爲家。稟和歌之祕。又遊學東寺。聲探祕帙。卅一還于叡山。竊謂諸宗之祖。孰小廢實。徒弟相踵。迷而不返。陷溺四衆。唯有天台傳教。吾無間然。雖然。祇是迹化迹門。以投像法。機緣若其末法。弘潤世尊別命。本化其法。乃是本門事。

觀當。擬揚權迹，而播種實本。吾雖無似，應往開一化，以驗本化之利劍矣。建長五年春，歸鄉省親，師親更構一室，寺傍。四月廿二日，入于三昧。廿八日早起，三昧趨登山嶺，仰赫々旭日，高唱經王首題。蓋十遍許，我宗之興權輿于此。自此品藻諸宗，建四箇格言，視聽之徒且駭，且怒。遂卜居於名越松葉谷，恢張別頭之教。七年著註法華經。正嘉二年春二月，父妙日居士卒。連聞訃，悲慟絕漿，三日漸而往房州修喪，一百日且慰母，竭志滯錫中撰一代大意鈔，薦先考冥福。正元元年，至駿州岩本，更閱大藏，是歲著守護國家論。文應元年，著立正安國論。七月十六日，呈之前執權北條時賴。宿谷光則爲之介矣。時賴斥之，文永四

和漢高僧傳

卷下

八

無能齋藏版

年八月，母清原氏逝，連哀毀殊甚。躬自葬，欽築墳立石。今之妙蓮寺是也。八年秋九月，官議之曰：日蓮托事佛法，惑亂國家，辜當大辟矣。執權時宗命平賴綱捕連于松葉谷，拘之馬上，徇于四衢。既至龍口，上于刑場，有故遠赦之。謫于佐州。一宗法門多成於謫所。十一年春二月，時宗赦之。三月歸鎌倉，諸徒驩迎，遂遷于甲斐。卜居身延山，建治二年，池上宗仲來訪，見連，常膳粗糲，深感之。自後減膳茹粗，終身不改。三年講註法華經，特發文外之妙旨。日興筆記爲口訣二卷。弘安五年壬午，連六十一歲，秋偶感微疾，赴武州池上。十月十三日，澡浴淨衣，北首西面而臥。日昭鳴鐘，誦方便品，諸子和之。至四佛知見之句，安詳而寂。

法臘四十有六。六年二月，普告同門，結集遺文，所輯一百四十餘編，謂之錄內。後到者二百五十餘篇，謂之錄外。後十三年，法孫日像觀光于帝都，元應上皇賜宗號綸旨，又及曾孫大覺之興。文和上皇特賜大菩薩號，上距高祖滅度實七十年矣。(三傳略下)

○祖元傳

釋祖元，字子元，別號無學。宋國慶元府人，姓許氏，母陳氏。寶慶二年三月十八日生。至于試周之日，父母列儒釋墳籍及諸玩具，見兒自爲兒微笑，而取佛書，甫六七歲，就家塾，記聞應酬穎脫，群兒性沈重偉雄，雖兄弟婢妾不敢狎弄，食遺葷羶必避之。

和漢高僧傳

卷下

九

無能齋藏版

或見屠宰，切于已十三喪，父乃勵志投杭之南屏山，禮堂頭北磬簡，薙髮。當年受具，十四趨徑山，拜佛鑑。鑑一見許，參堂追于十七，誓不出雲堂，提撕狗子話。一夜四更聞首座寮板忽爾啓，蒙便作偈曰：一槌打破精靈窟，突出那吒鐵面皮。兩耳如聾口如啞，等閑觸着火星飛。呈于鑑，鑑更舉香嚴擊竹頌，徵之。元漉應對鑑遷化，下凌霄，謁月石溪，於靈隱，聞偈溪於玉几後旋，故里依大悲觀物初持淨二載。江湖高其操，偶謁井樓挹水，牽動轆轤，忽然得無礙機用，於是乎向佛鑑所示狗子無佛性話及香嚴擊竹頌，又無餘蘊矣。始識得佛鑑妙手之深密。時年三十六。翌年，里人萍鄉宰羅季莊以東湖白雲菴延元，元編蒲而居。

經七歲母亡歸靈隱寧退耕席下居第二座大傳買似道聞元道譽荷于台之真如開堂演法焚香酬佛盤之法乳居七歲北虜兵戈系擾寺刹乃潛過溫之鴈蕩丙子之歲兵壓溫境舉衆逃竄元獨兀坐堂裏虜酋將加入頸元不動述一偈曰乾坤無地卓孤筇喜得人空法亦空珍重大元三尺劍電光影裏斬春風群虜感悔作禮而去明年復四明天童一環溪請歸第一座己卯之年吾建長虛席副元帥平時宗具疏幣航海聘名宿明牧以元充還招五月離太白六月著太宰府乃弘安二年也八月到相陽平帥執弟子禮邀入福山待遇日渥五年冬回覺寺成命元爲開山第一祖開堂之日群鹿隨筵元爲吉徵即名山

和漢高僧傳

卷下

無能齋藏版

以瑞鹿九年八月示疾九月三日親書遺書別太守及諸方亡慮數通晚以偈示衆曰諸佛凡夫同是幻若求實相眼中埃老僧舍利包天地莫向空山撥冷灰亥時更衣端坐而逝年六十一臘四十九元貌俊麗顧盼可法平居不卸衣又一被上綴伽梨供夜分其精進類此諡佛光禪師(元亨八年)

○睿尊傳

釋睿尊字思圓和州添上郡箕田縣人父源氏母藤氏以建仁元年生沈靜不競七歲喪母志在出塵十一師事醍醐睿賢大德神機聰敏聞一達十思惟人身難得正法難遭此金口誨言而今我得之當如說修行利濟衆生不知可依何宗詣清瀧社

乞神指教夢神女麗服靚粧持饌與食曰往金剛院沐浴修習宿自原曰金剛是瑜伽沐浴是灌頂吾須歸密宗乃往西谷謁慧操操曰眞言教者轉凡成聖之妙藥也子捨此佗求乎尊因傾心就學善提心論悉曇字義俱舍等十七從同寺圓明阿闍梨剃髮受業稟十八契印兩部大法及護摩祕軌尊尚不憚元仁初年春登高野山日詣奧院所求冥助至第六日偶逢信慧阿闍梨於丹生神前慧醍醐一海僧正之高弟精于密乘與語大喜請約師資隨侍醍醐長岡之間安貞初元受具支灌頂凡密乘所有章疏祕聖三論唯識博通洞曉慧常勸獎曰大法器也能自當愛一日嘆曰縱定慧該貫戒法不淨諸善功德不能

和漢高僧傳

卷下

無能齋藏版

增長雖綜顯密戒修未備往東大寺從覺盛覺證圓曉學南山宗質問律鈔乃知大比丘戒衆緣會聚作業方成今乏師承常語痛之嘉禎二年秋歲三十有六與覺盛圓曉有嚴依瑜伽大乘論自誓受戒四律五論三大五部一一研究解其條貫後還西大寺講戒疏行布薩律苑清典學賓挹風弘安二年後深草上皇名講梵網經留宮七日就受十重禁戒龜山上皇聽梵網古迹受菩薩大戒公卿已下同受戒者五十九人尊上三衣上皇令尊獻大藏經於伊勢太神宮三年三月尊詣神廟納藏經開法會四年夏六月蒙古窺覲我國以船六萬卒十萬屯五龍山後宇多帝廷議羣臣僉曰非佛法力決不可伏於是擇南北

京僧五百六十餘員降伏蒙古。尊亦上選。七月朔日就于城州男山八幡宮前集衆。說戒開仁王會。修愛染法。此夜西海神風相擊。賊船覆碎。蒙古盡。帝召尊。敬崇。賜脫甚多。受菩薩戒。執弟子禮。尊又奉旨。慶讚大藏經於石清水。帝率群臣臨幸法會。七年夏四月。以尊踰八旬。敕聽乘輿入禁內。招提寺大悲之後。結界道場多廢頽矣。尊營興之。尊晚逢由良法燈國師。探直指之旨。知有別傳事。建且過於戒壇院前。備雲水之設。正應三年八月之初。示老病。召諸弟子。殷勤遺誡。結印誦咒。寂然而化。其月二十五日也。世齡九十。法臘五十四。茶毘藏靈骨於西大東北。勝曰。法身體性。其述作有三十餘卷。梵網古迹文集十卷。表

和漢高僧傳

卷下

十二

無能齋藏版

無表章文集三卷等也。正安二年後伏見帝敕。謚興正菩薩。(初本)

高僧傳卷五十九

○普門傳

釋普門。號無闕。信州保科人。世次源姓。母某氏。處胎十二月而生。口具雙齒。目有重瞳。耳長帶重輪。甫七歲。母携往越後。附伯父正圓寺。寂圓法師爲驅鳥。十三祝髮。染指釋典。十九從長樂釋圓朝公。稟菩薩大戒。習顯密二教。聞聖一國師旺化。京師特往。參謁機鋒契合。依止五載。日入玄奧。旋越之華報寺。寺主本智法師。欣然讓席。革教爲禪。居五禪。幻成叢社。忽歎曰。丈夫當翱翔於大方。豈可粘著於蜩殼哉。遂杖錫入宋。抵會稽。參荊叟

珏禪師。繼登淨慈。見斷橋倫和尚。橋一見器許。參請得徹證。景定二年夏。橋將入寂。以袈裟自贊頂相。付門表信印。門周旋兩浙。十有二載。乘鄉船而歸。省侍國師。乃命分座說法。回越住安樂寺。尋移正圓寺。北越大麻風。弘安三年冬。聞國師不安。上京省養。國師遷化。衆議令門繼席。門去往攝州。居光雲寺。包笠請益者衆矣。辛巳秋。東山照公退。慧日大丞相實經藤公請門補席。爐中瓣香。酬國師法恩。隨衆十餘載。內外清肅。正應間。龜山上皇在龍山離宮。妖怪荐作。妃嬪股嬙屢遭魅惑。上皇大惡之。乃集群臣議其事。僉曰。此地妖怪聞之久矣。非佛法力決不可治。於是命南北高德百計無効。時西大寺睿尊律師有戒行。譽

和漢高僧傳

卷下

十三

無能齋藏版

救樓宮闈。尊率沙門二十員。晝夜振鈴誦咒。至三閱月。而妖怪尙驕。投飛礫於護摩壇。尊不辭而退。群臣奏門德望乃召宣詔曰。卿能居乎。門奏曰。妖不勝德。世書尙有之。況釋氏乎。釋子居之何怪。之有上皇壯其言。敕有司。俾門入宮。門但與衆安居禪坐。更無他事。自爾宮怪永息。上皇大悅。乃傾心宗門。執弟子禮。習坐禪。受衣鉢。因革宮爲寺。雖梵制未備。特敕門爲開山始祖。後來伽藍具體。號太平興國南禪寺。一條大丞相家經藤公。北山大相國實藤公。一時名卿皆申弟子禮。正應四年冬。門臥病于東福丈室。上皇幸臨慰問。諸醫皆言者回不作。上皇私念宮怪鎮伏。是禪家尋常事也。我見寂述定門德業。十二月十

二日。上皇復幸寢室。綺紈與壞衲相交。上皇乞遺偈。親研墨泚毫。門欽頂接。即書曰。來無所住。去無方所。畢竟如何。喝不離當處。置筆而化。世齡八十。法臘六十二。火浴收遺骨。塔於慧日之龍吟峰。上皇益固心。禪門。明年賜御製贊曰。叢林老作人天眼。電卷星馳。追也難。三尺竹篋三尺鐵。未曾動著逼人寒。嘉元間。敕諡佛心禪師。元亨三年。加賜大明國師。(本朝高僧傳卷二十二)

○凝然傳

釋凝然。號示觀。豫州高橋郡人。仁治元年春三月。生于藤氏。天機聰明。如有宿契。僅在孩提。樂聞佛教。人授句文。憶記能誦。年至志學。投戒壇院。入圓照室。剃髮慕業。照察其俊秀。鄭重誘獎。

和漢高僧傳

卷下

十四

無能齋藏版

暨歲弱冠。得三聚戒。遊證立淨因之講席。擇問律鈔。受密灌。於聖守。稟華嚴於宗性。既而三論法相之立致。細釋研貫。韞匠丹府。又遊京城。參佛心宗。旁通孔老百氏之道。歸侍照公。正元初。至文永季。凡十有年間。照每講經疏。使然覆講。碩學通方。驤其瀟瓶。雖括諸宗。華嚴命家。弘安初。開講大佛殿。七寺龍象。執卷唇。而然振大辯才。舌翻法界。道俗喜逢甘露之會。照公之後。住戒壇院。講經說戒。四序無輟。正應四年。講敷大經。於和之金剛山寺。四衆雲集。正和二年。移招提寺。緇白復集。爲禪兩番乘等。授別受戒。住職五年。回戒壇院。然管寺院。一十八所。寄懷著述。卷帙充棟。後字多上皇。巡幸南都。登授戒堂。就然受菩薩戒。其

後召宮講。五教章。賜國師號。元亨元年九月五日。唱滅於戒壇院。塋於鷲尾山。報齡八十二。僧臘六十三。皇情震悼。卿庶舉哀。然多才宏記。華嚴天台真言三論法相俱舍。成實律淨土。及國史神書。音樂科條。莫不該綜。悉有疏鈔。採立記洞幽鈔一百二十卷。五教章通路記五十二卷等。一代撰述。凡有一千一百餘卷。弟子十二人。挾律而宗。華嚴各化一方矣。(本朝高僧傳卷十六)

○紹瑾傳

釋紹瑾。號瑩山。俗姓藤氏。越前多禰郡人。母某氏。夢吞朝日。有孕。自此每日禮觀音像。三百三十拜。誦普門品。三十三卷。胎中爲奇男也。及生。顏貌異常。稍長。慕出世法。年甫十三。隨永平

和漢高僧傳

卷下

十五

無能齋藏版

孤雲笑公。剃髮稟戒。舉盾純如。志趣高邁。笑公曰。你有大人之度。他日當爲人天師。遂獎遷化。依大乘徹通介公。晝夜參究。脇不至。席食不甘。昧聞通舉。趙州平常心是道話。豁然契悟。通印曰。你向後當起洞上宗風。尋以寶鏡三昧三種。滲漏五位。顯訣等。一一究盡。無剩蘊矣。乾元初年。住大乘寺。大唱宗乘。四海龍象競集。會下。正和二年。同州滋野信直妻崇瑾。道義施洞谷山。藤氏家方建永谷寺。延瑾住持。賀州檀信建淨住寺。招瑾而主。能州櫛比縣有定賢律師。屢來問法。遂革教寺。請瑾爲開山始祖。未幾。檀顯雲集。堂宇周備。號曰總持寺。禪客憧憧。恢復祖風。元亨年中。後醍醐帝降十疑問。瑾奏答明詳。帝特賜綸綍。以總

持爲賜紫出世道場。正中二年八月初，屬微疾。至十五日夜半，召門人曰：「吾化緣已盡，泥洹時至。」沐浴，整衣，鳴鐘集衆，指示法要。門人請遺偈，便書曰：「自耕自種，閑田地幾度；賣來買去，新無限。靈苗繁茂處，法堂上見，揮鐵人拾筆而寂。」世齡五十八。法臘四十六。如法荼毘，得舍利若干粒，建塔於大乘永光淨住總持四處。扁曰：「傳燈。」著正法眼藏語一卷，清規二卷，坐禪用心記。嗣法弟子無涯洪，壺菴簡，明峯哲，峨山碩等。敕證佛慈禪師。（本朝高僧傳卷二十）

○妙超傳

釋妙超，號宗峰，族姓紀氏，播州揖西縣人。父母嘗禱書寫山觀

和漢高僧傳

卷下

十六

無能齋藏版

音大士，得吉夢而生。肌膚瑩潔，頂骨秀出，伏犀插額，目稜逼人。及七歲，見磨刀人，問曰：「不快利處，卻有快利子知之乎？」其人因測盤歎。十一，父母以有因緣，投圓教寺，付戒信律師。未幾，台宗奧秘悉納心府。暮達磨禪，馳求心切，謁高峰禪師。于萬壽，機語相契，遂易衣親附。偶聞僧讀百丈語，至「靈光獨耀，迥脫根塵，體露真常，不拘文字」，驚然有省。峰乃肯可。嘉元乙巳秋，大應國師奉詔來，自筑紫館于洛之輦光菴。超徑至，請問。應受萬壽講，超隨參仕。應令看雲門關字。超屢下語，應不許，曰：「汝能著精彩，他時別須有生涯。」超憤悶精究，德治丁未，應住相之建長。超又隨侍，未經旬日，當案上放在鑰鎖，忽然大悟。滿背汗流，急趨方丈。

抗聲曰：「即今與和尚同趣。」應忻然，曰：「噲！昔夜夢雲門大師垂光，貴豈偶然哉？」超掩耳而出。翌日呈二偈，應便書其後，曰：「你既明投暗合，吾宗到你。」大興於世。但是二十年長養，然後使人知有。吾證明超時，年二十六矣。延慶戊申，應戢化，回都逸居。洛東雲居寺，衲侶數輩枯淡自強，垂二十年。嘉曆丙寅，抵城北紫野，構小院而居。輩下緇白參問者多，有法印玄慧者，博通內外。元亨宮論後，歸寓於超。屢來參禪，粗有造詣。因捨私宅爲建方丈，又有都人宗印者，素富家也，自爲化主，營諸堂宇，鬱成禪刹。扁曰：「龍寶山大德寺。」久參上士，摠衣歸會，榮冒高官，捧香挹風。超此冬開堂辦香供，大應花園上皇聞超道義，詔入宮。上皇著僧伽

和漢高僧傳

卷下

十七

無能齋藏版

梨對坐，玄談移時。皇情大悅，特賜與禪大燈國師之號。後醍醐帝恩寵益渥。超因進法語一篇，上亦賜偈，曰：「二十年來辛苦人，迎春不換舊風烟。著衣喫飯恁麼去，大地那曾有一塵。」又加賜高照正燈國師并資繖帛，重敕舉大德寺，相並南禪上刹。爲祝聖道場，仍給莊田若干畝，以充香積。建武四年冬，示疾。至臘月二十一夜，遺誠諸弟子曰：「我滅後火化，置骨石於丈室，勿別造塔。」翌日午時，書遺偈而逝。世齡五十六。法臘三十四。超氣宇如王，蔑視諸方，自非龍蟠鳳逸之士，難爲湊泊。嗣法者十有五人。有語錄若干卷，夜話記一卷，盛行于世。貞亨三年，聖旨加證，大慈雲匡眞國師。（本朝高僧傳卷二十五）

○師鍊傳

釋師鍊號虎關俗譜藤姓平安城人父左金吾校尉母源氏俱有賢行事佛甚謹產三子鍊其季子也生于弘安元年四月既望穎悟出群幼好讀書日記千言號文殊童子而性多病母慮成勞奪卷深藏搜索讀之八歲依寶覺和尚於三聖寺覺一見喜曰是誠千里駒也十歲祝髮稟具于睿山戒壇歸侍寶覺覺不加策勵嘗曰北溟之物聽其自化鵬耳鍊知明教嵩公參禪超悟之外兼有禦侮之才心竊慕焉覺見其志趣指謂人曰與吾道者師鍊也所憾者吾老不及見焉既至遊方依規菴圓公於南禪參桃溪悟公於圓覺踰年歸洛謁名緇碩儒竭其奧義

和漢高僧傳

卷下

十八

無能齋藏版

又參無隱一山約翁是皆命世宗師不輕許人咸以傑出憚之年二十餘三藏聖教諸家語錄及九流百家本朝神書軍寵漁獵靡不記誦嘗謂今時此方庸流奔波入宋是偏遺國之恥也我其南遊令彼知國有人正安元年將浮海母氏強止之又遍歷東西者二十年名聲轟於天下正和二年寓居城西嵯峨後伏見帝詔館鍊於河東歡喜光院展問法要明年梅坡道人就白河側瓶濟北菴招之鍊掩室謝事專以著述爲務嘉曆元年出世三聖懷中辦香燕向寶覺諸方豪傑之士競來問道正慶元年勢州西明寺衆僧革教利請鍊住持扁曰神贊安衆萬指後醍醐帝升爲官寺秋九月丞相藤公聘請住東福明年帝召

問法未幾歸三聖鍊住三聖及東福兩回共有家法曆應二年光明帝下詔與南禪四年辛巳解南禪印居海藏院在東福康永元年後村上帝崇其道價賜國師號貞和元年大將軍尊氏源公具書幣聘補建長辭以老病鍊久患臂疾一日剃浴跌坐與衆永訣衆涕泣乞偈鍊命侍僧書泊然而逝實貞和二年七月二十四日也世齡六十九法臘六十鍊性健而順溫而嚴對人寡言若語及支那扶桑之先言往行則便便終日嘗曰余正和已前以書質心正和已後以心質心所著元亨釋書佛語心論等又文集二十卷名濟北集共盛行于世（本朝高僧傳卷二十七）

○疎石傳

和漢高僧傳

卷下

十九

無能齋藏版

釋疎石號夢窓勢州源姓子字多天皇九世裔孫也四歲喪母出家依甲州平鹽山空阿法師試授羣書一覽輒記翼載誦法華以報先妣自圖死屍九相之變掛壁觀想了知色身如空華十八祝髮初名智曜抵南都戒壇院禮示觀律師受滿分戒尋負笈學顯密二教久之歎曰佛法非義學所詣焉深慕教外之旨一昔夢遊支那疎山石頭二刹有一龐眉僧持達磨像授之曰你善奉持已寤自謂吾於禪宗有因緣因改今名上洛易衣依無隱範公于建仁兀坐椽下殆忘寢食明年往鎌倉參無及詮葦航然桃溪悟癡鈍性諸禪師皆以法器稱焉正安初一山和尚住建長舉石居擇木寮因詢尋諸家語錄曰增慧解一日

謁師請教不能得往萬壽參高峯和尚高峯所言尚不得其旨辭如常州白庭誅茅而居自誓曰若不得休歇不觀高峰一夕坐久起欲靠壁談喫頭仆豁然大悟亟往淨智呈高峰和尚峰大喜囑曰西來密意汝今已得善自護持辭回甲州省親檀越開淨居寺請居焉四方禪侶嚮風而集正中二年石歲五十一後醍醐帝召石詣宮帝御便殿特賜錦座說佛心宗所說契旨移刻不倦乃詔住于南禪石奏言臣僧志在煙霞不願出世帝曰朕以南禪請師者萬機之暇欲以問道耳石遂感睿信八月入寺開堂拈出瓣香供佛國之恩嘉曆元年解南禪之印開勢之善應寺元德元年權圓覺住持二年百廢皆舉元弘二年帝

和漢高僧傳

卷下

二十

無能齋藏版

已復辟敕相摸守源直義降官使召石秋七月詣闕謝恩帝特賜國師號建武元年再住南禪近臣勸帝欲廢禪宗者衆矣帝將試其行業冬十一月率百官入寺駐龍馭其夜三更帝親巡堂而見衆僧禪坐嚴肅早晨入僧堂見齋粥有序以爲禮樂備焉齋罷宣石上堂命四頭首秉拂帝嘉歎不輟絲是信齋益深賜腹田若干畝以贍香積石作偈謝恩三年春京師大亂因退南禪居臨川大將軍尊氏源公請石於幕府欽求示誨曆應己卯春攝州太守藤親秀革西方教寺爲禪刹厚禮延石秋八月後醍醐帝崩于南朝尊氏奉勅建天龍資聖禪寺薦帝冥福像設極麗請石爲住持康永元年夏光嚴上皇幸西芳寺稟衣孟

秋八月奉詔慶贊東山八坂塔貞和元年秋八月值先皇七周忌天龍寺慶讚特賜金襴衣紫袍太上皇上皇及光明帝師百官臨幸諸山英傑依位而立實法會壯觀也二年春令上足無極立公續其住職退靖雲居菴天皇召石入宮展師資之儀加正覺之號觀應元年春光明上皇及國母皇太后請石於內道場受衣鉢并法名二年八月示微疾九月朔告衆曰我世緣在近有疑者可問焉衆競入室請詢隨機開發兩太上皇幸寺問疾石欽謝恩爲說法晦日怡然而化世齡七十六法臘六十石性質溫雅自然感於物上自王公下至匹夫一接音容者無不鑽仰後醍醐帝以來賜七朝之師號有語錄五卷錢梓行於世

和漢高僧傳

卷下

二十一

無能齋藏版

矣明翰林學士宋文憲景濂述碑銘以旌其德焉（本朝高僧傳卷二十八）
○慧立傳
釋慧立號關山源姓信州高梨氏之子其先清和天皇之裔也器度高介抵巨福之廣嚴菴拜東傳啓和尚剪髮稟具沈默衆底無所點化適值開山大覺忌赴于西來菴問同列僧曰海內叢林誰稱活手僧曰洛之大燈國師殺人不眨眼因語其作用立聞忻然曰是真知識也即日束包直上大德方丈厲聲曰新到相看國師據位纔展炊巾便問如何是宗門向上事峰曰關立拂袖便出峰曰作家禪客天然有在從乞掛搭峰令侍者曰若要掛搭先須持紹介來立曰夫善知識者具金剛正眼才跨

門見微學人心肝說什麼紹介峰許參堂玄頓機俊發一夕無端衝破關字直到丈室告其所悟峰拊手曰你再來之人也前宵吾夢雲門大師至故示關字而今透徹如此宜號關山親炙左右唱酬契機後醍醐帝詔峰入內峰偶不安命玄赴詔帝大賞嘆玄去入濃之伊深山盤結艸菴沒迹鏐光延元二年峰示違和花園上皇遣中使宣曰和尚百年之後朕隨誰問法諸法嗣中得大機用人願承指教峰奏曰有關山者得吾骨髓天生風顛居無定處我滅後宣徵詢之中使回奏上皇重遣藤亞相曰朕將改花園離宮以成梵刹而請關山住持和尚預標峰進呈以正法山妙心禪寺之名上皇乃審厥象俾勿訪四方或曰

和漢高僧傳

卷下

二十二

無能齋藏版

在濃之山中其形惟肖天使入山具宣聖旨玄堅坐不起天使勸之曰國師哉化上皇失南鍼於霧海大法付托幸囑于師且有國師遺命安得自便乎玄幡然曰公之言然也徑入花園上皇大悅艸創妙心特降敕黃開堂住持上皇就丈室後別開玉鳳晨昏入室深造佛祖闔域焉玄不拘威儀禮典唯以向上一著接得四來非大機大用者不能窺其藩牆一日束裝頂笠告授翁曰我今行脚去矣相携到風水泉樹下立談出世頭末泊然而化屹如槁木遽報一衆扶奉全身窆于本山長岡樹塔勝以微笑實延文五年十二月十二日也享齡八十有四坐夏六十有四玄機字高僧因事世緣殿堂不雕道具不飾至霜藤作

袈裟環自巖樓礪茹以至爲王者歸敬始終如一室無剩物獨有兩朝宸奎一篋嗣其法者唯授翁一人耳敕證本有圓成佛心覺照國師後柏原帝陞抄心位相竝大德爲祝聖道場寶永丙戌東山天皇特降聖染旌加大定聖應之四字(本朝高僧傳卷二十九)

宗純傳

釋宗純字一休號狂雲子母藤氏南朝管纓之女爲後小松帝愛幸逮其有娠所譜后宮出產民間純僅六歲投安國豫外盤禪師爲童子聰慧絕倫剪削納具後學風騷於東山慕哲樊聽教乘於壬生清叟仁棄參謙翁爲於西金寺翁抄心無因因禪師高弟本色之衲僧也服膺高風執侍六年及翁捐世聞華叟

和漢高僧傳

卷下

二十二

無能齋藏版

曇和尚錯鎚嚴密抵謁江之堅田叟拒不容止宿漁舟或臥露地懇求旬日許相看會裡枯澹而純貧窶甚齋孟不潔借蓬支寒令究洞山三頓棒因緣一夕聞鶉鳴脫然領悟詰旦呈機叟曰此是阿羅漢境界非作家境界也純曰某只喜此境界不喜作家分上叟領授記復以微翁以降傳來印書付之蓋表授受不妄也純便擲地而出從是放曠漫遊靡有定處洛之尸陀攝之酬恩泉之慈濟松樓等其卓錫之地也後小松帝讓位之後召純入宮常問旨要寵遇甚厚後花園帝相繼崇信初稱光帝青宮未立睿心猶豫純密奏曰否天曆數正在彥仁時不可失帝喜曰朕儲定矣彥仁後花園帝也是以純承三帝之寵文明

六年春同門耆宿捧救黃來請視篆大德純作二偈謝恩自警終不住但賜鳳書紫袍耳七年在薪之虎丘門人作壽塔純陶曰慈楊作頌示衆十三年十月初示疾十一月二十一日就座書偈曰須彌南畔誰會我禪虛堂來也不直半錢眼目而化壽八十八門人昇全身座于慈楊之塔純憤當時不會祖意而濫主大法者尋常混跡不拘威儀巡行城邑聚落諷誘緇白吹尺八腰木劍賦偈頌詠和歌頗恣其言如風狂然侍華叟病手自雪穢又大德火後勸化四方建法堂慨龍翔寺頽廢勸募緣還復舊觀是豈狂也哉偏大信根之所作矣平生偈語門人編輯曰狂雲集盛行于世（本朝高僧傳卷四十二）

和漢高僧傳

卷下

二十四

無能齋藏版

○眞盛傳

釋眞盛紀氏之子貴之遠裔其母歸命地藏菩薩誓絕葷膾夢吞寶珠寤即身嘉吉三年生于勢陽壹志郡容貌端嚴稟性明拔七歲入郡之光明寺從盛源律師讀內外書典十四剃戒十六遊學厠尾州密藏院學眞言教去登睿山依西塔慧秀和尚二十四年不下山頂傳承兩部密灌三觀法門文明九年爲大乘會講師任權大僧都十四年秋退居黑谷青龍寺課彌陀號日六萬遍周看藏經夢傳教大師摩頂授往生要集曰欲度衆生無如此軸盛遂於坂本源生寺講說要集橫川衆僧招以西教寺盛乃入寺說戒念佛無有虛日四衆作市檀施輻湊堂閣

僧房四十餘所未至數稔鬱全備焉長亨二年洛之誓願寺主招盛一七日中說專念法大將軍義政源公入寺就盛受菩薩戒一家將種共受五戒十念是秋往信之善光寺還而留越前府一七日說淨教府內大廳建引接寺延德元年弘化勢州安野郡民構西來寺延請二年八月越前府主朝倉貞景招盛於安養寺受五戒十念弛關放囚其家臣上田氏造西光寺延盛供養又歸西教寺修不斷念佛明應元年帝召盛於清涼殿稟圓頓無作大戒尋上念佛旨要宸書傳戒國師眞盛上人八大字以賜之河州刺史畠山義就招盛聽法義就荒禽盛爲說罪即放犬鷹狝西蓮寺迎爲第一世四年正月在賀州西蓮寺四

和漢高僧傳

卷下

二十五

無能齋藏版

十八夜念佛說法二月晦日俄病法筵雲集力疾登座演宣眞要詞辯特鮮既歸寢室集門人曰我至黃昏必當取滅末後囑示一言蔽之寡欲清淨當勤念佛漸及期至同音念佛聲氣嘎盡只搔唇物顏含微笑安詳而寂香氣蒸岐瑞光照夜享年五十有三坐夏三十有九（本朝高僧傳卷十八）

○明忍傳

釋明忍初名以伯俊正其字也產于平安城中原氏世爲官族忍乃權大外記康綱九葉之孫也父諱康雄仕爲少內記母某氏有淑德忍生而穎異處群童中屹然如樨松超乎叢葭甫七齡父喜其聰慧命從高雄山晉海僧正俾習內外典伊吾上口

不煩師授。十一歲父喚回家。春三月擇吉初冠。任少內記。十六歲擢補少外記。右少史兩職。一日喟然嘆曰。此身不實。猶如芭蕉。寫官峻齋亦奚足羨乎。縱令才如卜商。亦不過地下修文郎。不若學浮屠法。永期出離焉。自是深厭世相。齷齪時時登臨高。雄問法於海公。公乃密門巨擘。德行高峻。公憫其有志于空門。教誨罔倦。至年二十一。決意出家。投海公。薙染髮受瑜伽法行。晨修夜勤。不敢少懈。至忘寢食。海公指而語人曰。此子吾家之精進幢也。忍復嘆曰。佛設三學。戒爲基本。基本不立。定慧何依。所恨此邦律幢久仆。無人扶起。吾儕忝廁緇倫。豈忍坐視乎。於是憤然奮志。辭海公赴南京。探古聖遺蹤。釋先賢勝軌。于時有

和漢高僧傳

卷下

二十六

無能齋藏版

僧寥海字慧雲者。本係法華宗之徒。自幼脫白。習解嶄然。尤精止觀。人咸稱觀行即慧雲。雲常視今世。飄浮居假。佛法而饕富貴者。不願與此輩頡頏。逡跡於丹波山中。採蕨充饑。編蒲爲業。清淨自活。積有年矣。一日飛錫於和陽。邂逅忍于三輪山下。一傾蓋際。恍若夙契。遂偕入西大寺。稟受尸羅。寺乃興正大士之舊道場也。大士戰化之後。屋霜寢久。僧風衰落。然尙有一二耆德能說止持作犯。忍與雲公側聆。席下而平生疑滯。雪融冰解矣。時三大部世未曾刊行。唯有宋刻古本。祕在名藍。忍往借出手自謄寫。以備檢閱。云。梅尾之右有山。號橫尾。峰巒環峙。泉石清幽。尤爲絕勝。曩弘法大師之上足智泉法師權輿之地也。海

僧正感忍之弘律之志。乃就其故址。葺茅爲廬。延忍棲焉。施者漸集。爲建佛殿。僧寮。淨厨等。蔚爲精藍。結界之法。一式舊制。四方學律之侶。慕風駢臻。時南京有高珍者。粹篇聚之學。忍招之。遞相講演。誘訓來蒙。人皆謂嘉禎之風再振。斯時矣。丙午歲。忍年三十一。精神方壯。愈勵扶宗之志。自思曰。吾已遂通受自誓之願。而未果。別受相承之望。是爲缺典。仄聞大唐三韓佛法現住。名師碩匠。代不乏人。吁。古人求法航海梯山。不憚艱辛。吾何人敢不躡武繼芳乎。於是孤錫翩然。直赴海西。初抵平戶。津次到對馬州。奈國禁森嚴。不許渡唐。然忍心弗息。留寓彼中。遂結字于豐滿岳。儻然居焉。饑則擊孟。丐食。寒則補破。蔽形。清者自

和漢高僧傳

卷下

二十七

無能齋藏版

守。惟道是務。里俗欽風。以爲真茲藝僧也。馬島在西北。渤溟中寒甚。因感疾。久而弗瘳。遂齋志而寂。時慶長十五年庚戌六月七日也。報齡三十有五。僧臘一十有五。忍於講律之暇。喜閱往生要集。可知其居恒繫念於淨域。奚啻梵行之芬芳也哉。昔大智照師有謂。生弘律範。死歸安養。前賢後賢。其揆一也。(明忍律師行業曲記)

○殊宏傳

釋殊宏字德慧。別號蓮池。志所歸也。古杭仁和縣人。俗姓沈氏。世爲著族。父諱德鑑。號明齋先生。宏生而穎異。十七歲爲諸生。嘖嘖有聲。德行文章俱極一時之選。然於名譽紛華。澹如也。其所以未拋鉛槧者。養親志耳。每書生死事大。四字於案頭。或長

坐不臥。夜以繼日。繇是同學少年業已知其非功名之士矣。居常太息曰。人命過隙耳。浮生幾何。吾三十不售。定超然長往矣。何終身事龔龔哉。前婦張氏生一子。殤。婦亦亡。即不欲娶。母強之。納湯氏。二十七歲。父喪。三十一歲。母亦喪。越明年。葬事既竣。拜之。墓所殊不勝其風木之悲。因大慟絕。而再甦。復自慶云。親恩罔極。此正吾報答之時也。何以拘世之服闋爲哉。意遂決。時繼室湯氏年甫十九。克全婦道。師弗顧也。瀕行。囑曰。從來恩愛不常。設大限到時。伊誰可代。汝自爲之計。吾從茲逝矣。湯亦洒然絕。無牽衣縈繻之態。對曰。君先往。吾徐行耳。宏出家從南五臺。性天理和尙。祝髮受具。戒進菩薩戒。後湯果踐前約。爲比

和漢高僧傳

卷下

二十八

無能齋藏版

丘尼宏。既得戒。徧訪名山。歷參智識。時辨融笑巖兩禪師。宗風並振。宏往詣入室。多所契合。六載崎嶇坎壈。行頭陀行。辛苦萬狀。履險如夷。隆慶五年。孤錫南還。愛雲棲山水幽勝。有終焉之志。居民相與踴躍建寺。遂成叢林。自此道大振。海內衲子歸心。宏悲末法教網滅裂。禪道不明。衆生業深垢重。以醍醐而貯穢器。且佛設三學。以化群生。戒爲基本。基本不立。定慧何依。思行利導。必固本根。第國制南北。戒壇久禁。不行。予即願振頹綱。亦敢違憲令。因令衆半月半月誦梵網戒經。及比丘諸戒品。繇是遠近皆歸。宏以精嚴律制爲第一行。著沙彌要畧。具戒便蒙梵網經疏發隱。以發明之初。宏發足操方。從參究念佛得力。至是

遂開淨土一門。普攝三根。極力主張。乃著彌陀疏鈔十萬餘言。融會事理。指歸唯心。又憶昔見高峯語錄。自來參究此事。最極精銳。無逾於此。師唯意併匡山永明。而一之。更錄古德機緣中喫緊語。編之曰。禪關策進。以示參究之訣。蓋顯禪淨雙修。不出一心。宏道風日播。海內賢豪。無論朝野。靡不歸心。聞名而感化者。慈聖皇太后崇重三寶。城內名僧。靡不延之。一日偶見宏放生文。甚嘉歎。遣內侍賁紫袈裟齋資。往供問法要。宏拜受。以偈答之。宏天性朴實。簡淡無緣飾。虛懷應物。容貌溫粹。若不勝衣。而守若嚴城。又生平惜福。嘗著三十二條。自警垂老。自浣濯。出溺器。亦不勞侍者。終身衣布素。他可知已。萬曆四十年六月杪。

和漢高僧傳

卷下

二十九

無能齋藏版

忽入城。別諸弟子及故舊曰。吾將他往。還山設茶。別衆。衆莫測。至七月朔。晚入堂曰。明日吾行矣。次夕入丈室。示微疾。瞑目坐。城中諸弟子畢至。復開目云。大衆老實念佛。莫捏怪。莫壞我規矩。向。西稱佛名。而逝。年八十一。僧臘五十。宏自卜寺左嶺下。遂塔全身於此。其所著述。除經疏。餘雜錄如竹窓三筆等。二十餘種。行於世。率皆警發語也。(靈樞錄大)

○天海傳

釋天海。三浦氏。與州會津人。其母無嗣。禱月天子。一昔夢吞奇花。而娠。經九月。誕。風度英發。幼惡葷腥。強哺則吐。父母異之年十一。投本邑辯書法印。得度。稟戒學。顯密教。抵宇都宮。謁皇舜

僧正。天文年中止。睿山從實全阿闍梨學。台教深入。闍奧受俱舍。於三井尊實權僧正。學法相三論。于南都。足利學校。聽孔老書。回鄉邑。參大寧禪德。受教外旨。又從長樂寺春寂。天寧寺善恕。參禪之暇。稟灌頂法。此三師榮朝之末裔。唱禪台密。曹洞老宿。問五位訣。睿山豪盛住甲之善昌寺。弘說台教。論衆三百。海膺講師。豎義雄壯。盛聞優論。傳付慧心的流。七個三重之奧旨。府主源晴信見其秀傑。加禮敬。天正初。門族輩名盛高。招以會津稻荷堂。及盛高移任常州。往住不動院。慶長己亥。住武州仙波喜多院。癸卯移下野。定光寺講說法華。東照源君命主比睿山南光坊。單丁一鉢。以送歲月。源君又令宗伯招至。駭府不起。

和漢高僧傳

卷下

三十

無能齋藏版

宗伯曰。源君方今傾心探諸宗旨。師得信誓。台教復振焉。海善其言。入於駭府。以鈞帖再住喜多院。爾後每謁。委說真理。源君隨喜。信敬日盛。遂池淨修。歸三觀門。深契妙旨。受海印授。十四年。睿山修法華大會。選爲探題。後陽成上皇召問法要。特降優旨。賜宸翰。改轉僧正。即住。輦下毘沙門堂。翌歲源君親爲規模。新喜多院。癸丑再營野之日光山。命海董之。元和元年。正親町上皇之御忌。禁殿設會。敕海爲導師。任大僧正。源君在日。有遺言於海。以故。薨日殯于久野山。歷一回忌。遷於日光山。三年八月。後陽成上皇崩。就洛北般舟院。廣修法事。海爲會首。九年癸亥。皇太后請海受戒。寬永元年。大將軍秀忠源公。關東睿山於

武城東北。與海住持。海又乞睿山之新營。金碧映湖。鐘磬傳谷。林道春謁。海謂之曰。汝效宋儒。屢斥佛道。特不知吾法廣大。上窮空界。下徹地輪。妄加謗毀。有理速言。春不能答。赧然而退。二十年秋七月。示微疾。衆欲禱海不聽。十月二日。盥漱端坐。觀想誦經。感文殊現。合掌而化。源公聞訃。七日清齋。公府賻給。幕士護送。葬於日光山。建影堂於日光東睿比睿三處。寄香燈田。海不語齡。以曆考之。一百三十餘歲。嘗參殘夢和尚。得頤神之道矣。慶安元年夏四月。賜諡慈眼大師。(本朝高僧傳卷五十六)

○宗彭傳

釋宗彭。號澤菴。但之出石邑人。三浦介平義明之後也。父能登。

和漢高僧傳

卷下

三十一

無能齋藏版

刺史秋庭綱典仕。山名家。彭十歲投郡寺。習淨業。及十五歲。入宗鏡寺。從希先西堂得度。學禪。先妙心龜年。愉之門人。歸寂之後。掛錫大德。請益春屋國師。又往泉之大安。侍真如文西仁。是時一凍和尚。居陽春及南宗。屢敲密室。遂作跨窻分座。大德前後住洛之德禪大仙泉之南宗。慶長己酉。出世大德。住山三日。擣鼓退席。豐臣秀賴公招之。不赴。越中刺史細川忠興。豐前治邑。瓶一精舍。三請不就。筑前刺史以宰府崇福招。亦卻聘。後陽成帝詔赴闕。辭免。乙卯之寇。南宗罹災。彭竭力鼎新。但之宗鏡亦火于兵。彭說郡主小出吉英。興瓦礫塲。新安開山大道。以禪師像。慶讚陞座。寺衆德彭掃室。延請彭去。不願隨緣。放曠。寬永

已已因事謫羽州。謫居四歲得宥而還。後水尾太上皇召仙闕問法。大稱皇情。恩賜有優。加以國師之號。先是大將軍家光源公相攸武之品川。創營東海巨刹。己卯春命彭住持爲開山祖。莊田若干。以寄香厨。彭受王公信。澹然自處。溫慈濟物。中無親疎。至論祖教。片言不讓。尊卑齊敬。見者歸慕。四品拾遺細川光尙肥後治內建抄解寺。但州刺史柳生宗矩和之采地。玆芳德寺。泉南土人谷氏宗印建祥雲寺。皆以彭擬爲第一代。彭謂人曰。諸方唱末後句。山僧杜口而去。仲冬老病。台府賜醫。日間劇安。臘月十一日衆頻乞偈。彭書夢字。拋毫坐化。世齡七十三。法臘五十七。豫誠徒曰。全身打疊可掩土去。營齋立牌安像掛眞。

和漢高僧傳

卷下

三十二

無能齋藏版

年譜誌狀一切禁之。門人遵命收寺之西北焉。(本朝高僧傳卷四十四)

○智旭傳

釋智旭字藕益。俗姓鍾。蘇州吳縣人。父岐仲持白衣大悲咒。十年以祈子。母金氏夢大士抱兒授之而生。萬曆二十七年五月三日也。七歲持長齋。十二歲就傳讀書。以聖學自任。作關佛論數十篇。復進酒肉。十七歲閱蓮池大師自知錄敘及竹窗隨筆。取論焚之。二十歲詮論語。至天下歸仁不能下筆。廢寢食。三晝夜有省。其年冬喪父。讀地藏本願經。發出世心。遂日誦佛名。盡焚所爲文。居三年聽一法師講首楞嚴經。至空生大覺忽疑。何故有此大覺。致爲空界。張本閱絕無措。以昏散頗重。功夫不能

相續。遂於佛像前發四十八願。決意出家。體究大事。天啓二年三夢慈師。時慈山在曹谿。不能往。從乃從慈山之徒雪嶺剃度。尋往雲棲聽古德法師講。唯識論疑與首楞嚴宗旨不合。請問古德云。性相二宗不許和會。心怪之曰。佛法豈有二邪。遂入徑山參禪。明年夏遍移功極。身心世界忽然消殞。從此性相二宗一時透徹。又明年受比丘菩薩戒。徧閱律藏。又二年母病篤。割股肉和藥以進。不能救。葬畢掩關於吳江。疾甚始一意求生淨土。疾少間結壇持往生淨土咒。七日居二年出關度南海觀洛伽山還住龍居。旭見律學多謬。遂以宏律自任。既述毗尼集要。尋擬註梵網拈圖佛前以決所宗。頻拈得天台宗於是究心台

和漢高僧傳

卷下

三十三

無能齋藏版

部而不肯爲台家子孫。以近世台家與禪宗賢首慈恩各執門庭不能和合故也。頃之住九華述梵網合注。其後歷溫陵漳州石城晟谿長水新安而歸於靈峰。生平著撰合四十餘種。其大者有首楞嚴玄義法華文句會義楞伽義疏唯識心要而彌陀要解提持淨土尤簡切矣。順治十年冬有疾。明年正月二十一日跌坐繩牀向西舉手而逝。年五十七。法臘三十四。生平嘗有言曰。漢宋註疏盛而聖賢心法晦。如方木入圓竅也。隨機羯磨出而律學衰。如水添乳也。指月錄行而禪道壞。如鑿混沌竅也。四教儀流傳而台宗昧。如執死方醫變證也。又曰。生平行履百無一長獨有大菩提心忘身爲法捨己從人則堪質諸三世慈

尊者也。(靈鑑)

○元政傳

元政名日政。號妙子。或不可思議。又泰空。京師人。姓菅原氏。母石井氏。一夜夢異僧來。曰。有憑哉。孕之而生。元政于京師一條邊。小字源八郎。甫二歲。秋七月十六日夜。父携見東山大文字。販家直記其大字形。或列諸玩物。呼其名。從聲取之一。莫違之。六歲始讀書。一受句讀。皆誦上口。一日從父見僧九巖于建仁寺中。大統院九巖問曰。兒讀何書。耶。答曰。讀大學。即授二行直。諸記而誦之。九巖拍掌嘆曰。何物生寧馨兒。年甫十三。仕彥根城主井伊直孝。因母族稱石井字俊平。十九歲辭仕。隨母遊。

和漢高僧傳

卷下

三十四

無能齋藏版

和泉禮日蓮像發三願曰。出家得度。曰。父母壽考長壽。孝養曰。後讀天台三大部書。當是時。泉涌寺律僧用某講法華經。元政日往聽。生切利之文。激昂感涕。說以出家之志。周制止曰。子年尙弱。他日爲僧。不晚也。年二十六。移病去國。從妙顯寺僧日豐。遂究繇爲僧。得讀三大部。元政爲人。精力絕倫。博內外之典。強記宏用。無不闕讀。兼善詞章。甚有袁宏道之風致。旁通國學。好爲和歌。占居深草霞谷寺。稱瑞光持律甚嚴。少間不解袈裟。兀坐誦經。有人來訪道。則詢々開示。有招之者。雖富貴人。必辭焉。有贈絹帛者。必換之。綿布以施弟子。當時聞其風者。無不佩服焉。與皈依陳元贊。心機冥契。爲方外交。又與熊澤了介友善。了

介雖素不悅佛。大欽元政風猷。時々過訪。談曉移晷。雖語及佛理。了介色莫逆矣。但曰。如今緇徒咸是。羸穢可嘆。可嘆。若使釋迦見之。其謂之何。又使孔子見。今日儒者亦謂之何。時講源語。或問法華經。或拉伶人來。爲雅樂。元政素誠孝。先是迎二親。設一小庵於寺側。號心菴。孝敬純至。父母年高尙健。父享年八十七。而歿。母年七十九。謂詣身延山。元政扶負以往。寬文八年。母亦八十七歲而死。尋元政暴病。寂時二月。年四十六。著扶桑隱逸傳。草山集。稱心病課等。(日本野史)

○隆琦傳

釋隆琦字隱元。明之福州福清林氏子。母龔氏。萬曆二十年生。

和漢高僧傳

卷下

三十五

無能齋藏版

九歲就學。翌冬廢學。而事耕樵。露坐仰觀。天河運轉。日月流輝。心竊異之。欲明根源。有慕梵學。附進香船。至普陀山。禮拜觀音。發心持素。泰昌元年。禮鑑源壽。薙染黃髮。年二十九。檀興梵宇。遊講經席。密雲和尚來應金粟。買舟而造。入門便問。學人初入。向甚處。做工夫。雲曰。我這裏無有工夫。可做。要行便行。要住便住。琦疑不決。目不交睫。第七日。雲過堂前。擡頭一見。有省。天啓六年。爲客堂主。遇五峰西堂。機語不契。意憤憤矣。一日立窓外。忽一陣風吹入。毛骨通身白汗。識得源本。僧謂。峰云。老隱徹也。乃呼勘驗。琦曰。道即不難。只恐驚羣動衆。峰云。何妨。琦打筋斗而出。崇禎三年。住獅子巖。費隱和尚住黃檗。舉琦爲西堂。十年

丁丑主黃檗席。本朝承應三年。應肥前興福寺主逸然之招。達于長崎。卽住興福。移崇福寺。妙心派下二三耆宿。以琦在西偏。化未遠。及啓訴公府。許入。幾內。明曆元年始到。攝之普門寺。上堂。萬治元年。妙心之耆宿。又告京尹。而承鈞命。偕往江府。寓天澤寺。侯伯士庶。拜禮作羣。謁源大樹。承賜歸攝。翌歲。賜太和田地。乃開萬福。爲第一世。台命復寄莊田若干。太上法皇宣旨。內奏法語。寬文三年。設禪門大乘戒座。受者千指。退休于松隱。十三年春。有微疾。上皇遣使存問。進偈謝恩。四月初三。早刻謂左右曰。今日不得遠離。吾行期逼矣。至午時。遽起。跌坐。衆請遺偈。琦卽書曰。西來柳栗振雄風。幻出柴山。不幸功。今日身心俱放。

和漢高僧傳

卷下

三六

無能齋藏版

下。頓超法界。一眞空。書罷。奄然。世齡八十二。法臘五十三。嗣其法者二十八人。有七會。語錄雜集若干卷。後水尾法皇賜大光普照國師之號。(本朝高僧傳卷四十五)

○道光傳

釋道光。字鐵眼。俗姓佐伯氏。肥後益城郡人也。十三歲投郡之海雲法師。薙染學。經論。慶安三年春。入京。徧遊講肆。竺墳魯典。無不精研。明曆元年秋。見隱元禪師于長崎。東明元一見。器重。命隨衆參堂。晨昏不懈。研究已躬。下事未幾。元公應請于攝州普門。時木菴和尚主分紫之席。直前咨叩。一日入室。橫機提出。當仁不讓。菴打趁出。光呈偈而去。後再往分紫。乃許入室。矣。寬

文三年春。講楞嚴於肥後禪定寺。剖析幽微。詞辯無礙。明年講法華於筑前妙光。一日慨然曰。吾邦古稱佛國。自教法始。東渡伽藍像設。不亞支那。名師碩德。代不乏人。獨大藏之版。向未有刊行於世者。非爲國中闕典。歟。契經有言。菩薩萬行中。流通法寶爲最。余幸生清世。忝廁縉流。誓盡此身當力爲之。徧與邦人永結般若勝緣。因携二三子。抵于大坂。專爲刻藏之謀。八年春。講起信論於月江精舍。時有觀音寺妙字道人來預講筵。聞其刻藏之舉。欣然發心。捐白金一千兩。光喜曰。聞千尺高閣成。在初基。今既有基。刻成全藏。必矣。急登黃蘗啓告隱元禪師。元歡喜踊躍。賜其所蓄支那藏本。亦割勝地爲貯藏版之處。光乃建

和漢高僧傳

卷下

三七

無能齋藏版

寶藏院于其地。開印房於京師。先刻數十函。梓人蟻集。施者留至。時募緣於江戶。講楞嚴於淺草海雲寺。列衆數千人。施物海會。講竟。登黃蘗省親。木菴和尚問答契合。十年春。難波檀信重修藥師寺。請爲中興。祖光喜而來住。改號慈雲山瑞龍寺。遠近學徒群聚。延寶二年春。熊本侯請迎。城中問法要極。加崇禮。自後年。捨黃金千錠。以助刻藏。是秋。應請于薩州福昌。講楞嚴經。四年春。省木菴和尚。親承心印。六年秋。大藏鏤板將竣。功乃製表章。隨經上進。太上法皇法皇與群臣共嘉賞焉。尋欲以大藏經具疏進于幕府。復赴江戶。天和二年正月。忽告門人曰。山僧春末有大事在。不可滯於此。乃率諸子回瑞龍。是春歲內荒歉。

流民夥矣。光多化錢穀，拯其饑乏。日免殍死者凡一萬餘人。踰月而止。一時稱爲救世大士。三月七日集諸子告曰：山僧化緣將訖，汝等幸富有春秋，慎勿涉世緣。唯念念向道，究明大事。乃是吾門種草刻藏一事，諸佛慈命之所關也。是故山僧一紀之間，歷盡百苦，今已告成。汝等宜體我心，使之流通於無窮也。二十二日書遺偈而逝，保壽五十三。戒薦四十茶毘之日，會葬者十餘萬人。各持香華，旋繞爲供。號泣之聲震動林野。門徒奉靈骨，塔于寶藏院西隅。光弘慈利物，一出于天性。貧者與衣食，病者餉湯藥。路見棄兒，則托人乳養。途逢囚人，則訴官請免。凡創寺院者八。曰瑞龍、曰寶藏等。所著語錄二卷，附藏流通焉。（續日本高僧傳）

和漢高僧傳

卷下

三十八

無能齋藏版

十僧傳卷一

慈山傳

釋慈山，字妙立，號唯忍子。俗性和田氏，美作人也。母夢天人入懷，有娠。幼願出家。父母鍾愛，不許。十七歲遂投城州花山寺，雷峰禪師剃染，磨習道業。昏曉無倦，未幾忽忘心境，得大機用。直蒙許可，既自以爲大悟徹底，因飄然漫遊四方矣。寬文四年，營構茅廬於江州坂本，俯仰山水，以自放焉。八年，叔父某在大坂爲醫業，見其放曠，因激勵之而勸閱大藏經。自是奮然往東山泉涌寺，閱大藏經。三更寒暑未半，便大悔悟而誓爲比丘，兼濟自他。閱藏後，一日欲適橫尾山，受戒途中遇于橫阜智本律師。

咨問所疑，不決。且見內著白衣，怏怏不悅，徑直還于坂本。斷然興起，依瑠瑠羯磨，自誓受具，更立一誓，有情身分雖一絲不纏身，雖微塵不入喉。實寬文十二年三月三日也。當時受戒皆用瑜伽羯磨。以是世人多以自設叮咛爲譏，乃作雪謗詩斥其局見。於是再閱四律五論，兼精究南山靈芝疏記，平生講遺教彌陀金剛經莊嚴及原人論等，勸化道俗。初於藏中讀台宗三大部，始知教觀大備。故潛心於天台四明之學，卒微性具妙旨，深得法華涅槃楞嚴經意，而識禪門極則，猶爲天台別意。更宗天台還衣拂於雷峰。時年三十六也。明年春傳秘密灌頂，次叡山義道等請其證明，受梵網十重禁戒。梶井法親王盛胤一見敬

和漢高僧傳

卷下

三十九

無能齋藏版

服。自是山徒革局解得正信者夥矣。本邦台教中古廢替，而近世特甚。學者妄傳三重玄旨，以爲究竟。佛祖真教反謂方便假說。故山中衆徒見山遵奉佛制，唱教觀正旨，謗爲小乘。比丘泥亂大乘放逐之。延寶六年正月乃去坂本，流寓山城攝津之間。後應梶井法親王請止於小野艸舍，數遊魚山，講相宗八要等。八年鎮照居士構庵於洛東，迎之。天和二年因隱，母病結夏於攝州小松，休世庵。夏竟歸洛東。貞享三年春修法華三昧，三七日。元祿元年三井學徒來聽妙宗鈔，三年春正月母亡，謝絕人事，專勤禮誦，祈其冥福。內纏哀情，外加苦節，因染疾，鍼藥無效。六月下旬危篤。七月朔在彌陀像前合掌念佛，既畢，唱云：念佛。

外無止觀止觀外無念佛能所情所取法界智所照侍者曰此是臨終用心乎山曰吾無平生臨終之異三日夜溘然而逝壽五十四僧臘若干上足光謙開法于叡岳安樂院崇爲開山第一祖矣山居洛東凡九年授戒講經歲無虛日其所選述圓頓章句解十重俗註野山紳集等並行于世（續日本高僧傳卷一）

○契沖傳

釋契沖字空心俗姓下川氏其先住江州馬淵祖父又左衛門元宜仕肥後守加藤清正加藤氏國除季子元全仕尼崎侯青山幸利沖即元全之男也寬永十七年誕于尼崎年甫五歲母間氏口授百人一首旬日善記父亦試習實語教不日諸記七

和漢高僧傳

卷下

四十

無能齋藏版

歲患疫既而瘳懇乞出塵父母不可於是自絕腥葷恒唱佛號父母不得奪志遂許焉時年十一受業河州今里妙法寺手定定公始授般若心經讀四五遍背誦手書十三難染登高野山謁東室院快賢賢公器重誨誘授灌頂印璽勵精苦學早露頭角寬文二年應檀越請住大坂生玉受陀羅院冲氣韻閑逸無意營世居未幾頻厭城市喧鬧題國詞二章於壁上一笠一鉢雲遊任心詣和州長谷寺絕食念誦一七日登室生山熏修精練一七日吉野葛城等凡名山靈刹無不躋攀又登高野受苦薩戒于圓通寺快圓律師持戒益嚴道業彌勵掛錫泉州久井里愛山水幽奇單居數年學該三藏兼通悉曇又十三經史漢

文選白氏文集等無不涉獵移居於攝州池田川側讀日本紀舊事紀等國書且嗜和歌博探歌書延寶五年就河州延命寺覺彥律師重受灌頂彥喜法器授于祕印冲繕寫祕密儀軌二百餘卷藏之和州生駒山八年妙法寺手定逝矣願命充補席冲孝於母寺側構一室移母養育焉水戶西山公方撰萬葉纂註欲致之府下固辭不就而感公志撰萬葉集代匠記二十卷總釋二卷獻之閣下公嘉其卓見博識賜白銀一千錠生絹三十段冲所得賞賜盡以充精舍修營且贍貧者一不蓄之又著古今集錄材鈔有所發明西山公讀之抵掌以爲確論賜書欲一來見冲辭云林壑之性不慣謁公侯遂不應矣速母物故退

和漢高僧傳

卷下

四十一

無能齋藏版

妙法寺閑居高津圓珠菴屏謝俗客清修自適西山公每施榮資音問不絕元祿十四年正月徵恙二十五日手結定印跏趺而化世壽六十二戒臘五十附菴於弟子智耀冲寬厚愛人恭謙能下然逮關邪義遮外難無所回避當時英稱無當其機鋒者矣（續日本高僧傳卷四）

○忍澈傳

釋忍澈字信阿自號葵翁俗姓二見氏江戶人也正保二年正月八日生年甫九歲夙緣萌動荐願出家乃依止三緣山直傳澈天資明敏強記絕倫不狎童遊有老成風明曆元年澈年十一禮傳公剃度受業日新宗門章疏畧通大義萬治二年傳公

示化。激哀憐追慕。乃圖其真奉事如在。時萬無立和尚住淨國寺。大揚化風。激往依立公。屢蒙提撕。又從林同。琢磨教籍。妙解入神。一日慨然曰。昔者宗祖圓光大師。年至十八。辭皇圓閣梨席。隱棲黑谷。開解立行。大興弘法之志。我亦同齡。虛送歲月。慚愧不少。感奮激昂。七年冬十月。負笈遊方。至相州江島。入于辯才天石窟。一七日間。勇猛精進。出窟飛錫。至江州竹生島。剋一百日。精修練行。翌年四月十五日曉天。心海澄靜。感見業障。更期七日。絕食作禮。練行期滿。寓于城州八幡正法寺。三更寒暑。讀書養心。泉州阿彌陀寺。合榮請充補處。乃振錫往。講往生要集。聽衆蟻集。激憾世流布藏經訛脫甚多。因誓得一善本。對校

和漢高僧傳

卷下

四十二

無能齋藏版

北藏補治漏脫。延寶四年冬十月。寓泉之淨福寺。自誓受齋戒。乃期約時日。常坐不臥。行口稱般舟三昧。一時感見好相。自誓受菩薩戒。快圓律師爲之證明。又依法照禪師五會法事議。設唱號軌則。抑揚折衷。聞者發信。或侍萬和尚。歎息宗弊之甚。議修獅子谷祖蹟。中興般舟道場。乃就土木役。延寶九年夏五月。殿宇經像全備落成。號善氣山法然院。開堂接衆。講選擇集。貴賤四衆列坐法筵。於是台密禪律。翹楚慈觀。戒山香雲。隆長慈中寶光等。販其教義。專心西方。法雷大震。元祿六年。激年四十九。稍倦接衆。擢和州西光寺立阿爲之補席。退處于影臨庵。道業益勵。英名彌高。一條從三位輝子。販服道德。屢問法要。太閤

近衛基熙公。亦招請聞道。尾張大納言源光友公。遐仰道德。致書問道。元祿十六年。幕府有命。陞法然院成官寺。仍賜莊田山林。永充淨厨。激自至江戶。謝恩。常憲公聞。激名久。請聽法要。激乃說法。語簡理明。公倍信服。寶永三年春二月。撰學者十餘人。借建仁寺高麗藏本。對校北藏經本。正誤謬。和闕遺。至七年夏四月。對校圓成。於是激將別撰輯。大藏對校錄一百卷。適示微恙。自知不可起。嘔之後。昆正德元年十一月十日。頭北面西。高聲念佛。奄然逝矣。世壽六十七。法臘五十六。所著有光明大師別傳纂註。吉水遺誓諺論等若干卷。刻板流行。(續日本書紀卷一)

○光謙傳

和漢高僧傳

卷下

四十三

無能齋藏版

釋光謙。字靈空。俗姓岡村氏。筑前福岡人也。以承應元年壬辰某月辰日辰時生焉。神性俊逸。氣貌雄偉。九歲喪母。發出塵志。十四歲從本藩松源院。蒙光剃度。萬治八年。登比叡山。寓于正覺院。四教三觀。研究妙義。折角奪席。十一年。蒙輪王鈞命。始住星光院。時妙立和尚。寓于台麓。盛唱戒乘俱急。眞宗謙先。稟立旨歸命。邪教一聞。正法省覺。前非道心涌起。延寶六年秋八月。從妙立和尚受梵網十重禁戒。明年四月。受四十八輕戒。道聲倍高。梶井靈覺親王。崇敬殊厚。數請精舍。討論教觀。天和二年夏六月。從立和尚爲形同息慈。勇退星光院。隱棲城西泉谷。特甘枯淡。頭陀爲生。叡山學徒。羣集請益。崇禎長老。元祿元年爲

淨家英洞空。講菩薩戒疏于北野草舍。明年著闢邪編。破斥立旨。歸命邪教。是年移居御室之側。講楞嚴經。三井叔山及四方學人。唱集受教。伊藤東涯。袖詩來訪。三年秋七月。立和尚示寂於聖護院。有門菴。謙補師席。接衆揚化。六年十月。輪王大王以叔山安樂院爲弘律場。命謙住持。泰道字了義光字瑞智幽字立寶志字義咄字即五沙彌隨侍。補佐眞乘。楞伽梵網十不二門等。講演連環。歲無虛日。八年依山徒請。講法華文句于台麓。三佛堂。海內英衲。蟻聚受教。十年常憲公割江州衣川邑百石。充安樂院淨厨。十月謙自覲幕府。謝恩。因寓東叔山明王院。輪王大王喜受教觀。要義復應山衆請。講法花開題。冬十一月

和漢高僧傳

卷下

四十四

無能齋藏版

還于安樂。明年春三月。修大悲懺。請湛堂律師爲之證明。受具足戒。時年四十七也。九月了徹立門等。自誓受具足戒。謙爲證明。肇定清規矣。先是傳教大師建圓頓戒壇。定一紀住山制。近代其制廢絕。謙告輪王大王復祖制。於是護心院素道請謙爲證明。受戒於戒壇堂。修止觀業。遵一紀住山舊軌矣。十二年秋九月。依智積院大衆請。講十不二門於有門庵。明年講法華入疏。禪教學人負笈群集。寶永元年著內外二境彈斥。三井義瑞約心觀佛。謬解瑞著乎辨。又作二百難。謙著二千酬。遮其難矣。是秋依山徒請。開講止觀于滋賀院。三年擢立門比丘爲補席。退隱台麓別房。爾來應緣遊化。播攝湖東。享保元年秋九月。從

悉地院惠潤僧正受兩部灌頂。更傳之立門。二年冬寓于有門庵。爲青蓮親王講觀經融心解。九年移居幻々庵。朝夕禪講。經接衆。元文四年夏六月。嬰微疾。爲立門性實徧詢覺道等。講四明大師付崇矩法師遺書一篇。以充遺戒。而後不言他事。頃目稱佛名。十月四日中夜安然而逝。門人寔全身于安樂院。崇爲第二祖。世壽八十八。坐夏四十二。所著文句止觀講錄戒疏集註等。亡歲六十三部。開創律寺四十五所也。（續日本高僧傳卷九）

○慧鶴傳

釋慧鶴。字白隱。俗姓杉山氏。駿河浮嶋原人也。天資英敏。早露頭角。七歲遊精舍。聽僧講于法華提婆品。還爲二親覆講焉。十

和漢高僧傳

卷下

四十五

無能齋藏版

一歲聽一僧說地獄變相。寒毛卓豎。願脫獄苦。恒誦普門品大悲咒等。學年從單嶺和尚得度。自誓曰。若不獲肉身。而火不能燒。水不能漂。底道力設死不休。誦經作禮。無有懈怠。不幾遊方抵濃州瑞雲。從事馬翁。夏月曬書。積堆架上。鶴進拜默禱曰。儒佛老莊諸家之道。我以何爲師。護法天龍。願示我正路。瞑目任手。把著得。禪關策進。於是生決定心。常以此書爲日新之銘。或宿播州山寺。見溪流有感。曰。山下有流水。滾々無止時。禪心若如是。見性豈其遲。寶永五年抵越後英巖寺。聞性徹和尚講人天眼目。鶴辨道尖進。夜坐乍聞鐘聲。豁然省發。徑走見性徹。呈所見徹曰。機鋒鈍矣。乃與一掌而出。自思三百年來未有如予。

痛快者時。宗格禪人在會。激鶴遣參。其師正受老人。夏四月。伴格抵信州。飯山正受某。謁慧端禪師。便呈一偈。翁左手握。偈曰。這箇是汝學得底。展右手曰。那箇是見得底。鶴曰。若有見得底。可呈。須吐却。乃作嘔吐聲。端搗曰。趙州無字作麼生。鶴曰。趙州無向。何處著手脚。端以指抑鶴鼻頭曰。嗟。多少著手脚了。鶴於此。通身汗流。慢幢倒了。也端大笑曰。箇鬼窟裏死禪和子。鶴無語。端曰。汝恁麼爲足。歟。鶴曰。有何不足。處端舉南泉遷化話。鶴掩耳出。端曰。閣梨。鶴回首。端曰。箇鬼窟裏死禪和子。自此僅見跨門。便怒罵。於是親參南泉遷化話。工夫十倍。平常一日分衛立門。老婆曰。過別處去。鶴恍然立。婆怒拈竹帚曰。何故踟躕。

和漢高僧傳

卷下

四十六

無能齋藏版

便打。鶴釋然。大悟。方領難透。因緣活用自在。還來未跨門。端見喜曰。汝徹矣。夏五月。端說無相心地戒。授焉。鶴聞真訣。泣淚頂受而退。矣。冬十一月。辭歸于松蔭。時年二十四歲。結冬安居。動靜二境。辨道勇進。正德三年。掛錫泉州。蔭涼見。壽鶴道人。究洞上宗旨。去隱美濃。巖瀧山。岩棲谷飲。二更寒暑。享保二年。住持松蔭。翌年冬十一月。轉位於花園第一座。嗣法于透鱗。自住杉蔭。十年。甘枯淡。喫艱辛。專一辨道。日暮自坐。被轎中。令村童以蒲團被甲。以繩結束。兀然達旦。明朝諸童來而解放之。每夜如此。晝閱佛祖言教。不放左右。享保十一年秋七月。讀法華經。至譬喻品。忽聞蒼鳴。古砌聲々相連。豁然契當。法華深理。初徹。

見正受老人平生受用。自此不疑佛祖言教。爾來道聲大震。四部依賴。因講臨濟錄。碧巖集等。鍛鍊參徒。元久五年。提唱虛堂錄。滿堂四百餘人。累年應請。四方提唱。佛經祖錄。衆恒不減。二百員。學者虛往實販。叢林之盛。冠于一時。寶曆八年。輪下細素創于龍澤。爲開山祖。明和元年。講大應錄。清衆七百餘員。列于座下。五年冬十二月。在松蔭示微恙。十日召遂翁。委囑後事。十一日曉旦。安眠高臥。大呼一聲而逝。矣。闍維得舍利羅。無算。保命八十四。坐夏六十九。嗣法東嶺遂翁等若干人。所著荊叢毒藥。夜船閑話等數十部。行于世。矣。翌年夏六月。勅諡神機獨妙禪師。(續日本高僧傳卷八)

和漢高僧傳

卷下

四十七

無能齋藏版

○普寂傳

釋普寂。字德門。自號道光。誕于勢州桑名縣。增田邑。時寶永四年八月望日也。父名秀寬。字古雲。源流寺主。屬一向派焉。母中村氏。寂生而有俊氣。異於常兒。僅離襁褓。好作禮佛誦經之態。三歲識字。六歲讀書。凡所授經書。一受輒記。有如宿習。是故三部妙典。四子文選。不數年皆悉成誦。享保五年。年十四歲。從桑名光明寺主學。俱舍。頌疏。略通大義。衆推其聰敏。後稍怠學。常爲園基雜戲。父秀大怒。加呵嘖。寂年十六。深領其誠。奮然起志。棄去。諸戲。讀淨家經疏。刻苦勤修。咸以洞貫。又聞起信論五教章圖覺因明。於禪山禪師。時年十九。尋遊學京師。湛慈講于唯。

識。鳳潭唱于華嚴寂成就而聽之。後遊泉州左海時專稱寺慧然。每日互講唯識論及俱舍頌疏寂臨其席問質奧義然老善其叩問且器許之請師代講俱舍(行狀)十九年一時得病生死之際頓生怖畏日夜悚悚一旦忽然謂從前家世所傳之義低悟經論全非佛經正義意甚厭惡之便欲辭親里山居修道寂齡二十八一鉢飄然南詢百城嘗謁尾州八事山高麟和上受菩薩戒及八齋戒寓于西山空菴堅鎖門戶足不越閭勇猛精進修練念佛三昧又見關通上人屢蒙示誨次閱大藏經於八事山自知夙緣在雜華寄心于華嚴經元文元年從義燈律師得度重受菩薩戒後拜大巖寺良義上人受宗戒兩脈又見靈

和漢高僧傳

卷下

四十八

無能齋藏版

空立門二師習于台教開行事鈔於泉州快存律師參學久之嘗生三大疑其一建立器界之事其二大小兩乘之辨其三因果報應之旨疑團蘊結胸中吞吐不下也五年春二月參見加州大乘慈麟和尚九旬打坐重受禪門菩薩大戒次謁天德僧孝禪師入室問法皈依住江州守山淨土寺克期坐禪身心安靜沈掉兩去忽然省發證諸經論其旨脗合先所起三大疑不待遣而自除焉延享四年夏六月於京西長時院自誓受具足戒法澤律師爲之證明尋學開遮持犯于澤公實曆元年住長時院每講俱舍唯識等以接學人名望隆于一時十三年夏五月因請徙江戶長泉院律軌嚴整法雷大震俱舍唯識雜華台教

講筵無虛日隨講製疏汗牛充屋安永五年冬十一月望夜夢道光二字喜以爲己號安永十年冬十月得疾豫知不起誦經禮佛十日安詳而化享年七十五坐夏三十五所著有五教章衍祕鈔探玄記發揮鈔等亡獻四十部百四十三卷也(續日本書紀)

○飲光傳

釋飲光字慈雲自號百不知童子俗姓上月氏浪華人也光幼年狀貌不凡識量豪邁母桑原氏深信三寶河州法樂寺貞紀和上時來其家垂誨紀公數見光氣貌告其母曰此般若種也豈使其久沒塵中邪母即令光許得度時年十三也明年秋九

和漢高僧傳

卷下

四十九

無能齋藏版

月受如意輪法至道場觀汗流淋漓曰豈料佛道如此甚深如是廣大矣爾來激勵勤學至忘寢食紀公喜曰有弟子如是我復何憂即授梵字悉曇章次遊學京師從伊藤長胤學經史及文辭未期年間紀公病歸侍湯藥脇不沾席數十日人感其至孝矣年十九遊南都學顯密教義冬隸于河州野中寺從秀嵩和尚受沙彌戒嵩一見器重告曰子實千里駒也善自愛重勿恃才傲勿得少爲足噫吾耄矣恨不見他日子樹大法幢又受具支灌頂於嵩和尚稟祕密儀軌於戒龍光年二十一受通受三聚具足戒自後研究毘尼探頤討幽不幾補于師席一日慨然云所貴于法者心也心倘不明萬法爲徒設喻諸積金不知

用者何異彼瓦礫。我將明吾心，乃以寺附法弟照林，拋擲萬緣，兀坐一室，誓究明心源，足不踰戶限。二閱寒暑，寢有入證，然而不自許，蹣履振錫疾走，信州求證大梅禪師。相見問答，針鋒相契。九旬夏滿，乃歸。然後參請諸師，枘鑿不合，復還法樂鍛鍊精修。一日忽爾如釋重擔，胸中蕩然，萬象森羅，箇箇光耀。三世十方，了了無礙。猶白雲在空中，卷舒自在。爾後自樂所證，怡然如含甘露，不知飢寒。入定連日，長養聖胎也。光年二十七，移住長榮寺。親證覺法覺賢，暨四方有志輩，集座下分衛爲生。因結三周界，定爲僧坊。明年親證登壇受具，用別受羯磨。吾邦過海大師後，興正大悲，已還大抵通受，自誓得也。雖間有唱別受者，其

和漢高僧傳

卷下

五十

無能齋藏版

式不一準。光有所據，創制規則，爲末世標準。號正法律，每誡學徒云：大丈夫兒，出家入道，須具佛知見，持佛戒服，佛服行，佛行。躋佛位，切莫倣末世人師所行。須飲淳粹醍醐，莫飲雜水腐乳。光禪餘日，取行願贊心經彌陀經三梵本而讀焉。讀久而漸通其義，愈讀愈精。如有神靈爲之開導者，其蘇漫多底彥多者，皆不假師授，通曉於是。召護明法護諦濡等，於山房而口授焉。護明等筆記成，七九鈔五卷，刻而布之四方。又大成梵學津梁一千卷，折爲七詮。若樓谷飲殆，將十載。京師四部競來，懇請因應。其請嘗因貴人請說十善法，弟子錄爲十二卷，名曰十善法誦。齡既八十，稍倦，應接退還河州高貴寺。其地幽邃閑寂，令法久

住地也。因聞幕府築壇結界，爲正法律一派。本山光又痛近代語，神道者妄爲附會臆說，大傷皇國真風，道行餘暇，留意神書。會合衆說，拾短拾長，成一家神道傳之門人。郡山侯欽伏德風，屢請城中問道受戒。文化元年甲子，齡八十七，秋八月，覺四大不調，憑門徒請就醫于京師。雖在病牀，倦倦法門策勵學徒，辭氣壯勵，凜然不可犯。臘月二十二日，中夜安詳而滅。坐夏六十七。世壽八十七。窆于高貴寺祖堂右。（續日本高僧傳卷一）

○癡空傳

釋癡空，字慧澄，號愚谷。近江滋賀郡仰木村人。父高橋某，通稱利八。母松野氏。父母禱橫川慈悲大師有懷，以安永九年十二

和漢高僧傳

卷下

五十一

無能齋藏版

月五日，生。幼時蒙然若愚，其嬉戲常爲聚群兒，自登高座說法，狀舉族易之。獨叔父異愛，嘗摩其頂，謂母氏曰：斯兒不癡，善育之。寬政元年，年甫十歲，登比叡山安樂院拜覺忍和上，落彩受五戒。爲大雲律師法嗣。隨侍於紀伊和歌浦，作是菴。四年，律師寂乃歸安樂院。依文道沙彌。九月，從海忍和上受八齋戒。十年二月，請性潭和尚證明自誓受菩薩十重戒。時年十九。十月受胎藏界學法灌頂。空自少多病，而刻苦讀書，至廢寢食。羸弱日加，夷然不以爲意。志尚遠大，不涉瑣細。拙于事敏于理。所言似迂，往往有驗焉。享和元年二月，受金剛界學法灌頂。五月始聽正脫沙彌講，俱舍、顯乎從學于比叡尾張之間。久而有出藍之

稱文化六年二月安樂院拜仁海和上爲形同沙彌時年三十是歲三月應衆請始開筵於叔之無動寺講俱舍頌疏七年夏脫公即世九年春抵東叡山留錫六年講法華玄義文句講畢歸安樂院十四年進受具足戒時年三十八專研究律部諸書文政元年受傳法灌頂爲都法大阿闍梨六年移叡麓世尊寺講摩訶止觀天保元年三月從一位紀侯創十禪院于粉河請師爲開基八月輪往東叡之淨名院侍讀自在心院普賢行院兩大王十年輪往安樂院文久二年二月感微疾三月朔日自知不起召弟子告遺誡二日午後諸徒圍繞默念佛名空起坐捻珠至晚泊然而終焉享年八十三坐夏四十四葬淨名院空

和漢高僧傳

卷下

五十二

無能齋藏版

始開筵于比叡至易寶其間五十四年講貫大小諸部歲無虛日講法華玄義七度法華文句四摩訶止觀四其他止觀大意十不二門等不可枚舉每講必述其義有法華玄義講義十卷文句十五止觀十同大意一等二十餘部空化緣厚兩叡而特熟東侍讀四大王住淨名前後廿八年所著諸部固衆戮力上梓行于世嘉永五年十二月三大部講義板成空詣天王寺展業臺源先生墓告卒業是酬知己之言也空十六七時從道公住山淨名欲學詩齋稿見先生一閱謂日以師之才之識奚事彫蟲小技宜精究三大部傍學古文以著註疏空從此翕然就學先生教之以作文法空至先生必掃席延之空深感之故至

老時時口誦待我江西徐孺子一生知己有斯人是蘇穎濱追加張文定詩蓋爲先生發之也（行樂記）

和漢高僧傳

卷下

五十三

無能齋藏版

和漢高僧傳卷下終

明治二十八年二月十日印刷
明治二十八年二月十六日發行

定價金貳拾五錢

編輯者 東京市淺草區松清町六十一番地
織田 得能

發行所 東京市神田區西紅梅町十二番地
光融館

印刷者 東京市京橋區弓町二十三番地
橘磯吉

印刷所 東京市京橋區弓町二十四番地
三協合資會社

大賣捌所

東京益友社 東京哲學書院 東京森江佐七
東京鴻盟社 東京出雲寺書店 西京西村法藏館
西京興教書院 名古屋其中堂

佚名編

門
跡
傳

弘化二年（一八四五）刻本

據弘化二年（二八四五）
刻本影印



此傳不詳輯錄之人
今茲随心大法主使
侍臣正誤補闕授利
廟氏心公于世舊有

雲上明覽界載懿親
貴族之系然至其宗
派之源則無釋焉今
如此傳區別條分涇
渭不溷譬如沂千里

上流以窮其深淵豈
非萬世龜鑑哉
大法主徵序於余因
題一言應其教云

和化二年秋七月

清臣宣明

伏原從二位



大正權三僧正以下補任最初事

式記曰僧正僧都律師是官也法印法眼法橋是位也

推古天皇十_{壬戌}百濟國來朝觀勤法師任僧正是日域僧正始也 大僧正者人皇四十五代聖武帝御宇天平十七_{乙酉}年行基始仕之大僧正是始 又菩薩号者天平廿一_{己丑}正月聖武帝請行基大僧正受菩薩戒給法諱勝滿于時賜行基大菩薩云々自天平十七_{乙酉}經二百廿六年圓融院御宇天元四_{辛巳}七月叡山良源任之天台大僧正是也又大僧正者華山院御宇寬和二_{丙戌}仁和寺覺助任之崇德院保延四_{戊午}十一月三寶院定海任之醍醐大僧正是始也其師勝覺者權僧正也雖然此勝覺者醍醐僧正是始也 正僧正者陽成院御宇元慶三_{己亥}十月通昭任之天台正僧正是始也 權僧正者清和帝御宇貞觀七_{乙酉}九月感應寺壹演任之是權僧正始也 密宗僧正者文德帝

御宇齊衡三_{丙子}十月高雄真清始任之凡日域僧正者觀勤始之大僧正者行基始之權僧正者壹演始之正僧正者通昭始之

法印者清和帝御宇貞觀六_{甲申}二十六貞觀寺真雅叙法印

是本朝法印始也又曰石清水第五神主紀良常之子第十

三別當檢校法印聖清是本朝法印之始也

僧都者推古天皇廿二_{甲申}四月德積任之本朝僧都是始也

大僧都者文德天皇元_{丁酉}十月元興寺道昭任之本朝大僧

都是始也

少僧都者天武天皇二_{癸酉}十二月義成任之本朝少僧都是

始也

律師者文德天皇元_{丁酉}三月十八日元興寺善往任之日域

律師是始也

權律師者稱德帝御宇天平神護二_{丙午}始置之給

阿闍梨者一條院御宇長元七_{甲戌}十二月教圓_{伊勢守藤原賴永}任之本朝阿闍梨是始也式記曰叡山安惠內供始任之云々

一身阿闍梨者妙香院慈忍法諱尋禪_{右大臣藤原師輔}圓融院御宇天延二_{甲戌}勅為一身阿闍梨台徒此任禪始也

僧叙位階事白川院御宇永保三_{癸亥}二月大御堂性信_{三條}

子四皇叙二品給是始也

出家之官稱親王事堀川院御宇康和元_{己卯}正月申中御門

覺行_{皇太子}院始親王宣下云々皇子稱親王事文武天皇御

子刑部親王是始也

東寺長者事以實惠大德為本朝第二阿闍梨又東寺一長者

之始真濟權律師為二長者之始以奉敬少僧都為三長者

之始以定照大僧都為四之長者之始

三寶院聖珍法親王元德二_{庚午}十二月廿七叙東寺一長者親

王初例也

寺務淳和帝御宇天長元_{甲辰}六十七以東寺別當長惠移西

寺空海成寺務是真言寺務始也_{西寺者慶俊僧都草創後任守敏阿闍梨此寺}

法務以真雅僧正為東寺法務始

權法務始事大威儀師延壽清和帝御宇貞觀十四_{壬辰}三月

十四日補之是權法務之始欽真雅與延壽相並法務二人

也

山門法親王始之事堀川院第二皇子最雲法親王_{堀保元}三

戊寅三月十一日叙山門法親王是始也

孫皇親王初例事澄覺法親王_{堀後鳥羽院孫雅成親王}息文

永十一_{甲戌}叙于時座主是孫皇親王初例也

台徒法務之始者增命謚号靜觀_{桑原安峯明寬}平上皇登獻

山為靜觀師延長元_{癸未}為僧正管法務台徒法務是始也

座主之始者延曆寺義真相州人從傳教入唐淳和帝御宇天

長甲 及十月任延曆寺座主天台座主是始也義真天長十七歲

上人始者常康親王息仁明天皇孫六波羅蜜寺開基空也法

諱光勝任之日域上人是始也

內供奉者光仁帝御宇寶龜三壬子三月丁亥始置內供奉十

禪師所謂秀南廣達延秀延惠看勇清淨法義導教永興光

信各補之詳見續日本記當時者山門三口圍城七口相傳

之職欽

諸寺三綱者上座寺主都維那謂此也今禪云維那當此都維

那欽被置諸寺三綱事桓武天皇御宇延曆十四乙亥年自

梵釋寺是始也梵釋寺江州志賀郡延曆丙寅正建立同

釋惠濟共沙門惠光入唐留学推古三十年七月從新羅大使

霜徒來歸初同志十數人歸朝只濟光二人而已或留唐或

天殖本朝之遠遊濟等為始

釋賢憬姓荒田氏尾州人也妙年出家受唯識于興福寺

宣教天平勝室乙未東大寺戒壇成鑑真行羯磨法憬為受

者是本朝登壇受戒之始也

帝皇上皇入壇灌頂事廣傳曰弘仁十三壬寅平城太上嵯峨

以弘法大師為師主受三摩耶戒并入壇灌頂給本朝天子

上皇入壇灌頂始自平城嵯峨矣平城天皇長元甲辰七

良帝嵯峨天皇承和九壬戌七月十五日崩五十七歲

本朝禪師号 宋國道隆蘭賜大覺禪師本朝禪師号是始也

相模守平時賴建長三辛亥大覺禪師請建長為開山元祖

日光御門跡 号輪王寺又滋賀院

尊敬親王 又改守澄 一品

後水尾院第四皇子母後光明院同母寬永十一七十一生

号今宮同廿一十一才親王宣下慶安元三四叙二品五

才同九移東叡山同二八廿八一品延室八五十六寂七

号本照院

守全親王 改天真俗名幸智

後西院第五皇子母東三條局從一位共綱卿女寬文四七

廿八生同十三九十三親王宣下十才延室元十七得度坂

本滋賀院入室元祿三二一品廿七才同三三朔寂号解脫

院

公辨親王 一品

後西院第六皇子寬文九八廿一生母六條局入道前權大

納言定矩卿養女延室二五一六才毘沙門堂入室公海附

弟元祿三依台命輪王寺後住職成也元祿六四任一品五

才天台座主室永四十一六准后宣下正德六四十七寂十

八号大明院

公寬法親王

東山院第三皇子母內侍局号春日前權大納言為經卿女

元圓滿院相續二品寬尊親王正德三十二六才七為公辨

親王附弟同四十八移于滋賀院同二二下向東武同年

改公寬同年十一十於輪王寺傳法灌頂公辨為師享保二

三廿四叙一品才二天台座主

公遵法親王

一品准后母權典侍實業卿女事保七生号隨意行院

公啓法親王

始良啓 一品

閑院直仁親王息中御門院御養子寬延三十一十九移營
室改諱公啓明和九七十六才十寂号最上乘院

公顯法親王

始曼珠院入室

安永二十昆沙門堂入室同五七十薨号清淨心院同六六
廿七贈一品

公延法親王

俗名方仁 一品

閑院典仁親王息桃園院御養子室曆二十四生安永元
十一親王宣下同六昆沙門堂入室天明六三十七上洛歸
閑東隱居安樂心院享和三四廿七寂四十一才

公澄法親王

俗名弘道

伏見邦賴親王息後桃園院御養子安永五年十月廿九生
佳宮寬政元六十一親王宣下廿七日入室輪王寺閑東下
向七年二廿五一品十一年三十九上洛五十座主八八歸
寺文化七四上洛隱居号觀喜心院宮文政十一年八寂十
三才

公猷法親王

俗名正道

有栖川織仁親王息光格天皇華仁御養子寬政元二一生
龜代宮文化五八廿七為親王御養子九十八入室里坊得
度戒師尊真親王十五下向閑東文化十三十九上洛四
一一品五七座主文政十一十廿五上洛廿八准三后十二
月改名舜仁十二年正十六辭座主廿二歸寺天保十四九
廿五日寂五十四才

公紹法親王

俗名彰信

有栖川韶仁親王息光格天皇御養子文化十二生華宮文
政十三廿五為親王四廿五入室里坊即日得度六二下向
閑東

天台宗
青蓮院御門跡

傳教大師 諱最澄

神護景雲元年生父三津百枝近江滋賀郡人也其先東漢獻帝孫云々延曆八開比叡山同廿三入唐七月歸朝始行灌頂貞觀八七勅謚傳教大師弘仁十三年六月四日寂十五六才

慈覺大師 諱圓仁

延曆二年生姓壬生下野都賀郡人崇神天皇裔也仁壽四三任座主七十一貞觀六正十四寂

安惠和尚

延曆十三生姓伯內州大縣郡人貞觀六二十六任座主是座主宣下之始也同十四三寂六十四才

相應和尚

天長八生姓榛江州淺井郡人其先孝德天皇裔也延喜十八十二寂八十八才

遍數僧都

慶命大僧正

藤原孝友男萬壽五六廿一任座主七十四才

慶範僧正

廣筭法印

寬慶權僧正

大宮右大臣俊家公三男保安四十三寂八十才

行玄大僧正

本名良實

青蓮院最初京極太閤師實公息母安藝守忠俊女保延四十九任座主同六被修禁裏安鎮良祐受法灌頂弟子師主寬慶法務法性寺座主知足院大閤同登壇為傳戒和上牛車七才未滿五十聽牛車之例僧中未聞先規云々

覺快法親王

本名圓性
法性寺座主

鳥羽院第七皇子母八幡別當光清女美乃局久安二三四登台嶺出家安元三五十一任座主行玄入室六才寺別當嘉應二五廿五親王宣下七才養和元十二六寂

慈圓大僧正

本名道快 養和元改慈圓
天台座主天王寺別當

法性寺閔白忠道公息良經公男号十樂院後青蓮院覺快入室弟子建久三十一廿九建仁元三十八建曆二正十六建保元十一十九四才度任座主初例也嘉祿元九廿五寂七十一才嘉禎三三八謚号慈鎮和尚哥人

良尋法印

九条兼實公息母從三位季行女慈圓入室法灌頂弟子建永二七三被出修行廿六才法性寺任座主

良快大僧正

同息寬喜元四十三任座主慈圓灌頂弟子尊忠法印入室本覺院号大師堂覺什僧正顯宗弟子法性寺座主法務天王寺別當五十八才仁治二年十二月十七日入寂

慈賢僧正

攝津守源賴善息天台座主八十八仁治元八十一仁治六ヶ月聖光坊

慈源僧正

九条光明峯寺關白道家公息仁治二正十七任座主良快弟子慈賢僧正受法灌頂弟子一身阿闍梨

道覺法親王

無品 俗名朝仁

後鳥羽院第六皇子号西山宮母法眼顯清女尾張局承元二九廿九為親王建保四六廿於無動寺出家廿三寶治元三廿五任座主慈圓入室寫範弟子一身阿闍梨於最勝四天王院從慈圓受灌頂牛車歲四十七才建長二正十一寂

最守大僧正

譜云十宗院道覺法親王寶康元年九月廿八入寂

松殿關白基房公息仁聖律師灌頂弟子尊性親王入室尊性道覺而親王受法許可一身阿闍梨

尊助法親王

二品

土御門院皇子母尊惠法印女正元々三廿六文永四七十

門葉記云三品親王母正應三年十一月一日子別入寂

譜云慈源僧正受法灌頂弟子尊忠法印入室本覺院号大師堂覺什僧正顯宗弟子法性寺座主法務天王寺別當五十八才仁治二年十二月十七日入寂

五弘安七九廿七正曆三二六四々度任座主尊性親王入室公圓僧正受法灌頂弟子後嵯峨院卿出家勤 卿戒師牛車正應三年十一月朔日寂 門跡譜

慈禪大僧正

諸熊關白家實公息母從三位忠行卿女文永五十二廿七任座主慈源僧正入室法性寺座主法務

道玄准三后

大僧正

二条殿元祖普光圓院良實公息母家行卿女建治二十一廿五嘉元々四五第二度任座主最守入室受法灌頂弟子一身阿闍梨法務神仙門院卿出家卿戒師号十樂院 諸集入哥人

慈實大僧正

日記後抄香院僧正有

九条殿光明峯寺道家公息弘安十一三廿一任座主慈源僧正入室一身阿闍梨正安二五九寂六十三才

慈助法親王

後嵯峨院皇子母大約言公經卿女正曆二四十三同三十一廿一兩度任座主尊助入室受法灌頂又道玄准后受法灌頂法皇於延曆寺卿受戒依別勅為和上法皇後深草卿幸無動寺牛車

慈玄大僧正

後一条關白實經公息慈禪僧正入室尊助受法灌頂弟子一身阿闍梨探題宣下僧正之後探題三井明尊僧正例也

證義之後探題今度初例也法性寺座主正安三正廿五寂三十二才

良助法親王

多武峯優婆塞云是也尊賀云也

龜山院皇子母正三位左中將實平女三条局尊助入室受法灌頂弟子永仁七四廿三任座主一身阿闍梨

慈深大僧正

一條後光明寺家經公息慈源僧正入室澄尋僧正受法灌頂弟子一身阿闍梨文和四十二寂七十五才

慈道法親王

龜山院第十六皇子母兵部卿時仲女師典侍道玄僧正入室寫範弟子出家正和三八朔元亨四四十二嘉曆三四十

十一

七第三度任座主一身阿闍梨号青龍院新院於衣笠殿三衣御傳受曆應四四十一寂哥人

尊圓法親王

俗名尊彦

伏見院第五皇子母俊衛朝臣女播磨内侍慈深僧正入室僧正灌頂弟子座主四度青龍院二品親王受法許可一身阿闍梨牛車廣義門院御出家為御戒師依上皇仰令書進主上御手本御書詞上皇御草也崇徳院御影堂并栗田宮檢校依院宣風雅集序并第一卷清書件集上皇御自撰之和哥西序同勅草也此集一部追終清書切主上御受法十八道四天王寺別當延久元九廿三寂五十八康曆二九廿九贈一品青蓮院二十七代門主入木道高祖也云々号大乗院宮哥人

尊實法親王

本名慈真

後伏見院第九皇子早世母對御方實明卿女

祐助法親王

無品

後二条院皇子母權中納言公泰卿女号桂林院曆應四十一十八任座主慈道灌頂

尊道法親王

一品

俗名尊省

後伏見院第十一皇子曆應四七廿七為親王十才同月廿九出家尊圓入室文和四廿五貞治四九十一依神輿入洛辟應安十一又如元以勅被仰應承二十二廿七第三度任座主牛車任一品山門一品親王初例應承十七五寂号

十三

青龍院哥人

慈濟大僧正

一條後芬陀利華院闍白經通公息永和三四十五任座主隨尊道受西部灌頂

道圓法親王

後光嚴院第六皇子永德元六八任座主尊道受法灌頂云々

義圓准后

鹿苑院義滿公息應永廿六十一三任座主岡崎門跡受法灌頂還俗為征夷將軍義教公号普光院

義快

二条持基公息將軍義教公猶子早世

尊應准后

二条殿持基公息天王寺別當文明三五八任座主曼珠院
良什僧正受法灌頂永正十正八寂号後十樂院哥人

尊傳法親王

俗名尊教

後土御門第二皇子權大納言長賢女准三宮朝子也文明
八八廿八為親王尊應附弟文龜四正廿六寂号不遠院

尊鎮法親王

二品 俗名清彦

後柏原皇子母准后藤子号豐樂院贈左大臣教秀公女公
助僧正受法灌頂天文十九十二四任座主天王寺別當天
文十九十三寂号桂連院

尊朝法親王

伏見殿後安養院邦輔親王息正親町院御猶子天正十三
二十七任座主覺起准后受法亮信僧正灌頂慶長二二
三寂号龍池院

尊純法親王

二品天台座主

伏見殿邦房親王息後三法皇政仁為御猶子任親王寬永廿
一十一五承應二正廿而度任座主承應二五廿六寂号圓
智院

尊證法親王 二品 俗名周賢

太上天皇皇子母新廣義門院國基音女慶安四十二生明
曆二六三出家良尚親王受法灌頂寬文九九十三任座主
洛陽鞍馬寺寺務多武峯帶元祿七十十五寂号後挂連院

尊形日出宮

伏見殿貞致親王息元祿八二廿五御入寺四才元祿十一
九七薨号智冥院

尊祐法親王 一品

伏見邦永親王息養母帥局後光音院元祿十一九廿五生
号寬宮室永七四廿七親王宣下同年五十一入室得度戒

師道仁親王正德四五四灌頂同年十四任座主享保五八
廿一叙二品同七年十二十九再任座主元文元十二廿六
延享四九十六寂号蓮華壽院

尊英法親王 諱庶盛

伏見貞建親王息櫻町院御養子母岡本清光縣主女号信
解院元文六十二廿七生延享二八廿二為御養子寬延元
七廿八為親王八十七得度室曆二七廿寂十六才号廣修
院宮

尊真准三后 俗名成輔

伏見貞建親王息尊英弟櫻町院御養子延享元正十九生
母同上二女号通泉院延享三十廿七為御養子一乘院入

室相續室曆二十九十八依勅命移當室十二十三親王宣
下同三十九入室戒師堯恭明和元十二廿四二品十二
十六天台任座主天明五十二廿七一品文化十三八十三
准三后文政七三十八寂号無畏王院宮

尊寶法親王 俗諱有道

伏見貞敬親王息光格天皇兼仁御養子享和二六月十九
生聰宮同五年三廿七為御養子同八九廿四為親王同九
三五八室得度文政二十六補座主同年十二十五補護
持僧同年十二十九一身阿闍梨宜下同年十廿一勅會灌
頂同十一廿四叙二品天保三九十五辭座主同十六寂号
後蓮華壽院

洁宮

當今惠仁御養子實有栖川韶仁親王男天保十四年六十
七薨

十五

曼珠院御門跡

号竹内院宇始在北山後移禁中境
内又明曆二移東山台麓一乘寺

傳教大師

慈覺大師

安惠和尚

最圓

延喜十五二三寂七十二才

玄昭

覺惠

是算法橋

号東尾坊

十六

曼珠院最初國師北野寺務職之始也山門阿闍梨之号
始天慶三神明垂跡之刻為最初列當職

當門室藏旧記古目安朱雀御宇村上御親也天慶五年
當社垂跡之始被補是算法橋以來門跡廿四代云々至德
元年如此書著目安有之也法橋是算寬弘元叙法橋
北野行幸列當賞也寬弘二死去

遍救大僧都

批把左大臣藤原仲平息昭宣公之孫也後拾遺入
又号靜慮院哥人

遷圓僧都

左衛門尉源賴實息多田振津守賴國之孫也

教圓僧正

伊勢守藤原孝忠息左中將永賴之孫長曆三三十二任座
主歲七十七天王寺別當永承二寂元亨十入

長算僧正

少納言藤原朝範息右京大夫遠基孫後拾遺入
天喜五寂哥人也

仁運大僧都

醍醐天皇之流越前長經息大納言源重光孫
法性寺座主

賴圓法眼

中納言藤原山蔭之流伊賀守保相息左中將永賴之孫

真尊律師

周防守藤原良綱息 北野別當

忠尋大僧正

号東陽坊

清和天皇苗裔忠孝息 法務 大治五十二 九任座主
天承三十三鳥羽院御願得長壽院供養導師保延四十
四寂七十四才

顯尋律師

号宰相律師

左少將藤原氏能男

圓仙權少僧都

本名良顯 前中納言藤原頭賴息兼室權中納言顯隆之
孫 平治元賜官符

仙範少僧都

毘沙門堂入道參議平親範息左大辨從三位範家之孫院
主長寛二賜官符

承信法印

泰經男 院主 建久二賜官符

承兼權僧正

左中將源守通息權大納言通資之孫 院主 北野別當
承久二賜官符

公澄權大僧都

法印公曉息西園寺實宗公之孫 西塔院主 北野別當
嘉祿四賜官符

道救僧正

三条内大臣公親公息右大臣實親之孫 北野別當
建治二賜官符

實濟大僧都

權大納言藤原公泰公男

慈順大僧正

山階左大臣實雄公息西園寺太政大臣公經公之孫法務
一身阿闍梨法性寺座主延慶元任護持僧 正安二賜官
符新後撰玉葉風雅新千入哥人也

慈嚴大僧正

後山本左大臣藤原實泰公息母左大臣實雄公女元德二
四十七觀應二二兩度任座主 法務三代國師
一身阿闍梨元弘二於紫宸殿被修天下安鎮之法 大平記
又載之 正和三賜官符

慈快僧正

西園寺公衡公息早世風雅新千入元德二賜官符哥人也

十九

慈守大僧正

中園相國公賢公弟三息後山本左大臣實泰公之孫隱遁
康永三賜官符

慈昭大僧正

同第七息 法性寺座主 貞治六年於長講堂承 勅被
參法華經導師太平記亦載之一身阿闍梨當代梶井門跡
大塔宮尊雲親王雖為押領至今年後昇再任給 云々
觀應元賜官符

道豪大僧正

門跡傳

二条殿晉光圓院太閤良基公息應永九十十七任座主
慈昭僧正資

良順大僧正

二条殿是心院關白師良公息應永十六三十六任座主

覺什少僧正

北野別當至當代改為鹿苑院之屋敷也石浦藤澤成言男
利仁將軍末孫

良什准三宮

成恩寺關白經嗣公息 永亨三八十六任座主

良鎮大僧正

後成恩寺關白兼良公息室德年中法性寺座主

慈運親王

本名良嚴

伏見殿貞常親王息母贈一品重有女後土御門御猶子天
文六六廿九寂号松牧子明曆四公宴書竹內宮有之

覺怨准三宮

後奈良院皇子母刑部卿親就女 元龜元三廿三任座主
天正二正三寂号金蓮院

良恕入道親王

俗名勝輔
元名覺圓

陽光院第三皇子母新上東門院晴子勸修寺前内府晴秀
公女天正二生寬永十六任座主同廿年七十六寂 云々
号龍華院

良尚法親王

俗名勝行

八条殿桂光院一品式部卿智仁親王息陽光院御孫也母
京極丹後守高知女 元和八十二十六生寬永四入寺六
同九正廿五後水尾院御子同十一八七親王宣下扑三
同年九十一得度同十六十一十三灌頂戒師良恕親王正
保三三廿二任座主卅五才同四九十直叙二品卅六才明
曆二依台命移地一乘寺境內為中興開基寬文四二朔護
持僧尊純親王受法元祿六七五寂七十二才号天松院

良應法親王

俗名勝明

後西院皇子母六条局贈正三位定子梅小路大納言定矩
猶子實光源寺智秀女清閑寺內大臣共房公孫貞享二十
一十三從祖母榮松院亭御入寺八公邊御弟被仰渡去

壬子

良啓法親王

九十六相濟參內十月十六御弟子同道也貞享四九廿八
親王宣下御里坊 同年十九得度元祿九十一四一身阿
闍梨勅許元祿十六廿五灌頂室永五六廿一座主宣下同
廿二辭退依長病辭世号圓妙院宮卅一才

閑院殿直仁親王息中御門院御養子享保十八生寬保三
十二二為親王延享元十二七入室得度寬延三十一十九
移輪王寺諱改公務

讓仁法親王

光格天皇御養子閑院孝仁親王末男文政七年生天保三
辰五十七相續同年同月同日御養子母儀菰蒲小路聰子

於洞中被仰出同年六月御弘 同五年八月持勝親王宣
下同年十一廿八入室得度十五才御實母鷹司准后政熙
公女 於當宮北野晴參詣御一代一度天保十三六廿九
叙品宣下天保十三七廿九申刻寂十九才号速壽成院同
日叙二品

壬子

妙法院御門跡 号新日吉門

傳教大師

慈覺大師

惠亮 信州水田郡人宝幢院第一院主号大衆大師

常濟阿闍梨

延昌僧正

賀州江沼郡人 天慶九十二冊任座主 六十六才院主号
慈念應和四正十五化 八十五才

陽生僧都

伊豆國北條人永祚元十二廿七任座主 七十八才院主号
竹林院正曆四終 八十七才

教圓法師

伊勢寺藤原孝忠息長曆三三十一任座主 院主長吏

勝範大僧正

江州人延久二五九任座主院主法務 八十三才

定慶阿闍梨

源運 院主

相命法印

中御門權大納言藤原俊宗卿息 妙香院師主源運妙法
院最初

快實阿闍梨

快修大僧正

權中納言俊忠息俊成之兄弟子千入應保二五卅仁安元
九十三任座主云、再任之初例号尾坂僧正 院主
護持僧 七十三才

昌雲大僧正

少納言藤原忠成息 院主 法務 護持僧 牛車 新

日吉檢校永被 付門跡 六勝寺 圓勝寺等別當
西塔院檢校

實全大僧正

德大寺右大臣公龍公息建仁二七十三任座主院主日吉
別當護持僧 法務 新日吉管領

尊性法親王

後高倉皇子建久三年十三為親王貞曆三四二叙二品
安貞元十二廿七任座主四天王寺別當 護持僧山門二
品初例 号綾小路宮 延曆元九三寂

尊惠權僧正

西園寺太政大臣公經公息 早世

俊圓僧正

堀川左大臣源俊房公息天台座主号常住金剛院

尊守法親王 無品

土御門皇子号高橋宮母法橋寬宴女座主寺長吏

性惠法親王 三品

龜山皇子母内大臣公親公女号小坂殿 弘安八三十五為親王

尊教大僧正

西園寺太政大臣公相公息永仁四十二十七任座主
法務三代護持僧

性守大僧正

同兼實公息正中二五八任座主不受宣下寂三十九才

尊澄法親王 一品

後醍醐弟二皇子元德二十四建武元七兩度任座主
建武二三十六叙二品延元元六一品宣下山門一品親王
之初例還俗之後宗良親王是也

亮性法親王 二品

後伏見弟九皇子 光明貞和二八十七任座主護持僧

亮仁法親王 二品

同至德元七十七任座主一品護持僧應永十八六八任座

亮性法親王

主兩度也應永廿七六叙一品永享二四廿一寂七十哥人也

同帝十一皇子亮仁資自害云々

明仁法親王

早世号木寺宮

教覺准三后

德大寺大納言實盛公息將軍義教公猶子母右衛門督基
親女享德四五六任座主護持僧

覺胤法親王

伏見殿後大通院貞常親王息 永正十五四十三任座主

亮尊法親王 無品

同妙莊嚴院貞教親王息母贈太政大臣實香公女天文十
九十九任座主 一身阿闍梨

常胤法親王 二品

同後安養院邦輔親王息正親町院御猶子慶長二四廿二
任座主

亮然法親王 二品 俗名常嘉

後陽成院第六皇子母句當内侍孝子持明院中納言基孝
卿女慶長七月生寬永十七七十一正保二十二廿四承應
二六十四五十二才三ヶ度任座主慶長十八三廿二親主
宣下十二才寬文元八廿三寂六十才号慈恩院宮

堯恕法親王 俗名完敏

後水尾院第八皇子号熙宮母新中納言典侍園基香卿女
寬永十六生寬文三十仕座主護持僧元祿八四十六寂
五十六才号獅子吼院

堯延法親王 俗名周慶

法皇誠仁第六皇子母將内侍管大納言為庸卿女延宝四
十二廿八生号六宮貞享三九卅親王宣下十才同十廿五
得度受法堯恕親王元祿六二廿八薨頂同十八天台座
主廿八享保三十一一一品消息宣下同十一卅寂三四才
号實心穀尔院

堯恭法親王 一品 俗名久嘉

太上法皇第六皇子母衛門佐局上北面能登守重德女享
保二四三生号幾宮同四正廿二才當門相續同十二正
廿五親王宣下廿一同年三廿三八室得度室曆五五廿七
一品明和元十二五寂四十九才号三摩地院宮

眞仁法親王

開院典仁親王息桃園院御養子母恭禮門院一条兼香公
女明和五生号時宮安永七八十六親王宣下天明五十二
十六二品八月任座主寬政七二廿五一品文化二八八寂
三十九才号那羅延院宮

教仁法親王

光格天皇御養子開院孝仁親王息文政二生健宮同十三
十廿七八室得度

梶井御門跡 号三千院又梨本坊又号圓融坊

傳教大師

慈覺大師

承雲和尚

叡南大師梨本門主之始

延雄阿闍梨

姓丹生氏平安城人應神天皇之裔也

尊意贈僧正

二八

法性房也延長四五十仕座主天慶三二廿四寂五才
近江國人也

安愿和尚

尋釁和尚

明快大僧正

梶井最初利仁將軍末孫文章博士俊宗息 天喜元十一
廿九仕座主皇慶灌頂弟子延久二三八寂八十四才

良眞大僧正

小松天皇末孫兵部丞源通輔息永保元十五仕座主師
主慶命明快等弟子 隨長宴灌頂七十五才

仁覺大僧正

右大臣頭房公三男寬治七九十一任座主師主慶範明快
經還受法灌頂五十八金兼入

仁豪大僧正

內大臣能長公五男天永元五十二任座主師主明快安慶
受法良真灌頂七十一才

仁實大僧正

大納言公實二男 保安四十二任座主師主仁覺仁豪
等弟子宗觀受法灌頂

最雲法親王 無品

二十九

堀川院皇子母伊勢守時綱女久壽三三三任座主師主仁
豪仁實弟子灌頂山門法親王初例五十三才任僧綱之後
蒙親王宣旨初例也 保元三三十一親王宣下

最忠僧正

法性寺關白忠通公息早世

明雲大僧正

大納言源頭通二男仁安二二五治承三十一十六兩度
任座主灌頂六十九壽永二法住寺殿合戰為義仲與明慶
法親王一所逢誅 千入

承仁法親王 無品

後白河院皇子母丹波局仁操僧都女建久七十一任座

承圓僧正

主明雲入室頭真受法灌頂

菩提院關白基房公息元久二十二建保二六十二兩度
任座主承仁親王入室嘉禎二十廿六寂五十七才

尊快法親王

俗名寬成

後鳥羽院第七皇子母脩明院贈左大臣範季公女承久二
八二親王宣下承元四十一廿五叙二品承久三四廿六任
座主承圓入室受法灌頂四十三才

尊覺法親王

順德院第五皇子母從三位清季卿女建長元五任座主
尊快親王入室受法灌頂

三十

最仁法親王

土御門院皇子母法眼圓壽女 弘長三八十五任座主
尊覺入室真仙僧正灌頂六十三才

澄覺法親王

後鳥羽院卿子三品雅成親王息母內藏頭忠綱女文永五
三二為親王元大僧正文永二三八文永八五十一兩度
任座主真仙灌頂七十一才号菩提院哥人也

最助法親王

後醍醐皇子母按察使三位局隆衛卿女弘安九十一廿九
任座主于時重服澄覺灌頂四十一才

覺雲法親王

龜山院第五皇子母左中將實平女弘安七十一廿九入提井門室即出家廿三正和四三十三叙二品文保元四七安鎮法始大阿闍梨於新内裏被行之十二正有舞樂嘉元三四文保元十一任座主 号菩提院

叡雲法親王

龜山院皇子母大膳大夫藤原景房女 早世

恒雲法親王

無品

同母中納言公雄女 号小川 早世

尊忠僧正

順德院皇子岩倉宮忠成王息母右馬頭範能女

承覺法親王

後宇多院皇子母護天門院三木忠繼卿女正中二五廿三任座主覺雲灌頂二品菩提院又号壽量院 哥人也

承鎮法親王

順德院皇子忠成王息彦仁王息後宇多院為御猶子正中三三九任座主

尊雲法親王

二品

後醍醐第六宮号大塔宮母民部卿師親女嘉曆三十二六任座主還俗之後号將軍護良親王是也

尊胤法親王

後伏見院第四皇子母治部卿局曆應三四廿一叙二品正慶廿七建武三十二貞和三八十五三ヶ度任座主 哥人也

承胤法親王

二品

同第八皇子母東御方實明卿女康永三三康安三二八永和二十七十三ヶ度任座主

恒鎮法親王

龜山院御子垣明親王息龜山院御猶子康安二九廿一任座主

覺叡法親王

後光嚴院皇子母左京大夫局應安六十一廿四入室

明承法親王

同十宮 嘉慶二五廿八任座主

義承准后

鹿苑院入道相國義滿公息嘉吉元八卅准后宣下應永廿五四廿一永享七廿三任座主

義堯僧正

普庵院僧相國義教公息

堯胤法親王

二品

伏見殿後大通院貞常親王息後花園院御猶子母從三位盈子贈一位重方女明應二四卅任座主永正十六八寂号

壽量院

彦胤法親王

俗名寬恒

後柏原院第四皇子母贈二位源子從一位源雅行卿女
号後菩提院

應胤法親王

伏見殿貞敦親王息後奈良院御猶子母大政大臣藤原實
常公女天文廿二七廿九任座主

承快

俗名幸勝早世号實性院

最胤法親王

改名号圓妙院

伏見殿邦輔親王息正親町院御猶子慶長十七十二廿六
任座主

慈胤法親王 二品

後陽成院皇子母土佐局春日神主大中臣時廣女天和三
十三生寬永六十二廿九為親王十一十五入梶井七年
得度寬永十九十二廿八慶安三正廿九明曆元十二廿五
任座主護持僧元祿十二極朔寂八十三才号常修院

最昭法親王

改盛胤

後水尾院皇子慶安四八廿二生萬治三八廿七出家寬文
十三四十任座主三十才延享八六廿六寂号正法院

道仁法親王 一品

伏見殿貞敦親王息元祿七廿九生法皇識仁御猶子仁宇
依勅拜領也元祿十二二十一入室得度宝永六三廿二
任座主同四六二品宝永五九廿四灌頂享保十八五十九
寂四十五才号慈智院

獻仁法親王

俗名有賴

有栖川職仁親王息中御門院御養子享保十五生明宮十
八八廿八御養子寬保元五十五得度戒師通祐室曆三七
廿二寂号後正法院

常仁法親王

有栖川職仁親王息桃園院御養子稱百官明和九四廿二
寂号無上心院

承眞法親王

俗名淳能

有栖川職仁親王息光格天皇兼仁御養子天明八正月朔
日生享和三九十六入寺得度即日僧正法印十六文化五
四廿八為親王六年八十九二品七年四廿八任座主文政
十一十九推叙一品天保十二正十四寂五十三才葬大
原山号如實知王院

聖護院御門跡

智證大師

諱圓珍

和氣宅成息景行苗裔母佐伯氏空海甥讚岐國人也元慶
七叙法橋同十七轉法眼寬平二十一廿六任大僧都
延長五十二廿七謚智證貞觀元任寺長吏寬平七四廿九
寂七十八才

增命僧正

朝散大夫兼原安峯息号干光院昌泰三十七為天台座
主謚靜觀

勢祐律師

寺長吏

智靜大僧正

諱觀修

解脫寺本願 長吏 寬弘五七八寂六十四才

最圓權少僧都

三条關白大政大臣藤原公息 号西院

靜覺法印

二条關白教通公息一身阿闍梨 号長谷

增譽大僧正

大納言經輔卿息三井長吏總十三ヶ度 三山檢校聖護
院最初法務長治二十四任天台座主八十五才
号一条寺

增知僧正

京極關白師實公息 法印權大僧都 法務

覺忠權僧正

法性寺殿撰政關白忠通公息應保二二一任座主三井長
吏承元十六寂六十七才

靜惠法親王

無品

後白河院皇子 青龍院三井長吏

圓忠大僧正

普賢寺基通公息唐房 青龍院長吏

靜忠大僧正

同息 青龍院唐房長吏三山檢校白河院始熊野卿參詣
之時卿先達賞被補此職三代 護持僧

尊圓法親王

無品

後鳥羽院第十皇子母大納言定能女建保後為僧圓忠弟
子補一身阿闍梨六年為親王

深忠權僧正

九条殿光明寺攝政道家公息 法務

覺惠法親王

順德院第三皇子母清秀卿女

覺助法親王

後嵯峨院皇子母形部卿局孝時女自仙朝受法長吏
天王寺別當哥人也

忠助法親王 無品

同皇子母良平公女寺長吏

順助法親王 無品

龜山院皇子母帥典侍兵部卿時中朝臣女 寺長吏

尊珍法親王

同帝皇子母從三位實子寺長吏 嘉曆三正之町准三后
宣下

惠助法親王

伏見院第四皇子母春日局任快法印女延慶三六廿八親
王宣下十才正和二三廿八出家廿三曆應二六十五叙二
品 寺長吏

覺譽法親王

萩原法皇之子 天王寺別當長吏三才度 二品哥人也

仁譽法親王

恒明親王息龜山院稱

聖助法親王

後醍醐院皇子母少將典侍菅原在仲女

靜尊法親王 改忠尊

同帝皇子母參議實俊卿女

覺增法親王

後光嚴院皇子 長吏 哥人也

道意准三后

後普光院院攝政良基公息三山檢校 長吏 大僧正

滿意大僧正

同息 長吏 号如意寺

道興大僧正

後知足院關白房嗣公息三山檢校 長吏 法務

道應法親王 本興譽

後大通院貞常親王息後土御門院御猶子 長吏

道增准三后

後法性寺關白尚通公息 法務 大僧正

道澄大僧正

惠雲院關白鎮家公息号照光院最初三山檢校三井長吏

忠尊法親王

後醍醐帝第八皇子母宰相實俊女

興意法親王

本道勝

二品

陽光院皇子 元和六十七寂 号淨珊寺

道晃法親王

二品

後移照高院

後陽成院皇子母三位局慶長十七十二生寬永三十三
親王宣下延室七六十八寂六十八才号通照寺

道寬法親王

俗名嘉選

後水尾院第十一皇子母寬文新院同母正保四四廿八生
承應元入室明曆二十二十七為親王同三四廿一出家
才戒師道晃親王寬文八三十五於三井受法灌頂廿二才
大阿闍梨長吏護持僧延室三十一廿五上京大火之節御
寺燒亡故替地御願即御領內洛東於聖護院村御替地四

三十九

千坪渡為御造營料銀二千枚將軍家被進之

道祐法親王

俗名宗範

後西院良仁第七皇子寬文十九廿七生母六條局前權大
納言定矩卿女延室八十一十二親王宣下同廿七得度一
才元祿三十二十八寂 号淨心院

道尊法親王

同帝弟九皇子母按察使局大納言豐長卿女元祿四六八
寺廿七本圓滿院行惠親王也元祿六六十三寂二品
室永二九廿八寂廿一才号常光寺

道承法親王

俗名貞良

伏見院邦永親王息東山院御猶子養母新紫賢門院前內

大臣隆賀公女元祿八生同十六四廿九入寺得度室永六
六十八寂二品十五才正德四七九寂廿才

忠譽准三后

俗名忠篤

中御門院第三皇子母新典侍局園入道大納言基勝卿女
享保七十一生同八三廿六入室得度同十七三廿五為
親王同十九四朔改衣村三元文五三廿八二品
二十二廿一隱居

增賞法親王

有栖川職仁親王息享保十九四十三生延享三五為親王
同十六實相院入室得度同十二廿五移當門明和七六廿
五寂 号至成心院

甲

盈仁准三后

關院典仁親王息後桃園院御養子天明元九十八為親王
同二三廿八室得度同六十一廿七二品同八三廿五長吏
文化七十七十一品文政十三廿七准后同十一廿三寂

萬壽宮

伏見貞敬親王息

雄仁法親王

伏見貞敬親王息光格天皇肅仁御養子

圓滿院御門跡

号平等院

智證大師

康濟律師

越前敦賀人俗姓紀氏寬平六九十三任天台座主光定入室七十二才

增命僧正

京意阿闍梨

大師弟子 寺長吏

敬一阿闍梨

内供禁裏不斷居事也大師入室弟子阿闍梨

運昭阿闍梨

同

行譽律師

寺長吏 康保四九補

餘慶權僧正

筑前國早良郡人 寺長吏 永祿元九廿九任座主号觀音院謚智辨七十三才 觀音院西坂本本願 朱雀院女昌子内親王開山

悟圓法親王 四品

村上天皇第三皇子兵部卿致平親王也圓滿院最初天元四五十一出家

永圓大僧正

始在中將從四上源成信悟圓親王在俗之子母左大臣源雅信公女

源泉大僧正

山座主 天王寺別當 法輪院 天喜三寂七十九才

覺猷僧正

寺長吏山座主天王寺別當号鳥羽僧正宇治大納言源隆

明尊大僧正

國卿息

兵庫頭小野奉時男木工頭道風孫永應三八天台座主天喜五賜封戶康平三十一儀同三司康平六六廿六寂三十九才 算曾孫也寺座主此始也

明行親王

俗名敦元

三条院皇子小一条院御子三条院御猶子号平等院御室

覺圓大僧正

宇治閑白賴通公息母因幡守種成女 法務三井長吏号宇治大僧正承徳二四十六寂六十八才

覺實法眼

京極攝政師實公息寬治六十二八寂四十一才

行尊大僧正

小一条院之孫參議從三位源基平息自法眼直任大僧正
希代之例也保安四十二十八任天台座主 寺長吏法務
護持僧牛車諸集入哥人也

行慶大僧正

白河院皇子圓滿院平等院拍僧正云寺長吏千新王入

道惠法親王

鳥羽院第六皇子母美濃更衣八幡別當光清女保延四六

四十三

圓慶法親王

於證金剛院出家七才大僧正覺藏戒師久安二二廿九為
一身阿闍梨天王寺別當寺長吏号法輪院法親王之始也

後白河院第四皇子法印權大僧都号八条宮三井長吏壽
永二法住寺合戰為義仲與明雲僧正一所逢誅

尊惠法親王 無品

二条院皇子

道譽僧正

太政大臣兼房公息号禪林院僧正

道智僧正

光明峯寺攝政道隆公息

定惠法親王 無品

後白河院皇子 三井長吏 壽永三二十九補天王寺別
當 号鳥羽宮

法圓僧正

高倉宮以仁王御子 号嵯峨僧正 寺長吏 号櫻井

圓靜大僧正

普賢寺閑白基通公息 号圓滿院大僧正

仁助法親王 無品

土御門院第七皇子 天王寺別當寺長吏 号圓滿院

四十四

圓助法親王 二品

後嵯峨院第七皇子母右衛門督局能保卿女宝治三二十
二為親王大永五三二叙二品天王寺別當 寺長吏

淨助法親王 無品

後嵯峨院皇子 弘安三十一廿一寂十八才

性覺法親王 無品

龜山院第十三皇子母左少將通能女 寺長吏

眞覺權僧正

中務卿宗尊親王息 寺長吏号宮僧正又号早田

行覺法親王 無品

後深草院第五皇子母從二位房子三条入道前内大臣公親公女 寺長吏

恒助法親王

後深草院第七皇子母別當典侍義通卿女号金龍寺宮天王寺別當 寺長吏 延慶三七寂

尊齊法親王

後二条院皇子 元永尊号常喜院

尊悟法親王 無品 俗名吉永

伏見院第五皇子母權大納言局具氏卿女 寺長吏

三山檢校 延文四廿九寂

長助法親王 無品

後伏見院第六皇子母東御方大納言實明女寺長吏三度

尊兼權僧正

花山院左大臣家定公息 寺長吏

定尊大僧正

花山院内大臣長定公息 法務 寺長吏 号頭輪院

行悟法親王

南朝後龜山院皇子 寺長吏 天王寺別當

行助法親王 俗名熙平

後光嚴院第三皇子 法務 寺長吏

圓悟僧正

南朝五常院宮卿子

圓胤大僧正

南朝五常院宮卿子 一身阿闍梨 圓滿院大僧正

尊雅大僧正

鷹司照光院太政大臣房平公息 寺長吏 從一身阿闍梨直任正大僧都

教助大僧正

内大臣公基公息大相國實氏公孫普光院左大臣義教公猶子号花山院大僧正 寺長吏 狛櫻井三門跡管領也

仁悟法親王

後伏見院第五皇子母廣義門院公衡卿女 道興受法

道悟權僧正

九條殿慈眼院關白政基公息

養慶大僧正

同男

四十五

四十六

常尊大僧正

源義昭之孫大衆院還俗久山之子寺長吏 法務護持僧
寬文十一七二寂六十八才

永悟法親王

俗名貴平

後西院第三皇子母權典侍岩倉中納言具起卿女萬治二
九十八生寬文九九廿九親王宜下村一同十三出家
御戒師常尊大僧正号法性院延室四十一寂十八才

行惠法親王

同第九皇子母按察使局高辻大納言豐長卿女延室三十
二十二生貞享元二十十一為親王十才同三四得度元祿
四五廿四依台命為聖門主六五入寺改道尊

學尊法親王

俗名有定

東山院第三皇子藤内侍局後号春日權大納言為經卿女
元祿十二十一生号三宮同十三八十六才當門入室室
永五八廿村二為親王同二十八得度同六六十八才三
叙二品正德三十二十八村七為公辦法親王附弟移于東
武輪王寺

覺淳親王

伏見貞敬親王息光格天皇兼仁御養子

實相院御門跡

智證大師

康濟律師

增命僧正

京意阿闍梨

敬一阿闍梨

運昭阿闍梨

行譽律師

餘慶權僧正

是迄圓滿院門跡系譜同斷

勸修大僧正

姓紀氏父母禱佛升求子母夢星光入懷覺而孕云々長德
二同四十二廿九兩度三井長吏寬弘二閑白左大臣道長
公建立淨明寺号木幡大僧正以勸修為彼寺檢校代々永
附彼門徒 繼智靜

心譽權僧正

左馬頭藤原重輔息右大臣顯正公孫時平公子孫寬仁元

十廿九園城寺碩學立義始之同三十一廿一依心營奏狀
園城寺唐院被置阿闍梨吉寬仁治安之間建立法城寺
寺務執行永被附智證門徒即最初執務也其後八代相傳
長元三任寺長吏云々後名隆明

行圓法橋

正四位下但馬守源國奉息光孝天皇五世之孫也智靜入
室弟子長久四十二廿八叙法橋永承頃修如意輪法壇上
生身如意輪現身放光三山三聖以行圓為大阿闍梨入壇
灌頂号唐坊法橋俗名國輔

賴豪阿闍梨

伊賀守藤原有家息從五位下光輔孫碩學修行名僧白河
院皇子敦久親王依賴賴豪祈承德元十二廿六御平產又依

賴豪咒咀承曆元八六四才薨豪舍怨成眾人是也實相坊

行勝大僧都

式部卿敦貞親王息小一条院孫良意僧正資号唐坊

勝運阿闍梨

句當惟職息尾張守藤原時房孫号室治坊

公顯大僧正

安藝守從五位上顯康王息号南龍院壽永元正八任寺長
吏 文治六三四任天台座主牛車 護寺僧 法務

覺朝大僧正

仲經息神祇伯遠江守親房孫 安貞元任寺長吏

靜基權僧正

實相院最初鷹司大納言公基卿息基通公孫從大師至當
僧正十六代灌頂相承次第如此一身阿闍梨

增忠大僧正

猪熊關白家實公息靜忠灌頂弘安八十二七任寺長吏
法務 永仁六正廿四寂六十六才

靜譽大僧正

稱念院關白兼平公息仙朝灌頂正曆五九八任寺長吏

增基大僧正

圓光院關白基忠公息覺助親王灌頂元亨四正廿八任寺

長吏 花園後醍醐光嚴光明崇光五代之護持僧号後實
相院文和元七廿一寂七十一才

增靜大僧都

基忠公男東大寺別當 東寺長吏 法印早世

桓豪大僧正

一条中納言内家卿息天台座主 号岡崎

增覺大僧正

正三位三木兼教卿息覺助法親王灌頂寺長吏号大雲寺

增仁大僧正

大納言冬經卿息 禪閣基忠公猶子增基灌頂号室昭院

寺長吏護持僧 應安元六十一寂

靜深大僧正

後淨明寺左大臣經平公息 增基灌頂 寺長吏

良瑜准三后

光明照院閼白兼基公息 增仁灌頂 准三后一座宣下

寺長吏 牛車

增珍大僧正

今小路大納言良冬公息後普光圓院閼白猶子良瑜灌頂

寺長吏兩度

增詮大僧正

改義運

十一

養德院大納言滿詮公息鹿苑院相國義滿公猶子增珍灌頂一身阿闍梨 准三后一座宣下 長吏三度

義命僧正

園城寺長吏 文安頃背師命退去

增運大僧正

後知足院閼白房嗣公息 義運灌頂 法務 一身阿闍梨 准三后 後花園院御戒師 寺長吏

義桓准三后

常盤井殿全明親王息直仁親王孫龜山院末孫 寺長吏

義運權僧正

大納言經賴卿息閼白時嗣公猶子 未灌頂也

義尊大僧正

准三后源義昭子從舜雄灌頂号法嚴院准三后萬治四正十四寂

義延法親王

俗名幸嘉

後西院第四皇子寬文二六廿九生母東三條局從一位共綱卿女寬文十一九十九親王宣下十才同月廿五入室出家天和元十廿八叙二品宝永三十九寂五才号十如院

童形宮

岑宮

靈元院帝弟五皇子母中將局安三位泰貞卿女宝永七九十五生正德二六廿一當門相續同三四廿九薨四才

十二

号顯明院

義周法親王

俗名邦光

靈元院御養子伏見邦永親王息正德二二享保十一十一親王宣下同月十六入寺得度戒師前大僧正敬祐元文五六二寂廿九才号得不退院

增賞法親王

有栖川職仁親王息寬保七二當門相續延享二十桃園院御猶子同三五八親王宣下同月入寺得度戒師前大僧正祐常同五二加行室曆七廿九移于聖護院門室

健宮

閑院師典仁親王御末子安永七八相續同九三廿七薨

号普門示現院

義海

近衛右大臣經熙公息寬政八三廿五相續享和元三廿七
入室得度戒師聖護院盈仁親王天保三三十一寂九四才
号觀真明院

棟君

二条左大臣齊信公男

五十五

照高院御門跡

道澄准三后

照光院最初 惠雲院閨白近衛植息三山檢校三井長吏

興意法親王 二品

初道勝

陽光院皇子 三山檢校三井長吏一度御浪人後洛東白
川御寺建立号照光院元和六十七於武州江戸寂五四才
号淨珊寺

道周法親王 二品

後陽成院第十二皇子母土佐局春日神主大中臣時廣女
慶長十三生号吉宮寬永十一一廿八寂廿二号興善寺

五十四

道晃法親王 二品

同皇子母三位局春日社司古市播磨守胤榮國威寺長吏三
山檢校延宝七六十八寂六十八才号通照寺

道尊法親王 無品

後西院皇子 初者聖護院宮也依病元祿十六二廿九
隱居于白川

毘沙門堂御門跡

初在塔之壇毘沙門町後移于此寬文年中建立

就毘沙門堂系圖紛失自諸門系圖座主記其外記錄等中撰出大概如此猶可考也

明禪法印

九條入道參議成賴卿男号統燒法印碩才通者名人遁世自毘沙門堂探題證儀又号林泉坊

顯瑜權僧都

号毘沙門堂僧都

經海僧正

横川竹林寺探題 證儀 号妙觀院僧正

五十五

公豪大僧正

三条左大臣實房公息 天台座主弘安元四二補

實禪權僧正

内大臣藤原公親公息右大臣實親公孫法務

實超大僧正

同息實釋舍弟

實尊大僧正

押小路内大臣藤原公茂公息大政大臣責重公孫正慶元六九自法印權大僧都同月廿四權僧正叙法務連日宣下初例

實救法眼

同男實尊僧正資

實圓大僧正

後押小路内大臣公忠公息天台座主應永廿十六補同廿三九廿講堂供養勤仕又相國寺塔供養散花勤仕

實修法印

權中納言藤原伊賀卿息大政大臣伊通公孫

公承僧正

大政大臣藤原實冬公息法務天台座主文明十七十一廿八寂

五十六

明圓大僧正

内大臣藤原實繼公息内大臣公秀公孫

忠承大僧正

九條殿普門寺關白政忠公息

公意權僧正

法性寺座主

覺真阿闍梨

觀經僧都

行然法師

仙雲法印

成尊僧正

仙尊僧都

遍豪法眼

公嚴權僧正

天海大僧正

七七

慶長十四十二九賜智衆院号同十七賜仙波星野山同十八賜日光山慶安元四十一謚慈眼大師寛永二十十二寂百廿四才

公海大僧正

花山院忠長公息慶長十一生慈眼大師弟子依台命山科郡造管寺院寛永三法眼權僧正正保四十廿僧正慶安元三四大僧正永祿五任准三后同八十五寂八十九才号久遠壽院

公辨法親王 俗名秀憲

後西院第六皇子寛文九八十一生延室五一入室同六十九親王宣下同十六才得度天和二十八十二品元祿三四日光門主後住也一品

童形

太上天皇之皇子 正德三四六薨 号淨明院

公尊法親王 俗名保良

中御門院第二皇子母權典侍清水谷實業卿女享保七正三生同七十二毘沙門堂入室御治定同十二為親王同十六九十八入室同十九四二品同廿六輪王寺為附弟

八八

仁和寺御門跡 真言宗密宗也

宇多法皇 寬平法皇又号亭子院 大師五世

光孝帝第三皇子御母皇太后斑子式部卿贈一品太政大臣仲野親王女号南宮貞觀六九九降誕元慶六正十為源氏大將元服仁和三八為親王仁和八廿六受禪廿四仁和四十一十七即位廿五寬平九七三遜位廿四昌泰二十十四出家廿六法諱空理御灌頂之時改金剛覺御戒師圓戒寺益信同十五於東大寺灌頂十一廿四於同寺受戒延喜十六廿八幸天台增命坊受法灌頂次御戒壇回心受戒于時紫金光現映承平元七十九崩八廿同九五夜奉葬於大内山依遺詔不置陵

寬空僧正

大師六世文室氏内州人香隆寺又号運臺寺元慶八年生天德四年權僧正東大寺別當天祿三二六寂八十九才

寬朝僧正

大師七世法皇三世延喜六生字多天皇御子一品式部卿敦實親王孫号廣澤僧正右大臣雅信弟重信兄長德四六十二寂八十三才

濟信大僧正

大師八世天曆八年生敦實親王息一条左大臣雅信公弟三息号仁和寺大僧正又真言院大僧正法相宗兼學云々

性信准三后 俗名師明

大師九世大御室号長和親王 三条院第四御子春宮之時之御子也母羽林大將軍濟明公女寬弘二八一生同八十五為親王七才寬仁二八廿七入室同廿九出家十四才永保三三十三直叙二品應德二九廿七寂八十一才

覺行法親王 二品 本名覺念

大師十世中御室 白河院第三皇子母典侍經子太宰大貳經平卿女承保二四生永保三三廿八入室九才應德二一十九出家廿一承德三三三為親王元一身阿闍梨法親王宜旨自此始也康和四五廿三叙三品廿八同八七叙二品尊勝供養賞御年廿九長治二十一十八寂一才

覺法法親王 二品 本名行真又改真行

大師十一世高野御室白河院第四皇子寬治五十二廿九母六条右大臣源顯房公女長治元七廿九出家廿四大治二正十二直叙二品廿七四十五才之歲御弟子入寺東寺一長者仁平三十二六寂六十二才

覺性法親王 本名信法又号泉殿御室

大師十二世法皇八世紫金臺寺鳥羽院第五皇子母待賢門院大納言公實女文治四閏七廿生保延元三二十七入室七才同六六廿二出家廿二保元三三一叙二品廿八仁安二十二初三任總法務給同日賜綱所貞永元寂八才廿九歲御弟子入寺哥人也

守覺法親王

二品

本名守性

大師十三世法皇九世喜多院御室一本北院後白河院弟
二皇子母從三位成子大納言季成卿女公實公孫女久安
六三三生保元元十一廿七入室七才永曆元二十七出家
村一安元二三六直叙二品廿七建仁二八廿九寂拉十三
廿五才歲御弟子入寺哥人也

道法法親王

本名尊性

大師十四世法皇十世後高野御室後白河院弟九皇子母
三条局法眼應仁女花園右大臣有仁公孫女仁安元十一
十三生承安四十十八室九才治承三十四十六出家十四才
建久六三十二直叙二品廿才建保二十一廿一寂和十九

道助法親王

二品

俗名長仁

大師十五世法皇十一世光臺院御室後鳥羽院弟二皇子
母內大臣信清公女建久七十六生建仁元十廿七入室
六才建永元十十七出家十一承元四十一廿五直叙二品
十五才号鳴瀧室治二正十六寂五十四才哥人也

道深法親王

二品

大師十六世法皇十二世金剛定院御室開田院梅尾又号
大聖院後高倉院弟二皇子母前中納言基家卿女建永元
九四生建保四十二十六入室出家十一寬喜元十二廿五
勸賞直叙二品師弟二品相并初例也

法助准三后

大師十七世法皇十三世開田院御室九条殿光明峯寺入
道攝政關白道家公息母准后大政大臣公經公女延應元
七廿六一身阿闍梨宣下廿三同廿七准后宣旨僧中初例
弘安七十一廿七寂四十六才

性助法親王

二品

大師十八世法皇十四世後中御室高雄御室又号甘露王
院後嵯峨院弟九皇子母太政大臣公房公女室治元生建
長三三十七為親王同年二廿六入室九才正嘉元十三出
家廿一文永十一四廿九直叙二品廿八又号甘露王院
御室哥人也

性仁法親王

二品

俗名滿仁

大師十九世法皇十五世高雄御室後深草院弟四皇子母

深性法親王

二品

玄輝門院藤原階子山階左大臣實雄公女文永四生弘安
元七十三入室出家廿三正應元十二廿五直叙二品廿二
嘉元四六叙一品廿八一品初例也

寬性法親王

一品

俗名惟永

大師廿一世法皇十七世常瑜伽院御室又号惠命院伏見
院弟三皇子母顯親門院山階左大臣實雄公女正應二生
永仁六六十六入室正安二四廿二出家廿二應長元三四

直叙二品_并三層應元正廿一叙一品五十才

法守法親王

大師廿二世法皇十八世禪河院御室後伏見院第三皇子母二位高階邦經女延慶元九十四生正和三十一廿七入室七才元亨元三十九出家_并嘉曆二十二十六直叙二品康曆元二五叙_并又叙一品哥人也

法仁法親王

大師廿三世法皇十九世後醍醐天皇第十二皇子母左近中將為道朝臣女歡應二二廿二直叙二品_并七早世

源性法親王

諱葉永

大師廿四世法皇廿世花園院第三皇子母宜光門院大納

言實明卿女建治四二親王宣下十才

尊朝法親王

本名惠仁 諱尊敬

光嚴院皇子文和四八親王宣下十二才早世

永助法親王

本名空助

後常瑜伽院御室後光嚴院第五皇子母崇賢門院從一位
藤綱公女貞治元三廿九生應安六十二廿八入室出家_并才至德二年直叙二品應永十九正叙一品_并五十八_并御弟子入寺

法尊准三后

鹿苑院義滿公息應永十九四十六准三后_并七号梵光院

承道准三后

法金剛院御室後二条院第五世孫木寺殿世平親王息後小松院御猶子應永十五八廿生同廿六廿六入室出家_并二同廿四四八直叙二品_并才亨德二十九叙一品_并又号金剛定院

靜覺准三后

本名法深

後光臺院御室木寺殿邦康親王息後花園院御猶子永亨十一正生亨德二十二十八入室出家_并五直叙二品未考年号 号上乘院

尊海大僧正

本名尋守

真光院第八代東久世相國通博公息

覺道法親王

後禪河院御室又後法金剛院御室又真光院御室後柏原院第二皇子母贈從二位源子庭田雅行卿女明應九八十一生永正七年三十三入室同十二月廿六出家_并一同十六正廿三直叙二品_并才

道永法親王

俗名高平

貞常親王息後大通院孫

任助法親王

本名寬法

嚴島御室伏見殿貞敦親王息母三条太政大臣實香公女後奈良院御猶子大永五七廿二生天文八十二廿五入室出家_并五同廿三十二廿四直叙二品_并才元龜三正叙一

宮 守理

品八十天正十二十一廿九寂六十才

伏見邦輔親王息依非器御退出云々

覺深法親王 廢太子

後南御室後陽成院第一皇子母大興侍中山太納言親綱卿女天正十五生正保五壬正廿一寂六十一才

性承法親王 本名承法

後大御室後水尾院第六皇子母局水無瀬中納言氏成卿女寬永十四正十八生号豐宮正保四九十五親王宣下十一才同年九廿七入室出家明曆二三直叙二品同三年十二一身河關梨延宝六二廿七叙一品四同廿九寂

本五

寬隆法親王

本名覺寬

後金剛定院御室法皇第一皇子母源内侍愛宕大納言通福卿女寬文十二九十二生天和二八十三親王宣下十二才諱師永同月十七入室得度宝永四九十四一品宣下六才同十六寂

守恕法親王

俗名周典

京極殿文仁親王息宝永三十二十七生号福宮同五年六廿八御附弟三享保三六廿三法皇御養子同廿八親王宣下同七四入寺得度戒師菩提院前大僧正賴遍享保五秋加行初度同七二廿閏東御發興同十一年三十三淮頂同十四四七一品宣下同九寂四号後光明壽院

慈仁法親王

室莊嚴院御室中御門院第四皇子母丹波賴庸女享保八五廿五生同九五二曼珠院相續同十四九廿一移當室同十七三廿八為親王同十九正廿二入室得度同廿年八七一品宣下同日寂十三才

遵仁法親王 俗名寬全

三摩耶心院御室中御門院第五皇子母別當内侍寬子元文三正二生同三七廿二相續寬保十二朔為親王延享四二廿七入室得度同四廿九一品宣下同五朔寂十二才

覺仁法親王 俗名恭典

金剛心院御室有栖川職仁親王息櫻町院御養子享保十

本十六

深仁法親王

七七十五生元文二二三室院相續延享四十廿五入當室同十二十五為親王同五年二十六入室得度同閏十二二品宣下宝曆四九廿一一品宣下同日寂廿三才

後喜多院御室閑院典仁親王息桃園院御養子宝曆九正十四生同十三十四為親王明和五三九入室得度同六年二廿七叙二品安永元二十十八叙一品文化四七廿一寂四十九才

濟仁法親王 俗名脩道

有栖川職仁親王息仙洞御養子寬政九三七生文化五三廿二為御養子同六廿為親王同九廿五入室得度同七十二叙一品

大覺寺御門跡

大覺寺者嵯峨帝之離宮也脫履之後承和元移嵯峨院給也貞觀十八

淳和帝太后正子內親王嵯峨帝女恒寂母奏而改佛寺号大覺寺

恒寂法親王

淳和帝第二皇子母正子內親王嵯峨帝女俗名恒貞親王号亭子皇子天長十二立太子承和元廢之依橘逸勢謀反也嘉祥二出家廿四從真如阿闍梨受西部密法曉以莊田資產捨大覺寺大覺寺者弘仁帝之故宮也仁和元九廿寂六十才

後宇多院

人王九十代諱世仁法諱金剛性龜山院果一皇子母信子

六十七

左大臣藤原實雄公女德治仁七廿六御出家一十同十一十五尊号同十一廿一於東大寺受戒正中六廿五崩八廿一

寬尊法親王 二品

本名寬融

龜山院弟廿三皇子 号西院 又号蓮華光院 天王寺別當 永和五二三叙一品哥人也

性圓法親王 二品

後宇多院第四皇子母談天門院參議忠繼女元曆二十七十六叙二品 後宇多嗣法 号南池院宮

性勝法親王 二品

俗名良治

同帝皇子母一条局參議左中將藤原實俊女

恒性法親王

後醍醐帝皇子母龜山院皇女号越中宮

深守法親王

邦良親王息後二条院孫母尾張局 益助資益性弟子号大金剛院 新千入哥人也

弘覺法親王

同親王息母宮僧正俊覺女 号大金剛院

道寬法親王

改寬教

後光嚴院皇子 寬尊入室 号龍華院

六十八

義昭大僧正

准后稱念寺鹿苑院太政大臣義滿公息 号宇智院

性深大僧正

鷹司殿關白左大臣房平公息 法務 東寺長者 号大金剛院 准三后

性守大僧正

二条殿如法壽院關白左大臣政嗣公息 法務東寺長者享祿三十一廿六寂五十六才

義俊大僧正

近衛殿後法成寺太政大臣尚通公息母相國實淳公女

准后善住院本禪意 号稱念寺
尊信准三后 本名義性

近衛殿植家公息 号善住院

空性法親王

陽光院第二皇子母新上東門院晴豐公女慶安三八廿五
寂七十八才 号後天王寺 退俗号隨菴又英侃

尊性法親王

俗名每敦

後陽成院皇子母入道大納言輝資女大典侍輝子慶長七
十八生 法務 東寺長者 慶安四三廿二寂五十才
号佛母心寺 号葬于長尾山之麓

性真法親王

俗名真敦

後水尾院第四皇子母逢春門院女寬永十六四十八生正
保四十二三入室九才 慶安四五出家十一東寺別當元祿
九正五寂五十八才

性應法親王

法皇識仁第十皇子母五條為庸女元祿元十一七生号八
十宮同四年五十二才為性真附弟同十三年八廿一才三
為親王同年十一十一八室得度室永六五十二才二叙二
品正德二八十五寂廿五 号後佛母心寺

寬守大僧正

近衛相國基熙公息享保七二十六才一得度戒師蓮花光

信性大僧正

院道恕同十二年後正才十六任僧正直叙享保十五正十四
寂才九 号後善住院
同息享保十九二九法印元文二二八正僧正同三二九大
僧正

寬深大僧正

元信性

近衛家熙公弟八息享保八生同十九二九入寺得度

深貞大僧正

近衛內前公息寬政四四廿八入室

亮深大僧正

七十

慈性法親王

近衛右大臣經熙公息寬政十三廿六入室得度文化十三
八朔法務 東寺一長者 文政元七一辭職

有栖川昭仁親王息仙洞御養子文化十生精宮文政五六
廿八為御養子同八廿二為親王同十二五入室得度

勸修寺御門跡

醍醐天皇御願所或記曰醍醐帝后母贈太政大臣高藤公女贈皇太后宮胤子之草創也云々

承俊律師

勸修寺 最初

濟高大僧正

聖室弟子延喜十八任東寺長者勸修寺長吏 天慶五十一廿五寂八十六才

貞譽權律師

承俊入室之弟子天慶七六廿一任東寺長者勸修寺長吏

遍覺大法印

八条大將息

雅慶大僧正

一品式部卿敦實親王息宇多帝孫東寺長者東大寺別當長和元廿五寂八十一才

濟信大僧正

同息寬朝僧正嗣法東寺長者勸修寺長吏 長元三十六一寂七十一才

深覺大僧正

九条右大臣師輔公息禪林寺安祥寺寺務兼帶 長久四

信覺大僧正

開院太政大臣公季公息 東寺長者勸修寺安祥寺寺務兼帶 仁海受法 應德元九十五寂七十一才

嚴覺大僧都

參議從三位源基平息勸修寺安祥寺寺務兼帶

寬信大僧都

大藏卿為房男備後守藤原隆方孫法務勸修寺長吏安祥寺寺務兼帶

雅室大僧都

權中納言藤原顯賴卿息葉室權中納言顯隆卿孫勸修寺長吏 安祥寺寺務兼帶

成室大僧正

葉室別當藤原惟方卿息權中納言顯賴卿孫 東大寺別當東寺長者安祥寺寺務兼帶 顯密兼學云々

聖基大僧正

大覺寺左大臣隆忠公息松殿攝政基房公孫勸修寺施無畏院安祥寺寺務兼帶

道室大僧正

八条左大臣良輔公息月輪禪定殿兼實公孫東寺一長者東大寺別當 法務

勝信大僧正

九条殿光明峯寺關白道宗公息東寺長者東大寺別當
法務安祥寺寺務 弘安十四七歲五十二才

道淳大僧正

一条圓明寺關白實經公息 安祥寺寺務兼帶

信忠大僧正

九条殿關白忠家公息勝信僧正受法号若宮僧正東寺長者 安祥寺寺務兼帶

教寬大僧正

九条關白忠教公息東寺長者後慈金剛院安祥寺寺務兼

帶

七十五

寬胤法親王 二品

後伏見院皇子東寺別當 親王之始 号後安祥寺殿

尊信法親王 無品

常盤井一品親王恒明息龜山法皇孫後醍醐帝御猶子東寺別當 安祥寺寺務

興信法親王 無品

崇光院第二皇子光嚴院孫 安祥寺寺務早世

尊興准三后

常盤井無品彈正尹滿仁親王息全仁親王孫崇光院御猶

子 安祥寺寺務兼帶

興胤權僧正

同息尊興舍弟 東大寺別當 安祥寺寺務兼帶

尊聖大僧正

南方玉川宮息後醍醐帝曾孫

教尊權僧正

南方小倉宮息後醍醐帝五世孫 安祥寺寺務兼帶

恒弘法親王 無品

常盤井直明王息滿仁親王孫後崇光院猶子

七十四

常信法親王

改覺圓

伏見殿貞常親王息崇光院孫後土御門院御猶子母從二位盈子賜一品重有女安祥寺寺務兼帶

海覺法親王

伏見殿邦高親王息後柏原院御猶子母上薦左大臣公興公女

寬欽法親王

同妙莊嚴院貞敦親王息母太政大臣藤原實香公女後奈良院御猶子

聖信准三后

寬海大僧正

一條唯心院關白房通公息伏見殿猶子安祥寺寺務帶
花山院左大臣定熙公息一條殿關白內基公猶子 東寺
長者萬治二十二十三寂 号後施無院

寬俊大僧正

近衛殿關白信尋公息關白左大臣信尹公孫萬治元九十
二得度^{十一}天和二十七^{十八}寂^{三十}号後觀長院

濟深法親王

俗名寬清 又道興親王云也

法皇識仁第一宮二品寬文十一八十六生母中納言典侍
前大納言實起卿女天和二十八入室^{十二}同十廿五為
親王同廿八得度戒師永應大僧正元祿五二十三受法灌

頂元祿十四十二寂^{十一}号即身院

七十五

尊孝法親王

俗名榮懷

伏見殿邦永親王息元祿十四生正德三八六靈元院為卿
養子養母福子大親王正德三九廿四為親王同三九廿八
得度^{十三}三東大寺別當延享五正廿五二品同二十八寂^{十四}
八号光明心院

寬室法親王

伏見殿貞建親王息櫻町院御猶子享保十七廿八生号
堯宮延享二十二為櫻町院御猶子同三五八為親王同十
八入寺得度同五年六廿九補東大寺別當室曆三三廿七
灌頂安永三十一廿五還俗御內意同四十八賜勅之伏見
殿相續翌十九復伏見殿兵部卿一品邦賴親王享和二九

濟範法親王

俗名清保

八號号究竟覺院
伏見殿貞敦親王息仙洞御養子文化十三生文政六十廿
二為親王同七四廿三入室同五二得度東大寺別當

七十六

三寶院御門跡

七月七日山伏當山
入峯官主三寶院殿

勝覺權僧正

堀川左大臣源俊房公息土御門右大臣師房公孫天喜土
年生東大寺覺深僧正弟子康平五八廿九任座主大治
四一寂七十七才

定海大僧正

六条右大臣顯房公息土御門右大臣師房公孫承保元生醍醐座主應德三六十六任東大寺定賢法務資也

元海大僧都

京極大納言源雅俊卿息六条右大臣頭房公孫 寛治七

七十七

生醍醐座主永久四五廿二任東大寺勝覺資也久安五十四
十二寂七十六才

實運少僧都

本明海

勝覺舍弟俊房公息長治元生長承元五廿七任座主

勝賢權僧正

本勝憲

小納言藤原通憲息保延四生東大寺別當

實繼權大僧都

權大納言公保卿息左大臣實能公孫 久壽元生

成賢權僧正

權中納言藤原成範卿息少納言信西孫應室二生載入

良海權少僧都

九条殿月輪攝政兼實公息関白忠通公孫 風入

聖海法親王

法名聖真

大炊御門宮惟明親王息 東大寺東寺法印

滕尊權僧正

養徳神祇文抄云醍醐寺座主法性寺僧正一男、
推改正三位内大臣藤原師家公五男云、
本朝名画傳云勝覺僧正松殿師家公男仁治元年四月寂年六十九云、

松殿小殿下息 師家公云

憲深權僧正

侍從通成男櫻町中納言成範孫建久三生号極樂坊

定濟大僧正

七十八

土御門内大臣定通公息久我内大臣通親公孫承久二生

定勝權大僧都

山科左大臣實雄公息西園寺入道相國公經公孫

道性權僧正

龜山院皇子弘安九生号宮僧正又号關伽井僧正
拾載續新千^二入

聖兼大僧正

猪熊摄政家實公息 法務 東大寺別當 醍醐座主永
仁元九十一寂五十三才

聖雲法親王

無品

龜山院皇子母三条局中将實平女

定任權僧正

中御門大納言藤原經任卿息中納言為經卿孫弘長二生

賢助大僧正

洞院太政大臣藤原公守公息山科左大臣實雄公孫弘安三生 護持僧 東寺一長者醍醐座主 玉三八

聖尊法親王 無品

後二条院皇子母公泰公女 号通池院

聖尋大僧正

鷹司圓光院關白太政大臣基忠公息 法務 醍醐座主

七十九

東大寺別當 東寺一長者 号東南院

賢俊大僧正

權大納言藤原俊光卿息權中納言資宣卿孫正安元生 法務 延文二閏七十六寂 五十九才

光濟大僧正

日野大納言資明卿息權中納言資宣卿孫永和二生 法務 東寺長者 醍醐座主

聖珍法親王 無品

伏見院皇子 東寺別當元德二十二廿七為親王東大寺一長者 親王初例也

光助權僧正

權大納言藤原時光卿息權大納言資名卿孫

滿濟准三后

今小路儀同三司師冬公息將軍義滿公猶子永和四生 大僧正本名持滿

義賢准三后

贈左大臣滿詮公息義滿公猶子法務 應永六生

政深權僧正

近衛殿知足院關白左大臣房嗣公息將軍義教公猶子

義覺權僧正

八十

征夷大將軍贈太政大臣慈照院義政公息 文明十五九十七寂 十六才

政紹權僧正

九条殿普門寺關白政忠公息將軍義政公卿猶子

持嚴大僧正

今小路中納言師冬卿息二条金剛院關白持通公猶子

義堯大僧正

九条慈眼院關白政基公息征夷將軍惠林院義植公猶子 永正二生 東寺長者

義演准三后

二条淨明院関白晴良公息大將軍義昭公猶子永祿元生
法務 東寺長者 醍醐座主

覺定大僧正

鷹司後法音院関白信房公息慶長十二生醍醐座主

高賢大僧正

鷹司一致院左大臣教平公息母權納言藤原敦滿卿女
寛永十六生 法務 東寺長者 醍醐座主 三山檢校

房演大僧正

鷹司房輔公息寛文十一生享保三六廿一峯入同年九六
関東下向 号自里坊

實演權僧正

近衛前攝政大政大臣家熙公息享保七二廿七附弟御本
坊入室同十八九七寂

高演准三后

鷹司関白輔平公息安永二生寛政三十一廿八大僧正

勝演大僧都

鷹司政熙公息文化四九廿四大僧都法印同七年三寂

定演大僧正

同息文政二九廿一得度大僧都法印同七四廿四權僧正
同十年四七大僧正 廿一才

隨心院御門跡

小野曼茶羅寺寛喜元年蒙宣 親
嚴門跡領賞云々後堀川院御宇後

七日御修法之賞以隨心院永為御祈願所云々

弘法大師

韓空海

姓佐伯氏讃州多度人父豐島善通母阿刀氏室龜五生延
曆廿三八唐興傳教同船大同元八歸朝天長三十一奏問
而建東寺塔弘仁七六開紀州高野山為入定之地延喜廿
一賜諡弘法大師弘仁十四賜東寺承和二三廿一寂 六才

真雅僧正

弘法大師弟也 九慶三正三寂七十五才 貞觀寺

源仁僧都

實惠弟子 仁和三十一廿二寂

聖室尊師

兵部太輔葛聲王息大友皇子孫 醍醐寺又東南院開基
延喜九七六化七十八才

觀賢僧正

姓秦氏讃州人 座主号般若寺延長三六十一寂 七才
号普賢院

淳祐内供

源激子勒孫嵯峨天皇彦或說左中辨淳茂子皆相丞孫

元果僧都

雅衆介藤原晨省子掃部頭貞敏孫 号延命院

仁海僧正

丹州典佐縣板浪里宮道氏号雨僧正寬仁二六早勅於神
泉苑修請雨經法大雨下三日夜長元五長久四凡九度皆
降雨 永承元五十六寂九十二才号小野僧正

成尊僧都

仁海僧正僕隸之子也延久六正七寂 号小野僧都

範俊僧正

曼茶羅寺從東寺成尊典義範齊名大戒儀師仁勢之子或
記曰興福寺仁勢成儀猶子 号鳥羽僧正

嚴覺大僧都

八十三

增俊阿闍梨

參議上總介忠基子宰相源基平孫 号勸修寺

隨心院最初 中納言國俊息

顯嚴僧都

直講從五位上中原廣忠男 東寺長者 東大寺別當

親嚴大僧正

飛彈守中原親光男掃部頭中原廣季朝臣猶子 東寺長
者 勅入

嚴海大僧正

入道刑部卿賴經朝臣息 法務 東寺長者

宣嚴權僧正

左大辨宣房息 東寺長者 法務

俊嚴權僧正

正三位藤原俊經卿男參議左大辨頭業孫法務東寺長者

嚴惠權僧正

大納言藤原高資卿息太政大臣良平公孫 權大僧都
号弘誓院 今入

靜嚴大僧正

一条圓明寺關白實經公息法務東寺長者 醍醐座主
護持僧 牛車 永仁七正七寂五十七才

八十四

嚴家大僧正

一条殿攝政左大臣俊光明寺家經公息 法務 護持僧
東寺長者 醍醐座主

經嚴大僧正

同息 護持僧 法務 東寺長者

通嚴權僧正

一条殿關白左大臣俊芳陀利花院經通公息

照嚴權僧正

同息

嚴叡權僧正

二条殿関白左大臣是心院師良公息

祐嚴准三后

一条関白左大臣成恩寺經嗣公息 東寺長者 法務

嚴室准三后

一条関白内大臣後成恩寺兼良公息 東寺長者 法務
東大寺別當

持嚴大僧正

二条殿大漆金剛院関白大政大臣持通公猶子實父今小路大納言藤良冬卿法務醍醐座主護持僧東寺長者

公十五

忠嚴准三后

九条殿関白内大臣普門寺政忠公息 東大寺別當

仙朝大僧正

紀伊守從五位上雅重男從三位行宗孫 東大寺別當

長靜權大僧都

参議從三位藤原定長卿男伊豆守光房孫 東大寺別當

增孝大僧正

九条殿後月輪関白左大臣兼孝公息母從三位照子藤原永家卿女 法務 東大寺別當東寺長者 護持僧

榮嚴大僧正

九条殿関白左大臣幸家公息母丹波少將秀勝女 東大寺別當 護持僧

俊海大僧正

鷹司殿前左大臣教平公息天和二五廿六寂三十四才

亮嚴大僧正

九条殿後洞院輔實公息寛保三四九依勅命令復本宗廿七

增護大僧正

二条殿左大臣治孝公息童名家壽君文政二五七八室得度大僧都同八十二十九大僧正護持僧

公十六

從安政二年乙卯七月 東寺 一長者 法務

嘉宗
安井御門跡

号蓮華光院小川門跡又岡崎門跡
ト云下河原門跡是者前之事也

道尊大僧正

高倉宮以仁親王息 法務 東寺長者 東大寺別當

道乘大僧正

後鳥羽院第七皇子賴仁親王息

道圓法親王 無品

土御門院皇子母治部卿局弘安四壬七十五寂五十四才

道融大僧正

西園寺大相國公經公息

性融大僧正

法親王 無品

龜山院皇子母左大將通能女高野御室覺法灌頂

益助大僧正

岩倉宮忠成王息

益性法親王 二品

龜山院第十九皇子

益守法親王

龜山院皇子恒明親王息

乘朝法親王

同息

道永法親王

俗名高平

貞常親王息

寬守法親王

無品

後光嚴院皇子 文安三二廿二寂六十九才

道朝法親王

後圓融院第二皇子母從三位今子從一位隆鄉卿女

義昭准三后

大學寺從是兼帶慶院院義滿公息

性演大僧正

西園寺左大臣公益公息 安井再興 法務 東寺長者

東大寺別當

道恕大僧正

久我左大臣廣道公息鷹司前攝政房輔公猶子寬文八生
東寺長者延室四八廿八入室九同六年得度十一貞享元
十二廿九直任法印大僧都十七同五二廿九任權僧正元
祿四十八東寺受戒同五年三廿任大僧正廿五同三廿六
傳法灌頂入壇同四二東大寺拜堂享保三三廿八東寺長
者同十八年十一十五寂六十六才号後法界心院

了尊權僧正

享和二十七七生文化四八十三附弟同十三十一廿五得
度同日大僧都文政二五廿八推僧正同四正廿三寂才
号自性觀院

全九

定昭大僧都

法相宗
一乘院御門跡
南都一乘院本願法務又興福寺
金剛峯寺別當寺長者頭密兼學

定好已講

貞信公子小一乘院左府師尹公息号本願僧都任敬僧都
弟子又兼真言宗仁和寺寬空僧正受法灌頂弟子為東寺
四長者之始釋書法務興福寺金剛峯寺別當東寺
長者永觀元三廿一寂

真範大僧正

三綱義俊從義師息院家卓創最初也号本願已講
播磨守平生昌男京極太政大臣為光公猶子清水律師清

九

賴信權僧正

範附法定昭依附之弟子也元興寺山階寺長谷寺別當
甲斐守藤原賴經男真範附屬弟子法務法華寺山
階寺長谷寺別當承保三六廿三寂

賴尊大僧都

太宰大貳藤原實康息号康和僧正興福寺大安寺別當

覺信大僧正

京極攝政關白太政大臣師實公息法務法華寺山
階寺法成寺興福寺別當一乘院本願別當

玄覺大僧正

同息 号中僧正 興福寺 山階寺兩別當

覺英少僧都

後二条關白師通公息 回國保元二十十七於奥州葛松
原寂 四十一才

覺繼大僧正

改惠信

法性寺關白太政大臣忠通公息母陸奥守基雄女号伊豆
僧正 興福寺別當 法成寺別當 法務

信圓大僧正

同息 号菩提山本願 慈圓大僧正兄也 大乗院兼帶
法務 興福寺金勝寺別當

九十一

良圓大僧正

九条殿後法性寺關白兼實公息母修理太夫賴輔女
興福寺別當 承久二正十四寂

實信大僧正

近衛殿普賢寺基通公息号發心院僧正 興福寺別當

實靜少僧都

近衛殿猪熊關白家實公息 實信弟子 興福寺別當

信昭大僧正

近衛殿岡屋撰政關白兼經公息 法務 興福寺別當
弘安九六十四寂

隆信禪師

九条殿一音院忠宗公息 尊信信昭兩僧正弟子 大乗
院兼帶 興福寺別當

覺惠禪師

同報恩院關白忠教公息 信昭弟子 興福寺別當

覺昭大僧正

近衛殿深心院關白基平公息母左少將通能女 法務
延慶元五十六寂 号後清靜光院

良信大僧正

鷹司殿圓光院關白基忠公息 号後發心院 法務

九十二

良覺大僧正

興福寺別當文保三七十二寂 五十一 拾玉載續新千八百
近衛殿淨妙寺關白家基公息号松超寺僧正法務興福寺
別當正慶元八十一退寺同十四寂 四十三才

信助禪師

同息 興福寺別當 法務

覺實大僧正

近衛殿岡本關白家平公息 法務 興福寺別當
号喜光寺 觀應二五十八寂 四十二才

玄圓法親王

實玄權少僧都

後醍醐帝第十三皇子 法務 興福寺別當

近衛殿堀川關白經忠公息 興福寺別當

良玄大僧正

二条殿後普光園院關白良基公息 後醍醐帝皇子南方中務親王息 法務 准三后

良昭大僧正

近衛殿後深心院關白通嗣公息 号喜光寺 法務 興福寺別當 應永九四廿三寂 四十才

玄昭得業

近衛殿後六条授政右大臣兼嗣公息 興福寺別當

九十五

良兼權僧正

同息 号後松昇寺僧正興福寺別當應永廿一九廿三寂 三十

昭圓僧正

鷹司殿後一心院右大臣冬家公息 法務 興福寺別當

教玄僧正

鷹司殿後照光院關白房平公息 法務

信言得業

同息 興福寺別當

良譽大僧正

近衛殿後法興院關白政家公息 法務 興福寺別當

覺譽大僧正

近衛殿法成寺關白尚通公息法務 興福寺別當 永保五四十五寂 号增長院

覺慶得業

萬松院贈左大臣源義晴公息贈太政大臣義詮公孫母准后前關白尚通公女

尊勢大僧正

近衛殿東求院入道前關白前久公息准三后 法務

本

尊覺法親王 二品

興福寺別當

後陽成院第十皇子中和門院前久公女慶長十三生同十五二廿九三才為親王萬治二四六十一得度 興福寺別當 寬文元七廿六寂 五十四才 号明了院

信敬法親王 改真敬

後水尾院第十二皇子母園基香卿女新中納言典侍慶安二四廿四生 号登美宮洛陽清水寺寺務 室永三十六寂 五十八才 号三菩提院

尊昭法親王

法皇誠仁第十三皇子母藤式部卿局个城中納言定淳御

女元祿十二十一廿二生号多喜宮同十五二廿一入室宝永六三廿二親王宣下同四廿四出家享保四五六二品興福寺別當延享三九十四寂四十八才号廣莊嚴院

尊快法親王

京極家仁親王息櫻町院御養子延享三十一二生号良宮宝曆九十廿六為親王同十二九入室得度 寛政五十十七一品同十二九寂 号常叔院

龜代宮

有栖川織仁親王息寛政元二一生同七年入室文化五七童形彩輪王寺

尊誠法親王

俗名忠通

生

伏見殿貞敬親王息 仙洞御養子文化三生号梁宮同二十七入室里坊同廿二為親王同十四五十一得度文政五八廿四寂 号平等院

尊常法親王

伏見殿貞敬親王息文政元六十四生天保三十二三得度同七六廿六寂 号知心院

尊應法親王

同息當今惠仁御養子文政七正廿八生天保七六廿御養子天保九壬四廿三得度

法相宗
大衆院御門跡

寛治元二隆禪僧都建立

隆禪權大僧都

左少將藤原政兼男兼貞孫母從三位濟政女長谷寺大安寺別當大衆院本願初祖 康和二七十四寂六十三才

賴實權少僧都

成賴子 神受院建立

尋範大僧正

京極攝政関白師實公息母師通公女号内山 法務興福寺 長谷寺別當 千二八

信圓大僧正

法性寺関白忠通公息母中納言源國信卿女 法務一乘院兼帶 千二八

實尊大僧正

松殿攝政関白基房公息 法務 千二八

圓實大僧正

光明寺攝政関白通家公息母太政大臣公經公女 法務又橘寺別當 文永元十一廿六寂

實信大僧正

普賢寺攝政関白基通公息 法務一乘院兼帶葛川住寺

尊信大僧正

洞院攝政関白教實公息藥師寺又菩提山別當号室峯寺

慈信大僧正

圓明寺攝政関白基經公息号大善三昧院正中元十二寂

尋覺大僧正

後光明寺攝政関白家經公息 久和二八廿七寂

尋尊大僧正

九条殿淨土寺攝政関白師教公息

聖信權少僧都

一条殿栖心院内大臣内實公息嘉曆二七十九配流隱岐國

孝覺大僧正

九条殿後一音院関白房實公息法務長谷寺藥師寺攝寺別當

孝尊大僧都

九条殿後報恩院經教公息依衆徒所配流早世

孝尋大僧正

一心院関白冬通公息實冬通公息法務興福長谷兩寺別當

孝信權少僧都

長谷寺又攝寺別當

九条殿後報恩院関白經教公息

孝圓大僧正

興福寺又長谷寺又攝寺又藥師寺別當

後報恩院関白經教公息 法務

經覺大僧正

同息 号安位寺

尋實

後三緣院関白滿教公息 早世

尋尊大僧正

一条殿兼良公息 法務

政覺大僧正

大深金剛院関白持通公息

慈尋

後妙華寺関白冬良公息 早世

經尋大僧正

九条殿慈昭院政基公息 法務興福寺長谷攝寺別當

尋圓少僧都

九条殿尚經公息法務興福寺長谷寺攝寺別當

尋憲大僧正

後大深金剛院関白尹房公息 從法務同前

義尋大僧正

征夷大將軍義昭公息還俗号久山後号法源院高山

信尊大僧正

鷹司殿後法音院關白信房公息 寺務三ヶ度 延室四
四三寂八十才

信雅大僧正

同一致院左大臣教平公息寬永十九生 寺務

信覺大僧正

鷹司殿關白房輔公息元祿十二八為興福寺別當

隆尊大僧正

同息元祿四生同十五九十得度室永三為興福寺別當正
德四九辭別當同月轉仕大僧正 廿五才

隆遍大僧正

二条左大臣吉忠公五息享保六正廿八生号翁君同十九
四得度同十八四入寺同十九廿六任大僧都同五八參内
享保廿四十一受戒會元文二六卅法華會修行安永六五
八寂号後竟華壽院

隆範大僧正

鷹司殿關白輔平公息号光明寺

隆實大僧正

後改昭尋

鷹司關白政熙公息文化三九廿五大僧都法印同十四年
大僧正文政十一九隱居号隨應院天保三十二廿一寂

隆溫大僧正

二条左大臣齊信公息文政十三年四二得度同日大僧都
法印天保六三八大僧正

淨土宗

智恩院御門跡

良純法親王 二品

大御言

後醍醐

後陽成院第八皇子母庭田重通女元和元六廿八征夷大將軍家康公為猶子 号八宮 智恩院御門跡最初慶長九三廿九生寬永十九十二十六廿九才為親王寬永廿九十七入室得度同十一十一配流甲斐國萬治二六廿七歸朝後還俗号以心菴重雅寬文九八朔寂六廿号无礙光院

尊晃法親王 二品

俗名良賢

後水尾院第十二皇子母四辻亞相季繼卿女權中納言典侍慶安四十一廿六大猷院殿為猶子正保二九十九生明曆二五八入室出家廿二承應三四六為親王延寶七十二

二品同八正六寂六廿号無量威王院安永七十一六贈一品

尊統法親王

有栖川幸仁親王息靈元院御養子元祿九五九生同十一八十三智恩院相續室永元十三常憲院殿為猶子同四三廿九為親王廿二同六十三入室得度室永六十九二品廿四正德元五十八寂六十六号壽經光院文化八五十六贈一品

尊胤法親王 二品

靈元院第十五皇子母玉垣局改小納言正德五三六生享保十二正廿二為親王同三十九入室得度同十五九廿四二品同日一身阿闍梨元文四十二廿六寂六十五号最勝光院天保九十十九贈一品

尊峯法親王

京極家仁親王息櫻町院御養子元文六正八生号富貴宮寬保二十一十六御步行始同三十二朔色直延享二十二十八深曾木室曆四五廿七為親王同八廿五得度明和元五六大樹家重公為猶子同二九二品天明八七廿一寂四十八才号无邊光院文化八五十六贈一品

尊超法親王

俗名禰道

有栖川織仁親王息光格天皇御養子將軍家齊公猶子享和二年七月十日生文化五八十九為御養子同六八廿七為親王同九廿七入室得度同十四年二廿六二品十六天保八十一廿二牛車宣下

百一

百二

本願寺御門跡

在鳥九七條淨土真宗嫡流

親鸞聖人 韓善信

姓藤原氏天兒屋根命廿一世大織冠玄孫贈太政大臣內
唐公六代或云參議有國卿五代皇太后宮權大進有範男
母對馬守源義親女承安三年四月朔生童名若松或云公十
又松應叔父從三位範綱卿養子養和元年三月十五日入
慈鎮和尚之門得度号範寧少納言公為山門住侶登檀受
戒補聖光院門主時大僧都建仁元年隱遁入於法然上人
吉水禪室改名緯空為上足弟子又依夢告師善信承元元
年淨土宗益隆於是南都北嶺黨議大起朝議遂處師第
于遠流師空師土位國建曆元年赦免上卿範綱中然為化益

如信上人 号

猶在于北陸東關二十餘年其在稻田也著教行信證六卷
大創建宗旨淨土真宗於是乎盛矣後遂還于京師實貞永
元年矣住五條西洞院房弘長二年十一月廿八日遷化于
萬里小路押小路南角坊善法院今法泉時年九十紫見干
東山鳥部野今不詳地建廟堂於吉水北大谷安影像遷化後
真宗日益興隆朝廷大喜獎文永九年十一月五日陞大
大谷坊舍勅願寺賜紫殿模造為影堂賜号久遠實成阿
彌陀本願寺明治九年十一月廿八日勅賜見真大師之號

祖師聖人孫父慈信房善鸞延應元年生受法脈于祖師号
大納言上人弘安三年十月朔宗勢于本坊始祖師遷化末
女覺信尼公始據左衛門佐廣綱廣綱從三位範綱卿子攝
宗勢主於本坊而其所生覺惠阿闍梨為留主職蓋今師常

宗昭法印 覺如

化于東國創一寺於奥州白川郡大綱大綱道場後遷于
願入寺世門室而居焉延慶三年讓本坊於覺惠息宗昭法
印而老正安二年正月四日遷化于常州金澤道場時年六
十二

祖師聖人曾孫左衛門佐廣綱孫阿闍梨覺惠男母中原氏
周防權守某女祖母覺信尼公文永七年十二月廿八日生
童名光仙唐權中納言兼仲卿猶子号勘解由小路法印權
大僧都能和歌新十載始七八歲學天台宗於慈信房澄海
海大奇其才曰師佛家棟梁德海舟楫又從于宗澄法印及
南龍院僧正淨珍而學焉弘安九年十月廿日得度于攝州
原殿禪房為一乘院信昭大僧正門侶學法相宗于西林院
行寬法印同十年弄所學入於大谷調如信上人面授口訣

俊玄法印 善如

正應中行化于關東正安中先師遷化偶有故大谷法流少
蹉跌故師之奥州延慶元年四月還于京師上皇賜大谷
坊舍如故院宣房卿本有同三年遂嗣宗勢建武三年坊舍罷
兵火師避亂於江州延元二年還于京師曆應元年再造大
谷坊舍二年秋移住馬觀應二年正月十九日遷化時年八
十二當師世也有祖師親弟或唱異義者加之本坊荐經災
厄法流將不振故師勤力于述作嘆美祖德恢復宗風云

宗昭法印孫權大僧都法印從覺子正慶二年二月二日生
童名光養唐權大納言俊光卿猶子号大納言法印初童跡
聽昇殿叙從五位下任伯耆守實名宗康云既出家得度為
先師法嗣任權大僧都叙法印文和元年嗣宗勢康應元年
二月廿九日遷化時年五十七

時藝法印 倬如

俊玄法印男觀應元年三月十五日生童名光德磨權大納言時光卿猶子号中納言法印權大僧都又号亮雲明德元年嗣宗務同年春會異邦獻書于 本朝書辭艱澁難遽訓詰詔諸寺募能讀者青蓮院道圓法親王以師應焉召使讀其書於 關廷具訓解而上 主上大賞其博宏特詔賜号周圍上人使講大無量壽經於紫宸殿賞賜聖德太子尊像與巨勢金岡所畫太子傳繪八軸是時師得奏可創一寺於越中國礪波郡安所賜尊像與傳繪詔為教願寺瑞泉寺是也此寺門室連明明德四年四月廿四日遷化于瑞泉寺時四十四

玄康法印 巧如

夏

時藝法印男永和二年四月六日生童名多賀磨大納言資康卿猶子号大納言法印權大僧都号證定閣應永元年嗣宗務永亨十二年十月十四日遷化時年六十九

圓兼法印 存如

玄康法印男應永三年七月十日生後瑞雲院贈左大臣兼宣公猶子号中納言法印權大僧都嘉吉元年嗣宗務長祿元年六月十八日遷化時年六十二

兼壽法印 蓮如

圓兼法印男母不知何許人應永廿二年二月廿五日生童名布袋磨又稱中納言兼卿猶子永亨三年得度号中納言法印權大僧都青蓮院尊應准后門侶學法相宗于大衆院經覺僧正寶德中行化于北陸東關多興隆祖師遺跡長

祿元年嗣宗務再行化于東北當是時大谷法流大振 朝廷賜日華門為大谷正門增莊嚴焉山門嫉之寬正六年正月山徒滅大谷坊舍師奉祖像出之于天津居近松坊舍假為本坊應仁元年行化于參州建本宗寺止住三年文明二年移錫于攝桑同三年三行化于北國留于越前國建吉崎坊舍而居五年同七年還自吉崎在攝河泉之間亦多年矣建光善寺河教行寺攝信證院泉州後号等同十二年遂相地于城州山科再造本願寺十三年六月八日慶之始應仁二年讓宗務于長男光助法印願成就院權大僧都願如先母平氏下總守貞房女遷化文明十五年再主宗務延德元年讓宗務于光兼法印而老焉後所經歷亦不一焉建本德寺攝本善寺大坂坊舍等而止住明應八年二月遂還于山科三月廿五日遷化時年八十五号信證院本寺再興ノ大跡業アルヲ以テ中興ト稱ス明治十五年三月二十二日勅シテ慧燈大師ノ號ヲ賜フ

夏

光兼法印 實如

兼壽法印五男母平氏下總守貞房女長祿二年八月十日生童名光養磨唯彌院左大臣勝光公猶子文明五年得度号大納言公法印權大僧都青蓮院尊應准后門侶延德元年嗣宗務當是時四海兵亂年久 朝廷經費或有闕永正十八年 後柏原院即位請獻資料大禮初成 朝廷大嘉賞詔補于門跡賜香衣大永五年二月二日遷化時年六十八号教恩院

光教權僧正 證如

光兼法印孫通增院權少僧都光融圓男母法印兼譽女永正十三年十一月廿日生童名光仙磨後改光養磨慈眼院開白方大臣尚經公猶子大永五年正月十八日童體嗣宗

移同七年四月二日入青蓮院尊鎮法親王室得度号大納言公同日直叙法眼天文元年八月六角彈正少弼定賴火山科本坊於是移于大坂坊舍遂為本願寺本坊山石同六年正月任大僧都十四年四月叙法印十八年正月廿六日辱賜勅宣嘉慶宗德推任權僧正北三年八月十三日遷化時年三十九号信受院

光佐大僧正 顯如

光教僧正男母重子源中納言重親卿女天文十二年正月六日生童名茶茶磨東光院關白内大臣植通公猶子同北三年八月十二日得度弘治元年四月十二日直叙法眼任大僧都嗣宗務同年任權僧正永祿元年正僧正二年十二月十五日勅世補于門跡勅使萬里小路大納言考房卿三年十月補任院家元龜元年平信長以本寺形勝之地也意

百七

將城之且疾宗門之大強令去之衆議拒絕信長怒搆兵于石山連年不解天正七年信長倦于連戰不利請天裁議和八年三月源大納言重通卿藤中納言晴豐卿臨于石山遂講解四月九日師去如紀州在鷺森原信長暴怒又加兵也留新門池壽于石山處分後圖八月二日光壽遂去如紀州在和歌父子猶隔居港相應援十年六月信長果背盟違將士國鷺森會信長遇害事遂止於是父子同移于泉州居貝塚十三年任大僧正足年關白秀吉公賜地于攝州天滿川崎建本坊八月十三日移住馬十九年改賜京師堀川七條之地建本寺八月五日移于此文祿元年十一月廿四日遷化時年五十号信樂院

光壽大僧正 叡如

光佐大僧正嫡男母右京大夫源晴元女永祿元年九月十

六日生童名茶茶磨東求院准后前久公猶子元龜元年二月十六日得度直叙法眼同年秋平信長搆兵于石山天正八年和議成出如紀州後與先師同移于貝塚天滿等地十四年十一月十三日推任權僧正北三年八月十三日遷化時年三十九号信受院

光從大僧正 宜如

光壽大僧正男母家女房慶長九年二月廿二日生童名長磨後月輪關白左大臣兼孝公猶子十九年十月五日得度即日嗣宗務元和二年九月十三日直叙法眼任大僧都五年七月十一日法印八年八月十七日權僧正寬永四年八月十四日正僧正七年十二月十日大僧正十六年大猷院大將軍加賜封境之地承應二年十二月讓宗務于光瑛大僧正而老万治元年七月廿五日遷化時年五十五号東泰院

光瑛大僧正 琢如

光壽大僧正男母家女房慶長九年二月廿二日生童名長磨後月輪關白左大臣兼孝公猶子十九年十月五日得度即日嗣宗務元和二年九月十三日直叙法眼任大僧都五年七月十一日法印八年八月十七日權僧正寬永四年八月十四日正僧正七年十二月十日大僧正十六年大猷院大將軍加賜封境之地承應二年十二月讓宗務于光瑛大僧正而老万治元年七月廿五日遷化時年五十五号東泰院

百八

光從大僧正男母惟村院關白左大臣幸家公女寬永二年七月二日生童名茶磨後淨土寺攝政左大臣道房公猶子寬永十五年二月廿九日得度直叙法眼十六年七月廿五日大僧都十七年二月廿六日法印十八年六月十五日權僧正正保四年六月十五日正僧正慶安四年三月六日大僧正永應二年十二月嗣宗務同年嚴有院大將軍賜大谷祖廟之地寬文四年十二月讓宗務于光晴大僧正而老十一年四月十四日遷化時年四十七号淳寧院

光晴大僧正

常如

光瑛大僧正男母本源自性院關白左大臣信尋公女寬永十八年五月四日生童名茶磨惟村院關白左大臣幸家公猶子永應三年四月廿二日得度直叙法眼明曆元年五月十五日大僧都二年六月三日法印四年三月廿二日正

見

僧正万治四年二月廿四日大僧正延寶七年十一月讓宗務于光海大僧正而老元祿七年五月廿二日遷化時年五十四号泥洹院

光海大僧正

一如

光瑛大僧正四男光晴大僧正弟母後如雲院准大臣兼賢公女慶安二年七月一日生童名利與磨万治四年三月十日得度直叙法眼性号恩光院本瑞寺主務後轉于大信寺主務改名瑛舍法号琢亨延寶六年五月十二日入為光晴大僧正法嗣應圓滿院關白太政大臣基熙公猶子同月十四日直叙法眼八月九日大僧都七年正月十七日正僧正法印十一月嗣宗務八年二月三日大僧正元祿十三年四月十二日遷化時年五十二号無凝光院

光性大僧正

真如

光晴大僧正男母家女房天和二年二月十日生童名悅磨後改光養應讓樂院准后家公猶子為光海大僧正法嗣元祿六年八月廿八日得度直叙法眼十二月十九日大僧都七年二月八日法印十年九月三十日正僧正十三年四月嗣宗務十四年六月十六日大僧正延享元年十月二日遷化時年六十三号功德聚院

光超大僧正

從如

光海大僧正孫深諦院海縣男母家女房享保五年六月十七日生童名季磨十二年七月二日得度名性慧法号真圓号諦住院後改深信院教行寺主務延享元年光性大僧正遷化法嗣光濟法眼德光海大僧正孫超結院海立十二月十

早

光遍大僧正

兼如

二日疾病立師為附弟既而遷化宗務二年二月十八日疾為大解脫院關白太政大臣內前公猶子二年二月十八日直叙法眼五月廿八日大僧都三年正月廿四日正僧正法印同年二月信院大將軍加賜大谷祖廟封地寬延元年三月廿九日大僧正寶曆十年七月十一日遷化時年四十一号清淨光院

光性大僧正男母一品幸仁親王女實母家女房延享元年十一月十六日生童名悅磨後改光養磨為光超大僧正法嗣大解脫院准后內前公猶子寶曆六年三月十二日得度直叙法眼八月十七日大僧都七年正月廿九日法印九年三月廿五日正僧正十年七月嗣宗務十三年八月廿二日大僧正天明八年正月晦本坊四祿移住于山科二月廿二日

移于東殿寬政元年三月廿八日始土木事二年文恭院大將軍賜飛驒國巨材四千六百餘本四年二月廿二日遷化時年四十九號歡喜光院

光朗大僧正

達如

光通大僧正男母兵部卿貞建親王女實母家女房安永九年正月廿六日生童名光養唐大解脫院准后內前公猶子寬政四年二月十九日得度直叙法眼廿二日嗣宗務八月廿六日大僧都法印五年正月廿日正僧正六年正月晦大僧正十年三月廿八日影堂供養會四月二日本堂供養會文政六年十一月十五日再係火災移居于大谷十二月十六日移于東殿八年正月文恭院大將軍賜飛驒國巨材二千三百餘本十年六月創土木事天保六年三月六日影堂供養會十一日本堂供養會弘化三年五月廿三日讓宗務

于光勝大僧正而老于叔般殿号無上覺院

光勝大僧正

嚴如

光朗大僧正三男光淨大僧正第母後讓樂院右大臣經熙公養女實文恩恭院准實母家女房文化十四年三月七日生童名謙君文政十一年三月十八日得度名朗澄法号達住号靈心院大通寺江本德寺等主務文政十三年十月廿二日直叙法眼十一月廿一日權少僧都天保十二年二月四日法印權大僧都今茲四月六日法嗣光淨大僧正實如院成就遷化故其十二月入為法嗣近衛右大臣忠熙公猶子十三年二月九日正僧正十四年正月十四日大僧正弘化三年五月嗣宗務

光瑩大僧正

現如

光勝大僧正四男嘉永五年七月廿七日生

附錄

真宗同派
本願寺御門跡

在于七條堀川
俗稱西

列祖出于前

乃至第十一世光佐大僧正李子阿茶磨同願大僧正天正十九年二月得度而号理光院主本行寺繼文祿三年九月得禮太閤旨主寺勢名光昭号順如順如是本願寺西派始元時諸慶長十三年十二月任大僧正寬永七年十一月廿九日遷化時年五十四号信光院以來相承九世世々任大僧正

興正寺御門跡

在于西六條
初山城國山科后丰移于今地

蓮教上人

當寺開基元主佛光寺号經豪文明年中辭寺而本願寺兼壽法印歸屬于時改蓮教後舊号名興正寺天德四年五月二日遷化時年四十三四世顯尊本願寺時沈班入嗣相承于時永祿十二年八月始補門跡任權僧正慶長三年三月遷化時年卅六以來相承十世世々任僧正

真宗別派
佛光寺御門跡

在于五條坊門高倉
初於山城國山科縣建立号興正寺中古同國移于滋谷后又移于今地

真佛上人

柏原天皇末孫鎮守府將軍平國香後胤下野國大内家息從親鸞聖人附法相承真佛如關東之日寺附屬源海關山

七世了源時在佛光映照鳳闕瑞故改興正寺
勅号佛光寺十三世光教時始補門跡云十六世經範以
來世々任僧正

同別派

專修寺御門跡

在于勢別奄藝郡一身田
初於于下野國芳賀郡高田建立后移于越前
熊坂中古以來移于今地野州高田以其兼帶仍
稱高田門跡

真佛上人

世系從親鸞聖人附法相承而主寺勢正嘉三年三月八日
遷化時年五十滅后使頭智為住勢關弘十世真惠時始補
門跡任大僧都云云以來世々僧正又任大僧正

百十三

同別派

一 錦織寺御門跡

在于江州野洲郡木部村

綱嚴權大僧都 慈觀

本願寺第三世宗昭法印孫常樂臺光玄法印真弟康永二
年十月十七日於隨心院門室得度戒師經嚴大僧正贈左
大臣兼綱公猶子觀應二年入嗣錦織寺為中興康應二年
七月二十日遷化但師入嗣以前住
勢系譜不一仍關五世兼為時辭寺而本
願寺兼壽法印歸屬后廣橋内府兼秀公男入嗣号慈益任
權大僧都世々一條殿為猶子補門跡

小野

御藏

御殿

弘化
二乙
巳年

赤松光映 著

天台圓宗列祖略傳

明治十八年（一八八五）大阪赤松氏刻本

據明治十八年（一八八五）
大阪赤松氏刻本影印

明治十八年新刻

天台列祖略傳全

赤松氏藏版



天眞

天台列祖略傳

獨行

明治十六年九月

二不朝表親王



天台列祖略傳

卷二

晁言



原丈人能弘道非弘人矣
吾本師迦文崇仰梵曾兩
大法雨三草二本各蒙所潤
廣長音息于糖舟然而四
依代勅樹示風界以衆東
漸以降 飽文醍醐若楚越

天台列祖略傳

卷三

之竹亦不能化焉嗚呼
列祖偉德豈可不欽仰耶
憲法友處岳岳和太教正學
餘內外令望治四海或法師
於道所法所著實不誣也所
頃日撰僧史之要領歷年三
國諸祖之苦獨題曰天台圖

宗列祖畧傳其文簡而精易
補不難曉則使讀者知諸祖
鴻恩且見賢思齊者多矣
策勵後進善巧之至也蓋以
可謂間世法孫弘道不鐸哉
諸佛子苟儒之編者宜思師
厚志復勿敢忘焉

天治列祖略傳

開治十六年 初冬

國城沙門研堂祐玉



天治列祖略傳

余為童蒙學家位以內典
探之解以講古文序經一日
招予之童特示卷云夫為
孝之道大也哉世間有子
道矣豈不吾出世百為佛子
之道也何則可曰一業佛就

天治列祖略傳

五

度之所不故毀諸孝之始也
自行化他布教於世兆以
佛祖孝之終也耳業之小子
白忘祖孝之思勿為不孝
之子風亦匪解東勉旃是
余之誨次示卷之卷以而亦
不末之自哉也為以錄樹

此以未出一卷示予且微序
 要而論之師之近著列祖畧
 傳也余辟席曰嗚呼是哉
 吾台宗有此師是此作師學
 之徒無任感佩五事之芳而
 當一冊予使世一兩祖之為
 且而悲之可感者此之賜也可

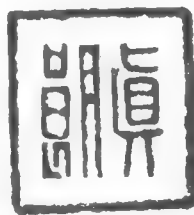
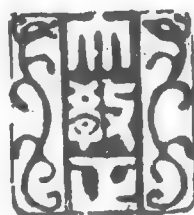
歐陽列祖略傳

歐六

謂授回予我師海顏深之一器
 械輩出予我緇林存子之大
 方聖也亦風流是可振祖門
 自是可知也以此著之切亦傳
 也哉師良哉之碩德都奉
 嘗高堂學國深石耳先師
 之友予皆以此知三十年之

茲以視之久矣不可不
 記以存序
 四月甲申之夏

東門外子元養其良之書



歐陽列祖略傳

歐七

天台圓宗列祖略傳

日東 沙門光映 錄

法華經云世尊未出時十方常聞暝幸矣夫大
恩教主釋迦牟尼如來坐生於迦毘羅城中而
化益闡浮衆生矣然其法門高深洪博末代衆
生皆苦大小半滿其難辨別幸中有幸吾天台
智者大師揮四教五時良刀而料理一代高洪
法味矣蓋藥不執方隨病而用故四教中有化
儀有化法頓漸祕密不定爲之化儀藏通別圓
爲之化法又有大小相對真中相對權實相對

天台圓宗列祖略傳

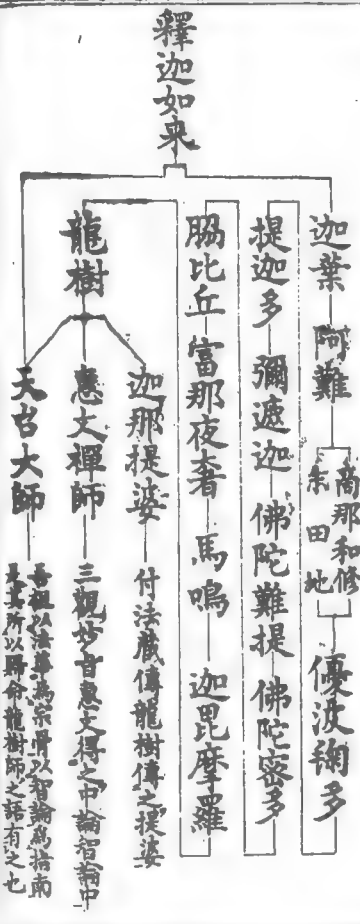
並皆對麤示妙是以稟受者悉皆得見掌中庵
摩勒果矣五時有通有別通乃通初後別乃別
次第一華嚴時兼一別說圓教二阿含時但說
三藏教三方等時對破對顯故四教俱說四般
若時帶通別二正明圓教是謂之兼但對帶五
法華涅槃時也以法華為最上法門故經云唯
以一大事因緣故出現於世又云如我昔所願
今者已滿足若涅槃經乃或說或不說燈明佛
迦葉佛等並皆不說涅槃經吾大聖世尊乃爲
止五十二類悲歎如來圓寂故說之然而取滅

度實是周赧王五十三年壬申二月十五日也
映曰改曆之後有請改涅槃日者余不聽其
人笑名實相違余亦笑曰在天之靈何憂曆
日不中矣原夫周以建子月爲正月秦以建
亥月爲正月月爾後和漢多用夏曆故時日素
未必不差況若新曆不得以月盈昃辨別望
晦以有餘日不合舊日故改之則愈差矣是
其所以不改涅槃日也六月四日十一月二
十四日亦準之追遠孝子之徒要不可惑盲
談瞎論矣

天台圓宗列祖略傳

又曰摩訶止觀云大覺世尊積劫行滿涉六
季以伏見舉一指而降魔始鹿苑中驚頭後
竊林法付大迦葉

西天十三祖略系



始祖摩訶迦葉尊者此云大飲光王舍城人也
天質金色光明赫奕照四十里身具三十相其
父母為聘妻無慙意深厭世間啟求出家即舍
家事隨佛出家行十二頭陀至老不止法華經
云汝於未來世當得成佛道名曰光明如來涅槃
經云我今所有無上正法悉已付囑摩訶迦
葉當為汝等作大依止並尊滅度後迦葉在王
舍城結集三藏爾後二十季以法藏付囑阿難
而入鷄足山至慈氏三會後乃取滅度

二祖阿難陀尊者此云慶喜白飯王次子調達

略列祖傳

弟也面如淨滿月眼如青蓮華八歲從佛出家
多聞第一季三十一為佛侍者護持法藏佛授
記荊曰山海惠自在通王佛阿難進行宣化幾
二十季而取滅度

三祖商那和修尊者王舍城長者也過去世為
商主路見辟支佛身嬰重病即施藥又施商那
衣由此因緣隨阿難而出家得阿羅漢果後傳
法于總多而取滅度

四祖優波總多尊者摩突羅國人也容貌端正
聰惠辯才嘗有娼女偈之總多不許後其女得

罪科即往化之又有波旬將害正法總多以蛇
狗人三屍化作華鬘以加魔頭還見死屍蟲蛆
臭爛盡其神力去之不能乃外虛空問諸天衆
梵王說偈曰若因地倒還因地起離地求起終
無此理波旬受教投禮尊者哀露懺悔總多令
其歸三寶竟尸髮頓脫禮謝而太又勸阿育王
於如來遊行之處悉令起塔其餘化度甚衆矣
尊者每度一人以置一簍於石室後簍為山滅
度日以簍焚之

五祖提迦多尊者摩突羅國人也年二十受具

天台列祖略傳

足戒成阿羅漢遊步隱顯自在無礙廣度世間
於中印度而入涅槃

六祖彌遮迦尊者中印度人也嘗為八千仙人
導首多聞博達有大辯才往見提迦多演說昔
因提迦多即為說法而化之仙衆不信提迦多
更現神變衆方信服俱得道果爾後提迦多臨
欲入滅以法付囑之此尊者

七祖佛陀難提尊者北天竺人也初彌遮迦至
其國望雉堞上有金色祥雲歎曰以下必有大
士可為法嗣乃往尋之果於闍闍中遇佛陀難

提即為說法而化之後彌遮迦臨終以正法付焉

八祖佛陀密多尊者提伽國人也德力深固善化群生初難提行化至其國見一家有白光謂其徒曰此有聖人有口不言有足不履乃訪其舍其父曰我有一子年五十不言不履難提曰真吾弟子密多遽起禮拜出家即證道果流布正法其餘化王等事載在輔行

九祖脇比丘尊者中印度人也在母胎六十季既生駭白厭惡五欲不樂居家即出家得阿羅

天竺列祖略傳

漢果精進苦行脇比丘至席時人號脇比丘手放光明暗中承經外道見之即歸正法

十祖富那夜奢尊者華氏國人也智識深遠多聞強記初脇比丘至其國止一樹下指其地曰此地若變金色當有聖人至矣言已地果成金既而夜奢果至遂納為弟子付以法藏

十一祖馬鳴尊者東天竺桑岐多國婆羅門也以刀貫拔鋸曰天下智士能勝我者截首以謝諸國之人莫有抗者時富那夜奢與之論我無我馬鳴執有我夜奢曰佛法二諦世諦有我真

諦無我馬鳴遂不能勝便欲斬首夜奢曰我法仁慈故不害汝如來記汝後六百季當傳法藏於是度令出家其後鳴化度甚廣奇瑞寂多十二祖迦毘摩羅尊者華氏國人也嘗為外道師有衆三千以神力來燒馬鳴鳴化度之摩羅即能信入與衆同時悟道受馬鳴付囑宣布正法於南天竺大興饒益又造無我論此論至處魔外摧折

天竺列祖略傳

十三祖龍樹尊者南天竺人也天姿聰明弱冠馳名獨步諸國天文地理星緯圖讖及餘道術無不綜練迦毘摩羅訪來化度之三月中通誦三藏闡浮屠有教法皆悉通達辯才無礙降伏國王制諸外道外道現通化作華池坐蓮華上龍樹化象拔蓮華拋外道又製造種種論利益末代其後付法提婆蟬蛻而去天竺諸國並為立廟敬事如佛

右謂之西天十三祖蓋以教法皆出於釋迦牟尼佛世尊乃不之算故釋氏徒常曰佛祖又曰付法藏傳舉二十三祖末田地與南那同時若取之則二十四人也龍樹以來佛法

震且十祖畧系



傳教大師

將軍吳明徹
儀同柳顧言
尚書毛喜

世繫表南岳下出十七人
天台下出六十六人今略
出之蓋非東捨彼興唯
是難飾餘地也耳其餘
亦然矣

或問曰：已云震且十祖龍樹非震且人，今何加之耶？答曰：法華經云：佛智無師智，故一家相承，未必面受。章安大師曰：文師用心一依釋論。又曰：智者觀心論云：歸命龍樹師驗知龍樹是高祖師。荊溪大師曰：南岳為父師，惠文為祖師。龍樹為曾祖師。又曰：漢齊隋等並指始祖以為高祖。今家亦以龍樹為始傳教。大師曰：龍樹大士。

始祖龍樹菩薩南天竺人也天姿聰明多造論
文化益末代矣蓋始二之際是書授而非面授
北齊尊者讀中論至因緣所生法我說即是空
文忽然大悟後依大論三智實在一心文彌主
張一心三觀義授之南岳大論中論並龍樹所
造也故爲之始祖

二祖北齊尊者諱惠文俗姓高氏夙稟圓乘天

天祐列祖略傳

機特發師讀中論至四諦品偈云因緣所生法
我說即是空亦名爲假名亦名中道義恍然大悟
悟頓了諸法又依大論三智實在一心文發得
一心三觀深旨自在說之衆徒千百專業大乘
獨步河淮時學者皆以爲履地載天莫知高厚
乃以三觀口授南岳而後取滅度尊者得悟之
說雖似煩重本傳不可以不載相兼不可以不
詳矣覽者察之

三祖南岳大師諱惠思俗姓李氏南豫州武津人也兒童時夢梵僧勸令入道常對法華經流

淚頂禮不休又夢普賢乘白象王摩頂而去昔未識文今自然解所摩頂上隱起肉髻年十五出家受具足戒謝絕人事專誦法華經又夢受圓頓戒行業彌精夢弥陀弥勒為說法學解轉進後謁北齊尊者咨受觀法尊者授以一心三觀妙旨晝則驅馳僧事夜則坐禪達旦豁然大悟法華三昧自是後所未聞經曉通不疑矣時中衰亂惡比丘多是以致毒於師數回或由法力或由佛力幸而咸免焉師顧徒屬曰大聖在世不免流言况吾無德豈逃此債是宿作時

聖朝列祖略傳

九

來須受當往何方以避此難忽聞空聲曰若欲修定當往武當南岳因陳光大二年入居南岳大建元年九仙觀道士歐陽正則觀山有勝氣謀於衆而誣告師道德不思議力以免之又為順世大集門學連日說法苦切訶責聞者寒心爾後唱佛來迎合掌而逝顏色如生異香滿室實是大建九年六月二十二日也壽六十三夏四十九奇瑞異迹不可勝記我別當大師一心戒文云南嶽衡山有思禪師常願言我沒後必生東國流傳佛道其後日本國有聖德太子生

而聰惠時遣小野臣妹子聘隨天子即太子教妹子曰向某處承我所持法華經并錫杖與鉢來妹子奉教尋訪將來時人皆云太子者是思禪師之後身也

四祖天台大師諱智顗字德安俗姓陳氏荊州華容人也母徐氏夢白鼠而有身初生奇瑞非一二笑眉兮八采目耀重童卧即合掌坐必面西生知上性常求出家愛其才智二親不許梁義聖三年甲戌父母相繼沒焉生年十八辭兄依果願寺法緒出家二十進受具戒既精通律

聖朝列祖略傳

十

藏又長樂禪悅陳文帝天嘉元年登大嶽山謁南岳大師大師曰昔日靈山同聽法華宿緣所追今復來矣即行安樂行至藥王品諸佛同讚是真精進文豁然大悟將證白南岳南岳曰非汝弗證非我莫識所入定者法花三昧前方便也所發持者初旋陀羅尼也自是辯如懸河智似明鏡代其師常講經論南岳曰今以付囑汝汝可秉法逗緣傳燈化物莫作最後斷種人也陳光大元年師奉南岳訓與法喜等二十七人同至陳都朝野聞風咸來請益太建元年應儀

同沈君理請居瓦官而閑法華經題一日勅停朝事群公畢集又法門義龍釋林智虎並皆搖尾垂頭訪其居矣師住瓦官八載講大智度論說次第禪門出六妙門大建七季九月謝遣門人入天台山風煙山水外忘憂妙惠深禪內爲樂降強輟兩魔而卜居於北峯慕德求道者相繼不絕宣帝下詔割始豐縣調以充衆費蠲兩戶民以給薪水於是深山變成聚落大建十季五月左僕射徐陵以師創寺啓于朝賜額修禪此季設放生池至德三季正月前後三下勅使

法苑珠林卷第八

十

師知帝之爲人故辭以疾三月更勅州郡爲之勸請永陽王勸師曰主上虛己思慕恭敬願師爲往若一言有益則四生永賴師不得已遂行四月於大極殿講大智度論仁王般若題号諸寺碩學奉勅問難師辯論如涌天子欣然百僚盡敬爾後有靈夢陳主聞之即迎師光宅寺而後優遊荊湘以避喪亂隋開皇十季正月文帝下詔曰皇帝敬問光宅禪師朕於佛教敬信惟重秦王亦致書延屈有水難而不果行十一季晉王代爲總管遣使迎師十一月二十三日於

總管大城設千僧會受菩薩戒師曰大王紆遵聖禁宜號惣持晉王曰大師傳佛法燈稱爲智者蓋智者大師稱出于茲矣十二年三月往廬山八月往衡山十二月又至荊州此時有關羽靈受師教化神威建立伽藍以報其德王泉寺是十三季四月於玉泉說法華玄義十四季四月於同寺說摩訶止觀一夏敷揚二時慈雲是季又講金光明廿五季以淨名疏寄之晉王師素好泉石故懇懇請歸其辭曰若一旦無常風來則願歸骨於天台十六季遂歸于天台以久

法苑珠林卷第八

十一

不在寺宇甚荒蕪焉一夜師歎曰雖在人間弗忘山野靜夜澄神自照豈不樂哉佛話經云比丘在山思惟實相意同于茲末代僧侶不可不知也十七季八月嘉祥寺吉藏請講法華師不赴又一夜月白風清獨坐說法如有久晤明且付囑後事乃授觀心論十月奉勅出山行至石城寺稱有病而不進謂智越曰大王欲使吾來吾不負言吾知命在此故不須前進石城是天台西門大佛是當來靈像處所既好宜最後用心語已右脇西向臥專稱彌陀觀音及般若名

進樂不受進齋又不受即口授遺書并手書數字留別大王然而淨掃室內索三衣鉢令侍者唱二部經以爲最後聞慧汰華無量壽並聽竟有贊詞又香湯漱口爲門人說十如四不生十法界三觀四無量心四悉檀四諦十二因緣六波羅密等其餘云々又誡維那曰人命將終聞鐘磬聲增其正念惟長惟久氣盡爲期又曰世間哭泣喪服皆不應爲言訖唱三寶名如入三昧而逝實是隋開皇十七年十一月二十四日未時也春秋六十僧夏四十葬於天台西南峯

略列祖略傳

煬帝勅柳顧言製碑文建之其在世德功滅後靈瑞及著述門下得業等具在別傳統紀吳越忠懿王請於朝謚法空寶覺尊者又宋寧宗加謚靈惠大禪師

五祖章安大師諱灌頂字法雲俗姓吳氏臨海章安人也始生三月能稱三寶名有異僧告曰此子非凡因以爲名七歲入寺年二十受具戒天縱惠解一聞不忘陳至德初謁智者稟受觀法頻蒙印可後爲侍者隨所住處所說法門悉能領解禎明元年卒於金陵聽智者講法華隋

開皇十三年夏受法華玄義於玉泉寺十四年又受圓頓止觀智者講說師皆結集而傳之未聞蓋末代今日我人得浴玉泉者皆是師之恩德也不可知十八年正月師奉智者遺書謁晉王二月王遣使爲智者設千僧齋且造國清寺仁壽元年晉王爲皇太子師奉表稱賀并謝造寺張衡宣令問智者沒後靈異皇太子亦復遣使設千僧齋二年四月敕使講淨名經於東宮衆推師應其命大業十年著涅槃玄疏時隋末兵興寇盜群起其艱難不可言師晚年講法

略列祖略傳

華於會稽嘉祥吉藏法師深尊信之唐貞觀六年八月七日終于國清寺春秋七十二其靈異著述等總在統紀故今略之吳越王請謚總持尊者

六祖法華尊者諱智威姓蔣氏處州緡雲人也家世業儒年十八爲本郡堂長父母令歸納婦路逢梵僧謂之曰少季何意欲違昔日重誓耶因示其五願曰一願臨終正念二願不墮三途三願人中託生四願童真出家五願不爲流俗之僧蓋前身爲徐陵聽智者講經深有所得乃

對智者發此誓願師聞願已不復還家即往國清投章安矣受具之後咨受心要定惠俱發即證法華三昧唐上元元年師欲卜勝地說法度人執錫誓曰錫止之處即我所欲住其錫自國清飛至蒼嶺普通山可五百里以隘狹不容廣衆陵空再擲至軒轅鍊丹山師既住止翦棘刈茅班荆爲座聚石爲徒晝講夜禪手寫妙典於是名其地曰法華既而學者訪來習禪者三百餘人聽講者七百餘人師身長七尺骨法古秀每登座紫雲覆頂又烏雀常來慈及禽獸法華至

歐陽列祖略傳

十五

仙居上阪約八十里師每日往反齋粥禪講未嘗少違咸謂有神足通永隆元年十一月二十八日跌坐禪堂而化滅後奇瑞等具在統紀吳越王請謚玄達尊者

七祖天宮尊者諱惠威姓劉氏婺州東陽人也總角之歲深厭塵勞遂入佛門祝髮受具聞法華大弘天台之道即往受業三止三觀頓獲開悟後歸東陽深居山谷不交人事法華入滅之後登門求道者不知其數矣沒後吳越王請謚全真尊者

八祖左溪尊者諱玄朗字惠明婺州東陽人俗姓傅氏雙林大士六世孫也母葛氏感異夢娠既產未嘗作嬰兒啼每見人則欣笑盈面九歲入清泰寺優婆塞而修行唐武后長壽二年落髮得戒聞天宮盛弘止觀即往求學未幾一家宗趣解悟無遺後依憑巖穴建立招提以左碧澗號曰左溪宴居一室常自樂矣有風煙山水忘憂之情師亦慈及禽獸至烏盲狗憐使雙目復明開元十六年王正容屈請入城師辭以疾與永嘉玄覺爲同門友嘗貽書招山居覺亦復

歐陽列祖略傳

十六

書千餘言誘師聚落並有所見天下稱之天寶十三季九月十九日呼門人謂曰戒爲心本汝等師之即端坐長別春秋八十二有都率內院瑞茶毘已門人分舍利爲二今一塔左溪一塔東陽侍御史李華爲之銘云吳越王請謚明覺尊者

九祖荊溪大師諱湛然俗姓戚氏晉陵荊溪人也家本習儒故如學夙成在兒童中超然有邁俗志季十七訪道浙右遇金華方巖授以止觀之法開元十八年始從左溪溪與之語知爲道

器遂以處士服受三止三觀天寶七年始解經
 掖著僧伽梨尋詣會稽一律師博究律部左漢
 沒後師盛唱教觀即大字示觀道語默以能導
 人乃祖述所傳著為記文凡數十萬言一家教
 觀於是乎復明正矣或曰講華嚴者唯尊我佛
 讀唯識者不許他經至於教外別傳但任宵臆
 而已師亦辯論其說有金錦有義例天寶大曆
 間朝廷三詔並辭疾不起師嘗與諸名僧同禮
 五臺偶有舍光聞梨白師曰頃從不空遊歷天
 竺梵僧曰聞大唐有天台教法可以識偏圓簡

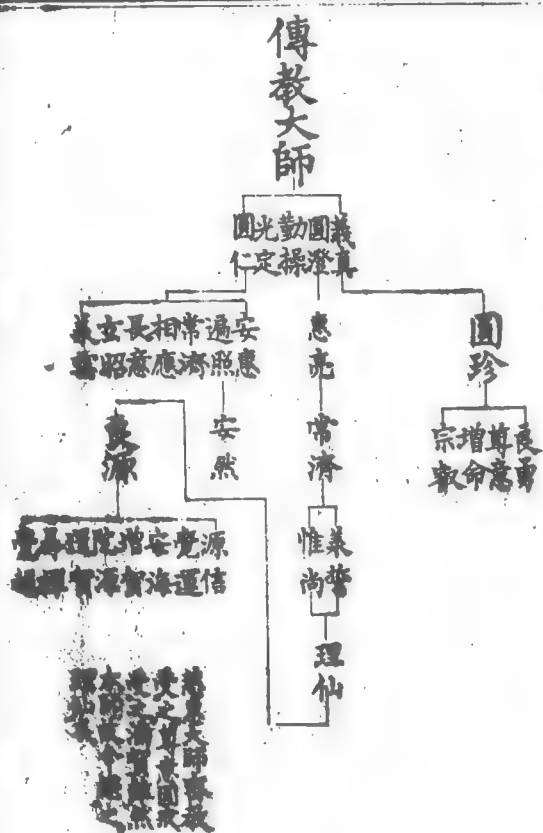
天台圓宗列祖略傳

邪正明止觀可得能譯之至此土邪師聞之數
 曰可謂中國失法求之四維師晚歸台嶺以身
 誨人者季不倦大兵大饑之際學徒愈蕃建中
 三年二月五日示疾於佛隴語門人曰道無方
 性無體生歟死歟其旨一貫吾歸骨此山報盡
 今夕夫一念無相謂之空無法不備謂之假不
 一不異謂之中在凡為三因在聖為三德蒸炷
 則初後同相涉海則淺深異流自利利人在此
 而已汝等其志之言訖隱几而化春秋七十二
 門人奉全身塔智者傍翰林學士梁肅撰碑銘

著述最多具在統紀吳越王請誡圓通尊者
 十祖興道尊者諱道遠不知何許人唐大曆中來
 依荊溪於佛隴洞悟幽玄無所凝滯荆溪嘉之
 曰吾子其能嗣興吾道矣遂授以止觀輔行自
 是師為衆闢說聽者無不領寤也貞元二十一
 年吾根本大師從師傳教於皇國故今廣脩
 以下畧其傳然而遠師傳又在血脉譜是山家
 所親聞不可不信也

天台圓宗列祖略傳

本邦四大師略系



諸系譜往往不同今摘取其明了者而圖之
然而其所以不同有之者顯密戒禪其授受
固不一且戒有大小密有諸流安可無不同
乎人幸勿疑矣

始祖傳教大師諱最澄俗姓三津首江州滋賀
郡人也應神天皇之時漢獻帝之裔劉觀者慕
王化而來上憐其王孫賜滋賀地是其先也父
百枝愁無嗣祈之吾山左麓神母感靈夢而有
身神護景雲元年八月十八日乃生師焉天性
穎異七歲受學十二拜行表法師出家所得教

天台列祖略傳

九

汰聞一知十聰明絕倫無人不數異矣十五補
國分僧闕求法者如市延曆四季七月觀世間
無常榮利有限而隱吾山中緇素訪來烏設一
宇今延曆寺是同五年進具同七季創立根本
中堂同十三季桓武天皇遷都師内外大有功
績具如花橘記十六季任内供奉賜近江正稅
薛再三遂受之十七季十一月始修行法華十
講會介來不絕二十季更延請天下碩學講論
法華經於根本中堂道俗驚耳二十季正月
應和氣弘世等之請復講此經於高雄山寺帝

聞之欲立天台圓宗師上表陳述缺相養而求
渡唐往復數回遂賜敕許但反以期月不許淹
留蓋愛材也二十二季閏十月為祈四船平達
講諸大乘經於太宰府有願文二十三年七月
入唐乃德宗帝貞元二十季也同季九月到台
州國清寺衆徒遞來慰勞尋刺史陸淳延修禪
寺座主道邃和上聞揚天台法門師就和上傳
受一家秘要又拜受菩薩三聚淨戒更又謁佛
隴寺座主行滿和上和上亦荆溪土足大悅展
盡底蘊而傳授無殘矣翌乙酉季四月於越州

天台列祖略傳

二

龍興寺值遇順曉阿闍梨以傳受遮那祕法矣
又於唐興縣謁脩然禪師乃傳不立文字妙旨
矣師在唐雖日淺生知上性無所不得同季八
月歸京以所獲法器經卷獻之於朝廷將來目
錄存于今矣帝敕和氣弘世等慰勞且廣布吾
台法於天下又敕小野岑守設道場於高雄山
寺延曆二十四季九月一日開檀預灌頂者八
人皆天下碩學也皇國密灌為之始矣弘仁三
季七月造法華堂同五季春剏于宇佐種々營
法會有瑞又於賀春神宮寺講法華經有瑞同

六季拓山道置廣濟院廣極院到子阮訪有瑞經上野下野而歸同九季設山家學生式上表而爲吾山於一向大乘寺即檀曰自今以後不受聲聞之利益永乖小乘之威儀同十季上表乞建圓頓戒壇護命景深等抗之同十一季著顯戒論奉進之內裏十三季二月賜宸筆位記同四月有疾細示寺規付法義真偶有乞進奏不求自得食者師謝之曰道心中有衣食衣食中無道心僧侶皆道心堅固則何患不有衣食矣時弘仁十三季歲次壬寅六月四日辰刻於

天台圓宗列祖略傳

吾山中道院右脅而逝春秋五十有六遠近如喪父母同月十一日右大臣冬嗣捧圓戒允許之詔來山中蓋令遂師素願也山衆悲喜交集同季十一月嵯峨天皇自深筆賜哭澄上人之詩曰吁嗟雙樹下倚化契如如惠遠名猶駐丈公業已虛艸深新廬塔松掩旧禪居燈焰殘空座香煙續像爐蒼生稍集少緇侶律儀疎法體何久住塵心傷有餘當時公卿文雅才子各和宸韻而贈之吾山焉同十四季二月敕賜寺額號比叡山延曆寺同季建立戒壇院貞觀八季

七月敕謚傳教大師其上足親友著述等具在本傳故今不贅

二祖慈覺大師諱圓仁俗姓壬生氏下野國都賀郡人也延曆十三季降誕有瑞後投廣智出家智知其器量不凡自携來吾山寄之傳教大師時季十五大同三季也大師大悅愛護日加師螢雪不懈朗得三止三觀之妙旨來有請止觀者則大師使師講之身在傍而證誡之弘仁四季官試及第同五季正月受沙弥戒同七季四月進受具足戒此時名學盛行或有乞灌

天台圓宗列祖略傳

頂者或有求受戒者或有願講席者師輔翼大師而大施法雨矣同八季三月拜大師受圓頓戒十三季六月大師遷化師與義真圓澄同奉遺旨脩百事十四季四月大閱受戒會義真爲傳戒師師爲教授師天長五季順衆議而擔紀減半其夏講法華經於法隆寺同六季住四天王寺講法華及仁王經遠近求講者不絕師東奔西馳勉應之晝則事教化夜則修自行勞苦累季終傷其身比季及四十體羸眼瞢於是知命不久避世於橫河一夜天神賜藥其味如蜜

喫畢夢覺口有餘氣其後疲身更健矇目還明
爲謝恩手自寫如法經義和二季應入唐求法
之撰先師夢來指示云云三度同三季以橫河
爲首楞嚴院定九條式其後上船到太宰府未
得順風徒送二季五季六月解纜七月二日著
唐揚州海陵縣乃文宗帝開成三季也師在唐
十季艱難雖多更不屈從宗觀全雅志遠元政
義真汰全寶月宗穎僧侃惟謹等諸大德而傳
受顯密禪戒及悉曇等宜宗帝大中元季發唐
登州九月著太宰府乃吾承和十四季也以所

天台列祖略傳

卷五

學法門目錄并復命表狀上奏之朝廷降命慰
勞嘉祥元季春奉詔入京即歸吾山先師昔傳
其大綱師今弘其綱目吾宗之法門於此盡其
精要矣山衆歡喜不可言也同季六月脩灌頂
會朝廷有命伴善男監護法事七月任內供奉
二季四月上奏再修灌頂會余後爲之常例更
奏修熾盛光又建立總持院置十四禪師仁壽
元季修念佛會式依唐五臺山法四季四月任
座主齊衡三季三月二十一日天皇請師於冷
泉院南殿受兩部灌頂貞觀元季天皇受菩薩

戒二季創立文殊樓師君王歸依厚群臣亦仰
之故爲其男女於朝廷設灌頂會授菩薩戒等
不暇枚舉也貞觀六季正月有疾付囑法於安
惠又授密印於常濟且遺囑創立赤山禪院指
示百事畢與衆同唱彌陀名號十四日夜半北
首右脇而逝春秋七十一天下道俗莫不悲悼
其葬所奇瑞及撰述書等具在別傳貞觀八季
七月敕謚慈覺大師

天台列祖略傳

卷五

口而孕弘仁六季即產師焉季甫八歲謂其父
曰藏經中必有因果經願我得讀之父驚而與
之季十五拜義真和上而薙落天長十季應官
試受菩薩戒尋爲大僧一紀龍山薰修精練名
達輦下君王寵遇日隆承和五季之冬師感不
動明王金色身也嘉祥三季感山王神明季之
春復感之因記其事上表以聞以求入唐仁壽
元季四月師得敕許下太宰府同三季七月解
纜八月十五日到唐福州境即宣宗帝大中七
季也師在唐六季謁物外良謬法全般若怛羅

等或聽講或傳深秘或學悉曇且巡回諸方探其舊迹見聞大得益乃彼大中十二季六月八日上船我天安二季六月二十二日回著太宰府同季十二月入帝都詳錄所得而表上其文委細在別傳貞觀五季爲宗數開檀於園城寺六季七月設檀於仁壽殿授胎灌於上及諸大臣更講大日經八季敕美濃公令師住冷泉院別建持念堂專祈寶祚先是天長九季有別敕補內供奉十禪師其時季十八令復苗更秀貞觀十季六月任天台座主十四季九月請暇歸

天台列祖略傳

廿五

山元慶七季敕授法眼和尚位仁和二季秋上不豫師依敕下山一宿而平愈寬平二季十二月任少僧都同三季十月二十七日師語門人曰十方聖衆雲集我房早應清房舍供香華然而叉手稱佛歸二十九日齊供如常五更乞水嗽口承伽黎戴之右脇而逝春秋七十七有天樂瑞師生平謂未然語將來恰如明鏡矣延長五季十二月賜諡智證大師

諸文誤作七十八今改正之

四祖慈惠大師諱良源俗姓木津氏江州淺井

郡人也其母夢日光來入懷中而孕延喜十二季九月三日生師九歲時遊田中有雲蓋國老貞行見怪之語其父曰汝兒靈童莫敢輕焉後隨母詣梵釋寺覺惠見曰是真英雄豈令在田里延長元季五月於西塔本覺院拜理仙和上得度同六季禮尊意僧正登壇受戒後螢雪不懈雷名轟四海矣承平五季赴維摩會折義昭法師天慶九季九條師輔公設法華三昧堂於楞嚴院自來耨耨衆有瑞其季九月帝亦巡遊此間種々有奇瑞世人皆知故畧之應和三季

天台列祖略傳

廿六

八月於清涼殿講法華經時南都有仲算法藏俱碩學智辯如龍如虎師能伏之又誦戒經光出於口康保元季設法華會於宮中結願之日帝親命內供奉十禪師同二季任權律師同三季八月任天台座主安和元季任權少僧都又始廣學豎義設無遮大會天祿二季五月有詔爲法務天延三季任大僧都貞元二季十二月任僧正天元四季八月玉體不豫師奉命加持之忽愈帝大悅賜水晶念珠青綾法服黃金百兩且轉任大僧正更又賜輦車歸山永觀二季

三塔堂舍修補已畢相輪椽亦落成其冬有疾十二月下山住弘法寺師詳知末期故無付囑所殘以印鑰送寺家然而專念阿彌陀佛同三季正月三日如睡入滅時季七十四有奇瑞委載別傳師最富汰資源信覺運尋禪覺超乃其粹也寬和三季二月敕謚慈惠大師

中祖慈眼大師諱天海俗姓三浦氏奥州會津郡高田人也其母夢吞一奇花而娠九月而產師自幼雅不食肉季十一拜辨譽上人出家早稟台密季十四投皇舜僧正修學僧心聞其聲

天台別祖略傳

七

遠響以爲異矣天文中登叡岳就實全學教觀又受俱舍等於寺門尊實弘治中在南都學汰相三論又質日本紀等於成重永祿元年季聞母有疾歸省同三季入足利學校學孔老書同七季在上州從道器禪師受楞嚴周易等元龜兵燹之後吾山正覺院豪盛等率學徒入甲陽國主信玄召東關僧侶大開論場因師得名譽於此豪盛不惜傳論場祕奧焉天正五季進阿闍梨位同十季傳受碧巖集同十七季親族蘆名盛重有急師救之同十九季再興不動院文祿

二季大旱師求雨有應慶長四季再興喜多院同八季再興宗光寺同季再進阿闍梨位又講法華經同十二季有山論東照公命師治之因轉南光坊任執行探題同十三季赴駿府敷開論席振起宗風同十四季後陽成上皇召師問汰詔任權僧正同十五季賜新題者敕許同十六季進正官同季住毘沙門堂而更赴駿府東照公歸依彌厚師付囑血脉十七季與公同遊仙波再起土木大寺宇上皇賜額十八季領日光山十九季鳴論鼓於宮中翌季上血脉於上

天台別祖略傳

八

皇有敕賜御衣燕尾壽杖同季賜高閣瓊殿移之於坂本滋賀院是也元和二季東照公有疾師訪之便傳一實神道之祕決矣同季七月轉大僧正同二季役仙洞經供養導師畢歸于東都達神号敕許之旨台德公大悅同三季四月八日師以一實神道之祕奧改葬東照公於日光山同十七日始行祭祀相尋修汰會且定後來規則又勸作大赦同季六月上皇不豫師侍疾常談法要八月崩師專主葬事同四季奉敕設神廟於江城紅葉山同五季八月入宮中修

聲明懺法又尾紀水三家各設神廟於其園並以師爲導師同九季皇太后屈師受戒薙髮又往紀州說法門於京大佛行密灌十二月東歸路卧病有瑞寬永元季春師遊于城中晤話可傳矣同二季創建東叡山同三季開論筵於宮中師精義同季修密灌於東台同五季設大盛筵於日光山充神祖十三回忌辰同季大猷公患痘瘡師護持之有瑞而愈同八季台德公有病師豫識不治九季正月薨十一季大猷公上洛師陪之同季安神廟於坂本又修補中堂講

天台圓宗列祖略傳

光

堂丈殊樓等十三季勤神祖二十一回忌辰改作宮殿頗有盛事十五季冬師寢老病辭醫藥而俟其死大猷公大驚自往訪之師強病授與一寶神道病亦相尋平愈十六季四月更傳台家祕與同季營復長樂寺又建新祠十八季請求御廟影像爲大樹禱嫡子有應同季各國設東照靈廟師大畧管其事二十季創立相輪櫟于日光山其七月師示疾於東台醫藥存問如織十月朔召諸徒弟付囑百事同二日觀念誦經告終畢端坐合掌而逝世壽不知或曰百三

十四歲大樹與公海等議追福尤厚葬之光嶺建影堂於日光東叡坂本三所其滅後靈異貴賤崇敬等具在別傳慶安元季四月敕謚慈眼大師

列祖畧傳終

天台圓宗列祖略傳

手

畧傳附錄

吾天台智者大師設三術垂之末代吾根本傳
教大師勸道心示之後昆洗耳於玉泉逗足於
台門者不可以不知也止觀第七能安忍下曰
莫受莫著又曰縮德露玳又曰一舉萬里謹按
之高位高官博學多藝謂之名譽羅罍大厦大
祿金銀珠玉謂之利養毛繩眷屬集樹遂成枯
折之患莫受莫著然雖不處囊難覆易露若不
得已則須縮德露玳揚狂隱實大德無德乃識
者之所欲發露懺悔乃僧侶之所期在昔鮑照
爲文好用鄙言累句王僧虔亦每揮毫必用拙

略列祖略傳

主

筆並是用心韜其能也白衣受欲人猶如斯况
已捨飾好著壞色衣者乎其如是而尚不免則
當一舉萬里皇國幸有安然增賀俱能得大師
三術意焉出沒縱橫遂果其素願可學可慕又
根本大師常云何物是國寶有道心名爲國寶
乃有道心佛子西稱菩薩東号君子又臨終時
告其徒曰人能弘道非道弘人汝等堅固菩提
心當修行佛道世事百般總勿憂矣又曰道心
中有衣食衣食中無道心嗟夫和漢兩祖之垂
示如是不可不動也

天台座主略系

弘仁十四季二月敕賜延曆寺号當時主職
義真和上謙不稱其名於是始有座主名蓋
不唱其名而勤其職者初私稱後敕号至安
惠和上賜敕使介來其職甚重矣

義真 圓澄 圓仁 安惠 圓珍 惟首

猷憲 康濟 長意 增命 良勇 玄鑒

尊意 義海 延昌 鎮朝 喜慶 良源

尋禪 餘慶 陽生 運賀 覺慶 慶圓

明教 院源 慶命 教圓 明尊 源心

略列祖略傳

主

源泉 明快 勝範 覺圓 覺尋 良真

仁覺 慶朝 增譽 仁源 賢運 仁豪

寬慶 行尊 仁實 忠尋 覺猷 行玄

最雲 覺忠 重瑜 快修 俊圓 快修

明雲 覺快 明雲 俊亮 全玄 公顯

顯真 慈圓 承仁 辨雅 慈圓 實全

真性 承圓 慈圓 公圓 慈圓 義圓

圓基 尊性 良快 尊性 慈源 慈賢

慈源 道覺 尊覺 尊助 最仁 澄覺

尊助 慈禪 澄覺 道玄 公豪 最源

尊助。最助。慈實。慈助。尊助。慈助。
源惠。慈基。尊教。良助。道潤。道玄。
覺雲。公什。慈道。仁澄。覺雲。慈勝。
親源。澄助。慈道。性守。義覺。承鎮。
慈道。尊雲。桓守。尊雲。慈嚴。尊澄。
尊圓。尊胤。尊澄。尊胤。聖惠。尊圓。
祐成。義胤。亮性。尊胤。尊圓。慈嚴。
尊圓。尊道。桓豪。義胤。恒鎮。尊道。
承胤。慈濟。道圓。堯仁。明承。慈辨。
尊道。道豪。桓教。良順。堯仁。桓教。

天台山列祖略傳

三

實圓。相嚴。義圓。持辨。義承。良什。
義承。公義。教覺。尊應。堯胤。寬胤。
尊鎮。堯尊。應胤。覺恕。尊朝。常胤。
最胤。良恕。堯然。慈胤。尊純。堯然。
良尚。慈胤。尊純。堯然。尊敬。慈胤。
堯恕。尊證。盛胤。堯恕。尊證。盛胤。
堯恕。公辨。堯延。公辨。堯延。良應。
堯延。道仁。尊祐。公寬。道仁。尊祐。
公寬。道仁。尊祐。堯恭。公遵。尊祐。
堯恭。公遵。堯恭。公啓。堯恭。尊真。

常仁。尊真。公延。真仁。尊真。公澄。
尊真。義真。公猷。承真。公猷。義真。
尊寶。義真。教仁。舜仁。教仁。尊融。

昌仁。慈性。昌仁。

右諸世數則二百三十一代算其人則有再
任故百六十八然而其中有皇子有親王有
大師有國師有高德有智識尊意僧正陽生
尊者之於咒力勝範和上忠尋僧正之於博
覽院源座主之於法鼓顯真僧正之於說教
良助親王之於議論慈鎮大德之於和敬尊

天台山列祖略傳

三

圓親王之於翰墨茲皆能驚天下耳目若尊
雲親王義圓僧正之英武而拜征夷大將軍
是為幸耶為不幸耶奇亦一段奇又若白河
帝之尊信良真僧正烏羽帝之歸向行玄僧
正屢登山參籠法會等有之實是大盛事而
足覺不信之眠至若寬平法皇之自執法衣
以賜增命開梨乃恰齊于隋煬帝之待高祖
大師儻欲知吾宗貴則須熟讀座主記故今
畧出其系以告之江湖諸君子

南岳大師語高祖智者大師曰當傳燈化物莫作最後斷種人蓋行業雖精密學解雖深幽若無其嗣則其法不傳矣故吾祖得章安智越而台嶺繁茂山家有義真寂光而法燈彌輝其餘若六祖之得道遠行滿御廟之得惠心檀那並皆由有維持者其法不埋沒故吾表出南岳之垂誠而勸之庶幾吾黨之人宜注意此義而培養其徒弟矣

或問何是謂之斷種答曰不教育徒弟則佛教不傳譬如斷樹根又不化度群類則人不仰其

歷代高僧傳

卷五

法例如拂華業如是其謂之斷佛種故欲謝佛祖恩者須率徒弟而化物度生矣

愚情考之雖有延曆二十五年正月所定之得度式世下人衰十問通五之義到底不可行之且若使讀法華金光明音訓及摩訶止觀亦非方今童子之可得能作事蓋自料其難得而俟佛教斷滅不如從易先度之而後漸教諭之也因以明治八年五月所示附之左

始終心要暗誦遺教經熟讀之上須爲受檢查其節於佛前尋問三條

師問曰能不惜身命修行佛道耶不

資答曰能修行

師問曰寧及死門擔不破女犯肉食之制戒耶不

資答曰擔不破

師問曰能忍辛苦終身不蓄髮耶不

資答曰能不蓄髮

問答畢而授度牒其餘式渾如安樂集

畧傳附錄終

歷代高僧傳

卷五

自跋

列祖事迹總乃有佛祖統紀有
元亨釋書又和漢俱有高僧傳
別乃有智者別傳又傳教慈覺
智證各有別傳至若惠眼二大師
則俱有別傳二種又有續詞傳
加旃頭密相兼書中往往記其

天台山列祖略傳

三十七

履歷又般若法華其餘諸大乘
經靈驗記中舉切頭德者非三
故列祖事迹僅欲知利因非難知
矣然而由宗僧侶多不知之蓋
其故有四或懶惰而不覓矣或放
縱而不知尊祖矣或宗法廣大
宗書譌博故研究之其力不足矣

或苦閱藏經而時日不暇矣雖然
已入其門其相兼不可以不為也
故今抄錄大綱而授之吾二三子
坂頂信者武田中原梅市小西
四氏天隨喜讚歎之而快投
淨賤梓之以廣其化徑云
若聞法布施種之修福德如是

天台山列祖略傳

三十八

諸人等皆已成佛道醍醐妙味
如是矣因題之

明治十六年十一月

前延曆寺大教正光映



明治十七年八月五日 版權免許
同 十八年一月 刺成

滋賀縣下

比叡山前延曆寺

著者 大教正 赤松光映

江州阪本村六百拾六番地

京都府下平民

出版人 赤松宣吉

大坂府下南區尾屋新四番町
四拾番地寄留

静基 恭畏 編

密宗血脉鈔

寛永八年（一六三七）刻本

據寬永八年（二六三七）
刻本影印

密宗血脉鈔上

血脉事

畏私云此鈔無撰述之名但與書并一
前之血脉云實證靜基上人妙智房自
毫院長老云又與書云德治二年十
月十五日於東山白毫院馳筆畢
以之見之此是靜基上人撰然則
實證之口說欵末資知之而已

仰云

實證口說欵末資知之而已就八祖有二樣一付法八祖二傳

持八祖也第一付法八祖者東寺相承付法八

祖也謂

大日如來金剛薩埵龍猛龍智金剛智不空

惠果弘法

善無畏一行非東寺
相承祖師故除之

血脉鈔上

第二傳持八祖者密教傳來弘通八祖也是不

論自門他門也謂龍猛龍智金剛智不空

善無畏一行惠果弘法也

大日金薩非傳來弘
通之分故除之

山門真言相承血脉次第

仰云於山門真言相承有塔中塔外不同謂金

剛界自鐵塔中相承之故云塔中相承胎藏自

塔外相承之故此云塔外相承也是則海雲造

玄血脉見智證大師依彼血脉塔中塔外本說

也金剛界塔中相承者

毗盧遮那如來普賢菩薩曼殊師利龍猛菩薩

龍智善無畏一行不空惠果義操法潤法全圓珍

次胎藏塔外相承者

海雲

大日如來金剛手達磨掬多善無畏金剛智
玄超

惠果空海
義操法潤法全圓仁
圓珍
私云是則海雲
造玄之血脉欵

又惟謹大唐淨影寺之僧也
日本慈覺過之受法廣大記胎藏塔外

相承也云云而當世山門稱學者人隆禪
法師云於

山門相承有三種一金剛界塔中相承胎藏界

塔外相承二兩部共塔中相承三兩部共塔外

相承也此中兩部共塔外相承義以為深義鐵

塔且對一機一時化現塔婆故塔中相承之義

淺略也密教三世常恒之說故以不對機為宗

源故兩部共以塔外相承之義為深秘也云云

此說非無不審山門偏以海雲造玄血脉為本

據彼血脉分明金剛塔中相承胎藏塔外相承

見惟謹廣大記同之然者依何立兩部共塔外

相承之義稱深義哉但彼人會釋云兩部共塔

相承之義稱深義哉但彼人會釋云兩部共塔

外相承義無別證據只一流相傳口傳也密教以口傳為本故云云可尋又山門人思東寺胎藏塔外相承也海雲造玄血脉并惟證廣大記同胎藏塔外相承次第連惠果弟子唐土義操等日本空海連載故云云東寺相承義云兩部共塔中相承也則廣略付法傳見其上胎藏塔外相承方有之海雲造有廣大記等塔外相承方而惠果弟子奉入大師故而山門人東寺胎藏一向塔外相承也思得片玉闕三隅者也又山門

血脉鈔上

三

人云善無畏達磨掬多弟子也然而受胎藏計不受金界金剛智龍智菩薩弟子也然而金剛界計受不受胎藏但金智無畏來唐朝互受不足一界終兩界滿足海雲血脉云善無畏云我於天竺求金剛界聞名不值其本又金剛智云我於天竺求胎藏聞名不值解人云云取意仍金智無畏於唐朝互成師資兩界滿足云是又相違於貞元錄不空表製集大師廣略付法傳此等文皆金剛智龍智弟子兩部大法相并御

相承見龍智菩薩龍猛菩薩付法也何自龍猛可無兩部御相承乎而金剛智龍智付法而受金界計不受胎藏我於天竺求胎藏聞名不值解人云事前後相違乎又不空三藏金剛智弟子也而依金智御遺言再渡天謁龍智菩薩兩部大法相并御相承有之見然者何龍智菩薩金界計龍猛相承今金剛智金剛界計付法可云乎知龍智龍猛付法兩部相并可御相承既不空兩部共御相承有之見然者金智金剛

血脉鈔上

界計受不受胎藏云事甚以難信依者此等相違海雲等血脉東寺不用也就中金智無畏成師資事無之判如此但用海雲血脉人會釋云金剛界龍猛塔中相承云事自門他門無異義而龍智阿闍梨自龍猛兩部御相承事又無子細須龍智與達磨掬多同人異名也其故西域記贊龍智形狀云南天竺磔迦國菴羅林中有一長命婆羅門年七百餘歲觀其面貌可稱卅許云云又掬多傳云掬多在世八百歲面貌

升許云云龍智菩薩，歲八百歲，云取意事在之
多同人也云云此知龍智菩薩金剛智授金剛界智多授多

善無畏授胎藏龍智掬多同人龍智菩薩兩部
相並御相承有之徐無子細者也云云難意云
然者何金智於天竺求胎藏不值解人云善無
畏又於天竺求金剛界不值其本云然知龍智
與掬多異人異名也何者龍智南天人達磨中
天人也惠運和尚諸祖師請來給中龍智菩
薩影一幅達磨掬多影一幅云云已龍智與達

血脉鈔上

五

磨異人也見其上都西域傳貞元錄表製集付
法傳等達磨掬多即龍智也云事不見掬多傳
亦龍智即掬多也云事不見也以此等之相違
三寶院等故海雲血脉僻事也思無畏金智師
資之義是又僻事也云云但於東寺勸脩寺流
無畏金智師資之義有之習不違廣略之付法
傳而金智無畏師資義立之見無餘流深秘習
也勸脩寺大事也入彼流可尋之又云論於付
法次第者以廣付法傳相對論於勝劣付法傳

可為勝也其故付法傳者高野大師御作也大
師則大目如來第八代祖師惠果和尚正付法
也海雲惠果和尚孫弟子法潤弟子也造玄惠
果彦弟子法全阿闍梨弟子也流尚傍流也時
代天下劣也旁以大師付法傳可貴勝者也問
以大師惠果付法御弟子事以何可知哉答惠
果俗弟子吳殷纂云今有日本沙門來求聖
教皆令可學可如瀉瓶此沙門此非凡位三地
菩薩也內具大乘心外云小國沙門相云云唐

血脉鈔上

六

土義明供奉受兩部大法其外皆受一界不受
兩部唐制御付法義明供奉也然而以日本大
師為正付法也仍義操等非御付法也故海雲
造玄血脉旁以劣也豈及同月之對論乎又云
不空三藏自金智兩部相並受給然者依金智
遠言再渡天謁龍智重受兩部大法而不空三
藏自龍智金剛智以所受兩部大法不漏悉奉
授惠果給也故自門他門以惠果為根本祖師
彼付法尤東寺山門寺門中以東寺可為本也

八祖事

私云若如法談之以付法傳而可講之也

第一大目如來付法傳云第一高祖法身大毗

盧遮那如來與自眷屬法身如來於祕密法界

心殿中自受法樂故常恒不斷演說此自內證

智三摩地法具如金剛頂經說

第二金剛薩埵付法傳云乃至親對法身如來

海會受灌頂職位則說自證三密門以獻毗盧

遮那及一切如來便請加持教勅云云

第三龍猛菩薩付法傳云昔釋迦如來掩化之

血脈鈔上

後八百年中有一大士名那伽闍賴樹那菩提

薩埵唐龍猛菩薩舊云龍樹訛略也誕跡南天化被五印尋

本則妙雲如來現跡則位登歡喜乃至遂則入

南天鐵塔中親授金剛薩埵灌頂誦持此祕密

寂上漫荼羅教流傳人間撈伽經及摩訶摩耶

經等釋迦如來所懸記則是人也

第四龍智阿闍梨付法傳云龍智阿闍梨即龍

猛菩薩付法上足也云云貞元新定釋教錄云

龍樹菩薩弟子龍智年七百餘歲今猶見在南

天竺國傳授金剛頂瑜伽經及毗盧遮那惣持

陀羅尼法門五部灌頂諸佛祕密之藏及諸大

乘經論等文不空表製集云昔毗盧遮那佛以

瑜伽無上祕密寂大乘教傳於金剛薩埵薩埵

數百歲方得龍猛菩薩而傳授焉龍猛又數百

歲乃傳龍智阿闍梨又數百歲傳金剛智阿闍

梨云云請來錄云龍智和尚八百不左文

第五金剛智阿闍梨付法傳云貞元釋教錄云

沙門跋曰囉菩提唐金剛智南印度摩賴耶國此

血脈鈔上

光明國其國近觀婆羅門種誕育靈奇幼有神

異懇請於父求之入道年甫十歲於那爛陀寺

依寂靜智出家學聲明論十五學法稱論二十

受具足戒六年學大小乘律又學般若燈論百

論十二門論二十八於迦毗羅衛城就勝賢論

師學瑜伽論唯識論辨中邊論經三年卅一往南

天竺於龍樹菩薩弟子名龍智年七百歲今猶

見在經七年承事供養受學金剛頂瑜伽經及

毗盧遮那惣持陀羅尼法門諸大乘經典并五

明論受五部灌頂諸佛秘密之藏文

第六不空三藏付法傳二云不空三藏和尚者南天竺國人也法諱智藏号大廣智不空金剛乃至年甫十四於闐婆國見弘教三藏金剛智而師事之和尚初試教悉曇章令誦梵經梵言賒切一聞無墜便許入壇授發菩提心戒年甫十五與出家焉文又云奉遇龍智阿闍梨肘行漆步從而問津即奉獻大唐國信金貝等物龍智曰吾所寶者心也非此寶也尋即授以十

血脉鈔上

九

八會金剛頂瑜伽十萬頌經并大毗盧遮那大悲胎藏十萬頌經五部灌頂真言祕典經論梵夾五百餘部僉以為得其前傳矣金剛界及大悲胎藏兩部大漫荼羅法并尊樣圖等悉蒙指授不異渴飢他日王作調象戲以試和上和上結佛眼印住慈心定誦真言門以卻之其象顛仆不能前進王甚敬異與夫指降醉象有何殊哉

第七惠果阿闍梨付法傳云法諱惠果阿闍梨

耶俗姓馬氏京兆昭應人也故大興善寺大廣智不空三藏之付法入室也髻鬘之日隨大照禪師見三藏三藏仁見驚曰此兒有密藏器稱歎不已竊告之曰汝必當興我法撫之育之不與父母即授三昧耶佛戒許之受職灌頂位口授大佛頂大隨求梵本普賢行願文殊讚偈文又云三藏告曰吾百年後汝持此兩部大法護持佛法擁護國家利樂有情此大法者五天竺國太難得見一尊一部不易得何况兩部乎前

血脉鈔上

十

有弟子其數雖多或得一尊或得一部慈汝聰利精勤許以兩部努力精進報吾恩也私云右七祖之傳委細在于付法傳披彼可見之而已

第八弘法大師御遺告云夫以吾昔得生在父母家時生年五六之間夢常見居坐八葉蓮華之中諸佛共語也雖然專不語父母况語他人此間父母偏悲字号貴物多布度毛能土年始十二爰父母曰我子是昔可佛弟子以何知之夢見從天竺國聖人僧來入我等懷如是姓胎產生子也然

則齋此子將作佛弟子吾若少之耳聞喜以泥
土常作佛像造宅邊童堂安置彼內奉禮為事
此時吾父仇伯氏讚岐國多度郡人昔征敵毛
被班土矣母阿刀氏人也爰外戚舅阿刀大足
大夫等曰縱為佛弟子不如出大學令習文書立身
任此教言受俗典少書等及史傳兼學文章然
後及于生年十五入京初逢石淵贈僧正大師
受大虛空藏等并能滿虛空藏法呂入心念持
後經遊大學從直講味酒淨成讀毛詩尤傳尚

血脈抄上

十一

書復問尤氏春秋於惡田博士博覽經史專好
佛經恒思我之所習上古俗教眼前都無利弼
矧乎一期之後此風已止不如仰真福田因作
三教指歸三卷成近土号稱無空名山絕巘之
處嵯峨孤岸之原遠然獨向淹留苦行或上阿
波大瀧嶽修行或於土尤室生門崎寂暫心觀
明星入口虛空藏光明照來顯菩薩之威現佛
法之無二厭苦節也則嚴冬深雪被藤衣而顯
精進道炎夏極熱斷絕穀漿朝暮懺悔及于二

十年矣大師石淵贈僧正召率發向和泉國槇
尾山寺於此剃除鬚髮授沙彌十我七十二威
儀名稱教海後改稱如海此時佛前發誓願曰
吾從佛法常求尋要三乘五乘十二部經心神
有疑未以為決唯願三世十方諸佛示我不二
一心祈感夢有入告曰於此有經名字大毗盧
遮那經是乃可要也即隨喜尋得件經王在大
日本國高市郡久米道場東塔下於此一部解
繹普覽凡情有滯無所憚問更作發心以去延

血脈抄上

十二

曆廿三年五月十二日入唐為初學習天應慤
勲載勅渡海彼海路間三千里先例至于楊
蘇洲無質云而此度般增七百里到衡州多礙
此間大使越前國大守正三位藤原朝臣賀能
作手書呈衡州司州司披看即以此文已了如
此兩三度雖然封船迫入令居濕沙之上此時
大使述云切愁之今也抑大德筆主呈書云矣
吾作書樣替於大使呈彼州長披覽舍咲開船
加問即奏長安經三十九箇日給於洲府力使

四人且給資糧洲長好問作借屋十三烟令住
經五十八箇日給存問勅使等彼儀式因極
覽之主客各各流淚次後給迎客使給於大使
以七珎鞍次次使等皆給靴鞍入京儀式無可
說盡見之者滿於遐邇也此間大使賀能大夫
達向者歸國惟延曆廿四年電時也即配大唐
貞元廿一年也爰小僧并攝大夫准勅留學
具在別記即小僧遇上都長安青龍寺大德內供奉
十禪師惠果大阿闍梨沐五智灌頂學胎藏金

五脉錦上

十三

剛兩部祕密法及讀毗盧遮那金剛頂經等二
百餘卷并諸新譯經論唐梵合存小僧以大同
二年歸我本國此間海中人人云日本天皇崩
云聞諫是言尋本口言船內諸人論爭首尾都
不云一定云注繫著岸或人言告天皇某日時崩者
小僧懷悲給素服從爾以降帝經四朝奉為
國家建壇脩法五十一箇度文又云吾到日彼
大阿闍梨曰我命既盡待汝既尚已果來我道
東矣故吳殷纂云今有大日本國沙門來求聖

教皆令前學可如渴瓶此沙門是非凡徒三地
菩薩也內具大乘心外示小國沙門相云大阿
闍梨御相弟子內供奉十禪師順曉阿闍梨之
弟子玉堂寺僧珎賀申云日本座主設雖聖人
是非門徒也須令學諸教而何擬被授密教云
兩三般妨申於是珍賀夜夢降伏曉且來至小
僧三拜過失謝言云又去弘仁七年表請紀伊
國南山殊為入定處作一雨草菴去高雄舊居
移入南山厥峯絕遙遠阻人氣吾居住時頻在

五脉錦上

十四

明神衛護常語門人云吾性狎山水疎人事亦
是浮雲之類追年待終為此窟東乃至吾自去天
長九年十一月十二日深厭穀味專好坐禪皆
是令法久住勝計并為末世後生弟子門徒等
之也方今諸弟子等諦聽諦聽吾生期今不幾
仁等好住慎守教法吾永歸山吾擬入滅者今
年三月廿一日寅刻諸弟子等莫為悲泣吾即
滅而歸信兩部三寶自然代吾被眷顧吾生年
六十二臘四十一也吾初思及于一百歲住世

奉護教法然而恃諸弟子等忽永擬即世也

請來錄云空海去延曆廿三年季夏之月隨入

唐大使藤原朝臣同上第一船發起感陽其年

八月到福州著岸十二月下旬到長安城宣陽

坊舊宅安置廿四年仲春十一日大使等旋輟

本朝唯空海孑然准敕留住西明寺永忠和

尚故院於是歷城中訪名德偶然奉遇青龍寺

東塔院和尚法諱惠果阿闍梨其大德則大興

善寺大廣智三藏之付法弟子也德惟時尊道

血脈鈔上

十五

則帝師三朝尊之受灌頂四衆仰之學密藏空

海與西明寺志明談勝法師等五六人同往見

和尚和尚乍見含咲喜歡告曰我先知汝來相

待久矣今日相見大好報命欲竭無人付法必

須速辨香華入灌頂壇即歸本院營辦供具

和尚告曰如今此土緣盡不能久住宜此兩

部大曼荼羅一百餘部金剛乘經及三藏傳付

之物並供養具等請歸本鄉流傳海內纔見汝

來恐命不足今則授有在經像功畢早歸鄉國

以奉流布天下增蒼生福然則四海恭万人樂

是則報佛恩報師德爲國忠也於家孝也義明

供奉此處而傳汝其行矣傳之東國努力付法

殷懃遺誨畢去年十二月望日蘭湯洗垢結毗

盧遮那法印右脇而終是夜於道場持念和尚

宛然立前告曰我與汝久有契約擔弘密藏我

生東國必爲弟子委曲之言更不煩述

仰云御遺告御請來錄等案之延曆廿三年五

月十二日御入唐桓武天皇御宇也則御在唐

血脈鈔上

十六

中一年也但御受法中一年也惠果御入滅次

年大同元年御歸朝也惠果則永貞元年十二

月十五日御入滅春秋六十夏臘四十也

仰云龍猛龍智一向天竺人也金剛智不空善

無畏天竺人而唐朝來給一行惠果一向唐朝

人也又不空十五歲奉隨金剛智唐朝來給則

御弟子三千人有之其中以惠果爲上足付法

弟子

私云御請來錄乃至之處能々可見之并小

野纂要鈔等可考之。又元亨釋書云釋空海世姓佐伯氏讚州多度郡人父田公母阿刀氏夢梵僧入懷而有身在胎十二月寶龜五年生焉母思其夢小字曰貴物年十二外舅朝散大夫阿刀大足教世典學文翰十八上大學雖讀儒書志在佛經偶逢沙門勤操受虛空藏求聞持法未雜染而事修練甫冠歲就操落髮受沙彌十戒研究三論時操在泉州槇尾山寺初名教海後自改如空延曆十

年麻第一

十七

有四年登東大寺壇受具足戒又改空海乃於佛前誓曰三乘十二部經我心有疑未能來擇三世十方一切諸佛願垂加祐示我正法夢中一人告曰有大經卷名大毗盧遮那神變加持是真祕要也寤後問此經無知者往來諸所懇誠尋求適於和州高市郡久米道場東塔下得此經披卷看閱疑滯居多自茲志遠遊二十有三年夏五月從遣唐使金紫光祿大夫藤原能汎渤解秋八月著衡州

年麻第一

十八

界乃德宗貞元二十年也冬十有二月到長安城敕館宣陽坊官舍二十有一年又敕居西明寺永忠法師故院海周遊城中諸剎擇永明師謁青龍寺東塔院內供奉惠果阿闍梨乃不空大廣智三藏之高弟也果見而喜曰我先知汝來相待者久矣願諸徒曰是沙門者第三地菩薩也夏六月入大悲胎藏大曼荼羅投花花著中臺果嘆嘆以為大器即沐五部灌頂之掬水秋七月入金剛界大曼荼羅八月授傳法阿闍梨位灌頂是日海設五百僧齋果與金剛頂等諸密經并圖畫曼荼羅及諸道具曰昔大毗盧遮那世尊以祕密真言印付金剛薩埵薩埵傳龍猛菩薩展轉至大廣智智為三朝灌頂國師亦付我汝有祕密大根器故我兩部太法祕密印信皆悉授汝宜以此金剛乘教及三藏所付供養什物歸本土傳布國界然則四海安泰萬民豐樂是亦報佛恩酬師德也又一日語曰瑜

伽者密藏也儀軌圖器諸深秘之者見行經書或遺而不載假使間見秘記不藉調造子亦不委便召供奉畫工李真等十餘人圖胎金諸曼荼羅一十鋪又令供奉鑄工楊忠信等新造道具一十五事又集二十餘輩經生寫金剛頂等諸秘經皆并付之海又逢罽賓般若三藏三藏曰我少年入道經歷五天常誓傳燈來遊此間亦欲泛海遊化東域時緣不熟我志已矣今與汝所譯華嚴六波羅蜜

血脈鈔上

十九

經及梵夾汝其持去通我夙志則出經夾付之元和元年秋八月歸乃大同改元丙戌也敕令流通傳來密乘弘仁帝敕於宮中會諸宗碩師各唱所習海立即身成佛之義諸家爭折之海辯論精審上語海曰義雖玄極朕思見證海即入五藏三摩地觀忽於頂上涌五佛寶冠放五色光明威容赫如也上離御榻作禮羣臣皆起拜時三論之俊道昌唯識之髦源仁華嚴之英道雄天台之傑圓澄等

皆豎降旗十有三年大同大上皇入壇灌頂帝者密灌於此始焉海已大興密教敕述所業海則毗盧遮那經及菩提心論著十住心論品藻諸宗第一異生梵半心第二愚童持齋心第三嬰童無畏心第四唯蘊無我心第五拔業因種心第六他緣太乘心第七覺心不生心第八如實一道心第九極無自性心第十秘密莊嚴心鱗次配抵他家之者或有問議然東密之者至今取法初海得操師求

血脈鈔上

十

聞持法乃躋阿州大瀧之嶽修供時天晴朗忽寶剎落座前又往土州室戶崎誦修如上至五更明星飛入口已而得聞持悉地爾來身心勇健堪任頭陀被葛而經冬絕膳而過夏精進苦行朝懺暮悔天長元年大旱春三月敕海於神泉苑修請雨經法時守敏法師奏曰守敏世壽法臘共適于海先承詔為適宜乃詔敏敏以七日為期散朝陰雲厚布都下暗如夜雷鳴雨瀑舉朝感異勅見雨之所

露只東西京而已亦詔海過七日不雨海入
三摩提見之守敏咒諸龍入一瓶海奏延二
日告諸徒曰池中有龍號善如阿耨達池龍
王之族也此龍現形必得悉地時金龍出長
九尺許弟子真雅實惠真曉真然等七人得
見餘不觀海奏事敕和真綱以幣物供神龍
散日重雲震雷大注膏雨池水盈溢至火壇
之畔霖沛三日天下皆洽勅加優賞內州有
一寺其地元龍池龍移他處池又涸寺衆苦

血脈鈔上

卷一

無水海點一所加持清泉忽沸因號龍泉寺
嘗修不動使者法海身出火燄或入水想觀
室內成池其神異多類之初弘仁七年遊紀
州相勝攸上高野山創金剛峯寺十有四年
正月敕以東寺賜海建灌頂院海准青龍寺
法式每歲二序行灌頂事乃置惠果所付健
他國袈裟及念珠為寺鎮天長二年敕改高
尾神願寺名神護國祚真言寺賜海承和元
年海奏乞准唐國內道場置真言院於宮中

敕以勘解由司廳為曼荼羅道場每年正月
後七日息災增益修法至今不絕二年正月
奏置試度三人毗盧遮那經業金剛頂經業
聲明業各一人初弘仁十有一年上賜宸奎
傳燈大法師位記天長之始為僧都承和二
年海在金剛峯寺三月二十一日結跏趺坐
作毗盧印泊然入定先七日共諸弟子念彌
勒寶號至此日瞑目氣絕蓋持定身待龍華
也年六十二門人為七七忌其間鬚髮生身

血脈鈔上

卷一

體暖經五旬諸徒剃髮整衣歛全身疊石造
壇立率光波其上定後四日上敕內舍人弔
喪及贈贈大上皇降弔書曰真言洪匠密教
宗師邦家憑其護持動植荷其德惠豈圖崦
嵫未遍無常遽侵速馳草書弔慰大定海在
豆州桂谷山寺以指向空寫大般若經至魔
事品字畫忽現空中自此工筆翰能五筆一
時書或書水上黑不亂壞奉勅書大內南門
諸額又書應天門額已挂之仰見應字上點

欠之海乃擲筆補之毫無差邪王臣伏其妙撰述尤多祕府論三教指歸性靈集等家家誦習傳來佛舍利八十粒梵夾三經疏二百一十六部四百六十一卷諸曼荼羅寶器道具不遑具記延喜二十有一年冬十月賜謚弘法大師

贊曰有非常之志建非常之事不是強為天機之所使也纔見登壇具戒則能對佛立誓是天機之所使與故踰鯨波之嶮危得龍樹

血脈鈔上

廿三

之深祕故國山川雲行雨施若夫

宮中之紺宇建護國之儀頂上之寶冠證成佛之義者又非天機之所及而已昔飲光尊者正受雞足千歲之下少有人繼見彼南山籌室有血疑是同一三昧乎唯其欠金欄伽梨之為異耳矣

血廣韻况通切靜也

同十八卷神仙篇云紀州丹生明神者弘仁七年空海師遊紀州求勝地漸上高野山岩巒峭崿林木榛蕪不知所之時婦人出來曰

妾者山神也夙負殺罪苦處幽陰思歸真乘未逢其人今師到此妾之幸也此山方數百里願施師懺罪乃導海至山中平坦所曰是福地也營構於此初唐元和元年八月海將歸朝泛舶之日手執三鈷杵祈願曰密教入日域久屬流傳者願此杵先占靈區便向本邦擲之其杵飛入雲中到此其杵懸松枝於是知神女之言不虛也便奏建金剛峯寺安寶塔高一十六丈為密衆興繁之勝場神女

血脈鈔上

廿四

者丹生明神也

真言付法纂要鈔成尊於自宗舉十殊勝第作十云外護殊勝者弘法大師天長元年奉詔命於神泉苑池邊勤修諸雨經法元此池有龍王名善如元是無熱池龍王類有慈為人不至害心御修法間入祕密壇成金剛天即敬真言與旨從池中現形託人誓約祈雨靈驗其明從爾以降每致祈請降雨霽霽智度論云阿波羅邏龍王善心受化作佛弟子除

世飢饉故常降好雨是故國豐摩加陀國也以彼准此我朝豐樂只在此龍故大師誠云若此池龍王移他界淺池減水薄世之人方至此時須不令知公家私加祈願而已可謂大師雨露之功猶過傳說風雨之德乎抑於贈部州八万四千聚落之中唯煬谷內盛祕密教事見上又昔威光菩薩摩利支天即大目化身常居日宮除阿修羅王難今遍照金剛鎮住日武增金輪聖王福矣神号天照尊郡名日本國乎

血脉鈔上

廿五

自然理立自然名職此之由矣是故南天鐵塔雖造金包法界心殿東垂陽谷雖鄙皆是六種姓人明知大日如來加持力之所致也豈凡愚之所識乎今正佛自再曜專仰聖運焉云云

真俗雜記十四云作賴瑜大師本地事問何

答本幡口云一阿彌陀如來也其故古老云大師御妹常被申可奉拜大師之由大師欲拜我者即可拜阿彌陀如來上圖彼像被遣

乏云云又付法傳云龍樹云妙雲如來注觀自在王如來云云即阿彌陀也又龍樹大師先身也其故大師御詞云我昔過薩埵文既遇薩埵云云定知龍樹菩薩也一云勝鬘夫人也其故祕鍵上表云昔陪驚拳說法之筵親聽其深文云云何以此文云勝鬘夫人乎答又古老傳云大師又聖德太子御後身也聖德太子有多御名中又有勝鬘御名也而彼太子製作書中釋明事云勝鬘之身讚如來意取此

血脉鈔上

廿六

勝鬘之身者在世勝鬘夫人云歟又今太子御身歟又彼書與云昔住驚拳說法筵親聞深文一言一語無違意取此釋又契上表文也故太子大師一體也太子勝鬘夫人垂跡云勿論也故知大師又可爾也一云摩利支天垂迹也小野纂要中見云云已上付法八祖畢

私云若列傳持之八祖則除大日金薩而善無畏一行加之其次第最初如列之因茲兩祖之傳少少記之矣

略付法傳之與云沙門輸波迦羅具足梵音應云我波揭羅僧訶唐音翻云淨師子以義譯之名善無畏中印度摩伽陀國王也亦是龍智菩薩弟子金剛智三藏之同門也捨寶位入道林神氣清靈道業怪著精通禪惠妙達惣持三藏教門一心遊入

血脈鈔上

廿七

五天諸國久播芳名大悲利生有緣東漸途至北印度境響震摩訶支那唐皇帝搜集賢良發使迎接以開元四年景辰大貴梵夾來達長安初於興福寺南院安置次後五年丁巳於菩提院譯虛空藏求聞持法一卷十二年隨駕入洛於大福光寺安置遂為沙門一行譯大目經一部七卷獲婆呼蘇悉地兩部經三藏性愛恬簡靜慮恬神時開禪觀聲勸初學慈悲作念接誘

無虧人或問疑剖折無滯

大目經供養法疏曰昔在中天竺國王有四子者其王臨命終之時王后請問大王若崩以後何子當為嗣位王即荅曰小子可能繼位也於是父王崩後大臣百寮皆悉來集請問遺制王后即荅如王終言是時王后及諸兄弟大臣等奉請小子將繼王位小子荅曰我有誓願出家學道望濟群品不堪繼位也母后等再三重請如父

血脈鈔上

廿八

王遺言小子亦如前辭謝母后等三請已後強令繼位小子不敢違逆遂即王位之後更亦思惟我住此國不得出家我之阿姨隣國為后宜以投託以出家方便逃出奔赴其國到彼國境即有鎮將問曰汝何人也小子即荅曰我是中天竺國之王也鎮將曰若是國主何以獨來也荅曰我本冀望出家學道若久住本國必不得出家深冀出家學道禮拜遣使聞奏王后聞之

使人來迎。小子見王后，踴躍說志願。王后聞說，悲泣流淚，哀愍傷心。良久曰：汝姓是刹帝利，淨飯王子，孫釋迦如來，遠從姪也。我聞釋迦捨太子位，出城入道，成正覺。天下難捨，唯棄寶位。汝同釋迦捨國王位，發大誓願，必得成佛。我今日以後，隨百姓門持鉢乞食，庶飫持齋，可以悲傷矣。雖然，大丈夫所冀至心誓願，無可奈何，便許出家。為請境內高德法師，為作弟子，出家學問。

血脈鈔上

十九

小子稟性明慧，一聞便領妙宗。二問比知，千百雖學不多年所學，者盡達於其法。師辭曰：我之所解盡矣，更無所以演說。吾聞某國賢聖大德，宜到彼所而學也。小子奉教禮謝而退，往至賢師之所修學。如前乃至經歷五十餘國，乃至北天竺，乃有一城名乾陀羅，其國之王仰憑和上受法，念誦其經，文廣義深，不能尋遂。供養次第，求請和尚供養方法，和尚受請於金粟王所。

造塔邊求聖，加被此供養法。忽現空中金字，炳然和上一遍略讀，分明記著。仰空云：誰所造也？云：我所造也。云：誰我也？云：我是文殊師利也。即喚書人，遂便寫取，即與其王一本，自寫一本，隨行將行，流通四方也。所謂小子者，厥号善無畏三藏和尚，即是小僧不可思議多。幸面諮和上所聞法要，隨分抄記。

云云

真俗雜記云：不思議疏上云：小子隨分

血脈鈔上

三十

抄記。此記意北天竺乾陀羅國也大目經義釋第八云：阿闍梨於鳴仗曩國撰出毗盧遮那供養次第法。抄第七云：阿闍梨即指無畏三藏於烏仗那國，或云于闐國言撰者，集也。謂於大品中揀取此一品，可有津要，獨成一卷，分為五品。即此經第七卷是也。文義釋意非北天竺于闐國非天竺攝故。玄贊第一云：于闐國亦在葱嶺東。西域記第三云：烏仗那國。語言雖異。

大同印度文此記意爲仗那國非正印度見問相違如何會世答以不思議疏爲正龍猛菩提心論引彼文故若非天竺論中何引之矣但義釋文安然釋見安然菩提心義一云供養法疏云和尚於金粟王塔下感得文殊金色字於虛空中將供養法以授無畏云云故知無畏在烏仗曩出彼所承時人不了云三藏撰出此義釋本三藏說一行記智儼溫古再治故本記外多加

血脈鈔上

廿一

人語故知菩提心論所引供養次第法者天竺本見彼文非引三藏在烏仗那所造文也文私云委細又見于他師破決可披覽而已依繁略之元亨釋書云釋善無畏者甘露飯王之裔也唐開元四年丙辰至長安玄宗預夢真儀洎入對與夢無異大悅館西明寺崇爲教主二十有三年示滅塔龍門之西山吾元正帝養老之間來此土時機未稔利導無聞只延曆二十

血脈鈔上

廿二

四年內侍宣曰昔天竺上人雖我降臨不勸請受徒遷壑舟遂令真言祕法絕而無傳云云言無畏也畏之事迹備見宋高僧傳贊曰聖人之隱顯猶月之印水也有水即顯無水即隱只恐無水月元不隱若人無水而謂月隱者非也當無畏之遊化此方有水此人無水方之有水雖遺蹤人之無水不承接是以授受不繼記纂亦減是所以我痛絕也僅因內侍之宣勅得綴大士之軌躅奚夫斯人而寡斯迹乎然延曆大同之間密教宣頒其後諸子爭馳網載而歸昔會昌之虐燄彼國此宗不振漸更五季至竟殄泯矣獨吾日域光暉益燦其不苟來也我與達磨並案焉論曰達磨無畏二師雖涉吾竟當時無承稟茲書可系力遊何傳智之有又養老元年者當開元五年也宋高僧傳雖畏篇無他遊塔龍門亦可疑矣曰達磨之贊不云

乎其印迹者爲後世之苗根也無畏吾無
聞然矣二師共大法之始祖也彼唐宋諸
師有紀述者天竺數百年前諸祖皆盡收
列焉况此二師雖隔系授適蹈本土豈於
力遊乎又予何謾議無畏哉雜華曰一念
普觀無量劫無去無來亦無住達磨之八
十六年無畏之同時皆一念也贊之所謂
齊水月也無畏者聖人也豈以一化迹拘
去來乎世言無畏齋毗盧舍那經入我國

牟廉鈔上

廿三

時之資稟歲和之久米寺而去後七十年
空海遭靈感得此經若無畏不將來此邦
爭有此經乎猶言先有持來誰人乞明告
我嗚呼無畏之事子休聽望焉

開元四年也

編年通論云是歲天竺三藏法師無畏至
京師帝嗣位之初一夕夢梵僧謁見風度
瓊異及寤追憶不已因追畫工授以形段
圖于殿壁及畏至入對帝熱視蓋夢中所
見僧也竦然異之館于西明寺寧薛諸主

皆降禮欽重其後秋旱帝廉知無畏能致
龍遣內使傳詔請雨畏難之奏以旱數當
然若苦召龍恐暴物帝再遣諭旨曰苦秋
暑雖暴風疾雨適足快意畏諾之有司設
壇儀華綵光麗畏笑曰是可以致雨耶命
撤去之獨持蒲鉢水以小刀攪之誦咒語
百餘番即有微物如蚪龍從鉢矯首水面
項之復沉畏兄遣之目氣自鉢騰涌語詔
使曰速歸雨即至矣詔使馳出回顧有雲

血脉鈔上

十四

如練自講堂盤旋而上頃刻風雨震電詔
使趨入奏御衣巾已透濕於是震風凌雨
飄蕩廬舍士民悚懼彌目而息又嘗霖霖
逾時詔畏止之畏於寺垣近媪五軀向之
作梵語若斥罵者即刻而霽其神驗類如
此帝敬之若神未幾通華言譯虛空藏毗
盧遮那蘇悉地羯羅等經十餘部禪師一
行三藏寶月等參預其事畏性簡靜好禪
觀每勸學者習之累表求還帝留不許

同二十三年三藏無畏卒春秋九十有九
詔鴻臚丞李現鑒護喪事塔于龍門之西
山廣化寺藏其全身畏本釋種蓋甘露飯
王之後以讓國出家道德名稱爲天竺之
冠所至講法必有異相初在烏荼國演遮
那經須臾衆會咸見空中有毗盧遮那四金
字各尋丈排列久之而沒又嘗過龍河一
托馳負經沒水畏懼失經遽隨之入水於
是龍王邀之入宮講法不許彼請堅至爲

五藏鈔上

增五

留三宿而出所載梵夾不濕一字其神異
多類此論曰初南山宣公以律行聲震
五天或謂無畏初至宣不甚禮一夕揣虱
置地無畏隔房呼曰律師能不慈念衆生
而撲佛子乎宣竦然心服明日攝衣悔謝
此傳者訛也宣沒於乾封二年凡五十有
一載無畏始至又舊唐史五行志天寶九
年洛陽有巨蛇出芒山下其長百餘丈人
觸氣即死有詔命無畏咒之畏驚曰是將

混洛陽爲滿者也咒之三日而斃然自畏
示寂至天寶九年亦十有五載當是不空
三藏咒蛇也史以無畏神迹特盛故件件
冒其名雖然不空果位中人以佛心爲心
必運神功導蛇神識脫離惡形而轉生善
處耳非謂直咒蛇令其遽死也云云
私云喜無畏者善無畏之弟子云尊勝二
卷軌師弟之兩本可得其意云實歸鈔見

五藏鈔上

增六

略付法傳之與云沙門一行俗姓張名遂
亦是故金剛智三藏之法化也剡國襄公
謹之曾孫太僕丞懷之子也家代忠孝公
卿相襲母隴西李氏華容止性聰敏懷孕
之日其母額上有二三寸自光及生之後
移在兒額親族怪而異之至年十歲聰慧
過人其父欲神童舉之其母曰吾夢寐徵
兆此兒必爲國師勿妄舉之後必成大器
妾於是乃止其後遂爲國師果如母言掩

化之日玄宗皇帝自親製碑銘并書石上其詞曰禪師幼而希言言必有中長無暇日日誦萬文深道極陰陽之奧屬辭盡春秋之美射策甲科翬飛高蹈依嵩嶽僧寂深窮禪門就常陽僧真纂成律藏予聞玄德請來儀展宿緣之冥愛全幽人之素履禪師以朕欽若昊天故撰開元之曆以朕敦崇聖道故述大衍之贊又於金剛智三藏學陀羅尼祕印登前佛壇受法王寶又

血脈鈔上

卅七

於無畏三藏譯盧遮那佛經開後佛國滿大慈願本孰爲而來哉將辨是而去矣善乎爲親出家毀形無我以拔濟幽難是孝中又有孝也爲君思道吐血忘倦以潤色鴻業是忠外別有忠也昔嘗順風咨度乘百遊閑發揮精至討論典禮方期永喜以親有德天孤善願奪我師賓十五年前九月於華嚴寺疾亟將舉病入辭小間而止朕於此夜夢瞰禪居見繩床施轆紙隔開

扉曉而驗問一如所觀意識往來若斯感會先集都城名德爲禪師設大道場佛心證明危疾果愈十月八日隨行所在新豐身無諸患口無一語忽然浴香水換潔衣跏坐正念恬如寂滅四衆瞻悼久覺知適爾爲者有往生之意也乃命停神於因極之寺安塔於銅人之原謚曰大慧禪師崇稱首也自終及葬几經三十日爪甲不變鬢髮更長形共力持色與心涸十方億衆贊仰希有唯當蓮葉下生觀多寶於涌塔龍華後會禮迦葉於開山予懷鬱陶寄詞糟粕偈曰

血脈鈔上

卅八

自天聰明經佛授記彼上人者兼善藝事文揭日月術窮天地捨有作心發無上志万品道諦千門法華揔攝一燈撥去三車我夢金人來鎮國家祚增劫石善集恒沙定住寶相慧行真宰道予一人化清四海正眼何從供心莫待交臂忽亡結跏如在

舍利堅固，法螺闐絕。見生滅者，寂豈生滅。聞言說者，空何言說。道離見聞，銘示來哲。夫對揚如來文殊居上，發揮宣父顏回當之。扣摠真言，禪師之功也。然夫大辨若訥，大智若愚，非聖君無以鑒其賢，非智母無以知其子。每憂國家亡絕，佛法謙下和敬，隱德藏名，故多勝行，闕而無述也。

編年通論云

是歲三月，勅東都留守韋安石，賁詔起嵩

山脈鈔上

中九

山沙門一行，赴闕行辭，疾不赴，遁入荊州之常陽山。舊唐書云：行姓張氏，初名遂，刻國公公瑾之孫，武功令檀之子，少聰敏，覽觀子史，常詣道士尹崇，借大玄經讀之。數日而還，崇曰：此經精微，吾尋積年尚未曉，子宜研究，無忽也。行曰：已究其義，因出所撰大衍玄圖并義，決崇覽之大驚，因與談其淵奧，退謂人曰：此後生，顏子也。由此知名，於世。初武三思慕其學，行就請結交，行

山脈鈔上

中十

遁匿，避之尋出家，遍歷天下，訪求異術，至天台國清寺，見別院古松數十門，有流水行立門屏，聞僧於庭中布算聲，而語其徒曰：今日當有弟子自遠來求吾算法，已今到門，豈無人導引乎？即除一算，曰：門前水當西流，弟子亦至矣。行返顧，溪水果已西流，遂承其言，遽趨入，再拜咨求其法，彼盡授與之。遂洞曆象陰陽推步之學，回入嵩山，依普寂禪師，參決禪門宗旨，及道當陽山。又從律師慧悟學毗尼，凡經籍一覽畢，世不忘。同書開元三年八月，玄宗遣禮部郎中張洽賁詔詣常陽山，起沙門一行，赴闕行以再命，不許辭赴之。有旨安置光泰殿，帝數訪以安國撫民之要，行啓陳無隱，未幾，永穆公主出降，詔依太平公主故事，優厚發遣，行諫以爲高宗末年唯有一女，所以特加優禮，而太平竟以驕僭得罪，不應引以爲例。帝納其言，遽追勅，但依常

禮其忠諫多類此或謂行優於憶誦帝丁
日命出宮籍示之行閱畢令內侍執本對
帝復之不差一字帝驚異顧謂左右曰聖
人也自是頻召洛實佛心之要行雍容啓
沃聖眷日隆天下之人以帝從之問道稱
爲天師焉 同書開元九年四月朝廷以
麟德曆署日蝕比不驗詔禪師一行改撰
新曆行受詔推大衍數立術以應之較經
史所書氣朔日名度數可考者皆合而著

血脈鈔上

四十一

之久之道士邢和璞謂大史令尹愔揖滄切
曰一行其聖人乎昔洛下閭造大初曆嘗
記曰八百年後當差一月必有聖人出世
糾正之今年期差滿而一行推大衍數以
糾數家之謬閎之言不誣矣愔亦以爲然
行復欲知黃道進退而大史無黃道儀表
請創置之制可云云十五年十一月己丑禪
師一行寢疾于華嚴寺舊唐史云帝一夕
夢遊其寺見一室繩床竹窓氣象蕭索及

血脈鈔上

四十二

且行以疾聞帝遣中使候問使還奏行居
處之狀與所夢冥合帝歎久之有旨命京
城十大德爲行結壇祈福既而行疾少間
詔陪駕幸新豐未幾行疾革帝親候問遂
沐浴端坐逝春秋四十有五帝哭之哀甚
輟朝三日有詔傷悼聽停龜三七日與中
外瞻禮行容兒如生而鬢髮日長帝親製
碑書之于石出內庫錢五十萬建塔銅人
原謚曰大慧禪師帝嘗從容問國祚幾何
有留難否行曰鑾輿有萬里之行社稷終
吉帝驚問故不答以小金合進之曰至萬
里卽開帝丁日發合視之蓋當歸少許及
祿山亂駕幸成都至萬里橋忽悟未幾果
歸昭宗初封吉王而唐以昭宗而滅故云
終吉有畢媼素供行而媼丁子坐殺入將
之刑媼悲泣請赦行愔之令弟子捕生物
得雉豕七行曰藏其一於甕中爲梵語咒
之七日北斗盡沒朝廷震驚大史奏將有

變請避正殿讓之帝密以問行對曰此無
他蓋妖魔也凡真心壞一切善慈心降一
切魔若肆赦天下則妖不能為帝然之遂
大赦媼子由是得免行日出一豕則一星
現至七月而斗復如故其祕術多此類云

大師十大弟子事

仰云十大弟子者 真濟 真雅 實惠 道雄
圓明 真如 果隣 泰範 智泉 忠延也
或血脉云承和三年五月五日檜尾僧都付真

血脉鈔上

四十三

濟真然等送唐狀云先師門人蒙傳法印可者
皇子禪師及平滿真泰東寺實惠嶺東果隣神
護忠延弘福真雅東大圓明入唐真濟法師各
隨居處流傳祕教受一尊一報者數百人矣

元慶二年十一月十一日僧正法印大和尚位真雅言上

公家狀云言上本朝真言宗

傳法阿闍梨師資付法次第事

入唐根本祖師大僧正法印大和尚位空海

僧正傳燈大法師位真濟

僧正法印大和尚位真雅

少僧都傳燈大法師位實惠

少僧都傳燈大法師位道雄

律師傳燈大法師位圓明

傳燈修行賢大法師位真如

傳燈大法師位果隣

傳燈大法師位泰範

傳燈大法師位智泉

傳燈大法師位忠延

血脉鈔上

四十四

第二阿闍梨少僧都傳燈大法師位實惠付法弟子二人

少僧都法眼和尚位惠運安祥寺建立傳授年紀不知之

或記云承和九年入唐遇青龍寺義真和

尚稟學真言受傳法阿闍梨位同十四年

歸朝貞觀十一年九月廿三日率年七十

元亨釋書曰釋惠運洛城人東寺實

惠之徒也承和五年共圓仁師同舟入唐

十四年歸為安祥寺第一世貞觀十三年

九月卒年七十四

權少僧都法眼和尚位真紹

或記云禪林寺建立号禪林寺僧都承和

十年癸亥十一月廿七日可授傳法職位真

紹之由一門上薦并東寺俗別當等進奏

狀經奏聞授灌頂之宸初也同十二月九月丁卯日曜

於東寺灌頂院傳授之師年五十八受者四十七

行列次第

樂御前四人 樂衆卅人 俗御前十人

執金剛二人 鉸二人 鏡二人

血脈鈔上

螺四人 讚升人 持金剛十八人

取道具 已上二行列之 勸請

受者已上二人在讚衆中央 阿闍梨在持金剛中央兼與執蓋

阿闍梨弟子十六人持如意等物三行列之

貞觀十五年七月七日卒年七十九

元亨釋書云釋真紹幼事弘法大師長受

灌頂于實惠齊衡之間建禪林寺貞觀十

五年七月七日滅 贊曰吾法有莊嚴佛

土之句是大心士之事業也諸師營新宇

修廢寺夷嶮塗架絕橋皆是也佳乎彼莊嚴者此莊嚴也矣

僧正宗俗姓池上氏真紹錫圓覺寺建立

入壇之時自內藏寮給料物云云年紀未勤

之貞觀四年與高岳親王真共入唐遇玄

慶阿闍梨受金剛界灌頂隨法全阿闍梨

受胎藏灌頂同七年歸朝或說八年元慶

八年三月廿六日卒年七十六

元亨釋書云釋宗睿姓池氏平安城人年

十四出家從載鎮法師學經論天長八年

受具足戒乃肄相宗廣岡寺義演開台教

睿山義真并受菩薩戒又於園城寺受兩

部密法于智證大師更趨東寺稟實慧金

剛界真紹阿闍梨位灌頂貞觀三年入唐

請益乃懿宗咸通二年也謁汴州玄慶得

金剛灌頂青龍寺法全胎藏灌頂全便付

金剛杵及儀軌又隨慈恩寺造玄興善寺

善寺善無畏三藏之舊院也門人以三藏所持寶杵并梵夾儀軌等與之又登天台山精究教觀已而返明州望海鎮會李延孝赴日本睿共泛舶凡三日夜着大宰府九年丁亥也帝大悅恩渥倍前本朝宿學請新法即於東寺啓灌頂壇四來還沓十六年上受金剛界三摩地法十八年上遜之清和院常召睿講演法義睿勸帝聽華嚴涅槃等諸大乘經初山王明神託曰汝修學無比吾常擁護遠行雙鳥相從暗夜炬火自照以是爲驗無何詣越州白山二鳥飛隨不散入夜赴山路雲霧增暗忽火炬耀徑行客驚怪睿感神之不浪言焉其登五臺之時西臺維摩石上見五色雲東臺那羅延窟側見聖燈及吉祥鳥又聞聖鐘初貞觀十六年奏於宮中造持念修法院帝在儲宮以選講侍及即祚崇寵益厚其阿闍梨位灌頂時官給供資年七十六

無厭抄上

四十七

終于禪林寺睿性精勤寢不脫衣手不離念珠元慶三年夏上皇出家召睿受三摩耶祕密戒降御衣服玩珍寶車乘爲觀睿分捨東大延曆等寺一毫不入已將來經書一百三十四部贊曰諸師之西遊猶衆商之著寶洲金銀珠璧耀心眩眸信手采取歸家襲收多寡之不侔也蓋力資之所繇與雖然不侔售用不道矣曉睿之二師其多寡者我不得而見寧不道者邪

無厭抄上

四十八

僧正法印大和尚位真雅

付法弟子五人

律師法橋上人位真然

或記云号中院僧正又号後僧正付法三人弘仁末誕生幼少時隨大師悉蒙慈訓貞觀十六年十二月廿九日任權律師十五有元慶七年十月七日轉任權少僧都今年加任二長者同八年三月廿六日宗睿入滅以後寺務仁和元年十月廿二日轉正同四年四月五日轉權大寬平二年十

月二日任僧正。同三年九月十一日於高野山入滅。八十餘寺務七年寬平。御宇以此師為仁和寺供養導師。元亨釋書云：釋真然姓佐伯氏讚州人。弘法大師之甥也。就而學密乘。又受真雅之灌頂。法臨入定。語然曰：我以此山付汝。汝其勵志營構。為鎮護之靈區。真言之教場。汝其勗乎。蓋金剛峯寺此時未成。故有此遺訓。然盡心於營造。以故高野之峯為然之門院。寬平

血脈鈔上

四十九

二年為僧正。三年九月十一日滅。

拾要意云。守覺中院真然僧正為高野管

御作

領。又為東寺長者。大師御巡禮。御共不關

被參也。大師御持經袋授與真然。給云其

御經。中書龍寺和尚手書經一卷有之。其

經理趣經也。後被獻陽成院。陽成院未東

宮御時也。云云

律師無空。或記云三十帖冊子。事空海

自唐實來真言。法文也。其文空海及橘逸

勢書之也。令藏東寺。經藏其後真然隨身

藏置高野。無空律師時持此法文。令出他

畢其弟子等不及反納。分散其後右大臣

忠平奏之以觀賢。藏東寺畢。元亨釋書

云釋無空姓橘氏居東大寺學密教。又修

念佛少資產。晚年自謂我甚寡亡後煩遺

弟不如私畜以供喪事。貯萬錢置梁間。人

不知也。延喜二十一年空病。六月死。言不

及錢。右僕射藤仲平與空善。夢空弊衣垢

面形甚枯槁。告曰。我以伏貸受蛇身。願公

取其錢。寫法華。必脫苦趣。藤公覺而感慨

自往空坊。探得梁錢。錢中果有小蛇。見人

逃出。藤公乃令比丘書法華。管追薦其夜

夢空衣服鮮潔。顏色悅澤。手執香爐。語曰

我以僕射親薦。早出。蛇趣。今詣安養。語已

西飛。

喜長

惟首

少僧都源仁私云德行傳記在子後仍今雖不刊
乏為僧付法五人之負教書之矣

十禪師傳燈大法師位真皎

十禪師傳燈大法師位載寶或記云付
法二人

傳燈大法師位惠宿或記十禪師貞觀寺付法四
人元內供貞觀寺初別當

傳燈修行賢大法師位真如付法第
子二人

或記云号賢大法師位付法三人或云入

道無品親王真如云俗名高岳親王平城

天皇一男或云第三王子改名遍明又云

真遍又云空理又皇子禪師云大同四年

立東宮私仁元年九月坐事出家後住東

大寺又從福貴寺道詮律師習學法文貞

觀四年相共宗睿入唐過青龍寺法全阿

闍梨受兩部灌頂於彼國名遍明後欲渡

流沙到羅越國遷化云云元亨釋書云釋

真如大同帝第三子也大同四年皇太子

私仁受禪即祚尊大同帝為太上皇高岳

皇子為皇太子即如也尚侍藤藥子及兄

仲成勸上皇為變事發覺上皇推髮藥子

仲成伏誅乃廢太子太子元有出塵之志

為沙門居東大寺性聰敏志氣宏邁學涉

內外習三論於道詮稟密教於空海既而

得阿闍梨位勤於教授嘗言密乘奧秘此

方未盡當入唐質所疑彼地若此土遠踰

葱嶺焉貞觀三年上表奏事四年泛海入

唐遍詢名德不克如意遂杖錫西邁翩翩

孤影流離絕域元慶五年在唐留學沙門

中瑾寄書來曰如皇子過流沙傳聞到羅

越國逆旅遷化云云贊曰丈夫貴氣志不言

功業也有氣志者功業自備蓋功業者天

也氣志者德也苟有德者豈言功業之成

否於其間哉夫海師居東場仁公坐北壇

當是時密學之盛也西唐不如矣如公眇

視東北直跨滄波睥睨支那橫截流沙其

志鋒不可觸也猶湛盧豪曹雖并淨而不

多讓矣自推古至今七百歲學者之事西

遊以千百數而跋印度者只如一人而已

吾以如為求法之魁者是也

拾要意云真如親王器量哲明勝傍而無

雙云云然而大師有他境相被仰之間終不

快云云渡唐畢奉惜大師御餘波之故為御形

見潛奉寫御容之時大師隔障子被知食

之有御尋云云於唐土改真如為遍明謁青

龍寺法全頻被申出大師御事落淚云云猶

赴印度之時書留青龍寺詞云身雖沒長

海之西浪魂定歸故鄉之本朝云云此事三

井智證大師在唐之時法全物語也併是

奉憲大師御事故歟或記云大師御入定

御輿昇隨一真如親王供奉云云

權僧正法印大和尚一演

或記云備中守大中臣朝臣治知麻呂息

俗名正棟弘仁之比為內舍人山崎相應

寺建立貞觀九年丁未七月十二日卒六十

謚曰慈濟元亨釋書云釋壹演姓大中

臣氏洛城人父備州刺史治知也演少翔

血脉鈔上

五十三

仕途二兄相繼亡因而厭世幻抱冠纓師

藥師寺戒明出家承和二年受具戒常持

金剛般若真如閣梨見為法器授以密教

演居止不定或宿市鄺或住水邊適至河

內一孝姬讓宅曰此地商賈之巷魚鹽之

津非師深悲誰諭愚頑邪願居此字成精

藍焉演平基趾土中得古朽佛像支體不

全人傳為異漸達天聽勅將作監監營構

賜額曰相應寺演運黑土築方丈壇安尊

像壇變自恰似塗粉見者奇之又建感應寺

事在寺像志皇太后不豫延演持念病即

愈貞觀七年太師藤良房寢疾百方不効

屈演加之所患立差上大悅擢僧正演抗

表辭之上不許九年七月十二日乘小舟

浮水奄然遷化年七十五謚慈濟

同書寺像志云感應寺者一演法師嘗持

觀世音像欲得勝地安之廣求靈區貞觀

中到平安城東北鴨河西岸于時此地搖

血脉鈔上

五十四

震紫雲降垂蓬華紛亂奇香薰郁演喜而
 構伽藍以故号感應寺一日老翁持釣竿
 出河中語演曰我此地之主也自今應為
 護伽藍神我有神力能除魔障去疫癘又
 結好夫婦調適產育所謂牛頭天王者也
 我好眠一歲三百六十日只五月五日醒
 餘日皆卧端午之朝初起向天吐氣其氣
 或為雲霞或為雨露觸萬或為藥或為毒
 或為惡瘡或為疾疫皆是有情之業感也
 非我強為也言已形隱演錄神言奏朝勅
 黃門侍郎藤長良就其地七日夜行道念
 誦以報神德

血脈鈔上

五十五

傳燈大法師位由運或記云峴嶽大上天

或記云付法一人
 亭子院親王真寂

傳燈大法師位景隣付法弟

傳燈大法師位圓行

或記云靈巖寺建立承和五年入唐遇義
 真和尚研究三密幽致受傳法阿闍梨位

同六年歸朝元亨釋書曰釋圓行景隣
 法師之徒也入唐從青龍寺義真和尚受
 兩部密教承和六年歸居靈巖寺傳來經
 書六十九部一百三十三卷
 十禪師傳燈大法師位真隆私云德行未見
追可考之而已
 第三阿闍梨權少僧都法眼和尚位真紹付法

權少僧都法眼和尚位宗叡

以前阿闍梨師資付法次第注顯言上如件

元慶二年十一月十一日僧正法印大和尚位真雅奉

血脈鈔上

五十六

真濟僧正住高雄号神護寺僧正世稱紀僧正

又号實相寺僧正或記云貞觀二年二月廿

五月卒六十一殫正忠正六位上紀朝臣御

園子云

或記云承和十年十一月九日任權律師

并加任二長者年四十四長者
二人始例也同十四年

四月廿三日轉正同十一月以後寺務實

替仁壽元年七月十七日轉少僧都同三

年十月日轉權大僧都是始齊衡三年十

月廿七日轉_七正_{五十}貞觀二年二月廿五日入滅_{六十一}寺務_{十三}元亨釋書

云釋真濟姓紀氏洛陽人朝議郎御園之子也母夢室中建三級塔因而姓延曆十九年生幼齡出家學大小乘兼綜外學從弘法大師受密法法喜其氣字加提弊早授兩部大法為傳法阿闍梨時年二十五後入高尾峯不出十二年承和初奉勅入唐洋中舶破濟駕片木隨浪蕩漾者二十

血脈鈔上

五十七

三日如濟者三十餘人皆盡餓死只濟及真然二人得活南島人遙望海上每夜有光怪而尋之得濟然焉嶋民哀恤得返本朝嘗於高尾神護寺建寶塔安五大虛空藏像春秋設大法會鎮護國家初一紀練行時弘仁上皇聞其苦修為內供奉十禪師仁壽帝敕為僧正濟抗表讓先師弘法此時海公未有追贈帝義濟贈海以僧正濟便受勅天安二年八月天皇寢病濟侍

看護暴退後失志隱居鄉與慧亮法師抗驗而不勝至此益快快貞觀二年二月二十五日逝年六十一贊曰世言真濟惑色而成魅焉當彼不平亡聊之時偷眼於靡曼失所守而有被伺乎夫皇王之興衰者雖系法力之資持其間有數而自歸矣吾徒之有為也唯直道而已豈煩靈臺邪惜乎濟之短於斯乎然而濟之才又魁奇也貽祝於吾皇讓名於其師其功烈偉

血脈鈔上

五十八

也乎哉拾要意云高雄真濟僧正知行人也宗家事不及尤右剩大師筆削御相傳無所殘蒙御免授_云勸敬異他奉祈金輪事多歲于時文德天皇御宇天安年中為惟喬御子御析失法驗之後隱居無幾程入滅_云云云畏私云惟仁親王以真雅為御持僧強非惠亮之加力而已見真雅之傳真雅僧正建立貞觀寺大師御舍弟讚州人也元慶三年正月三日入滅三年被許牛車

或記云承和四年補東寺入寺十三年三月同十
四年任東大寺別當第廿代也嘉祥元年六月
廿八日任權律師四十同九月轉正同二
年加任三長者一真濟律師二真紹律師
也仁壽三年十月轉權少僧都越真紹為
二長者五十齊衡三年十月廿七日轉大
五十貞觀二年二月廿六日以後寺務同
六年二月十六日轉任僧正是法印始也法印大和尚
位六十依真雅奏今度被定僧綱位階同
血脈鈔上五十九
十四年三月十七日任法務七十一東寺
同日興福寺延壽大威儀師權法務九真
雅以前法務五代也皆南京人也最初觀
勒推古天皇鑒真行真天平十慈訓護命
也此人卒後中絕廿七年也同四年七月
廿日以嘉祥寺西院可名貞觀寺下宜清和
御願同十六年二月廿三日供養以律師
道昌為導師以大僧都惠達為光願師屈
百僧云元慶三年正月三日入滅七十九
結智寺入滅云云六十一

寺務十九年元亨釋書云釋真雅弘法
大師之弟也九歲離本鄉入テ維シ事テ兄ニ稟リ密
學ヲ十九受具足戒貞觀帝降誕之初入宮
加持相國忠仁公與雅謀建精舍安尊像
祝寶祚也後敕名貞觀寺置年度三人雅
奏止攝與州往貢勅從之嘗侍宮中誦三
十七尊密咒其音清亮如鳴環珮聽者忘
倦帝又愛重貞觀六年為僧正聽輦車十
六年年盈七十秋七月上表解僧正優詔
血脈鈔止六十
不許サ三上皆不許元慶三年春正月三日
化年七十五同書年表云貞觀六年二
月十六日勅云云法橋上人位法眼和尚
位法印大和尚位此三位以為三綱云云依
真雅奏云云此歲賜輦車詔比丘之輦自雅
始十四年為法務云云
秘鈔問答請雨經之興清和御代貞元十
七年勤修云云拾要意云貞觀寺僧正真
雅大師殊御鍾愛御弟子則十七帖御秘

決有御相傳也一期不倦公請万乘奉仰
師範給清和天皇治世十八箇年之間御
祈勞功厥幾雖然群生悲愍之方不及檜
尾申傳侍_{云云}御遺告云以弘福寺可屬
真雅法印緣起第三右寺是飛鳥淨三原
宮御宇天武天皇御願也_{云云}

實惠少僧都法禪寺檜尾神護寺別當建立觀
心寺讚岐國人佐伯氏初付泰基法師習學
唯識東寺結緣灌頂始行之承和十四年春

血脈鈔上

六十一

秋六十二夏薦四十二仰云實惠十大弟子
中大師御付法第一也然而彼流斷_{云云}

或記云承和三年五月十日直任正律師

年五同七年九月廿八日轉任少僧都_{十五}

五同十年十一月上表於東寺可被行春

秋二季結緣灌頂事有敕許賜官符被始

待之大納言正二位兼行右近大將良房

壹奉敕同年十二月十三日於東寺灌頂

院授傳法灌頂於真紹大法師同十四年

十一月十二日入滅_{年十六}東寺寺務十二
年去天長四年建立河內國觀心寺_{云云}

元亨釋書曰釋實惠姓佐伯氏讚州人初

事大安寺泰基學唯識後從弘法大師稟

兩部密法法稱告曰我法之興汝之力也

付以東寺天長四年建內州觀心寺承和

十年奏於東寺灌頂院修春秋結緣灌頂

初三年勅為東寺長者此任自慧始弘仁

天長二帝崇信過流輩十四年十一月十

血脈鈔上

六十二

三日滅年六十三御遺告以實惠大德

吾滅度之後可為諸弟子依師長者緣起

第二夫以吾道興然專此大德信力也因

茲前示告也以真言為本宗以顯教為邊

教有眼青存融通今師國寶之本豈益此

大德哉仍大經藏事一向預此大德但若

實惠大德不幸後者以真雅法師處分封

納開合依之未知情弟子等勿封開愚情

師師長短深淺必語他家歟可慎_{云云}

拾要意云交談事常師弟開談可有之朝夕語聞道故實之事練磨基也常隨給仕之弟子勝他所住弟子云只是依聞朝夕物語也相構於行學隙徒勿雜談宗端端相互法侶同心不可忘交談也是無雙替古云抑大師御弟子中其行狀皆有相違云御在世之時御弟子心趣悉皆品品被仰置歟彼中檜尾僧都實惠爲上足御弟子無比事也其智海深廣悲水普潤御个定

血脈鈔上

六十三

以後入室御遺弟皆如大師被仰檜尾僧都也常厭公請事殆志隱遁給無程辭寺務被渡次薄同侶畢宗大事并高野大事等依授落給大師御入定後東寺西堂有御影現御口傳重重也云性靈集第九高雄山寺擇任三綱之書云擢苾芻實惠除任摩摩帝所謂實者并虛掃偽之義惠者剪愚破暗之稱遊實相之三昧證金剛之妙惠斯德斯在省名會理衆心共許余

亦印可云

道雄少僧都海印寺華嚴經持者俗脫華嚴

法相兼仁壽元年六月四日卒

或記云東大寺華嚴宗從長歲和尚學因明及華嚴宗又勝長大德弟子也又從慈勝和尚習學唯識云後付大師受兩部灌頂承和十四年十二月二日直任正律師年嘉祥三年轉權少僧都超一長者真濟律師仁壽元年六月八日入滅年此人依

血脈鈔上

六十四

夢想告建立山城國乙訓郡海印寺云元亨釋書曰釋道雄姓佐伯氏敏悟過人從慈勝法師受唯識之旨尤通因明論又依長歲和尚學華嚴宗又就弘法大師習密法雄欲創伽藍未得勝地一夕夢山州乙訓郡木上山境致佳麗翌日到其所果如夢中奏起營構官給工糧合一十院名曰海印寺置華嚴教焉年度二人于今不絕嘉祥三年任僧都仁壽元年六月卒

圓明律師 東寺凡僧別當仁壽元年卒

或記云嘉祥三年七月任權律師同十二

月轉正東大寺能治賞仁壽元年入滅

真如親王 平城天皇第一御子東宮修行賢

大法師位改名通明出家之後住東大寺貞

觀三年入唐過震旦欲渡流沙至羅越國遷

化云云私云委細如右記仍不書于此而已

高隣大法師 後改果隣修學寺建立

或記云嶺東付法二人伊豆國走湯之坊

建立并修禪寺建立人也 性靈集第九

高雄山寺擇任三綱之書云云按禪師果隣

以為上座果者除雲霧於大虛滿光明於

法界隣者養德法雲之震宮紹位大日之

覺殿名舍此德實當合契人皆具瞻上下

同讓云云

泰範大法師 淳和天皇第四天台座主傳教

弟子歟歸山後改光定別當大師是也

或記云泰範大法師大安寺僧傳教大師御弟

子也歸山之後号光定大師云云承和四年

為天台座主天台座主之內無此人如何元亨釋書

曰釋光定姓贗氏豫州風早郡人弱冠喪

父母服闋割塵網大同之初入京師聞睿

嶽澄師之風傾意依付五年春正月宮中

齋會奉詔得度台嶺宮度從定始弘仁三

年四月東大寺戒壇受具足戒五年與興

福寺義延抗論宗義人優稱定初睿山大

乘戒壇南衆沮之傳教卒後得建光之力

居多馬弘仁帝好文定有外學常陪文宴

以故與帝狎及睿壇立定抱戒疏草乞宸

書帝咲而書嘉祥四年奉詔建四王院弘

仁上皇聞定之齋厨屢缺賜一橐御書曰

光定乞食袋其後囊中無所容天安二年

定歲八十上以賀禮賜度者八人及繡八

十純布八十端綿八十斤錢八十緡米八

十斛台徒榮之此年八月卒臘四十七

贊曰明王之至化不可得而測知乎 弘

仁聖皇贍定師、寔之豈封給之不足充之
我勅署一橐、又深矣乎、蓋分衛者行等慈
也用玉管之微署、引環海之均施、奚夫粹當
宸之治矣、定師之承、渥遇也、台嶺之光、暉
乎性靈、集第十爲泰範答睿山澄和尚
啓書一首、泰範言、伏奉今月一日、誨一
悚一慰、兼蒙賜十恭喜、荷無地、仲夏陰熱
伏惟和尚法體如何、此泰範蒙恩、今月九
日、從馬州還、便過乙訓寺、即承遊化北院
便擬就謁、緣客中煩碎、不遂志願、悚息何
言、恕非故意、幸甚幸甚、告中云、共住生死
荷負衆生、同遊四方、宣揚天台宗者、伏奉
慈約、喜躍難喻、若使附龍尾、以揚名、寄鳳
翼、以顯行、則蚊蠅之質、不勞而凌雲漢、無
觴之螭、無功而飲清泉、鄙陋之望、於此足
矣、何亦更加珍重、珍重又云、法華一乘、真
言一乘、有何優劣者、泰範智昧、教麥何辨
玉石、敢當高問、深以悚息、雷音難忍、敢陳

六十七

管見、夫如來大師、隨機投藥、性欲千殊、藥
種萬差、大小並鑊、一三爭轍、權實難別、顯
密易濫、自非知音、誰能別之、雖然、法應之
佛、不得無差、顯密之教、何無淺深、法智兩
佛、自他二受、顯密別說、權實有隔、所以耽執
真言、醍醐未達、嗽嘗隨他之藥、又自行有
則化他、有位澄瑩、應物非時、不能泰範未
運六淨除蓋之位、誰能堪出假利物之行
利他之事、悉讓大師、伏乞垂寬恕、弟子深
幸也、所前期建崇天台一乘、今則諸佛加
護、國主欽仰、百官崇重、四部耽翫、四海同
仰、三千達者、先願已足、踊躍踊躍、珍重珍
重、泰範自行未立、日夕劬勞、若不責狂執
弟子望足身避山林、丹誠何忌、謹因某甲
奉狀、不宣、弟子泰範和南

六十八

智泉大法師 大師錫寂愛弟子東寺入寺
或記云、東寺入寺 性靈集第九高雄山
寺擇任三綱之書 云、擇僧智泉任羯摩阇

那金剛之智大悲之衆既舍自行化他二德必須調和細素二衆同入真俗二諦云云元亨釋書曰釋智泉弘法大師之姪也性至孝母死哀毀甚乃祈諸聖曰願知母氏之報數歲後感夢曰汝母墮地獄衆益悲泣啓法曰所生母在地獄以何方便出彼苦趣法曰修破地獄法必可拔矣泉曰願受焉法即授地蔵軌衆精修無比一夕夢母慈嚴美服告曰我依汝救護今生天上

血脈鈔上

六十九

矣漢曰孟子云不孝有三無後爲大世人之求嗣也皆是與云性靈集第八云爲弟子智泉達親文夫寥廓性虛離諸因而凝然飄蕩深海隨衆緣以起滅故能一念妄風鼓波濤心經十二因緣化生死迷夢識幻構三有獄色焰逸六趣野遂使無明羅刹斫龜鶴之命異滅旃陀殺蟬蛸之體乍無乍有既如浮雲忽顯忽隱還似泡沫苦樂天獄之懸憂喜人天之落可

歎可歎幻化予悠哉悠哉乾城客我覺王垂悲接誘羣迷智臣騎忍汲引衆慙廣投教網漉沈淪之魚高張法羅畢飛散之鳥宰以智惠之刀煮以一味之斲三點四德之客日夜般樂不二一如之主歲時無爲無爲之爲誰敢思議之矣念亡我法化金剛子智泉俗家謂我舅入道則長子孝心事吾二紀于今矣恭敬稟法兩部無遺口密無非豈唯嗣宗之不言怒也不移誰論

血脈鈔上

七十六

顏子之不貳斗數與同和王宮與山巖影隨不離股肱相從吾飢汝亦飢吾樂汝共樂所謂孔門回愚釋家慶賢汝即當之所真轉百年之遺輪驚三密於長夜豈圖請棺槨乎吾車感有慟乎吾懷哀哉哀哉哀中之哀悲哉悲中之悲雖云覺朝無夢虎悟日莫幻象然猶夢夜之別不忍不覺之淚巨壑半渡片楫忽折木虛未凌下聆乍摧哀哉哀哉復哀哉悲哉悲哉重悲

覺

忠延大法師

神護寺

私云傳記未見之、追可考之而已

我又夫世諦事法、如來存而不毀、真言秘
印、汝已授而不謬、一字一畫、吞衆經而不
飽、一誦一念、銷諸障以非難證、不生於一
阿、得五智乎、鑊水法界、三昧汝久修習、遮
那四秘、汝亦游泳觀月鏡於心、蓮燒妄薪、
於智火、我則金剛、我則法界三等、真言加
持、故五相成身妙觀、智力即身成佛、即心
曼荼、故經云 我覺本不生云云又真言
曰 曩莫三曼多沒馱南阿三迷底里三

血脈鈔上

卷十一

血脈鈔上

卷十二

入室、第十卷一山精進巖於土心水師之行
本月底、又或記堅惠法師御修法勤仕見
已上十大弟子事畢

此義吾重爲汝說、仰願金剛界會三十七
尊大悲胎藏四種曼荼、入我我入、加持故
六大無尋瑜伽、故與塵數眷屬無來而來、
將海滴分身、不攝而攝、開五智本有、殿授
九尊性蓮宮都法界、以稱帝遍剎塵而撫
民有情、所攝無明、所持同悟、此理速證、自

拾要意云堅惠大德知法淨侶無類人也
大師與堅惠殊御契、深入定、一山傍同
奉待龍華三庭、云大師朝夕御書、表書室
御坊被遊之大師被敬、遊事不審也其由
如何云堅惠青龍寺和尚、御後身也故惠
字思之歟、然間聊被敬思食云云 私云韻

府慧

胡桂切敏也云云戒定慧云云 慧與惠同

音出之但依訓而音別歟又具音漢音之

異歟禮懺智惠門讀之若具音讀之則可

讀智惠門而已又祕鈔問答馱都之下小

野祕傳云土心化人也無父母是惠果後

身云云御遺告云輒不可授傳法灌頂阿

闍梨職位并兩部大法緣起第二十二

密條章者不夫以密教是大日如來心肝

金剛薩埵腦膽者也而輒授非器之者從

血脈鈔上

論十二

密教云御身有出血之罪是以昔大日尊

勅金剛薩埵曰不可授非器之者若授非

器者密教不又從法身出血之罪自然可

至者又金剛薩埵宣龍猛菩薩伏以大日如

來為一切衆生說密教也無非象萬生利

益者但此法者是如意寶珠喻如意寶珠

在名号聞不顯實身然而出生萬寶利益

一切衆生在龍宮祕藏居龍王肝輒不顯

身雖居祕藏并龍肝此玉不被攝龍王衆

是法亦亦如此前以者何雖在密法阿闍

梨心肝并經藏不被任阿闍梨之心府雖

有名号聞不顯實身唯以威光利益一切

衆生密教最貴最尊道理唯是然也是故

阿闍梨耶我能欲知道任已私劣心不可

授非器之者若有頗證器之者唯授尊法

看定彼心器然後授金剛界大法一部然

授猶未練根之者必後可有悔何况輒授

兩部大法哉但欲授兩部大法顯見定个

血脈鈔上

器氣息之後向本尊界會能祈願夢見厥

相若有感應彼欲學者三箇月令修行精

進然後可授兩部大法但於傳法灌頂阿

闍梨職位專然不應授諾所以者何授非

器之者金剛薩埵與密迹神俱加呵噴授

證器之者作大歡喜是則令法久住緣也

護惜傳法灌頂位阿闍梨職應護惜已肝

神輒不應令知傳法印契密語若有精進

者望仰唯大阿闍梨以語言呼許諾言以

五智、五股、加持、仰人首、三般散瓶、水是亦
看定、證器之人、應令如然、當以是人於修
法、處應充用諸護摩雜道、亦以尊法可許
授弟子於一部、兩部、更不可傳教以傳教言可傳
法於傳法印契密語為能學者可傳授練
根已熟、弟子猶未熟、根更不可授、須大阿
闍梨耶求得世間人之赤子、以方便言令
出離世俗、語量彼操意、令出家入道得度、
受具足戒、滿生年五十以後、授傳法灌頂、
阿闍梨耶職位、可令繼密教種性、哀哉歎
哉、此道欲不傳者、應斷法種、傳授之時、究
如令持若赤子、兩舌、劔、宜知是心、應授阿
闍梨職位、不忍非器之人、甘語言諾、授是
位、彼此會坐、相更披露密教、肝印正教、非
嚴滅法之相、自然將至是罪、所可得傳法
阿闍梨也、十佛大日、御前百千劫懺悔、都
不滅除、是以入室有勞、弟子於非器之者、
更不可授是位者云云是章句在梵本從

經文并儀軌之外、取離出所密納也、吾三
衣箱底、納置亦在精進、舉入室、弟子沙門
土心水師、所云云
道昌僧都、或記云小野僧正、日記云弘
法大師授與道昌僧都兩部、大法并付法
位云云、類聚國史第八十九云、少僧都道
昌就神護寺、僧都空海登灌頂壇、受真言
法云云、玉印鈔云云已上十人常云、十大弟
子、此也、此外付法、弟子猶有之歟、所謂道
昌堅惠真、恭常曉等此也、心覺、大血脉
裏書云、道昌僧都、事國史云、就神護寺、大
僧都空海登灌頂壇、受真言法云云
私云如此、記者可入付法之內、歟、件人親
奉見大師、即身成佛也云云、元亨釋書云
釋、道昌姓秦氏、讚州香河人、幼歲離家、學
三論、弘仁七年、秋、試經、得度、九年、於東大
寺、受具足戒、漫遊講肆、錯綜諸宗、又從神
護寺、空海阿闍梨、登灌頂壇、天長七年召、

為佛名懺悔導師上問曰帝王臣庶庖宰之罪何重昌奏曰王重臣輕尤右侍臣皆寒心謂昌齒少不知忌諱輒發言耳帝又喟然良久曰帝王罪重有說乎奏曰昌竊見庖氏之供御者割鮮數十以薦一膳山澤飛走動受過戮所羞少而所屠多以是見之王者為重臣庶不然山海有禁弋釣不縱間有所獲纔資口腹其罹罪豈不輕乎上善其奏緩屢禁省庖供昌丁日宴坐

血脉鈔上

虛空藏菩薩現衣袖上昌乃截袖圖之安法輪寺貞觀元年為三會講師初承和中大井河溢昌董防遏衆人子來不目而成故老拭淚曰不料今復見行基菩薩貞觀十六年為僧都十七年春二月卒壽七十八昌講法華五百七十座贊曰昌公仰酬御問吾法中折檻之手也云云同書寺像志云貞觀寺者貞觀帝降誕之初大相國忠仁公與真雅法師謀建護帝柞也十

六年二月二十三日設大齋會落慶道昌為導師惠達為呪願延諸宗碩德一百員脩法儀先勅王孫公子年少童子四十人習舞樂至是日兩部童樂更舞迭出凡樂部之舞支那高麗諸樂及林邑天人等舞皆盡奏之一時盛事都人聳瞻聽會後一百比丘各賜度者一人

真雅僧正

聖寶僧正醍醐後可建之

源仁少僧都

血脉鈔上

南池院僧都法名成願寺初入護命僧正室學法相宗後隨實惠僧都習三密教更付真雅宗睿云加二長者仁和三年十一月廿二日入滅七十仰云源仁迄流不同無之此御弟子益信聖寶醍醐仁和兩流分之是則非無所以於真言大方有二筋故相分授益信聖寶給也可思之

或記云号南池院大僧都法名成願寺實惠弟子或云宗睿重受云弘仁九年誕生

元護命僧正弟子仁和元年十月廿二日轉少僧都六十同三年十一月廿二日入

減七十此仁和中加任二長者任日不詳或二

年元亨釋書曰釋源仁初就護命僧正

學相宗後謁實惠受密教兼依真雅宗睿

二師益臻イタニ聞與當時推其密乘之博衍益

信聖寶二傑所由而出也仁和三年十一

月二十二日減贊曰學者慧之耕也慧

昔學之獲也耕弗獲是曰儉歲焉耕而獲

血脉鈔上

七十九

是大有年也七師者緇之大有年乎

私云弘仁帝於宮中宗論之時唯識之髦

源仁云云今吾祖師同名也因茲世人誤以

稱同人惑之歟甚非無誣乎所以者何吾

祖師從護命而學法相云云行跡相似歟以

故末學混亂者也唯以年代而考之則異

人同名之義決定矣行年七十減云云自仁

和三年逆次考之則弘仁九年之誕生歟

弘仁者十四年而改元然則宗論縱雖為

十四年僅六歲也何為及異論乎同名異人分明也拾要意云南池院源仁僧都

顯密學匠也陽成天皇御宇被任權少僧

都付法二人圓城寺大僧正益信醍醐大

僧正聖寶是也圓城寺僧正真雅僧正弟

子也相續為南池院僧都弟子此兩人之

時東寺二流相分者也嫡流論茲斯時漸

起云云圓城寺僧正彌勒化身醍醐僧正如

意輪云云誕也小野流最初受法用如意輪

血脉鈔上

八十一

專有正緣者歟圓城寺寬平聖主御師範

下天無雙大阿闍梨耶也

云云

密宗血脉鈔上

小野流相承血脉次第中

聖寶

門徒号尊師貞觀寺座主權法務與益信相並東寺法務二人始權法務之始也東寺正權僧正相並之例又以之為始加二長者延喜九年六月十四日受病陽成上天皇禪定法皇幸彼寺問病同七月六日入滅八十大和國人兵部丞葛聲王息田原天皇末孫也付真雅僧正出家六十貞元十三年受無量

山脈鈔中

壽法於真雅元慶四年學兩部大法於真然律師同八年受灌頂於源仁律師五十三或說五十六云云初付願曉律師圓宗僧都學三論宗次付平仁大法師學法相宗付玄永大法師學華嚴宗云云勤仕維摩豎義住醍醐寺建立東南院付法八人或記云十四人云云

仰云尊師如意輪化身也其故尊師生和朝聖文字三度付之云云謂聖德太子聖武天

皇聖寶僧正也聖德太子如意輪垂跡故知尊師救世化現也小野流十八道本尊用如意輪事依此等緣起又醍醐鎮守清瀧權現如意輪化身也專有子細可思之

或記云大和國兵部大丞葛聲王息即田原天皇末孫也天智子光或云白壁天皇

末葉也云云天長九年誕生承和十四年

付真雅僧正出家得度六十初就元興寺願

曉律師同寺圓宗僧都受學三論宗次屬

山脈鈔中

東大寺弘仁大法師受學法相屬同寺玄

永大法師學華嚴修學問住東大寺東室第二房貞觀十

一年興福寺維摩豎義勤之八十所立三論

賢聖義并二空比量同十三年受無量壽

法於祖師僧正真雅此時聖寶歲四十也

云云元慶四年學兩部大法於真然律師

四十同八年受灌頂於源仁律師五十三

受由或說云仁和三年三月九日依僧都

奏狀賜官符云云五十六後受灌頂依此說者年

前後相隔四箇年兩說未決也其時海頂者蒙勅宣授之奏奏以前授余頗不審也

寬平二年任貞觀寺座主同六年十二月

廿二日任權律師六十同月廿九日任權

法務此日一長者益信少僧都任正法務

東寺人權法務始也今年加任二長者歟

或本云同八年云云同九年十二月廿五

日轉少僧都六十延喜元年正月十四日

轉大_七同二年三月廿三日任權僧正_七

東大寺_三權僧正_七也同六年三月

血脈錄

七日益信入滅之後寺務同十月七日轉

正_五同九年六月於普明寺疾病仍辭

退諸職陽成大上天皇禪定法皇幸於

彼寺慰問病床右丞相同臨問病遂以七

月六日入滅_{八十}寺務三年

元亨釋書云釋聖寶讚州人光仁帝之後

也年十六投真雅法師得度學三論于元

興寺願曉及圓宗唯識于東大寺平仁華

嚴于同寺玄榮又謁金剛峯寺真然_密

教復從源仁益得與祕寶應興福寺經摩

講請立賢聖義及二空比量義三論之家

賢聖之義從茲始初東大寺東坊有鬼祟

衆懼不居寶請而住焉鬼現形爭拒寶不

屈鬼移他所爾後此宇無燒害一夕燈下

讀書於此傍淪茶盞備昏睡也中夜大蛇

自梁間下影見蓋中寶仰而叱蛇忽不見

庭上有巖石世曰寶從金峯山負來而其

大非人力所耐也寶好脩練經歷名山靈

血脈錄

地金峯之嶮徑役君之後榛塞無行路寶

接葛藟而踏開自是苦行之者相繼不絕

貞觀之末闢醍醐寺而演顯密二教又建

南京東南院講三論之宗凡造丈六大像

二十餘軀又勤悲濟置衛役于金峯山設

渡舟于吉野河行人賴之仁和三年勅賜

傳法阿闍梨位寬平二年爲貞觀寺座主

自延喜之初受月俸于太倉二年爲僧正

九年賜醍醐爲官寺寶周遊南北二京其

管攝之所東西二寺醍醐東大興福寺等
也延喜九年四月於普明寺寢病太上皇
幸問七月六月逝年七十八寶有所持如
意背刻五師子面雕三鈷杵表顯密並學
寶沒歷世傳授在東大寺東南院興福寺
維摩講師必執此如意應演唱兩寺有事
東大寺不出如意若無如意措講會至是
朝廷宣東大寺出如意行法事其祕重如
此

贊曰道貴渾厚分則薄矣不得已而分其
分之始又厚矣曷為厚有合也南山數傳
而分為信寶又數傳而列為朝海今之東
密稱小野廣澤者朝海也信寶者野澤之
小祖也四師者分而厚者邪
祕鈔問答請雨經之與云延喜御代勤修

云云

真俗雜記十三云御口云尊師是貞觀寺
真雅僧正弟子也然而真雅僧正極大被

愛之尊師犬惡之或時獵師來尊師彼
犬賜之真雅僧正後聞召停同宿之依之
尊師流浪諸國被乞食至讚岐國立寄或
處給門外小者有之眼樣サカシケ可為法
器之相有之尊師告語ラウテ京可具由問
ケハ彼小者領掌シテ彼家人見之尊師
饗應シテ小飯盛土器勸之尊師受彼施
畢彼小者取打負一日間般若寺着給之
又為養彼小兒又出乞食或處前追聲シ

如麻抄中

ケハ門方立寄ケハ良房卿乘車過
見尊師非只人ト召寄同車シテ至良房
家物語シテ尊師申如上事給之問被申
許彼僧正御勘氣候ナシヤ良房易程事
ト約月又裝束ナシト調儲令着同車被參
貞觀寺之臨被寺留車榻置彼上置金剛
草履尊師車內尋子細良房責邊料也云
云仍車下與良房俱僧正前參之良房卿
可被許勘氣之由被申ケ僧正依一旦事

勘當候來臨神妙之由波仰介既許勘氣
後彼小兒召寄學問サセ之有聰敏利根
無申限我爲付屬弟子給彼小兒者今般
若寺僧正觀賢是也 或鈔云或時尊師
般若寺之草菴住常思惟我祖師弘法大
師御歸朝之時爲下真言流布勝地投三
鉢我又如是乃誓願祈精每朝四方御覽
王城辰巳上當五色雲變變尊師爰祈精
云吾願當彼明朝亦現云次朝又如是三

生厭鈔中

七

朝同隨喜思銘肝尋雲登山然間今醍醐
山西坂次第攀登矣于時今醍醐准照堂
邊休息時白髮老翁一人出現木葉搔拂
以左右手掬水云哀醍醐味乳是上醍醐今之醍醐
井其後忽然不見爰知化人也偏是彼山地主也橫
尾明神尊師水邊臨見水自地面涌上高
清潔也尊師後日驗水邊石取置次第山
上摩覽今准照堂跡不思議勝地也彼取
有大柏樹尊師伐彼木加持百箇目然清

生厭鈔中

和天皇御宇貞觀十六年六月一日准照
如意輪二像奉彫始佛師等加行三七日
不用皮膠造立之尊師同十八年六月十
八日開眼如意輪自立東三町步岩上立
彼岩上御堂造懸今如意輪堂是也准照
自起入內陳虛壇立号醍醐寺老翁水嘗
稱美故也延喜天皇於此准照堂以尊師
求兒法令祈依其祈精朱雀村上兩帝御
誕生仍三代之帝於此寺建立堂塔施入
田園歸敬無極此寺三代崇重御願靈驗
揭焉勝地也自爾以來累代奉爲帝王大
法祕法專留此寺鎮守清瀧權現沙迦羅
龍王第三女子御坐也故安藝伊都岐嶋
明神託宣云我沙迦羅龍王第一女子也第
二女佛在世時年始八歲文殊被語他方
御坐第三女子在醍醐山浦山敷我鎮三
密法味嘗我海中鱗交受三誓苦云垂迹
云龍女本地中觀自在菩薩也延喜二年

二月七日清瀧權現現神女形尊師持念壇上降臨示曰我是沙伽羅龍王女子准服堂如意輪化身昔大唐我名青龍吾住此寺護佛法故彼寺号青龍寺是惠果常住寺也彼法流守護之故凌万里之波濤度日域垂跡於此山施恩光於法界云云詮清瀧權現者天竺無熱池善女龍王也為守護龍猛之密法來震且住青龍寺又為守護惠果之祕法大師歸朝時同船來血脉鈔中于吾朝勸請於高雄山其後又尊師建立醍醐寺為彼鎮守此時加于三水而為清瀧權現云云又尋役行者舊跡大峯再興脩驗之下道相繼偏是尊師廣恩也故通憲入道尊師讚東室鬼去南山道開云云深草里普明寺而遷化此日有勅被行御誦經聖主悲歎遺弟戀慕無如之入棺後怪事故開棺奉見忽然不見只幡計殘現身都學內院詣申也或又其目南都東南院談

義被遷申也又吉野山與鳥栖云云御子貞崇僧都閑居也此所而又同日入滅矣依之御遺骨奉納古墳于今有之申傳權者化現難思境界也云云私云深草而度天之時於岩上留雙履名其處号履之鼻云云可尋知者也或記云

觀禮大法師

延惟大法師

東大寺

血脉鈔中

天長九年誕生勤維摩講師昌泰元年戊午十二月十五日庚辰星宿傳授師主位少僧受者六十七延喜七年勤維摩講師東大寺法相宗同年入滅歟七十

濟高大僧都勸修寺家初別當又高野又東南院東大寺貞觀寺別當

天安元年誕生承俊律師入室又惠宿大德

受法延喜二年壬戌二月八日乙酉井傳

授師主位法務大僧都二長者年七十一受者凡僧年四十六但小野血脉皆今年五

說者承和十二年誕生延長三年八月廿

三日任權律師九於勸修寺被供養天

皇御筆法華經依寺家別當賞任之同六年

十二月廿七日任一長者七十今月觀宿延

彼兩人入滅故同日會理律師加任二長者

承平元年十月廿七日轉正同五年十月十

三日轉少僧都七十天慶二年十二月十四

日轉大八十同五年十一月廿五日入滅八十

六或說寺務十四年勸修寺寂初別當件寺

承俊律師建立也依託人舉補之云兼貞觀

寺別當

印紹大法師東大寺

仁壽三年誕生延喜二年二月八日乙酉井

土濟高同日傳授年五

峯禪大法師付法一人大安寺高野龍居云

天安元年誕生真然僧正入室延喜二年七

月三日給官符聖實同十五日室傳授師

法務權僧正二長者年此入高野山第四座

主職此後彼山座主依觀賢奏被付東寺

者云遍覺

貞崇權少僧都号真言院僧都又鳥住寺法名鳳岳寺在吉野石藏邊

尤京人三善氏貞觀八年誕生惠宿入室延

喜二年九月廿三日水傳授師主權僧正

受者年三十七延長八年二月補醍醐座主

職年六十七或說四十六同五年十一月廿七日轉

日任權律師六十御持僧賞也同三年十月

廿日加任二長者天慶元年八月廿七日轉

權少僧都七十同五年十一月濟高卒後寺

務同七年七月廿三日入滅七十寺務二箇

年此人任東大寺別當云任日不審也東大

寺別當次第云貞崇律師仁壽元年任四箇

年云前後相違檢舊僧綱補任此人外無貞

崇律師者重明親王記云延喜天皇不豫為

護持貞崇參二間有物語之音天皇聞食之

以藏人令見之僧都外又不見入奏此旨後

令問貞崇稿荷明神示天皇御藥今度大事

之由給云

真願內供奉十禪師 東大寺

延喜三年癸亥六月五日給官符聖寶同十一

月十八日甲寅張剛傳授僧正年七十

二受者四十四 十九或年四十九

延性大法師付法座主十禪師 定額僧醍醐

座主真言宗東大寺

延喜五年九月一日丁巳豆木或云星

水傳授師主權僧正法務二長 延長六年十

血脉鈔中

二月廿八日補醍醐座主年七十 同七年十

月廿八日入滅七十

貞壽阿闍梨東大寺高野麓居

延喜七年八月八日丁未宿斗於大覺寺傳授

師位法務僧正一長者 觀賢為教授同十六

年十二月九日給闍梨職官符法兄觀賢依

先師遺誠獻奏狀同十八年 戊戌八月十七日

丁巳戊寅於嵯峨大覺寺傳授六十七

道憲大法師元興寺

延喜八年十一月八日乙巳宿傳授師位法

七十五一長者受者五十三

觀宿大僧都 大和國人

真雅僧正入室又東大寺道義律師弟子兼

學華嚴宗延喜十年任內供同十七年任東

寺別當同十八年二月廿四日任權律師

五十延長三年三月廿三日轉正同年八月十

日加任一長者八十 依上薦超延徹律師寺

務同五年七月廿五日轉少僧都 八十超上

血脉鈔中

薦三人三明智愷基繼也 寺別當智愷者元

慶元年東大寺同六年閏八月廿八日轉大

僧都同十二月十九日入滅八十五 薦寺務

三年當去承和十一年而生也傳授年月不

分明故終列之可尋之

觀賢權僧正寺僧正 法務兼學三論宗勤仕

維摩堅義凡僧別當加三長者始御影供東

寺檢校醍醐座主之始也申賜祖師大師號

延長三年六月十一日入滅七十三寺務十

六年付法九人或記云名中院僧正仁和別
當讚岐國人秦氏真雅入室寬平法皇御出
家師也仍仁和寺任別當職仰云此人四分
律護持之名譽在之則僧正御房近被著大
衣云

或記云号般若寺僧正貞觀寺僧正真雅
入室根本僧正聖寶入壇資真言宗東大
寺醍醐門人号中院僧正或說齊衡元年
甲戌誕生讚岐國人秦氏或伴氏云仁壽三年

血脈鈔中

十五

誕生兼三論宗年月日勤仕維摩會豎義

寬平七年乙卯十二月十三日乙未鬼宿木

可授灌頂之由給官符聖寶即日於東寺

灌頂道場傳授律師主年六十四位權法務

三凡昌泰年中東寺凡僧別當第四延喜

二年三月廿三日任權律師此日師聖

寶任權僧正拜賀又同日拜賀取師之三

衣箱罷出万人感之同五年八月八日轉

正同六年十月七日加三長者千時一長

正二拳教同九年七月六日聖寶今滅以

後寺務九日拳教入滅同十年六月廿

三日轉少僧都八今年此人始東寺御

影供同十二年五月十五日任法務十六同

日禪安律師任權法務一寺相雙第二度

例也同十六年四月六日轉權大僧都十六

同十八年任東大寺檢校同十九年九

月十七日任醍醐座主是最初也同廿一

年十月廿七日依此人上表給祖師之大

師号御入定以後八十六年也延長三年

三月廿三日任權僧正同六月十一日入

滅七十三大寺務十六年元亨釋書曰

釋觀賢姓秦氏讚州人為聖寶上足延喜

二十一年上夢弘法大師奏曰我衣弊衣

願希宸惠覺後救擇法之徒尤者送紫衣

下襲於野山賢中選入山啓定康如隔雲

霧不看儀容賢作禮曰少年脩道梵行無

瑕况奉遺法累歲月平默計須更真儀漸

見猶如霧歟月彰頂禮瞻仰鬚髮甚長便
剃落而披衣諸衆不能見時淳祐爲童侍
賢問曰見乎對曰不見賢執祐手摸定軀
祐繞觸膝乃覺暖柔其手甚香經歲薰不
竭賢謂衆曰我猶見難矣况下我者我後
世淨矯者不容易見恐致疑謗胥議重石
固封焉賢開和州般若寺初延喜十九年
任醍醐寺座主茲職自賢始延長三年爲
僧正此年六月十一日化秘鈔問答請

血脈鈔中

十七

雨經之典云延喜年中神泉修法廿七日
降雨廿九日結願廿口僧徒每以度者一
人云云拾要意云尊師付法号般若寺僧
正觀賢奉過延喜聖主知法高位人也現
奉拜大師天下無雙人也獨此僧正抱祖
恩者歟白居易君見臣恩醍醐寺最初座
主也付法二人有之石山内供一定是也
云云或鈔云尊師修行時讚岐國至或海
邊過行時五六歲小兒數遊戲尊師有

用手水尋仍彼上有奉教子時尊師不淨
水所用兒云其水不淨也尊師諸法淨不
淨有之言兒重云自元諸法無淨不淨
者依何手水尋云云尊師道理至極故默信
見兒高相面備佛家棟梁瑞有之仍尊師
問小兒曰父何兒云田殖サセ又問母何
兒云母在家云云然問二親家尋至彼門邊
乞食給母奉見尊師云物食ヲヘキヤ云大
豆飯土器盛奉羞受之畢令歸彼小兒猶

血脈鈔中

十八

在門外尊師云イサ阿古摩呂京車ヤウツク
年物上見セ下云云兒云何有答仍兒懷去歸
住般若寺草菴晝出京乞食送日月讀書
聰敏無極受戒以後持律無關顯密無比
肩人寬平法皇御出家師也歸敬餘墳墓
御陵並云云又智證大師歸朝時請來中大
日經義釋在之般若寺僧正借之智證不
奉借秘彌納經藏然間僧正含恨送數月
間件義釋自然紛失了智證驚怪事或時

內裏件書智證返與云傳聞此義釋大師請來也紛失之由知仍返與之大師成奇特之思此書誰入內裏獻耶然間帝咲不

知其人是知觀賢以護法善神令取此寫留後進內裏神樂奇見于雜密記

拳敦拳秀 拳孫 神行 良照

禪念玄機 神秀 玄靜 修澄 寂照

觀照禪榮 善秀

道猷安法

壹定權律師東大寺三論宗塔院院主号塔院律師醍醐座主元慶八年甲辰誕生

聖寶入室東大寺兼三論宗延長三年與淳

祐同日傳授師位等同前受者四十四天慶五年七月

任醍醐座主貞崇卒替同年維摩講師十同

八年正月十四日長者泰奔律師依頓病不

參御前加持香水之役臨時召一定律師令

勤仕件役于時三會已講凡僧勤仕例也同

十二月廿九日任權律師六十四天慶年中二長者已而任日未祥天曆元年二月九日

入滅五十六或云六十六

遍基大法師同日傳授東大寺般若寺

平通付法四人同日

右四人私云加延長三年乙酉二月廿三日

丙戌女同傳授師位法務權大僧都觀

賢賜一定印信文云當今吾生年過七十

餘命難期以去寬平七年十二月十三日

於東寺灌頂道場明受僧正法印大和尚

位阿闍梨阿梨耶摩屈印加若不授學弟

子等徒然終焉斷種之罪何以免脫乎等

增命大法師元興寺延喜廿二年七月九日求兒云胎許欽

寬救付法一人東大寺別當曆滿

天慶五年任東大寺別當任四箇年

遍勝付法二人或五人素光寺別當件孔

寬空僧正細仁和尚隆寺蓮室委子

寬空僧正細仁和尚隆寺蓮室委子

淳祐住石山普賢院故号石山内供又稱普

賢院内供或說云右中辦淳茂息管丞相孫

子也云云付法八人或說七人或記云嵯峨勤

旣男也仰云奉隨觀賢於興院大師御膝

摸給故一期御手云云又此内供御房御長

短見苦御座故作法灌頂不行也云云

或記云嵯峨先帝苗裔也延長三年乙酉二

月廿三日丙戌日女於般若寺灌頂道場

傳授師位法務權大僧都一長者天曆二

年七月二日入滅六十拾要意云淳祐

者菅淳茂子奉為天神云云近孫仁也究法

水之淵底包文苑之庭訓雖然其身依有

生病永隱居了傳法阿闍梨受職無乏故

其弟子延命院元果僧都遇蓮臺僧正寬

空受具支灌頂等畢儀式灌頂受職既欲

絕之時依内供奉命元果受廣澤傳法者

也至于今醍醐勸修寺相承受職是也但

醍醐勝覺僧正之時始改一座式胎金初

後夜引放授之也元果僧都受寬空僧正

事有因緣歎寬空遇觀賢受法灌頂畢然

間内供以元果付寬空云云

慈惠大師内供御房御弟子也為受法被

參之時被仰云汝睿岳高僧也我卑野小

僧也不許受法其後百箇日許參詣感志

受法被許了云云大僧正記見云云已上星遍

口或鈔云彼内供自元依有隱遁志早

著黑衣仍觀賢僧正座主一定律師方被

讓畢自爾以來五代計座主不傳正嫡云云

之座主相承大事云事有之隨傍流人此

大事座主外不傳云是巧妙義又不可然

事也凡座主者當世依公方賞翫雖非嫡

流隨公方御意讓與事多之雖然非法器

宗大事等傳事無之故必座主職不付之

也但各座主相承事觀賢弟子一定淳祐

共此大事雖相承一定相承方付名譽之

事有之故名之也其故一定明觀覺賢定

賢勝覺座主次第持來然覺賢死後經廿四年亡竟示定賢云此大事深秘故不授而死畢弟子勝覺法器之故授之汝又授之可相承云云依有此奇特也淳祐自元非無相承也可得其意也云云元亨釋書年表定賢二間供奉勅修云云

元景 号延命院大僧都又稱真言房元方入

室一定受法資三論宗興福寺法華會暨義并維摩聽衆九歲爲勸學院小學生云云或言

血脉鈔中

廿三

云歷三會聽衆從寬空僧正重受依勅凡傳別當加二長者六十大政大臣基經弟高經孫也仰云石山内供作法灌頂不行給故從實澤寬空受作法灌頂云云一期御所作念佛與法華也長德元年二月二十七日入滅十八二但不留遺骨向西飛去云云付法十二人

或鈔云惠心僧都合弟云云

或記云大政大臣基經弟右兵衛督高經孫延喜十四年誕生兼三論宗經三會聽

衆云云天曆三年酉八月廿八日巳亥日傳授師主年同日與印信淳祐入滅

之後就寬空僧正重受康保元年十一月

廿七日獻奏狀解寬空同十二月九日賜官

符同二年丑十一月廿一日辛巳鬼於

香隆寺傳授師主法務僧正法印大和尚

凡五十二年月日任内供天延元年任凡僧

別當天元四年十月廿一日任權律師年六

永觀元年正月十六日轉任權少僧都七

血脉鈔中

廿四

起上臈六人祈雨賞云云今年加任二長者

歟同二年六月廿六日任權法務同八月

八日轉權大僧都七十春日賞云云或祈雨

賞云云寬和元年於神泉苑脩請雨經法依

有法驗可被補僧正云云而自申改以先師

内供元方贈大僧都長德元年四月日入

滅年八十二或鈔云元景者民部卿

元方之子元方云人入室弟子也彼卿雖

有出家志不遂本意仍子息令出家自名

付元方名付元果彼元方弟子也元果民部卿元方之息云非也血脉集見延命院元方建立也本尊三尊如意輪也西尊師御作東般若寺御作中間元果御作并四天王尊師御作本號正行院雖然元方卿筑紫國司下時海中而被吹惡風運命難保仍奉祈念如意輪間彼御堂四天王中毗沙門天現船上止風波延壽命故改本名号延命院尊師般若寺御作如意輪本下

血脉鈔中

十五

所並立元果自如意輪造何可奉立我思惟其夜二體如意輪中間去兩方端立元果奉拜云吾所造本尊中奉立云義也奉安置中今現利生新也參詣人知其意可奉拜者也彼元方影此御堂有乏村上天皇御宇康保年中奉勅於神泉苑奉脩請雨經法七箇日雖脩之雨不降間二七日申延手自作茅龍令祈請即其茅龍漸搖動天界雷聲空滿甘雨忽降然尾張國熱

田宮寶前茅龍落社司等見之不思議成是寶前納今猶有之云云 秘鈔問答請雨

經之與云圓融院御代元果內供二度天祿三年依炎旱於神泉苑脩七箇日之後天下驚感任權律師天元五年脩第五日降雨結願日任少僧都花山院御代又脩寬和元年七月五日結願可補僧正之由雖有御定以先師元方贈賜大僧都云

血脉鈔中

十六

寬平孫兵部卿敦固親王子法皇入室住大安寺又寬空重受元內供康保二年十一月十一日隨蓮臺僧正入壇云安和元年三月十一日任律師六十同二年三月十一日轉權少僧都六十同閏五月十日加任三長者長者四人始例也一寬空僧正二救世少僧天祿二年月日任法務貞元二年四月二日入滅七十或七十三此人脩孔雀經法數度每度施靈驗云云

法器大法師 此人又傳授一定律師云云

長教大法師

真賴大法師 石山寺住僧

保胤往生傳云石山寺僧真賴就內供奉十

禪師淳祐受真言法明於三密受法以降若

千年三時念誦下時不休終日喚受法弟子

長教語曰今日決定可入滅等云云

令康少僧都

元京人高階氏大安寺兼法相宗延喜廿一

血脈鈔中

廿七

年維摩講師延長六年閏六月廿八日任權

律師三十三承平元年十月廿七日轉正同五

年十月十二日轉權少僧都十八天慶元年八

月廿七日轉正同五年八月廿一日入滅十八

七去延壽比住大安寺別當第十

明觀大法師醍醐座主二世依忠王子延喜

永觀二年四月五日鬼傳授都二位權少僧

年三十一受者長曆四年十二月廿六日補醍

醍座主治安元年十月八日入滅十九

廣壽大法師号峯上人醍醐住僧淡路守廣遠息三

正曆二年正月七日傳授即日與印信師主

前大僧都七十受者四十長和二年六月廿

八日卒六十

元真少僧都号鎮西僧都元京人菅原管三

永祚元年五月七日任權律師七十正曆四

年十二月十七日轉權少僧都七十長德二

年辭退少僧都下向鎮西補安樂寺別當寬

弘五年十二月入滅八十東大寺別當補任

血脈鈔中

廿八

云元深僧都天慶九年任云云或本不入之若

為此人者其時年廿餘歟不審也勘僧綱補

任元真僧都之外無元深云人同異如何

覺緣大法師

正曆四年四月廿三日傳授師位前

義藏內供

松興

平曜

或云元果未入寬空室以前授與之云云或云

天德元年十二月五日丁傳授師主四十四

共為凡僧同日與印信

賀仲阿闍梨大元別當

平儀

平傲

定觀入寺

齋然元亨釋書曰釋齋然居東大寺學三

論又受密乘于元果永觀元年秋入宋東大

寺送書青龍寺比睿山寄信天台山然持二

血脈鈔中

廿九

書著宋地太宗太平興國八年也巡禮勝地

曆觀明師遂於汴都西華門外啓聖禪院禮

優填第二摸像乃雇佛土張榮摸刻而得之

太宗詔問我皇系曆柞然答詞詳備君臣稱

歎賜紫衣辭上五臺雍熙三年上台州鄭仁

德舡歸永延元年也然得大藏五千四十八

卷及十六羅漢畫像其優填摸像見今在嵯

峨清涼院長和五年卒

仁海号小野僧正又号雨僧正凡僧別當二

長者東寺法印大僧都之始寺務二度永承

元年五月廿六日入滅六三和泉國人也

仰云住小野曼荼羅寺故名小野僧正也則

小野之名言自此時始廣澤寬朝時始則仁

海寬朝同時人而名譽故小野廣澤云各出

來也寬朝則住廣澤遍照寺云又仁海御堂

關白御歸依僧也又仁海大師後身也則大

御室成典其後身也云匡房日記云僧正仁

海多年祈念云大師雖金剛定必有分身願

血脈鈔中

三十

見其人大師告云權僧正成典充足心有黑

子即我身是也仁海到仁和寺謂成典先見

其足裏有黑子仁海下庭拜禮云成典仁海

弟子也聖天持者也又仁海真言受百人授

千人而百人師中或師大事法一秘不授仁

海入滅而死後其魂彼一大事不授仁海事

悔託本依身忽蘊生欲授仁海之處彼依身

已葬失故本依身不託而或田夫死屍仍託

彼屍然彼依身田夫故田耕而誦百八名讚

居處仁海行過聞讚聲間立留尋事子細其時彼田夫荅云我僧正師某云者也死後彼大事不奉授事無本意歎覺間蘇生再僧正師成欲奉授彼法之處我依身已失故託彼田夫依身侍則彼大事奉授云授彼大事此法云田夫法也于今有彼法云又仁海僧正如意慈悲深人也常住屍陀林中仍成時公請使自屍陀林中申請出之又此僧正弟子大理趣寂園云則始此為付弟而仁海長命九十六存故成尊僧都成長仍後以僧都為付弟也又大理趣坊琵琶上手也其弟子有賴照云人此小理趣坊号覺源宮僧正仁海弟子也

或記云天曆五年誕生宮道惟平惠雅信公入室永祿二年庚辰四月廿五日庚午木傳授師主前大僧都法務前二長者年一傳授七十七受者年四十束寺定額同日與印信或云長德二年八月廿九日權少僧都推慶可被付法職位之由獻奏

狀同年月日宣下十六長和四年正月十八日任凡僧別當六十覺空叙法橋替也寬仁二年八月十六日任權律師去六月神泉請雨經法賞六十治安三年十二月廿九日轉權少僧都七十同日加二長者長者三人深覺大僧正仁海成典律師同日補長者云長元元年十二月卅日兼權法務八十同二年任東大寺別當任四箇年同四年十二月廿六日轉權大僧都八十

血脈鈔中 卅二

一今日深覺辭退大僧正以弟子深觀內供直令任權少僧都記云綱取并東寺執行雖不戴辭狀先先無官人不居此等職仍有勅被止兩執行仍寺務同六年十二月廿二日叙法印八十三去五東寺人法印大僧都始也今日深覺前大僧正復任長者并法務無官人帶此等職事未曾有例也云此日同蒙輦車宣旨仍又去寺務為二長者長曆二年六月十八日任僧正

八ハ十ト同日成典任權僧正長久四年九月十四日深覺卒替寺務九十九イ永承元年五月十六日入滅九十イ寺務前後合五箇年也或日記云身高二尺六寸七分元亨釋書曰釋仁海事元果闍梨稟密學博錯綜衆流醍醐之側小野之地海啓密講之席四來受業者多世號小野密泐寬仁二年六月早勅於神泉苑脩請雨經法大雨下三日夜長元之五長久之四凡詔學九度皆

血脈鈔中

廿三

降雨以先長曆二年為僧正時人呼雨僧正其長久賞聽輦車賜封七十戶永承元年五月十六日滅年九十二年表云長曆二年六月釋仁海泐門成典為僧正易為姓海族典海擢雨感故書姓典丁序選故族長久四年夏旱五月初八仁海法雲於神泉苑十三大雨十五許輦車秘鈔問答請雨經與云後一條院御時仁海四度脩寬仁二年六月四月脩之阿闍手時

梨七日陰八日黑雲遍滿雨至夜半八月十四日任權律師萬壽五年五月十四日脩之大僧廿三日結願九箇紐法印長元五年脩之同六年脩之後朱雀御代三度長曆二年月日脩之法印第七日雨降任權僧正長久四年五月八日脩之十三四日甘雨十五日結願度者又被聽輦車寬德二年脩之云云拾要意云大御室隨小野仁海僧正又御受職有之彼仁海僧正

血脈鈔中

廿四

者元果僧都付法也一條院御宇寬和寬弘比無雙名德也祈雨施不思議効驗被呼雨僧正同法平救阿闍梨為匡房子當道器量尋常也觀音院祭文平救當座草之但彼祭文有謬歟真俗雜記十三云御口云仁海僧正七歲登高野山為雅真弟子雅真書大佛頂梵本給小兒見之傍灰上悉書之雅真見之非直人隨喜レ成人後成延命院元果弟子受法給同書

廿七云小野雨僧正夢想我母某國成牛
有之由示之彼牛尋得下期養育死後彼
皮剥畫兩界曼茶羅安置彼寺依之号曼
茶羅寺云云其寺并曼茶羅承久兵亂時為
軍兵被燒失其後關東為懺悔造之云云
厚雙紙祈雨日記云僧正談云上代人尚
難降雨然而仁海修此法四箇度有感應
是偏大師御恩也云云此度伴僧十五人勸
賞蒙輦車宜肯并賜封户云云長久四年云云
星遍口云千僧御讀經結願日小野僧正
脩祈雨法初月雨降感歎僧正是御讀經
雨也海雨第七日辰日方黑雲煮可下云云
果而如言云云土去鈔云僧正仁海和泉國
在麻子也本弟子覺源官僧正也彼官僧
正禪林深覺僧正令受法之間小野僧正
此事被存遺恨歎之故召請成尊同宿成
尊元住南都真喜僧正大童子イトケ九子
也而仁海僧正八旬有餘成尊受法未及

平之間僧正所勞之時入壇弟子中納言
基保法名成尊受法事被申置之處入道
類固辭今此佛道修行偏為出離生死也
而左様令授者法執出來還可違本望云云
僧正重被申云傳法之道不然以繼法命
可為本意枉再三被申之間慙以願掌雖
然僧正其度所勞平愈經數年九旬有
餘存命受法事成尊拂底了以上土
成典權僧正号圓堂僧正圓樂寺本願云云成
印大法師入室正曆六年十月一日傳授主
四十或四十六受共為凡僧寬仁三年十月
者卅八或卅七
廿月任權律師六十治安三年十二月廿九
日加任三長者深覺仁海成典同日三人加
任云云于時東宮御持僧也六十萬壽四年三
月十五日轉少僧都七十長元四年十二月廿
六日轉權大僧都七十同九年十二月日申
加東寺阿闍梨八口子時三長者也長曆元年五月
廿五日賜封七十五烟御持僧賞云云同二年

六月十八日任權僧正八十同日仁海任僧

正師弟同月任僧正事希代歟同三年月日

與印信師為僧正弟子為權僧正入壇之後

四十五年長久四年九月為二長者寬德元

年十月廿四日入滅八十

覺源權僧正号醍醐宮僧正醍醐座主一長

深覺僧正花山法皇御子或云清仁親王御

子云云長保元年誕生治安二年十二月十四

日傳授師主權律師非職衆八人持金剛四

血脈鈔中

廿七

人讚衆四人十弟子四人承仕二人同日與

印信次就深覺重受長元六年十二月廿六

日於東寺灌頂堂傳授師主法務前大僧正

供同日與印信職衆十人長久四年十二月

廿八日叙法眼四十求承五年十月廿七日

任一長者五十同廿六日任權少僧都依散

位人不居此職即被任之天喜二年五月廿

九日轉權大同三年六月十六日兼法務同

五年十二月廿九日叙法印五十康平五年

五月廿九日任權僧正六十治曆元年八月

十八日入滅六十寺務十五年

成禪号辨成房上人

長元九年十一月十一日傳授師主法務法

二長叡山學徒也後移住上醍醐

慶盛号清住寺上人

同年十二月十七日傳授師主

寂圓号理趣房入道上醍醐

同年十二月廿三日傳授治曆元年七月十六

血脈鈔中

廿八

信覺入道仁和寺若延曆寺真覺款教忠卿第四男

長曆二年三月十二日傳授

圓照入道中納言俗名顯基民部卿大納言俊賢子三十八歲出家号東北房

同三年已卯正月廿日已亥於小野傳授

或本云授印可云云師主法務持金剛衆八人

讚衆十人歎德平救

延殷法橋睿山号大原法橋胎

同月廿一日傳授承永三年十二月廿六日

叙法橋同五年三月六日入滅

常寂号北尾上人上醍醐入道

真範僧正第十九出家長曆三年十一月升

四日於小野照野院傳授承保元年四月十

三日入滅八十寂後端坐數日臨終正念念

佛入滅

行照大法師

聖照律師仁和寺成典入室教授寂圓

治曆二年十二月十九日任權律師

護忍入道号桂御房後中書王息

血脈鈔中

慶真阿闍梨記云仁海受法護摩資修學不

御修法僧正手代云

觀果入寺号土左入寺住生人也

尋聖大僧都仁和

古僧綱補任中無尋聖云人件尋清者關白

兼通孫右京大夫遠重男也然延尋僧都兄

弟也

法圓大法師阿闍梨太元別當欽

性信二品法親王号大御室三條院第四御子重受十四出家御母小

一係左大將

寂照參河入道俗名定基入唐不轉

平教見幸心鈔

成尊号小野僧都興福寺住侶凡僧之時修

請雨經法得効驗云或記云興福寺仁盛威

儀師猶子實真喜僧正童子延命九子一長

者後三條院御持僧加三長者寺務二年延

久六年正月七日入滅六十仰云仁海僧正

血脈鈔中

曼荼羅寺讓得住給故号小野僧都此僧都

灌頂之時大理趣坊勤教授云此僧都後三

條院御持僧也則東宮御時院後冷泉僧都被

參時御鏡被御覽已年老被仰其時僧都心

得後冷泉院御位之間東宮御即位遲思食

心得急後冷泉院奉調伏仍無程崩御之間

東宮御即位後三條院是也但後三條院無

程崩御成尊無程入滅是人調伏故歎彼調

伏本尊法勝寺圓堂愛染是也

或記云號小野住僧都長和三年誕生長曆

三年九月三日傳授師主法務僧正二長

教圖授年月日補阿闍梨凡僧時修請雨經

法得靈驗云延久元年五月廿五日任權

律師五十同三年二月廿日加任三長者

十六同六月廿九日轉小僧都臨時朝恩或

日五同四年九月廿日長信僧正入滅以

後寺務六十承保元年正月七日入滅十六

三寺務二年元亨釋書曰釋成尊仁海

血脉鈔中

四十一

法師僕隸之子也海見稚孩知為法器收

鞠及長俊才日新延久帝在儲位久以尊

為法友託以運柩一日尊入宮帝拔白髮

數莖貯硯盞賜尊尊無語而出歸坊修愛

深王供其像冠師子噴血濺爐壇不幾帝

即位尊之過渥矣延久六年正月七日卒

年表云治曆元年夏早詔台徒於賀茂神

祠祈雨時小蛇出神殿前吐水氣小雨便灑

而不出數里五月二十三神泉苑讀經不

雨六月十五日詔成尊修法于神泉苑一

七日第三日雨凡修中三雨云

私云纂要鈔之製作亦功大哉

範俊勸修寺之始後可列之

明算阿闍梨高野中院延久四年十二月廿

入滅八十一日

元亨釋書曰釋明算姓佐藤氏紀州神崎

人年十一登高野山翌歲羅染隨成尊法

師學秘密法初金剛拳寺自營構之始至

血脉鈔中

四十二

既已二百餘歲院宇廢頽密學疎荒等慨

念持明之宗依正俱替苦修勵學度邁倫

傳未終十年雨部職位諸尊軌儀無不貫穿

南嶺密衆再興者世推力於算喜承元年

十一月十一日寂年八十六

源導阿闍梨小野大衆院建立

行照大法師

行秀大法師

明快權少僧都興福寺

永延二年誕生長曆三年維摩講師_{五十}末
承五年十二月廿日任權律師_{六十}天喜三
年六月十六日轉權少僧都_{六十}康平三年
六月十六日補山階寺別當_{七十}任三箇年
延久四年八月二日卒_{八十}此人自師匠僧
都廿四年之宿老也

義範

号通知院僧都加三長者_{六十}寬治二

年三月五日依病辭_{六十}所帶等同年閏十月五
日入滅_{六十}肥後國人也或記云成尊印信

忠康抄中

四十三

文云義範即從小僧頻受大法尋法流而渴
瓶仰云此義範範俊之時醍醐勸脩寺不同
出來則範俊僧正勸脩寺寂初也又醍醐仁
和寺相對呼時惣通勸脩寺等云小野也而
於尊師門流殊号小野勸脩寺也範俊僧正
成尊僧都小野曼荼羅寺讓得住給故別以
勸脩寺号小野也又義範大御室御弟子也
所以者何今比敷祭時可勤競馬與區嫡家
隨身來義範之室申鞭加持之事處義範云

歎方鞭大御室御加持彼御室晝夜護法馳
仕之給法驗越倫世然者我御室ニサリ奉汝
今勝不可有其詮則勝程必死若命惜覺我
勝事不可可若又命雖終勝思速可加持云
而彼隨身命雖終為勝思也云爰義範領掌
給故既彼祭日成漸始競馬勝負處勸義範
方馬遲而勝負大鼓遠近義範方馬鞭一打
急馳歎人馬馳拔仍急至勝負大鼓所指勝
鞭時大御室御接敷被御覽已我御馬負思
食彈指_{廿廿}給_ハ義範隨身_ハ指勝鞭自
焉落死_云義範先_立カ_ル可有不思議被仰
事誠不思議也則義範大御室勝_ニイ_ラセタル
事痛為謝彼咎成御弟子_云又義範範俊共
白河院御歸依僧也而諸雨經法範俊被仰
付其時義範思樣我薦次上聽也又彼法先
師我相傳無幾程入滅然者_イ程範俊彼法
可相傳我思而範俊已神泉苑而行彼法義
範聞此事亦上醍醐而行大佛頂法祈請云

忠康抄中

四十四

云彼法若先師僧都如授我範俊又授之依
範俊行可降雨若不_云如授我者雨不可降_云
而範俊修中神泉苑池上黑雲聳甘雨普潤
景氣見處自東方又黑雲聳來其時本黑雲
散散成西方散了如此_云了々々都不降甘雨
其時範俊是東方黑雲義範所為也思終不
覺結願已及耻辱間自神泉苑西門出遂電
那智山十日參籠始行愛染王法而白河院
御病惱之間召諸道博士何皆可及御大事

血脈鈔中

四十五

占申_云而或時虛空有音告之云召竹人可
有御加持_云竹人者範俊事竹_云仍忽召範俊
彼參籠及七百日不滿十日之間再三辭退
申然而院宣及兩度之間無力七百日結願
上洛奉加持之處御惱急平愈聖體無恙則
彼御祈行愛染王法大方範俊愛染行者也
彼那智參籠之間小野曼荼羅寺義範申賜
了然而歸洛之後又如先以院宣返賜了
或鈔云御年卅許祖師仁海僧正隨遂給

仕其比仁海御胸所勞俄出來僧正自經
藏大師五鈷取出胸當義範示云汝大佛
頂陀羅尼誦我胸加持_云僧都隨命奉祈
忽平愈隨喜感歎_云又自小野百箇日上
醍醐入堂或甚雨日凌雨登山先參准服
堂念誦此間心思惟事自此又參如意輪
堂事煩哉思召處幻中內陳戶帳裏老僧
出來示云我此堂住從此還_云眠驚後問
入帳中有如意輪形像_云又堀河院母后

血脈鈔中

四十六

為皇子誕生修愛染王法母后其念誦間
少眠夢中本尊光放給見夢覺後餘光猶
耀仍悉地可成由六條右府被語申其後
無程堀河院御誕生_云薄草決愛染帖云
御自筆裏云抑上代祖師達者太略太權
之化現也更不可奇也義範僧都成尊之
弟子勝覺之師範堀河為羽明匠既是末代
也而其靈德敢不_云取上古繁記錄剩人口
或時於道場言談喧喧承仕法師成奇伺

見之處。聊無入唯與大師御影也繪像相共

言談也。承仕成奇特思竊卻隱云云彼玄禁

之入毒龍窟。般若寺之開入定之廟。雖希

有不思議猶不聞說法之音。不交言談之

臂異國上古無此例者歟。恐可云大權現

化數件。御影為本坊遍知院重寶。今相傳

之云云此祖師奏聞之趣。不仰信哉。悉地成

就。用心王軌誠證殊被出此尊。猶猶有興

矣。上已妙鈔云白河院御年廿五之比被仰

血脈鈔中

四十七

義範僧都云。今年極重厄年也。若過今年

者。今且可。在世可。延于壽命。法如何。僧都

奏云。可。令行悉地成就。法御宣旨云。何。悉

地成就。法僧都奏云。愛染王法也。宣旨云。

極貴事哉。云云元亨釋書云。釋範俊事東

寺。成尊與義範齊名。尊病草延久。帝遣中

使問病。且宣曰。俊與範孰愈。尊奏曰。二子

無優劣。帝三問。尊答如初。中使復命。帝曰。

尊之言爾。然有思儀乎。中使曰。臣臨尊室。

諸徒看養範俊在。枕頭義範在。聊後臣宣

詔旨。尊答了。舉首見範俊而已。無餘事。帝

以為尊意在子俊也。永保二年四月至七

月。不雨十六日。詔俊於神泉池。脩請雨經

法。義範長於俊也。不承詔。因茲懷怨。忿便

入醍醐山。修寶樓閣。法礙俊之供。王城之

上黑雲油然。彌覆城中。皆謂必雨。時醍醐

山頂暴風俄起。吹散雲氣。修中二七日。風

雲數度。城中童謠曰。範俊雲又馳。義範風

血脈鈔中

四十八

接吹過二七。不雨。俊耻潛逃。那智山屬王

畿之怪孽。帝愁之。一夕夢或告曰。竹人攘

災。覺後問羣臣。無委者。江都督匡房奏曰。

範俊也。帝曰。何也。都督曰。範俊從竹人。帝

感悟。詔俊反。都為僧正。同書云。釋信覺

有密學。永保二年旱。範俊無應。乃勅覺法

事。覺於東寺。脩孔雀明王法。又期二七。第

十之日。甘雨連日。上大悅。聽輦車。年表

云。承曆三年。皇后妊焉。五月廿七。詔義範。

加護範修孔雀明王法逾期無產範行散

事七月初九皇子平誕寬治帝是也散後

六月世猶言範効云云秘鈔問答請雨經

與云堀河院御代寬治元年修之云云

快俊松本

定尊重受

妙法房阿闍梨若狹守貞任息延真律師舍弟

經順俊

勝覺號三寶院權僧正範俊定賢重受加二

血脈鈔中

四十九

長者六十法務東寺別當寺務四年大治四

年四月一日入滅七十或記云充大臣源俊

房息母越前守良經女夢自象入懷中覺不

經幾時節孕釋迦如來入胎之瑞歟云云付法

廿四人仰云此僧正乳母子有二人法匠

舍兄賢覺理性房理性院始也舍弟聖賢三

密房金剛王院始也仍三寶院加理性院金

剛王院二流云醍醐三流也但三流相對云

三寶院時者以定海僧正為本體也凡三寶

院門流正道門人理性院金剛王院云無下

思下也但金剛王院流甚深習事共有之然

而大法十行儀法則相傳十無之也又理性

院行儀法則方金剛王院勝然而勤理性房

聖賢被責伏也又勝覺僧正範俊重受義範

入滅故也而範俊云義範付弟不足事不可

有之而今更可有御重受事何故哉云云勝覺

云別取存候可申重受云云範俊云然者義範

御相傳有分目錄給殘所可奉授云云其時勝

血脈鈔中

五十

覺義範相傳分目錄與範俊範俊此目錄分

如法大樣事也云間其後勝覺受法云云

星通口云三寶院事灌頂堂并經藏權僧

正御時被造之中門額面真裏草堀河左

府俊房業或花園左府御手跡云云但此後

說不審云云大僧正御時被立結緣灌頂

同時天承年中被始行之三昧耶戒於廊

行之灌頂堂廊松橋大僧都時被立之是

東寺灌頂三昧耶戒於廣庇勤修之故也

此後於庇脩之權僧正御時灌頂堂兩界

二界相並被奉居禾蓋一也權僧正御自筆八大佛頂

種子被雖被立之彼寺無結緣灌頂大僧

正御時兩壇各別被居之間金剛界天蓋

新被設之智積房令書五佛頂種子住書

損消字云云又當寺結緣灌頂事延命院僧都

被欲申置覺聊有所見云云權僧正御房頗異

相人也可謂權者御傳授八十餘箇法每

日暗令誦給理趣三昧十トモ持火爐令

行之於世間都以關給內心真實貴坐給

之間天下流布人人滿德云云郁芳門院崩

御之時自河院不堪御悲歎有御出家之

御志諸僧奉請不奉剃之院被仰云勝覺

ノミ剃ス有召即參無念被奉剃依之

剃手法眼云云梵字木筆ウツク候筆梵字

無下候已上星又土去鈔云師云義範

僧都弟子靜意法印初同宿遍智院其時

權僧正自三寶院為受法常被參遍智院

庭弱作法被渡之間靜意法印繫屬等頗

以令興言數聞其加教訓權僧正答曰誠

可然但向遍智院事全非別事偏是求法

之料也然者人如何云更不可依其其後

頗被向其後彼法印令居住仁和寺不忌

昔同法之暇時時被向三寶院權僧正或

時祕書有被借事可借進之由召真海阿

闍梨開經藏可撰出之由被申之間雖見

之件書不見云云猶重可見之由被申之能

能雖撰見摠不見其後權僧正心地耶違

例之間今度難治後日見出可進之由被

申之無力被歸了住他寺之人借申祕書

之間清瀧守護給歟之由古人申侍也私

云件靜意法印真弟子覺曉法眼是也彼

覺曉所持書等印性僧正傳領之仍義範相

傳累代物等少少留真乘院即大師御真

筆金輪時處儀軌等也為當流頗遺恨事

歟此事雜談之次理性院僧正物語也已上

土去 鈔 私云勝覺者應德三年丙寅七月廿

二日入壇卅三歲大治四年四月一日入

滅七十三堀川尤府俊房公息天治二年

鳥羽為女院御產孔雀經法勤修第十四

日王子降誕依賞被補權僧正云亮私云

不經法印給歟 祕鈔問答如法尊勝之

卷押紙云權僧正為鳥羽僧正弟子事範

俊之父者仁盛威儀師也賢圓小別當賢覺

父之父者仁圓威儀師也仁圓與仁盛兄

血脈鈔中

五十三

弟契也仁圓者為宮僧正御房專一仍仁

盛以子息範俊成仁圓之息子為宮僧正

御房弟子宮以範俊令補東寺入寺僧給

了範俊云我為僧正事者其根本補入寺

僧之故也云云範俊與賢圓甚深間也範俊

重病之時與賢圓申談以曼荼羅寺可付

屬申云云仍權僧正令成鳥羽僧正弟子給

了其時所勞無別事其後經年序依白河

院院宣以小野奉讓御室了云云元亨

釋書曰釋勝覺尤僕射源俊房子也禮醍

醐寺定賢受祕教與旨又就範俊義範二

師益究源底道福縣衙門學如市天永三

年六月早勅於神泉苑脩諸雨法過三日

大雨降注帝宣尚書右丞藤顯隆加賞

僕射大喜延覺於府第設宴于時府裏小

兒善歌舞僕射令兒唱兒乃歌曰阿緝池

水通神泉許摩屈拳風吹一味雨其音雅

婉僕射曰善乎歌乎應時惕節誰教汝哉

血脈鈔中

五十四

對曰曉更夢老翁告曰今日府中有客宴

子必呈倡伎以此詩為曲苦口付授故我

歌之合家感怪摩屈拳高野拳名也未久

四年夏旱又勅覺掌於神泉期以七月第

四日小地出池入爐壇下此日陰雲垂市

明旦甘雨普洽率土抃躍大治四年漆微

疾二十八日孔雀一隻周匝座傍餘人多

不見見者或髣髴而彩羽不鮮四月一日

光雲覆房覺便逝贊曰早滂者邾家之

大事也我。方外之民又資於巖窟矣。天長之間海敏之二師自發軔於神泉此池宜於此焉然海碍於敏。敏矣俊礙於範而輸二子之差降可見焉。後時竹人之夢俊或有加乎空公施于難用力者多矣。二覺之雨無礙而然授歌之兒又下奇也。

同書曰釋寬空姓文室氏內州人事神日為弟子又稟寬平上皇密灌。兼得圓堂院事。天曆帝勅修祈雨法過期不雨君臣潛

無康抄中

五十五

咲空乃著法服捧香爐入宮庭立焚香誦咒密觀須臾于時陰雲忽起大雨暴降然宮城而已不到他所時人奇之。康保元年為僧正天祿三年二月六日化年八十九或鈇云寬治二年御年三十二而清瀧說勝覺尤府任託宣旨山上造神殿同三年四月四日奉遷宮。承德元年四月十七日下醍醐造寶殿元永元年三月十六日清瀧會被始行是櫻會根元也又此僧正出

京時供奉僧一兩人也洛中而天台行玄大僧正車乘所從者前後侍從權僧正何人云事不知故道去思不得便宜間恐恐車傍通然大僧正物見見出權僧正勝覺檜笠下目見合微咲大僧正歸房門第等語云今日出京悔我痛我第一耻辱也其故奉問大僧正云勝覺檜笠下我見何程我云云云慚愧痛我悲我感淚給云醍醐佛法興行此御時也仍十箇寺別當被補

無康抄中

五十六

了又或時可被修祈雨法勅定有之然權僧正辭退之其故我戒行不具無慚故遠內證難達間無法驗佛法廢退法流未練也云爰僧正母公教訓云綸言如汗勅命難通普天下無不王土難及辭退莫大恩德費出家不致國家護持何事為業冷衣食古德愁之就中雨是情非情普蒙其養育平等利益也若僧正加持力達廣大慈悲方今丹誠無二心者何為天不降甘雨乎

先世後世其趣亦一致也云云為人在人云古人詞也云云故僧正且云勅命且云母公教訓旁以可應公請由奏聞奉始觀慮三公四海皆以歡喜無是非至第二日大雨降流天下稱羨無如之云云三寶院院号此僧正時始其故義範範俊定賢三師隨分大事此僧正時一處相承故云也然田舍邊真諦俗諦異曲義稱不可然又醍醐三流云勝覺下開之誠是德行甚深不可思議

本傳中

云云

也末資可仰信者也 秘鈔問答請雨經與云鳥羽院御代永久五年六月十四日始脩之于時少僧都廿一日結願以定海阿闍梨補權律師云云同鈔孔雀經與云或記云天治二年權大僧都勝覺為祈女院御產脩孔雀經法第十四王子誕生依法賞五月十八日被補權僧正云云座主補任云勝覺大治二年九月十一日待賢門院女院御產第四王子孔雀經法并牛王加持參勤勸

賞任權僧正云云同鈔仁王經法與云長治二年酉夢星出現其形如曳紅綃長五丈許仍以醍醐座主法眼勝覺被修仁王經法三七日中消失了云云保安元年十月十三日於土御門內裏同法被始行之同二年五月十九日於本寺被修之同四年十月三日始行二七日云云或記云自是別本記也是醍醐光臺院之本也阿闍梨澄成

本傳中

云云

康和二年十一月廿八日庚寅斗於大谷持寶院傳授師年四十八職衆八人導師仁寬歎德勝實阿闍梨仁寬尤大臣俊房息同三年二月十三日甲辰翼於無量光院傳授職衆十人導師林覺歎德圓賢大法師兼俊喜承元年二月十七日於同院傳授受者四職衆六人教授仁寬無列歎德

阿闍梨靜槐金峯山号
上東房

同年月日於金峯山御在所傳授職衆十六

人

阿闍梨聖賢本名
賢仁

喜承三年三月七日丁巳尾於無量光院

傳授受者職衆十人持金剛六人讚四人導

師仁寬闍梨教授定海闍梨唄并歎德澄成

闍梨散華勝成入寺護摩賢覺入寺神供定

明久安三年正月四月入滅六十
五

血脈鈔中

五十九

大法師賢尊

同日傳授六十
七

法眼賢覺受重

喜承三年四月五日乙酉尾於大智院傳

授受者職衆四人教授仁寬雖無師命無列
自勤之云云

歎德

阿闍梨澄雅

天仁三年四月四日尾於無量光院傳授

職衆八人教授賢覺入寺無列歎德

阿闍梨勝實受重

永久三年正月十一日壬午尾於東安寺

傳授受者職衆八人導師賢覺闍梨

阿闍梨勝成受重

與勝實同日傳授尾

阿闍梨增忍高野山
籠居

同四年二月廿六日庚寅室於三寶院傳

授受者五職衆八人導師賢覺闍梨教授并

護摩聖賢唄快俊闍梨散華林勝讚院嚴歎

血脈鈔中

六十

德勝實闍梨

阿闍梨公觀成就房

元永元年三月八日庚寅尾於同院傳授

職衆六人教授定海律師

阿闍梨定祐上戒光房

同年同月十八日庚子尾於同院傳授職

衆六人教授聖賢

大法師維寬教行房

同二年十月廿九日壬寅尾於同院傳授

大法師寬慧 甲斐阿闍梨

與維寬同日傳授已上職衆十二人 各六導

師并教授賢覺

大法師圓尊 高野住僧

保安元年十一月 日於無量光院傳授職

衆八人導師聖賢教授定海律師

大法師運覺 行衆房

同二年十一月廿五日庚辰月 心 於三寶院

傳授 受者 職衆六人導師公觀教授并護摩

聖賢

阿闍梨淳寬 宰相中將藤原家政息

大治二年二月六日丙寅 日 於無量光院

傳授 受者 職衆 導師賢覺闍梨教授護

摩聖賢闍梨歎德禪惠

阿闍梨賢圓 廣隆寺住僧

與淳寬同日傳授導師林覺闍梨教授聖賢

闍梨歎德賢覺已上職衆十二人 各六人也

阿闍梨隆寬 仁和寺

同年同月十八日戊寅 房 於三寶院傳授職衆六人

阿闍梨寬運 大藏卿爲房息重受

同年三月 日於三寶院傳授職衆八人教

授賢覺闍梨無三昧耶戒

權少僧都源覺 尤大臣俊房息仁和寺重受

同三年 月 日於京壇前傳授 受者五十無職衆

阿闍梨嚴寬 仁和寺

同年十一月二日壬午 日 於三寶院傳授

受者五 職衆八人導師禪惠闍梨教授并護

摩聖賢歎德定祐闍梨

阿闍梨覺觀

同年十二月三日癸丑 室 於無量光院傳

授職衆廿人持金剛十四人讚六人導師并

護摩聖賢闍梨教授并歎德賢覺

阿闍梨圓蓮 廣隆寺

同年 月 日於三寶院傳授 無職衆

定海 号 三寶院前大僧正左大臣顯房息也

又大僧正法務東寺別當天承元年四月十三日加之之上皇御祈修孔雀經此法申希代之由仍加任結願日鈔法印於長者依為散位被止了同十月五日補一長者久安元年辭諸職籠居七十寺務十一年久安五年四月十二日入滅七十或記云如法尊勝法從為羽僧正受之同愛染王法從良雅阿闍梨受之云云仰云定海僧正範俊弟子良雅阿闍梨重受仍此時勸修寺習三寶院來就中

血脈鈔中

六十三

良雅大乘院阿闍梨範俊委受法人也範俊付法雖為嚴覺委事以良雅為上足則三寶院門流人云範俊思樣以嚴覺付弟シタ我今滅後一定御室被召師範勸修寺大事悉可奉授之有院宣之時嚴覺無為可奉授然者當流大事可散落思嚴覺大事大概計受法不授真實大事也仍嚴覺雖為付弟勸修寺大事不所傳也然而為不斷絕當流大事以良雅內不殘一事悉付屬云云果嚴覺高野

御室御師範也當知良雅大事悉定海授是良雅阿闍梨不為範俊付弟事恨勸修寺大事皆三寶院定海授給仍嚴覺方勸修寺一向メカラ計也實三寶院習之云云西大寺流定海一海ツリ而定海弟子元海元海弟子一海也今略元海直定海一海ハ事不審也

又定海禪惠一海靜慶

園律上人
戒國上人
叔尊西大寺思園上人
嚴長我園房

可知此但一海即可風情計受給故仍血脉

血脈鈔中

六十四

為成近定海一海ツリ大方一海禪惠元海

兩人初習給也

或記云康和三年十月廿八日癸卯參

於無量光院傳授受者八職衆升人導師澄

慶闍梨歎德賴昭闍梨後朝一家公卿殿

上人參會久安五年四月十二日卒七十

元亨釋書年表云保延三年春正月沙門

定海為僧正二月沙門玄覺為僧正云海

覺二僧正出焉近世僧正不書焉為二月

二書異例也凡僧正有正權正只一負二師皆正故書曷為二正國家皇子或自胎孕或潛藩咸以沙門神異者祝祚及龍飛受大賞号曰御持僧海為帝御持正月為正覺為權在海前及海超正興福寺衆七千人入京訟海超授因茲二月覺為正時有兩正南衆奏奪海後一正朝廷不許優海之功也正負為二自覺始云云保延四年二月二十三條離宮火二十四二條宮

血脉鈔中

六十五

火因茲三月十五詔定海修孔雀經法于鳥羽宮十九朝天雨租其色黑時為法効七月初十池中生一莖雙華蓮又為法効不書史失修者也九月二十六上皇宿中堂一七日十一月定海為大僧正醍醐徒海為初秘鈔問答仁王經法與云長承元年二月十六日於室町殿以醍醐座主定海被修之保延六年正月內裏御惱殆及危急修法一七日中御惱平愈云云同年

七月日於鳥羽殿同法又被行之康治二年正月廿一日於昭陽舍勤修同法云云當

座賜勸賞賢覺令鈔法眼云云

大法師隆賀小田原重受教授聖賢

久安二年四月廿四日入滅

權律師行海重受教授元海

大法師仁嚴石山教授元海

阿闍梨覺鏡本名覺教教授元海

法橋行朝教授元海

血脉鈔中

六十六

阿闍梨宗海教授元海

權律師衆海教授元海

內供奉衆海教授元海

阿闍梨祐源教授元海精進房已講

阿闍梨真海本名辨海教授元海

阿闍梨良勝教授元海

阿闍梨一海教授元海

法橋覺海

阿闍梨淳仁

元海 号松橋大僧都京極源大納言雅俊息

醍醐座主加三長者十六加任長者四箇年保

元元年八月十八日入滅戊刻六十四仰云定

海正付弟勝覺舍弟實運也是則勝覺遺言

故擬實運付弟而實運勝覺遺言思強定海

不思大事之間師弟儀不宜也依之定海呵

責實運而實運不用此事隔背移勸修寺成

寬信法務弟子依之定海元海為付弟也

或記云權大僧都元海重天承元年四月

無麻抄中

六十七

十四日庚辰火弟於三寶院傳授職衆八

人 秘鈔問答仁王經法與云久安六年

七月七日於白川殿美福門院御祈以醍

醐座主元海被始行同法三七日結願之

御布施解御衣一襲給之右大臣取之仁

平三年八月廿日於花山院同法被修之

三七日依日次不宜猶保元二年二月十

三日於鳥羽田中殿被脩之三七日伴僧

十六口結願被引御牛云云或歛云元海

大僧都御房定海大僧正付法寫經也仍

三寶院居住一向被管領然三寶院御願

砌被補座主人雖非門徒入替住故非我

弟子入聖教道具等披見事非本意覺食

私院家被造是号松橋然者三寶院聖教

二分我自筆聖教一海已講御房付屬自

元代代相承聖教安置三寶院實運僧都

被讓之故三寶院松橋聖教大事等相並

如車兩輪鳥二翼就中重書等草案本松

無麻抄中

六十八

橋相承清書三寶院相承彼大僧都保元

元年正月比不食所勞出來雖經數日無

感氣遂同年八月十八御入滅年六十四

此時紫雲靈變音樂空響云云定海與元

海狀云云受私云諸祖付法狀一讓與醍醐

寺條條雜事合 一灌頂院事 右件院

定海私建立也而天承元年寄進 御願

以降每年修結緣灌頂之大會奉祈法皇

二世御願無期万代不朽之勤鎮護國家

矣寺邊小田佛聖料寄之云末寺等目錄依繁略之右或根本末寺或新立別院也件寺別當或号先祖相傳或稱師資相承雖補任來皆是本寺之取攝座主之進退也而後代自恨戾之輩為別當職若住他所補寺務若輕本寺寄權門若蔑長吏違背其命若稱私領沾他人之輩出來者求停止寺務可改定其職矣 一經藏下宇奉安置顯密聖教并代代先德自筆書籍

血脈鈔中

六十九

本尊祕曼荼羅道具等目錄在別以前條讓與座主權大僧都元海畢一族之上為入室寫瓶之弟子仍委附万事之狀如件 康治二年六月一日大僧正定海當流付法狀有無事 相承之口傳云上古者於嫡流正統者令相承累代之門跡聖教等上者更無別之付法狀歟於傍流者可看後代之不審之間放付法狀歟所謂祖師權僧正勝覺理性房之法眼賢覺

放之付法狀有之如此之子細也但至于覺洞院僧正始雖為嫡弟故遍智院僧正付法狀有之其後為相續嫡嫡存此義者也但門跡相承之上者別無付法狀例又有之歟 真俗雜記十三云三寶院厚草子事此鈔松橋元海大僧都記三寶院大僧正御口決也下卷袋草子隨記下具紙長不具也此草本勝俱照院明海大僧都相承平治逆亂時依信西入道事覺洞院

血脈鈔中

七十

僧正趣配所之時明海僧都厚草紙與玄祕鈔入錦袋付屬勝賢僧正御房彼御頭懸至配所給畢其後無程歸給後更彼厚草紙諸尊次第等亂脫書ナシテ再治給兩本有之覺洞院付法御弟子二人實繼成賢根本草本授實繼再治本與成賢給成賢弟子二人道教憲深彼再治本道教相承授親快法印實繼本不慮相承報恩院僧正御房相承給報恩院御弟子二人

定濟僧正實深僧正彼草本蓮藏院僧正授與給親快法印弟子二人親玄法眼實勝法印再治本親玄法眼相承聖增私云當院中性相傳本如何答西南院實方本再治報恩院方本兩本俱當院傳寫之報恩院方本圓科點有之西南院方本無科點然先師賴瑜法印御房私以報恩院本被付科點畢此段不可忘卻矣云云

華嚴集

七十一

內供奉豪海 重受

蓮華院

阿闍梨良海 大將——

阿闍梨實海 遍智院權少僧都

權律師雅寶 勸修寺

阿闍梨宗海 重受

阿闍梨真海 重受 勝俱胙院

阿闍梨一海 重受 松橋

實運 號勝俱胙院僧都又廟僧都本名明海

尤大臣俊房息勝覺入室寬信灌頂弟子三

華嚴集

七十二

論宗保元元年六月十五日入壇_{五十}同年八月十八日師主入滅永曆元年二月廿四日入滅_{五十}或記云明海是也醍醐座主保元元年六月十五日傳授師_{六十}受者_{五十}二無作法重受故也云云仰云實運元海弟子成事寬信侍法師實運祕藏寵童カトイタリケル間實運鬱憤訪寬信而法務強不被許容之間實運恨醍醐還住元海可受法之由申元海悅云定海僧正勝覺遺言トサシモ垂哀憐奉恩付弟之慮依一旦事被移住勸修寺之條頗無情次第也而還住可成某弟子由被所望之事自元所存也不可有子細云云仍元海弟子成畢而寬信法務實運付顯密教字擬付弟醍醐還住之間深恨我哥授勸修寺大事他門可散落思急不披露前調伏實運修中七日間寬信行法家中庭上轟轟音申案內時法務道場內答返事云已御宿願成就畢云又法務云自何處哉答云自炎魔王

官爾時急結願畢仍實運無程病惡瘡入滅
畢彼調伏炎魔天供也今有彼法寬信雖成
就宿願後如此事可有之思勸修寺大事聖
教箱封付遂無付第入滅了仍寬信方勸修
寺斷絕也然而嚴覺相弟子良雅阿闍梨方
大事共不絕故彼方流于今不絕也

土去鈔云金寶鈔事私云金寶鈔與廟鈔
各別物也師云金寶玄秘共實運僧都鈔
物也廟鈔實運僧都授于寬命阿闍梨之

血脉鈔中

七十三

時彼寬命以師主口傳所注置書也彼寬
命先師匠他界仍實運僧都又再治之另
金寶鈔件寬命入壇之時所注置書有之
覺洞院所被作傳法灌頂私記件小單子
等被記敷之由被示金寶鈔之中一帖殊
被秘之者有之如法尊勝法云云今妙鈔與
金寶同物異名之由存知之處秘云云
妙鈔有之事實賢僧正參御室親王法之
金云有之
時御物語之次被仰云金寶鈔勝賢僧正

自筆正本有此之故本迹無數之由被仰
仍於御前拜見之處誠自筆有之申請此
書枉可書寫仕之由申罷出之由正語待
之也云云問以此書號廟鈔由緒云何 答
勝俱阻院實運僧都號廟僧都之故也栢
森邊名廟敷小栗栖常曉御廟敷被住彼邊
之故名廟僧都彼書名廟鈔也高野ヤカ
外題廟鈔書本有之歟已上土去鈔
受私云妙與廟音通故歟 秘鈔問答云

血脉鈔中

七十四

傳受集寬信法務記嚴覺口傳金寶明海
記寬信傳明海移醍醐改名實運為乞
海弟子作玄秘寬命記實運口傳云妙鈔
云云 畏私云師傳亦如是此記可仰信而
已 同問答仁王經法典云保元三年二
月廿六日於本寺三寶院日蝕御祈以醍
醐座主實運同法被修之二七日三月一
日忽雷雲覆天蝕不正現矣云云 秘云此
度有驗之間被轉少僧都歟

元海與實運狀云 前大僧正被付屬寺
家經藏并万事於元海之狀一通今又書
具經藏書籍祕佛等起請安置之代代座
主見此文如守眼精凡勿相背矣保元元
年六月廿日座主權大僧都元滋 此經
藏祕曼荼羅并書籍道具等傳自尊師般
若寺僧正嫡嫡相承至于予時無紛失無
外見已下今書具起請讓明海律師畢能
能祕藏可傳次座主矣起請條條 一御

血脈錄中

七十五

經藏事任御起請旨敢不可違失事

一令授與御祕法祕事不可傳他門他所
人事 一令仰置事縱雖一事全不可違
失事 右起請如件若背此旨者現世蒙
佛天罰永失冥加護後生墮惡趣永不可
有出期仍錄事狀起請如件 保元元年
六月廿日 權律師明海

勝賢

號覺洞院侍從僧正本號勝憲而配流
後用賢字仁和寺越中法印寂源弟子醍醐

座主東寺別當東南院院主三長者十五保元
四年四月十六日入壇十二年永曆二年師主
入滅于時實建久四年五月廿九日辭長者
并僧正同七年六月廿二日入滅五十少納
言通憲子也 仰云此僧正師實運早世之
間細細尊法等常喜院心覺阿闍梨受給凡
實運諸弟子中勝賢乘海二人為上足其中
以勝賢為本故為付弟也而乘海法印以時
威勢追放勝賢成座主于時勝賢重書隨身

血脈錄中

七十六

籠居高野而乘海申院宣可返置本所之由
責之間勝賢一夜間集門徒書留本醍醐返
畢而勝賢後又返入醍醐追放乘海經寺務
其時乘海大事聖教等不隨身退出處侍法
師法印御房日來廿七大事被思食聖教十六
隨身出畢又勝賢付弟為實繼而此人早世
間成賢舍弟以範賢為付弟而此人又師先
立入滅也其時一門人計以成賢為付弟又
勝賢自門弟子禪林靜通僧都金剛王院實

賢僧正等也。他門弟子比院御室守覺法親王也。則此僧正自御室被召之間參成師範畢御室如法有御敬禮僧正被參御手御薦舉上下接入奉下有間僧正三寶院大事如法奉授之又野決上下云重書御室不審事書賜僧正僧正我自筆悉不審事記奉文也。摠自勝賢御相承文野月各付給也。其中野鈔云奉授本鈔也。御傳受之後御室有御製作文云野月新鈔御室御所野月澤見上下御祕藏之重書也。但勝賢方御相承文通云野月則其聖教御銘爾也。故秘鈔等野月鈔云也。澤見嚴記覺成御相傳文通云澤鈔依之有御製作文云澤見新鈔也。

血脈鈔中

七十七

秘抄問答孔雀經與云建久二立五月十七日權僧正勝賢於醍醐寺三寶院為祈雨被脩孔雀經法自同廿二日戌刻至廿三日巳時大雨滂沱矣。仍廿四日結願了同廿五日彼勸賞以阿闍梨五口被置清

瀧之社事 院宣云 被 院宣併於當寺被修孔雀經法事年紀久隔蹤跡又稀今預希代之招請顯速疾之効驗七日之內甘雨忽降非常一時之悅豫定為万代之策談歎法驗之至敬感不少於勸賞者任申請可置阿闍梨五口於清瀧社之由所被宣下也。以此旨可仰達者 院宣如所悉之謹言

五月廿四 日右衛門權佐長房

血脈鈔中

七十八

謹上 醍醐座主僧正御房

謹請 院宣事

右孔雀經御修法之効驗殊依有敬感勸請事任申請阿闍梨五口被寄置清瀧社條誠是一宗之面目万代之龜鏡也。滿寺諸僧異口同音所畏申也者謹所請如件勝賢誠恐敬白

五月廿五日

權僧正勝賢

或記云勝賢三度座主成還初成被拂棄

海龍居高野來海次還住次亦實海成實
海次亦成還次實繼次成賢次定範成賢第也
次光寶次道禪畏私云号鳴瀧道禪病
床蓮華院僧正禪定殿下年來御持僧也
故申云宗先途了不叶所先途係以宿老
可為座主之由被定置其上以御威勢十
ト力セ入候ヘキト申仍即成六年也次故大
僧正畏私云實賢扶成七年也次以城入
道威勢關東申成東寺一長者醍醐座主

血脈錄中

七十九

山本之僧正護之六年也勝賢信西小納
言入道子息也成賢小納言入道嫡子櫻
本中納言成範子息也故大僧正勝賢兄
靜賢法印公人子息也靜遍池大納言賴
盛子息也此別人也故大僧正靜遍受灌
頂大事靜遍灌頂大事受勝賢成賢二人
也五祕密大事靜遍成賢受之灌頂大事
成賢靜遍受之五物習力タリ太元法故
大僧正靜遍受之故大僧正灌頂委口傳

相承實蓮南坊受之也雖然相承次第必
披露見若蓮南勝賢僧正中問法師也雖
然淨行故受宗大事等也蓮南勝賢後死
故大僧正餘世間法付便無蓮南坊每年
米二十石タリ以此學問御終其死後
便無靜遍公家申入サルヘキ人也宗大事
申入也トテ公方見參入御目ミセラレテ
籠等被召以其力次第出仕又蓮華院還
後僧都成蓮華院請兩經賞ヨリテ法印成
由來如是云云薄草決不動法下云勝賢
僧正云不動真言行者通本尊也我修三
時護摩一万餘日云云末資豈忍緒哉亡鬼
若有靈者定照覽歟云云

血脈錄中

八十

畏私云

小納言入道信西

通憲

貞憲

乘蓮房辨
入道生西

貞慶

解脫上人

成範

櫻町中
納言

成賢

醍醐

勝賢

醍醐

定範

醍醐

羽通

高野

範賢

石内

靜憲
山唐
澄憲
院安古
覺憲
南壺坂都

東大寺明通十七号
明匠十人隱居高野
山号空阿上人貞應
三年六月十六日入滅

靜遍
禪林寺
僧都

道範
野高

範賢
石山

實繼
壺坊

實賢
金剛院王

守覺親王

血脉鈔中

八十一

密宗血脉鈔中

成賢^号通智院宰相僧正民部卿櫻町中納

言成範息加三長者四十八不經寺務建保六年八月日辭長者

或鈔云定範範賢兄弟也為勝賢甥也憲深一姓也憲深民部卿成通息也^{云云}自元道心者御座故名聞遮為念佛者成隱居世ハヤト思食雖然不任御意事上醍醐南山麓^号南禪寺御堂作六口供僧居朝念佛申甚給然間成阿彌名稱^{云云}

願彼僧正^{血脈錄下}手迹南禪寺壁板殘^{云云}有^{云云}

云寬喜三年^{辛卯}九月十九日入滅^{七十}

秘鈔問答孔雀經與云或記云建曆元年

七月廿日依祈雨孔雀經法勸賞任權僧

正^{云云}同鈔仁王經與云建保三年七月廿

六日於押小路殿二七箇日被修之勸賞

定範鈔法印了護摩壇被引御馬同四年

三月廿五日於高陽院被修之結願被引

御馬同五年六月廿日於同御所被修之

勸賞光寶轉大僧都又被引御馬同七年

二月六日於高陽院被修之同年四月日

又被修之^{云云}同鈔請雨經之與云光寶記

云建保三年之夏四月廿一日以後雲收

天晴霖雨不降仍任例祈雨之事色色被

行通雖降小雨敢不及普潤炎旱既亘數

旬農夫屈力忘耕作誠一天之災難万民

之愁歎也依之降^{論旨}自六月六日於

神泉苑被勤修請雨經法大阿闍梨醍醐

座主權僧正^成今此法者大師門跡相傳

之規模小野僧正靈驗揭焉之秘法也而

稟承慳留當寺祕藏未修他門抑永久五

年中旬之比當寺座主權僧正^勝於神泉

苑勤修此法以來一十一代年九十九年

也方今任相傳之舊記興絕久之法式是

則希代之勝事誰人不貴哉是故為備未

代之龜鏡記當時之見聞而已^{云云}第七日

六月十日申刻自醍醐山峯黑雲忽聳自日

成陰雷音響天雨腳降地道路忽成河陸地皆如池是則龍神之納受大師之加被也實時代雖末世法力猶以新也貴賤之褒美都鄙之感悅何事如之我見聞濕袖感淚與雨俱而間依 敕感無極思食御勅使左馬頭忠綱奉 院宣併日來之災早非只事是則可然時至天災也凡人力不及只仰法驗然修法始之後早魃彌增盛也片雲收盡追日無憑既七箇日欲空

血脉鈔下

三

過為世為人尤不使思食之處今日降雨法驗揭焉不及左右事也不限此甘雨餘事無疑自今日殊所憑思食也又此上猶強祈諸者還似輕法威早可有結願勸賞任請云仍初夜時亥刻結願了今夜賜當座之勸賞則淨真阿闍梨任權律師云云土去鈔云師云一院不動愛染王阿彌陀三箇法先師僧正有御傳受事先御加行何箇日計有御尋之時可依入事也日數

長申事無骨三七日可候由被申其後白表紙抄出道場觀少少略注之被進之阿彌陀法清書手跡也滿三七日之時持次第令參給被申入之慶女房來云若可被入見參物有者先可被御覽之由間被進彼次第了其後召參御前令受三箇法御了 勅問云付供養法振鈴之樣以五貼同時加持之或又振了後加持之者有之兩樣如何 答申云同時加持之者振鈴時真言略之數振了後加持之樣可宜之由被申御返答誠有其謂之由也土去建久八年成賢三十六歲也勝賢入滅翌年也建久四年任權律師文治元五月十一月廿五日水心入壇後鳥羽院御寬喜三年九月十九日入滅十七勝賢僧正賜成賢附法狀別錄在右尊法等代代自鈔其旨如記文誠宗祕法多所被注也尤可祕重而大僧都平生之時以此鈔具被

血脉鈔下

四

授于先師僧都。運畢先師又重加口決。所被授于勝賢也。爰勝賢雖不肖之身。偏為思師跡守之。如眼精。然間先年不慮之外。本寺亂離之刻。世間出世之雜物。一切雖不能隨身。件書籍并先師秘記等凡勝覺定海又嚴覺寬信等自鈔等都皮子四合所納三百餘卷。自然所取持也。偏是非大師之冥助哉。所殘書籍雖有數千卷。全非此類。歟勝賢雖無所誤。依惡黨結構。不量

血脈鈔下

五

外雖寺是亦宿運之令然也。敢非所恣只喜不失重寶。自餘之事全不足為歎。就中住寺之時。依世務忽忽不遑于修學。誠非本懷歎而涉年。而今達此難還。可謂善知識者歟。仍自彼年籠居于高野。偏為遂修學之本意也。爰成賢者年來之師弟骨肉之親知勝賢殊依隨喜求法志契約已深。就中祕密之器量未代難遇人也。且為思師跡。且為報佛恩。此鈔并所持之尊法等

大略所付授也。此鈔中灌頂大事代代口決悉授之。畢凡於件一事者。祖師成尊義。範勝覺定海等皆臨病床被授之。云實是道之肝心。只在此者歟。仍祖師之門弟其數雖多。傳之者只嫡第一人也。餘人全不聞名字。然者偏為不斷佛種也。必以此結緣。生生常為善友。知識弘此法。永期成佛。誠知三州五縣之契勝六親九族之儀。此事皆以兩部諸尊八大祖師奉為證明。委

血脈鈔下

六

細之起請約諾具載別紙。畢于時建久四年四月十三日。沙門勝賢記之。此記者師主前大僧正。親御自筆也。此狀應長二年二月十二日授合正文了。此正文建治年中倫。歡覽了評定眾等加一見了。定濟僧正與故法印御房。親座主相論之時。被傳歡覽。云建治五年座主職事雖被宣下尚斷食事。同五月廿六日入滅。云右記親玄僧正。御自筆房玄法印加筆。給

畢臺皮子被納之上為自然，可用寫之畢亮淳

遺言 極樂坊事 右佛子

成賢雖破戒無德，身有往生極樂，望仍清身器為修淨業，聊卜此地，久依彼土，況以遺骨欲安塔下，死後有志之輩於此處修追善，凡為無緣之地，不置寺用，然者年月漸移，忽及朽損時，誰人加修造哉？兼所哀歎也。遺弟等隨分懸世出世之恩顧，久所哀慈覆護也。爭各無報謝之志，若然者，座

血脈鈔下

七

主法印道禪僧都淨真法眼道教律師孝賢圓信憲深阿闍梨行譽僧都圓慶榮圓等各合力互同，志守損色，配分其用途，必可加修理，敢莫存疎略。若背遺狀存異儀之輩者，何可列遺弟？但此事同守此旨，敢不可存懈怠。以此趣次第傳領之仁，亦尤可令存知也。且存孝賢律師沙汰損色以下之支配等奉行之由，示置之狀如件。寬喜三年九月日 在判 極樂坊事任

御遺言之旨，各可令存知此旨，設雖無仰爭，可存疎略。况思食計上，何奉賢貴命，此上存異儀之輩者，冥顯三寶可有治罰者歟。仍各加署而已。座主——以下各在判實歸鈔云：寂勝四天王院供僧之所作之間，吉水僧正慈圓被問予云：法華道場觀何樣，令修給云云。輶案申云：輶所見三重候歟。其中虛空為道場之文，此即寂極也。此體候云云。即大被感氣云云。畏私云：此事愚

血脈鈔下

八

問決云云。大僧正以外，令感給云云。彼御意相叶歟。如此事難有事也。云云故僧正出身偏彼僧正力也。云云又薄草決云：輶云則次應入真如法性道場觀行而誦此偈。思惟偈中，真實勝義及至心與真如體性相應為限。偈曰：虛空為道場，菩提虛空相，亦無等覺者，真如故如來。文私云：小金剛輪次有此觀天台一真法界一，道無為真理之義，此文顯矣。御自筆深先師吉

水前大僧正國言談之時以此偈施名譽於他門之事如面談是一門之義談也末資尤可庶幾歟云云

憲深 号、極樂房僧正、又号、報恩院僧正、

或鈔云報恩院憲深僧正、法流事凡於本寺者道教憲深、二流繁昌無比類者也光實成賢之弟子四人内也云成賢氣色不善仍大事印明等具無相傳是建保記見刺公方調伏申風聞有之故終不叶寺住

血衆歟下

九

關東下向仍不及邪正又意教上人四人之中遁世之故強無傍正之沙汰然間憲深僧正行功勝諸人清瀧之冥助一身蒙也道教早逝之故威勢無左右也滿寺衆徒悉幡古力者也仍賴瑜教舜等隨分學匠成御弟子受口傳蒙師授四度灌頂大法祕法等尊法之口決記錄之効驗奇瑞隨分之事也或記云侍從成通息建保二三歲建長三年六月七日入滅七十一主弘長三年九月六日入滅七十一

定濟 憲深僧正付法灌頂事先定濟大僧正被定其故彼僧正顯密博覽内外兼學之人也剩後嵯峨院乳母子也仍威勢無比肩人然間七八歲時後嵯峨院仰云我後代時汝可為御持僧御契約也如此君之御意無是非故遂為醍醐座主然處蓮藏院實深法印福祐勝人心操隱便人也就中憲深僧正御前伺候奉公不懈怠然間付真俗無不叶御意依之憲深内内思召續血衆歟下法命事可依其志之甚深如此奉公慙慙事如何樣望付法歟思召處定濟公方御意無左右間常住居北闕而音信無之寺住無之無益上薦交也思食所詮實深付屬廿八思召也仍御所勞時召實深言汝此間志深切也世間之財寶不可有不足何樣付屬所望歟直可申云云時實深申愚身不肖申且無替古望千万不及申候處只今如此御意候事冥慮今然處

無是非候如仰世俗事一塵不存候申神妙也此間定濟付法存候處此上自今以後汝付屬郎自筆付屬狀被遊賜之即示云我最後今四五日覺也此等聖教眼肝及夜中汝院家竊可送之即其夜以下人鵝磨山云山越間道被越之畢重示云我一大事後此門院往廻定濟定御邊疑公方惡申成不慮可出來幾可用心云然間報恩院僧正弘長三年癸卯九月六日入滅

十一

七十二歲也僧正入滅由聞召定濟即驚京俄醍醐入寺先經藏等封付管領氣色也其後公方付法樣御尋于時定濟申云付法事不及左右可為愚僧間舍宣旨公諸參嚴實深法印被申報恩院付法愚身定濟申分非分之由度度問答不及決義依之兩人參內定濟自本主上御氣色之間無所憚理運由益奏聞于時實深一言不能返答野詮樣樣奏聞無益候肝要

十一

十二

十二

末後付法狀捧申主上即御覽有云何定濟不便思此上不可叶云但汝誓古分齊不知之定濟非付法誓古實深多事不可有之仍三度一度定濟僧正修法等可勤之旨宣旨依難默止至今定濟法不斷絕就中三寶院院家燒失門徒等不及造立然間定濟云我此院家再興他門方不可渡之繼座主非我門徒不可次第相承奏聞申處尤建立人可為主由宣下仍急被造立其後結緣灌頂被執行自爾以來定濟定勝定任賢助賢俊光濟滿濟迄三寶院所領六萬貫分悉知行此外所所未寺悉管領雖然道具聖教等相承無之今滿濟僧正此事數地藏院道快付內內有御受法滿濟云三寶院之院号無一寶事遺憾之由地藏院被申五百餘合聖教中有多本哀領置候被申承知也云云實深付法次第事實實深覺雅憲淳隆勝

隆舜經深隆源也是正報恩院僧正正嫡次第也彼實深僧正源家人也福祐如長者以御弟子真海僧都令入唐在唐數年也仍庭幡八流被渡是毛幡也結搆無極并十二天為圖繪唐繪具製撰渡之大師御筆以本以彼繪具令書此真海僧都無雙能筆間三寶院山水屏風并十二天屏風同此筆也於內外道具日本第一也實深僧正蓮華院名終御年七十二歲建治三年^{血脈錄下}九月六日入滅矣畏私云奇哉奇哉與先師同年同月同日而滅矣憲深與實深付法狀云當流相承事先師僧正^{成賢}專為正統愚身雖不肖即受彼深與也當法燈之仁爰蓮藏院僧正為先師入壇之資面令傳受諸尊瑜伽深依有求法之志憲深又以實深為嫡弟所令附法寫瓶也仍大法祕法祕事口決等悉奉指授之條不可疑無御違背事者向後彌無纖

芥之隔一事不可殘者也更不可有御不審之狀如件

弘長元年七月廿八日憲深權僧正^{在判}

光寶^{式部律師}思融上人^{勝万院長老}良舍上人

靜基上人

深賢号地藏院法印^{蓮華院高野法性院}

賴賢^{意教上人}願行上人^{憲淳}憲淳^{玄海快成成覺法皇大覺寺}

遍智院僧正^{成賢}賜意教上人附法狀云

一宗大事師資相傳口決悉授賴賢阿闍

梨訖從^{血脈錄下}幼少之時常隨一事不背命其上^{十四}

依有種種契約等祕宗眼目委細口傳悉

所授與也

寬喜三年八月九日 前權僧正成賢

種種御契約者上人云先師僧正仰云吾

有三願然而未果三者法華誦誦悲母報

恩道世閑居是也此三願汝替我可果之

仍唯授一人等大事所可授之也御入壇

之時契約也云以故上人自筆書之

或鈔云意教上人法流事彼流以意教成
賢付法正嫡定申歟其故或時成賢僧正
仰云我有三大願未遂無念至也云云于時
意教上人申云三大願何申僧正仰云一
為悲母阿彌陀護摩千日燒思二法華經
一部暗誦三道世閑居也云云賴賢此事聞安御
願也吉日撰護摩始其間法華經一部諸
誦然問護摩結願僧正御前參申云三御
願中二滿足候千日護摩今日結願候法

血脉鈔下

十五

華經一部諸誦候即時於御前被諸誦此
上御暇申候被道世然間成賢僧正雖我
弟子數多賴賢志人也拂底一塵不殘掇
與依之賴賢正極成賢與藏云也雖然地
藏院道教相承比之傍流非正流也其故
如是志人也申已道世上依何可云正嫡
乎就中道教不共大事當流不共之大事
有之然賴賢遂不知之是三寶院傍流謂
也就其賴賢入松橋室對淨真雖習之亦

非正嫡金剛三昧院實融付賴賢而受法
云云

靜通 号禪林寺僧都成賢重受故無作法
承久三年大亂之後帶後高倉法皇御教
書傳法畢十二月三日入室也畏私云此御
教書之案成
賢自筆予幸感得仰云靜通勝賢秘鈔如法
所持也希有云委細傳受但大事不許也故後成賢重受不
足所習續畢然而靜通流別無乏
道範 高野

血脉鈔下

十六

實賢 号金剛王院大僧正又号大夫僧正
醍醐座主右馬權頭基輔息顯輔三位四代
孫加四長者六十法務仁治二年辭長者寶
治二年閏十二月廿八日寺務遂任同三年
九月四日入滅七十仰云此僧正本勝賢僧
正弟子也而後靜通重受此僧正名僧弟子
理智院隆澄法性寺勝圓勝尊覺濟也又勝
圓濫行覺此等弟子中以覺濟為根本也此
實賢僧正貧道無緣五十有餘官途不成行

適僧正セカレ押スヘタル也而城入道大蓮房出家、家初、值行適僧正、可受法之、由被申而行、適僧正、大蓮房荒入道ナハトナ不可叶之、由返事被申了、仍大蓮房無本意思、從實賢僧正、可受法之、由被申、僧正無子、細被許了、仍此喜、大蓮房万事走廻、大僧正一長者、奉成了是偏大蓮房、力武家、威勢也、又座主、剝實賢、奉成了一向大蓮房、力名聞利養、如思一期御座也、聖門、空觀房大圓房等也、覺

血脈錄下

十七

濟ハ為空觀上人、弟子也、則實賢在生之時者、幼少、禪師故、灌頂計受尊法等、委細受法、一向空觀上人受給也、而覺濟ヒトナリナ後、只實賢、弟子名乘都賀茂、弟子云、事下不被名、稱也、舉世難之

覺濟山本 隨心院

隆澄理智院 良舍 靜基

定搭加賀 能海法印

如實賀茂空 隆源大教 觀乘房惡禪師 息

思融 良舍 靜基

良舍 靜基

佛乘坊大圓上人

良胤 良智宇都宮不動院 壽仁理日房持齋時名也

道海顯蓮房法印 壽仁甲斐權少僧都也

賢悟岩藏覺 良意覺心

光賢

血脈錄下

十八

仰云此人勸修寺成實、弟子也、而大事不被許之間、恨成實、移醍醐成成賢、弟子受法、灌頂而成實、此人讓座主其後、與成賢不和、成賢醍醐法師カタラナ座主、追放爾時、成賢重書等、取關東、下向成賢、賜勅使、追放橋本宿、追付其時光賢一夜、間書籍書寫、而勅使責問、不寫點返了

守海法印鑑倉サ 賴助僧正

定憲僧都光實付 宗瑜僧都

宗禪法印 覺宗阿性

嚴盛法印

定祐律師

禪長阿闍梨

良寶法印

榮尊僧正

深觀僧正

性瑜上人

西大寺
本照房

西大寺本照房本流仁和寺成就院流也然而覺宗阿性房值勸修寺流受給又西大寺故長老_系字次第_系字次第十_云物

血脈錄下

十九

作給_定一向三寶院秘鈔妙鈔簿草紙等取合作給西大寺流非松橋流也只可_号西大流然而西大寺松橋流名衆也此宗禪三寶院阿性上人授給

道教

号遍智院僧都仰云此人正成賢付法

也成賢入滅之後彼中陰終者披遺書可見聞成賢弟子憲深靜遍等互付法心懸有之處中陰終披彼讓狀等見之遺書云於付策者道教僧都也云此時憲深等古老弟子共

皆失興畢而道教早世間以親快為付弟而

親快幼稚之間受法等功不終仍以地藏院

法印深賢先付弟處分遺言云親快成長之

後以彼可為付弟當流大事聖教臺皮子等

皆悉可被讓云云而極樂房門徒繁昌威勢有

故道教方押入憲深任座主畢然而相傳

重書等道教付弟深賢許在加樣極樂房繁

昌故親快移門徒極樂房弟子成畢依之深

賢強親快事不快思也然而道教遺言_云下

血脈錄下

二十

入滅之剋臺皮子等親快付屬畢又極樂房

入滅之後定濟任座主之間親快遂不任座

主無幸而入滅了成賢與道教狀云師資

相承之院家莊園本尊重寶悉讓與道教法

眼畢就中宗大事又相副先師之別記授委

細口決吾願如此不可餘念者也

寬喜三年八月廿一日前權僧正成賢

遍口鈔云須事寬喜三年八月廿八日沉重

病於遍智院乍卧承之有三重委細

口傳在別紙開可披見云云大元法事於法者

先度授了大旨不殘其外事委細可見次第

等下合納之余事皆不限此法合別大事等

多々大可令披見也云云大旨最後示給了落

淚難押去了畏私云成賢者則此年九月

十九日入滅七十又遍口鈔與昏云鈍根

少智之間口傳悉不覺悟仍任師傳粗記之

祕密大事多在此中更不可披露只為備廢

忘也努勞勿散失元及古之裏記之文字不

血脈鈔下

十一

見之間消書之于時天福元年十一月四日

權少僧都道教云云然則成賢入滅二年後之

清昏也自其又三年後嘉禎二年五月廿六

日入滅唐橋大納言雅親息貞應元年壬午十

二月廿日入壇後堀川院御宇三歲

或鈔云凡此師三空院正嫡故門跡付法共

相遠事無之然間此御代聖教等一帖一卷

餘分被讓事無之雖然作法灌頂等終不被

行其故卅七歲時御逝去仍作法灌頂此代

絕事自門歎但親快法印深賢法印被受故

必灌頂絕云事不可云也付其成賢僧正意

教道教憲深光室四人弟子御座道教獨正

嫡也意教上人去本寺道世故宗大事大都

雖相承大法祕法等習无相承又大事付正

嫡教習悉傳之傍流一隅示也意教上人已

道世者事故一邊有相承何道教相承比之

哉又光室事公方氣色不快間遠流是宗大

事付謬相承事依有之冥慮應薄終關東下

血脈鈔下

十二

向然間此二人流本寺惣斷絕故本寺盛法

流道教憲深兩流也就中道教流不共習有

之憲深終不知之依之道教不共習云也但

意教流不共云事有之歟雖然此道教知給

仍正不共云事道教流有之自餘憲深光室

意教等不知也此事甚深也嫡弟一人外不

傳之畏私云此言實信乎當流之與旨偏在

此一事而已

一遍口鈔事此昏此僧都記也三空院重昏

也付之真偽事三卷本或四卷或五卷本有之皆是偽各可知之此事別有偽書之篇目也

御尊

思融

良舍

靜基

親快

号竟洞院法印

畏私云師傳云親快道教舍弟曆仁二年已

正月廿五日壁一廿五歲而隨地藏院深賢

入壇四茶院御宇也道教與親快狀云當流

血脈錄下

廿三

大事等授自抄了雖非无其恐為不斷佛種也於具支灌頂者任申置之肯可有其沙汰仍一通書進之委細口决披別記可得其意之狀如件嘉禎二年五月廿四日道教判

法眼御房

又道教遣深賢狀云親快法眼為舍弟穩使候間授印可世間出世事申付候畢但不授具支灌頂必隨御邊可遂具支灌頂由申置候其奈又如本意御沙汰二世本懷候哉仍

故申候也恐恐謹

嘉禎二年五月廿四日權大僧都道教

謹上地藏院御房

則後過一日而廿六日入滅三十七哀哉悲哉最後印可付法良有以哉末資可仰信而已製作各遺尊三卷令加秘鈔幸心鈔冠深之口决雜密記仁和寺理智院隆澄口决土去抄深賢口决

血脈錄下

廿四

七御逝去故病床而乍卧被殺印可於親快仍灌頂深賢法印申置聖教大事等御園淨尊被申置隨深賢法印領掌这事有之御園淨尊本食道遍智院部屋住屋御座或時道教召淨尊今度所勞難平愈仍可得一大事然親快未受法間灌頂深賢法印申置大事汝授置也親快灌頂以後可授之此大事唯授一人上是我汝一人可授也云此等子細淨尊承仰天此事去急歸部屋中間法師召行

水用意其沙汰畢，此箱一合付封請取畢。親快道教，御遺言任深賢灌頂，被受畢。然淨尊親快受法，相待處淨尊受法，其比報恩院，憲深僧正寺務上宣陽門御信仰無雙，行功勝諸人貴僧御座門院彼此，此禮節受法無不遂之。仍親快受法，申刺門弟親玄律師彼弟子分被推奉。然間淨尊雖經歲月，親快受法事不寄思無音信也。其淨尊我，是道教遺言任此聖教大事預置給，故昼夜守護事如

無厭學下

十五

守眼肝，仍受法等早，可有之。依愚僧貪者，間存外振舞無念，竟食三寶院聖教等悉，人馬負一夜間，山科或禪院被移空禪坊，契約欲被殺彼大事等。然間此事，親快聞召俄仰天以外也。仍時刻不移到山科受法，子細樣樣申上六淨尊述懷此事也。雖然遺恨，被志間伊豫國金丸莊三百貫，做為印可，御布施進上申終印可，遂給大事相承預置各籍相傳之。仍三寶院定濟奏狀云，親快灌頂受於

深賢大事傳淨尊云。然間親快道教嫡翁而灌頂大事等一塵不殘相傳之刺報恩院，流相承故對深賢法印所習口傳，雖土去抄報恩院，憲深所傳口傳名章心抄，幸報字篇心恩字，下心也。土去抄土地藏院地字，篇去深賢法印法字，作也可知之。畏私云或号土巨抄巨藏字中巨秋但報恩院受法事四度并印可三也。大都才竟公界法則等三寶院中不可遠仍學之給本流，淺云事非是諸流習一流立云事也事

血脈抄下

十六

相才竟縱他流疏釋可有誓古況三寶院內，法流不可相違云。一親快相承聖教等事，凡三寶院代々正嫡，御房隨法流聖教等正嫡道教法流可安置之。然三寶院憲深流安置道教流地藏院被住持如何親快道教早逝，依憲深重受申次第候事也。然憲深座主補任せし時親快御弟子間彼三寶院我住坊名半由親快御借用，借狀至今地藏院在之親快内々無心竟

食主奉借故，惡深三寶院移之時，親快道教付屬，聖教等地藏院近所，其彼地藏院移置，仍親快同，彼坊住，然惡深入滅，後定濟三寶院移，間親快非本意思，後寔我院歎被申處，主上偏定濟僧正御最負，係道理證文无主，猶且借可申，有給命間不及力，爰親快想樣，此寺住，蒙耻辱事，無甲斐女神，憑故也，上清瀧中，達申太秦桂宮院移念，君恨被申或時，遂受所勞，給自門，徒歎此事也，親快異

血脈鈔下

廿七

念起間，若魔界入禪事一定也，仍歎申夏千萬也，然間此有，奏聞申仍醍醐座主，乞辛勅吞，被下此由親快申，親快起直勅吞，取不及一見，云自在安樂時，不補座主，只今死我身賜之事，一向朝時至極也，上引破勅使面被投當然後無幾程入滅云云

澄禪 号桂宮院中觀上人

畏私云事相教相傳，李廣才也，四度口決諸尊口傳，号普雜尋秘決，治承記，其外諸

鈔物不違羅縵，他日可考之而已
實勝 大政法印 旧記師傳云實勝法印大和

尚西園寺公經鄉，息外戚甥公相鄉，猶子也，幼而入禪室長，而住密印，文永元年十二月四日，隨養洞院法印親快，遂具衣灌頂之飾，至于十四歲三月，沉病床，以印可宗大事等授申，聖雲親王，龜山院御子，云於具衣灌頂者，隨賴瑜法印可，遂其節給之，由被申置之，然間依遺命，自根來寺

血脉鈔下

廿八

被召上養洞院被行之，我母六口云 畏私云印可之後，正應四年三月十三日入滅，五十一聖雲親王者，正和三年六月十五日入滅，四十四賴瑜嘉元二年正月一日入滅，七十九云云
聖尊親王應安三年九月廿七日入滅，卒或鈔云實勝法印法流，事實勝賴瑜聖雲聖尊相承，聖雲賴瑜雖有灌頂亦親去，重受付其聖尊實勝聖教等相續，然聖尊後

誓古弟子無之仍弘顯法印聖尊印可受
 手故彼實勝聖教弘顯渡手然後光助僧
 正弘顯付灌頂受手此灌頂房玄流也然
 弘顯云我處實勝法印聖教雖有之多本
 所持無所用間光助僧正渡手光助又定
 忠渡手然定忠無季無智無下人亡義滿
 將軍時背御意醍醐退出仍實勝聖教等
 退出刻今光明心院弘鑲御方隱密被進
 仍其比東坊安置然當座主滿濟此事聞
 血脈下
 二十九
 石實勝聖教等召公上醍醐普門院令置
 給或時普門院燒失彼聖教等於本寺斷
 絕畢矣

聖尊

弘顯

靜基上人

重受
妙智房

畏私云此批者是此

人之撰欽與書時代符合畢

禪惠心一上人

白毫院長老
極樂寺真言院

心一上人血脈道教親快此親快慈

親玄

內大臣僧正

道教雖無受法大概計受法欽血脈為
 成近如此連之但不審相殘
 畏私云宗大事等慈以印可而令授與
 給畢因茲正流之血脈道教親快相承
 何為疑之乎但於具支灌頂者成賢深
 賢親快相承而已

師傳云親玄僧正通忠息文永九申十一月

七日聖入壇古四歲親快與親玄狀云讓

血脈下

三十

與本尊聖教道具等

目六各
有別紙

右件佛像經卷

書籍等先師道教僧都讓給之內也廿廿亦

愚僧加之而今各別目錄等未所讓與親玄

法眼也但此外於所安置竟洞院經藏之本

尊聖教道具等愚僧存日之時仕目錄悉以

付實勝法印納竟洞院經藏畢讓狀分明全

不混亂者也沒後若雖不慮泐汰出未更以

不可傾動縱雖為同宿弟子不得讓者爭恣

可令進退領掌手仍為後日勒子細之狀如

件 文永九年 廿九日法印判

畏私云親快此時延壽而三年後建治二年

五月廿六日於太秦桂宮院入滅六十二歲

親玄僧正御記云建治二年五月十九日師

主法印御房令移住于桂給畢聊御蚊觸事

有之旁不審相積之間廿二日予令參上了

被仰云近日離寺之間不可謂親疎雖何仁

不可令來之由能申于打捨院家報恩院

依何夏令來給哉予云雖無指事御違例事

不審奉恩之上寺家以外可驗動之由承之

御離寺上者御門徒等於寺家一切不可有

執心一寺皆悉灰燼可成云云此條歎存也預

置各籍等事可被渡他所候哉仰云其事

每力次第也臺皮子事可然之樣尤可被相

計也近來以外老衰了已受病之上者今度

必死定業之由存也而遺跡事心安可申付

之仁都以無之實勝法印事故相國禪門存

日之時可為付法之仁之由雖申定愚意之

所存水火相違之上且又彼風聞真實遺恨

事也灌頂之大事等御迹可申置也凡此一

事者祖師成尊義範勝竟定海等皆臨最後

授之云云實是法之肝心者歟仍代代祖師門

弟其數雖多傳之者只嫡第一人也必以此

結緣生生常為善友知識弘此法永期成佛

竟洞院被授此大事記文被思出哀貴竟也

云云御手水石念珠袈裟許不及令著御衣給

令授此事給了子細別紙註之機緣所令然

隨喜之淚難禁者也廿三日申刻計令歸寺

畢同廿四日於醍醐寺報恩院記之

建治二年五月廿四日末法末資親玄在御判

製作書愚問次親快口次

灌頂記号文永記元年之記實勝入壇之記

元亨二年二月十七日入滅七十四歲又親

快滅後翌年親玄與實勝有契約狀云先師

法印各籍夏御和与无相違者以竟洞院金

九西庄可奉讓之若遍智院三寶院等管領

事出來之時者雖為存日彼、覓洞院金丸庄可讓進之狀如件

建治三年正月十四日 實勝法印 在判

或鈔云親快法印入室寫瓶也此僧正心地柔和法機也然間清瀧權現僧法味日夜朝暮社參勤行不怠神妙人御座實勝法印同法也彼法印北山太政大臣御子公家一番大名也仍北山櫻會時九間客殿色色小袖天井付程重誰隨所望被署候_{三十三}被申人

血脈抄下

三十三

也仍公方樣御意目出度有_{三十三}威勢隨分也爰親玄僧正思彼實勝法印定此法流聖教等任我意管領_{三十三}被存參于桂宮院親快法印被申今度所勞如何樣可有之候哉付法事誰_{三十三}被定候_{三十三}云親快仰御邊一向所憑無余念也對誰可迴思案候即被授大事云遂入滅給然間門跡聖教等取認未茶毗儀式無之此時實勝親快御入滅由聞及北山乘車童僕數輩供奉被參于桂宮院然間

實勝_{三十三}又_{三十三}誰人不及談合親快茶毗奉華禮儀式奉行其後入醍醐地蔵院管領七廿日忌辰滿_{三十三}一迴後公方大法勅使被申不及充右實勝請伏欲遂御願此時親玄僧正實勝方被申_{三十三}御願始御勤候事先以目出度候但愚僧何_{三十三}不預御催候哉又一往御色代可有之不審此事候_{三十三}云實勝返事云サテハ御付法_{三十三}御座候ヤ_{三十三}此事却難意得加樣違乱付我等付法可被疑欽門徒公方樣御存知事也_{三十三}云如此互問答無落屋所詮此事於御前可決之南人被同參實勝法印我付法由委細被申親玄僧正一言免角不申但付法狀可有_{三十三}穀覽進上君有穀覽此上實勝何_{三十三}申_{三十三}無理運也_{三十三}御前_{三十三}負失面目畢其後親玄僧正移住于地蔵院追放實勝法印依之門徒悉奉歸依親玄_{三十三}云覺雄大僧正事此僧正親玄付法入室也雖德行無指事仍開東鎌倉二階堂別當哉

血脈抄下

三十四

依關東下在鎌倉數年醍醐歸寺時世諦
計會依一累宝珠其外隨分聖教二百卷
極樂寺寶物置キテ何時代ニ可受返云
案有之云雖然上洛後我在世遂不請返
空入滅然間當時道快大僧正御舍弟
法蓮院僧正相覓鎌倉遍照院僧正被申
其身付法事ヲカキ候乍恐法蓮院御下
候者憑入可申候關東護持候下所望被
申當時道快云此院家可為付法依何關

藏抄下

三十五

東可下候トテ無御領掌但一累宝珠本尊
聖教未取本寺若爾加樣次法蓮院下候
此等重宝本寺被上テ致尤樣候者可下
申由仰テ不可有子細由御返事有之仍
鎌倉被下向煩極樂寺立使者任文各可
請返仰テ公報約狀カキ事ナレトモ年季良懸過
候間不可渡難澁被申間不及異義此子
細被申永安寺殿仍早早極樂寺被立使
者間不可被返畢仍新束一錢不汰烏

呼力ニク竟允ト云自其以來本尊聖教地
藏院被安置間地藏院門跡法流繁昌
併此本尊擁護也然此宝珠于今在極樂
寺云事傍義也不可為正矣

親玄与竟雄附法狀云讓与地藏院并北
經藏清淨光院并宝蓮院右院家等者
所令安置嫡嫡相承本尊聖教也然間依
為附法之仁令讓与竟雄阿闍梨者也但
於地藏院南經藏者應長元年令讓与房
玄大僧都畢任彼讓狀之旨法流以下令
同心令勉不可畏心且世間出世可奉扶
持之旨可申置彼僧都也房玄若有不幸
事者竟雄可令管領之狀如件

藏抄下

三十六

元亨二年三月六日 前大僧正判

道快大僧正本号道快後号賢快又号聖
快凡此僧正時門跡與隆替古隨分敏榮
無是非庭儀灌頂度度被行竟雄大僧正
寫瓶也雖然無受取灌頂内作法也仍後

奉遇弘顯法印也云

房玄師傳云德治二年四月廿日丁未入壇

親玄與房玄附法狀云讓與臺皮子一荷赤

漆臺右聖教者可安置地蔵院南經蔵也凡

於彼南經蔵安置本尊聖教等在別者可讓

與房玄僧都也但不可取出寺中先祖師之

素意之故也院家相承之要機未思定之若

自餘之仁雖有入室事无不和之儀成乳水

之恩令合終世間出世可致扶持者也愚身

閑暇之刻如此事雖可相計有待之習難知

且暮又替古之勞兼日所申置也彌可勵研

精此臺皮子者院家之眼自也不慮之離寺

或前後相違如此事自出來之時者可被安

置本院家之狀如件

應長元年十一月十六日 前大僧正判

房玄者觀應二年十月十五日入滅

或鈔云此師法機隨分人故親玄僧正深賢

聖教等悉讓與道教相承聖教中多本相添

彼讓之仍道教不共一箇大事此時一具被

相承也當流之事深賢相承凡成賢御弟子

深賢道教也然道教早逝間親快灌頂受法

深賢法印申置云仍相承之余勿論也此事

上各之然間當流道教流全無別異故門跡

付法本典道教親快可列又作法灌頂本典

深賢親快可列仍當流灌頂時道教除深賢

法印影被懸事有之也此當流得意事也就

其深賢法印事彼御房長命自在目出度人

御聖仍金對王院本願實賢弟子分也終成

賢入室付法也其故般若寺僧正自筆聖教

當流相承之不空三蔵所持金對線彼院家

相傳云就中觀賢僧正被授申淳祐自筆印

信此深賢相承此外勝賢僧正自筆四度次

第是皆當流相承上醍醐光明心院被住持

尤規模事也然向勝賢僧正御時臺皮子隨

身聖教等皮子二荷認修法時寸不放身隨

身云之事三寶院不共之夏也今地藏院在

之當流深賢法印朱唐禮二荷被認於細物
臺皮子朱唐禮全軀不足無之臺皮子目錄
別在之可見之德三寶院聖教五百余合也
於當流一塵不殘相承之然間當流門跡辭
如車輪鳥雨翼親快法印時深賢聖教道教
聖教并相承給同一卷不粉失親快親玄僧
正被讓親玄時深賢聖教房玄讓道教聖教
查雄被付屬此時至教等委細交合一方不
足聖教有之副之當流被立也仍當流地藏

血脉按

三十九

院一具不可勝方就中於當流者道教方被
扶持其數度在之其故親快道教早逝依深
賢法印受灌頂一流相承之此事如上各云云
是一親玄僧正御早逝依查雄僧正替古未
練也因茲大法秘法等習事一向清淨光院
房玄被申置其時親玄御狀在之申也但
不及印可等欽是一次當門主道快僧正就
查雄而無指替古對照阿院弘顯委細相兼
之仍地藏院門跡一トモ法流繁昌事代代深

賢方ヨリ扶持被申當流表名其此等三箇度
也餘能可意得事也云云

八祖相承秘密道具之事小野廣澤不同
上小野正嫡也小野中三寶院嫡流也三寶
院中道教大僧都正嫡也云事不及異義仍
秘密道具等親快法印ヨリ相承之条分明也
然親快法印憲深重受時押被召籠遂不被
返遣恨第一也雖然師主御事尤故不及力
自ヨリ以來親快方不被返此又非相承之本

血脉按

四十

意也東寺山門不同上トモ彼八種道具東寺
一家相傳又顯密殊異上トモ乾陀穀子袈裟真
言宗獨傳釋尊袈裟箇難足山我朝不傳何
宗於我朝傳大日如來秘密道具故今世迄
後七日阿闍梨懸彼袈裟祈天下安寧是我
宗眉目也云云

親惠

師傳云号五智院住于八幡房玄與親
惠附法狀云讓与本尊佛舍利聖教事右依
未聞持法力所令相承當流之奧旨也親惠

僧都優曇古之勞宗大事并大法祕法以下
悉令授与畢千餘流之仁不可生疑然間先
師相傳本尊佛舍利聖教已下皆以讓与雖
爲一卷一帖不可他散若無付法寫瓶之要
機者可返納本院家先師之素意如此吾願
亦然也不可餘念之狀如件

觀應二年十月十日法印前權大僧都房玄判

親惠者延文五年五月十四日入滅六十四

弘顯師傳云親惠与弘顯附法狀云讓与本

血脈下

四十一

尊佛舍利并聖教等事右聖教等者地蔵院
法印深賢傳持之法文并遍智院大僧都道
教相承之祕决也既爲兩部之腦膽豈非一
寺之重宝乎然而先師一期之間隨身頂戴
承讓与愚身畢被旨趣見度度書狀爰弘顯
僧都謁先師雖飭具支灌頂道場隨微質重
遂密印許可之傳受求法之懇志不可不感
况亦先師最後遺訓云兩人不可有隔心云
依之宗大事大法祕法并彼聖教本尊等悉

以附屬畢雖爲一卷一帖情守類眼肝者欽
專奉祈朝庭增益可與法流是則列祖之報
恩先師之本懷也若無相承之要機者早可
返納于本院家敢莫違犯爲示後業聊以所
記如件 法印大和上位權大僧都親惠判

文和三年甲午七月十八日

弘顯者則公德二年九月二日入滅六十四
或欽云弘顯法印夏房玄入室寫瓶也此法
印御房近代一人也九初報恩院方誓古然

血脈下

四十二

後房玄入室當流受季刺終付屬當流然
間法印御房房玄聖教深賢聖教並相承等
爾弘顯付屬弘濟時房玄聖教清淨光院民
部卿堅濟方渡深賢聖教今光明心院按察
法印弘鑲方被讓也就中當流繁昌此法印
御時也誓古勝餘人勤修不息世間第一名
僧御座云云

弘濟師傳云延文四年己亥四月十二日金入

壇卅四載弘顯与弘濟付法狀云讓与坊舍

并坊領名田等事合坊一字云云右件坊舍并本尊聖教坊領名田等者悉所讓與大貳大僧都也不可有他妨就中此本尊聖教醍醐之流青目也宛可如守眼肝努努不可他散者也仍讓狀如件法印權大僧都弘顯

應安四年六月十七日

又一紙云申置灌頂道具等事合云云道具目錄依繁略之右道具等者愚身數年之間勵筋力所調置云云雖似狡心努努他取不可借

血脈鈔下

四十三

遺之可如守眼肝者也大略者照阿院置之少少東坊在之門流之仁傳法之時者不可怯惜之儀急可借渡之為後日所吞置密教坊并東坊此狀也乎不可有違心若背違命輩者非予弟子清龍權現八大高祖速可加治罰給者也仍為後日所申置之狀如件

永德元年三月廿一日

弘顯判

弘濟者明德四年二月十日入滅六十七或鈔云弘濟弘顯法印付法也此兩能書

御座故事相書籍等新調書置其外近代六中中不能記之

堅濟

弘鏐師傳云至德二五十二月十三日鬼入

壇廿四歲弘濟之附法狀云地藏院深賢法印法流事申置弘鏐律師處也於寺家隨分之聖教也寺家之肝要法流之青目也佛舍利并本尊相副之求代所令讓與也如護已命可令護持也此本尊聖教等事故房玄

血脈鈔下

四十四

法印以求聞持法力為一流之正統今弘鏐一千日修歇都法悉地欽仍守護聖教而可致替古鑽仰者也讓狀如件

一當流灌頂道具等更當院家中不可出若無秘計不叶者山下清淨光院近可出之者也堅可令制法也一京都光臺院敷地事申出安堵可管頌之攝律國平歇是同可知

行之筑前植木庄半分者道祐僧正法流申置問相副之了今平介當

院可管能能可分別之者也

明德三年十二月廿九日法印權大僧都弘濟判

弘鑲者應永卅三年五月三日入滅六十五

或鈔云弘濟付法寫瓶也按察法印弘鑲名

予照海灌頂師也深賢相承聖教本尊等一

塵不失相傳之誓古隨分而聲明筆藝等其

外才竟事教兼才人御座仍道快僧正常以

御參會密談有爰愚僧海照先年高野籠居時

依不慮冥鑒俊海僧都於彼光明心院當流

重受時馳參奉設灌頂畢付之別儀御芳情

中中絕言心處也云

四十五

私喜 師傳云應永廿八年辛丑十一月廿七日

入壇弘鑲之付法狀云讓与本尊并佛舍

利聖教等事右件聖教者代代秘決相承法

文也豈非一寺之重宝乎仍愚身一期之間

隨身頂戴事宛如保身命然而相副本尊佛

舍利取令付屬弘喜阿闍梨也雖為一卷一

帖以不可令他散可如守已眼肝彌致替古

專可紹隆仍讓狀如件

一灌頂道具事不可出山中且雖相似狡心
恐粉失故別而可申是又代代祖意也

應永卅年九月十日 法印權大僧都弘鑲判

弘喜者寬正三年六月九日入滅

弘典 師傳云文明十八年十一月廿九日入

滅八十二歲畏私云密教院者為松橋之法

流仍不及入壇具支之作法以印可而被預

置之奈不及附法狀欽此師殊為不動之持

者三時之護摩一万三千日修行之豈其無

靈驗乎生生加護之本誓能得其趣者欽可

尊可貴矣其本尊至今在本院可謂希有矣

私宣 師傳云文明六年壬午二月廿八日金入壇

廿一歲弘典之付法狀云當流之大事等從

弘喜法印令相承通悉以授弘宣律師訖仍

附法之狀如件

文明十五年十二月十九日法印權大僧都弘典

弘宣者永正十一年九月十七日入滅六十一

俊雄 師傳云永正十三年八月二日入滅六

十二歲 畏私云弘宣依無付屬之弟子被預置于俊雄也仍不及附法狀欽此俊雄者東寺寶善提院也為地藏院覓雄方之末流而依為同門也是則醍醐寺依無同門不使法流被渡他門也未資可知其趣者也俗姪等追可考之

亮惠 師傳云永祿九年十一月十八日入滅

七十七 畏私云此僧正近代名譽之祖師也野澤兼季事相之相承寫瓶之法器也先

血脉鈔下

四十七

師僧正尋常稱義甚深為口實者也可仰可貴俗姓樹下殿山之鎮守山王之社務之息也諸餘之德行他日可尋之記而已

亮淳 姓源氏一色兵部大夫國朝之息永祿

四年 三月廿六日入壇 廿五歲

畏私云依預之法流被還于本院而不及附法狀欽聖教本尊等元來傳持之故也其上常隨給仕之修季傳授面受盡善盡義相承之法機誰成其疑乎且復賜壽像之自

讚云亮淳十歲出俗塵入窸室十三歲而

髮十四歲而季十八年而受金剛界

大法十六而受胎藏界大法并護摩密法四

度苦行此年終廿五歲而隨先師僧正入傳

法灌頂之密壇卅八歲奉遇二品太王任助

蒙傳法灌頂聽許四十一歲而開傳法密壇

於桑開五十六歲而開廣澤內庫於升園小

野開壇度廣澤一度野月照迷衢澤水洗

心垢亮者照察天道不可行非法淳者度量

血脉鈔下

四十八

地理不可致非礼依恭畏所望書 畏私云

此壽像者病中七月廿三日賜之其後八月

初旬於仁和寺御所善提院皆明寺為御流

之相續受者而如次兩日開傳法灌頂之密

壇而付法功成矣然則廣澤之開壇第三度

也求聞持之修行第十度聖天浴油之修行

數十箇度諸餘德行不遑毛舉仁和之御法

流相續之故為 御門主之戒師而奉授十

八道之次第以故終焉之節今補真光院

是則先真光院以為灌頂之弟子也。為其灌頂之賞被任權僧正皆是密法傳持之功德。修學練行之令然者也。李_ニ世皆稱野澤之再興矣。東關西國之李徒入三密密室而蒙許可灌頂。可者幾千人。于法水之餘波漫漫哉。可貴可尊矣。鄭記于其萬之一德而已。又或時謂予曰。我少自醍醐到東寺而隨師修李。往來風塵日日更無一人之僕師主。若有客而門外院內供奉之人數多則敢無_レ可。

血脈錄下

四十九

置草履而失之。多_ニ以故。以新草履懷中尋常辛勤到歸食而李道如是。今也見世間之流輩飽食暖衣而僕從衆多也。却不志其修李何乎。無菩提之道心也。嗚呼密教之滅亡為之如何。末資不可不慎。云此言于今在予之耳。而信之仍記之而已。

慶長七年十月四日入滅六十六歲

亮濟

光臺院

恭畏

雒陽西院人也。幼師事太秦廣隆寺利

全阿闍梨。薙染具戒矣。天姿聰明。好學惠山。惟杏親戚。好也。從而讀詩書易春秋。咀著述。文雅英。故發名外李。既長。謁東山醍醐入僧正亮淳阿闍梨室。研究最上瑜伽道。僧正親鑒神儀。加慈諭。兩部四度密行八百有余日。忽排金對胎藏大悲曼荼羅道場。受傳法灌頂。職位遂可聽許之節也。朝鑽暮燧其勤。及古修李愈秀而德業日昇。果道教一流之

血脈錄下

五十

箱座累祖眼肝之籍典祕密。與旨點滴無餘得。面授寔寫一器水也。書傳伽梨金杵以為法印璽矣。天正十九年春三月任律師。文祿二年五月轉任少僧都。翌年霜月轉權大明。年三月輔法印慶長開元春去太秦舊居住。西山法輪是地。道昌僧都卓錫之後。由來尚矣。佛宇廣額而草堂為丘墟也。師墓再興。願而拂秦蕪夷土地。一日山傍有奇氣穿發。此地而乃得石寶塔高一尋。水輪中有金銅法

輪塔膠漆，苜蓿佛舍利一裹，蓋寶生三摩，月形予師得之，為修造成畢，祥仰為寺鎮也。營造勞績，大厦功成，日延三寶院准后義演僧正，為新造供糧，導師修大曼荼羅供其儀式，巍然也。惠日再照明星重現也。元和年中，就僧正禪室，稟澤密灌，被傳法許可也。既一掬野澤之西水而修練，追日也。其先慶長九年，夏炎旱逾旬，不雨，師當祈雨，撰修水天供期，一十七未日，天油然而雨，震雷不惜響，普天潤。

血脈錄下

五十一

也。明年又大旱，擬例法雲，即日甘雨降，四民扇猶父實，以此法者一宗之規模，祖承之秘藏而往聖為難，昔日範俊其猶病諸當茲，濁世靈驗揭焉者，其斯兩僧正乎？不限唯此一事，四種隨願聲，與響應矣。如旛出定穩座，建法幢，啓迪學者不倦，故屢發玄徒往來，臻率誠廣智三千也。匪啻洞密乘兼錯綜，衆教遊於南京，李東大于華嚴三論，西大于毘尼鉢，雷羯磨百行，威儀知而不止，李與福于唯識。

搜相宗淵源傳，且因內二明也。性悍剛而不厭遠遊，履金峯萬城嶮，翔士富白山峻，更遠巡于四國，攀太瀨，嶽名山靈區，參徧參也。慶長間，詣藝州嚴島明神，修求聞持法，一百日社內有平清盛入道願書一軸，語高旨深，靈魚漣漫而時人昧，看見師披卷定文字，可否並著和解一卷，國人奉為多能也。自是泛渤澌，適筑潛雖有欲入大明志，氣時機未稔，槎棹有導而淹留，日隅薩間，五螢於是九州，緇。

血脈錄下

五十二

林扣問瞻仰而稟密灌蒙指授者，不勝記也。日刈古寺有五輪塔，婆高丈余，日曛天隕，則猛火燦爛，其石燃光焰數丈，照隣簾其風大，中有小蛇而不變，夏冬常蟠屈矣。土人傳曩時此寺有小兒為情惑，害是其石也。故鄉人號之兒石，如斯蓋迨三百年於茲，或請恭畏加持之師到塔前投土沙三粒，住毗盧太定持念數數，自爾以來小蛇忽去，猛火再不燒，實智火心水之變，法力不可不仰也。昔李后。

三藏咒、芒山巨蛇、拔蒼生苦、今降石中、蛇扶
闇道、罪豐神力、加持之功、化益惟同也矣、隅
人有文之禪師者、李宗晦、菴恢弘、儒教蔑真
乘、師製徵詰問答、各三卷、推邪歸正、故名邪
正義等、行于世、自甯鎮西、佛日赫予、密徒叢
茂、西海化終、還洛、法輪修歡喜天、供都九十
四座、默都護摩三時、一千日域中、受許可密
印者、一千二百余輩、不具記也、良惟博達、潘
哲、名溢中花、譽及蠻貊、豈非一世高邁乎、晚
年遁法輪、隱高雄山、乃寬永元年也、於茲四
未、夢業者、又如雨足、同七年六月十二日、奄
然寐也、春秋六十六

血脈錄下

五十三

御室宮一品大王欽若于

睿命

崇禱贈權僧正其

粹曰

法印權大僧都恭畏者、闕野澤之奧、
贖積事教之修學、耀法燈於都鄙、傳
印重於遐邇、寤寐歎法陵廢、造次勵

道之紹隆、在澆薄之世、秀羣類之中、
故稱遺名、被贈權僧正來、際更不可
准例者、
惣法務一品宮教命、倣也、依執達如
件

寬永七年八月十二日

血脈錄下

五十四

御所方三寶院血脉次第

勝賢守覺法親王道法親王道助親王道深

法助性助隆澄盛適良令靜基

理性院血脉次第

賢覺

号理性房法眼三密房舍兄重受先受

賴照或記云母為祈生男子參詣熊野御

山道宿夢見為含蓮花一葉飛來落入懷

其葉大二尺許也光明照耀入心中異香

血脉次第

五十五

芳馥

云夢後解人云可生聖人

云其後孕

承曆四年誕生

云付法廿四人

寶心

号上野阿闍梨籠居高野号淨蓮房

承安四年九月一日入滅八十三

賢信号大夫阿闍梨後改靜聖上乘房

理性房甥也大藏卿宗時息

乘印

成密房勝因

行願房覺舜

明察上人

真空

迴心上人

良令靜基

畏私云木幡觀音院欽或号木幡上人

又号迴心坊上人欽薄草次木幡上人

口傳云者此人欽

覺雅

自覺房

真空良令靜基

宗命

号理性院僧都内大臣宗能息

承安元年七月十日入滅五十三

宗嚴

大僧都

行嚴後觀蓮月

上濟心良令靜基

定兼了真良令靜基

血脉次第

五十六

金剛王院流血脉次第

聖賢

号三密房阿闍梨久安三年正月四日

入滅六十五于時源運僧都

付法廿三人

仰云此金剛王院始也如法有智人也行

法之時神分被讀理趣經

云畏私云土去

鈔云師云三密房申其自宗秘密顯露只

世間喻貴女与賤妾相似也惟帳内嬬嬬

自行少被養深窓有彼質人不見又不知

只思遣許也下賤輩振舞事乃九卑之故

是見^{イミ}不思然而其根源皆共人倫也其樣宗大事祕傳口決人輒不知又不傳如彼貴女可思然而尋根本者自外只今非出來事日來習傳之內或又異說屈曲也貴女賤妾皆人倫古^{トモ}今^{イマ}思習之故也誠有其謂^ミ又喻也^メ被示也^云

源運

号金耐王院僧都又云攝津僧都淡路守輔明息治承四年八月十八日入滅^卒付法卅六人畏私云土去鈿云師云攝

五十七

五十七

津僧都源運後白河院久被召仕奉公者也又寶心阿闍梨新大納言成親相憑祈^ナ申^ナ多^ナ或時成親卿問室心云當時召仕源運何樣僧知法者欤^云寶心阿闍梨源運謗^ナ仍成親於法皇御前寶心中僧候隨分知法之者候御祈仕者候源運^ナ御祈非可仕之者候^ナ養^ナ多^ナ法皇御勅答寶心^ナ心^ナ旁^ナ分^ナ被仰下^ナ其後源運参院御所^ナ以事次醍醐室心云者有之欤^ナ

躰者^ナ有御尋之時源運御返事云^ナ謙尤修寺者^ナ真言隨分習傳者候申上^ナ即叶般慮^ナ寶心謗源運違御意之間官途^ナ不進其後成親逢事彌無沙汰^ナ尤也^ナ其付貴賤人^ナ不可謗之由示也^ナ

賢海

雅西實賢隆澄良舍靜基

勝尊^{實海}實傲^{勝圓}

如實忠融良舍靜基

良胤良舍靜基

五十八

五十八

尊源惠達房遍融

良舍^{靜基}

富仙房

理真房

慈信

中納言為通息

亮惠

朗澄

石山文泉房畏私云實歸勤勝賢僧正^二入壇受法見^ナ

勸修寺血脉次第

範俊

号小野權僧正又号鳥羽權僧正每福

寺權別當法務一長者仁威威儀師子寺務
八年天永三年四月廿四日入滅七十六

畏私云土去鈔云師云範俊僧正依白河院
仰高野御室奉授法事有之自仰彼僧正有
御尋云仁和寺宮受法事拂塵欽御返事云
大旨奉授了但所殘法猶候自昔阿彌陀峯
云其法候之間無尤右不奉授云其後御室
御院參之時院有御尋云御返事大旨授
了但何樣存候云云少不授之由令申

康平下

五十九

給其子細範俊申狀不相違其後院仰範
俊正直者云又師云彼僧正殊朝家
被召仕申依有御夢想也其夢若何御慎事
出來之時召竹人可被行御祈之由云此事
有御不審召廷房卿有御尋之時申云推量
此更仕可被召仕範俊欽存也申範竹俊人
取竹人被御覽也計申之間其時云參籠
被憑思食者也又小野曼茶羅寺範俊僧正

被管領而義範相論之故有存旨欽此所
讓御室仍于今畱仁和寺遺恨事也範俊僧

正年來系惜思慶深云僧有僧正閉眼之
刻院宣稱云僧正号僧正申狀云正威曲節
出來欽之間種種有御尋於各籍者付屬良
雅阿闍梨之由院被聞食之奉授法於宮之
儀云各籍同可奉讓之處無其儀之条有
御不審件後見法師定知子細欽云雖被責
問無申披之旨仍被流罪了結句下給正威

康平下

六十

之間責殺之由有其聞又云密事良雅付法
事僧正存日之時被委付了書籍皆云云
讓与之臨寂後云令沙汰者若違乱步出
來云如此被定了誤寂後不可來之由依有
遺言臨終之不行向云云申欽而如案有
沙汰之間被尋子細之處申此樣之故道難
了云已上土巨鉏 雜秘鈔云師語給云鳥羽
僧正後見慶禪旁擣虛誕稱白河院御說示
僧正号僧正申狀觸正威如此之間以小野

奉讓高野御室了此事不出來之時者世間出世皆悉可讓申故大僧正之支度也僧正滅後院御謔慥所御覽置之各等無之先被問良雅良雅申云一切不知給獲藤以前全不罷赴閉眼之時不惟逢無其隱事也仍各等事全不知之云云又被尋慶禪之處初申不知之由而下給正威被責問之處大師於唐所投本朝給之三鉢自或所地中堀出進之仍弥有其疑重被責之遂於和別被責敏了

中興御事

六十一

寂密事御室可奉讓之儀出來之後密密寂要書令撰与良雅了其後故不令有病為免如此之疑也仍良雅所得之各全不返進院也皆奉讓大僧正御房了已上雜抄鈔或鈔云但醍醐方勸修寺之法流脫柄上申更雖有之彼流正嫡不爾其故勸修寺寅時仰信寂秘事在之其故嚴覓所勞之時良勝數日者病其志不淺間或時嚴覓被仰云數日給仕志之至所感恩也然間當時管領之內

水田少少可讓与云云良勝申云所詮如此給仕申事只不思世間助偏宗大事等若授給事言上存許也云云此言感只今何時被仰上寅時也答申仍即時被授是寂極秘事也寅時被授故寅時仰信云也自爾以來出雲大僧都榮然至相承無子細然間寬信法務御房正嫡雖受之終焉時箱封付入滅了仍念範行海不知之不被披見者也爰光明舉寺殿榮然御受法之時被仰云勸修寺與

出服御事

六十二

行此時也仍法務御房封付置聖教可披見云云榮然尤爾事候被披之尤規模事也然間醍醐方勸修寺脫柄云事雖有之非正嫡正義欽但彼流事大事雖相承之委細不能所知追邪正可尋之云云

大師真雅源仁益信

聖寶如意輪化身醍醐方号尊師

觀賢僧正仁和寺般若寺住上醍醐中院建立

淳祐石山内供石山良辨僧正建立處也御隱

居大師サリ奉僧也

元景延命院大僧都一期御所作法花念佛持

者也寂後指西方飛行給

仁海号小野僧正小野曼茶羅寺住又号雨僧

正宇治關白殿御歸依太元明王法修開

白殿調伏奉時彼明王放矢足指奉受助

人也云云

寮圓入道琵琶上手号大理趣房賴照号小理

趣坊云云

血脈鈔下

六十三

覺源号官僧正定賢法務

成尊僧都小野權僧正云小野曼茶羅寺住後

三條院御般依也入壇之時寮圓教授

範俊号鳥羽僧正非寺法師勸修寺始也

良賀阿闍梨覺祐僧正增俊隨心院流

亮法親王付法宗意安祥寺流

嚴竟小野三流是三月出寬信法務實運明海

勸修寺流

畏和云此四人号四天

理法

理明

文泉

其部嚴信

星遍口云寬信才覺優長人行儀頗物狂

也炎天露形惟當前緣行道云云知法雖不

及尤右依知此事世以太不甘心欵又云

修李勸李曉天沐浴被就寢云云

類秘鈔類顯鈔彼法務作云云拾要意云然

血脈鈔下

六十四

寬信法務崇德院御宇自保安之比誓古

破膽起先師跡參故御所薄香御聖教蒙

免許書渡之畢未治為後七日阿闍梨參

御齋會其時名有之寬遍僧正難彼句

由還聞之寬信云恐可訓懷手者哉云云寬

遍強如此非可謂之仁只無顯宗許也自

元寬遍與寬信超越事中惡而相同胡越

義範号遍智院僧都

賢竟兄理性房

勝覺三寶院權僧正

聖賢弟三密房金剛王院

上海靜慶殿尊西大寺思融上人

禪惠

嚴貞金口海圓房

定海三空院大僧正 三空院 松橋僧都

實運勝賢本名憲字也配流後賢字改也通憲入道息也

實繼

初付弟早世

成賢

兄第三付弟也

範賢

弟第二付弟也

靜遍

僧都

道範

實賢

守覺法親王北院 御室道法道助道深

六十五

法助隆澄良舍靜基

成賢

思融上人良舍靜基

深賢

道教

親快實勝心上人 鐵倉極樂寺禪惠第二祖開山人

親玄來海 忍性菩薩

壽仁

憲深光賢思融良舍靜基

實深覺賀憲俊

定濟定勝道性

實運乘海勝尊養海

勝賢成賢靜遍

實賢

勝尊良舍圓勝房

勝圓定仙養如房

定清加賀僧正能海法印

隆澄良舍靜基

如實思融大教觀乘房

良胤岩藏 上人良舍靜基

佛乘房

覺日房

了然房

良智顯達房 宇都宮不動院壽仁

覺濟隨心院僧正

成賢賴賢意教上人 高野證道房

光寶願行房 號憲靜上人 樂寺開山

守海

慈明房 号良賢上人

定憲

妙性房 鐵倉金澤 補名寺開山

宗禪

覺宗 慈心房 國月房 理國房 阿性房 祐性 兼海壽仁

德合三寶院流勝賢三流分

聖賢源運泉海賢海

嘉惠雅西 智定房

實賢

勝圓

勝尊竟濟

隆澄

中興寺下

六十七

定清

空觀 上人 思融 良舍靜基

大圓房 上人 良舍靜基

理性院血脉

覺鏤 正覺房 高野傳法院建立

賢覺

寶心賢信乘印勝因覺聯 明家上人 法阿後高野住

宗明宗嚴行嚴

定義 了心 十玄上人

俊觀遂月 上人 高野住 藏心良舍

德治二年十月十五日於東山白毫院馳筆畢

嘉曆三年 辰十月廿五日成時 了筆師生年五十三歲

壽仁

至德元年 甲子九月九日交合畢此血脉者丹別与仇郡

禪定寺禪勝房本也依見及寫留了

金對佛子弘濟

六十八

六十八

或鈔云憲淳僧正夏此師竟雅法付付法正嫡也此人雖平僧也被補僧正其比後宇多院御宇也此院又号大覺寺殿吉野宣帝御舍兄也然院幼少又憲淳幼少朝暮交成遊時折節戲終以尤與齒院御手僧正食付給齒跡于今有乏院常御物語有令咲給云然後相牙御生長仍或時院宣云朕灌頂被授候云僧正申云自今以後俗家御振舞不可候者可授申余可有御罰狀云云院尤可然御罰狀有灌頂受彼御罰

狀于今報恩院有之仍_レ被冠被行御灌頂兩
度有之一度堂上灌頂也於報恩院被行我衆
八口也一度庭儀灌頂也於東寺被行我衆八
十口也付之俗態受灌頂其例有之然御尋有
之僧正即檢申云唐玄宗皇帝俗形不空三藏
御灌頂有之然間唐朝彼例今也朕何不介
耶御灌頂受_レ凡院廣澤正嫡獨步無畏御事
也剎又入小野室報恩院法流御信仰有之事
無雙旨趣也仍如大師御遺告彼院遺告被記

血庫下

六十九

也是_レ五箇条也予於本寺拜見了
憲淳僧正付法事御弟子隆勝道順二人也於
中道順大覺寺殿御氣色日出度召御前常_レ在
候仍君内内道順付屬事思食然僧正御意隆
勝可信者思食付法事被免然間面道順付屬
事申置由後宇多院被申内内隆勝僧正被付
屬也然間僧正竟食伴道具聖教等終大覺寺
殿被召出_レ竟也相攝不可出經藏御所用候是
行幸可_レ申被仰付經藏事一向隆勝可守_レ然

遂五十一歲德治三年_{戊申}八月廿三日入滅也
仍憲淳入滅後大覺寺殿仰云道順以聖教等
為披見被_レ召然隆勝不進先師掟由深被申然
間隆勝大覺寺殿御意背仍京若官別當我不
被補此事隆勝無念竟食鎌倉被下其比先代
御時關東護持可致由被申一流正嫡當君御
意背故理運我_レ被召上仍隆勝偏關東御指南
仰彼別當我可_レ申給由歎被申先代云如此事
建連事先月待程予_三伊豆別當我_レ被補
是三千貫所知也何樣在鎌倉_レ候若官別當
可_レ申立被仰下了仍隆勝背院御意鎌倉下向
之時付法舍弟隆舜被讓然間道具聖教等眼
肝被取上醍醐尺迦院被移如此後隆勝鎌倉
被下于時又道順追鎌倉被下其時隆勝被申
院仰候法流愚僧被付法_レ候_云隆勝云院補翼
十六為付法罵_レ愚僧不被請道順付法朕補翼
等被仰無謂不可_レ叶申故不及力道順又上洛
所簡殘不重室聖教等計拈取持之仍彼八祖

血庫下

七十

相承道具自餘聖教等隆舜方相承仍彼聖教等其後水本御經藏移于今住持道順智惠廣才入院御氣色能也隆勝号尺迦院僧正御等五十一歲正和三年寅甲十一月廿六日御入滅也隆舜名報恩院法務生年七十四歲久和二

七十一

七十一

道具申八祖相承道具也被召出觀覽可有之也奏仍經深法印方持參可申被宣下于時法印申云愚僧灌頂被受候尤持參可申奏帝嘆奇怪者也上度度宣旨雖被成遂不持參仍違勅宣旨可成云夏風聞于時法印歎云今度愚身一大事是也所詮參御前理運由申一定流罪死罪被行欽法滅亡此時當我若空成聞此道具急火爐可投我五尺形骸併清瀧奉仕只一人二条内裏參内其時帝嘆宣件道具持參

七十二

七十二

云持參不申奏答度度背宣旨条不思儀者也嘆云法印被申勅宣雖恐入候彼秘密道具事灌頂成道時外無御覽事候君未灌頂云事無御存知如此申子細觀慮背候只今御前兎角御討可有之不憚申云帝云奇怪法師也座被立了法印尤立座事悅也罷出本山被飯清瀧悅被申此法印道具被進定北關可被籠尤可然事也于今申傳了彼道具今上醍醐尺迦院別土藏建江被安置然傍流人件道具隆勝鎌倉下向時隨身於関東粉失云加樣義非正義設又本流人申彼道具所在隱密故如此且用意欽非實義所詮纂要鈔十殊勝中道具殊勝立云此等之事也水本僧正隆源事當報恩院門主御座此僧正御房廿余歲時不辭帝行功殊勝人也一夜百首歌詠給名譽歌人也將軍以下此僧正德行不存知人無之已上實深付法次第大槪記之定濟僧正付法門跡付賢俊僧正事尊氏將軍

御持僧依渴仰無比此時醍醐座主也其俗
 繁茂無是非然間尊氏執紫下向時隨身被申
 其時執紫引乞食修行者有據京上洛應當宮
 御幡申下執紫下尊氏被進仍九列勢引幸上
 洛惣彼此遂寸不離尊氏隨身如此忠節無二
 也仍醍醐座主成子又其外諸院所領等悉被
 知行仍其比並肩人更無之賢俊僧正弟子實
 濟光濟二人也實濟申安樂光院長老此律師
 也光濟賢俊付屬醍醐座主也光濟次光助僧
 王可為座主處法流相續義未無之仍光濟授
 光助雖可被補座主光濟自元無誓古事不叶
 仍光助奉遇弘顯法印授与之義有之然間法
 流地蔵院流也然被補座主了次光助座主後
 定忠座主時法流事雖可受光助光助法流地
 蔵院間定忠思非報恩院流失定濟本意不受
 光助異門雖黑衣人也隨安樂光院長老實濟
 受之此時改黑衣入正道門然此定忠無正躰
 人也依之背義滿將軍御意醍醐離山仍當座

主滿濟受法時定忠退出故又被受實濟然間
 光濟御流光濟代斷絕畢此實濟雖為黑衣人
 誓古故一兩度被授申座主事實慮令然也何
 可誓古者也

報恩院補号事此院家下醍醐炎魔堂向也本
 号極樂坊被安彌陀三尊故欽子時成賢僧正
 云三寶院勅願院家也滅後諸弟子等於此坊
 各各加修理而可為遺跡云畏私云其意趣具
 見于成賢之傳矣後改為報恩院是則諸弟子

保遺誠令修治之故也而已將又實濟僧正元
 來律僧欽之事奉御門跡義演法務處御答云
 此更誠不富也旧記等多分為當寺之修學者
 御修法伴之交名等有之有何故被住律寺云
 松橋法流事先此院家之海僧都之時阿彌陀
 堂造後戶南方經蔵攝一方聖教安置一方本
 尊道具等被籠阿彌陀堂堂院家中間履形池有
 之此觀八功德池彼院家後松木橋渡之仍号
 松橋也然間彼院家建立事凡三寶院御願所

非我門徒為座主人入替住故非弟子人聖教等被見事失本意竟召別私被建此院家也仍三寶院聖教二分我自筆分擇取一海御房讓代代相承分實運讓與於院家三寶院渡勝俱院松橋已講御房渡然間松橋與三寶院如車兩輪鳥兩翼一箇重書厚草子草本松橋安置清書本三寶院被安置也云云元海大僧都院家造畢後為彼御堂供艱召請定海大僧正被行曼荼羅供一海已講御房童躰也大僧正御覽此小童法器者也可為予弟子由所望不及左右不可有子細被申仍於大僧正御前令出家四度加行等偏彼御計也其後久安四年五月廿一日入壇我衆八口也元海其時我衆御座仍教授并護摩兼行也然次第重位等悉被授畢久安五年四月十二日大僧正御房御入滅七十六歲也元海大僧都保元元年正月比不食御所勞出來雖經數日無少驗或時被仰已講御房云此

所勞于今難平愈定大事出來欽於當流唯一大事有之對大僧正御房既雖遂入壇若我不知大事有之欽又汝不知大事有之欽隨予重受一一可有傳受云云爰實海兼自有入壇之所望仍同五月晦日實海與同壇令遂受我予先已講御房入壇也此時別無教授隨阿闍梨命受者自作之次實海入壇時一海教授也同壇時以一人受者為教授事上古末代難有受也又自教授之始也云云同八月十八日入滅云云

一海已講御房事厚躬親王苗裔也顯宗花嚴宗碩德也一宗之替古隨分事也已講稱事三會之講師勤其一則稱已講也三會者維摩會法華會毘盧勝會也已灌頂者東寺結緣灌頂遂小阿闍梨之位也此御房其比之人達三三コ腹鷹申其故云云ハ海鳥鷹山鳥也然云云三コツケル鷹子海自在得山自在得故彼已講定海與旨悉窮又元海源底參予故兩流能得云云云淨真法印事成賢僧正甥也仍初三寶院替古

後松橋室入此法印時代三寶院鈔鈔簿草子
等傳來書云

或鈔與云今此鈔者奉遇松橋正統上醍醐寺
慈心院俊威法印之直弟乘琳院僧都俊海而
予受法以後十余年之間蒙雅訓所觸視聽大
概記之兼又奉遇弘顯法印孫弟光明心院弘
鑲法印重受以提撕粗載之云云

應永三十二年十二月日權少僧都照海判

七十七

右血脉鈔並間流布之異本區別於中當流
所用之一本寫出之其外加以或記而據以
諸卷鈔者皆題其書之名而書之若又加私
義者加鈔字而稱畏私云也或記于醍醐
寺光庵院所持之古本也或鈔者當院所持
之古本也古本之諸鈔雖多教本吳義多端
於報難治定之歟且日多年不傳已今唯多
見闕其殆憶記其餘而勤焉三帖猶有云過
多未資改之勤焉三帖是且小冊之流派也

右廣澤之血脉未見其教本他日感得必
可吞之而已辨曰密宗血脉鈔矣

元和八年二月念有八

金對生法子恭畏

寬永八載辛未中秋上澣日令入梓焉

於洛陽四奈寺町 茂右衛門尉

盧谷懷成 編

日本國大師一覽

明治十三年（一八八〇）岡崎刻本

據明治十三年（一八八〇）
岡崎刻本影印

自序

夫曰本國者 伊弉諾 伊弉冊之二神產之而傳 天照皇以來 神孫皇統連綿 帝位不復移他姓而信賞必罰撫育萬民之仁政立焉抑大師者王公大人之模範也亦是有大德行爲衆所師焉山家正統宗門尊祖議曰貞觀八年乃至賜傳教慈覺二大師謚號本朝大師號權興于茲矣七帖見聞一末曰一內明二曰明三聲明四醫方明五工巧明仁王經云內道論外道論藥方工巧咒術故義云不具五明者大師號及三藏號不與之云云摩訶止觀五之

傳通緣起履歷覽

序

一卷曰自匠匠他兼利具足人師國寶非此是誰矣同弘決云解行具備堪爲人師是國之寶矣瑜伽師地論八十二卷曰大師三義者謂能善教誡聲聞弟子一切應作不應作事故名大師又能化導無量衆生令苦寂滅故名大師又爲摧滅邪穢外道出現世間故名大師矣同論曰畧有大師五種功德一於諸戒行終無悞失二善建立法三善制所學四於善立善制中隨所疑惑等皆能善斷五教授出離矣方今一新罰惡人賞善人其政公明盛大豈特當世哉推及徃世故楠公太閤等各得叡號臣僧宗祖亦

辱大師之號不論上下貴賤至樵漁者之類悉皆蒙雨露之恩實 朝廷之洪恩也 獻慮之至大難以言語述合掌再拜猶有所不足盡故今撰曰本大師之履歷報大海一滴之志而已

明治十三年五月

蘆谷懷成敬白

傳通緣起履歷覽

序

目次

清和天皇	勅謚曰傳教大師
清和天皇	勅謚曰慈覺大師
醍醐天皇	勅謚曰弘法大師
醍醐天皇	勅謚曰智證大師
花山天皇	勅謚曰慈慧大師
後光明天皇	勅謚曰慈眼大師
東山天皇	勅謚曰興教大師
東山天皇	勅謚曰國光大師
東山天皇	勅謚曰理源大師
後桃園天皇	勅謚曰聖應大師
仁孝天皇	勅謚曰法光大師
今上皇帝	勅謚曰眞真大師
今上皇帝	勅謚曰承陽大師
以上	

傳通錄起履歷覽

卷之

一

凡例

一文中引書題名年号若佛滅ヨリノ語毎件同事

ノ類ハ印ヲ附シテ省略スル左ノ如ク

㊦ハ元亨釋書 ㊦ハ叡山大師傳

㊦ハ本朝高僧傳 ㊦ハ野山名靈集

㊦ハ異稱日本傳 ㊦ハ王代一覽

㊦ハ大日本史 ㊦ハ天台霞標二篇

㊦ハ扶桑略記 ㊦ハ兩大師傳

㊦ハ梨窓二筆 ㊦ハ唐房行履錄

㊦ハ四大師傳 ㊦ハ慈眼大師傳記

㊦ハ倭漢歷代備考大成 ㊦ハ別傳

傳通錄起履歷覽

卷之

二

㊦ハ傳教大師拾戒妄說辨

㊦ハ山家正統宗門尊祖識

㊦ハ清和陽成光孝三朝國師智慧金剛

智證大師年譜

○千何百何十何年ト有ハ釋迦佛入滅

ヨリ此人ノ誕生日マテノ數量

因ハ明治十二年ノ明治十三年ヨリハ毎年一

數ヲ加増スヘシ

一一名ニ就テ七段ヲ區別シ數番ノ問答一往ノ

掇證ニセントス委キ事ハ其原書ヲ披閱シタ

マハ

日本國大師一覽

三河 蘆谷懷成集

一 徽號 二 姓名 三 在地 四 生國 五 師匠 六 示寂 七 典據

傳教大師 最澄 江州比叡山 延曆寺 東漢獻帝建武 父百枝 神護景雲元年 八月十八日生 佛滅而後 〇千七百十六年

貞觀八年 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

清和天皇 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

慈覺大師 圓仁 江州比叡山 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

貞觀八年 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

清和天皇 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

弘法大師 空海 紀州高野山 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

延喜元年 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

醍醐天皇 德宗 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

智證大師 圓珍 江州 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

延喜五年 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

醍醐天皇 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

慈覺大師 良源 江州 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

文政三年 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

傳通緣起履歷一覽

卷之

三

卷之

四

慈眼大師 天海 武州東叡山 興隆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

慶安元年 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

後光明天皇 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

興教大師 覺鑒 紀州高野山 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

元祿四年 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

東山天皇 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

圓光大師 源空 京兆 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

元祿十年 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

東山天皇 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

理源大師 聖實 城州 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

寶永四年 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

東山天皇 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

聖應大師 良忍 大念佛寺 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

安永三年 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

後桃園天皇 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

法光大師 真雅 京兆 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

文政十一年 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

傳通緣起履歷一覽

卷之

三

卷之

四

慈眼大師 天海 武州東叡山 興隆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

慶安元年 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

後光明天皇 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

興教大師 覺鑒 紀州高野山 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

元祿四年 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

東山天皇 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

圓光大師 源空 京兆 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

元祿十年 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

東山天皇 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

理源大師 聖實 城州 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

寶永四年 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

東山天皇 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

聖應大師 良忍 大念佛寺 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

安永三年 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

後桃園天皇 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

法光大師 真雅 京兆 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

文政十一年 延曆寺 〇千七百十六年 佛滅而後 〇千七百十六年

見真大師	親實洛陽一名本願寺	洛陽朝臣有範	慈國入室	弘長二年二月廿八日	傳鈔宗規綱領報恩講式
明治九年十月廿八日	源信	慈安三年四月朔日生	又後源空	壽九十	
今上皇帝勅謚也	原	佛滅而後	入室	六百十八年	
承陽大師	道元越前吉祥山姓源永平寺	平安城人父重相通忠其先村上天皇九世之孫	敬山公圓	建長五年八月廿八日	又六四李十九
明治十二年十月廿三日	貞應二年入宋	嘉定十六年	壽五十四	國六百二十七年	
今上皇帝勅謚也		佛滅而後			

傳通緣起履歷一覽 卷之五

大師壽數忌日之頌

誓者歸命十三僧 本朝

皇帝賜徽號

傳教大師五十六 圓寂六月初四日

慈覺大師七十一 歸寂正月十四日

弘法大師六十二 入定三月廿一日

智證大師七十八 掩化十月廿九日

慈慧大師七十四 入滅正月約三日

慈眼大師百卅三 寂滅十月初二日

傳通緣起履歷一覽 卷之六

南無歸命頂禮 大慈大悲釋迦善逝

南無歸命頂禮 極樂化主彌陀如來

南無歸命頂禮 六方證誠恒沙世尊

南無歸命頂禮 三國傳燈諸大師等

南無自他法界平等利益

異說

智證大師 寬平三年七月廿九日寂 和漢合符

慈慧大師 寬平四年冬十月庚子寂 資治表

慈眼大師 寬和元年正月三日寂

興教大師四十九 掩化極月十二日

圓光大師壽八十 遷化正月廿五日

理源大師七十八 示寂七月第六日

聖應大師六十六 逝去二月第一日

法光大師七十九 恬化正月第三日

見真大師滿九十 閉眼霜月廿八日

承陽大師五十四 遷化八月廿八日

當此忌辰謝洪恩 願我言行同彼尊

南無歸命頂禮 尊重讚嘆祖師聖靈

明治十二年四月十八日版權御願

同 年五月十四日版權免許

同 十三年八月 日 刻成

愛知縣平民

編輯者

蘆谷懷成

額田郡蘆谷邨六番地

平民

出版者

伊藤小文司

同郡岡崎連尺町四十四番地

賣捌書林

西京東六條下珠數屋所

西村九郎右衛門

同

同 東六條中珠數屋所

西村七兵衛

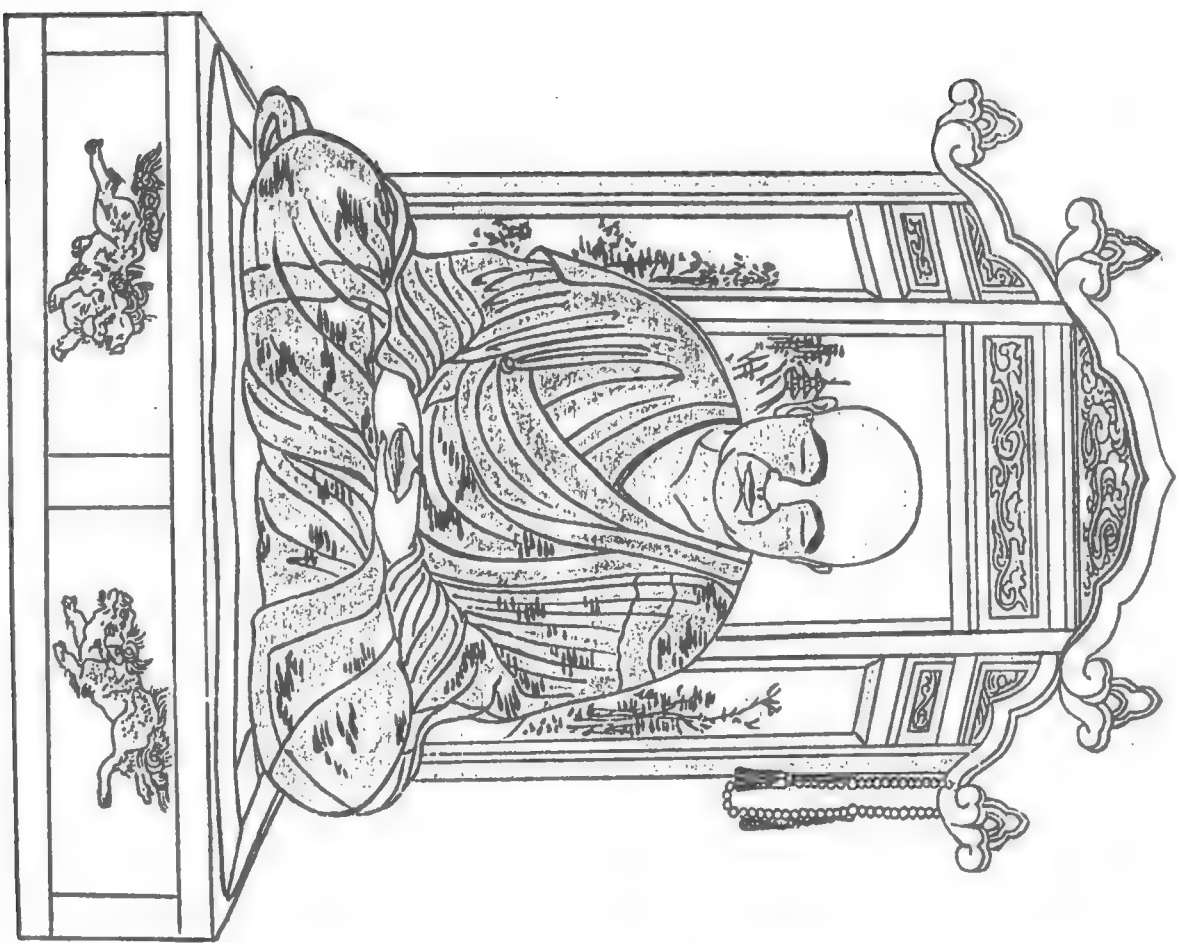
淡海元開（三船） 撰

唐鑑真過海大師東征傳

明治三十一年（一八九八）奈良縣唐招提寺鉛排本

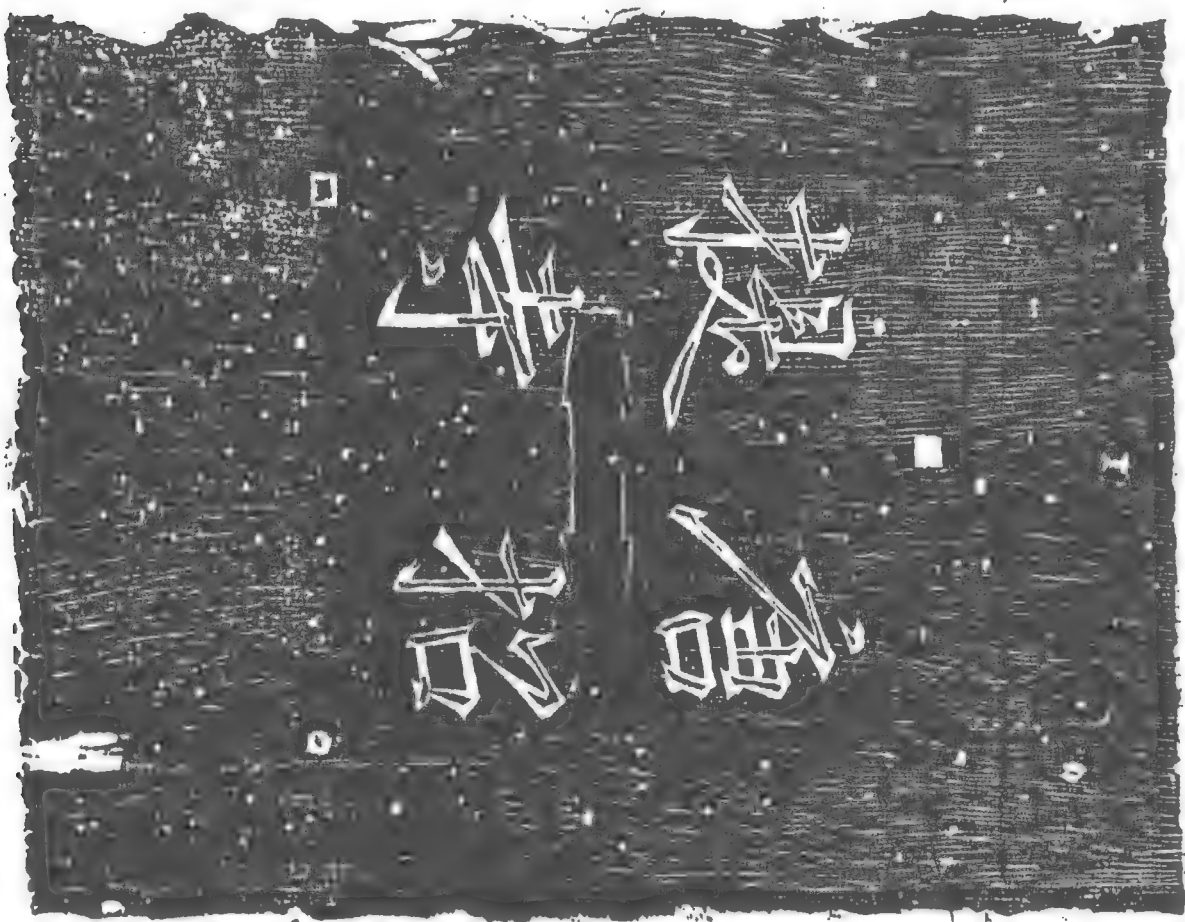
據明治三年（一八七〇）
奈良縣唐招提寺鉛排本影印

像光御榮印燒箔唐鑑



唐鑑真過海大師東征傳

翰宸御皇天謙孝



序

吾朝

上宮太子大興佛法廣益蒼生然有未備者謂戒律要門也從聖武御宇請招唐鑑真大和尚而挑戒律佛法光明輝于全國太子御願至於此圓滿者乎今也去大和尚遙遠隔一千百數十年烟霞諸人信其德化漸次至微薄此是無他由不知大和尚之德化若欲令廣知之則無如令讀其傳記傳記中最好者無如大友皇子之孫淡海真人元開之撰此人與大

和尚同時而錄親見親聞故然此傳記情哉唯藏于處々古刹經庫不得諸人見之由之唐摺提寺牟尼藏院住職北川智海律師爲國爲法正摺舊版製此傳記數千部以施于天下有志者遍謂頻讀此書則下愚亦可移感律師志之至誠序製本弘通始末以冠于卷首云爾

皆

明治三十丁酉年夏之首

南都戒壇院幻住 沙門長老上田照滿謹題

法務卿大僧正磨鑑眞過海大師東征傳
本傳
大和上
東征傳
眞人元
開快撰
字

大和尙諱鑑眞揚州江陽縣人也俗姓淳于齊辨士髡之後也其父先就揚州大雲寺智滿禪師受戒學禪門大和尙年十四隨父入寺見佛像感動心因請父求出家父奇其志許焉是大周則天長安元年有詔於天下諸州度僧便就智滿禪師出家爲沙彌配住大雲寺後改爲龍興寺唐中宗孝和皇帝神龍元年從道岸律師受菩薩戒景龍元年秋錫東都因入長安其二年三月廿八日於西京實際寺登壇受具足戒荊州南泉寺弘景律師爲和尙巡遊二京究學三藏後歸淮南教授戒律江淮之間獨爲化主於是興建佛事濟化群生其事繁多不可具

眞人元開撰

載日本天平五年歲次癸酉沙門榮寂普照等隨遣唐大使丹埤眞人廣成至唐國留學是年唐開元廿一年也唐國諸寺三藏大德皆以戒律爲入道之正門若有不持戒者不齒於僧中於是方知本國無傳戒人仍請東都大福光寺沙門道瑤律師附副使中臣朝臣名代之舶先向本國去擬爲傳戒者榮寂普照留學唐國已經十載雖不待使而欲早歸於是請西京安國寺僧道航澄觀東都僧德清高麗僧如海又請得宰相李林甫之兄林宗之書與揚州倉曹李湊令造大舟備糧送遣又與日本國同學僧玄明立法二人俱下至揚州是歲唐天寶元載冬十月日本天平十四年歲次壬午也時大和尙在揚州大明寺爲衆講律榮寂普照至大明寺頂禮大和尙足下具述本意曰佛法東流至日本

通鑑大綱東征傳

通鑑大綱東征傳

作
劉異本
諸

作
劉異本
到

國雖有其法而無傳法人日本國昔有聖德太子曰二百年後
聖教興於日本今鍾此運願大和尚東遊興化大和尚答曰昔
聞南岳思禪師遷化之後託生倭國王子興隆佛法濟度衆生
又聞日本國長屋王崇敬佛法造千袈裟施此國大德衆僧
其袈裟緣上繡著四句曰山川異域風月同天寄諸佛子共結
來緣以此思量誠是佛法興隆有緣之國也今我同法衆中誰
有應此遠請向日本國傳法者乎時衆默然一無對者良久有
僧祥彥進曰彼國太遠生命難存滄海淼漫百無一至人身難
得中國難生進修未備道果未刻是故衆僧緘默無對而已大
和尚曰是爲法事也何惜身命諸人不去我即去耳祥彥曰大
和尚若去彥亦隨去爰有僧道興道航神崇忍靈明烈道默道
諸寺收捉賊徒送於既濟寺搜得乾糧大明寺捉得日本僧普

因法藏法載巖靜道翼幽巖如海澄觀德清思託等廿一人願
同心隨大和尚去要約已畢始抵東河造船揚州倉曹李湊依
林宗書亦同揀拔造船備糧大和尚榮叙普照等同在既濟寺
備辦乾糧但云將供具往天台山國清寺供養衆僧是歲天寶
二載癸未當時海賊大勦繁多台州温州明州海盜并被其害
海路塞公私斷行僧道航云今向他國爲傳戒法人皆高德行
業肅清如如海等少學可停却矣時如海大嘆裴頭入州上探
訪廳告曰大使知否有僧道航造船入海與海賊連都有若干
人辨乾糧在既濟開元大明寺復有五百海賊入城來時淮南
採訪使班景倩聞大駭便令人將如海於獄推問又差官人於

遺海大國經從傳

遺海大國經從傳

四

三

徒與本作

向異本作問及家作衆

出八十異本作
出正爐八十實

照開元寺得玄明立法其榮叡走入池水中仰臥不更久見水動入水得榮叡並送縣推問僧道航隱俗人家亦被捉得並禁獄中問曰徒有幾人與海賊連道航答曰不與賊連航是宰相李林甫之兄林宗家僧也今令送功德往天台國清寺陸行過嶺辛苦造船從海路去耳今有林宗書二通在倉曹所採訪使問倉曹對曰實也仍索其書看乃云阿師無事今海賊大動不須過海去其所造船沒官其雜物還僧其誣告僧如海與之坐還俗沃枕六十遞送本質其日本僧四人揚州上奏至京鴻臚檢案向本配寺寺家報曰其僧隨駕去更不見來鴻臚依寺報而奏便勅下揚州曰其僧榮淑等既是番僧入朝學問每年賜絹廿五匹四季給時服兼預隨駕非是僞蓋今欲還國隨意放

通鑑大綱東征傳

通鑑大綱東征傳

還宜依揚州例送遣時榮叡普照等四月被禁八月方始得出其玄明立法從此還國別去時榮叡普照同議曰我等本願爲傳戒法請諸高德將還本國今揚州奉勅唯送我四人不得請諸師而空還無益豈如不受官送依舊請僧將還本國流傳戒法乎於是巡避官所俱至大和尚所計量大和尚曰不須愁宜求方便必遂本願仍出八十貫錢買得嶺南道採訪使劉臣隣之軍舟一隻雇得舟人十八口備辦海糧荅脂紅絲米一百石甜或三千石牛蘇一百八十斤麵五十石乾胡餅二車乾蒸餅一車乾薄餅一萬番拾頭一半車漆合子盤三十具兼將畫五頂像一鋪寶像一鋪金泥像一軀六扇佛菩薩障子一具金字華嚴經一部金字大品經一部金字大集經一部金字大涅槃

障子異
本作鏡
子叉殊
體作殊

竹葉蓋
異本作
行來盈

體異本
作佛

經一部雜經論章疏都一百部月令障子一具行天障子一具
道場幢一百二十口珠幢十四條玉環手幢八口螺鈿經函五
十口銅瓶廿口華蓋廿四領袈裟一千領褊衫一千對坐具一
千床大銅蓋四口竹葉蓋四十口大銅盤廿面中銅盤廿面小
銅盤四十四面一尺面銅盤八十面少銅盤二百面白藤簾十
六領五色藤簾六領麝香甘肅沉香甲香甘松香龍腦香膽唐
香安息香棧香零陵香青木香薰陸香都有六百餘斤又有畢
鉢呵梨勒胡椒阿魏石蜜蔗糖等五百餘斤蜂蜜十斛甘蔗八
十束青錢十千貫正爐錢十千貫紫邊錢五千貫羅襪頭二千
枚麻靴三十量席胃三十箇僧祥彥道興德清榮叔普照思託
等一十七人玉作人畫師雕檀刻鏤鑄寫繡師修文鐫碑等工

通海大佛東征傳

通海大佛東征傳

手都百八十五人同駕一隻舟天寶二載十二月舉帆東下到
狼溝浦被惡風漂浪波擊船破人總上岸潮來水至人腰大和
尙在烏菰草上餘人並在水中冬寒風急甚太辛苦更修理舟
下至大坂山泊舟不得即至下嶼山住一月待好風發欲到乘
名山風急浪高舟無著岸無計可量纔離嶼岸還落石上舟破
人並舟上岸水米俱盡飢渴三日風停浪靜泉郎將水米來相
救又經五日有還海官來問消息申請明州大守處分安置鄒
縣山阿育王寺有阿育王塔明州者舊是越州一縣也開元
廿一年越州鄒縣令王叔達奏割越州一縣特置明州更開三
縣令成一州四縣今稱餘姚郡其育王塔者是佛滅度後一百
年時有鐵輪王名阿育王役使鬼神建八萬四千塔之一也其

井異本
作泉

水漲流却天寶三載歲次甲申越州龍興寺衆僧請大和尚講律受戒事畢更有杭州湖州宣州並來請大和尚講律大和尚依次巡遊開講受戒還至鄮山育王寺時越州僧等知大和尚欲往日本國告州官曰日本國僧榮寂勝大和尚欲往日本國時山陰縣尉遣人於王蒸宅搜得榮寂師著伽邏送京遂至杭州榮寂師臥病請暇療治經多時云病死乃得放出榮寂師照等爲求法故前後被災艱辛不可言盡然其堅固之志曾無退悔大和尚悅其如是欲遂其願乃遣僧法進及二近事將輕貨往福州買船具辨糧用大和尚率諸門徒祥彥榮寂普照思託等三十餘人辭禮育王塔巡禮佛跡供養聖井護塔魚菩薩尋山直出州大守盧同宰及僧徒父老迎送設供養差人備糧送

通鑑大綱卷之四

通鑑大綱卷之四

塔非金非玉非石非土非銅非鐵紫鳥色刻鏤非常一面薩埵王子變一面捨眼變一面出腦變一面救鵲變上無露盤中有縣鐘埋沒地中無能知者唯有方基高數仞草棘蒙茸罕有窺至晉泰始元年并州西河離右人劉薩訶者死到闍羅王界闍羅王教令掘出自晉宋齊梁至於唐代時時造塔造堂其事甚多其鄮山東南嶺石上有佛右跡東北小巖上復有佛左跡並長一尺四寸前闊五寸八分後闊四寸半深三寸千輻輪相其印文分明顯示世傳曰迦葉佛之跡也東方二里路側有聖井深三尺計清涼甘美極雨不溢極旱不涸中有一鱗魚長一尺九寸世傳云護塔菩薩有人以香華供養有福者即見無福者經年求不見有人就井上造屋至以七寶作材瓦即從井中

唐異
本作始

至白社村寺修理壞塔勸諸鄉人造一佛殿至台州寧海縣白
泉寺宿明日齋後踰山嶺峻途遠日暮夜暗澗水沒膝飛雪迷
眼諸人泣淚同受寒苦明日度嶺入唐興縣日暮至國清寺松
篁鬱鬱奇崛瓊瑤寶塔玉殿玲瓏赫奕莊嚴華飾不可言盡孫
綽天台山賦不能盡其萬一大和尚巡禮聖跡出始豐縣入臨
海縣導於白峯尋江遂至黃巖縣便取永嘉郡路到禪林寺宿
明胡早食發欲向温州忽有採訪使牒來追其意者在揚州大
和尚弟子僧靈祐及諸寺三綱衆僧同議曰我大師和尚發願
向日本國登山涉海數年艱苦滄溟萬里死生莫測可共告宮
遮令留住仍以牒告於州縣於是江東道採訪使下陳諸州
先追所經諸寺三綱於獄留身推問尋蹤至禪林寺捉得大和

通鑑大綱卷五

十二

通鑑大綱卷五

十二

有異本
作百

和尚差使押送防護十重圍繞送至採訪使所大和尚所至州縣
官人參迎禮拜歡喜即放出所禁三綱等採訪使處分依舊令
住本寺約束三綱防護日勿令更向他國諸州道俗聞大和尚
還至各辨四事供養競來慶賀遞相把手慰勞獨大和尚憂愁
呵噴靈祐不賜開瀕其靈祐日日懺謝乞歡喜每夜一更立至
五更謝罪遂終六十日又諸寺三綱大德共來禮謝乞歡喜大
和尚乃開瀕耳天寶七載春榮敬普照師從同安郡至揚州崇
福寺大和尚住所大和尚更與二師作方便造舟買香藥備辦
百一物如天寶二載所備同行人僭祥彥神龕光演頓悟道祖
如高德清日悟榮敬普照思託等道俗二十四人及化得水手
十八人又餘樂相隨者合有三十五人六月二十七日發自

崇福寺至揚州新河乘舟至常州界狼山風急浪高旋轉三山明日得風至越州界三塔山停住一月得好風發至晉風山停住一月十月十六日晨朝大和尚云昨夜夢見三宮人一著緋二著綠於岸上拜別知是國神相則也疑是度必得渡海少時風起指頂岸山發東南見山至日中其山滅知是蜃氣也去岸漸遠風急波峻水黑如墨洩浪一透如上高山怒濤再至似入深谷人皆荒醉但唱觀音舟人告曰舟今欲沒有何所惜即牽棧香籠欲拋空中有聲言莫拋莫拋即止中夜時舟人言莫怖有四神王著甲把楸二在舟頭二在檣軸邊衆人聞之心裏稍安三日過蛇海其地長者一文餘小者五尺餘色皆斑斑滿泛海上三日過飛魚海白色飛魚滿空中長一尺許五日經飛

過海大國東征傳

十三

鳥海鳥大如人飛集舟上舟重欲没人以手推鳥即銜手其後二日無物唯有急風高浪衆僧惱臥但普照師每日食時行生米少許與衆僧以充中食舟上無水嚼米喉乾咽不入吐不出飲鹹水腹即脹一生辛苦何劇於此海中忽四隻金魚長各一丈許走繞舟四邊明且風息見山人總渴水臨欲死綵叔師面色忽然怡悅即說云夢見官人請我受懺悔叔曰貧道甚渴欲得水彼官人取水與叔水色如乳汁取飲甚美心既清涼叔語彼官人曰舟上三十餘人多日不飲水大欲渴請擅越早取水來時彼官人喚雨令老人處分云汝等大了事人急送水來夢相如是水今應至諸人急須把碗待衆人聞此總歡喜明日未時西南空中雲起覆舟上注雨人人把碗承飲第二日亦雨至

過海大國東征傳

十四

人皆飽足，明旦近岸有白魚，來引舟直至泊舟浦。舟人把碗競上，岸頭覓水過一小樹，便遇池水清涼甘美，衆人爭飲，各得飽滿。後日更向池欲汲水，昨日池處但有陸地而不見池，衆共悲喜，知是神靈化出池也。是時冬十一月，華藥開敷，樹實竹筍不辨於夏。凡在海中經十四日，方得著岸。遣人求浦，乃有四經紀，人便引道去。四人口云：大和尚大果報過於弟子，不然合死。此間人物喫人火急去，來便引舟去，入浦晚見一人，被髮帶刀，諸人大怖，與食便去。夜發經三日，乃到振州江口泊舟。其經紀人往報郡，其別駕弭崇債遣兵四百餘人來迎，引至州城，別駕來迎，乃云：弟子早知大和尚來，昨夜夢有僧姓豐田，當是債舅。此間若有姓豐田者，否？衆僧皆云：無也。債曰：此間雖無姓豐田，

通鑑大綱東征傳

十五

通鑑大綱東征傳

十六

人而今大和尚即將僧弟子之舅，即迎入宅內，設齋供養。又於大守廳內設會授戒，仍入州大雲寺安置。其寺佛殿壞廢，衆僧各捨衣物造佛殿，住一年造了，則駕弭崇債自備甲兵八百餘人送經四十餘日至萬安州。州大首領弭若芳請住其家，三日供養。若芳每年常劫取波斯舶三二艘，取物爲己貨，掠人爲奴婢。其奴婢居處南北三日行，東西五日行，村村相次，總是若芳奴婢之住處也。若芳會客常用乳頭香爲燈燭，一燒一百餘斤。其宅後蘇芳木露積如山，其餘財物亦稱此焉。行到岸州界，無賊別駕乃廻去。榮叔普照師從海路經四十餘日到岸州。州遊突大使張雲出迎，拜謁引入，令住開元寺。官寮參省設齋施物，盈滿一屋。彼處珍異口味，乃有益知子檳榔子荔枝子龍眼甘

葉異本
作花

蕉拘筵樓頭大如鉢盂甘甜於蜜花如七寶色瞻唐香樹聚生
成林風至香聞五里之外又有波羅奈樹葉大如冬瓜樹似楨
植畢鉢草子同今見葉如水蔥其根味似乾柿十月作田正月
收粟養蠶八度收稻再度男著木笠女著布絮人皆彫跡鑿齒
繼面鼻飲是其異也大使已下至於典正作番供養衆僧大使
自手行食將優曇鉢樹葉以充生菜復將優曇鉢子供養衆僧
乃云大和尚知否此是優曇鉢樹子此樹有子華弟子得遇大
和尚如優曇鉢華甚難值遇其葉赤色圓一尺餘子色紫丹氣
味甜美彼州遭火寺共被燒大和尚受大使請造寺振州別駕
開大和尚造寺即遣諸奴各令進一鉢三日內一時將來即構
佛殿講堂埤塔一鉢木餘又造釋迦文丈六佛像登壇受戒誦律

通鑑大綱卷第

七

僧徒禁
體異本
作僧俗
禁體

高異本
作彌

度人已畢即別大使去仍差澄邁縣令看送上船三日三夜便
達雷州羅州辨州象州白州儋州藤州梧州桂州等官人僧道
父老迎送禮拜供養承事其事無量不可言記始安都督上黨
公誦古璞等步出城外五體投地接足而禮引入開元寺初開
佛殿香氣滿城中僧徒擎幢燒香唱梵雲集寺中州縣官人
百姓填滿街衢禮拜讚歎日夜不絕焉都督來自手行食供養
衆僧請大和尚受菩薩戒其所都督七十四州官人選舉試學
人併集此州隨都督受菩薩戒人其數無量大和尚留住一年
時南海郡大都督五府經略採訪大使攝御史中丞廣州大守
盧煥陞下諸州迎大和尚向廣府時弼都督求親送大和尚自
扶上船口云古璞興大和尚終主彌勒天官相見而悲泣則去

通鑑大綱卷第

六

作殘
處異本
貞異本

作迎
送異本

燒香將曲几來使彦愚几向西方念阿彌陀佛彦即一聲唱佛
覺否思託答曰睡未起彦曰今欲死別思託諾大和尚大和尚
壇受戒次至吉州脩祥彦於舟上端坐問思託師云大和尚隨
庚嶺至處州開元寺僕射鍾紹京左隣在此請大和尚至宅立
治眼遂失明後巡遊靈鷲寺廣果寺登壇受戒至貞昌縣過大
無喻時大和尚頻經炎熱眼光暗昧爰有胡人言能治目加療
爲傳戒律發願過海遂不至日本國本願不遂於是分手感念
阿育王寺是歲天寶九載也時大和尚執普照師手悲泣而曰
影像今現在後移開元寺普照從此辭大和尚向嶺北去明州
州官人又送引入法泉寺乃是則天爲慧能禪師造寺也禪師
向韶州傾城送遠乘江七百餘里至韶州禪居寺留住三日韶

通海大師是征傳

通海大師是征傳

作傳
往異本
作四
三異本

一軍威嚴不異天子紫綃滿城邑居逼側大和尚住此一春發
白蠻赤蠻等往來居住種類極多州城三重都督執六纛一纛
載香藥珍寶積載如山其舶深六七丈師子國大石國骨唐國
根莖並芬馥奇異江中有婆羅門波斯崑崙等舶不知其數並
不可思議又有婆羅門寺三所並梵僧居住池有青蓮華華葉
錢欲往天竺訪採使劉臣鄰奏狀勅留開元寺供養七寶莊嚴
白檀華嚴經九會率工匠六十人三十年造畢用物三十萬貫
壇受戒此寺有呵栗勒樹二株子如大棗又開元寺有胡人造
道俗出迎城外恭敬承事其事無量引入大雲寺四事供養登
尙哀憫悲切送喪而去端州大守迎引送至廣州盧都督率諸
下桂江七日至梧州次至端州龍興寺榮叙師奄然遷化大和

二十

十九

驚異本
作常

恩異本
作忠

端坐寂然，無言。大和尚乃喚彥彥，悲愴無數。時諸州道俗聞大和尚歸嶺北，四方奔集，日當三百以上。人物駢闐，供具燁燁，從此向江州。至廬山東林寺，是晉代慧遠法師之所居也。遠師於是立壇授戒，天降甘露，因號甘露壇。今尚存焉。近天寶九載有，志恩律師於此壇上與受戒，又感天雨甘露，道俗見聞，歎同晉遠大和尚留連此地，已經三日，即向潯陽龍泉寺。昔遠法師於是立寺，無水發，願曰：「若於此地，堪棲止者，當使抽泉以錫杓扣地，有二青龍尋錫杓，上水，即飛涌。今尚其水涌出地上三尺焉。」因名龍泉寺。從此陞行至江州，城太守追集州內僧尼道士女官州縣，官人百姓香華音樂來迎，請停三日供養。太守親從潯陽縣至九江驛，大和尚乘舟與太守別去。從此七日至潤州江

唐鑑大綱卷五

二十二

唐鑑大綱卷五

二十二

寧縣入瓦宮寺，登寶閣，高二十丈，是梁武帝之所建也。至今三百餘歲，微有傾損。昔一夜暴風急，吹明旦人看閣下，四隅有四神跡，長三尺，入地三寸。今造四神王像，扶持閣四角，其神跡今尚存焉。昔梁武帝崇信佛法，興建伽藍，今有江寧寺、彌勒寺、長慶寺、延祚寺等，其數甚多。莊嚴彫刻已盡，工巧大和尚之弟子，僧靈祐承大和尚來遠，從栖霞寺迎來，見大和尚，五體投地進接。大和尚足展，轉悲泣而歎曰：「我大和尚遠向海東，自謂一生不獲再覲，今日親禮，誠如盲龜開目，見日戒，燈重明，昏衢再朗，即引還栖霞寺，住三日，却下攝山，歸楊府，過江至新河岸，即入揚子亭，既濟寺。江都道俗奔填道路，江中迎舟，鉤輿連接，送入城住。本龍興寺也大和尚從南振州來，至楊府所，經州縣立

明異本
作照

壇授戒無空過者，今亦於龍興崇福大明延光等寺講律授戒，
暫無停斷。昔光州道岸律師命世，挺生天下四百餘州，以爲受
戒之主。岸律師遷化之後，其弟子杭州義威律師響振四遠，德
流八紘。諸州亦以爲受戒師。義威律師無常之後，開元廿一年
時大和尚年滿四十六，淮南江左淨持戒者，唯大和尚獨秀，無
倫道俗歸心仰爲受戒之大師。凡前後講大律并疏四十遍講，
律抄七十遍講，經重儀十遍講，羯磨疏十遍具修三學，博達五
乘外乘威儀，內求奧理，講授之閒，造立寺舍，供養十方衆僧，造
佛菩薩像，其數無量，縫納袈裟千領布，袈裟二千餘領，送五臺
山，僧設無遮大會，開悲田而救濟貧病，啓敬田而供養三寶，寫
一切經三部各一萬一千卷。前後度人授戒略計過四萬有餘。

唐書大傳卷之三

三十三

唐書大傳卷之三

三十四

其弟子中超群拔萃爲世師範者，卽有楊州崇福寺僧祥彥潤
州天響寺僧道金西京安國寺僧璿光潤州栖霞寺僧希瑜揚
州白塔寺僧法進潤州栖霞寺僧乾印涪州相國寺僧神邕潤
州三昧寺僧法藏江州大林寺僧志恩洛州福光寺僧靈祐揚
州旣濟寺僧明烈西京安國寺僧明債越州道樹寺僧璿眞揚
州興雲寺僧惠琮天台山國清寺僧法雲等三十五人并爲翹
楚各在一方弘法於世導化群生。天寶十二載歲次癸巳十月
十五日壬午日本國使大使特進藤原朝臣清河副使銀青光
祿大夫光祿卿大伴宿禰胡麻呂副使銀青光祿大夫祕書監
吉備朝臣眞備衛尉卿安倍朝臣朝衡等來至延光寺白大和
尚云：弟子等早知大和尚五回渡海向日本國將欲傳教，故今

津
本
作
泗
淵
聚

親、率、顯、色、頂、禮、歡、喜、弟、子、等、先、錄、大、和、尙、尊、號、并、持、律、弟、子、五、
僧、已、奏、聞、主、上、向、日、本、佛、戒、主、上、要、令、將、道、士、去、日、本、君、王、先、
不、崇、道、士、法、便、奏、留、春、桃、原、等、四、人、令、住、學、道、士、法、爲、此、大、和、
尙、名、亦、奏、退、願、大、和、尙、自、作、方、便、弟、子、等、自、在、載、國、信、物、船、四、
船、行、裝、具、足、去、亦、無、難、時、大、和、尙、許、諸、已、竟、時、揚、州、道、俗、皆、云、
大、和、尙、欲、向、日、本、國、由、是、龍、興、寺、防、護、甚、固、無、由、進、發、時、有、仁、
幹、禪、師、從、務、州、來、密、知、大、和、尙、欲、出、備、具、船、舫、於、江、頭、相、待、大、
和、尙、於、天、寶、十、二、載、十、月、廿、九、日、戌、時、從、龍、興、寺、出、至、江、頭、乘、
船、下、時、有、廿、四、沙、彌、悲、泣、走、來、自、大、和、尙、言、大、和、尙、今、向、海、東、
重、觀、無、由、我、今、者、最、後、請、預、結、緣、乃、於、江、邊、爲、廿、四、沙、彌、授、戒、
訖、乘、船、下、至、蘇、州、黃、涵、浦、相、隨、弟、子、揚、州、白、塔、寺、僧、法、進、泉、州、

通鑑大綱東征傳

二十五

寶
異
本
作
台

超、功、寺、僧、曇、靜、台、州、開、元、寺、僧、思、託、揚、州、興、雲、寺、僧、義、靜、衢、州、
靈、耀、寺、僧、法、藏、賓、州、開、元、寺、僧、法、成、等、一、十、四、人、滕、州、通、善、寺、
尼、智、首、等、三、人、揚、州、優、婆、塞、潘、仙、童、胡、國、人、寶、最、如、寶、崑、崙、國、
人、軍、法、力、膽、波、國、人、善、聽、都、廿、四、人、所、將、如、來、肉、舍、利、三、千、粒、
功、德、續、普、集、雙、一、鋪、阿、彌、陀、如、來、像、一、鋪、彫、白、栴、檀、千、手、像、一、
軀、續、千、手、像、一、鋪、救、世、觀、世、音、像、一、鋪、藥、師、彌、陀、彌、勒、菩、薩、瑞、
像、各、一、軀、同、障、子、金、字、大、方、廣、佛、華、嚴、經、八、十、卷、大、佛、名、經、十、
六、卷、金、字、大、品、經、一、部、金、字、大、集、經、一、部、南、本、涅槃、經、一、部、四、
十、卷、四、分、律、一、部、六、十、卷、法、勵、師、四、分、疏、五、本、各、十、卷、光、統、律、
師、四、分、疏、百、廿、紙、鏡、中、記、二、本、智、首、師、菩、薩、戒、疏、五、卷、靈、溪、釋、
子、菩、薩、戒、疏、二、卷、天、台、止、觀、法、門、立、義、文、句、各、十、卷、四、教、儀、十、

卷
門
十
次
第
解
十二
教
儀
異
本
作

通鑑大綱東征傳

二十六

異本作
戒檀圖
經一卷
法範律
師尼戒
本一卷
及疏二
卷
定賓律師飾宗義記九卷補釋勝宗記一卷戒疏二本各一卷
觀音寺亮律師發記二本十卷南山宣律師含注戒本一卷及
疏行事鈔五本羯磨疏等二本懷素律師戒本疏四卷大覺律
師批記十四卷音訓二本比丘尼傳二本四卷玄辨法師西域
記一本十二卷終南山宣律師關中創開戒壇圖經一卷合四
十八部及玉環水精手幡四口○金珠○西國琉璃瓶盛○
菩提子三斗青蓮華卅莖玳瑁毘子八面天竺革履二緇王右
軍真蹟行書一帖王獻之真蹟行書三帖天竺朱和等雜體書
五十帖○
西國以
下六字
以要錄
補之

二卷行法華懺法一卷小止觀一卷六妙門一卷明了論一卷
定賓律師飾宗義記九卷補釋勝宗記一卷戒疏二本各一卷
觀音寺亮律師發記二本十卷南山宣律師含注戒本一卷及
疏行事鈔五本羯磨疏等二本懷素律師戒本疏四卷大覺律
師批記十四卷音訓二本比丘尼傳二本四卷玄辨法師西域
記一本十二卷終南山宣律師關中創開戒壇圖經一卷合四
十八部及玉環水精手幡四口○金珠○西國琉璃瓶盛○
菩提子三斗青蓮華卅莖玳瑁毘子八面天竺革履二緇王右
軍真蹟行書一帖王獻之真蹟行書三帖天竺朱和等雜體書
五十帖○
水精手幡已下皆進內裏
又阿育王塔樣金銅塔一區廿三日庚寅大使處分大和尚已

下分乘副使已下舟畢後大使已下共議曰方今廣陵郡又覺
知大和尚向日本國將欲搜舟若被搜得爲使有妨又風被漂
還著唐界不免罪惡由是衆僧總下舟留十一月十日丁未夜
大伴副使竊招大和尚及衆僧納己舟總不令知十三日普照
師從越餘姚郡來乘吉備副使舟十五日壬子四舟同發有一
雉飛第一舟前仍下訂留十六日發廿一日戊午第一第二兩
舟同到阿兒奈波嶋在多福嶋西南第三舟昨夜已泊同處十
二月六日南風起第一舟著石不動第二舟發向多福去七日
至益救嶋十八日自益救發十九日風雨大發不知四万午時
浪上見山頂廿日乙酉午時第二舟著薩磨園阿多那秋妻屋
浦廿六日辛卯延慶師引大和尚入太宰府天平勝寶六年甲

通鑑大綱卷之四

通鑑大綱卷之四

三十九

三十九

午正月十三日丁未副使從四位上大伴宿禰胡麻呂奏大和
尙到築志大宰府二月一日到難波唐僧崇道等迎慰供養三
日至河內國大納言正二位藤原朝臣仲麻呂遣使迎慰復有
道璿律師遣弟子僧善談等迎勞復有高行僧志忠賢璵靈福
曉實等三十餘人迎來禮謁四日入京勅遣正四位下安宿王
於羅城門外迎慰拜勞引入東大寺安置五日唐道璿律師婆
羅門菩提僧正來慰問宰相右大臣大納言已下官人百餘人
來禮拜問訊後勅使正四位下吉備朝臣眞備來口詔曰大德
和尚遠涉滄波投此國誠副朕意喜慰無喻朕遣此東大寺經
十餘年欲立戒壇俾受戒律自以此心日夜不忘今詣大德遠
來俾戒冥契朕心自今以後受戒俾律一任大和尚又勅僧都

通鑑大綱卷四

二十九

夏辨令錄諸臨壇大德名進禁內不經於旦勅授佛燈大法師
位其年四月初於盧遮那殿前立戒壇天皇初登壇受菩薩戒
次皇后皇太子亦登壇受戒尋爲沙彌證修等四百四十餘人
授戒又舊大僧靈祐賢璟志忠善頂道緣平德忍基善謝行潛
行忍等八十餘人僧捨舊戒受大和尚所授之戒後於大佛殿
西別作戒壇院卽移天皇受戒壇土築作之大和尚從天寶二
載始爲傳戒五度裝束渡海艱辛雖被漂廻本願不退至第六
度過日本三十六人總無常去退心道俗二百餘人唯有大和
尙學問僧普照天台僧思託始終六度經逾十二年遂果本願
來俾聖戒方知濟物慈悲宿因深厚不惜身命所度極多時有
四方來學戒律者緣無供養多有退還此事漏聞于天聽仍以

通鑑本
作證

通鑑大綱卷四

三十

寶字元年丁酉十一月廿三日，勅施備前國水田一百町。大和尚以此田欲立伽藍，時有勅旨施大和尚園地一區，是故一品新田部親王之舊宅，普照恩託請大和尚以此地爲伽藍，長傳四分律藏法勵，四分律疏鎮道場，餅宗義記宣律師鈔，以持戒之力，保護國家。大和尚言大好，卽寶字三年八月一日，私立唐律招提名。後請官額，依此爲定，還以此日請善俊師講件疏記等所立者。今唐招提寺是也。初大和尚受中納言從三位上，眞人之延請，就宅竊管其土，知可立寺，仍語弟子僧法智，此福地也可立伽藍。今遂成寺，可謂明鑒之先見也。大和尚誕生像季親爲佛，使經云：「如來處處度人，汝等亦數如來，廣行度人。」大和尚既承遺風，度人逾於四萬，如上略件及講遍數，唐道瑠律

通稱大僧在傳

通稱大僧在傳

師請大和尚門人思託曰：「承學有基緒，瑠弟子閑漢語者，令學。」疏并鎮國記，幸見開導，僧思託便受於大安唐院，爲忍基等四五年中，研磨數遍。寶字三年，僧忍基於東大唐院講疏記，僧善俊於唐寺講件疏記，僧忠慧於近江講件疏記，僧惠新於大安塔院講件疏記，僧常巍於大安寺講件疏記，僧眞法於興福寺講件疏記。從此以來，日本律儀漸漸嚴整，師資相傳，遍於寰宇。如佛所言：「我諸弟子，展轉行之，卽爲如來。」常在不滅，亦如一燈，燃百千燈，冥者皆明，明不絕。寶字七年癸卯春，弟子僧忍基夢見講堂棟梁摧折，燭而驚懼，欲大和尚遷化之相也。仍率諸弟子，模大和尚之影，是歲五月六日，結跏趺座，面西化。春秋七十六，化後三日，頂上猶煇，由是久不殯殮，至於閑雜，香氣滿山。

三十二

三十一

同八異
本作寶
龜元年

平生管謂僧思託我若終已願坐死汝可爲我於戒壇院別
立影堂舊住坊與僧住千臂經云臨終端坐如入禪定當知此
人已入初地以茲驗之聖凡難測同八年甲辰日本國使遣唐
揚州諸寺皆承大和尚之凶聞總著喪服向東擧哀三日都會
龍興寺設大齋會其龍興寺先是失火皆被燒大和尚昔住院
坊獨不燒損是亦戒德之餘慶也
法務贈大僧正唐鑑真過海大師東征傳一卷寶龜十年歲次
己未二月八日己卯撰

初調 大和尚二首并序

聞夫佛法東流摩騰入於伊洛眞教南被僧會遊於吳都未
喪斯文必有命世將弘茲道實待明賢我皇帝據此龍圖濟

唐鑑真大師東征傳

三十三

唐鑑真大師東征傳

三十四

蒼生於八表受彼佛記導黔首於三乘則有負鼎擲鉤雖比
肩於絳闕而乘盃聽鐸未逐影於立門爰有鑒眞大和尚張
戒網而曾臨法進闈梨照智炬而展止像化多士於斯爲盛
立風不墜寔賴茲焉弟子遐跡撒塵馳心眞際奉三歸之有
地欣一覺之非遙欲贊芳猷奮弱管云爾

摩騰遊漢闕 偏會入吳宮 豈若眞和尚 慧苑覺華豐
含章渡海東 禪林戒網密 縮門得妙工 今朝蒙善誘
欲識玄津路 長迷有漏津 懷抱絕埃塵 空華更落春
自歸三寶德 誰畏六魔瞋

官異本
作宮

五言傷

大和尚傳燈逝

日本國傳燈沙門釋思託

上德乘杯疲

金人道已東

戒香餘散馥

慧炬復流風

月隱歸靈燭

珠逃入梵宮

神飛生死表

遺教法門中

七言傷

大和尚

傳燈賢大法師大僧都沙門 釋法進

大師慈育契圓空

遠邁傳燈照東海

度物草籌盈石室

散流佛戒紹遺蹤

化畢分身歸淨國

娑婆誰復爲驗寵

五言傷

大和尚

通鑑大綱要卷四

通鑑大綱要卷四

金紫光祿大夫中納言行式部卿石上宅嗣

上德從遷化

餘燈欲斷風

招提禪草刻

戒院覺非空

生死悲含恨

眞如歡豈窮

惟視常修者

無處不遺蹤

五言傷

大和尚

圖書寮兼但馬守藤原朝臣刷雄

萬里傳燈照

風雲遠國香

禪光耀百億

戒月皎千鄉

哀哉歸淨土

悲哉赴泉場

寄語騰蘭跡

洪慈萬代光

嗟而述懷

因使日本頂謁鑑眞大和尚大和尚已滅度不觀尊顏

三十五

三十五

都虞候冠軍大將軍試大常卿上柱國高鶴林
 上方傳佛教，名僧號鑑真，懷藏通隣國，寂滅離囂塵，法留千載住，禪院從今古，青松遶塔新，名記萬年春。

唐鑑真傳

三十七

唐鑑真傳

三十八

法務昭大僧正唐鑑真過海大師東征傳

跋

唐鑑眞過海大師者天平勝寶六年入朝王臣
歸崇衆庶嚮慕遂建戒壇於東大寺更創唐招
提寺復築戒壇度人無量吾國之諸人得覩毘
尼正範潤佛法眞化若欲知大師一代適化詳
于眞人元開所撰東征傳此比吾山內北川智
海律師投淨財製本數千部以施有志者唯要
正法之再起余是一山之衆主觀此勝事隨喜
不知手舞足踏冀此傳記現世弘流將來傳々

無窮耳

皆

明治三十丁酉四月黑布薩日

唐招提寺長老

沙門大森覺明謹跋



天平勝寶八年 孝謙天皇勅授祖師于大僧都同年五月初
二成聖武天皇崩御同六月 勅以太上皇之供御米鹽之類
永賜祖師同寶字元年甲寅欲遂先帝之志 勅高房藤公重爲
經管招提 淡路廢帝寶字三年秋八月初一勅賜祖師大和
尙之號其 勅曰大僧都鑑真和尚戒行轉潔白頭不變遠涉
滄波歸我聖朝號曰大和尚恭敬供養政事隙煩不敢勞老宜
停僧綱之任集諸寺僧尼欲學戒律者皆屬令習續日本紀云
授位大僧正法務綱務煩雜改授大和尚之號云思凝然國師佛
見其說恐誤也此八月招提悉成其二十五日勅於招提大殿前
令築戒壇 上皇孝謙今上淳仁及后妃百官等登壇受戒尋又

移壇于金堂西同九月十五日壇及堂成有落慶法樂其日
兩皇引率百僚親幸于寺次日 今上勅以備州田一百町納
于當寺以充僧供又詔天下爲出家者先入招提習學戒律而
後學自宗據之諸宗僧侶來集或三年或五年受戒學律極盛
常居凡三萬指云戒律傳來記勅豐安曰 詔天下僧尼皆歸大
和尚習學戒法也自爾以來僧二百五十尼五百戒授與此士
出家類住持佛法鎮護國家流記云號鎮護國家金光明建初律唐招提
寺也延喜格曰國危則可修理招提寺云
同四年 詔祖啓梵網會以資聖武天皇冥福云類聚國史傳
曰于時有 勅校正一切經論往々誤字諸本皆同莫之能正
和尚諸誦多下雌黃又以諸藥物合名眞僞和尚一々以臬別
之一無錯失文皇國名醫傳曰僧鑑真醫能療皇太后不豫有

因法藏法載巖靜道翼幽巖如海澄觀德清思託等廿一人願同心隨大和尚去要約已畢始抵東河造船揚州倉曹李湊依林宗書亦同揀拔造船備糧大和尚榮勸普照等同在既濟寺備辦乾糧但云將供具往天台山國清寺供養衆僧是歲天寶二載癸未當時海賊大動繁多台州温州明州海邊并被其害海路塞公私斷行僧道航云今向他國爲戒法人皆高德行業肅清如如海等少學可停却矣時如海大憤裹頭入州上探訪廳告曰大使知否有僧道航造船入海與海賊連都有若干人辨乾糧在既濟開元大明寺復有五百海賊入城來時淮南採訪使班景倩聞大駭便令人將如海於獄推問又差官人於諸寺收捉賊徒遂於既濟寺搜得乾糧大明寺捉得日本僧普

末賢智海謚書

功賜備前水田一百町時未精西土藥品鑑眞爲辨定之邪人倣之密道益開世傳鑑眞祕方又祀其鑑眞像云神僧傳曰釋鑑眞中達日本以廣德元年無疾坐去至今不傾壞不施苔漆其國國王貴人信士時將寶香塗之文（祖師墓所在今恩招提寺東北隅）天平神護元年稱德天皇勅謚過海大師是本朝大師尊號權輿也吾宗祖大師於和漢兩胡種々現神變度群生其事繁廣不可具述誠此六根互融薩埵四依大師所爲也伏恨生於千歲後退喜遇于其遺法此者如教不學而汲流却澗源矣常登影堂每拜法像恩澤濕衣不忍去也予未有報萬一於祖恩於茲馨舊傳以祈大師聖代興律而已

明治三十一年八月九日印刷
同年同月九日發行

(非賣品)

南都唐招提寺藏版

奈良縣生駒郡都跡字五條六十五番地
翻刻者兼
發行
北川智海

京都市上京區二條通高倉東へ入觀音町一番戸
印刷者
林虎之助

京都市上京區柳馬場通二條下ル等持寺町十番戸
印刷所
京都印刷株式會社

鐵牛園心 撰

東福開山聖一國師年譜

舊刻本

據舊刻本影印

東福開山聖一國師年譜

前住太宰府崇福禪寺小師比丘圓心謹編

前住慧日山東福禪寺遠孫比丘方秀校正

師諱辯圓字圓爾世以字行嘗在徑山主掌衣鉢佛鑑不呼侍者但稱爾老其爲人仁而愛人意豁如也雖沙彌童行相爾汝方其機用嚴峻不可犯佛祖亦望崖而却耳性相諸德來探別傳宗旨則師先設其宗疑難以問若能酬答則便示以向上鉗鎚若亦不能酬答則師乃咄之曰子未精教乘豈可聞直指之道乎是故諸德莫不信服不則爲講徒所毀禪宗或

幾乎不振師嘗舉論理致機關向上三宗旨濟北鍊公曰寔久聞西明菴導黃龍一派只濫觴而已及乎建長年中隆蘭溪唱道東壤尚未置帝京慧日德協君臣化洽畿疆禦外侮而立正宗整教綱而提禪綱蓋得祖道之時者乎於戲鍊公亦知言哉正和帝追謚聖一國師有語錄行于世

土御門天皇建仁二年壬戌

師族平氏駿州安部郡藁科人也正月十三夜母稅氏夢舉手採明星光吞之而身其處胎母無所惱或恍惚之間有青衣神女相隨母一日登久能

山謁堯辯大德辯房壁間有畫像其容貌宛如隨身神女母問辯曰此何神辯曰大辯才天女也曰天女風有何願辯曰嘗以護佛法利衆生爲其大願爾母曰妾乃有孕此神侍衛則恐產聖子若果然則不敢置塵中也垂其將誕胎中有聲十月望日出時生金光照室瑞雪鋪庭

三年癸亥

師二歲闍人言語能辨是非見人顏也能識憂喜其冬大雪師指雪問母是何物母曰是雪師曰我生時有此雪

元久元年甲子

二年乙丑

建永元年丙寅

師五歲母蹈先言誓師登久能山投堯辯之室辯即授俱舍頌而誦之

承元元年丁卯

二年戊辰

師七歲習俱舍圓暉頌疏

三年己巳

四年庚午

師九歲讀俱舍論普光疏

順德天皇建曆元年辛未

二年壬申

建保元年癸酉

師十二歲學法華妙玄

二年甲戌

三年乙亥

四年丙子

師十五歲在止觀講席講師至故四諦外別立法性難乎辯析師乃解釋詞義渙然講師曰此先哲

猶病諸童稚機辯殆乎宿習我固愧之

五年丁丑

師十六歲遍閱法華文句摩訶止觀

六年戊寅

承久元年己卯

師十八歲慕智證遺跡入近州園城寺薙髮○十

月二十日詣東大寺登壇受戒

二年庚辰

師十九歲入錫陽聽孔老教蓋禦外侮也

三年辛巳

後嵯河天皇貞應元年壬午

二年癸未

師二十二歲歸園城寺一日自思以為我比年學大小乘究權實教但增知解而已於生死大事何益之有吾聞野州長樂寺有榮朝者舞圖非啻傳持三部密法而亦受禪戒聽教外別傳之道知識匪遙何滯此邪乃出國城赴野州就朝扣其所蘊元仁元年甲申

師二十三歲歸父能山山有見西園梨蘊密宗秘印惠傳法無人久矣見師欣然全付

嘉祿元年乙酉

二年丙戌

師二十五歲遊相州寓壽福藏經院住持行勇房與長樂榮朝法門伯仲也見師管待甚厚時有了心者房精首楞嚴經啓講於客位師預聽至第四卷師致詰難心煩解答憤排不已師自付云今其東壤學者以心為指南膚淺如此我其誰依當往宋朝訪宗匠於是始蓄渡宋之志○復鶴崗八幡神祠開八講會師預其數賴憲僧正主講會權衡以其能辨議論妍媸世稱三井大鏡師徵詰

數次憲屈師罵曰久嚮大鏡此鏡非鐵則恐是靛
乎一會作也憲顧衆曰莫怪莫怪是則妙德驚子
再生而指我瓊學爾衆亦敬之

安貞元年丁亥

二年戊子

寬喜元年己丑

二年庚寅

師二十九歲在毒福披閱藏經已訖○冬歸長樂
寺孝事榮朝

三年辛卯

貞永元年壬辰

四條天皇天福元年癸巳

師三十二歲○一日侍長樂和尚大啓曰某甲猥
承慈接親聞顯密二宗不爲無得是故已登傳燈
大阿闍梨位然教外宗旨未領願旨此夙緣稍差
爾願欲往宋訪尋知識伏乞慈悲俯賜允許乃泐
下數行長樂愍其誠懇擇日餞別師復歸故鄉白
母辭去一錫飄然着博多津憇圓覺寺先是有智
山義學厭惡禪宗加謗於師且擬致害綱首謝太
郎國明知之日夜衛護俾師居櫛田私宅

文曆元年甲午

師三十三歲○高麗國王附貢船來法語師條列
顯密法門以酬之

嘉禎元年乙未

師三十四歲○四月船出平戶津經十寅夕到宋
明州即理宗端平二年寓城景福律院聽月公開
遮之說復入天童見癡絕冲漸達都下天竺相庭
月公知師究性具宗授以自撰楞嚴楞伽圓覺金
剛四經疏鈔及台宗相承之圖時堪笑翁領淨慈
薰石田主靈隱師徠往二寺寧退耕典客北山謂
師曰而今徑山雖嬰鬱攸之禍而範無準坐瓦礫
場轉大法輪天下指爲甘露門子何不承顧盼乎
○師因登徑山無準一見器許未浹旬使師侍申
瓶朝衆暮請優游厭飲于時覺即菴掛牌開室日
東山惠西巖爲兩板首倫斷橋智別山一環溪敬
簡翁源靈叟圻方菴寧元菴墨希叟咸辨衆事莫
不悉施瑤磨之力○佛鑑一日從容語曰女學海
浩渺比來我竹篲下一時乾枯他日歸本國必於
無涓滴處橫起波瀾豎無勝幢發揮吾道須踵從
上乃祖遺芳永利未來際

三十五歲○藤丞相道家光明寺殿下歸佛崇法古

今寡匹嘗蓄建寺度僧之志四月二日夜感瑞夢

翌日便自製發願文一千四百餘言於是開平安

城東南地建大伽藍殿內安釋迦像長五丈其左

右觀音彌勒像各減其半四天王像復減其半釋

迦眉間藏遮那像其長五寸光中化佛五百軀其

百數者蓋表五百菩薩成道五百菩薩大願僧亦

五十員如寺產稍豐則當增五百員僧衆則日夜

孜孜當學顯密性相大小權實等教以祈國家安

寧復祝君臣壽福寺名東福即臣洪基於東大取

盛業於興福丞相所願如此

三年丁酉宋嘉祐元年

師三十六歲○十月節節示法語口道無南北弘

之在人果能弘道則一切障礙是受用處不動本

際而歷遍南方不涉別求而普參知誰如是則非

特此國彼國不隔絲毫至於及盡無造香水海那

邊更那達猶指諸掌耳此吾心之常分非假於他

術如是信得及見得徹則逾海越漠隨處登山初

不惡矣圖兩上人助善財遊歷百城參尋知義決

明已期大事其志不淺延香末語故書此以示之

曆仁元年戊戌宋嘉祐元年

師三十六歲○四月二十五日藤道家於法住寺

落髮法名行基五月神像顯相以表贊佛鑑

自贊曰人宋國日本國天無垠地無極一句定千

差有誰分曲直驚起南山白額蓋浩浩清風生羽

翼

延應元年己亥宋嘉祐二年

師三十八歲○五月藤丞相道家於法住寺命諸僧誦

咒以祈保安二十三日比良山神託家盛妻告僧

慶政上曰藤丞相將期建寺後造十三重石塔

憑此善念風雲消滅今後善報必當清淨我有二

千眷屬當為伽藍神以致衛護道家聞乃願心彌

堅○秋七月二十一日戊子東福寺初植佛殿柱

○八月一日師語德如侍者曰我欲知吾師出處

願記其狀德如便記佛鑑行狀就其末曰日本國

爾上人某師之名逾海越漠依止參扣師以事

遇之爾必知師平生出處之狀歸故國以備扣問

侍者德如奉師最久粗知平生事樂故錄以似之

○五日東福寺上佛殿棟

仁治元年庚子宋嘉祐四年

師三十九歲○敬史簡棲飛來峰北礪望尊一時

師住求法語簡曰山執不立文字之柄拂你知

解之塵吾豈說焉藤輝但只會取我舌頭端的帝

都丁去塞你所請便授與親書韻關一部

二年辛丑宋嘉祐五年

師四十歲○四月二十三日師出德如所記行狀

奉呈帝鑑師語云淳熙元年正月二十三日

特賜三照以證德如不誅六月一日三鼓佛鑑

召圻爾待考規香問訊而告曰今夜廣澤龍王

班地告戒寺二人化導時主龍王必不食言矣圻

法近口有車使不得相辭爾法早歸本土提唱祖

道白雲三鼓其靈蓋於花雲於上左右西天四

七唐二二三其一言以通也無準五十四世不

括橫技的的相承其終承三父能爾禪師以為傳

法之傳二於其靈蓋法及一技後書報賜也生崇

福禪寺一之靈已最初住寺當掛此額師曰初

賜二字寺一之靈已最初住寺當掛此額師曰初

得之靈一請師作傳實之一中諸人冀神龍之不

漫日知師化行本寺也四月二十日辭佛鑑佛鑑

出楊岐法衣并大明錄以付之同門諸友作頌以

送者二十餘人其洪都道瑋頌曰與盡心空轉海

東定應亦手長家風報言日事真天子且喜楊岐

正脉通湘絕岸秋雪舉二人奉奉來行在揮泪而

別○五月朔船出明州海縣至大洋風波甚惡

同發者三帶二船已受事亦將沉者數次忽有

女人現船二師同曰二人何處而至女曰我

是八幡大菩薩故來觀耳六月晦暑高麗國耽

沒羅阿和山下留滯四日二月晦多諸綱首館

來迎院或請普記○八月十五日帶四綱繪師肖

像求贊師贊云久能門下無法與人提筆據坐近

前便碩下○宰府有湛慈德性便直出言多

異殆類散聖精顯密二教且復入宋受佛鑑法謂

師曰我於橫嶽山當初一伽藍師若風帆無恙回

鄉則來主此寺是故請師居方丈自居偏室師即

揭崇福額開堂演法○肥州水上有榮導覺禪房

持律行道世所稱也昔與師偕或在長樂或入宋

國然尊經三年而歸領水上教院聞師既至革教

為禪請師為開山祖亦自居板首

三年壬寅

師四十一歲○師上書佛鑑其答書曰師範和南手曰日本國大宰府崇福爾長老一別許久無以馳系近者收書且知出應人天之命爲世導師老懷懽喜既爲主法入當行平等慈以接來學其常住事務一一付之知事畧提綱要而已專於方丈之職與四衆激揚此事亦當時時自警佛法如大海轉入轉深不可少息使此宗異日大震於鄉國豈不偉哉山中雖復罹之厄日來亦有成說之漸無勞遠念正續但入佛殿亦一面經營矣恐欲知之祐音一兄在此過得甚好祐近來有趣同甚可

東五

十一

喜前日示言二件信物一一如書中數目領訖極感道義便中就以錦法衣一頂乃前輩尊宿相傳者付去過說法披餘宜爲大法自愛是祝大宋國臨安府徑山興聖萬壽禪寺住持特賜佛鑑圓照禪師一覽和南宗福爾長老○秋謝國明於博多東偏瀨天寺寺成師爲第一世師乃記之說法上書佛鑑佛鑑親承天師寺及諸堂處主理等一寺之具書曰所言大德云云寺大而小不知可下下可下後便寄聲又當書去矣○師聞徑山有災勸諸國明化千坂遷

之佛鑑答書曰又荷遠念山門興復重大特化千極爲助良感道義云云嘗聞日本教律甚盛而禪宗未振今長老既能堅立此宗當一依從上佛祖所行無有不殊勝矣云云錄到上堂語要甚愜老懷

後嵯峨天皇寬元元年癸卯

師四十二歲○上書佛鑑其答書曰師範和南手白承天堂頭長老向曾收書已嘗回答就有錦法衣壹頂附去乃是從上來諸知識所傳者以表付授不妄且知長老還故國緣法殊勝所至響合更

東五

十一

宜以此道力行使吾祖之教在在處處熾然而興此爲至祝也便風聊復眷眷之意未間切宜爲大法保愛餘不一一師範和南手白承天堂頭長老○宰府有智山寺即關西講肆其徒嫉師禪化欲聞于朝以毀承天新寺朝廷不許乃勅陞承天崇福二刹以爲官寺有智山衆議乃復師揭勅賜六字世亦欽佛鑑先知焉○橫嶽湛慧歲首偶過池州路由觀世音寺寺舊例行驅僂捉路人頭蒙元面身披袈服名爲僂鬼引過寺庭闔府男女謹然入寺或以杖木凡石而打擲之名爲驅僂其人困

甚是故觀世音寺四畔此日無行人慧僕白曰乞
從間道而去慧曰我既佛徒何道此厄於是果捉
行鬼事慧志之近相府以訴之當時藤良實方秉
鈞軸良實乃藤道
家第二子也父子兄弟勢傾朝廷而亦奉佛
甚勤舊聞慧名驩而延之且復問顯密二教及淨
業酬酢詳明良實折恆無已便啓之父相國相國
請就府內相見且曰比聞有教外禪宗願聽其一
二慧曰法師在下座為白衣說法吾佛嚴制雷須
設座相國鋪座設拜慧累演妙義相國問曰師為
是誰誰之弟子慧曰太宰府近有國爾上人親佩

年譜

十

圓照心印我為其弟子智辯豈止一倍加於我而
已相國乃發使召師二月師入京相國先遣僧信
通勞來安謝延之月輪別墅終日問道酬對果如
慧所言相國大悅即任僧正位師乃辭後以其彈
教無通補日本國總講師師亦辭於是相國親書
聖一和尚四字以擬唐代宗賜法欽國一之例蓋
國發出於代也就為東福寺第一世○聖日謂福
府良實良實乃事岡屋藤基經西國相國藤實氏
成執弟子禮不望內府藤家良以下文武官人瞻
禮無虛日唯言人夫人亦稱女弟子本朝貴人
賜唯右等

之世無也○建曆寺座主慈源諸詢顯密大義○
相國師東堂○又移居東行私宅相國擇日受
禪門大成○密宗註項○九月師上書於佛鑑其
畧曰國爾一生事其得後依此法庫諸家辨遺殊
沐慈悲開示方便言兩以降特將自警雖曰本系
圓成亦須漸漸奉承漸除習氣至於無作之作無
功之功譬如大海轉八轉深今之邪惡法誨百拜
啓請懷仰不已特賜錦袈裟一頂感德之私銘篆
肌膺又誓寺自去歲八月始起今年一周圓備此
是老和尚道德所及藉天打供了辦一六緣至
此布覆伏冀慈光

年譜

十

二年甲辰

師四十三歲○上書徑山佛鑑其書曰即上人
來收書并前一書又書塔一一領得甚感不忘第
相去阻疎無由即答目知曰崇福遷東福住四名
刹安衆行道殊慰老懷但德慶操守力弘此道使
一枝佛法流布於日本真不棄為宗乘中人也長
老揮教兼通又能涉履不患不殊勝只貴始終一
節介然不改耳此老僧所望餘無他祝○五月五
日示藤永相道家曰此段大事事自已脚踏下淨

鯨鯨赤瀉瀉沒可把如水土放蒲蘆拘牽他不得
悉詳他不得云云具取漢設大爐轉百煉千煅
棒一喝七顛八倒入淨入穢不礙不改一一歷試
方得這入頭處有少親近分縱能得之難守之守
之難行之須知此事直是具決定志向千差萬別
慶得焉主宰降此之外畢竟作什麼參禪定殿下
訪我於關靜慶或尋顯密性相之原波騰撒之取
問直指單提之妙瓶瀉雲興余以二十年專力僅
能充其量恣其飲耳恁麼迅筆請自看取○秋還
野州受業藤丞相道家差蒲中刺史行範衛護以
送○八月至長樂寺觀本師將拜榮朝朝不受曰
公已傳龍淵正派我豈受拜哉但喜素質未盡室
得相見師欵語七日遂過酸州省其母上羅綺珍
服是乃唯后太夫人所贈也○季秋歸京寓止月
輪別墅

三年乙巳

師四十四歲○師詣關進宗鏡錄帝萬幾之暇常
讀此錄親題其後曰朕得此錄於爾師見性已了
四年丙午

師四十五歲○正月二十八日藤實經秉鈞軸

藤道家第四子也世號後一條殿下後居圓明寺
亦號圓明寺殿下弘安七年五月十九日落髮法
名行祿遂以八年七月○藤道家以東福未成先
建普門寺俾師居焉○岡屋藤兼經命師講宗鏡
錄圓憲回心守真理圓等咸預座唯理圓百日唱
導世稱未曾有

後深草天皇寶治元年丁未

師四十六歲○九月二十六日野州長樂榮朝示

滅

二年戊申

師四十七歲○筑州承天寺災師往筑州謝國明

喜師至一日之中初殿堂十八宇

建長元年己酉

師四十八歲○三月十八日佛鑑唱滅於徑山退

耕室○平元帥時賴景明關巨福山邦建長寺師

遣僧十員行叢林禮及平平帥請隆蘭溪為第一

世隆與師書疏往來數數不絕○師勸維那覺心

上人入宋訪尋知識○七月慶承天寺○相宗民

通述真心要訣三卷師序其後○空宗回心問二

諦義以師答焉准

二年庚戌

師四十九歲○五月師母卒

三年辛亥

師五十歲○戒壇院圓照實相受禪戒○十月古西准后太夫人薨

四年壬子

師五十一歲○嵯峨上皇詔入內師有脚疾而辭

○二月二十一日藤丞相道家薨年六十二心公云

丞相為時奉天皇外相十五男
四女三子壹宰相輔非光明寺

五年癸丑

師五十二歲○二月三林長老罵師自係師贊云

普門禪寺長老信口胡說亂道誰知慣打葛藤終

不隨人所好○師右眼失明

六年甲寅

師五十三歲○冬往相陽弟子一圓在尾州木實

崎聞師赴相陽營點心等物祇候旅邸師不敢畧

伸其謝而可曰汝不專辨道輒講世禮甚無謂也

古人云行者圓信始生善願將養若涉事紛動令

道芽破敗豈不其然乎一圓敬唯而退○師居尋

福寺住持密告平相州時賴平大喜翌日布薩

持稱疾請師說戒師固辭遂不獲已為衆說戒時

賴預聽其夕請就私第受禪戒○時賴一日問曰

善知識所說不一或說妄心緣起而有生滅真心

凝然不生不滅或說大疑之下必有大悟或說須

看念起謂之回光返照如上諸說何親何疎師曰

這裏不論疎親曰豈無方便師曰既似一物即不

中時賴領之即受戒受衣鉢誓曰願為法門外護

更勿相忘師頃早歸雄陽勸其君臣入此法門

七年乙卯

師五十四歲○師自相州歸○惠西巖來書曰竊

審以道福住山王臣贊護聲稱奔奔遠被中夏乃

知先師左券全歸老手矣欽羨欽羨切乞為師門

益加珍護以承真風○三月先是藤丞相實經親

書法華等四經總三十二卷層匣霞繡金螺交輝

師勸捨往山正續院時惠西巖住天童便作日本

國丞相藤原公捨經之記以刻于石其記曰非教

無以求佛語非禪無以悟佛心圓於名相藏於玄

關未見其得也必曰頓悟自心明見自性按永劫

之疑踰大方之表則知教非佛語也禪非佛心也

吾心之常分耳得不為出塵大丈夫之能事哉雖

然佛距中華雪嶺沙漠之外跨閱逾十萬里禪教

所化之國所備之機莫不係於時賴光鶴樹千有

餘載而大教東漸更五百年而正宗存至使不以
教乘誘熱之而正宗驟至則青天霹靂得不駭怪
於當時梁迄宋興閱歲既久道傳器受不易絲毫
瓜列五宗之後倭翁倭張濟北一燈實焉震耀正
續崛起而振之是為十六世光明雋偉奔走海內
學者指雙徑為道之所在而迫趨之猶文陽之幹
道人圓爾來自日本一詔投機擢置近侍坐閱弄
著按正續之道而歸之坐故山一香供凌霄示不
忘本竊謂日域名相之學與宋相埒而正宗之傳
則兆於覺阿向金牛作舞慶勘破暗堂國人設

蔚為之宗逮今爾公益佐興之與有力也將見一
燈傳無盡燈華然不夜光以謂係乎時者厥有旨
哉公重為先攝政藤原道家見知特加師禮而道
家之子左丞相實經東家之志崇篤教門欲報先
妣准三后太夫人之德也相與謀族而謀之謀其
兒女昆弟親善法華等經四部總三十二卷野以
層匝貫以霞縹縹金螺極窺天巧尊經也京昇
濟之具報用極之恩幸本於孝懷不事外慕而手
書佛經可謂知所向矣爾爾會惟先師之恩德一
豪亡報陳請足避賭鎮佳山正續先師圓照塔院

如經所謂是中已有如來公為舍利者豈細故哉
丞相欣然諾之其亦必實之有所歸而聖善之
有所託矣爾公與余數高東之義屬了惠被旨此
山也拳拳致書附以四二臂猶檀六士重以斯
經焉託鸞馬之記將以紀實行遠覺試為爾言曰
先師極卑傳直指之柄擇文字語言之學今公以
是報之余又從而為記得不厚辱於師門貽辱於
眾楚若曰碎軍傳直指者此經也破文字語言者
此經也則強為區畫之大宋寶祐三年三月望慶
元府太白名山天童景德禪寺住持嗣祖比丘了

惠記○六月二日藤丞相實經慶東福寺本朝昔
既有舍那彌陀彌勒三大像而今復安釋迦大像
是故俗指斯寺謂新大佛

康元元年丙辰
正嘉元年丁巳

師五十六歲○三月上皇於龜山離宮受大業戒
者七日上皇不勝歡感躬自賜黃金扇○翌日上
皇乳母仙國寺殿亦受戒○四月照無象上書於
師曰靜照拜別侍右流光如流倏踰四載仰慕慈
誨不敢飾文可以意知也靜照去春元兄歸便嘗

附尺牘得徹筆几否山重水遠浮沈莫究靜照寓
蹟鄭峰歲月三期幸無他惱皆遠遊也任兄拜謁
曲折必能盡之東向高風不勝企望之極惟以時
珍重即膺遠大之寵又裁別幅以常禪房於海中
忽遇惡風飄到東南壞松之時各乘小船一隻小
船直到岸上常禪房未有消息其身命十分之一
亦難得矣乘道房夜間倒以打折一脾許多災難
利害甚矣因風界說伏望開知之矣○平元帥時
賴諸入相州議大明錄元帥敬信之便白皇子征
夷大將軍宗算軍使師賴維之建仁寺○帝勅

幹東大寺事九國大寺院是事起二或

○平元帥俾師居壽福寺慈嚴林檀蓋榮西開基

以來禪觀未全住持觀衆且居偏室

二年戊午

師五十一歲○五月十四日營建仁方丈寺嬰回

標以來諸堂索然及師董率佛殿僧堂函丈咸復

舊觀○又造東福佛殿北東三十七間

正元元年己未

龜山天皇文應示在庚申

師五十九歲○是歲東福寺慧曉慕師道而至問
修行心要師便運筆書一圓相書其下云無內無
外孤圓一輪忘尤希影顯要出身○宋寧元菴來
朝師喜其至得本位之持通甚渥寧於東福方
大普說京師緇事李汝璣仰平元帥時賴聞寧道
實相陽春李汝璣仰平元帥時賴聞寧道
師曰今見元菴彌信師之銜錫妙密也○夏惠西
嚴來書曰了惠業因大圓回舶身布大書并以正
續榮施經石刻附納相望萬里莫知登徹几格否
每見神足元空二乞傳誦揚揚沙語演然有老圓

照氣味使人毛骨森華中間且聞移錫名利恨不
得親臨法會但能祈禱東望也

弘長元年辛酉

師六十歲○往和陽賀元菴住建長寺即鳴鼓上

堂曰大機獨運大用全彰佛祖之玄樞衲僧之疾

害道傳宋朝日本德被四海五湖透出古今語黑

之離微湛若渭涇清濁之明鑑笑德山臨濟徒施

棒喝識巖頭雪嶠枉用機籌縱奪卷舒超師作畧

手足義重其義斷金誰謂同坑無異土也然雖如

是只如賓主交參合談何事良久云相見又無事

不來還憶君復云同飲龍淵同依師席切瑳琢磨
相滋相益分袂東西各提祖令越漢來投心膺優
盡執別恰恰一周千里俯垂輝映舉衆再奉慈光
無異撥雲見日若是向上向下總將靠之一壁何
也憶得凌霄靈毒之家水也不曾沾他一滴阿呵
呵會也麼青山不鎖長飛勢滄浪合知來處高寺
衆亦請師普說○師慶清見寺

二年壬戌

師六十一歲○冬十月十六日平元帥時賴象元
菴問答豁然契悟兀菴作偈印可師和以賀之曰

大機大用大根人鼻孔遼天獨露身凜凜威風行
閭外五湖四海一天真○師赴備中慶朝原塔

三年癸亥

師六十二歲○十一月二十二日平元帥時賴卒

十二月計至

文永元年甲子

師六十三歲○正月赴相陽請兀菴爲故平時賴
陞座普說

二年乙丑

師六十四歲○七月藤丞相實經捨四十一莊○

師造法成寺大殿○幹天王寺事

三年丙寅

四年丁卯

師六十六歲○岡屋藤兼經受大乘戒○帝詔幹
軍勝寺事造廻廊中門及二重樓門○藤丞相良
實入山請師陞座○秋染黃菊季冬乃愈○師有
示空明上座法語

五年戊辰

師六十七歲○藤丞相實經病常樂菴○岷河大
相國源基具問三教大旨師述三教要畧呈之○

本朝儒學不及釋氏何哉意每街之聞師道化
其一戰以決雌雄一日偶會莊嚴藏院師曰我法
佛佛授手祖祖相傳苟無師授則爲虛設某甲世
尊以降五十五世強弩窮矢雖亦不穿魯縞而猶
以系授稱釋氏以釋例儒亦當如此不知公於孔
子已得幾世乎管公箝口而退語人曰我欲突爾
師抗衡彼詰以世系我已不能耐對

六年己巳

師六十八歲○帝勅幹東大寺事捨周防歲入

年八

七年庚午

八年辛未

師七十歲○三月九日叡山法印靜明來謁扣以四種三昧觀心修行之要師則開佛相爐輔提向上誨鍾馗煉和施一待察密明疑情惛息垂淚作禮曰我不來日和尚爭何聞無上妙道假使隔生不可敢忘師恩言訖而去又遣弟子公深親受指畫○東福寺造法堂相堂和堂等○西蜀子曇侍者自宋而至師開講軒下榻相待曇呈詩師和之曰範學道人入帝京不隨玩水與遊吳焦佛担鉗錫手知是德有改鑊關○足利源經河滿氏請為夢州實相第一世師往入寺六日即走相防因命智藏為第一世

九年壬申

師七十一歲○二月嵯峨天皇弟深召師入內說法要末竟乃辭

十年癸酉

師七十二歲○正月一日落東福寺法堂○冬龜山道皇請師受八戒

十一年甲戌

師七十三歲○上皇亦受大乘戒

後宇多天皇建治元年乙亥

師七十四歲○正月二十五日裏修養主之法語師示之曰向文彩未起以前直下坐斷打破向上向下截斷佛祖機印踰實地古夢空分未知落處未透這邊直饒棒下不誑喝下承當猶是初門第二機在云云無應打一微信得及得透殊界不收魔界不替融六步界此一塵會十世古今共當念到者裏千聖出共也無下二處與你教外真修養主久在座下裏極問道一至安閑之地也無證也無得亦無周由為人云云○龜山道皇詔師入內說三教旨趣○三月植東大寺西塔柱○九月藤丞相實經泊其子家經率諸官從入山請師上堂且復行入室禮

二年丙子

師七十五歲○富小路上皇受戒○閏三月禪林寺上皇問修行心要

三年丁丑

弘安元年戊寅

師七十七歲○西澗曇侍者歸宋國後寓淨慈上
書於師曰子曇遠蒙慈庇之及衆痘粗安寧忘所
自耶每惟和尚道德貫充權衡八表天上人間咸
霑利益末世大法橋梁捨和尚而誰耶讚仰有所
不及子曇自惜不獲久依座下以觀光明盛事爲
不滿耳近伏想尊體安佳諸緣殊勝賤跡去秋起
天童歸淨慈住嘗遊無準老和尚塔頭菴宇一新
亭道華麗極爲可觀自非和尚作成之奚及此耶
非私意言之而衆人皆合辭贊嘆去歲道意房回
曾仲起居一書以述百千謝忱諒已奉徹左右茲
偶人回拏楮畧布草率以詞萬乙未拜面間尚祈
廣施法雨普潤含生壽佛慧燈永燭昏暗

二年己卯

師七十八歲○二月法語示智侃侍者曰小師智
侃侍者英俊爽拔航海梯山歷盡南方普參知識
有年歸來相從老僧十有餘年以生死事大朝夕
叅問老僧或時做嘆或時相罵或時無語或時面
壁更無辜負處若有辜負處一等蹉過了也鼻頭
既有通天竅切宜勉之因贊頂相云覲面全提衆
棘蓬應緣投契振宗風等閑噴嚏乾坤動十世古

今盡透通○夏元子元自宋而生師即失轡遣曾
以迎之元某書曰一昨蓮慈海峽不知幾十年
前承承將百山師甚妙莫莫慈慈抵宋王佛法凡
蓮僧遣輔師以資泊稍以壯拜以不意者氣相
二頭昏眩此亦率強而行恐八增正慈今三徒弟
先往展拜一後乃卜書知齊元答書曰在元伏被
慈深心元法新舊新之書元書一一走來下而
聞東主人再有消息來令小弟只留而與共他一
切勿接祖元不可燭承之初而相事也且承祖
飯併望免講○
云生前面目
龍洲水波瀾幾萬年○冬十一尸三
師肖像云老漢百醜千拙舉動輕要動過看毗
盧華嚴海鼓起幾許風波

三年庚辰

師七十九歲○二月初示微疾不美飲食然行道
無怠○四月建法性寺五大堂○五月疾乃病辨
雅首座繪師頂相求贊贊云萬家堆中現半身當
陽驗畫作家人要知機語相投處垂下鼻頭重萬
鈞○然育山亦寫頂相師贊云吾儂一段風佛祖

可難通無端垂手慶天下草本同○顯正堂亦請
贊贊云盡大地是般若光光未發時無生佛形容
才露此遺傳古本淵龍口如沸○二日召俊顯
才付常樂菴事云佛鑑頂相佛鑑親書宗派及法
語法衣直裰券書等一一領受勿敢遺墜但宜勃
興永承能令宗風永承不斷○二十一日復付俊
顯以普門院○六月一日師製東福規範十條○
二日移常樂菴藤丞相寶經入六間疾或候視經
信宿有僧赤坐不眠之句光明峰寺齋前自製願
文祈師安康○文應上皇遣醫脈病師謹謝恩還

之上皇重遣使曰朕雖久聽法誨而未臻聞奧和
尚如不可諱朕依誰人諮問此段大事○六日師
自造三教典籍目錄置普門書庫○九月疾有間
東咸喜師曰老病相通命在呼吸豈可久保師有
偈頌贈答藤丞相者數首○十五日師記東福寺
年月日須知薄上藤丞相寶經其薄尾曰圓爾為
法忘身不顧危亡凌萬里之風波挹雙徑之法流
周旋倭漢通衆知識顯密禪教大小内外粗搜精
要頗得梗概然而能所施如車兩輪内外護磨為
雙翼圓爾系蒙先君台命初開艱若最林直饒初

石可移願心無退上報四恩下資三有法界有情
同圓種智九為吾徒雖亦山院村寺宜護此法所
謂傳不傳之妙報不報之恩者也丞相既承先佛
遺付長為吾法外護生生世世慎勿相忘年月日
某甲記○晦日平時宗法光書至捨加賀熊坂莊
將軍及相州太守增崇祿位遂跌坐說法宣揚出
世始卒其詞激切而召大衆曰却後十五日當還
本寺寶華王座唱末後句入大涅槃便下座○八
日普門慧曉爾性等乞灌頂師選十四日定○至

十四晚命侍僧昇歸寺俊顯等曰和尚老病不可
以風師曰我昔委命鯨波直登雙徑親受心印以
歸而今於華王座而唱涅槃使人知臨終明驗有
在則雙徑宗風當被將來只急具轎諸徒以為前
知生死古尚難之相議不可於是灌頂事乃寢○
十五日凌晨兩班諸耆舊問疾師語曰今朝登座
說法欲令汝信有末後奇特事俊顯等不聽奈何
首座慧曉等亦同顯議師乃流涕曰汝等咸為我
法魔障其夕召普門等三人行灌頂會十六日召
知客某甲及最上智妙二行者曰若舉轎到本寺

須與汝等一萬錢然知客等為諸徒所呵不能肯

諾師顧俊顯曰你違我命非我弟子我在此床泯

泯自盡曷殊乎武士大死哉本朝諺有武士大死之語而後命

行者洒掃房宇以俟客至及日昃徒結切無傳自

越後來無傳名聖禪入宋嗣徑山五祖更既回知

花報寺又稱清見寺蓋聞師疾革而馳至師披安

陀會而坐顏屯如常笑語自若無傳挿香作禮師

曰最後相見須致九拜拜畢而坐師曰相別二十

年無傳曰只十九年耳師撒笑曰我則舉全數而

已無傳觀北補二十端師曰我將長往美用觀為

送庫司用資常住無傳將辭師留之乃述佛祖所

說有理致機關向上三種言訖已過三更送歸客

位師乃服人參湯一盞命後顯曰我將辭世馳告

藤丞相實經久之問侍僧曰余幾時僧曰鄉雞唱

師至卯時上禪椅而坐諸徒乞遺偈便書曰利生

方便七十九年欲知端的佛祖不傳弘安三年十

月十七日東福老珍重投筆而化留龕三日身體

如生遂瘞全身於常樂菴緇素哀慟聲動山谷入

壙之後林竹變白相樹自枯○度門弟子無慮千

萬人嗣其法以據一方者東山湛照意一備中州

人師滅後補東福帝又弼三聖萬壽兩寺滅後得

舍利謚寶覺禪師無闍普門普門信州人入宋見

倫斷橋文應帝離宮有妖門歷之仍為南禪第一

祖謚大明國師白雲慧曉道願讚州人入宋參曇

希更曇舉百丈撥火公案於是豁然有省謚佛照

禪師有語錄山東慧雲道武州人入宋問倫斷

橋祖師西來意於是賦墨梅頌倫印可謚佛智禪

師藏山順空釋入宋依輩石林謚圓鑑禪師無

來爾然補城人入宋訪尋知識師臨終囑曰正法

眼藏付囑爾然謚應通禪師無為昭无補城人火

浴沅設利謚本智海禪師月船珠海計播陽人

受密灌弘於野州謚法照禪師癡兀木慧平等勢

州人有十年訣枯木集行于世謚佛通禪師直翁

智侃正上野州人初參隆蘭溪入宋然後嗣法

於師謚佛印禪師奇山圓然定駿州又能人師

之姪也久侍巾區後終普門院天推宗吳入圓亦

久能人奇山之姪也南山士雲邈州人有語錄集

峰初名逢原後改宗源筑前州人亡偈頌勅謚集

峰國師潛溪處謙武州人元應帝親受密灌并衣

孟特賜普圓國師東洲至道嘗在大元國大都剎

六覺寺元應已未歲福寺火災西恩東南山藏書
作偈遺其徒芳相處招之遺標四句慶作四頌且
答其書曰故國法窟龍天所護豈可寂寥於今也
其劫燒之變態之革故鼎新之數乎況老師法力
維持富有能者代勞不必煩於等慮也三道螢燭
之微柔分慧日之餘輝於支那數萬里外使輝輝
不昧於日用則早不辜於老師遠焉 祈護護而
不遺之恩也亦是至道思慕國師初傳正法眼藏
於東國之大機大用之心日增月長而不退轉故
也今有一坐貝地片瓦蓋頭無非慈蔭所被而未

有不少蓋蔭之語如有則老師代國師發一慈道
華法精妙玉潔慧瑤傳瑜伽教備中并山至今猶
行密灌無住一圖在尾州長母寺有沙石集
聖財集行于世妙翁弘玄護州人將道福寺

師嘗勸游鑑往一圖刊撰一月日須知其一曰忽失
所在園心時侍師病告曰和尚若要心錄不難即重
集一本呈上疏榜回向應係微細軌則條條件件記
憶或不一遺師乃喜囑曰我徒若有建斯簿者汝須
正之若夫佛鑑諱齋假使更於數世須吾法商者不
可敢忽師即就每條每件上摺印以證之於是復囑

曰我平生行業雖不足採而汝詳記以貽後昆園心
既承遺命不可默已弘安四年二月日小師比丘園
心謹編

鐵牛紀夢三條

弘安三年十一月五日夜夢國師告園心曰我寺今
後當行布薩法我嘗授汝菩薩戒還知戒體否心曰
經云非青黃赤白黑非色非心非有非無非因果法
此豈不戒體乎國師曰此則果體而非行體菩薩當
以四弘誓願為其戒體也

又夢其不記國師居肥前萬壽寺踞法堂座上授菩薩

戒於覺禪房心從座下瞻之其座即千葉蓮華一一
葉上悉有釋迦像國師召園心侍其側心曰奈此有
釋迦何國師呵之曰吾宗雖亦毘盧而不可尊重於
是心即登座側立

東山嘗刻國師有像安三聖寺東山既住東福寺後
園心又夢國師徘徊東廊謂園心曰我欲居東方丈
蓮一房既領檀那帖復欲居西方丈於師資禮不可
沉心曰和尚既為東堂居東方丈亦何妨國師時披
黃綾被即據東方丈座前有卓園心側立國師授一
面銀鏡曰是則吏部之妻所賜也卓上東北有天地

八陽經指之曰當與玄悟之復得二一顯曰一
 婦來如此果子予遂不解其意夢乃見二日凌晨
 山空園心語曰曉昔之夜夢國所曰兒言在常樂
 歸東福而不得也不能無憾我不可育居三聖寺
 汝輔我而到東福至乃檢點寮舍殿堂并巡寮禮
 訖夢亦覺予聽其語拊手驚嗟乃後說吾前夢東
 垂泪曰夢亦有同者乎便令洒掃東方文忽長洒
 塵得天地八陽經東山愈嘆夢有驗於是重粧國
 儀輔到方丈陳諸供養然後安祖堂

慧日國師住世六十九年言行出處章章可法錄

生心公集為年譜
 下每覽此諸慮其湮沒將欲壽于梓以使後世有
 所矜式但其間不能無誤脫是故或校之於藤家
 遺編或正之於國師真蹟或本有佛鑑尺牘謹其
 付法傳衣不妄復有回數子元等往徠書誦其
 道德可見者莫不裨以入之雖以秀之不敏亦其
 後裔然生於百年之後諸塔別記諸寺碑碣不能
 徧探卷索好古君子若有所得則錄以添補其
 嗣法十餘員者以著慧日得人應永二十四年十
 月十七日主塔遠孫毗止讚岐州人岐陽方本

東福關山堂一國師年譜

比丘慧玄

比丘相芳募緣刊于慧日常樂

今具助緣者衙于後

東堂

方秀 珠堅 已上各助壹貫文

健易 宏怡 性智 成冲 明東 祥聖 聖信

玄晴 良經 祖恭 相臻 善福 已上各助佰文

西堂

明紹 助參佰文 心交 助貳佰文

羽謙 聖夢 源常 一傳 源佐 祥久 永瑞

昌旭 元潮 啓洪 成用 仲玲 心教 聖雲

智恒 已上各助佰文

大衆

祖芳 助壹貫文 妙壽 助伍佰文 宣雅

聖滿 性本 已上助參佰文 一慶 助貳佰文

明萬	助仁貳拾文	從尊	慧玄	慧晃	林瑞
慧玖	素克	慧亮	慧炳	慧運	慧安
明護	和芳	生榮	宗悅	明苦	正復
常洞	道休	全運	壽光	一誠	一梁
一呆	明篤	三义	不慶	德壽	祖梅
慧綱	希興	源盛	繼五	源光	心能
源桂	盈俊	祥一	心德	慧晃	能勤
美立	桂源	祖心	明諸	康憲	識桂
明林	嘉恒	慧承	聖龍	聖心	永鈞
芳昭	慧閑	麗真	慈心	二康	悅
正派	在傳	令德	桂源	慧中	元東
今伯	祖壽	令能	令六	省川	已上各助佰文
聖城	心之術	已上各助壹貫文			
多多良元俊	藤元久	已上各助參佰文			
源元家	藤元賢	福元高	越智常安	越智通	
益	已上各助佰文				
道所	格櫻板九枚				

釋宗演 編

蒼龍窟年譜

明治二十七年（一八九四）東京大倉保五郎鉛排本

據明治二十七年（一八九四）
東京大倉保五郎鉛排本影印

蒼龍窟年譜

孔子無言釋
不說箇中多
景孰凝眸我
棹清瀾將見
遍長天秋水
一虛月

右洪川禪師內講禪海

一瀾讀了口占

柳澤信大謹書



洪川法兄年譜序

洪川和尚自幼學儒於藤氏氏
二十余而既教授子弟二十七而
自請父母求出家就于相國
大拙長老雉深長老羅冷殆不
可近侍和尚祈誓北野天神社而

就成死佛道朝暮汲井水清
身清之既而及機于扣玉傍走
後抵于佛為之常所親笑棲樵
老岫四十余而成道而歸後應防
州岩國吾川侯聘振通風於防
長洞明治廿年三月就于教新省

召時四覺寺虛席教部大轉空在
玆使和尚住四覺寺尔來接江湖
耆侶抬榘豎拂不敢懈以余暇
接道俗懷以束之釋風掃和尚
手裏是所不為和尚不敢伏脫
也余由年譜而可詳之

明治廿六年三月

萬年堂獨園誌之



蒼龍庵年譜

參學 釋宗演等 教編

師諱宗溫。字洪川。號虛舟。攝津西成郡福島村人氏。今北父號確乎齋。按家譜。大祖爲清和帝之皇胤。華胄枝蔓分四家。賜以東西南北四姓。中古及邦畿亂。兩森侯迎請爲參謀。客將館攝之北宮原里。殊創建法華禪刹爲北氏香火場。祖先塋歷然于今。亨祿中攝州大物之役。北溪雲齋應管領細川高國之徵。督兵運軍謀。大立殊勳。高國馬上感稱曰。今者北也。即贈以感帖。自此以今北爲氏。天正中兩森江州屬。豐臣家溪雲齋大有慨曰。假令我今零落。元是皇胤。

蒼龍庵年譜

不屑屬武家。投簪深隱農間。至確乎齋四世混民籍。齋恭寬朴實有古德風。重鄉閭間。娶攝之江野村里正菊田氏女。有男子三人。師者其三男也。齋曾所象峰權現求男。便有娠。以文化丙子七月十日平旦無微惱出誕。則權現之祭日也。師爲兒時。夏不袒。冬不爐。終日侍父書齋。不交童孺。鄉人皆奇稱之。七歲父始授句讀。二年了四書五經。九歲令從學縣之福泉仙桂上人。東隱先生高足至十三歲能釋文義。秦漢以上書大抵卒業。唯未讀周儀二禮耳。十四歲春桂携師謁藤澤東岐先生。岐出白文徂徠集令讀之。師不容擬議。讀過二三枚。岐曰。事畢兒。自爾岐命日日令讀二

文化十三年丙子師生
文政五年壬午七歲
文政七年甲申九歲
文政十一年戊子十三歲
文政十二年己丑十四歲

天保五年甲午十九歲

蒼龍庵年譜

禮傍及莊子徂徠集。師一日獨語云。莊子大孔子者。徂徠小孔子者。亦不讀徂徠集。在塾五年。後往來彼小竹廣地莊之門。聽宋學之體裁。皆不適師意。別唱折衷學。開業于浪華中之洲。師時十九歲也。洲多諸侯藩邸。邸士及醫家僧流從學者常不下三十員。晝讀夜講。孜孜研究凡五年。一日講孟子。至浩然章。大聲曰。孟子說浩然。我行浩然。門人皆驚異之。自是抱脫俗之志。父母憂之。迎田中氏女妻之。師彌堅志不動。頻募名師。辭辭不樂。父與禪門實訓讀之。師見達觀顯語。悅氣勃然。見面唯待時之至已。先是師俄病頭痛。如以刀劈腦。不能見日光。白晝鎖戶而泣。臥數日不愈。相者曰。傳聞大有爲之人必有換骨之病。是吉兆也。後有一僧過浪花。常州水戶根本寺宿縣之住僧惠高和尚圓通菴菴主因語以師之事。僧云。以近國求之。八幡有海山長老。相國有大拙和尚。山老倒恐不堪接剛者。拙峻峻有鬼大拙之名。子時父亦偶然訪菴主。主告其言。父倉皇而歸。語師曰。不孝爲道捨命。鬼大拙之名好在耳。便乞端束裝赴京師。父母察師非常之志。欲許之。招集親眷告之。衆議紛紛。交來沮師之志。師不敢動。竟決矣。時九月八日也。翌日則重陽。且象峰權現之祭日也。師欲招請親眷及門人設生別齋。父母許之。師每人贈受用之書籍器品。附以一語。

按此天保十一年庚子歲也二十五歲

曰。孔聖釋尊。非別人。彼謂見性。此謂仁。脫塵休怪。吾
蟲放。行箇浩然一片真。衆人大驚。傷皆厚具。饒品。隨
責而至。師固退之不受。且曰。不孝爲大道。擲已命。誰
爲何等好物。不足要之。衆皆灑淚。從命焉。師又與少
婦田中氏一紙曰。我豈汝母。譬猶。織糸。以天土
偶人。繫久加如。今糸斷。天。我和山仁入。穢
土厭離。帖如件。九華真人。花押。一阿麻氏。即夜從鹿
苑和尚上船。臨別。父唯附屬。以白隱翁親書。權現尊
號一軸。且警曰。汝自今信奉權現。但只祈進道。而無
障礙哉。汝若道眼不明白。而擁名蘭巨利。我有終身
之恨。汝爲道。洋礪。假令打殺我。無毫釐之恨。師方奔

蒼龍窟年譜

三

走中不遇父。會。師奉付。屬之神。不。不。身。云。十日。師登萬年山相國禪寺。
拜大拙演和尚。執師責之禮。和尚授以鶴林隻手則。
師承。意刻志。孜孜兀兀。或七日斷食。獨坐。攝心。或至
北野菴。凝坐。拜殿。廊廡露地。七通宵。洋礪工夫。而
服勤近事者。三閱月。和尚召師曰。爾來試之。汝志願
較些子。宜祝髮而參堂。十一月廿三日。剃髮受戒。安
名曰守拙。乃入選佛場。從衆入室。晝參夜參。無有怠
慢。時演和尚日講佛光國師行狀。師在末席拜聽。一
日。聽至國師十二歲。侍父遊山寺。聞僧吟竹影掃塔
塵不動。月穿潭底水無痕。覺警省處。師忽徹。臍洞
然如消礙。膺物。頗覺省力。講后入室。將呈所解。和尚

怒罵便打。每每如是。師常含淚出室。至路次。無人處
而泣然。或洗淚。限於困水。而歸堂。或潛至昭堂燈下。
吞泣懺悔。宿世罪業之深。至制末會。演和尚抱病不
許夜參。師旋院侍藥。翌年。尾州總見寺有卓洲和尚。
忌齋會。一衆去尾陽過一夏。師獨侍藥。不暫離巾區。
此夏。演和尚閑居。僧堂侍真寮養病。獨許師入室。師
看病之暇。刻意參究。有元規上座者。抱道人也。與師
留護僧堂。看師刻苦。時來慰問。打古人話。着激勵。蓋
益友也。此僧後住萬山寺。號。師亦自。獲。遍。精。勵。
刻苦一日甚一日。晨參暮叩。如救頭然。演和尚依然
罵倒。又打倒。而不垂一語。苟見師面。忽發怒色。恰如

蒼龍窟年譜

四

謹故。師彌恭敬服事。不毫措意。至東嶽。撫背。勸圓探
薪汲水。灑掃忘勞。就之。只恐不周。當此時。師欲言莫
可言。欲呈莫可呈。進不得退不得。仗倆維谷。知見皆
忘。怏怏鬱鬱。飲食無味。形容羸瘠。面色如土。人皆謂
拙公禪病革。必近日斃矣。一夕。當誦拙和尚月忌。演
和尚旋院而寢。師私意他人不知。我純工殆熟。大悟
時至矣。乃深夜獨入禪堂。抖擻精神。確坐攝心。眼不
交睫。清清純熟。不知窓白。只恍恍覺曉。版聲僅入耳。
已。不堪怡悅。愈益提撕話頭。凝坐體究。終日不出堂。
粥飯皆忘。比至黃昏。忽然前後際斷入絕妙之佳境。
眼耳惺惺。如眼耳皆無。須臾胸次豁然開。真眼耳見。

按此係天保十三年壬寅四月二十七日事二十七歲

大好事聞大好聲。自知自得恰如飲甘露。從前之疑團。從前之學碍。徹底一時雪解冰釋。忍俊不禁不覺不知衝口連叫曰。我神悟矣。吾神悟矣。百萬經典。日下燈也太奇。也太奇。乃說偈曰。疎澗孔夫子。相逢阿堵中。憑誰多謝去。好媒主人公。即忙走院呈見處。演和尙始微微笑。師曰。某曾聞禪有妙悟。今日始知古人。不欺我也。演和尙曰。爾莫以一旦之慶快爲是。自今須懷四句誓願。輪煥發無量妙慧。透過無數因緣。而識得末後別有生涯。無慧之定坐邪定也。慎勿無念無心了。其餘諄諄含淚警囑。自昏時至初更。師感承拭泪而退。自是每師入室。演和尙多以數段因緣。

著龍庵年譜

五

弘化三年丙午三十一歲
弘化四年丁未三十二歲

或直前看破。或一二日透見。每每拈括快活。自然口吐妙言。機呈妙用。一夜演和尙謂師曰。箇事譬如剎珠珠相似。愈剎愈光。愈琢愈明。我已一剎珠。爾了。勝個幾生工夫。思之。即書一語與師曰。臨危不變。真大丈夫。此子一經師授。其文。師悅喜不啻。追日神采煥發。禪病自然快然。形容復舊。面色增潤。人皆大異之。師懷秘勸喜而不漏。密密參究。不怠焉。丙午秋。演和尙應江州青土青龍寺聚會之請。講大惠武庫。師從侍院。丁未夏。會備前州曹源寺儀山來和尙。偕初開會結制。演和尙命師令從衆掛搭。師往參叩來和尙。來和尙示以黃龍三關。峻機活手。雖爲快泊。師孜孜刻意。

嘉永元年戊申三十三歲

不日透關。其餘令看數段因緣。一夏中大覺得力矣。其多。來和尙應紀州和歌山禪林寺結制之請。師充副隨。此冬。演和尙住相國寺。戊申春。師赴阿州祥瑞見性寺。大震和尙初開堂五祖錄會。一覽鳴戶。峻難有感矣。作無字長歌。此秋。來和尙游但州城崎溫泉。養病。師侍巾匣。此時師看南泉一株花話。侍浴之暇。孜孜兀兀。如在禪堂。一夜定中。頓忘從前所得。敬見王老師用處。其冬。在護峰掌炊爨。時看疏山壽塔因緣。一日當炊飯。豁然省覺。即走叩室。來和尙瞥見師氣貌之異。惡發曰。參禪一日一次而足。爾何來參之。無節。師叩首拜手曰。多罪多罪。弟子提撕公案。寢食

著龍庵年譜

六

嘉永二年己酉三十四歲

嘉永三年庚戌三十五歲

皆忘。何況遠考節乎。直前呈見處。來和尙呵呵大笑曰。好在己酉春。赴豫州小松佛心寺。陽州和尙初開蓮碧崑錄會。始參圓龜。峻河和尙。令看雲門關字。頗峻峻。師忘寢食。參究。竟快活看破。又徹見玄沙未徹。在話。願忘。蹈舞。此冬。在護峰侍院。壓看白雲。未入話。南泉遷化話。徹骨徹髓。洞見古人別妙處。庚戌春。師乞暫暇省本師。此春。來和尙應丹後州天橋智恩寺請講臨濟錄。師自京師赴之。會中在尊宿寮。撞著黃檗。噀酒槽話之妙處。此夏。相國寺結制。演長老講普明錄。師歸侍院。演長老命師訓誥講錄。師在寺中雲泉菴。勤之。來和尙登山受衆參。其餘東海巨海大震。

嘉永四年辛亥
三十六歲

嘉永五年壬子
七歲

諸老宿皆來護一會。師歷謁勸見家風。制了。師又赴備前。冬在禪堂掌直日。時看牛窓。儒話。晝參夜參。流白汗。窮明。竟洞徹。東山下妙密大事。師辯在橫山夜話。辛亥春夏。在護峰常住。秋冬侍院。其間乾峯三種病話。崑頭末后句。其餘難透。請訛因緣。大抵參詳盡矣。壬子春。來和尚應尾州岡田慈雲寺。請師充侍衣。隨從過浪花次。偶過桑梓。父母猶健在。拜請來和尚。大開餐筵。此冬。師蒙來和尚命掛錫東福寺。佛盤忌結制會。賴翁俊和尚講佛光錄。師始參扣俊和尚。令看首山綱宗偈。及風幡心動話。皆透徹矣。武卿文。越溪謙。義堂碩諸老兄。皆來輔一會。師掌選佛場直日。

蒼龍窟年譜

七

嘉永六年癸丑
三十八歲

制中丁恬憂旋鄉會葬。葬了復上惠山。及解制下山。俊和尚書綱宗偈。充職別文和尚書送行偈曰。寒苦濯腸玉澗流。雪消還問旭川頭。山翁一笑收雲月。各地清光春色優。謙和尚偈曰。結眉交膝九旬中。山月海雲話更雄。欲寫離情無一句。好擔榔櫟弄春風。師諸老見實遇。加此春反備前侍真。百丈再參臨濟破夏因緣。及錄中請訛件件悉參詳盡矣。夏泮鍊五位十重禁之奧旨。三滲漏語。及洞山頌。拈弄記訣皆畢。更質問浮山九帶汾陽十智同真等之蘊頌。盡微細焉。此秋歸京省。本師病。師時三十八歲也。臨大別來和尚援筆書曰。叱箇畜生。有來由沒巴鼻。放下索頭。

安政元年甲寅
三十九歲
安政二年乙卯
四十歲
安政四年丁巳
四十二歲

却不犯他稼苗。羌笛一聲歸家路。轉回咸音劫外春。至這裡。大小廊巷亦漏逗不少。云云。此言師之淨心禪超尊者扶杖送師。戀戀不忍分袂。遂至船橋。船橋距岡山三里。此老年齡八十有餘。而如是惜別不厭勞者。可知名宿寵愛師之深已矣。冬。師侍本師病。十一月。赴父確乎齋小祥忌。撰墓誌銘。此冬。來和尚依事蒙官怒。盤居京師。諸老相議使師慰問。無幾冤解。翌安政改元甲寅春。師在相國寺常住。受同門之請。四月。赴峨山。管應王院庫厨。乙卯春。住瑞應院。轉位天龍第一座。冬十月。演長老戰化師往看侍。且周旋葬事。丁巳夏。天龍寺連環會結制。師充副司。冬奉本

蒼龍窟年譜

八

安政五年戊午
四十三歲
安政六年己未
四十四歲

文久元年辛酉
四十六歲

嶠上方命。赴丹後州天邊雲門寺。勸并竺印和尚乘拂。戊午秋。會防州岩國府永興禪寺。盧席專价奉府主之命。至請僧。本嶠聚議。撰人。提師令應。請己未早春。以官船迎。大方諸老宿送章贈序。別記二月十二日。晉山。不日雲衲掛塔者二十餘員。此春。來和尚奉勅住妙心禪寺。尋夏應雲州廣瀨城安寺。請講臨濟錄。師率衆掛塔。來長老命令。聽參禪。師始出。無字歌示衆。此夏。府主降命。再建庫厨。師尋鑿新井。建丈室。扁曰蒼龍窟。文久開曆辛酉春。曹源寺寶船燈和尚催初開會。馳專价請師。師率衆赴之。賴翁綾山武卿越溪義堂之諸名宿。皆應請來輔一會。會中諸老勸

師發軔。師固辭。不可。竟受之。此夏。雲杓輻輳。無處容衆。且資糧不足。以三粥過一夏。師心深憂之。一夕恍然感靈夢。有神人駕雲而至。徐徐白。師曰。和尚來。我境內興隆大法。不堪歡喜。我使二叟助子勞。莫復憂。便引二叟見師。一叟有髮。一叟無髮。師欲再視面貌。夢乃覺。師私喜。而不敢語人。秋間。師欲以自力再興僧堂。乃白官。且乞許封內鉢。皆見許之。加之賜官銀若干。以充營築之助費。便甫工焉。當此時。境松菴熊谷大心二老。自來相談。合心斡旋諸事。一人有髮。一人無髮。與師夢冥合。暗知鎮守權現影響護持師法道也。若國橫山莊之鎮守神曰。白山妙蓮權現。此年。師母八十四歲。在浪

若龍庵年譜

九

文久二年壬戌
四十七歲

元治元年甲子
四十九歲

慶應元年乙丑
五十歲

應二年丙寅
五十一歲

花蒙官賞。賜以金圓。壬戌春。師撰禪海一瀾。呈府主有格公。藩中居士濟濟。勸參禪。秋。師赴長州。荻善福寺聚會。聽衆參來。長老歸路。見訪。書僧堂扁字。賜之。十月。僧堂成。名海雲堂。蓋舊名也。二十二日。修開單式。甲子夏。五山碩學清隱岳長老。自對州歸次。艤官船于新港。將自來賀禪堂鼎新法道興隆之盛事。時天下形勢變革。官不許。廊內入他邦僧。故師自到新港。仲謝。設饗筵。祝長老之旋山。慶應改元乙丑冬。修開祖正當五百五十年大齋會。師拈香云。東山甘露左邊禪。大器滿餘。潑梵天。五百五旬乾不盡。恩流尚浴溫洪川。此年。師母八十八歲。師書偈遺賀丙寅春。

慶應三年丁卯
五十二歲

明治元年戊辰
五十三歲

明治二年己巳
五十四歲

若龍庵年譜

十

師上阪設母公米齡壽宴。此春。勅賜來長老佛國興盛禪師徽號。師自阪陽歸次。登護國峰慶賀。四月有格公降命。遷桃源院殿尊牌于師山。新令鼎建靈牌殿。名圓妙殿。六月。開兵端。閩國譟擾。舉城運家財。逃避焉。師確不動曰。貧道與開祖枕寺斃已。即書遺偈待兵至。偈曰。殺魔殺佛。五十一年。未後無冤。清風亘天。且示衆曰。爾等遍述此。匿山寺。須期後榮。衆皆勉強侍師不去。此冬。鎮僧堂只居舊參四五。納於常住。令參究。丁卯三月。有格公逝去。秘喪。世嗣君聽政。此冬。防長事件寬宥之宣辭自天。朝降下。便被許本末諸公入京。明治改元戊辰四月。世嗣君上京。朝命以有格公叙從五位下。任駿河守。且抽城主格。此歲。朝廷禁神佛混淆。防長之間。官行廢寺合併。此冬。師應萩城大照院請。應今之增結制講碧峯錄。先是官禁他國僧入封內。故長防石三州僧輻輳焉。己巳春。世嗣君參朝。依願被許有格公隱退。帝手自賜數種珍器于世嗣君。尋令繼家世。叙從五位下。任駿河守。便歸國。發有格公喪。明治改元戊辰夏。以瑞應寺僧堂定二州叢林。自宗藩政府傳依願書于嚴府。官廳請師爲師範。師蒙官命。乃赴瑞應寺。再結制講碧峯錄。九月。制間。師應金谷正燈院請。講碧峯錄。授菩薩戒。此歲。諸侯返上板籍。六月。朝廷以諸侯爲

明治三年庚午
五十五歲

明治四年辛未
五十六歲

明治五年壬申
五十七歲

蒼龍窟年譜

十一

知藩事。冬制師三赴瑞應寺。講碧巖錄殘卷。庚午春。師四赴瑞應寺。結夏。碧巖錄卒業。講無門關。四月。朝廷始發宣教使于天下。諸藩專行廢寺合併之令。冬制在瑞應寺。講臨濟錄及禪海一瀾。辛未春。師應赤間關永福寺。請講五祖錄。授菩薩戒。四月。移瑞應寺。常會於山口乘福寺。師應請講五祖錄殘卷及祖英集。此歲。朝廷廢知藩事。改定郡縣之制。大小諸侯皆歸東京。爲華族。廢天下寺院祿制。貶僧侶位格。視編民。釘戶籍番牌于寺門。壬申春。止乘福寺常會。再開海雲堂。攝方來羣侶。春間。依士族居士懇望。讀寒山詩。聞提記。聞制中講息耕錄。四月。純圓獨妙塔落成。讚此春。朝廷廢神祇官。止宣教使。新設教部省。乃召大社祠祝大寺住僧。命教導職。秋七月。師應天龍大教正之徵命。登崎。便因。朝命補教部權大講義。尋以諸老推任住臨川寺。修登壇秉拂式。有法語。記制間講寒山詩。聞提記。聞制中講枕安國語。十一月。師應廣嶋濟門一派。請赴金龍寺。說三條教憲。又提唱臨濟示衆章。同月。以縣廳撰舉自教部省。命師教導職管事。此冬。師昇級教部大講義。朝廷禁止僧侶托鉢。師以歎願建言。托大教院管長。奏上于教部省。未報許可。之有無。海雲一來待開制。大抵分散。別有自炊辨道僧數員。留在海雲堂。朝廷被廢舊

明治六年癸酉
五十八歲

明治七年甲戌
五十九歲

蒼龍窟年譜

十二

曆頒行太陽曆。以十二月三日爲癸酉一月一日。癸酉一月。師應縣廳召赴山口。議中教院新建築之事。二月。臨濟黃檗十管長連署到來。促師之速赴于東京。師以縣廳命辭之。朝廷廢管事。縣廳以師爲教導事務頭取。四月。師應室積如實寺。請授菩薩戒。五月。縣廳徵師於山口中教院。乃應各宗教導職。請講法華經。九月。天龍大教正派出至于中教院。被許師着色衣。且委任教導取締職。教正歸路。信宿于師山。十二月。師竟講法華經了。歸岩路次。鳴瀧關雲寺。本門斷泥長老請師享之。尋歸山全昌寺。本門寒山長老亦請師。遂宿于全性寺。別記甲戌二月。應鹿野醫王院。請授菩薩戒。四月。赴于山口中教院。五月。赴于萩城。督責不奉教旨怠惰僧。次瑞應寺。一週間。九月二日。師應縣令氏命。於山口懲役場。說教。罪徒凡三百名。十月。官允許師所著禪海一瀾之梓行。乙亥四月十四日。師在山口中教院。受東京十山總費大教師撰任之命。縣廳亦從許之。下浣。招一派教員。近利僧衆於中教院。行告別之茶禮。翌旦發山口。而歸于岩。五月十八日上船。宗璘宗文二首座隨伴。十九日。至上之關。就氣船。二十一日。著攝之神戶港。即日移米國氣船。二十三日。入橫濱港。翌登勝林山。寺。金地院。在。于。二十八日。於書院行大茶禮。管長獨圍

大教正。議事實錄。石窓、南谷等諸講義。會計陽州保

菴。助教龍淵、東嶽等諸師列坐。請師拜費長。於上。與長同。

對六月一日。開講。提唱碧岩錄。府下院主教員多衆

取謁。七月一日。移單于新總雲湯島。在東京。麟祥院。轉

讀大般若。同日本龍寺東堂職帖。自同山送來。十月

十四日。補權少教正。先是錄倉圓覺寺。圓山代歸源

院融峰長老。濟蔭菴潤石座原。共憑荻野教正。通謁

于師。乞敦請住于本山。教正亦從勸之。師固辭。不容

矣。三來四謁。更呈一山懇願之印署。懇懇縷述情實。

於是師私謂。夫物之塵替在盡人事。與否彼鹿山是

吾乃祖父開榛之道場也。今知一門如是乏人。強辭

蒼龍庵年譜

十三

之。不可謂之好兒孫志情。一山既盡人事來矣。余雖

不敏。亦欲敢盡吾人事。若窮盡在我之力。而不足補

之。則命也。然徒以謙讓之誼辭。而強遁其勢。其若乃

祖之冥鑑何。竟自一決。領焉。十一月四日。教部省召

師。以特撰命。圓覺寺住持職。十一月廿八日。師始晉

瑞鹿山。乘輿。一山衆門迎。入平等軒。行大茶禮。翌日

徒院寮。名一。十二月八日。修開堂式。別院。大教院議

事。石窓南谷兩講義登山。府下。海。講義。沖和一。及。之。喜。

中流。赴于大教院。董總費生徒。參。制。衆。凡。百。餘。名。丙。

子歲旦。於大教院。祝聖燒香。別院。二十日。參。內。賀。正。

拜天顏。二月一日。修開院式。提唱臨濟錄。偈曰。二十

明治九年丙子
六十一歲

三流一卷錄。錄中仰見幾重關。自新將箇正法眼。欲

照五洲海外山。講了說教。述智光特權說。次刻轉讀

大般若。有新。之。說。教。二。座。二。講。講。師。五。月。十。五。日。

令廬山。法。天。教。立。省。天。令。信。三。座。原。乘。拂。于。鹿。山。師。證。

明。小。衆。觀。禮。上。堂。有。法。照。別。記。七月十六日。教部太補。穴戶機

君招師。開宴于巢鴨別莊。因基賦詩。山田參議亦臨

席。終日興不窮。繼之以燭。同月。禪海一瀾。於山口縣

刻成矣。公行。因居士懇願。本講。後讀禪海一瀾。九

月。補權中教正。十月三日。忌。開。題。十五日。會。利。師。衆。歸。

山。兩會皆奏樂。始。自。丁。丑。歲。旦。於。大。教。院。祝。聖。燒。香。

別院。一月二十日。參朝賀正。拜天顏。二月。居士發起

蒼龍庵年譜

十四

梓行無字歌。同月。鹿山塔頭歸源院。開祖佛惠禪師

遠年忌。請師燒香。師提唱佛祖三經。尋授菩薩戒。徒。減。

凡。七。百。名。三月。師浴熱海。二。週。又赴東京。結夏。六月。正受

老人崇行錄。刻成。八月。靜寬院宮。宮。和。堯御於芝增

上寺。修津葬式。師出頭燒香。同月。九山教正聚議。止

管長費長。別置管長代理。及本校係。師得八山教正

連署謝書。退愛上堂。世。時。了。提。唱。拈。主。丈。曰。文。殊。白。

槌世尊下座。領八山謝書。山僧旋山。且道。即今與二

千年前消息相去多少。諸人若會。則風乎舞雩。詠而

歸。不會。則黃鶴樓前。鸚鵡洲何也。太。主。風。吹。柳。絮。毛。

毳走。雨打梨花。蛺蝶飛。卓。主。太。乃。以。九。月。三。日。開。告。

明治十年丁丑
六十二歲

別筵于大教院。享應一衆。翌日辭院。又依居士請待
信宿池之端小亭。不日旋山。先是鹿山執事再出款
願書於大教院。乞見許。師解發長職而歸。住於山院。
議未可納之。旋延至今。執事頻逼責。以今也既動職。
垂三年。且間聞有人潛企學制改革之舉。師亦不欲。
永勤預通書西京二三教正固辭職。以故速決如上。
處置云。師歸山。遂開正續院禪堂。以本分成規接禪
子。東京居士就正傳菴稱擇木園。勸參禪。制間講。無
門關。十月。開山忌。舍利會。燒香如例。奏樂。十月下旬。
令關與休東勝。續燈。傳宗。濟蔭。莊嚴。古海。
應南。永昌。海藏。高松。十頭首。臨時秉拂。師證

蒼龍窟年譜 十五

明。三上堂。十一月十五日。修禪堂開單式。轉讀大
般若。有普說。制中提唱臨濟錄。十一月。師建築
藏六菴門。且納衣資于藏六。以爲永續金。戊寅三月。
戶塚驛海藏院開山方外大和尚。五百遠年
忌延在。請師燒香。且修授菩薩戒會。因於溫泉寺
依東京居士懇請。師赴熱海浴泉。三。因於溫泉寺
溪莊講碧巖錄及禪海一瀾。浴泉中接棲梧老師計音。山乃集一山僧侶修小佛事。有祭文香語。先是
舊尾州藩士族刑部玄三男伊佐丸者。爲弟
子。五月七日。於藏六菴修剃度式。改名宗弼。齋一山

明治十一年戊寅六十三歲

僧侶。五月二十日。師補中教正。八月。結本山永續講
會。九月。此夏。師禪餘賦鹿山十境之詩。山衆議。新鐫藏于本山。十月。開山忌。舍利會。燒香。
山衆議。新鐫藏于本山。十月。開山忌。舍利會。燒香。
同月廿一日。天照山光明寺佳招。上北陸巡警還御路次。十一月八日。以藤澤山清淨
光寺爲行在所。師參候。拜天顏。同月十五日。入制。講
虛堂錄。十二月。先是文部官員妻木賴矩居士登山。
懇需上梓師之著作飲醍醐。本月刻成。己卯歲三月。
豆州熱海溫泉寺開山勅諭神光寂照禪師五百年
忌正當。請師。講臨濟錄十五座。授菩薩戒。師歸路上。
圓通山。在豆州。禮獨妙禪師及東嶺和尚塔。

明治十二年己卯六十四歲

蒼龍窟年譜 十六

照。見星定和尚。澤兩山住僧。出頭縣廳。呈真土村民。願書於縣令宅處。見令公。篤依賴。十月廿二日。證明
上州泉龍寺天瑞師臨時秉拂。十一月。製釋迦譜要
略序。庚辰四月。舞岡長福寺本堂落成。入佛慶讚。請
師講臨濟錄。授菩薩戒。五月。東部大會講。出頭麟祥
院。勤主任管長。同時應東京居士懇願。於池之端實
岑新居。二周間講碧岩錄。茲實岑鐵心二居士主張
與禪子等。釀金。寄附大藏經縮刷二藏于師。乃昇拜
請結約證書于弘教書院。路與淨智徹道子航橫須賀。觀造船寮。五月。編興盛

明治十三年庚辰六十五歲

明治十四年辛巳六十六歲

先師道行記應黃薇賜谷子需五月廿七日捕權大教正先是東京本街四衛小橋平兵衛者其母入師門為禪子發志投師懇求為出家九月廿六日母慈明登山於正續院修剃度式安名宗虔齋一山僧侶十月一日證明武州甘棠院大宏和尚開堂十月製解惑編序及劍持母子合葬墓誌銘同月於本山修菩薩戒會講臨濟錄戒徒四員同月應居士請赴東京於練堀街參前社講碧岩錄辛巳一月製東京市谷月桂寺鐘銘三月於正續院修含輝老人十七年忌齋會來約一百餘員十五座講忘路集本光和尚越吏師等來助一會同月製甲之惠林中興快川國師火定

蒼龍庵年譜

十七

碑銘此春武州西多摩郡小川邑法林寺欠席請小徒文冲為住職龜山心田長老周旋此月赴之令宗弼宗虔隨行四月三日丁快川國師三百週年忌辰本光和尚應請師亦有緣由應請率眾赴甲州寺在東山梨郡松里村距甲府東北四里夢窓國師開創之至武田信玄領國迎請快川國師中興之遂改屬妙心派寺觀盡善盡美園庭築山泉石殊好夢窓國師作之云今會二十座本光和尚講臨濟錄來學一百餘員四月中旬會了師有豫約請直取路東京路次遊山田廣園寺在入王尋赴東京應居士請二週間講碧岩錄新地之編先是三等判事北代正臣號漢佐竹舊

明治十五年壬午六十七歲

蒼龍庵年譜

十八

臣田代葆所立共入門為居士三月師在甲之惠林受請赴甲府東光寺清隱大和尚十三回忌齋會有拈香五月證明寒光寺月洲和尚開堂開祖六百年大遠忌在却後十八年師發志欲再建禪堂與鳥尾得庵山岡鐵舟中島長城諸居士謀師製化緣發起勸進帖出京託各士暑月因事往伊豆國清寺歸路巡回小田原門中途次上大雄山最上寺詣道了權現祠訪原坦山溪房待過賦詩謝歸十一月伊豆八幡村保福院太子堂落成入佛慶讚請師修授菩薩戒會十二月十六日西京東福寺有火伽藍燒失師修火災慰問書呈匡道教正十二月十日證明乘拂壬午歲旦祝聖如例在別二月師任七山管長出張于芝金地院內事務所三月本縣愛甲郡煤谷村金剛山正住寺請師修授菩薩戒會師為衆提唱鑑智大師信心銘歸次赴養毛山寶蓮寺講燒香般若會同月師應武藏國西多摩郡青梅日影和田村德昌寺請修授菩薩戒會為衆提唱真覺大師證道歌分散歸路枉駕赴小川法林寺信宿赴且頭義右門之請開享宴時廣園寺祖忌在四月某日師登山應請燒香宿塔頭向陽院四月師應豆州那賀郡安良里村天井山龍泉寺請修授菩薩戒會為編素提唱席庵禪師十牛圖頌歸次滯在熱海溫泉寺浴泉時醫

明治十六年癸未六十八歲

王寺新築。應請轉讀大般若。有拈香。五月。定會入制。提唱大惠錄。同月。撰東福寺再建大勸進贊成疏。應九條公需。六月。製長沼正安寺阿彌陀堂再建募緣簿序。八月。製奥山吟咏集序。本年春。師借望岳臺之廢絕。募緣戶塚。釋內山豐民居士。起十笏小亭于舊趾。成矣。師賦一偈。申謝。秋間。師應越中州國泰寺主越叟和尚。需撰本寺再建募緣簿序二通。一寺主一草主十月。歸源融峯東堂還寂。師燒香。冬日。就實岑居士別莊。應需製小西湖八詠。書與癸未歲旦祝聖如例。記。西月一月。製繪刷大藏經跋文。贈弘教書院發起居士色川誠一。同月。若之宗演禪士大事了畢。

蒼龍庵年譜

十九

師與偈表證明之意。二月。師七山管長職及滿期。與後任南禪教正梅嶺和尚交代。三月。製丹波州冰上郡御油山田莊永谷山圓通寺宗四永續講會紀念碑記。四月。製武州永田江湖道場禪堂再建募緣簿序。同月。師應本縣足柄下郡風祭村永祿山寶泉寺請。修授菩薩戒會。提唱佛祖三經。五月十三日。與潤石藏界宗演宗海宗真諸子。遊叫喚冥王岩。有記文。記。別七月。正法眼堂再建竣工。師製上梁文并銘。此舉也。師發志在明治十四年孟夏。師之拈据配座。或逕回東京居士宅。或逕回近村豪農。其苦心不尋常也。僧衆等亦分手制間募緣大方諸寺院及有志家。制中

日日起土木之作務。或運搬負荷不厭遠路險徑。其苦辛亦不可言矣。今也及大成。實可爲大法賀也。八月。師赴相國寺二世國師五百週年大會齋。七月二十六日。衝秋暑發車。月末到浪華。師詣考妣墳墓。八月初旬。自浪華汽車直投鹿苑寺。挽留金閣之名園數日。有作。記。別八月十一日。遂登年山。宿心華院十三日。預修大忌齋。道具九條法堂出頭。列嶽教正皆對面。師常在心華。聽衆參請。草應待遇。至矣盡矣。累之廿一日。先師大拙老漢三十三回忌預修。於本山客殿修佛事。師供奉薦偈。出頭了一日休憩。下年山。獨園和尚及心華院衆皆門送。金閣寺主心華院主東

蒼龍庵年譜

二十

嶽子等送至停車場。上汽車直投浪華。今北氏數日滯留。又乘汽車至兵庫。自神戶搭汽船。來時侍者宜聞子。歸時宗演子侍之。但。以有祖忌。燒香及一。派大會。隨之。約。日。而。歸。若之宗演禪士者。妙心越溪和尚之徒弟也。久依師。已了畢大事。本年一月記之。這回幸有西京行。師先登法山。見越溪和尚。乞之爲師徒弟。師豫意吾鹿山佛日菴虛席。此菴歷代結緣于僧堂也。深欲令渠補之也。九月三十日。師歸山。十一月。撰大德僧堂再建募緣簿序。同月。撰獨園和尚日薩隔行化贊成記。十一月。撰方廣開山聖鑑國師語錄序。冬。制令演禪士爲座原立僧。向轉位於第一座。以洪嶽爲道字。於隱寮開

明治十七年甲申六十九歲

入衆宴。祖忌拈香表喜祝意。記別十二月佛日庵講洪獄許令爲住持。甲申歲旦祝聖如例。記別一月製正宗國師兜專使稿序。二月師應鳥尾得庵山岡鐵舟二居士之請。蒞明道協會。提唱碧岩錄。自此約每月一會必臨席講演。三月師應相州大住郡下糟屋村千秋山普濟寺請。燒香縮刷大藏經繙轉式。尋修授菩薩戒會。且師爲緇素拜讀佛遺教經行化導。此春師因東京居士等懇請。赴妻木棲碧居士宅。拜評毒語心經。四月因鎌倉四山協議。開古物什寶縱覽會。十月十三日。妙心本光軒越溪大和尚遷化。八月隱寮一擊齋再建落成。師自佛日移徙焉。新室名蒼龍

蒼龍庵年譜

二十一

明治十八年乙酉七十歲

窟。古山下別號遊仙窟。記別蓋隱寮再造之費頗巨。額也。以師之別願一切係自費。只木村本山出之。工費。師自費及諸。其也。一。山衆及僧堂衆信徒衆。乙酉歲旦祝聖如例。記別師之設新室也。以遠忌中接待大方尊宿爲主。次之以老來從容自得養道體爲樂。故以來改一擊亭爲遊仙窟。師今茲已古希。遇開祖之大遠忌。得達其樂。豈偶然哉。師自言。余壯歲發菩提心。霜辛雪苦。今至此境界。是余修道之結果也。是余所望之極樂界也。亦何求。即所以自名遊仙。只這是已。二月。撰退耕語錄序。蓋本年十月初三日。恭值開祖國師六百遺年正

蒼龍庵年譜

二十二

當之嚴諱。唯計時之便宜。以春四月初三日定忌齋。預修當日。春間經營一會。自三月廿三日至四月廿三日。期三十日。聚方來耆侶。令爲報恩修三摩耶行。加之師日日講演開祖錄中圖覺語錄。晝間夜間勸受來衆參請。其他佛事之循序。以三月二十七日修會中所薦。繙轉拜讀縮刷毘盧大藏經。山有三。今會所獻。師今受會中。新東京居士。師有法語。記別二十八日。師打終日享應。講前諷經。獻香于棲梧無爲兩先師。有香侶。記別且自四月十五日。起一週間。開祕龍佛牙舍利寶塔。使十方緇素瞻禮結緣。師日講後說戒令緇素懺悔禮拜陳情乞戒。遂以二十三日滿散。師親授菩薩金剛寶戒。授與血脈。戒徒一千二百有餘員。造立巨大木浮圖於法堂前。且行大放生。師燒香有大法語。記別右大會圖成了矣。抑此會也。雖素積年之所心算期企矣。以客歲秋有大風害豐稷。忽變凶歲。人民落膽無活氣。於是至歲末。本嶠欲改議。開本末大會議。與議區區。或曰。可延在。或曰。可止。聚會。師起身憤然曰。老僧熟按古人不言。爲法者不避喪身失命。畢竟今回之報恩會。亦爲法者也。豈如隨歲之豐凶而變心志。陋劣之本願心。則何可謂爲法。且報恩之趣旨哉。師一意主張前議矣。於是遂不至變換前議。與議整頓。自是本末諸子協心戮力。憤發

周旋漸次準備完全。馴致彌以三月二十五日開大法會。來賓二百五十餘員。獨圓迦山大柱貫道真淨諸老等。率輪下龍象來助一會。師一日講後。爲編素說法之次。話云。所謂凶年飢歲者。自衆生不信正法。心行非法之業。感招來之天災也。然則不是自業自得果乎。若又在家衆皆起善心。信正法。打善根。供養。以行殊勝佛事。必得國家安穩。五穀豐熟之好結果。決無疑焉。以佛說爲證據。心地觀經曰。若有人民信正法。能行善心。現世安穩豐樂。所求無不稱心。云云。果然則出家者行業殊勝。各專一行。佛行。令在家善男善女起信心。是庶幾師又告善男女曰。各各看

蒼龍窟年譜

二十三

看目前出家大勢。集作勝修行。是五十年一度之機會也。此時不成。上好供養。又何時得植好善根。各失此好時節。難再逢這個時節。今日幸逢此好時節者。誠深因緣幸福之人衆也。上等幾許之善根功德。皆隨意成就者。只是此時也。不可失矣。不可失矣。各各發此善根。布施于其身。現在其身有光輝。當來生善處。何等幸福加之。若自分貧不能行善根。便說其善事。以勸他人。令生善信。其功德亦如自分植善根。尋懸識以實。愚經中佛說。吝金執著。死後作毒蛇之因緣。於是乎。人人善信之氣。概沸騰。門前其他遠近之農商信徒輩。自米薪野菜。至鹽豉醬油等。或臥馬積

車郊路車馬陸續。不知其數。大販庫下。其日日供養。凡三百有餘員之縑素園衆。猶有餘贏。物品溢狼藉于庫厨內外。世間皆稱不景氣。一到吾山中。頗極豐饒。可謂盛矣。是何等因由。歟。人皆成不思議之想云。侍者亦有奇哉之嘆。爲後代記之。

籌編老師年譜。絕筆于此者。蓋有說焉。老師嘗曰。約住鹿山之本意。會國師遠忌將近。故偏盡人事。而欲獻酬恩一瓣香於大齋會耳。無復他故。由此觀之。遠忌而圖成。則如老師本意已達者。而明治十八年。乃屬遠忌。故備錄其事。而不及其以後。是此譜之所以絕筆于此。而當時老師亦首肯稱善。

蒼龍窟年譜

二十四

焉。後七年。老師示寂。作末期偈曰。忘却今忘却今。不風流處也。風流。蒼龍俄爾巴蛇變。稍被冒頭萬事休。實二十五年一月十六日也。世壽七十七。法臘五十二。廿五日。茶毗于相之金寶山。欽遺骨於骨清窟。今將付梓。爰錄絕筆之故。并略載其以後之事蹟。

明治二十七年三月

參學 釋宗演并有志衆等拜記

跋蒼龍年譜

予少時客氣頗熾盛。常好讀古今英雄豪傑碩學高僧紀傳。尤喜悲憤慷慨之言。卓勵倜儻之行。偶閱傳燈錄。德山宣鑑章曰。師在西蜀講金剛經。因教中言。金剛喻定後得智中。千劫學佛威儀。萬劫學佛細行。然後成佛。他南方魔子便說。卽心卽佛。遂發憤擔疏鈔。行脚直往南方。破魔子輩。初到澄州。路上見一婆子賣油糍。遂放下疏鈔。且買點心。

蒼龍庵年譜跋

喫。婆曰。所載者是什麼。師曰。金剛經疏鈔。婆曰。我有一問。倘若答得。布施油糍作點心。若答不得。別處買去。師曰。但問。婆曰。金剛經曰。過去心不可得。現在心不可得。未來心不可得。上座欲點那箇心。師無語。婆遂指令去參龍潭。予不覺擊節叫快。於是乎。大立撥草瞻風志。發見性成道願。然勝心尙未歇。私恃得力甚易。後再繙傳燈。無端撞着初祖達磨七歲出家得道。尙侍般若多羅二十年。而盡

其蘊奧之一段。慢幢忽倒。慚汗洽背。從是自加精彩。終逮見洪川先師於蒼龍窟。親稟熱喝。瞋拳之鉗鎚。且聆師壯年棄儒投禪。勵精尅苦。晚成大器之狀。則深悔謝予從前疎慢行業。乃拗折主杖。而傾懷欽侍焉。嗚呼。生我者父母。成我者誰。近比舊參居士等。欲纂師生前碩行而上板。以頌之。同火兄弟云。善哉此舉。雖然。若擬唯向此陳編上摸索。師行履。則早已蹉過了。須眼光透紙背。而始得窺

蒼龍庵年譜跋

師真相矣。殊不知噦啣星辰者。卽點師之光明也。迅雷風烈者。卽轉師之機輪也。慈雨甘露者。卽示師之涵養也。其他春蘭秋菊。皎月霽雪。謂孰不師之文彩哉。謂孰不師之精神哉。勿道家醜向外揚。只是傳來報恩底些子耳。

時明治二十七年二月初七

嗣法小子演洪嶽謹稿

書蒼龍窟年譜後

右蒼龍窟年譜一卷。往年與洪嶽禪師等據先師洪川老師自述而撰之。然至其神髓處。存原文。不敢增刪隻字。頃者胥謀。付之手民。初欲與蒼龍廣錄合刊。而廣錄已梓。故前後別行。讀者宜參觀而咀嚼焉。蓋師之何如而發大願力。何如而勤苦修行。何如而厭離見性。何如而光明碩大。以照映乎浩浩焉落々焉之境界。徵之二書。則思過半矣。且

蒼龍窟年譜後

夫一念差失。永劫墮壞。六塵清淨。即心成佛。庶幾觀於二書。以攝心修道。剎那勿懈焉耳。刻成。謹書其後。

明治二十七年三月 參學 竹塢居士識

明治廿七年四月十七日印刷

(非賣品)

明治廿七年四月二十日發行

東京市牛込區北町三十八番地

編輯人 北條時敬

東京市日本橋區通一丁目十八番地

發行人兼
印刷所 大倉保五郎

東京市京橋區築地二丁目十七番地

印刷所 株式會社東京築地活版製造所

佚名撰

東海一休和尚一代記

文政十二年（一八二九）跋刊本

據文政十二年（一八一九）
跋刊本影印

東海一休和尚一代記

後小松皇帝應永元年甲戌

師利利種其母藤氏南朝簪纓之能事
後小松帝能奉箕箒帝寵渥焉后官譖
曰彼有南志每袖劔伺帝因出宮園而
入編民家以產師雖處襁褓之中有龍
鳳之姿世無有識者正月朔日出時出

一休上

胎

二年し亥

三年丙子

四年丁丑

五年戊寅

六年己卯

師年六歲授京師安國寺長老像外鑑
公執童子後鑑呼曰周建鑑乃龍光鉄

舟濟公之嗣也

七年庚辰

八年辛巳

九年壬午

十年癸未

十一年甲申

十二年し酉

師年十二歲清叟仁藏主在寶幢寺前

一休上

講維摩經聽者數百人師亦往預人皆
目師曰少年有老成去就前程未可量
也

十三年丙戌

師年十三歲竊發遊學志出龜嶠天龍
依東山慕詰攀公而學作詩之法每日
一首爲課祥球書記亦有詩名稱師有
作者風時有見惠侍者諭師曰吾祖別

源翁有秋風白髮三千丈夜雨青燈五十年之句子誦之必入佳境一日詠長門春草有君恩淺處草方深之句聞者嘆服

秋荒長信美人吟徑路無媒上苑陰榮辱悲歡目前事君恩淺處草方深

十四年丁亥

十五年戊子

師年十五歲賦春衣宿花之詩贈炙人

二休上

三

口

春衣宿花詩曰吟行客袖幾時情開落百花天地清枕上香風寐耶寤一場春夢不分明

十六年己丑

師年十六歲結制日聞秉拂僧喜記氏族門閥掩耳出堂乃作二偈呈慕詰翁翁曰今叢林頽靡非一柱可支三十年後子言必行忍以待之其偈曰說法說

禪舉姓名辱人一句聽吞聲問荅若不識起倒脩羅勝負長無明又曰犀牛扇子與誰人行者盧公來作賓姓名議論法堂上恰似百官朝紫宸

十七年庚寅

師年十七歲中秋無月賦佳句八神始依仁清叟于生生預于外書及經錄之講筵叟扣起倒之義清叟每應西官天

一休上

四

人之請說戒拉師與往路過神泉苑小蛇出候叟下投安陀衣為唱戒法則作馴伏狀率以為常一日師竊袖啣石塊候蛇變便打殺叟大羨師曰俊哉此舉衲子手段舉措脫畝政若斯為謙翁唱關山宗旨于西金寺閑房杜門高風激世師往造室謙翁清叟追隨共五年

中秋無月詩曰是無月只有名明獨坐閑吟對鉢擎天下詩人勸賜夕雨

學一夜
十年情

十八年辛卯

師年十八歲顯山相公留心心宗色色
草弊聞清叟壽像僣着金伽黎一日遽
到菴所欲見彼像徒侶股票師偶在菴
請持幘子出迎相公立砌下赤松越州
侍旁年少美大夫也師立屋簷上欲親
度與幘子於相公赤松公咄之進而出

一休上

五

手接幘子師握其手而作丐色相公覽
此像了回駕從者皆曰自非禪者殆不
見有此舉蓋師無豪邁以之可概見也
稱光皇帝應永十九年壬辰

師年十九歲一日師遊泉涌蘭若坐有
生客師問傍僧僧曰來自龍寶山中靈
山汎下闍黎也師乃促牀打話師謂僧
曰今龍寶佛法鋪席盛開惟有曇首座

一人在其餘碌々耳僧驚曰子能知吾
家私師曰吾望江源為登龍門子能先
客乎後在江源逢着前僧僧曰不待指
南善財在此

廿年癸巳

師年二十歲為讓翁一日謂師曰吾蘊
已傾倒於子然吾無左證故不證汝其
為宿德器許如此翁承因無因本色古

一休上

六

衲子也

以讓遜辭左券
故無因稱讓翁

廿一年甲午

師年二十一歲臘月為讓翁寂致祭無
資徒心喪耳辭請清水寺寺舊法自除
日至上元禁人斷穀焚誦歸啓母氏再
請清水經歌中山路出大津驛驛亭人
見師俊衲勃率面挾菜色謂曰雖聞黎

汝如何人豈非師呵咄定後母陰辱耶國俗歲晏家設胡餅人偶成焉與師數枚喫喫了即達石山大士像前默禱道念堅勁無他懇焉焚誦七日山中有僧延師過菴保持甚厚洞下僧也出其家話一百則者需師書之師疾書而予彼喜出金以備旅費一日起太士像前遙步湖橋竊意謂吾投身水中若得命全

一休上

七

則大士加被無疑否則雖委魚腹它日必遂所志大士豈舍我諸將投之頃忽母氏信使至掖而過住曰毀身失孝悟道有日勿爲遲也師不獲已歸京觀母

元二年し未

師年二十二歲初赴江之堅田求謁於華叟師閉門峻拒師意誓吾不得一謁決死於此矣露眠草宿不少屈夜投虛

舟且造菴前既經四五日叟偶赴村齋出門見師蒲伏門側而顧左右曰前日僧猶在此急湏水洒杖逐齋退歸菴見師猶屹不去遂延以處置一語投契孿孿參請有一僧妬師資相得譏吻數啓先師謀師佯爲之間彼恒伺師取焚巾入室百計胥拒或倩童子以訟先師曰每人參問則純子必訟壁伏牀聽之他

一休上

八

日渠不可測師恐未知先師只叱逐童子不問倩主蓋嘗使師屬牆壁之耳也服勤凡九年得其要領早在三四年之速矣

元三年丙申

師年二十三歲華叟會裡枯澹甚矣齋盂不再露江菴濱湖漁者爭隈師與一舟子善夜每借其蓬宿功夫達曙舟子

憫師能耐饑寒每設盤飮羞焉其妻刻甚數輟羹釜師囊儲屢窶歸京或製香包及難婦彩衣得金則徑赴堅田旅具不設鞋笠蕭疎如適城市之易然華叟師平居辛辣色不少假一日命師剉藥指血下涂藥砒叟直視師曰子壯大手指軟弱如此乎師聞此其手彌戰叟微有咲容

一休上

一九

北四年丁酉

師年二十四歲謾岩冲公以作者鳴與華叟師世系也開爐有偈呈華叟師師和曰展開兩手當爐處陝府鉄牛白汗流省師和和曰撥盡寒灰瞞寂子鴻山眼重火星流叟誇岩曰純子避老僧一頭地

北五年戊戌

師年二十五歲一日聞瞽者演妓王失寵落飾之事忽於雲門放洞山三頻棒因緣投機華叟師一日書一休二大字與師為號

北六年己亥

師年二十六歲宗願首座繪先師像求讀讀有願來的的付兒孫之句願公誤認為許可語而稍稍訓入先師聞此震

一休上

十

怒忽欲把幪子來付一火師出啓先師曰願兄老大久在和尙會裡人皆知之今遽火幪子彼何面目之見人哉和尚百年後彼若漫稱券開口則吾必橫身破存之勿為慮也先師怒少霽因把幪子付願兄曰兄能掌膽勿忘焉

口吞佛祖眼乾坤牛裡什覓天魔魂一句語提三要中願來的的付兒孫

北七年庚子

師年二十七歲夏夜聞鴉有省即舉所見先師曰此是羅漢境界非作家衲子師曰某只喜羅漢而嫌作家耳先師曰你是真作家也先師欲偈記之曰十年前識情心嗔恚豪機在即今鴉笑出塵羅漢果昭陽日影玉顏吟師作此偈乃是年五月二十日夜也五月先師書一券力腰疾興赴京囑宗橘夫人付一

十一

十一

帖子曰吾暮景已迫西崦行脚在近此帖子是靈山如意及老僧近代家券也前年已付純子彼擲地拂袖去彼之豪邁非可疆也橘爾待彼豪無稍屈付託時熟以付之是老僧顧命也欽哉橘字花林實吾門尼揔持也蚤外如意堂晚入華叟室與師法友于而義骨肉也帖子付託日橘啓華叟師曰吾老且獨叟

指師曰可子以子豈有過純哉橘曰奈非骨肉何叟便問橘爾如何是養子緣橘曰他家自有通霄路叟曰心徑蒼生時如何曰彩鳳舞丹霄純爾如何是養子緣師曰欽樹抽枝枯木生花曰意旨如何曰滴水滴凍曰和泥合水時如何曰斬成兩段曰一刀兩段時如何曰滴水滴凍曰枯木再生花橘却曰各言志

十一

十一

矣願聞師志如何是養子緣叟曰何似生曰心徑蒼生時如何叟曰瞎橘揖曰有此父有此子其母豈不往立孤之託乎哉

北八年辛丑

師年二十八歲先師腰疾不起塊坐一榻二利共設承器左右輪次除穢衆皆用簞子刷師獨下手指以祛雪之曰師

翁之穢何之厭之有哉衆有慚色

元九年壬寅

師年二十九歲十月九日如意菴設三十三回忌齋華叟師力疾赴會師與俱預席焉舉衆道具齊整師獨布衣草屨龍鍾也華叟師顧師曰汝何無威儀師曰余獨潤色一衆蓋貶賈縉之牛裾也點心罷華叟師燕息如意之西軒光日

一休上

十三

照來謁問曰和尚百年之後付法誰人曰雖道風狂有箇純子

三十年癸卯

師年三十歲一日會湛堂

面有刀瘡故人名臉截

湛于土岐館館有父名象而其子曰俊

者滑稽傾座堂指俊問曰象爲甚麼生

猿師荅曰懷州牛喫水益州馬腹脹堂

曰懷州與益州相去多少師曰天地同

根萬物一體堂無語師拈堂背曰到江

吳地盡隔岸越山多華叟師傳聞曰純

藏主荅太過於問對牛之琴不可彈也

後數日又曰純藏主吾家裡人不可無

此荅焉

元一年甲辰

師年三十一歲岐嶽周和尚符橫嶽祖師之逮讖而領拄杖以歸爲人落魄不

一休上

十四

羈住龍山日招官寺少年而看雲亭上

置酒放浪一日問師曰汝識老僧境界

否荅曰茂陵多病後猶愛卓文君嶽領

焉乃請師題無頭榜國師識曰吾藏後

乃吾後身也留杖必付之

元二年己巳

元三年丙午

元四年丁未

師年三十四歲後小松帝付神器於稱
 光帝以降聖念特在師鍾愛愈篤故時
 時召對前席臺々問道譚禪大稱宸衷
 稱光帝將入蒼梧大寶當仁肩宸不讓
 朕其任誰辱願猶豫師密入奏曰咨天
 曆數正在彥仁王之躬時不可失勿待
 左右祖帝曰朕儲定矣師言良哉王璽
 歸彥仁王之手則師之功績不為不鉅

一休上

十五

多也又一日對御之次帝曰空谷性海
 兩禪衲本色為誰請師擇焉師曰吾恐
 空谷不在性海下海文字習未脫谷名
 利念兩云曰是追崇空谷為帝師謚賜
 佛曰常光

相國佛日常光國師諱明應字空谷
 嘉曆三年戊辰六月廿四日生嗣天
 龍無極玄玄嗣夢窓國師○東福性
 海和尚諱震見自号不遷子正和四
 一年卯生康永初元之秋入宋嗣元
 關應永三年丙子三月二十一日示

化八十
二歲

後花園皇帝正長元年戊申

師年三十五歲六月二十七日華叟師
 寂焉聞計倉皇拉成子赴堅田以致祭
 一七日諸徒各散師亦還京

永亨元年己酉

二年庚戌

三年辛亥

一休上

十六

四年壬子

師年三十九歲冬携沈子遊泉時有女
 子名彭自殺其夫請師秉炬其語曰手
 裡吹毛能殺能活小姑彭郎一刀兩割
 擲火炬於背後赴茶毘會者火星點衣
 師一日入檀家欄有老牛戲書一偈掛
 其角端云異類中行是我曾能依境也
 境依能出生忘却來時路不識前身誰

氏僧其夜牛斃矣翌日牛主戲師頌殺
吾牛師一咲

五年癸丑

師年四十歲後小松帝不豫登遐前數
日降宣召師師密入仙院對御候問尺
尺龍牀畧演心要喜見龍顏因命侍臣
發金匣把先朝寶墨及聖草飛白等數
帖來親賜師曰朕雖在天以此併法寶

一休上

十七

屈矣國祚隕翼師本職而不在朕言也
師拜誓首而去遂以十月二十日崩師
生平一針不蓄況餘長哉惟此墨硯寶
貯小葛籠到處相隨身不暫離

六年甲寅

七年乙卯

師年四十二歲曾在泉南每出遊街市
持一木劍彈鉢叩人爭問師劍以殺爲

功師持此劍是甚麼用荅曰汝等未知
今諸方廣知識似此木劍只在室則殆
似真劍技出室則只木片耳殺猶不能
況活人乎人皆咲之瑞子繪師像曲搯
牀角靠長劍以代爲藤讀有吹毛三尺
撥動煙塵之句

八年丙辰

師歲四十三歲是年丁開山國師百年

一休上

十八

遠忌師往拜塔下一女子戴衣囊而隨
後仍述偈以當齋供有祖師遷化已百
載空并婆年婆子裙等句

妻覓青銅無半文酬恩一句豈驚羣
祖師遷化已百載空并婆年婆子裙
○又兒孫多踰上頭關一个狂雲江
海間大會齋還在何處白雲蒸飯五
山臺

九年丁巳

師年四十四歲師暫寓源宰相館門土
殿御

一日心地不快，竊意謂今佛法混亂，無具大眼目者，龍蛇不辨，邪正駁雜，纔持一紙券，則皆曰吾嗣某法，浩浩如麻，質徒之覆轍，其可不戒哉！即命相公開故篋，把遮代券來段々花壁，一炬燼之。其券契曰：純藏主悟徹，後與一紙法語，道是甚麼，繫驢板拂袖去，可謂瞎驢邊滅類也。臨濟正法若墮地，汝出世來扶起。

一休上

十九

此汝是我一子也，念之恩之，應永二十年五月日華叟下有華字，先是帖子付託之座沆成，二子在焉，二子共仰黎也。帖子大法所係，僧恐犯其器源相，外縫掖而內仰黎久嚮師風，故攝夫人囑託之源相。

十年戊午

師年四十五歲銅駝坊北冷泉萬有故里小路

人小廬破垣敗簣，人不堪其憂，師樂此而設一圓蒲，席坐非咨詢之輩，謝絕不接。

十一年己未

師年四十六歲，是年明遠智公寂龍山，宿德知師佩華叟和尚正印，每々稱師於稠衆之席，剛介不阿之老人也。

十二年庚申

一休上

二十

師年四十七歲，六月二十日徒門老請師入住，如意菴二十七日欲設先師華叟和尚一十三回之忌齋，泉人雜還畢，集于大用菴，且懷香錢賀師，住菴紛冗，非素粗叙寒暄而已。二十九日一偈題校割末以貼菴壁，一偈呈養叟老人，以致退席之意，包笠徑歸，乃七月朔也。

題校割末詩將常住物置菴中木杓梵籬掛壁東我無如此閑家具江海

多年纂
笠風

嘉吉元年辛酉

師年四十八歲安衆坊之南路塩小村檀
後園草屋數楹脩竹環軒朴野可禪師
請而燕息者一月餘育子侍閑屐次避
席啓師曰五家宗旨已見貫花七宗之
綱領聞下語師遂一下語育子佩服

二年壬戌

一休上

師年四十九歲師初入讓羽山借民家
住有山屋偈後創尸陀寺從焉徒侶慕
而到者皆爲法忘軀之流故拾枯擲礪
岩路盤屈汲々而勿倦讓羽爲名朝貢
出石灰地讓羽出灰和訓相近瑞子舊
朝臣也故魯熟此地是以先容

三年癸亥

師年五十歲大炊御門室町畔有屋主

常不在乃陶山公家妻宅也閑寂且師陶公館師
於此日夕保護來者屢滿云何辭去

東海一休和尚一代記上終

一休上

二十二

日本漢文史
籍叢刊

第二輯

維
史

[General Information]

□ □ =14664069

SS□ =14664069